

## **Oracle® Fusion Middleware Application Adapters**

Application Adapter for PeopleSoft ユーザーズ・ガイド  
for 12c (12.2.1.2.0)

**E85897-01**

2016 年 12 月

PeopleSoft システムとの統合方法およびアプリケーションの  
開発方法について説明します。

Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server 12c (12.2.1.2.0) Application Adapter 12c (12.2.1.2.0) for PeopleSoft ユーザーズ・ガイド

E85897-01

Copyright © 2001, 2016, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

原本著者 : Stefan Kostial

協力者 : Vikas Anand, Marian Jones, Sunil Gopal, Bo Stern

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクルまでご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアまたはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアまたはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション (人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む) への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、Oracle Corporation およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle および Java はオラクルおよびその関連会社の登録商標です。その他の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。

Intel、Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。AMD、Opteron、AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は、The Open Group の登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても、一切の責任を負いかねます。

---

---

# 目次

はじめに .....	xi
対象読者 .....	xi
ドキュメントのアクセシビリティについて .....	xi
関連ドキュメント .....	xi
表記規則 .....	xii
<b>1 概要</b>	
アダプタの機能 .....	1-1
<b>PeopleSoft の概念</b> .....	1-2
PeopleSoft コンポーネント・インタフェース .....	1-3
PeopleSoft アプリケーション・メッセージング / インテグレーション・ブローカー .....	1-3
<b>PeopleSoft との統合</b> .....	1-3
アダプタのアーキテクチャ .....	1-4
Oracle WebLogic Server Adapter Business Services Engine (BSE) アーキテクチャ .....	1-4
Oracle WebLogic Server Adapter J2CA アーキテクチャ .....	1-5
<b>BSE と Oracle Adapter J2CA デプロイメントの差異</b> .....	1-6
サンプル・プロジェクト .....	1-7
<b>クイック・スタート・ガイド</b> .....	1-8
インストール .....	1-8
サード・パーティ・ライブラリ・ファイルのコピー .....	1-8
構成 .....	1-9
WebLogic Server のデプロイメントおよび統合 .....	1-10
アプリケーション・エクスプローラでの構成、ターゲット、チャンネルの作成 .....	1-10
SOA Suite のサービス・コンポーネントの使用 .....	1-10
Oracle Service Bus の使用 .....	1-11
その他の機能 .....	1-11
<b>2 Oracle Application Adapter for PeopleSoft 構成</b>	
アプリケーション・エクスプローラの起動 .....	2-1
リポジトリ設定の構成 .....	2-2
リポジトリ構成の作成 .....	2-2
BSE 用の構成の作成 .....	2-2
J2CA 用の構成の作成 .....	2-3
BSE または J2CA 構成への接続 .....	2-4

<b>PeopleSoft 用の接続 (ターゲット) の確立</b> .....	2-5
PeopleSoft へのターゲットの定義.....	2-5
定義済の PeopleSoft ターゲットへの接続.....	2-7
ターゲットの管理.....	2-7
PeopleSoft への接続の切断.....	2-8
接続パラメータの変更.....	2-8
PeopleSoft への接続の削除.....	2-9
<b>アプリケーション・システム・オブジェクトの表示</b> .....	2-9
<b>XML スキーマの作成</b> .....	2-10
BSE に対する XML リクエストおよびレスポンス・スキーマの作成.....	2-10
Oracle Adapter J2CA に対する XML リクエストおよびレスポンス・スキーマの作成.....	2-10
<b>WSDL の生成 (J2CA 構成のみ)</b> .....	2-10
<b>Web サービスの作成およびテスト (BSE 構成のみ)</b> .....	2-12
Web サービスの作成.....	2-13
Web サービスのテスト.....	2-14
伝播の識別.....	2-14
<b>イベント・アダプタの構成</b> .....	2-14
チャンネルの作成および編集.....	2-15
HTTP チャンネルの作成.....	2-16
TCP チャンネルの作成.....	2-18
ファイル・チャンネルの作成.....	2-20
チャンネルの編集.....	2-22
チャンネルの削除.....	2-23
スキーマの検証.....	2-23

### 3 Oracle WebLogic Server のデプロイメントおよび統合

<b>Oracle WebLogic Server とのアダプタの統合</b> .....	3-1
<b>アダプタのデプロイメント</b> .....	3-1
<b>アダプタ構成の更新</b> .....	3-2
管理対象コネクタ・ファクトリ・オブジェクトの作成.....	3-2
複数の管理対象コネクタ・ファクトリ・オブジェクトの作成.....	3-4
追加の接続ファクトリ値用の WSDL ファイルの変更.....	3-6

### 4 Oracle SOA Suite での BPEL サービス・コンポーネントの統合

<b>概要</b> .....	4-1
<b>アダプタのデプロイメント</b> .....	4-2
<b>新規のアプリケーション・サーバー接続の構成</b> .....	4-2
<b>サービス統合のためのアウトバウンド BPEL プロセスの設計 (J2CA 構成)</b> .....	4-7
リクエスト / レスポンス型のサービス用の WSDL の生成.....	4-8
SOA 用の空のコンポジットの作成.....	4-9
BPEL アウトバウンド・プロセスの定義.....	4-11
サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成.....	4-11
アウトバウンド BPEL プロセス・コンポーネントの構成.....	4-16
12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応.....	4-26
BPEL アウトバウンド・プロセスのデプロイ.....	4-28

Oracle Enterprise Manager Console での入力 XML ドキュメントの起動.....	4-32
アウトバウンド BPEL およびアウトバウンド・メディエータ・プロセスのテスト.....	4-34
<b>イベント統合のためのインバウンド BPEL プロセスの設計 (J2CA 構成)</b> .....	4-34
イベント統合のための WSDL の生成.....	4-35
チャンネルの作成.....	4-35
イベント通知のための WSDL の生成.....	4-37
SOA 用の空のコンポジットの作成.....	4-39
BPEL インバウンド・プロセスの定義.....	4-39
サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの作成.....	4-39
インバウンド BPEL プロセス・コンポーネントの作成.....	4-43
12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応.....	4-46
BPEL インバウンド・プロセスのデプロイ.....	4-46
PeopleSoft でのイベントのトリガー.....	4-47
PeopleSoft でのイベントのトリガー.....	4-47
結果の確認.....	4-53
<b>サービス統合のためのアウトバウンド BPEL プロセスの設計 (BSE 構成)</b> .....	4-54
Web サービスを使用したリクエストおよびレスポンス・サービス用の WSDL ファイルの生成.....	4-55
SOA 用の空のコンポジットの作成.....	4-55
BPEL アウトバウンド・プロセスの定義.....	4-56
パートナ・リンクの作成.....	4-59
作成されたパートナ・リンクを使用した BPEL アクティビティおよびマッピングの作成.....	4-62

## 5 Oracle SOA Suite でのメディエータ・サービス・コンポーネントとの統合

新規のアプリケーション・サーバー接続の構成.....	5-2
<b>メディエータ・アウトバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成)</b> .....	5-2
SOA 用の空のコンポジットの作成.....	5-2
メディエータ・アウトバウンド・プロセスの定義.....	5-3
サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成.....	5-3
アウトバウンド・メディエータ・プロセス・コンポーネントの構成.....	5-4
ルーティング・ルールの構成.....	5-8
12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応.....	5-11
メディエータ・アウトバウンド・プロセスのデプロイ.....	5-11
Oracle Enterprise Manager Console での入力 XML ドキュメントの起動.....	5-11
<b>メディエータ・インバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成)</b> .....	5-11
SOA 用の空のコンポジットの作成.....	5-12
メディエータ・インバウンド・プロセスの定義.....	5-12
サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成.....	5-12
ファイル・アダプタを使用したインバウンド・メディエータ・プロセス・コンポーネントの構成.....	5-13
ルーティング・ルールの構成.....	5-17
12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応.....	5-18
<b>メディエータ・アウトバウンド・プロセスの構成 (BSE 構成)</b> .....	5-18
SOA 用の空のコンポジットの作成.....	5-19

メディアエータ・アウトバウンド・プロセスの定義.....	5-19
SOAP サービスの構成.....	5-19
メディアエータ・コンポーネントの作成 .....	5-19
ルーティング・ルール of 構成 .....	5-22

## 6 Oracle SOA Suite での BPM サービス・コンポーネントの統合

概要.....	6-1
アダプタのデプロイメント.....	6-2
新規のアプリケーション・サーバー接続の構成.....	6-2
変換を使用したサービス統合のためのアウトバウンド BPM プロセスの設計 (J2CA 構成).....	6-2
BPM 用の空のコンポジットの作成.....	6-2
BPM アウトバウンド・プロセスの定義.....	6-3
サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成 .....	6-3
アウトバウンド BPM プロセス・コンポーネントの構成.....	6-4
書き込み操作のファイル・アダプタの作成 .....	6-17
12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応.....	6-27
BPM アウトバウンド・プロセスのデプロイ .....	6-27
Oracle Enterprise Manager Console での入力 XML ドキュメントの起動.....	6-28
変換を使用したイベント統合のためのインバウンド BPM プロセスの設計 (J2CA 構成).....	6-29
BPM 用の空のコンポジットの作成.....	6-29
BPM インバウンド・プロセスの定義.....	6-30
サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成 .....	6-30
インバウンド BPM プロセス・コンポーネントの構成.....	6-31
書き込み操作のファイル・アダプタの作成 .....	6-38
12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応.....	6-45
変換を使用したサービス統合のためのアウトバウンド BPM プロセスの設計 (BSE 構成).....	6-45
BPM 用の空のコンポジットの作成.....	6-46
BPM アウトバウンド・プロセスの定義.....	6-46
Web サービス・コンポーネントの構成 .....	6-46
BPM プロセス・コンポーネントの構成.....	6-48
書き込み操作のファイル・アダプタの作成 .....	6-57

## 7 sbconsole を使用した Oracle Service Bus 用のアウトバウンドおよびインバウンド・プロセスの構成

Application Adapter と Oracle Service Bus の統合の概要.....	7-1
sbconsole を使用したアウトバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成).....	7-2
Oracle Service Bus の起動およびプロジェクト・フォルダの作成.....	7-2
Oracle Service Bus 統合のためのアプリケーション・エクスプローラのクラス・パスの設定.....	7-6
アプリケーション・エクスプローラから Oracle Service Bus への WSDL の公開 .....	7-6
WSDL ベースのビジネス・サービスの構成.....	7-7
ファイル・タイプ・ビジネス・サービスの構成.....	7-10
パイプラインとプロキシ・サービスの構成.....	7-14
sbconsole を使用したインバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成).....	7-23
Oracle Service Bus の起動およびプロジェクト・フォルダの作成.....	7-23

Oracle Service Bus 統合のためのアプリケーション・エクスプローラのクラス・パスの設定.....	7-24
アプリケーション・エクスプローラから Oracle Service Bus への WSDL の公開 .....	7-24
WSDL ベースのプロキシ・サービスの構成.....	7-25
ファイル・タイプ・ビジネス・サービスの構成.....	7-27
パイプラインの構成.....	7-30
<b>sbconsole を使用したアウトバウンド・プロセスの構成 (BSE 構成).....</b>	<b>7-38</b>
Oracle Service Bus の起動およびプロジェクト・フォルダの作成.....	7-38
Oracle Service Bus 統合のためのアプリケーション・エクスプローラのクラス・パスの設定.....	7-38
アプリケーション・エクスプローラから Oracle Service Bus への WSDL の公開 .....	7-38
ファイル・タイプ・ビジネス・サービスの構成.....	7-40
WSDL ベースのビジネス・サービスの構成.....	7-40
パイプラインとプロキシ・サービスの構成.....	7-42
<b>Oracle Service Bus を使用した JMS プロキシ・サービスの構成 (J2CA 構成).....</b>	<b>7-50</b>
<b>Oracle Service Bus を使用した HTTP プロキシ・サービスの構成 (J2CA 構成).....</b>	<b>7-65</b>

## 8 JDeveloper を使用した Oracle Service Bus 用のアウトバウンドおよびインバウンド・プロセスの構成

<b>JDeveloper を使用した OSB アウトバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成).....</b>	<b>8-1</b>
OSB 用のサービス・バス・アプリケーションの作成.....	8-2
OSB アウトバウンド・プロセスの定義.....	8-3
サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成 .....	8-3
ファイル・トランスポート・タイプ・ビジネス・サービスの構成 .....	8-6
プロキシ・サービスとパイプラインの作成 .....	8-8
ルーティング・ルールの構成 .....	8-11
OSB アウトバウンド・プロセスのデプロイ .....	8-16
<b>JDeveloper を使用した OSB インバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成).....</b>	<b>8-18</b>
OSB 用のサービス・バス・アプリケーションの作成.....	8-18
OSB インバウンド・プロセスの定義.....	8-18
サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成 .....	8-19
パイプラインの作成 .....	8-21
ファイル・トランスポート・タイプ・ビジネス・サービスの構成 .....	8-23
ルーティング・ルールの構成 .....	8-25
OSB インバウンド・プロセスのデプロイ .....	8-26
<b>JDeveloper を使用した OSB アウトバウンド・プロセスの構成 (BSE 構成).....</b>	<b>8-27</b>
OSB 用のサービス・バス・アプリケーションの作成.....	8-27
OSB アウトバウンド・プロセスの定義.....	8-27
WSDL ベースのビジネス・サービスの構成.....	8-27
プロキシ・サービスとパイプラインの作成 .....	8-32
ファイル・トランスポート・タイプ・ビジネス・サービスの構成 .....	8-35
ルーティング・ルールの構成 .....	8-38
OSB アウトバウンド・プロセスのデプロイ .....	8-41
<b>JDeveloper を使用した JMS インバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成).....</b>	<b>8-41</b>

JDeveloper を使用した JMS アウトバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成) .....	8-47
JDeveloper を使用した HTTP アウトバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成) .....	8-55

## 9 主要な機能

ロギング機能の構成 .....	9-1
J2CA コネクタ・アプリケーションのログ・ファイル管理の構成 .....	9-1
Business Services Engine (BSE) のログ・ファイル管理の構成 .....	9-8
診断機能の構成 .....	9-11
サポートされるプロトコル .....	9-12
Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapter for PeopleSoft のエンドポイント・ステータス .....	9-12
SOA デバッグ機能の構成 .....	9-12
SOA デバッガの使用のガイドライン .....	9-13
前提条件 .....	9-13
Oracle JDeveloper での BPEL プロセスのデバッグ .....	9-13
Oracle JDeveloper でのアウトバウンド BPEL プロセスのデバッグ .....	9-13
Oracle JDeveloper でのインバウンド BPEL プロセスのデバッグ .....	9-22
Oracle JDeveloper での OSB プロセスのデバッグ .....	9-26
前提条件 .....	9-26
Oracle JDeveloper でのアウトバウンド OSB プロセスのデバッグ .....	9-29
Oracle JDeveloper でのインバウンド OSB プロセスのデバッグ .....	9-36
例外フィルタ .....	9-44
例外フィルタの構成 .....	9-44
WSDL ファイルの生成 .....	9-44
例外フィルタ機能を備えた BPEL プロセスの作成 .....	9-44
フォルト・ポリシー・ファイルおよびフォルト・バインディング・ファイルの作成 .....	9-46
12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応 .....	9-56
例外フィルタ機能を備えた BPEL プロセスのデプロイおよびテスト .....	9-56
Oracle SOA Suite (BPEL、メディエータまたは BPM) の資格証明マッピング .....	9-56
資格証明マッピングの構成 .....	9-57
Oracle WebLogic Server 資格証明の EIS 資格証明との関連付け .....	9-57
WSDL ファイルの生成 .....	9-60
アウトバウンド・プロセスの作成およびデプロイ .....	9-60
EIS 資格証明の検証 .....	9-61
Oracle Service Bus (OSB) の資格証明マッピング .....	9-61
資格証明マッピングの構成 .....	9-62
Oracle WebLogic Server 資格証明の EIS 資格証明との関連付け .....	9-62
WSDL ファイルの生成 .....	9-65
Oracle Service Bus (OSB) アウトバウンド・プロセスの作成 .....	9-65

## 10 トラブルシューティングおよびエラー・メッセージ

トラブルシューティング .....	10-1
アプリケーション・エクスペローラ .....	10-1
PeopleSoft .....	10-3
Oracle Adapter J2CA .....	10-4



BSE エラー・メッセージ .....	10-5
BSE での一般的なエラー処理.....	10-5
アダプタ特定のエラー処理.....	10-5
Oracle Application Adapter for PeopleSoft 無効な SOAP リクエスト .....	10-6
PeopleSoft リクエストからの空の結果.....	10-6
PeopleSoft への接続の失敗.....	10-7
無効な SOAP リクエスト.....	10-7
Oracle WebLogic Server Application Adapter リクエストからの空の結果.....	10-7
<b>A コンポーネント・インタフェース API の生成</b>	
PeopleSoft API Java プログラムの構築.....	A-1
PeopleSoft API Java プログラムのコンパイル.....	A-5
<b>B PeopleSoft メッセージ・ルーターの構成</b>	
PeopleSoft 8.4 用 TCP/IP または HTTP ターゲット・コネクタの構成.....	B-1
TCP/IP ターゲット・コネクタの構成.....	B-2
TCP/IP 8.4 コネクタ用のノードの構成.....	B-3
HTTP ターゲット・コネクタの構成.....	B-6
HTTP コネクタの構成.....	B-8
PeopleSoft 8.1 用 TCP/IP ハンドラの構成.....	B-12
PeopleSoft 8.1 用 HTTP ハンドラの構成.....	B-15
PeopleSoft 構成のテスト.....	B-15
<b>C コンポーネント・インタフェースの使用</b>	
プロパティの操作.....	C-1
新規コンポーネント・インタフェースの作成.....	C-2
標準メソッド .....	C-4
使用可能なメソッドの表示または変更.....	C-4
コンポーネント・インタフェースのセキュリティ保護.....	C-5
PeopleSoft バージョン 8.1x 用コンポーネント・インタフェースのセキュリティの構成.....	C-5
PeopleSoft バージョン 8.4 以降用コンポーネント・インタフェースのセキュリティの構成.....	C-8
コンポーネント・インタフェースのテスト.....	C-14
<b>D PeopleSoft インテグレーション・ブローカーの使用</b>	
PeopleSoft インテグレーション・ブローカー.....	D-1
PeopleSoft 8.4 でのインテグレーション・ブローカーの構成.....	D-3
メッセージがアクティブであり、適切にルーティングされていることの確認.....	D-3
IntegrationGateway.properties ファイルの構成.....	D-5
インテグレーション・ゲートウェイおよびファイル出力コネクタの構成 .....	D-6
新規のゲートウェイ・ノードの作成および構成 .....	D-8
PeopleSoft リリース 8.1 でのアプリケーション・メッセージングの構成.....	D-12
新規のメッセージ・ノードの作成および構成.....	D-13
メッセージがアクティブであり、適切にルーティングされていることの確認.....	D-16

メッセージ・チャンネルの構成.....	D-18
ゲートウェイでの Simple File ハンドラの構成.....	D-21
メッセージ用の PeopleCode の表示.....	D-23
インテグレーション・ブローカーのテスト.....	D-24
アウトバウンド同期メッセージの使用.....	D-26
アウトバウンド同期メッセージの構成.....	D-27
1つのアウトバウンド同期メッセージの構成.....	D-27
同期メッセージ用の PeopleCode の表示.....	D-28
PeopleCode for a Financials 同期アウトバウンド・メッセージの表示.....	D-28
<b>PeopleTools バージョン 8.48 以降を使用したイベント生成.....</b>	<b>D-29</b>
PeopleSoft サービスの構成.....	D-29
リモート・ノードの追加.....	D-30
サービスの選択.....	D-31
ゲートウェイのアクティブ化.....	D-34
ドメインのアクティブ化.....	D-35
サービスのアクティブ化.....	D-36
サービス操作(キューおよびメッセージ・ノード)のアクティブ化.....	D-37
PeopleSoft でのイベントのトリガー.....	D-39
イベントのトリガー.....	D-39
イベント結果の確認.....	D-40
結果の確認.....	D-41

## 用語集

## 索引

---

---

# はじめに

『Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapter for PeopleSoft ユーザーズ・ガイド』をご覧いただきありがとうございます。このドキュメントでは、PeopleSoft システムとの統合方法およびアプリケーションの開発方法について説明します。

## 対象読者

このドキュメントは、PeopleSoft システムとの統合およびアプリケーションの開発を行うシステム管理者や開発者を対象にしています。

## ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクルのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>) を参照してください。

### Oracle Support へのアクセス

サポートをご契約のお客様には、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info>) か、聴覚に障害のあるお客様は (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs>) を参照してください。

## 関連ドキュメント

詳細は、Oracle Enterprise Repository 12c (12.2.1.2.0) ドキュメント・セット内の次のドキュメントを参照してください。

- *Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapters インストール・ガイド*
- *Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapter アップグレード・ガイド*
- *Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapter ベスト・プラクティス・ガイド*
- Oracle Unified Method (OUM)

Oracle Unified Method (OUM) では、その他の管理情報を豊富に提供しています。OUM は、オラクル社の従業員、パートナー・ネットワーク認定パートナーや認定アドバンテージ・パートナーとともに、OUM 顧客プログラム、またはオラクル社によるコンサルティング・サービス提供プロジェクトにご参加いただいているお客様にもご利用いただけます。OUM はソフトウェア開発および実装プロジェクトの計画、実施、管理用の Web デプロイ型ツールキットです。

OUM の詳細は、次の URL の OUM FAQ を参照してください。

[http://my.oracle.com/portal/page/myo/ROOTCORNER/KNOWLEDGEAREAS1/BUSINESS\\_PRACTICE/Methods/Learn\\_about\\_OUM.html](http://my.oracle.com/portal/page/myo/ROOTCORNER/KNOWLEDGEAREAS1/BUSINESS_PRACTICE/Methods/Learn_about_OUM.html)

## 表記規則

このドキュメントでは次の表記規則を使用します。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連する Graphical User Interface 要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
斜体	イタリックは、ユーザーが特定の値を指定するプレースホルダー変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、サンプル内のコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。

Oracle WebLogic Server は、Oracle Application Adapter for PeopleSoft を介して PeopleSoft システムに接続します。これにより、接続性が提供され、PeopleSoft システム上で相互作用を実行できます。この章の内容は次のとおりです。

---

**注意：** このドキュメントでは、`<ORACLE_HOME>` は、12c (12.2.1.0.0) SOA/OSB のインストール先であるホーム・ディレクトリを指します。

`<ADAPTER_HOME>` は、次を指します。

- SOA の場合：

`<ORACLE_HOME>\soa\soa\thirdparty\ApplicationAdapters`

- OSB の場合：

`<ORACLE_HOME>\osb\3rdparty\ApplicationAdapters`

---

- [1.1 項「アダプタの機能」](#)
- [1.2 項「PeopleSoft の概念」](#)
- [1.3 項「PeopleSoft との統合」](#)
- [1.4 項「アダプタのアーキテクチャ」](#)
- [1.5 項「BSE と Oracle Adapter J2CA デプロイメントの差異」](#)
- [1.6 項「サンプル・プロジェクト」](#)
- [1.7 項「クイック・スタート・ガイド」](#)

## 1.1 アダプタの機能

Oracle Application Adapter for PeopleSoft は、PeopleSoft システムと他のアプリケーション、データベースおよび外部ビジネス・パートナーのシステムとの間でリアルタイムのビジネス・データを交換するための手段を提供します。このアダプタは、PeopleSoft とのインバウンドおよびアウトバウンド処理を可能にします。Oracle Application Adapter for PeopleSoft は、J2EE Connector Architecture (J2CA) バージョン 1.0 リソース・アダプタとしてデプロイできます。このデプロイメントは Oracle Adapter J2CA と呼ばれます。また、Web サブレットとしてもデプロイでき、その場合は Oracle Adapter Business Services Engine (BSE) と呼ばれます。

Oracle Application Adapter for PeopleSoft は、XML メッセージにより、サービスおよびイベントを使用して非 PeopleSoft アプリケーションが PeopleSoft と通信し、トラ

ンザクションを交換できるようにします。次に、サービスおよびイベントの役割について説明します。

- サービス : アプリケーションが PeopleSoft ビジネス・イベントを開始できるようにします。
- イベント : PeopleSoft ビジネス・イベントが発生したときにのみ、アプリケーションが PeopleSoft のデータにアクセスできるようにします。

イベント機能をサポートするため、チャンネルがサポートされます。**チャンネル**とは、バックエンドまたは他のタイプのシステムの特定インスタンスへの構成済の接続のことです。

チャンネルは、エンタープライズ情報システム (EIS) アプリケーションからリアルタイムでイベントを受信するアダプタ・コンポーネントです。チャンネル・コンポーネントは、ファイル・リーダー、HTTP リスナー、TCP/IP リスナー、または FTP リスナーのいずれかになります。チャンネルは、常に EIS に固有です。アダプタでは、特定の EIS に対して複数のチャンネルがサポートされるため、ユーザーは、デプロイメント要件に基づいて最適なチャンネル・コンポーネントを選択できます。

Oracle Application Adapter for PeopleSoft には、次の機能が装備されています。

- PeopleSoft コンポーネントとインタフェース、および PeopleSoft アプリケーション・メッセージング / インテグレーション・ブローカー用の同期および非同期双方向メッセージ
- PeopleSoft メタデータの検索および XML スキーマまたは Web サービスの構築用の GUI ツールである Oracle WebLogic Server Adapter アプリケーション・エクスプローラ (アプリケーション・エクスプローラ)
- J2CA 1.0 と J2CA 1.5 リソース・アダプタ用 XML スキーマおよび WSDL ファイル
- BSE 用 Web サービス

アダプタは、サポートされているビジネス・オブジェクトに対応するコンポーネント・インタフェース用の API にアクセスすることによって PeopleSoft アプリケーション・サーバーに接続します。各コンポーネント・インタフェースには、ビジネス・コンポーネント用のデータおよびビジネス・ロジックが含まれるため、ビジネス・コンポーネント内で定義されているプロセスをアダプタ側で重複するという要件が軽減されます。

**関連項目：** *Oracle Application Server Adapter コンセプト・ガイド*

## 1.2 PeopleSoft の概念

PeopleSoft は、コンポーネントのインタフェース・フレームワークおよびインテグレーション・ブローカー (リリース 8.4) またはアプリケーション・メッセージング (リリース 8.1) ファシリティを介して他のアプリケーションおよびシステムと統合できます。Oracle Application Adapter for PeopleSoft は、PeopleSoft フレームワークを使用し、様々なインテグレーション・アクセス方法を活用して、最大限の柔軟性と機能を提供します。Oracle Application Adapter for PeopleSoft でサポートされているインテグレーション・アクセス方法の例には次のものがあります。

- コンポーネント・インタフェースを使用する PeopleSoft Java API
- PeopleSoft アプリケーション・メッセージング / インテグレーション・ブローカーを使用する PeopleSoft メッセージ

この項では、次のトピックについて説明します。

- [1.2.1 項「PeopleSoft コンポーネント・インタフェース」](#)

- 1.2.2 項「PeopleSoft アプリケーション・メッセージング/インテグレーション・ブローカー」

## 1.2.1 PeopleSoft コンポーネント・インタフェース

PeopleSoft 環境では、コンポーネント・インタフェースは PeopleSoft ロジカル・システム間での PeopleSoft アプリケーション・データの配分、および非 PeopleSoft システムとの PeopleSoft アプリケーション・データの交換用のコンテナです。

コンポーネント・インタフェースは、PeopleSoft 内の既存のビジネス・プロセスに基づきます。発注エント리는その 1 例で、PeopleSoft による配信プロセスの場合と、ユーザーによる配信プロセスの場合があります。コンポーネント・インタフェースはそのメソッド (Add、Update など) および基になるビジネス・プロセスも継承します。

PeopleSoft は、各アプリケーションに汎用コンポーネント・インタフェースを提供します。これらは、Enterprise Integration Points (EIP) と呼ばれます。また、必要に応じて独自のカスタム・コンポーネント・インタフェースを開発したり、EIP を変更したりできます。Oracle Application Adapter for PeopleSoft では、両方のタイプのコンポーネント・インタフェースがサポートされています。

## 1.2.2 PeopleSoft アプリケーション・メッセージング/インテグレーション・ブローカー

PeopleSoft アプリケーション・メッセージング/インテグレーション・ブローカーは、PeopleSoft による PeopleSoft XML の統合を容易にします。Oracle Application Adapter for PeopleSoft にはハンドラが装備されていますが、これは TCP/IP トランスポート・サービスを使用する PeopleSoft アプリケーション・ゲートウェイ内で構成される必要があります。

## 1.3 PeopleSoft との統合

Oracle Application Adapter for PeopleSoft を使用して次の操作が可能になります。

- コンポーネント・インタフェース使用による PeopleSoft コンポーネントへのアクセス。コンポーネント・メソッドはサービスとも呼ばれます。
- PeopleSoft アプリケーションからのメッセージを受信します。メッセージはイベントとも呼ばれます。

他のアプリケーションから PeopleSoft コンポーネントにアクセスするには、次のアイテムを使用します。

- コンポーネント・インタフェース。コンポーネント・インタフェースが存在しない場合は、新規に作成、セキュリティ保護およびテストを行います。既存のコンポーネント・インタフェースを変更した場合は、セキュリティ保護およびテストを行います。詳細は、PeopleSoft ドキュメントを参照してください。または、スキーマや Web サービスの生成後に、コンポーネント・インタフェースのセキュリティ保護とテスト、およびコンポーネント・インタフェースの API を作成することもできます。
- コンポーネント・インタフェースの API。コンポーネント・インタフェース用の API を作成します。
- スキーマおよび Web サービス。コンポーネント・メソッド用のスキーマまたは Web サービスを作成します。

詳細は、第 2 章「Oracle Application Adapter for PeopleSoft 構成」を参照してください。

PeopleSoft からのメッセージを受信するには、次のアイテムを使用します。

- 統合環境。PeopleSoft インテグレーション・ブローカー (リリース 8.4) またはアプリケーション・メッセージング環境 (8.1) を構成し、テストします。環境が適切に構成されていることを確認するには、PeopleSoft ドキュメントを参照してください。
- メッセージ・ルーティング。TCP/IP Target Connector (リリース 8.4)、HTTP Target Connector (リリース 8.4) または TCP/IP Handler (リリース 8.1) を構成します。

### 関連項目：

- *Oracle Application Server Adapter コンセプト・ガイド*
- *Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapters インストレーション・ガイド*

## 1.4 アダプタのアーキテクチャ

Oracle Application Adapter for PeopleSoft は、アプリケーション・エクスプローラを次のいずれか 1 つのコンポーネントとともに使用します。

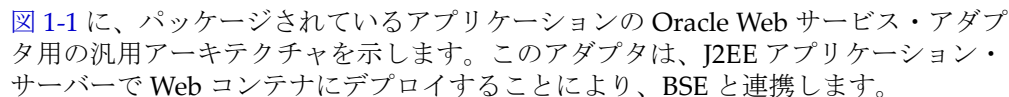
- Oracle WebLogic Server Adapter Business Services Engine (BSE)
- Enterprise Connector for J2EE Connector Architecture (J2CA)

アプリケーション・エクスプローラ (PeopleSoft 接続の構成、および Web サービスとイベントの作成に使用) は、BSE が使用されている Web サービス環境用に構成できます。J2CA 環境の場合は、Common Client Interface (CCI) を使用して、Web サービスのかわりにアダプタを使用する統合サービスを提供します。

この項では、次のトピックについて説明します。

- [1.4.1 項「Oracle WebLogic Server Adapter Business Services Engine \(BSE\) アーキテクチャ」](#)
- [1.4.2 項「Oracle WebLogic Server Adapter J2CA アーキテクチャ」](#)

### 1.4.1 Oracle WebLogic Server Adapter Business Services Engine (BSE) アーキテクチャ

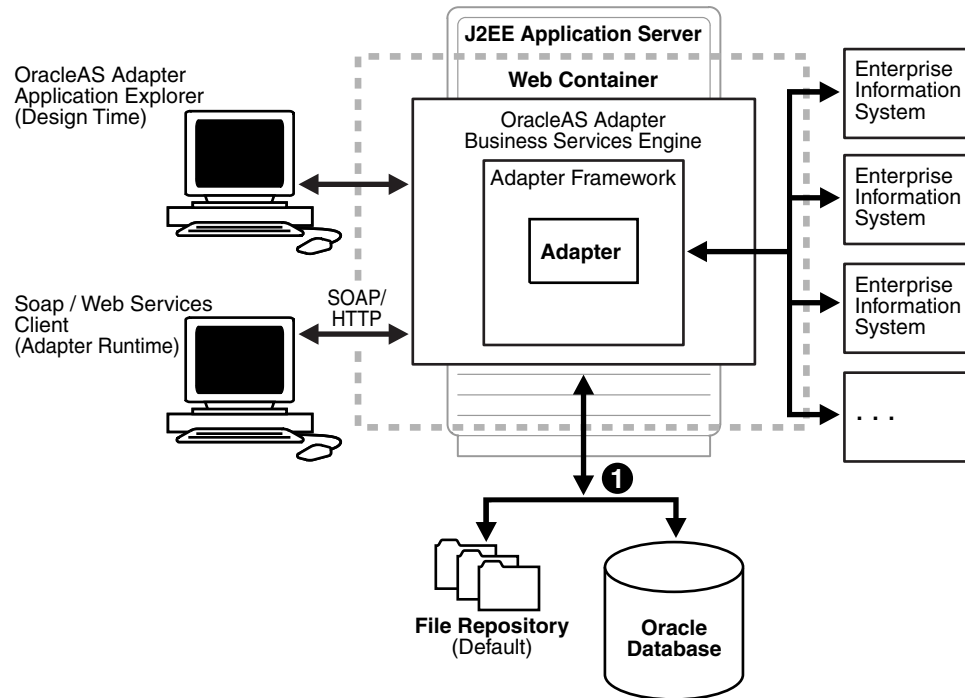
 **図 1-1** に、パッケージされているアプリケーションの Oracle Web サービス・アダプタ用の汎用アーキテクチャを示します。このアダプタは、J2EE アプリケーション・サーバーで Web コンテナにデプロイすることにより、BSE と連携します。

BSE とともにデプロイされるデザインタイム・ツールのアプリケーション・エクスプローラを使用して、アダプタ接続の構成、EIS オブジェクトの参照、サービスの構成および EIS イベントをリスニングするリスナーの構成ができます。これらの操作の実行中に作成されるメタデータは、BSE によってリポジトリ内に格納されます。

BSE は、クライアントからリクエストの受信、EIS との対話、EIS からのレスポンスのクライアントへの返信に SOAP をプロトコルとして使用します。



図 1-1 Oracle WebLogic Server Adapter Business Services Engine (BSE) 汎用アーキテクチャ



① Use either the default file repository or an Oracle database as your repository.

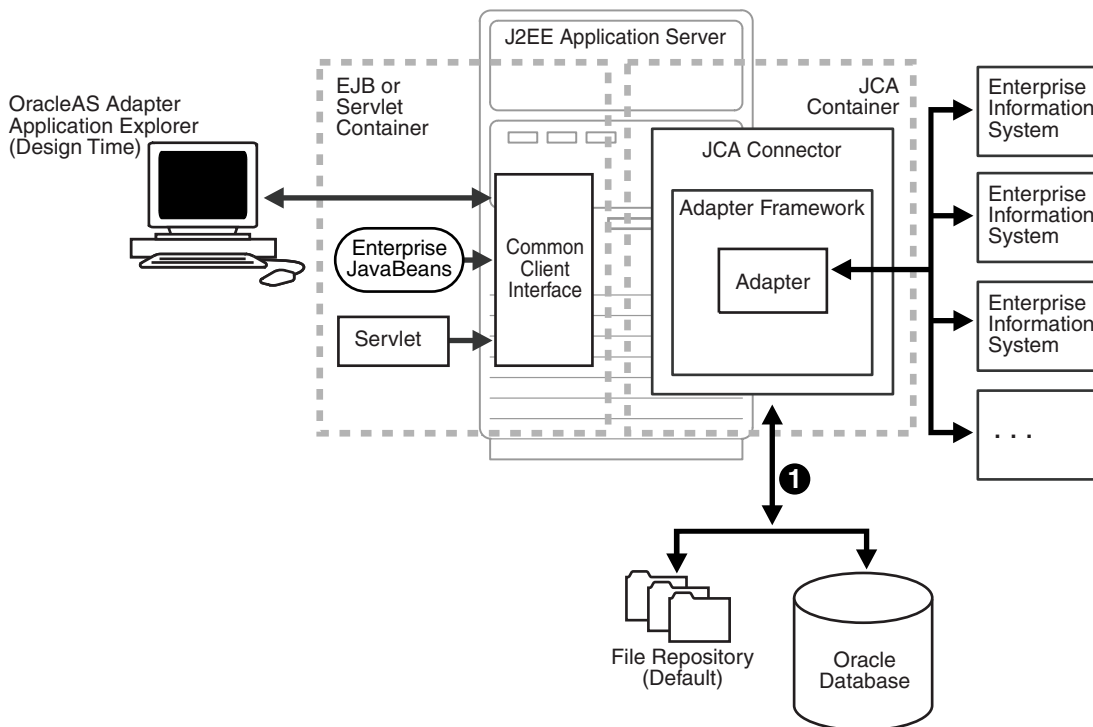
**注意：** BSE 用のファイル・リポジトリは本番環境では使用しないでください。

## 1.4.2 Oracle WebLogic Server Adapter J2CA アーキテクチャ

図 1-2 に、パッケージされているアプリケーションの Oracle Adapter J2CA 用の汎用アーキテクチャを示します。Oracle Adapter J2CA は、標準の J2CA Container にデプロイされ、アダプタのコンテナとして機能します。コネクタはリポジトリで構成されます。リポジトリにはファイル・システムまたは Oracle データベースを使用できます。リポジトリは RAR ファイルとしてデプロイされ、`ra.xml` と呼ばれる関連デプロイメント記述子を持ちます。Oracle WebLogic Server デプロイメント記述子の `ra.xml` を編集することにより複数のファクトリを作成できます。詳細は、第 3 章「Oracle WebLogic Server のデプロイメントおよび統合」を参照してください。

コネクタと連携する設計ツールのアプリケーション・エクスプローラを使用して、アダプタ接続の構成、EIS オブジェクトの参照、サービスの構成、EIS イベントをリスニングするリスナーの構成ができます。これらの操作の実行中に作成されるメタデータは、コネクタによってリポジトリ内に格納されます。

図 1-2 Oracle WebLogic Server Adapter J2CA 汎用アーキテクチャ



① Use either the default file repository or an Oracle database as your repository.

## 1.5 BSE と Oracle Adapter J2CA デプロイメントの差異

Oracle Application Adapter for PeopleSoft を Oracle SOA Suite コンポーネント (BPEL、メディエータ、BPM または OSB) とともに使用する場合は、次の点に注意してください。

- Oracle Adapter J2CA デプロイメントのみ、Oracle SOA Suite コンポーネントとのインバウンド統合 (イベント通知) がサポートされます。
- Oracle Adapter J2CA and BSE デプロイメントでは、Oracle SOA Suite とのアウトバウンド統合 (リクエスト/レスポンス型サービス) がサポートされます。

BSE と Oracle Adapter J2CA のデプロイメント間の差異には、次の 2 つの要素があります。これらの要素を理解することは、デプロイメント・オプションの選択に役立ちます。

1. BSE には次の利点があります。
  - Oracle WebLogic Server の個別のインスタンスでデプロイできます。
  - 優れた負荷分散を提供します。
  - アプリケーションの構築について、Service Oriented Architecture (SOA) モデルにより厳密に準拠します。
2. Oracle Adapter J2CA の方が BSE よりもわずかに高いパフォーマンスが得られます。

## 1.6 サンプル・プロジェクト

Oracle BPEL、メディエータ、BPM、OSB ツールを使用したアウトバウンドおよびインバウンドの統合シナリオを実演する Oracle Application Adapter for PeopleSoft 用のサンプル・プロジェクトが、Application Adapter とともにインストールされます。次の表にサンプル・プロジェクトの場所を示します。

---

### サンプル・プロジェクト 場所

---

アウトバウンド BPEL プロセス (J2CA)	<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\BPEL\J2CA\Outbound_Project
インバウンド BPEL プロセス (J2CA)	<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\BPEL\J2CA\Inbound_Project
アウトバウンド BPEL プロセス (BSE)	<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\BPEL\BSE\Outbound_Project
アウトバウンド・メディエータ・プロセス (J2CA)	<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\Mediator\J2CA\Outbound_Project
インバウンド・メディエータ・プロセス (J2CA)	<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\Mediator\J2CA\Inbound_Project
アウトバウンド・メディエータ・プロセス (BSE)	<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\Mediator\BSE\Outbound_Project
アウトバウンド BPM プロセス (J2CA)	<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\BPM\J2CA\Outbound_Project
インバウンド BPM プロセス (J2CA)	<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\BPM\J2CA\Inbound_Project
アウトバウンド BPM プロセス (BSE)	<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\BPM\BSE\Outbound_Project
アウトバウンド OSB sbconsole プロセス (J2CA)	<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\OSB\J2CA\PeopleSoft_Sample_J2CA_OSB_Outbound_Project
インバウンド OSB sbconsole プロセス (J2CA)	<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\OSB\J2CA\PeopleSoft_Sample_J2CA_OSB_Inbound_Project
アウトバウンド OSB sbconsole プロセス (BSE)	<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\OSB\BSE\PeopleSoft_Sample_BSE_OSB_Outbound_Project

**サンプル・プロジェクト 場所**

アウトバウンド OSB Jdeveloper プロセス (J2CA)	<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_ Samples.zip\PeopleSoft_Samples\OSB_ Jdeveloper\J2CA\PeopleSoft_Sample_J2CA_OSB_Outbound_ Project
インバウンド OSB Jdeveloper プロセス (J2CA)	<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_ Samples.zip\PeopleSoft_Samples\OSB_ Jdeveloper\J2CA\PeopleSoft_Sample_J2CA_OSB_Inbound_Project
アウトバウンド OSB Jdeveloper プロセス (BSE)	<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_ Samples.zip\PeopleSoft_Samples\OSB_ Jdeveloper\BSE\PeopleSoft_Sample_BSE_OSB_Outbound_Project

## 1.7 クイック・スタート・ガイド

この項では、Oracle Application Adapter for PeopleSoft をインストールして構成し、すぐに使用するための基本的な方法について簡単に説明します。次のトピックが含まれています。

- 1.7.1 項「インストール」
- 1.7.2 項「サード・パーティ・ライブラリ・ファイルのコピー」
- 1.7.3 項「構成」
- 1.7.4 項「WebLogic Server のデプロイメントおよび統合」
- 1.7.5 項「アプリケーション・エクスプローラでの構成、ターゲット、チャンネルの作成」
- 1.7.6 項「SOA Suite のサービス・コンポーネントの使用」
- 1.7.7 項「Oracle Service Bus の使用」
- 1.7.8 項「その他の機能」

### 1.7.1 インストール

Oracle Application Adapter for PeopleSoft をインストールするには、Oracle Fusion Middleware Application Adapter インストーラをダウンロードし、SOA/OSB のインストールを完了します。

Oracle Fusion Middleware Application Adapter のインストールの詳細は、「Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapters インストレーション・ガイド」を参照してください。

### 1.7.2 サード・パーティ・ライブラリ・ファイルのコピー

アダプタのインストールが完了した後、PeopleSoft の必要なサード・パーティ・ライブラリ・ファイルを次のディレクトリにコピーします。

```
<ADAPTER_HOME>\lib
```

```
<ORACLE_HOME>\user_projects\domains\base_domain\lib
```

Oracle Fusion Middleware Application Adapter のインストールの詳細は、『Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapters インストール・ガイド』を参照してください。

### 1.7.3 構成

<ADAPTER\_HOME> にナビゲートし、次の変更を行います。

1. *iwafjca.rar\META-INF\ra.xml* を開き、表 1-1 に示すように、指定された `config-property-name` パラメータの下に次の値を追加します。

表 1-1

Config-Property-Name	Config-Property-Value
<i>IWayHome</i>	<ADAPTER_HOME> 次に例を示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ SOA の場合: C:\12c_soa\soa\soa\thirdparty\ApplicationAdapters</li> <li>■ OSB の場合: C:\12c_OSB\osb\3rdparty\ApplicationAdapters</li> </ul>
<i>IWayConfig</i>	構成の名前。次に例を示します。 jca_sample

2. *ibse.war\WEB-INF\web.xml* を開き、表 1-2 に示すように、指定された `param-name` パラメータの下に次の値を追加します。

表 1-2

Param-Name	Param-Value
<i>ibseroot</i>	<ADAPTER_HOME>\ibse.war 次に例を示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ SOA の場合: C:\12c_soa\soa\soa\thirdparty\ApplicationAdapters\ibse.war</li> <li>■ OSB の場合: C:\12c_OSB\osb\3rdparty\ApplicationAdapters\ibse.war</li> </ul>
<i>IWay.home</i>	<ADAPTER_HOME> 次に例を示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ SOA の場合: C:\12c_soa\soa\soa\thirdparty\ApplicationAdapters</li> <li>■ OSB の場合: C:\12c_OSB\osb\3rdparty\ApplicationAdapters</li> </ul>

表 1-2 ( 続き )

Param-Name	Param-Value
Iway.config	構成の名前。次に例を示します。 IBSE

**注意：** これらのステップは、ファイル・リポジトリを構成する場合にのみ使用できます。データベース・リポジトリの構成に関する詳細および一般的な構成情報は、第 2 章「Oracle Application Adapter for PeopleSoft 構成」および第 3 章「Oracle WebLogic Server のデプロイメントおよび統合」を参照してください。

### 1.7.4 WebLogic Server のデプロイメントおよび統合

1. WebLogic サーバーを起動し、WebLogic コンソールを開きます。
2. アダプタ・コンポーネント (ibse.war、iwafjca.war、iwafjca.rar ファイル) をデプロイし、デプロイしたアダプタ・コンポーネントを起動します。

デプロイメント、統合およびターゲットの作成の詳細は、第 3 章「Oracle WebLogic Server のデプロイメントおよび統合」を参照してください。

### 1.7.5 アプリケーション・エクスプローラでの構成、ターゲット、チャネルの作成

アプリケーション・エクスプローラでの構成、ターゲット、チャネルの作成の詳細は、次に示すこのユーザー・ガイドの各項を参照してください。

- アプリケーション・エクスプローラの起動 : 2.1 項「アプリケーション・エクスプローラの起動」
- BSE 構成の作成 : 2.3.1 項「BSE 用の構成の作成」
- J2CA 構成の作成 : 2.3.2 項「J2CA 用の構成の作成」
- 作成した構成の接続 : 2.3.3 項「BSE または J2CA 構成への接続」
- ターゲットの作成および接続 : 2.4 項「PeopleSoft 用の接続 ( ターゲット ) の確立」
- Web サービスの作成およびテスト : 2.8 項「Web サービスの作成およびテスト (BSE 構成のみ)」
- WSDL ファイルの生成 : 2.7 項「WSDL の生成 (J2CA 構成のみ)」
- チャネルの作成および使用 : 2.9 項「イベント・アダプタの構成」

### 1.7.6 SOA Suite のサービス・コンポーネントの使用

Oracle Application Adapter for PeopleSoft は、BPEL、メディエータ、BPM などの SOA Suite のサービス・コンポーネントと統合されています。必要なプロセスを JDeveloper で作成してから、SOA サーバーにデプロイします。

BPEL、メディエータ、BPM サービス・コンポーネントの使用の詳細は、次を参照してください。

- 第 4 章「Oracle SOA Suite での BPEL サービス・コンポーネントの統合」
- 第 5 章「Oracle SOA Suite でのメディエータ・サービス・コンポーネントとの統合」

- [第6章「Oracle SOA Suite での BPM サービス・コンポーネントの統合」](#)

### 1.7.7 Oracle Service Bus の使用

Oracle Application Adapter for PeopleSoft は、Oracle Service Bus (OSB) と統合されており、Web サービスの簡易な統合を可能にします。必要なプロセスを Oracle Service Bus Console で作成します。また、プロセスを JDeveloper で作成してから、SOA サーバーにデプロイすることもできます。

OSB Console の使用の詳細は、[第7章「sbconsole を使用した Oracle Service Bus 用のアウトバウンドおよびインバウンド・プロセスの構成」](#)を参照してください。

OSB JDeveloper の使用の詳細は、[第8章「JDeveloper を使用した Oracle Service Bus 用のアウトバウンドおよびインバウンド・プロセスの構成」](#)を参照してください。

### 1.7.8 その他の機能

以下に、その他の機能、およびそれらの機能に関連するこのユーザー・ガイドの項を示します。

- [例外フィルタの構成:9.4 項「例外フィルタ」](#)
- [資格証明マッピングの構成:](#)
  - [9.5 項「Oracle SOA Suite \(BPEL、メディエータまたは BPM\) の資格証明マッピング」](#)
  - [9.6 項「Oracle Service Bus \(OSB\) の資格証明マッピング」](#)





---

# Oracle Application Adapter for PeopleSoft 構成

Oracle Adapter アプリケーション・エクスプローラ (アプリケーション・エクスプローラ) は、コンポーネント・インタフェースおよびメッセージの処理を可能にします。

アダプタを介して PeopleSoft にアクセスする外部アプリケーションは、XML スキーマまたは Web サービスのいずれかを使用して、外部アプリケーションとアダプタ間でデータを渡します。アプリケーション・エクスプローラを使用して、必要な XML スキーマおよび Web サービスを作成できます。

この章の内容は次のとおりです。

- 2.1 項「アプリケーション・エクスプローラの起動」
- 2.2 項「リポジトリ設定の構成」
- 2.3 項「リポジトリ構成の作成」
- 2.4 項「PeopleSoft 用の接続 (ターゲット) の確立」
- 2.5 項「アプリケーション・システム・オブジェクトの表示」
- 2.6 項「XML スキーマの作成」
- 2.7 項「WSDL の生成 (J2CA 構成のみ)」
- 2.8 項「Web サービスの作成およびテスト (BSE 構成のみ)」
- 2.9 項「イベント・アダプタの構成」

## 2.1 アプリケーション・エクスプローラの起動

アプリケーション・エクスプローラを起動するには、次の手順を実行します。

1. アプリケーション・エクスプローラがデプロイされている Oracle WebLogic Server が起動していることを確認します。
2. コマンド・プロンプトを開きます。
3. 次のディレクトリに移動します。

```
<ADAPTER_HOME>\user_projects\domains\base_domain\bin
```

4. `setDomainEnv.cmd` (Windows) または `../setDomainEnv.sh` (UNIX/Linux) を実行します。

このコマンドは、Oracle WebLogic Server 環境でアプリケーション・エクスプローラ用のクラス・パスおよびその他の環境変数を設定します。また、これによ

り、アプリケーション・エクスプローラは、Oracle WebLogic Server API にアクセスして、WSDL ファイルを Oracle Service Bus (OSB) Console に公開できます。

5. コマンド・プロンプトは開けたままにします。
6. 次のディレクトリに移動します。

```
<ADAPTER_HOME>\tools\iwae\bin
```

7. Execute `ae.bat` (Windows) または `iwae.sh` (UNIX/Linux) を実行して、アプリケーション・エクスプローラを起動します。

アプリケーション・エクスプローラが起動します。これで、PeopleSoft システムへの新規ターゲットを定義する準備ができました。

---

---

**注意:** `iwae.sh` ファイルを UNIX または Linux プラットフォームで実行する前に、権限を変更する必要があります。次に例を示します。

```
chmod +x iwae.sh
```

---

---

## 2.2 リポジトリ設定の構成

リポジトリには、構成の詳細、アダプタのターゲット、チャンネルに関する情報、およびその他の構成情報が格納されます。BSE および J2CA リポジトリ設定を構成する方法の詳細は、*Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapters インストール・ガイド*(データベース・リポジトリの構成に関する項)を参照してください。

## 2.3 リポジトリ構成の作成

アプリケーション・エクスプローラを Oracle Application Adapter for PeopleSoft とともに使用する前に、リポジトリ構成を作成する必要があります。アダプタのデプロイ先のコンテナに基づき、Web サービスと J2CA の 2 種類のリポジトリ構成を作成できます。

デザインタイム中に、リポジトリは、アプリケーション・エクスプローラを使用したアダプタ接続の構成、EIS オブジェクトの参照、サービスの構成、および EIS イベントのリスニングのためのリスナー構成の際、作成されたメタデータの格納に使用されます。リポジトリ内の情報は実行時でも参照されます。

Web サービスと BSE は同じタイプのデプロイメントを参照します。詳細は、1-1 ページ「[アダプタの機能](#)」を参照してください。

この項では、次のトピックについて説明します。

- [2.3.1 項「BSE 用の構成の作成」](#)
- [2.3.2 項「J2CA 用の構成の作成」](#)
- [2.3.3 項「BSE または J2CA 構成への接続」](#)

### 2.3.1 BSE 用の構成の作成

アプリケーション・エクスプローラを使用して BSE 用のリポジトリ構成を作成するには、先に新規構成を定義する必要があります。

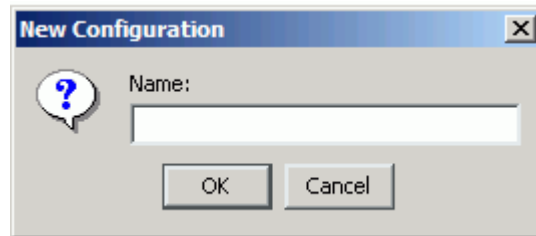
#### BSE 用の新規構成の定義

BSE 用の新規構成を定義するには、次の手順を実行します。

1. アプリケーション・エクスプローラを起動します。

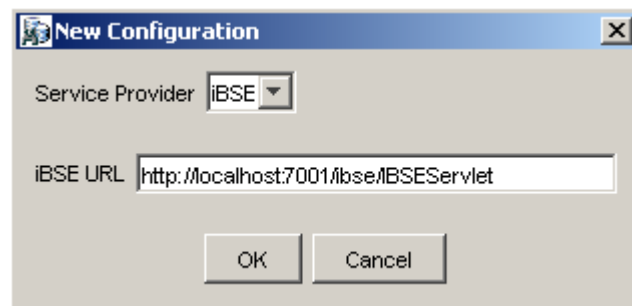
2. 「構成」を右クリックし、「新規」を選択します。  
 図 2-1 に示すように、「新規構成」ダイアログが表示されます。

図 2-1 「新規構成」ダイアログ



3. 新規構成の名前を入力し(「myConfig」など)、「OK」をクリックします。  
 図 2-2 に示すように、「新規構成」ダイアログが表示されます。

図 2-2 「新規構成」ダイアログ-「サービス・プロバイダ」リストおよび「iBSE URL」



4. 「サービス・プロバイダ」リストから、「iBSE URL」を選択します。
5. 「iBSE URL」フィールドで、デフォルトの URL を受け入れるか、または次のフォーマットで別の URL と置き換えます。

`http://host name:port/ibse/IBSEServlet`

ここで、*host name* は Oracle WebLogic Server が存在するシステムで、*port* は管理されている Oracle WebLogic Server 用の HTTP ポートです(「soa\_server1」など)。

6. 「OK」をクリックします。  
 図 2-3 に示すように、新規構成を示すノードがルートの「構成」ノードの下に表示されます。

図 2-3 新規構成ノード - myConfig



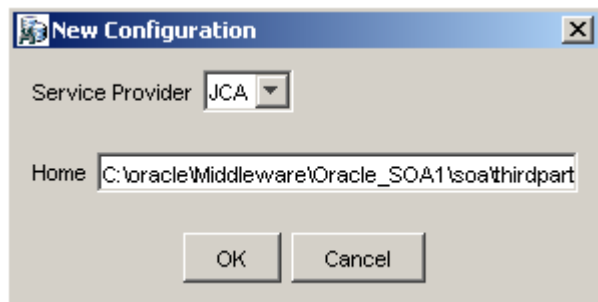
## 2.3.2 J2CA 用の構成の作成

アプリケーション・エクスプローラを使用して Oracle Adapter J2CA 用の構成を作成するには、先に新規構成を作成する必要があります。

J2CA 用の新規構成を定義するには、次の手順を実行します。

1. アプリケーション・エクスプローラを起動します。
2. 「構成」を右クリックし、「新規」を選択します。  
 図 2-4 に示すように、「新規構成」ダイアログが表示されます。

図 2-4 「新規構成」ダイアログ



3. 新規構成の名前を入力し(「myConfig」など)、「OK」をクリックします。
4. 「サービス・プロバイダ」リストから、「JCA」を選択します。
5. 「OK」をクリックします。  
 図 2-5 に示すように、新規構成を示すノードがルートの「構成」ノードの下に表示されます。

図 2-5 新規構成ノード - myConfig



Oracle Adapter J2CA 構成フォルダが、アダプタのインストールに基づいて次の場所に格納されます。

```
<ADAPTER_HOME>\config\configuration_name
```

`configuration_name` は、作成した構成の名前です(「SampleConfig」など)。

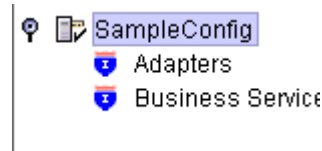
### 2.3.3 BSE または J2CA 構成への接続

新規構成に接続するには、次の手順を実行します。

1. 「SampleConfig」など、接続する構成を右クリックします。
2. 「接続」を選択します。

「アダプタ」、「イベント」および「ビジネス・サービス」(Web サービスとしても知られる)のノードが表示されます。「ビジネス・サービス」ノードは、BSE 構成の場合にのみ表示されます。J2CA 構成に接続している場合は、「ビジネス・サービス」ノードは表示されません。図 2-6 に、「SampleConfig」という名前の BSE 構成の例を示します。

図 2-6 「構成」ノードの下に表示される新しい「SampleConfig」構成



- 「アダプタ」ノードを使用して、PeopleSoft とのインバウンド相互作用を作成します。たとえば、「アダプタ」ノード内の「PeopleSoft」ノードを使用して、PeopleSoft を更新するサービスを構成します。
- 「イベント」ノード (J2CA 構成の場合のみ) を使用して、PeopleSoft でのイベントをリスニングするリスナーを構成します。
- 「ビジネス・サービス」ノード (BSE 構成の場合のみ) を使用して、「アダプタ」フォルダで作成された Web サービスをテストします。「ビジネス・サービス」ノードのセキュリティ機能を使用して、Web サービスのセキュリティ設定を制御することもできます。

これで、PeopleSoft への新規ターゲットを定義できます。

## 2.4 PeopleSoft 用の接続 ( ターゲット ) の確立

アプリケーション定義の一部として、Oracle Application Adapter for PeopleSoft 用ターゲットの追加があります。アプリケーション・エクスプローラでのターゲットの設定には、ターゲットに固有の情報が必要です。

PeopleSoft ビジネス・オブジェクトを参照するには、使用するシステムへのターゲットを作成する必要があります。ターゲットは、接続ポイントの役割を果たし、作成後、自動的に保存されます。アプリケーション・エクスプローラの毎回起動時、またはシステムとの接続の切断後は、このシステムへの接続を確立する必要があります。

アプリケーション・エクスプローラを起動すると、インストールされているアダプタに基づいて、アプリケーション・エクスプローラでサポートされているアプリケーション・システムが ( ノードとして ) 左ペインに表示されます。

この項では、次のトピックについて説明します。

- [2.4.1 項「PeopleSoft へのターゲットの定義」](#)
- [2.4.2 項「定義済の PeopleSoft ターゲットへの接続」](#)
- [2.4.3 項「ターゲットの管理」](#)

### 2.4.1 PeopleSoft へのターゲットの定義

PeopleSoft に初めて接続するには、新規ターゲットを定義する必要があります。Oracle Application Adapter for PeopleSoft コンポーネント・インタフェースレベルのセキュリティに加え、PeopleSoft 標準セキュリティがサポートされています。PeopleSoft アプリケーション・サーバーに接続すると、アプリケーションのセキュリティは、ユーザー ID、ロールおよび権限により管理されます。PeopleSoft アプリケーションのセキュリティの詳細は、適切な PeopleSoft ドキュメントを参照してください。

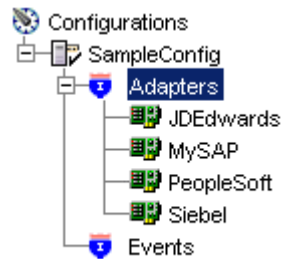
新規ターゲットを定義する場合、ランタイムの目的で Oracle WebLogic Server を再起動して、リポジトリを更新する必要があります。

ターゲットを定義するには、次の手順を実行します。

1. 左ペインで、「アダプタ」ノードを展開します。

図 2-7 に示すように、インストールされているアダプタに基づいて、アプリケーション・エクスペローラでサポートされているアプリケーション・システムがノードとして表示されます。

図 2-7 「アダプタ」 リスト

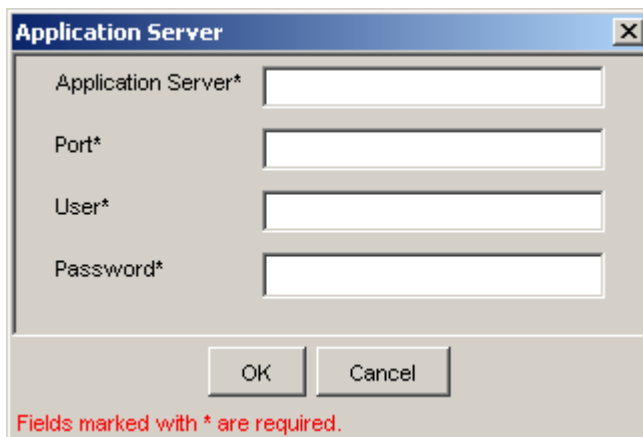


2. 「PeopleSoft」 ノードを右クリックし、「ターゲットの追加」を選択します。  
「ターゲットの追加」ダイアログが表示されます。次の情報を入力します。
  - a. 「名前」フィールドに、「PSoftTarget」など、ターゲットのわかりやすい名前を入力します。
  - b. 「説明」フィールドに、ターゲットの説明を入力します ( オプション )。
  - c. 「ターゲットタイプ」リストから、「アプリケーション・サーバー」を選択します。  
ターゲット・タイプに指定可能な値はこの値のみです。

3. 「OK」をクリックします。

図 2-8 に示すように、「アプリケーション・サーバー」ダイアログが表示されます。PeopleSoft、および PeopleSoft をホストするアプリケーション・サーバーに関する接続情報を指定する必要があります。

図 2-8 「アプリケーション・サーバー」ダイアログ



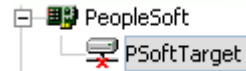
次の情報を入力します。

- a. 「アプリケーション・サーバー」フィールドに、PeopleSoft アプリケーションをホストしているコンピュータのホスト名または IP アドレスを入力します。
- b. 「ポート」フィールドに、PeopleSoft アプリケーションがリスニングしているポート番号を入力します。

- c. 「ユーザー」フィールドに、PeopleSoft アプリケーションに有効なユーザー ID を入力します。
  - d. 「パスワード」フィールドに、PeopleSoft アプリケーションに有効なパスワードを入力します。
4. 「OK」をクリックします。
 

図 2-9 に示すように、左ペインの「PeopleSoft」ノードに新規ターゲット (「PSoftTarget」) が表示されます。

図 2-9 切断された「PeopleSoft」ターゲット・ノード



これで、PeopleSoft ターゲットに接続する準備ができました。

## 2.4.2 定義済の PeopleSoft ターゲットへの接続

既存のターゲットに接続するには、次の手順を実行します。

1. 左ペインで、「アダプタ」ノードを展開します。
2. 「PeopleSoft」ノードを展開します。
3. 「PeopleSoft」ノードの下のターゲット名 (「PSoftTarget」など) をクリックします。  
「接続」ダイアログに、入力した接続パラメータの値が表示されます。
4. 接続パラメータを確認します。
5. ターゲット名を右クリックし、「接続」を選択します。  
「x」アイコンが消え、ノードが接続されたことが示されます。図 2-10 に示すように、PeopleSoft ビジネス・オブジェクトのリストが表示されます。

図 2-10 PeopleSoft ビジネス・オブジェクト



## 2.4.3 ターゲットの管理

異なるトランザクション処理システムへの複数のオープン接続を維持できますが、使用していない接続は切断することをお勧めします。切断後、既存のターゲットを変更できます。

システムのプロパティが変更されたら、接続パラメータを変更できます。ターゲットを削除することもできます。次の手順では、ターゲットの切断、編集および削除方法について説明します。

この項では、次のトピックについて説明します。

- 2.4.3.1 項「PeopleSoft への接続の切断」
- 2.4.3.2 項「接続パラメータの変更」

- 2.4.3.3 項「PeopleSoft への接続の削除」

### 2.4.3.1 PeopleSoft への接続の切断

PeopleSoft への接続を切断するには、次の手順を実行します。

1. 「アダプタ」ノードを展開します。
2. 「PeopleSoft」ノードを展開します。
3. 図 2-11 に示すように、接続先のターゲット ( 「PSoftTarget」 など ) を右クリックし、「切断」を選択します。

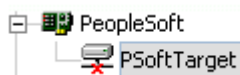
図 2-11 切断



PeopleSoft から切断すると、PeopleSoft との接続は消失しますが、ノードは残ります。

図 2-12 に示すように、「x」アイコンが表示され、ノードが切断されたことが示されます。

図 2-12 切断された「PeopleSoft」ターゲット・ノード



### 2.4.3.2 接続パラメータの変更

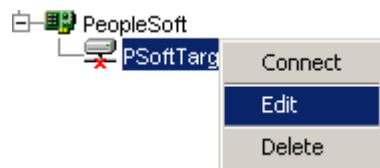
アプリケーション・エクスプローラを使用した PeopleSoft のターゲットの作成後、以前に入力した情報はいずれも編集できます。

定義済のターゲットの接続パラメータを変更する場合、ランタイムの目的で Oracle WebLogic Server を再起動して、リポジトリを更新する必要があります。

ターゲットを編集するには、次の手順を実行します。

1. 編集するターゲットの接続が切断されていることを確認します。
2. 図 2-13 に示すように、ターゲットを右クリックし、「編集」を選択します。

図 2-13 「PSoftTarget」ノード・メニュー



「アプリケーション・サーバー」ダイアログにターゲットの接続情報が表示されます。

3. 必要に応じて、ダイアログでプロパティを変更し、「OK」をクリックします。



### 2.4.3.3 PeopleSoft への接続の削除

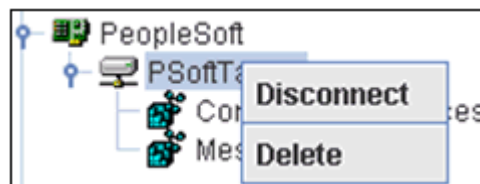
接続を切断して閉じるかわりに、削除できます。接続を削除すると、アプリケーション・エクスプローラの左ペインで PeopleSoft 接続のリストからそのノードが消えます。

接続を削除する場合、ランタイムの目的で Oracle WebLogic Server を再起動して、リポジトリを更新する必要があります。

PeopleSoft への接続を削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するターゲットを見つけます。
2. 図 2-14 に示すように、ターゲット (「PsoftTarget」など) を右クリックし、「削除」を選択します。

図 2-14 「PSoftTarget」ノード-「削除」オプション



使用可能な接続のリストからそのノードが消えます。

## 2.5 アプリケーション・システム・オブジェクトの表示

PeopleSoft への接続後、アプリケーション・エクスプローラを使用して、ビジネス・オブジェクトのメタデータを参照できます。たとえば、アプリケーション・エクスプローラを使用すると、PeopleSoft ビジネス・オブジェクト・リポジトリに格納されている PeopleSoft コンポーネント・インタフェースおよびメッセージ・メタデータを表示できます。

アプリケーション・システム・オブジェクトを表示するには、次の手順を実行します。

1. 「PSoftTarget」など、ターゲット名の左のアイコンをクリックします。  
図 2-15 に示すように、ターゲットが展開され、使用可能なシステム・オブジェクトが表示されます。

図 2-15 「PSoftTarget」ノード・オブジェクト



2. 希望の PeopleSoft リポジトリ・ノードを展開するには、コンポーネント・インタフェースなど、リポジトリ名の左のアイコンをクリックします。

PeopleSoft のコンポーネント・インタフェースのリストが表示されます。これで、スキーマを生成できます。

## 2.6 XML スキーマの作成

PeopleSoft ビジネス・オブジェクト・リポジトリの参照後は、アダプタと使用するオブジェクトの XML リクエストおよびレスポンス・スキーマを生成できます。

この項では、次のトピックについて説明します。

- 2.6.1 項「BSE に対する XML リクエストおよびレスポンス・スキーマの作成」
- 2.6.2 項「Oracle Adapter J2CA に対する XML リクエストおよびレスポンス・スキーマの作成」

### 2.6.1 BSE に対する XML リクエストおよびレスポンス・スキーマの作成

BSE 実装に対する PeopleSoft コンポーネント・インタフェース用の XML リクエストおよびレスポンス・スキーマを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「PeopleSoft」ノード、「コンポーネント インターフェイス」ノードの順に展開します。
2. 「コンポーネント インターフェイス」のリストから、LOCATION を選択します。
3. 操作にナビゲートし、右クリックします。
4. 「リクエスト・スキーマ」または「レスポンス・スキーマ」タブをクリックして、リクエストまたはレスポンス・スキーマの情報を表示します。

選択したスキーマが表示されます。

コンポーネント・インタフェースを参照し、選択を行うと、そのコンポーネント・インタフェースのリクエストおよびレスポンス XML スキーマが自動的に作成され、作成済のリポジトリ内に格納されます。

### 2.6.2 Oracle Adapter J2CA に対する XML リクエストおよびレスポンス・スキーマの作成

Oracle Adapter J2CA 実装に対する PeopleSoft コンポーネント・インタフェース用の XML リクエストおよびレスポンス・スキーマを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「PeopleSoft」ノード、「コンポーネント インターフェイス」ノードの順に展開します。
2. 「コンポーネント インターフェイス」のリストから、LOCATION を選択します。
3. 操作にナビゲートし、右クリックします。
4. 「リクエスト・スキーマ」または「レスポンス・スキーマ」タブをクリックして、リクエストまたはレスポンス・スキーマの情報を表示します。

選択したスキーマが表示されます。

コンポーネント・インタフェースを参照し、選択を行うと、そのコンポーネント・インタフェースのリクエストおよびレスポンス XML スキーマが自動的に作成され、作成済のリポジトリ内に格納されます。

## 2.7 WSDL の生成 (J2CA 構成のみ)

サービスの Web Service Definition Language (WSDL) 記述により、ホスト・サーバー内の他のサービスでサービスが使用できるようになります。アプリケーション・エクスペローラを使用して、アダプタの JCA サービスのリクエスト/レスポンス (アウトバウンド) とイベント通知 (インバウンド) の両方を作成できます。

**注意：** インバウンド JCA サービスの作成 (イベント) オプションは、選択されたノードでイベントがサポートされている場合にのみ使用できます。

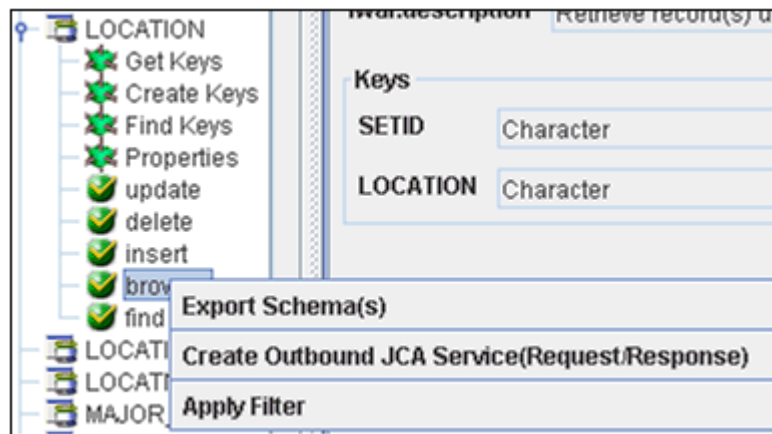
**注意：** PeopleSoft コンポーネント・インタフェースでは、サービスのみがサポートされています。そのため、アウトバウンド WSDL ファイルのみ生成可能です。

リクエスト/レスポンス型サービス用の WSDL ファイルを生成するには、次の手順を実行します。

1. スキーマの作成後、各オブジェクトを右クリックします。

図 2-16 に示すように、オプションが表示されます。

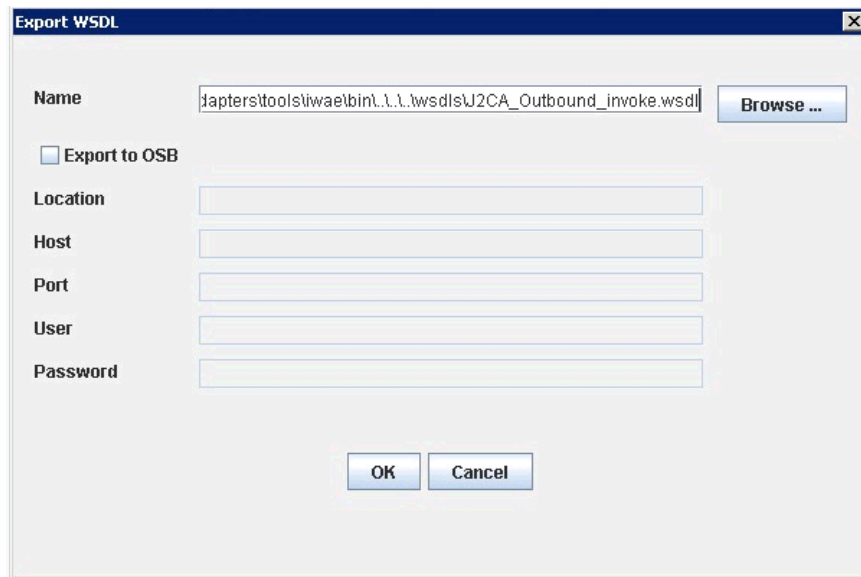
図 2-16 アウトバウンド JCA サービスの作成 (リクエスト/レスポンス) オプション



2. アウトバウンド JCA サービスの作成 (リクエスト/レスポンス) を選択します。

図 2-17 に示すように、「WSDL のエクスポート」ダイアログが表示されます。

図 2-17 「WSDL のエクスポート」ダイアログ



3. ファイルのデフォルト名を受け入れます。

.wsdl ファイル拡張子が自動的に追加されます。デフォルトでは、リクエスト/レスポンス型のサービス用に生成された WSDL ファイルの名前の末尾には「\_invoke」が付き、イベント通知用に生成されたものには「\_receive」が付きます。

4. 「OK」をクリックします。

WSDL ファイルが指定した場所に保存されます。

イベント通知用の WSDL の生成手順は、リクエスト/レスポンス用と類似しています。イベント通知用の WSDL を生成するには、先に各イベントのチャンネルを作成する必要があります。

## 2.8 Web サービスの作成およびテスト (BSE 構成のみ)

アプリケーション・エクスプローラを使用して、Web サービス ( [ビジネス・サービス](#) と呼ばれる ) を作成できます。次の手順では、例として「LOCATION」という PeopleSoft コンポーネント・インタフェースが使用されています。

---

**注意：** アダプタの J2EE Connector Architecture (J2CA) 実装では、Web サービスは使用できません。Oracle Adapter J2CA を使用するようアダプタがデプロイされている場合、Common Client Interface により、アダプタを使用する統合サービスが提供されます。

---

この項では、次のトピックについて説明します。

- 2.8.1 項 「Web サービスの作成」
- 2.8.2 項 「Web サービスのテスト」
- 2.8.3 項 「伝播の識別」

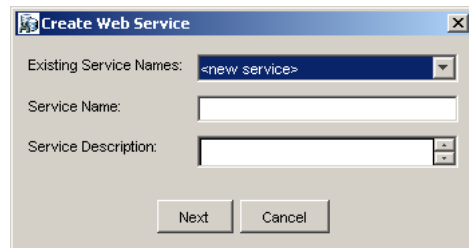
## 2.8.1 Web サービスの作成

Web サービスを作成するには、次のステップを実行します。

1. BSE 構成の下に作成された PeopleSoft ターゲットを接続し、「コンポーネント インターフェイス」ノードを展開します。
2. 「コンポーネント インターフェイス」のリストから、**LOCATION** を選択します。
3. **ビジネス・サービス**を作成するノードを右クリックし、「Web サービスの作成」を選択します。

図 2-18 に示すように、「Web サービスの作成」ダイアログが表示されます。

図 2-18 「Web サービスの作成」ダイアログ



新規の Web サービスのメソッドとして、または既存の Web サービスのメソッドとして、ビジネス・ファンクションを追加できます。次のステップを実行します。

- a. 「既存のサービス名」リストから、<新規サービス>または既存のサービスを選択します。
  - b. 新規サービスを作成する場合は、サービス名を指定します。この名前により、「ビジネス・サービス」ノードの下のサービスのリストで Web サービスが識別されます。
  - c. サービスに関する簡単な説明を入力します (オプション)。
4. 「次へ」をクリックします。

ライセンスおよびメソッドに関するダイアログが表示されます。

次のステップを実行します。

- a. 「ライセンス名」フィールドで、Web サービスに割り当てる 1 つ以上のライセンス・コードを選択します。複数を選択するには、**[Ctrl]** キーを押しながら各ライセンスをクリックします。
  - b. 「メソッド名」フィールドで、デフォルトのメソッド名のままにします。
  - c. 「メソッドの説明」フィールドで、メソッドに関する簡単な説明を入力します (オプション)。
  - d. 「DTD ディレクトリ」フィールドで、Web サービスの接続先を指定します。デフォルトの場所を変更する場合は、「参照」をクリックします。
5. 「OK」をクリックします。

アプリケーション・エクスプローラで、「ビジネス・サービス」ノードに表示が切り替わり、新規の Web サービスが左ペインに表示されます。

6. 新規 Web サービスを右クリックし、メニューから「WSDL を保存」を選択します。

「保存」ダイアログが表示されます。

7. WSDL ファイルの名前、およびファイル・システム上に WSDL ファイルを保存する場所を指定します。
8. 「保存」をクリックします。

## 2.8.2 Web サービスのテスト

Web サービスを作成した後は、テストを行い、適切に機能することを確認できます。Web サービスのテスト用のテスト・ツールは装備されています。

ビジネス・サービスをテストするには、次の手順を実行します。

1. 「ビジネス・サービス」ノードをクリックして、Web サービスにアクセスします。
2. 「サービス」ノードを展開します。
3. テストするビジネス・サービスの名前を選択します。

ビジネス・サービスの名前は、右ペインにリンクとして表示されます。

4. 右ペインで、指定するビジネス・サービスのリンクをクリックします。

テスト・オプションが別の BSE サブレット・ページに表示されます。XML 入力が必要とする Web サービスをテストする場合は、入力フィールドが表示されません。

5. 適切な入力項目を入力します。
6. 「起動」をクリックします。

BSE サブレット・ページに結果が表示されます。

## 2.8.3 伝播の識別

XMLSPY などのサード・パーティの XML エディタを使用して Web サービスをテストまたは実行する場合は、SOAP ヘッダーで指定するユーザー名およびパスワードの値が有効で、PeopleSoft への接続に使用されるものと同じである必要があります。アプリケーション・エクスペローラを使用したターゲットの作成中に PeopleSoft 用に指定したユーザー名およびパスワードは、この Web サービス・リクエスト用のもので上書きされます。次に示すのは、Web サービス用の WSDL ファイルに含まれるサンプルの SOAP ヘッダーです。

```
<SOAP-ENV:Header>
  <m:ibsinfo xmlns:m="urn:schemas-iwaysoftware-com:iwse">
    <m:service>String</m:service>
    <m:method>String</m:method>
    <m:license>String</m:license>
    <m:disposition>String</m:disposition>
    <m:Username>String</m:Username>
    <m>Password>String</m>Password>
    <m:language>String</m:language>
  </m:ibsinfo>
</SOAP-ENV:Header>
```

<m:disposition> および <m:language> タグは必要ではないため、SOAP ヘッダーから削除できます。

## 2.9 イベント・アダプタの構成

イベントは、アクティビティによってアプリケーション・システムで生成されます。イベントを使用して、アプリケーションのアクションをトリガーできます。たとえば、顧客情報が更新された場合に PeopleSoft でイベントが生成されます。これが発生

したときにアプリケーション・システムでアクションが実行されると、アプリケーションはこのイベントのコンシューマとなります。

---

**注意：** BSE 構成ではイベントはサポートされていません。

---

アプリケーション・システムへの接続を作成した後、アプリケーション・エクスプローラを使用してイベントを追加できます。イベントを作成するには、チャンネルを作成する必要があります。

---

**注意：** J2CA 構成を使用している場合は、各イベント・オブジェクトに対して新規のチャンネルを作成し、WSDL を生成するときにこのチャンネルを選択する必要があります。チャンネルの作成が必要なのは、J2CA 構成の場合のみです。

---

チャンネルは、バックエンド・システムの特定のインスタンスへの構成済の接続を表します。詳細は、2-15 ページ「[チャンネルの作成および編集](#)」を参照してください。

この項では、次のトピックについて説明します。

- [2.9.1 項「チャンネルの作成および編集](#)」
- [2.9.2 項「スキーマの検証](#)」

## 2.9.1 チャンネルの作成および編集

この項では、イベントのチャンネルを作成する方法について説明します。すべての定義済イベント・ポートは、チャンネルと関連付けられる必要があります。

チャンネルを作成、変更または削除する場合、ランタイムの目的で Oracle WebLogic Server を再起動して、変更を適用し、リポジトリを更新する必要があります。

---

**注意：** J2CA 構成を使用している場合は、各イベントに対して新規のチャンネルを作成し、インバウンド・サービスを作成するときにこのチャンネルを選択する必要があります。チャンネルの作成が必要なのは、J2CA 構成の場合のみです。

---

アプリケーション・エクスプローラを使用して、次のタイプのチャンネルを作成できます。

- HTTP
  - HTTP channels with PeopleTools バージョン 8.4 では HTTP チャンネルを使用することをお勧めします。
- TCP
  - PeopleTools バージョン 8.1 では TCP チャンネルを使用することをお勧めします。
- ファイル
  - ファイル・チャンネルはテスト目的でのみ使用することをお勧めします。ファイル・チャンネルは本番環境では使用しないでください。

---



---

**注意：** チャンネルは、Oracle Application Adapter for PeopleSoft がインストールされているシステムでのみ構成および起動できます。リモート・ホストでのチャンネルの構成および起動はサポートされていません。

---



---

この項では、次のトピックについて説明します。

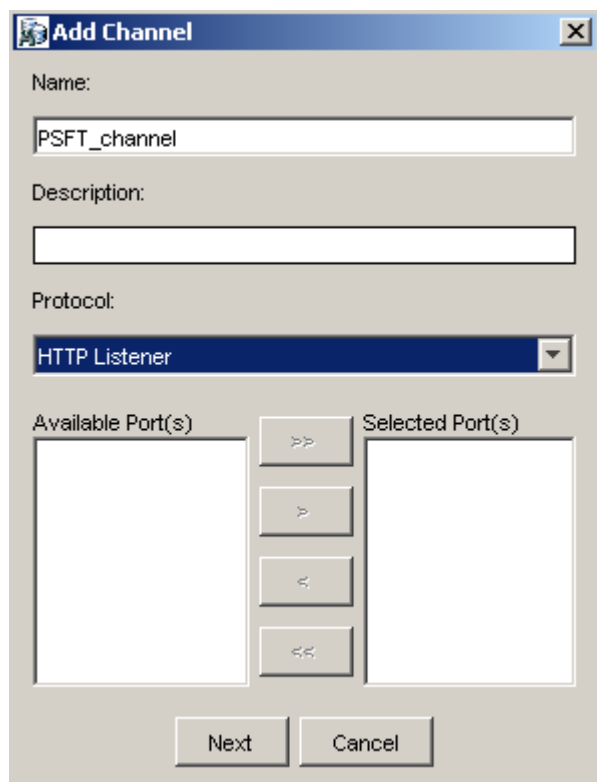
- 2.9.1.1 項「HTTP チャンネルの作成」
- 2.9.1.2 項「TCP チャンネルの作成」
- 2.9.1.3 項「ファイル・チャンネルの作成」
- 2.9.1.4 項「チャンネルの編集」
- 2.9.1.5 項「チャンネルの削除」

### 2.9.1.1 HTTP チャンネルの作成

HTTP チャンネルを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「イベント」ノードをクリックします。
2. 「PeopleSoft」ノードを展開します。  
ポートおよびチャンネル・ノードが左ペインに表示されます。
3. 「チャンネル」を右クリックし、「チャンネルの追加」を選択します。  
図 2-19 に示すように、「チャンネルの追加」ダイアログが表示されます。

図 2-19 「チャンネルの追加」ダイアログ





次の情報を入力します。

- a. 「PSFT\_channel」など、チャンネルの名前を入力します。
  - b. 簡単な説明を入力します。
  - c. 「プロトコル」リストから、「HTTP リスナー」を選択します。
4. 「次へ」をクリックします。
- 図 2-20 に示すように、「HTTP リスナー」ダイアログが表示されます。

図 2-20 「HTTP リスナー」ダイアログ



5. 次の表で指定されているようにシステム情報を入力します。

パラメータ	説明
リスナー・ポート	PeopleSoft イベント・データをリスニングするポート
Https	安全な HTTP 接続を確保するには、「Https」チェック・ボックスを選択します。 このオプションは現在サポートされていません。
同期タイプ	次のいずれかの同期オプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ REQUEST_RESPONSE</li> <li>■ REQUEST_ACK</li> </ul> <b>重要:</b> 同期タイプが「REQUEST」に設定されている場合、PeopleSoft チャンネルは機能しません。
エンコーディング・タイプ	リストから使用するエンコーディング・タイプを選択します。デフォルトでは、「ASCII」が選択されています。

6. 「OK」をクリックします。

チャンネルの説明、チャンネル・ステータスおよび使用可能なポートが記載されているサマリー・ペインが表示されます。これらの情報はすべて作成したチャンネルと関連付けられています。

左ペインのチャンネル・ノードの下にチャンネルが表示されます。

アイコン上の「X」は、そのチャンネルが現在切断されていることを示します。イベント構成をアクティブ化するには、チャンネルを起動する必要があります。

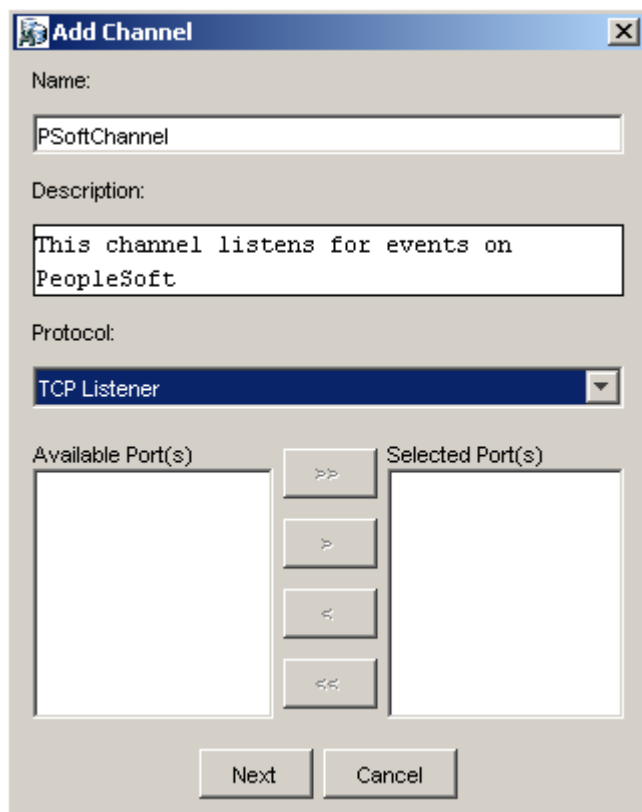
**注意：** Oracle Application Adapter for PeopleSoft を BPM、BPEL、メディエータまたは OSB インバウンド・プロセス・コンポーネントと統合する予定の場合は、チャンネルを起動しないでください。チャンネルは、BPM、BPEL、メディエータまたは OSB プロセス・コンポーネントがデプロイされた後、ランタイム・サーバーによって管理されます。テストまたはデバッグ目的でチャンネルをアプリケーション・エクスプローラから起動する場合は、ランタイム前に停止してください (BPM、BPEL、メディエータまたは OSB プロセス・コンポーネントと連携する場合)。

7. チャンネルを右クリックし、「開始」を選択します。  
作成したチャンネルがアクティブになります。左ペインのアイコン上の「X」が消えます。
8. チャンネルを停止するには、チャンネルを右クリックし、「停止」を選択します。

### 2.9.1.2 TCP チャンネルの作成

1. 「イベント」ノードをクリックします。
2. 「PeopleSoft」ノードを展開します。  
ポートおよびチャンネル・ノードが左ペインに表示されます。
3. 「チャンネル」を右クリックし、「チャンネルの追加」を選択します。  
☒ 2-21 に示すように、「チャンネルの追加」ダイアログが表示されます。

図 2-21 「チャンネルの追加」ダイアログ



次のステップを実行します。

- a. 「PSFT\_channel」など、チャンネルの名前を入力します。
  - b. 簡単な説明を入力します。
  - c. 「プロトコル」リストから、「TCP リスナー」を選択します。
4. 「次へ」をクリックします。
- 図 2-22 に示すように、「TCP リスナー」ダイアログが表示されます。

図 2-22 「TCP リスナー」ダイアログ

次の情報を入力します。

- a. 「ポート番号」フィールドで、TCP リスナーのポート番号を指定します (必須)。
- b. ホスト /IP バインディング・フィールドで、TCP リスナーのホスト IP を指定します (オプション)。

---

**注意：** チャンネルは、Oracle Application Adapter for PeopleSoft がインストールされているシステムでのみ構成および起動できます。リモート・ホストでのチャンネルの構成および起動はサポートされていません。

---

- c. 「同期タイプ」リストで、次の同期タイプ・オプションから選択します。

REQUEST\_RESPONSE

REQUEST\_ACK

REQUEST

**重要：** PeopleSoft チャンネルは、これらの同期タイプの 1 つのみ連携します。

- d. 接頭辞の長さチェック・ボックス: XML フォーマットでないデータを返す PeopleSoft イベントの場合。TCP/IP イベント・アプリケーションの場合は、TCP/IP ポートにデータを書き込むとき、4 バイトのバイナリ長フィールドのデータを接頭辞として付ける必要があります。
- e. 「XML」チェック・ボックス: XML フォーマットでデータを返す PeopleSoft イベントの場合。事前パーサーは必要ありません。

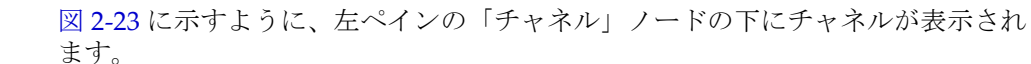
- f. キープ・アライブ・チェック・ボックス: イベント・トランザクションとチャンネル間の連続通信を維持します。
5. 「OK」をクリックします。  


図 2-23 非アクティブな PeopleSoft チャンネル・ノード



アイコン上の「X」は、そのチャンネルが現在切断されていることを示します。イベント構成をアクティブ化するには、チャンネルを起動する必要があります。

---

**注意：** Oracle Application Adapter for PeopleSoft を BPM、BPEL、OSB インバウンドまたはメディアータ・インバウンド・プロセス・コンポーネントと統合する予定の場合は、チャンネルを起動しないでください。チャンネルは、BPM、BPEL、OSB またはメディアータ・プロセス・コンポーネントがデプロイされた後、ランタイム・サーバーによって管理されます。テストまたはデバッグ目的でチャンネルをアプリケーション・エクスプローラから起動する場合は、ランタイム前に停止してください (BPM、BPEL、OSB またはメディアータ・プロセス・コンポーネントと連携する場合)。

---

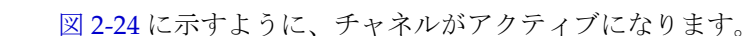
6. チャンネル・ノードを右クリックし、「開始」を選択します。  


図 2-24 アクティブな PeopleSoft チャンネル・ノード



アイコン上の「X」が消えます。

7. チャンネルを停止するには、接続されているチャンネル・ノードを右クリックし、「停止」を選択します。  
 チャンネルが非アクティブになり、アイコン上に「X」が表示されます。

### 2.9.1.3 ファイル・チャンネルの作成

ファイル・リスナー用のチャンネルを作成するには、次の手順を実行します。

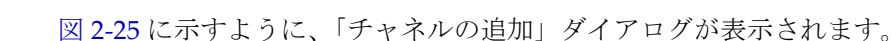
1. 「イベント」ノードをクリックします。
2. 左ペインで、「PeopleSoft」ノードを展開します。  
 ポートおよびチャンネル・ノードが表示されます。
3. 「チャンネル」を右クリックし、「チャンネルの追加」を選択します。  


図 2-25 「チャンネルの追加」ダイアログ

次のステップを実行します。

- a. 「NewFileChannel」など、チャンネルの名前を入力します。
  - b. 簡単な説明を入力します (オプション)。
  - c. 「プロトコル」リストから、ファイル・リスナーを選択します。
4. 「次へ」をクリックします。
  5. 図 2-26 に示すように、ファイル・リスナー・ダイアログが表示されます。

図 2-26 ファイル・リスナー・ダイアログ

次のように、システム情報を入力します。

- a. 「リクエスト」タブで、次のパラメータの値を入力します。

パラメータ	説明
ポーリング場所	PeopleSoft XML ファイル用のターゲット・システム・ロケーション。
ファイル・マスク	操作で生成される出力ファイルに使用されるファイル名。

- b. 「レスポンス」タブで、次のパラメータの値を入力します。

パラメータ	説明
同期タイプ	次のいずれかの同期オプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>REQUEST_RESPONSE</li> <li>REQUEST_ACK</li> </ul> <b>重要:</b> 同期タイプが「REQUEST」に設定されている場合、PeopleSoft チャンネルは機能しません。
レスポンス /Ack ディレクトリ	PeopleSoft XML ファイル用のターゲット・システム・ロケーション。

c. 「詳細」タブで、次のパラメータの値を入力します。

パラメータ	説明
エラー・ディレクトリ	エラーのあるドキュメントが書き込まれるディレクトリ
ポーリング間隔	新規入力をチェックする間隔(ミリ秒)。デフォルトは3秒です。オプション。
処理モード	「順次」は、リクエストを1つずつ処理することを示します。 スレッドは、複数のリクエストを同時に処理することを示します。
スレッド制限	スレッド処理を選択した場合、同時に処理可能なリクエストの最大数を示します。

6. 「OK」をクリックします。

チャンネルの説明およびチャンネル・ステータスが記載されているサマリー・ペインが表示されます。これらの情報はすべて作成したチャンネルと関連付けられています。

左ペインのチャンネル・ノードの下にチャンネルが表示されます。アイコン上の「X」は、そのチャンネルが現在切断されていることを示します。イベント構成をアクティブ化するには、チャンネルを起動する必要があります。

---

**注意:** Oracle Application Adapter for PeopleSoft を BPEL インバウンドまたはメディエータ・インバウンド・プロセス・コンポーネントと統合する予定の場合は、チャンネルを起動しないでください。チャンネルは、BPEL またはメディエータ・プロセス・コンポーネントがデプロイされた後、ランタイム・サーバーによって管理されます。テストまたはデバッグ目的でチャンネルをアプリケーション・エクスプローラから起動する場合は、ランタイム前に停止してください (BPEL またはメディエータ・プロセス・コンポーネントと連携する場合)。

---

7. チャンネルを右クリックし、「開始」を選択します。

作成したチャンネルがアクティブになります。左ペインのアイコン上の「X」が消えます。

8. チャンネルを停止するには、チャンネルを右クリックし、「停止」を選択します。

#### 2.9.1.4 チャンネルの編集

編集する前に、チャンネルを停止する必要があります。チャンネルを編集する場合、ランタイムの目的で Oracle WebLogic Server を再起動して、リポジトリを更新する必要があります。チャンネルを編集するには、次の手順を実行します。

1. 左ペインで、編集するチャンネルを見つけます。
2. チャンネルを右クリックし、「**編集**」を選択します。  
チャンネルの編集ペインが表示されます。
3. チャンネル構成に必要な変更を行い、「**終了**」をクリックします。

#### 2.9.1.5 チャンネルの削除

削除する前に、チャンネルを停止する必要があります。チャンネルを削除する場合、ランタイムの目的で Oracle WebLogic Server を再起動して、リポジトリを更新する必要があります。チャンネルを削除するには、次の手順を実行します。

1. 左ペインで、削除するチャンネルを見つけます。
2. チャンネルを右クリックし、「**削除**」を選択します。  
チャンネルが左ペインのリストから消えます。

### 2.9.2 スキーマの検証

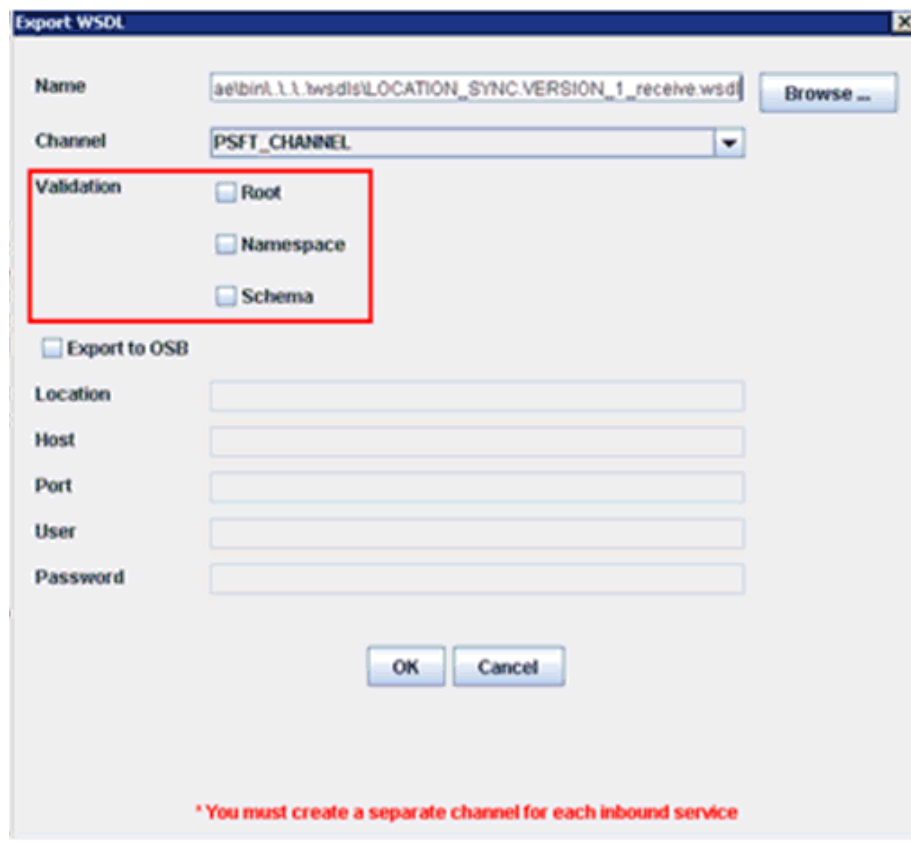
Oracle Application Adapter for PeopleSoft では、インバウンド処理 ( イベント ) のルート検証、ネームスペース検証およびスキーマ検証がサポートされています。

Oracle Application Adapter for PeopleSoft を使用してインバウンド処理を検証するには、次のステップを実行します。この手順では、インバウンド処理の例として LOCATION\_SYNC.VERSION\_1 PeopleSoft メッセージを使用しています。

1. アプリケーション・エクスプローラを起動します。
2. PeopleSoft ターゲットに接続します。
3. 「メッセージ」ノードを展開します。
4. PeopleSoft アダプタ用にチャンネルが作成されていることを確認します。
5. 「LOCATION\_SYNC.VERSION\_1」ノードを右クリックし、**インバウンド JCA サービスの作成 ( イベント )** を選択します。

図 2-27 に示すように、「WSDL のエクスポート」ダイアログが開き、「ルート」、「ネームスペース」および「スキーマ」の 3 つの検証のチェック・ボックスが表示されます。

図 2-27 「WSDL のエクスポート」 ダイアログ



- 複数の検証オプションを選択できます。
  - 「ルート」検証は、インバウンド XML ドキュメント内のルート要素の検証に使用します。
  - 「ネームスペース」検証は、インバウンド XML ドキュメント内のネームスペースの検証に使用します。
  - 「スキーマ」検証は、WSDL ドキュメント内のスキーマを使用したインバウンド XML ドキュメントの検証に使用します。
  - 実行時には、検証は選択された検証オプションに基づいて処理されます。
  - 複数の検証オプションが選択されている場合、実行時に最初の検証が失敗すると、残りの検証オプションは処理されません。
  - ルート検証およびネームスペース検証は、適度な検証レベルであるとみなされます。スキーマ検証はより厳しい検証レベルです。
  - ルート要素およびネームスペースが PeopleSoft 環境のメッセージ間で異ならないかぎり、ルート検証とネームスペース検証オプションを一緒に使用することをお勧めします。
6. WSDL ドキュメントを生成し、BPEL、メディエータ、BPM または OSB プロセスを作成します。
  7. PeopleTools 環境からトランザクション (メッセージ) をトリガーします。



---

## Oracle WebLogic Server のデプロイメント および統合

この章では、Oracle WebLogic Server (OracleWLS) の Oracle Application Adapter for PeopleSoft とのデプロイメントおよび統合について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 3.1 項「Oracle WebLogic Server とのアダプタの統合」
- 3.2 項「アダプタのデプロイメント」
- 3.3 項「アダプタ構成の更新」

**関連項目：**

- *Oracle Application Server Adapter* コンセプト・ガイド

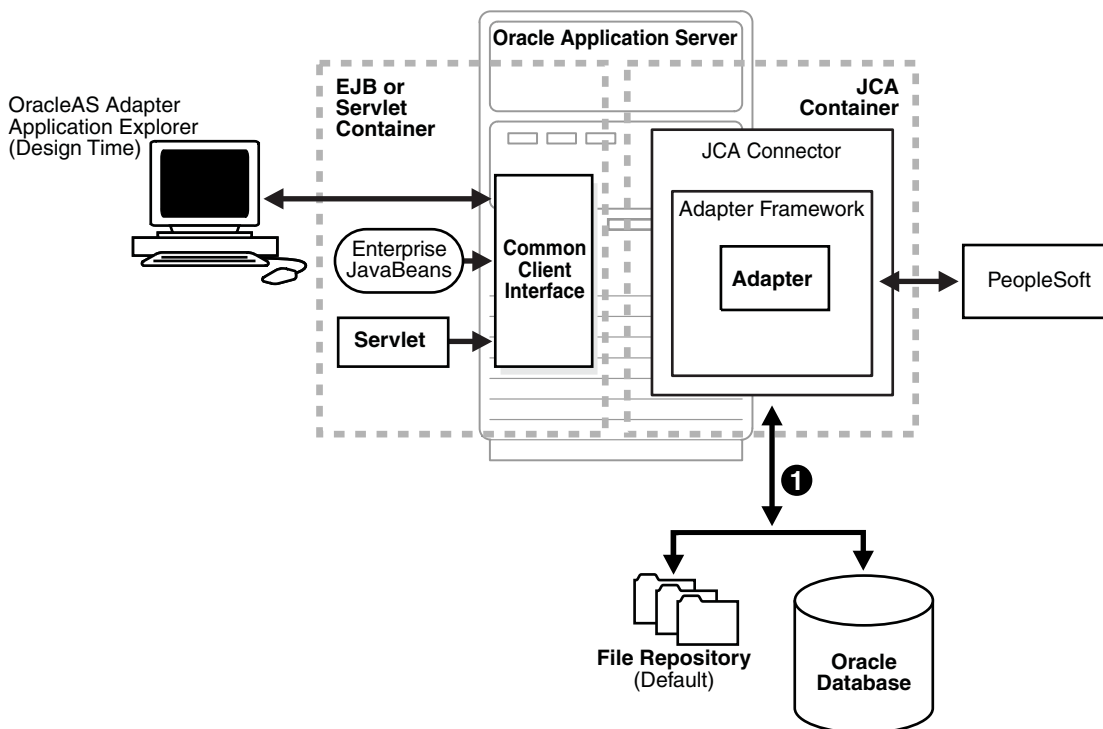
### 3.1 Oracle WebLogic Server とのアダプタの統合

Oracle Application Adapter for PeopleSoft は、インストール中に OracleWLS コンテナ内にデプロイされます。すべてのクライアント・アプリケーションは OracleWLS 環境で動作します。J2CA デプロイメントでは、Common Client Interface (CCI) インタフェースにより、OracleWLS クライアント・アプリケーションはリソース・アダプタと統合されます。

### 3.2 アダプタのデプロイメント

図 3-1 に、Oracle Application Server への J2CA コネクタのデプロイメントを示します。ランタイム・サービス・シナリオでは、Enterprise Java Bean、サーブレットまたは Java プログラム・クライアントによって、J2CA リソース・アダプタへの CCI コールが行われます。アダプタはこれらのコールをリクエストとして処理し、EIS に送信します。その後、EIS のレスポンスがクライアントに返信されます。

図 3-1 Oracle Application Server J2CA アーキテクチャ



① Use either the default file repository or an Oracle database as your repository.

### 3.3 アダプタ構成の更新

Oracle Application Adapter for PeopleSoft の J2CA デプロイメント中、OracleWLS により、次の場所に `ra.xml` と呼ばれるデプロイメント記述子が生成されます。

```
<ADAPTER_HOME>\iwafjca.rar\META-INF
```

インストールには、`ra.xml` という名前のファイルが 1 つ以上含まれています。この項で説明されている OracleWLS デプロイメント記述子は、前述のディレクトリ内にあります。

---

**注意：** 複数の管理対象接続ファクトリは、アウトバウンド処理 (サービス) の場合のみサポートされています。

---

この項では、次のトピックについて説明します。

- 3.3.1 項「管理対象コネクタ・ファクトリ・オブジェクトの作成」
- 3.3.2 項「複数の管理対象コネクタ・ファクトリ・オブジェクトの作成」
- 3.3.3 項「追加の接続ファクトリ値用の WSDL ファイルの変更」

#### 3.3.1 管理対象コネクタ・ファクトリ・オブジェクトの作成

`ra.xml` 記述子には、リソース・アダプタに関する OracleWLS 特定のデプロイメント情報が記載されます。たとえば、アプリケーション・エクスプローラ内の `jca_sample` 構成は、`ra.xml` ファイル内では次のように表現されます。

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!DOCTYPE connector PUBLIC "-//Sun Microsystems, Inc.//DTD Connector 1.0//EN"
'http://java.sun.com/dtd/connector_1_0.dtd'>
<connector>
  <display-name>IWAYJCA10</display-name>
  <vendor-name>IWAY Software</vendor-name>
  <spec-version>1.0</spec-version>
  <eis-type>IWAY</eis-type>
  <version>1.0</version>
  <license>
    <license-required>>false</license-required>
  </license>
  <resourceadapter>

  <managedconnectionfactory-class>com.ibi.afjca.spi.IWAYManagedConnectionFactory</ma
nagedconnectionfactory-class>

  <connectionfactory-interface>javax.resource.cci.ConnectionFactory</connectionfacto
ry-interface>

  <connectionfactory-impl-class>com.ibi.afjca.cci.IWAYConnectionFactory</connectionf
actory-impl-class>
    <connection-interface>javax.resource.cci.Connection</connection-interface>

  <connection-impl-class>com.ibi.afjca.cci.IWAYConnection</connection-impl-class>
    <transaction-support>NoTransaction</transaction-support>
    <config-property>
      <config-property-name>AdapterName</config-property-name>
      <config-property-type>java.lang.String</config-property-type>
      <config-property-value></config-property-value>
    </config-property>
    <config-property>
      <config-property-name>Config</config-property-name>
      <config-property-type>java.lang.String</config-property-type>
      <config-property-value></config-property-value>
    </config-property>
    <config-property>
      <config-property-name>IWayHome</config-property-name>
      <config-property-type>java.lang.String</config-property-type>
      <config-property-value>C:\oracle\Middleware\Oracle_
SOA1\soa\thirdparty\ApplicationAdapters</config-property-value>
    </config-property>
    <config-property>
      <config-property-name>IWayConfig</config-property-name>
      <config-property-type>java.lang.String</config-property-type>
      <config-property-value>jca_sample</config-property-value>
    </config-property>
    <config-property>
      <config-property-name>IWayRepoDriver</config-property-name>
      <config-property-type>java.lang.String</config-property-type>
      <config-property-value></config-property-value>
    </config-property>
    <config-property>
      <config-property-name>IWayRepoURL</config-property-name>
      <config-property-type>java.lang.String</config-property-type>
      <config-property-value></config-property-value>
    </config-property>
    <config-property>
      <config-property-name>IWayRepoUser</config-property-name>
      <config-property-type>java.lang.String</config-property-type>

```

```

    <config-property-value></config-property-value>
  </config-property>
<config-property>
  <config-property-name>IWayRepoPassword</config-property-name>
  <config-property-type>java.lang.String</config-property-type>
  <config-property-value></config-property-value>
</config-property>
<config-property>
  <config-property-name>LogLevel</config-property-name>
  <config-property-type>java.lang.String</config-property-type>
  <config-property-value>DEBUG</config-property-value>
</config-property>
<authentication-mechanism>
  <authentication-mechanism-type>BasicPassword</authentication-mechanism-type>

<credential-interface>javax.resource.spi.security.PasswordCredential</credential-i
nterface>
  </authentication-mechanism>
  <reauthentication-support>true</reauthentication-support>
</resourceadapter>
</connector>

```

ra.xml ファイルで定義されているパラメータを次の表に示します。

パラメータ名	説明
IWayHome	OracleWLS がパッケージされているアプリケーション・アダプタのベース・インストール・ディレクトリ。
IWayConfig	アプリケーション・エクスプローラで定義されているアダプタ構成名。たとえば、Oracle Application Adapter for PeopleSoft には、アプリケーション・エクスプローラで jca_sample 構成が事前定義されています。
IWayRepoURL	データベースへの接続を開くときに使用される URL。これは Oracle データベースをリポジトリとして使用する場合にのみ必要です。
IWayRepoUser	データベースに接続するときに使用されるユーザー名。これは Oracle データベースをリポジトリとして使用する場合にのみ必要です。
IWayRepoPassword	パスワード。指定された場合は、構成を上書きします。これは Oracle データベースをリポジトリとして使用する場合にのみ必要です。
loglevel	ManagedConnectorFactory プロパティによって設定されるレベルを上書きします。

### 3.3.2 複数の管理対象コネクタ・ファクトリ・オブジェクトの作成

複数の管理対象コネクタ・ファクトリ・オブジェクトを作成するには、weblogic-ra.xml ファイルを編集し、さらに <connection-instance> ノードを追加します。このファイルは次の場所にあります。

```
<ADAPTER_HOME>\iwafjca.rar\META-INF
```

たとえば、アプリケーション・エクスプローラ内の最初の jca\_configuration は weblogic-ra.xml ファイルでは次のように表現されます。

```
<?xml version="1.0"?>
<weblogic-connector xmlns="http://www.bea.com/ns/weblogic/90">
  <enable-access-outside-app>true</enable-access-outside-app>
  <enable-global-access-to-classes>true</enable-global-access-to-classes>
  <outbound-resource-adapter>
    <default-connection-properties>
      <pool-params>
        <initial-capacity>0</initial-capacity>
      </pool-params>
      <transaction-support>LocalTransaction</transaction-support>
    </default-connection-properties>
    <connection-definition-group>

<connection-factory-interface>javax.resource.cci.ConnectionFactory</connection-factory-interface>
  <connection-instance>
    <jndi-name>eis/OracleJCAAdapter/DefaultConnection</jndi-name>
  </connection-instance>
</connection-definition-group>
</outbound-resource-adapter>
</weblogic-connector>
```

複数の管理対象コネクタ・ファクトリ・オブジェクトを作成するには、新規の <connection-instance> ノードをファイルに追加する必要があります。次に例を示します。

```
<?xml version="1.0"?>
<weblogic-connector xmlns="http://www.bea.com/ns/weblogic/90">

  <enable-access-outside-app>true</enable-access-outside-app>
  <enable-global-access-to-classes>true</enable-global-access-to-classes>

  <outbound-resource-adapter>
    <default-connection-properties>
      <pool-params>
        <initial-capacity>0</initial-capacity>
      </pool-params>
      <transaction-support>LocalTransaction</transaction-support>
    </default-connection-properties>
    <connection-definition-group>

<connection-factory-interface>javax.resource.cci.ConnectionFactory</connection-factory-interface>
  <connection-instance>
    <jndi-name>eis/OracleJCAAdapter/DefaultConnection</jndi-name>
  </connection-instance>
  <connection-instance>
    <jndi-name>eis/OracleJCAAdapter/DefaultConnection1</jndi-name>
    <connection-properties>
      <properties>
        <property>
<name>IWayHome</name>
<value>C:\oracle\Middleware\Oracle_SOA1\soa\thirdparty\ApplicationAdapters</value>
        </property>
        <property>
<name>IWayConfig</name>
<value>jca_sample2</value>
        </property>
        <property>
<name>IWayRepoURL</name>
```

```

<value></value>
  </property>
  <property>
    <name>IWayRepoUser</name>
    <value></value>
  </property>
  <property>
    <name>IWayRepoPassword</name>
    <value></value>
  </property>
  <property>
    <name>LogLevel</name>
    <value>Debug</value>
  </property>
</properties>
</connection-properties>
</connection-instance>
</connection-definition-group>
</outbound-resource-adapter>
</weblogic-connector>

```

<connection-instance> セクションで <property> 要素を指定しない場合、ra.xml ファイルから値が取得されます。必要に応じて、ra.xml ファイルでデフォルトのプロパティを指定し、weblogic-ra.xml ファイルの値をオーバーライドできます。また、J2CA 構成 (「jca\_sample2」など) が、アプリケーション・エクスペローラ内で作成済である必要があります。

---

**注意：** ra.xml および weblogic-ra.xml ファイルを変更するとき、アプリケーション・サーバーを再起動する必要があります。アプリケーション・サーバーがすでに実行されている場合は、一度停止し、再起動してください。

また、iwafjca.rar ファイルを Oracle WebLogic 管理コンソールに再デプロイして、これらの変更をアクティブ化する必要もあります。

---

### 3.3.3 追加の接続ファクトリ値用の WSDL ファイルの変更

アプリケーション・エクスペローラでは、eis/OracleJCAAdapter/DefaultConnection という名前のデフォルトの接続ファクトリを使用して J2CA プロパティ・ファイルが生成されます。追加の接続ファクトリを作成した場合は、J2CA プロパティ・ファイル内の jca:address セクションのロケーション・フィールドを反映するように、追加の構成および接続ファクトリ用に生成された WSDL を変更する必要があります。isdsrv2\_conn2 構成が含まれている Oracle Application Adapter for PeopleSoft 用のデフォルトの J2CA プロパティ・ファイルを次の例に示します。

J2CA プロパティ・ファイルに、次のデフォルトの接続ファクトリが含まれていることがわかります。eis/OracleJCAAdapter/DefaultConnection

```

<jca:address location="eis/OracleJCAAdapter/DefaultConnection"
  ConnectionSpec="com.ibi.afjca.cci.IWAFConnectionSpec"
  cs.AdapterName="PeopleSoft" cs.Config="isdsrv2_conn2"
  UIConnectionName="Connection1"/>

```

この接続ファクトリ値を次の値に変更する必要があります。  
eis/OracleJCAAdapter/DefaultConnection1

次に例を示します。

```
<jca:address location="eis/OracleJCAAdapter/DefaultConnection1"
              ConnectionSpec="com.ibi.afjca.cci.IWAFConnectionSpec"
              cs.AdapterName="PeopleSoft" cs.Config="isdsrv2_conn2"
              UIConnectionName="Connection1"/>
```

`jca:address` セクションのロケーション・フィールドの値のみ変更可能です。その他のフィールドまたはセクションは変更しないでください。





---

## Oracle SOA Suite での BPEL サービス・コンポーネントの統合

Oracle Application Adapter for PeopleSoft には、Oracle Business Process Execution Language (BPEL) Process Manager がシームレスに統合されており、Web サービスの統合を容易にします。Oracle BPEL Process Manager は、サービス指向アーキテクチャ (SOA) に基づいています。Web Service Definition Language (WSDL) ドキュメントとして公開されているアダプタ・サービスを使用します。

この章の内容は次のとおりです。

- [4.1 項「概要」](#)
- [4.2 項「アダプタのデプロイメント」](#)
- [4.3 項「新規のアプリケーション・サーバー接続の構成」](#)
- [4.4 項「サービス統合のためのアウトバウンド BPEL プロセスの設計 \(J2CA 構成\)」](#)
- [4.5 項「イベント統合のためのインバウンド BPEL プロセスの設計 \(J2CA 構成\)」](#)
- [4.6 項「サービス統合のためのアウトバウンド BPEL プロセスの設計 \(BSE 構成\)」](#)

### 4.1 概要

Oracle SOA Suite と統合するには、Oracle Application Adapter for PeopleSoft が Oracle BPEL Process Manager と同じ WLS コンテナにデプロイされている必要があります。また、基になるアダプタ・サービスは、アダプタのリクエスト/レスポンス (アウトバウンド) とイベント通知 (インバウンド) の両方のサービス用に Oracle Application Adapter アプリケーション・エクスプローラ (アプリケーション・エクスプローラ) でデザインタイム中に生成される WSDL ファイルとして公開される必要があります。詳細は、[第 2 章「Oracle Application Adapter for PeopleSoft 構成」](#) を参照してください。

生成された WSDL ファイルは、インバウンドまたはアウトバウンド・アダプタ・サービスにそれぞれ適切な BPEL プロセスの設計に使用されます。完成した BPEL プロセスは、JDeveloper で正常にコンパイルされ、SOA サーバーにデプロイされる必要があります。SOA サーバーへのデプロイメント後すぐに、新規構築されたプロセスはすべて自動的に Oracle Enterprise Manager Console にデプロイされ、BPEL プロセスの実行、監視、管理、およびアダプタ・イベントのリスニングを行うことができます。

## 4.2 アダプタのデプロイメント

インストール中、Oracle Application Adapter for PeopleSoft は、WLS コンテナ内の J2CA 1.0 リソース・アダプタとしてデプロイされます。アダプタは Oracle BPEL Process Manager と同じ WLS コンテナ内にデプロイされる必要があります。

## 4.3 新規のアプリケーション・サーバー接続の構成

Oracle JDeveloper で新規のアプリケーション・サーバー接続を構成するには、次の手順を実行します。

1. システムで **Oracle JDeveloper** を開きます。
2. 図 4-1 に示すように、メニュー・バーで、「ウィンドウ」をクリックし、「アプリケーション・サーバー・ナビゲータ」を選択します。

図 4-1 アプリケーション・サーバー・ナビゲータ

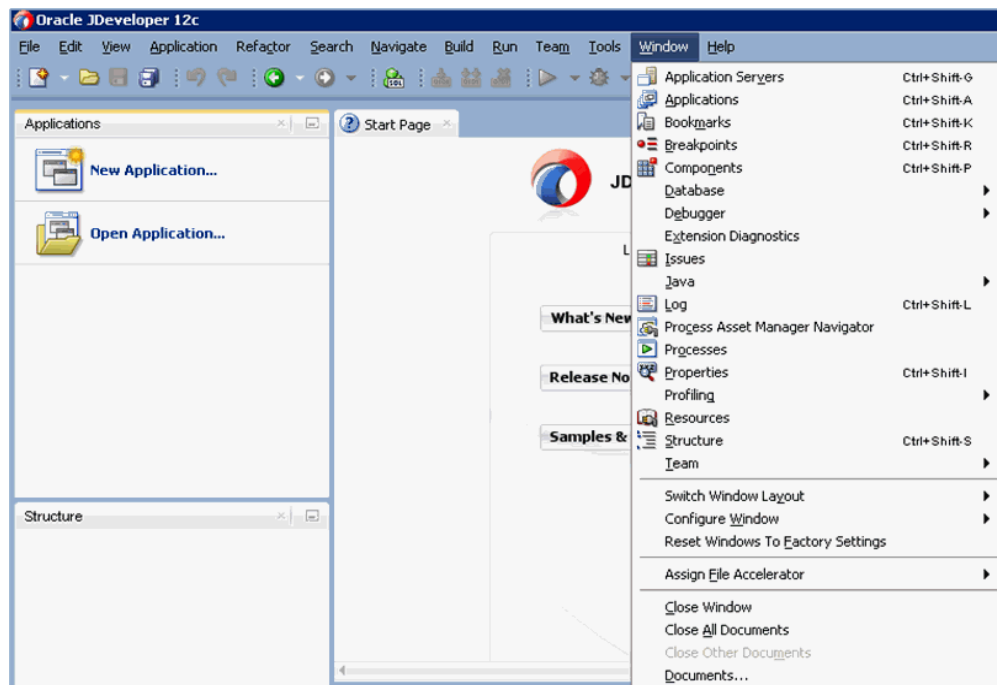
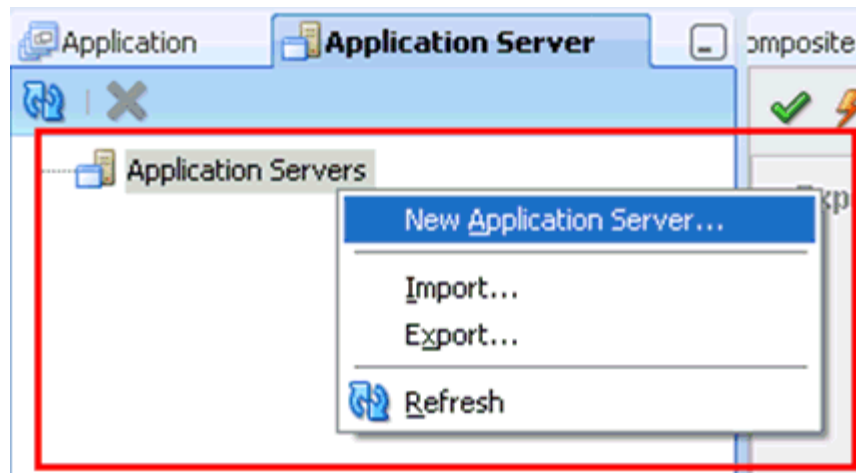


図 4-2 に示すように、「アプリケーション・サーバー」タブが表示されます。

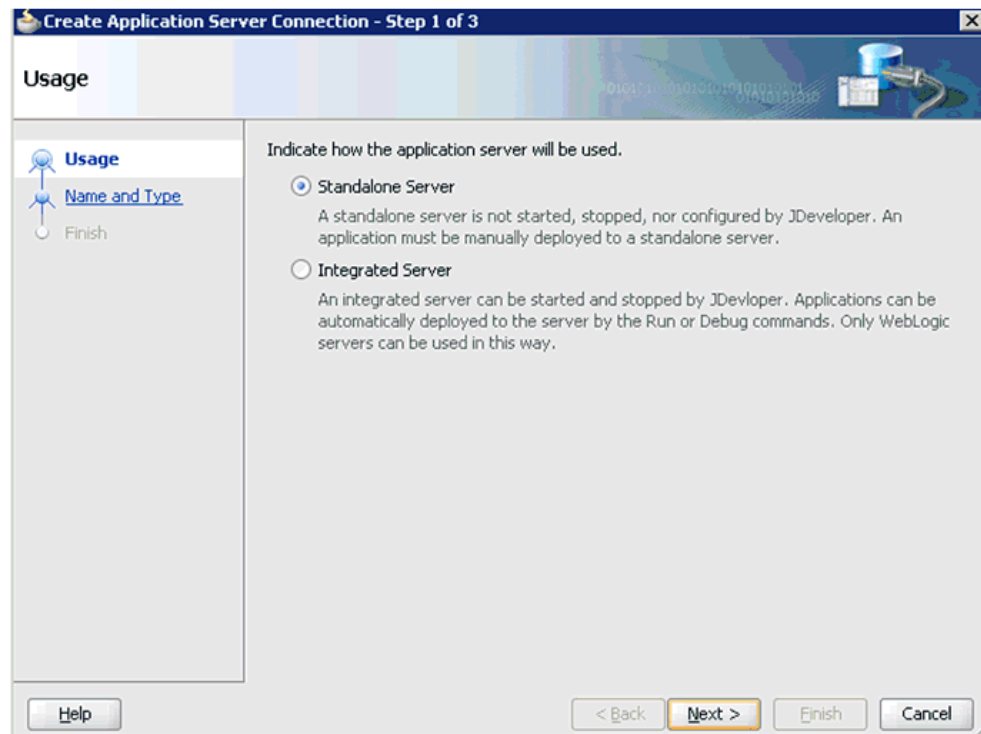
図 4-2 「アプリケーション・サーバー」タブ



3. 「アプリケーション・サーバー」を右クリックし、「新規アプリケーション・サーバー」を選択します。

図 4-3 に示すように、「アプリケーション・サーバー接続の作成」ウィザードが表示されます。

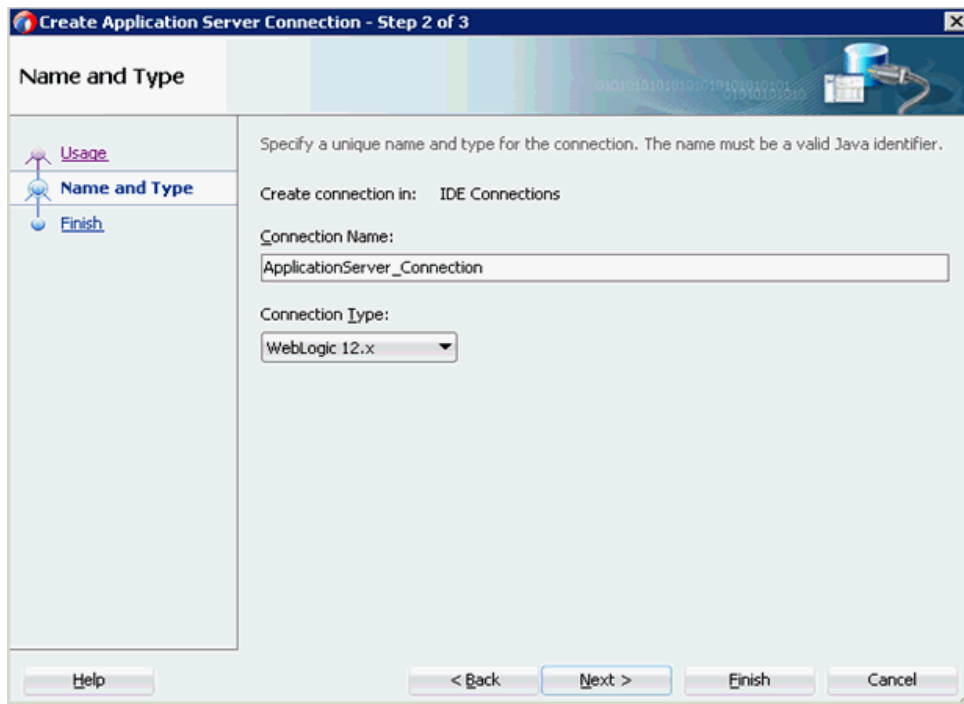
図 4-3 アプリケーション・サーバー接続の作成ウィザード



4. デフォルト選択 (スタンドアロン・サーバー) を受け入れ、「次へ」をクリックします。

図 4-4 に示すように、「名前とタイプ」ページが表示されます。

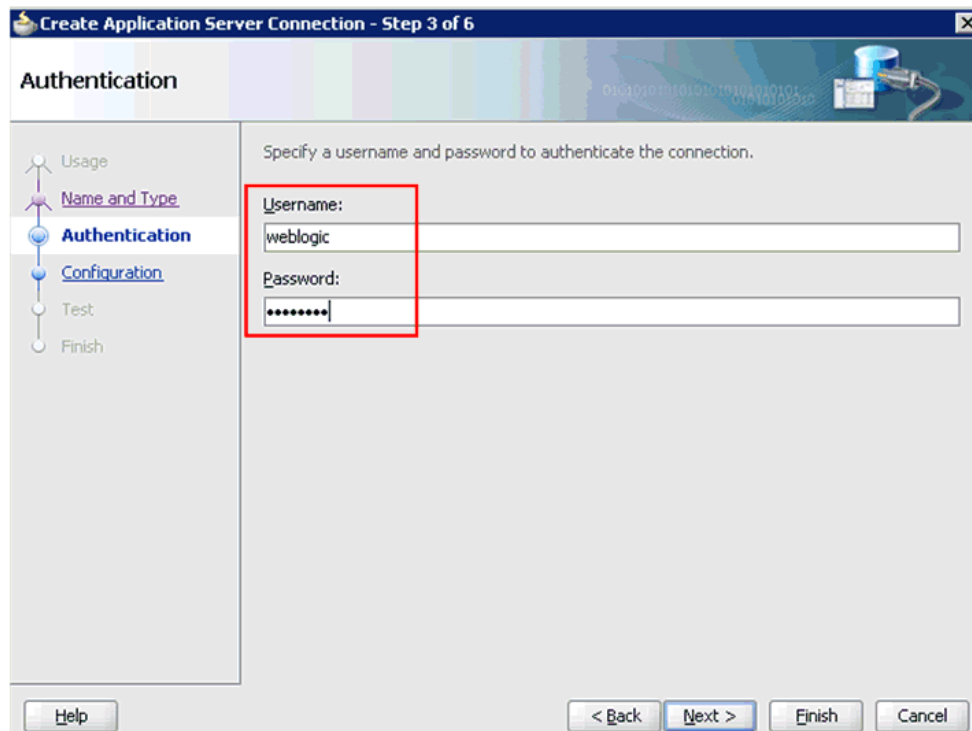
図 4-4 「名前とタイプ」 ページ



5. アプリケーション・サーバー接続の新規の名前を指定し、「次へ」をクリックします。

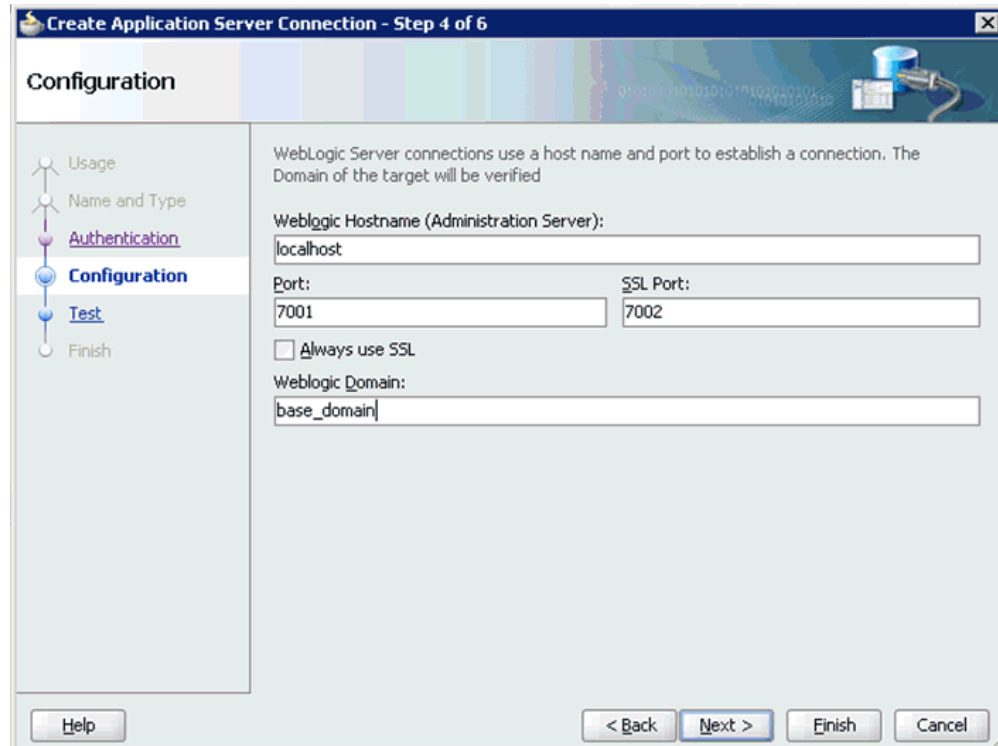
図 4-5 に示すように、「認証」 ページが表示されます。

図 4-5 「認証」 ページ



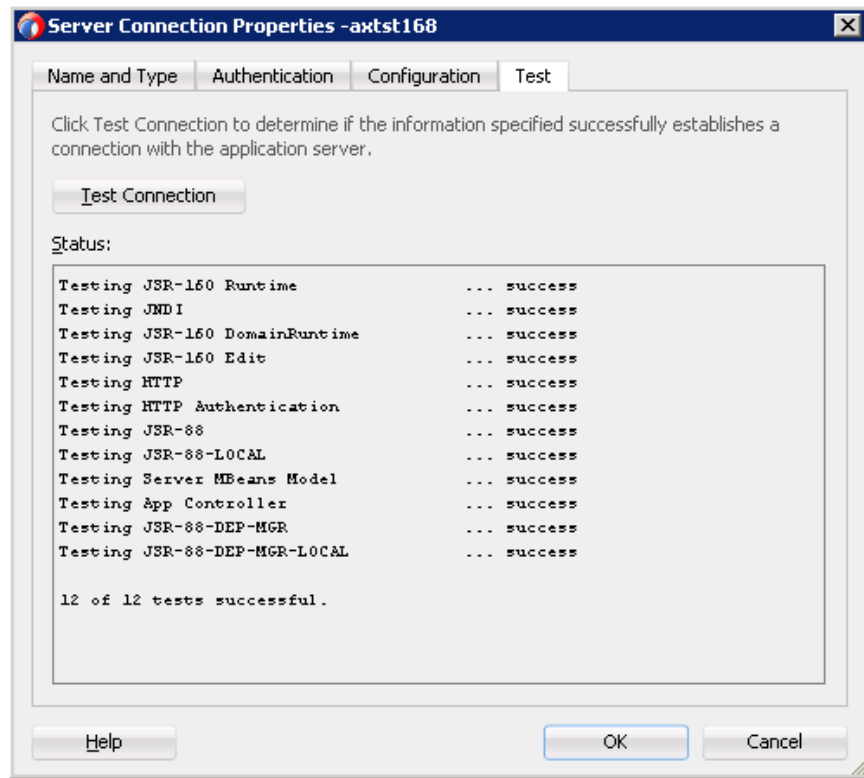
6. 新規の接続用のユーザー名 (「weblogic」など) およびパスワード (「welcome1」など) を指定します。
7. 「次へ」をクリックします。  
図 4-6 に示すように、「構成」ページが表示されます。

図 4-6 「構成」ページ



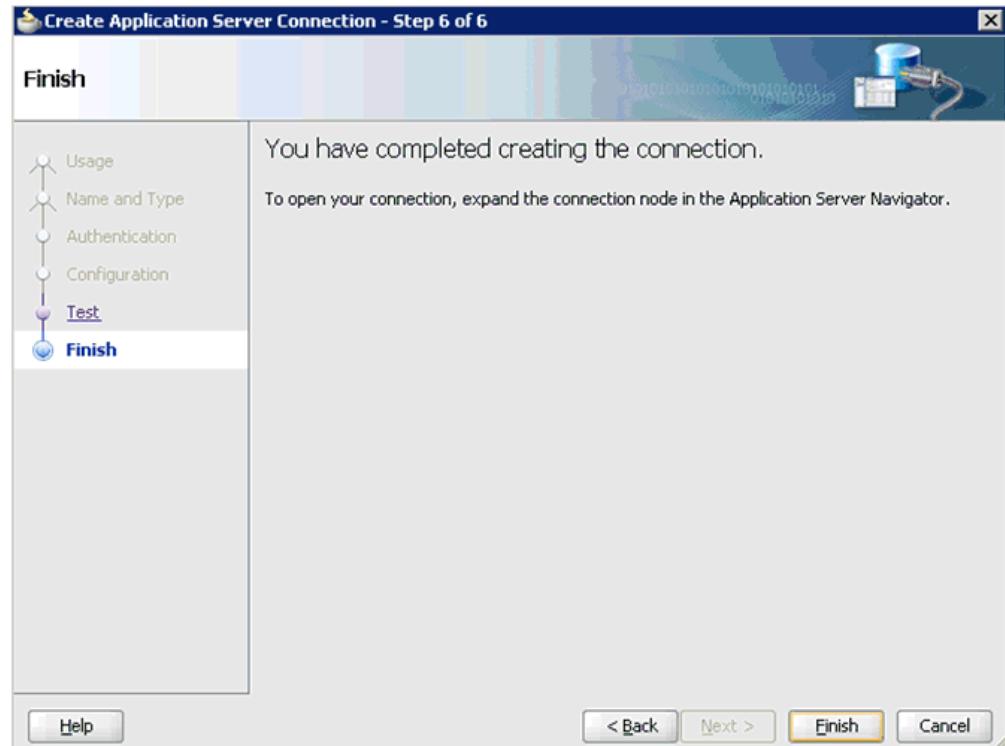
8. Oracle WebLogic のホスト名を指定します (「localhost」など)。これは、プロセスのデプロイが必要なシステム IP および Oracle WebLogic ドメインです (「base\_domain」など)。
9. 「次へ」をクリックします。  
図 4-7 に示すように、「テスト」ページが表示されます。

図 4-7 「テスト」 ページ



10. 「接続のテスト」をクリックします。
11. テストのステータスが成功であることを確認します。
12. 「次へ」をクリックします。  
図 4-8 に示すように、「終了」ページが表示されます。

図 4-8 「終了」 ページ



13. 「終了」をクリックします。

新規のアプリケーション・サーバー接続が左ペイン(「アプリケーション・サーバー」タブ)に表示されます。

## 4.4 サービス統合のためのアウトバウンド BPEL プロセスの設計 (J2CA 構成)

この項では、サービス統合のためのアウトバウンド BPEL プロセスの設計方法について説明します。

このアウトバウンド・ユース・ケース・シナリオ用のサンプル・プロジェクトが、次に示す Application Adapter のインストール・フォルダに用意されています。

```
<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\BPEL\J2CA\Outbound_Project
```

アダプタのデザインタイム構成を完了するには、次のツールが必要です。

- Oracle Adapter アプリケーション・エクスプローラ (アプリケーション・エクスプローラ)
- Oracle JDeveloper BPEL デザイナ (JDeveloper)

---

**注意：** この章に記載されている例では JDeveloper が使用されていません。

---

BPEL プロセスを設計する前に、アプリケーション・エクスプローラを使用して、スキーマを作成し、各 WSDL ファイルを生成する必要があります。詳細は、4-8 ページ「リクエスト/レスポンス型のサービス用の WSDL の生成」を参照してください。

この項では、次のトピックについて説明します。

- 4.4.1 項「リクエスト/レスポンス型のサービス用の WSDL の生成」
- 4.4.2 項「SOA 用の空のコンポジットの作成」
- 4.4.3 項「BPEL アウトバウンド・プロセスの定義」
- 4.4.4 項「BPEL アウトバウンド・プロセスのデプロイ」
- 4.4.5 項「Oracle Enterprise Manager Console での入力 XML ドキュメントの起動」
- 4.4.6 項「アウトバウンド BPEL およびアウトバウンド・メディエータ・プロセスのテスト」

#### 4.4.1 リクエスト/レスポンス型のサービス用の WSDL の生成

アプリケーション・エクスプローラでアウトバウンド相互作用のための WSDL を生成するには、次の手順を実行します。

1. アプリケーション・エクスプローラを起動し、定義済の PeopleSoft ターゲットに接続するか、または新規ターゲットを作成します。  
詳細は、2-5 ページ「PeopleSoft へのターゲットの定義」を参照してください。
2. 「コンポーネント インターフェイス」を展開し、LOCATION を選択します。
3. 図 4-9 に示すように、操作にナビゲートして右クリックし、アウトバウンド JCA サービスの作成 (リクエスト/レスポンス) を選択します。

図 4-9 アウトバウンド JCA サービスの作成 (リクエスト/レスポンス) オプション

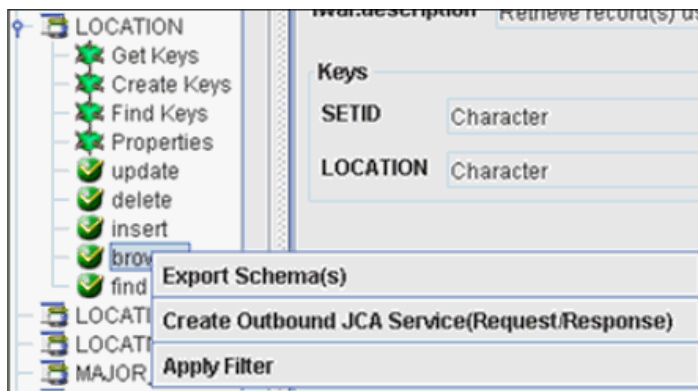
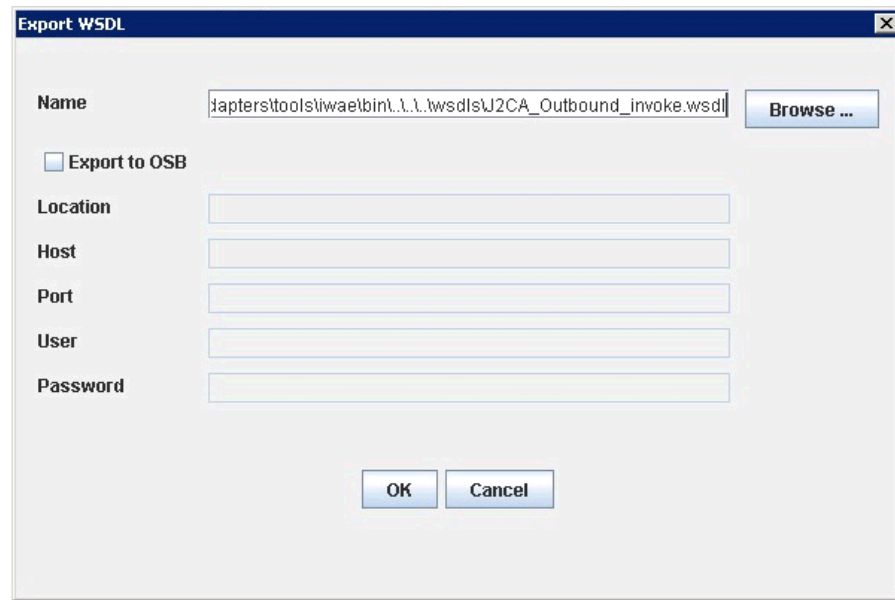


図 4-10 に示すように、「WSDL のエクスポート」ダイアログが表示されます。



図 4-10 「WSDL のエクスポート」ダイアログ



4. ファイル・システム上のエクスポートの位置を指定するか、またはデフォルトのパスを選択します。

.wsdl ファイル拡張子が自動的に追加されます。デフォルトでは、リクエスト/レスポンス型のサービス用に生成された WSDL ファイルの名前の末尾には「\_invoke」が付きます。

5. 「OK」をクリックします。

これで、JDeveloper での BPEL アウトバウンド・プロセスの定義に必要な最初のステップである、新規の SOA アプリケーションを作成する準備ができました。

#### 4.4.2 SOA 用の空のコンポジットの作成

SOA 用に空のコンポジットを作成するには、次のステップを実行します。

1. 新規の SOA アプリケーションを作成します。
2. 図 4-11 に示すように、新規の SOA アプリケーションの名前を入力し、「次へ」をクリックします。

図 4-11 「アプリケーションの名前付け」 ページ

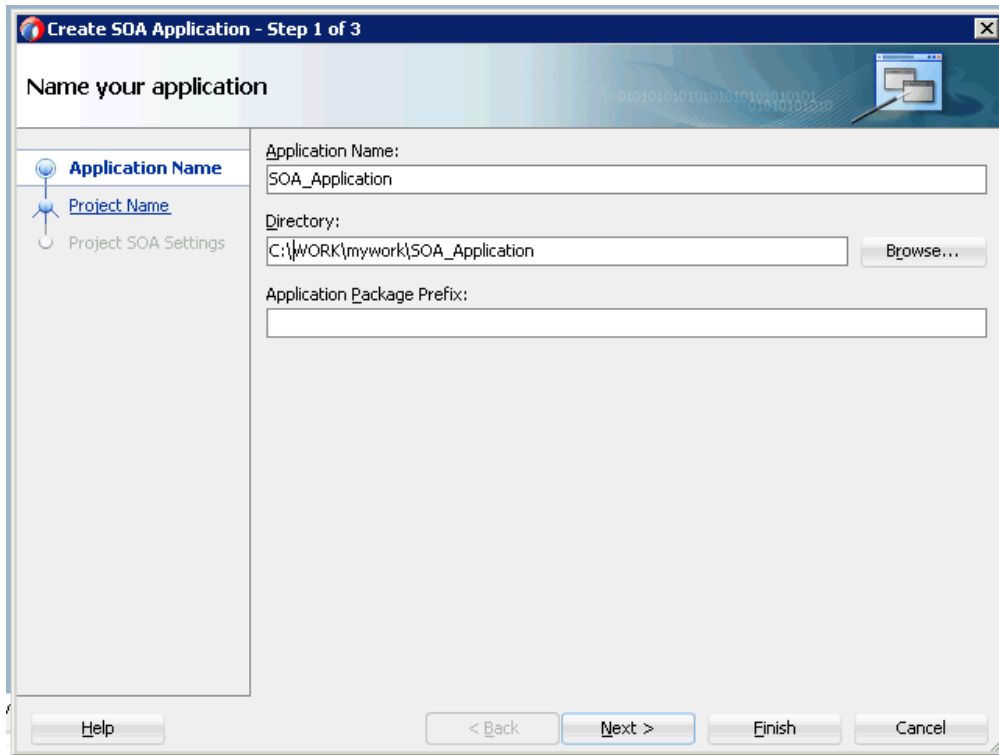
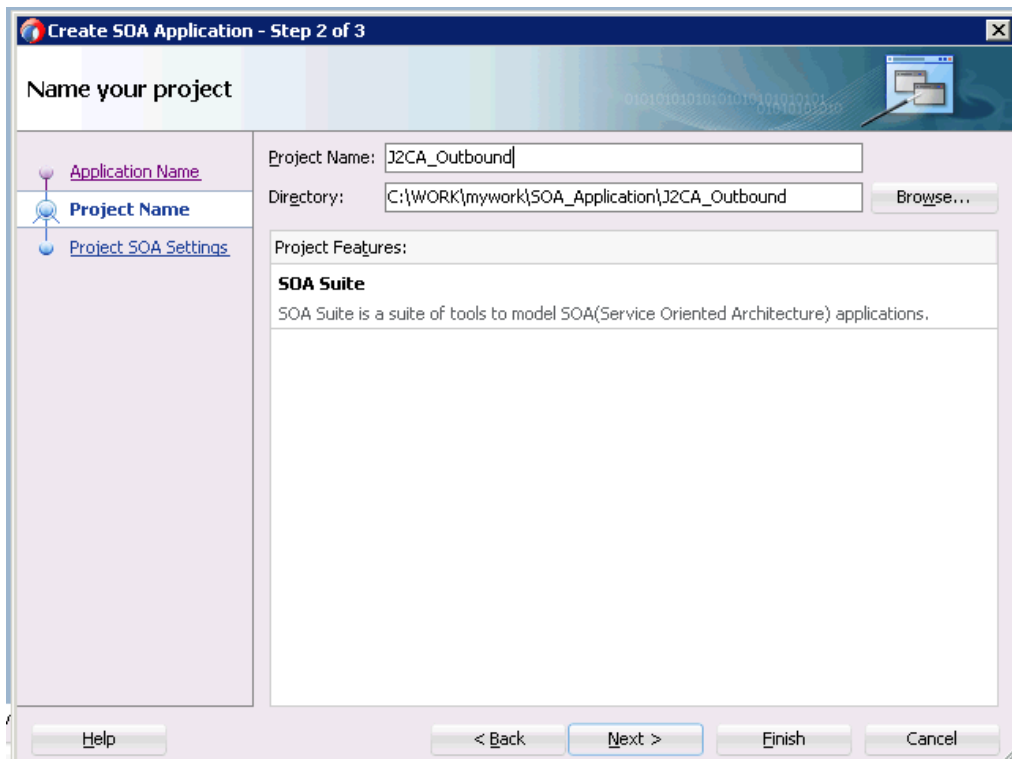


図 4-12 に示すように、「プロジェクトの名前付け」 ページが表示されます。

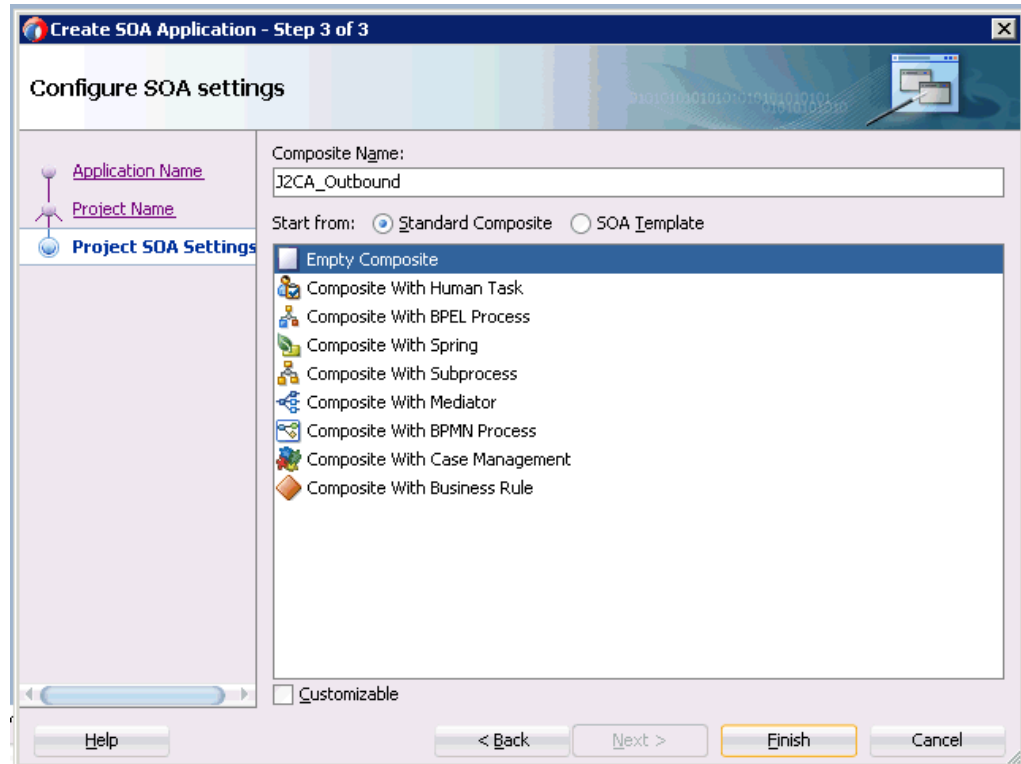
図 4-12 「プロジェクトの名前付け」 ページ



- プロジェクト名を入力し、「次へ」をクリックします。

図 4-13 に示すように、SOA 設定の構成ページが表示されます。

図 4-13 SOA 設定の構成ページ



- 「コンポジット・テンプレート」リストで「空のコンポジット」を選択し、「終了」をクリックします。

### 4.4.3 BPEL アウトバウンド・プロセスの定義

この項では、BPEL アウトバウンド・プロセスの定義方法について説明します。次のトピックで構成されています。

- 4.4.3.1 項「サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成」
- 4.4.3.2 項「アウトバウンド BPEL プロセス・コンポーネントの構成」
- 4.4.3.3 項「12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応」

#### 4.4.3.1 サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成

サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントを作成するには、次のステップを実行します。

- 図 4-14 に示すように、「サービス・アダプタ」ペインから「サード・パーティ・アダプタ」コンポーネントを「外部参照」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

図 4-14 「サード・パーティ・アダプタ」コンポーネント

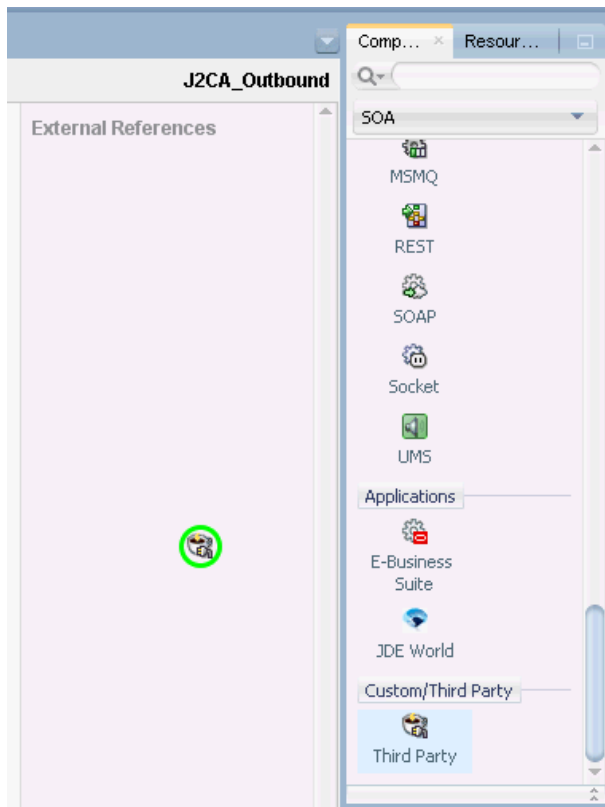
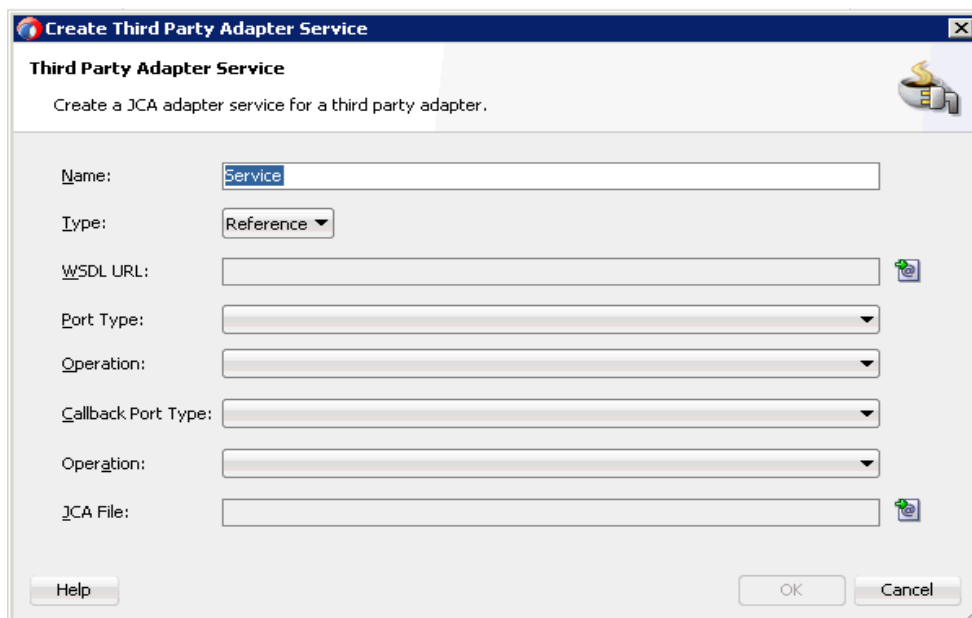


図 4-15 に示すように、「サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成」ダイアログが表示されます。

図 4-15 「サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成」ダイアログ

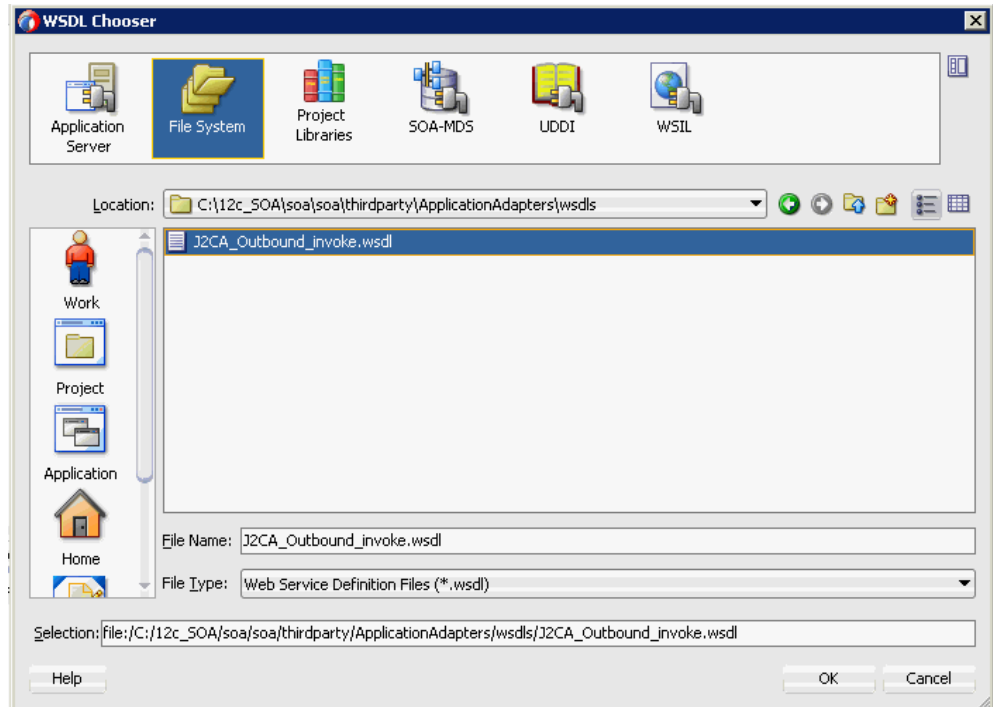


2. 「タイプ」リストで「参照」が選択されていることを確認します (デフォルト)。

3. 「WSDL URL」 フィールドの右にある**既存の WSDL を検索**アイコンをクリックします。

図 4-16 に示すように、「WSDL チューザ」ダイアログが表示されます。

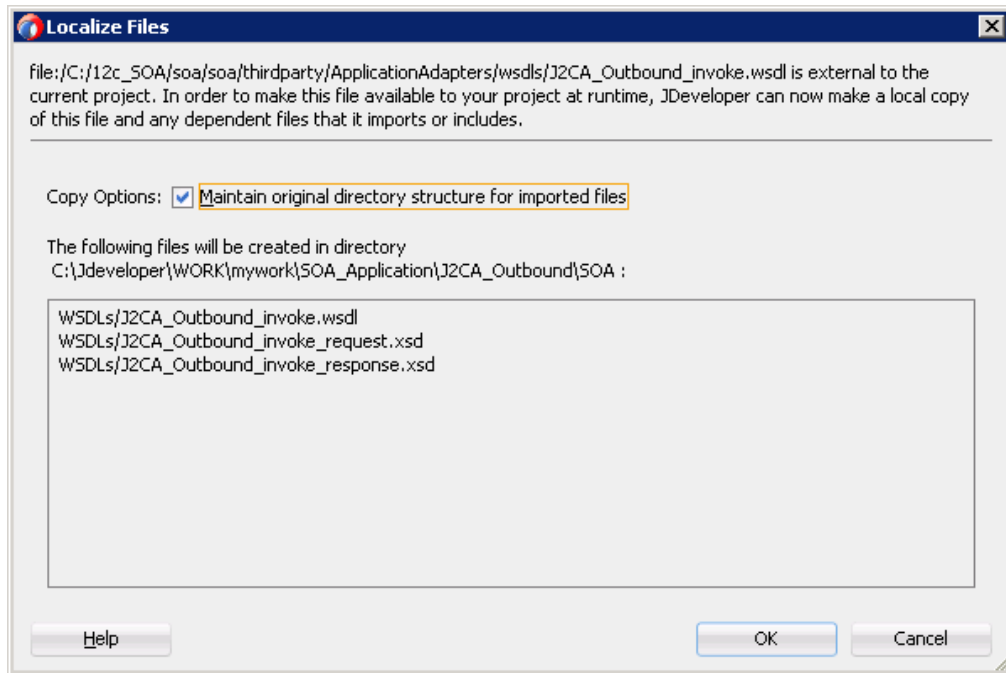
図 4-16 「WSDL チューザ」ダイアログ



4. 次のディレクトリまでブラウズし、アウトバウンド WSDL ファイルを選択します。  
<ADAPTER\_HOME>\wsdl
5. 「OK」をクリックします。

図 4-17 に示すように、「ファイルのローカライズ」ダイアログが表示されます。

図 4-17 「ファイルのローカライズ」 ダイアログ

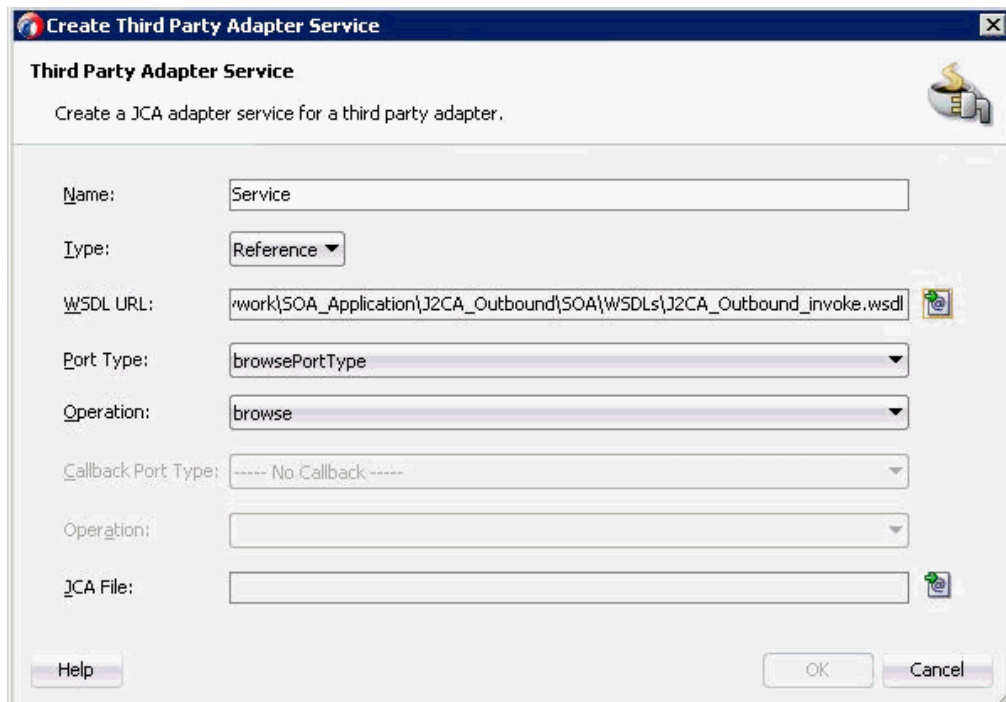


6. 「OK」をクリックします。

アウトバウンド WSDL ファイルおよび関連リクエスト/レスポンス XML スキーマ・ファイル (.xsd) が、作成済のプロジェクト・フォルダにインポートされます。

図 4-18 に示すように、「サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成」ダイアログに戻ります。

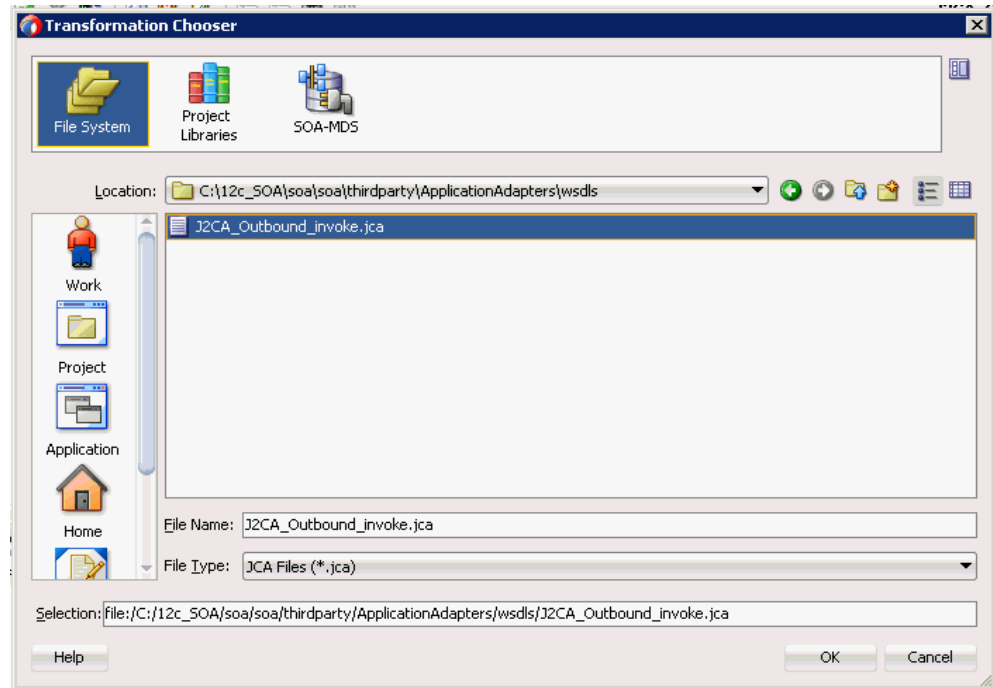
図 4-18 「サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成」 ダイアログ



- 「JCA ファイル」フィールドの右にある **JCA ファイルを検索** アイコンをクリックします。

図 4-19 に示すように、変換チューザ・ダイアログが表示されます。

図 4-19 変換チューザ・ダイアログ



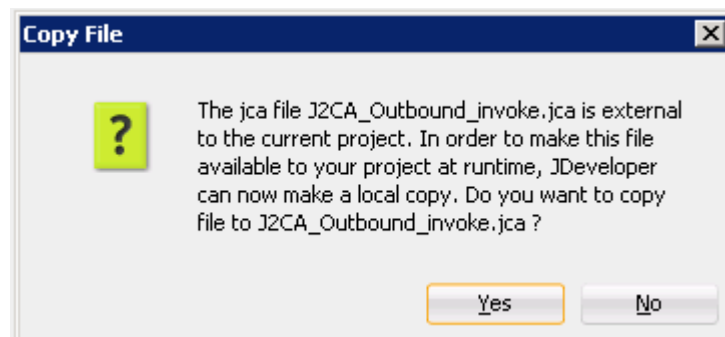
- 次のディレクトリまでブラウズし、JCA プロパティ・ファイルを選択します。

<ADAPTER\_HOME>\wsdls

- 「OK」をクリックします。

図 4-20 に示すように、「ファイルのコピー」メッセージが表示されます。

図 4-20 「ファイルのコピー」メッセージ

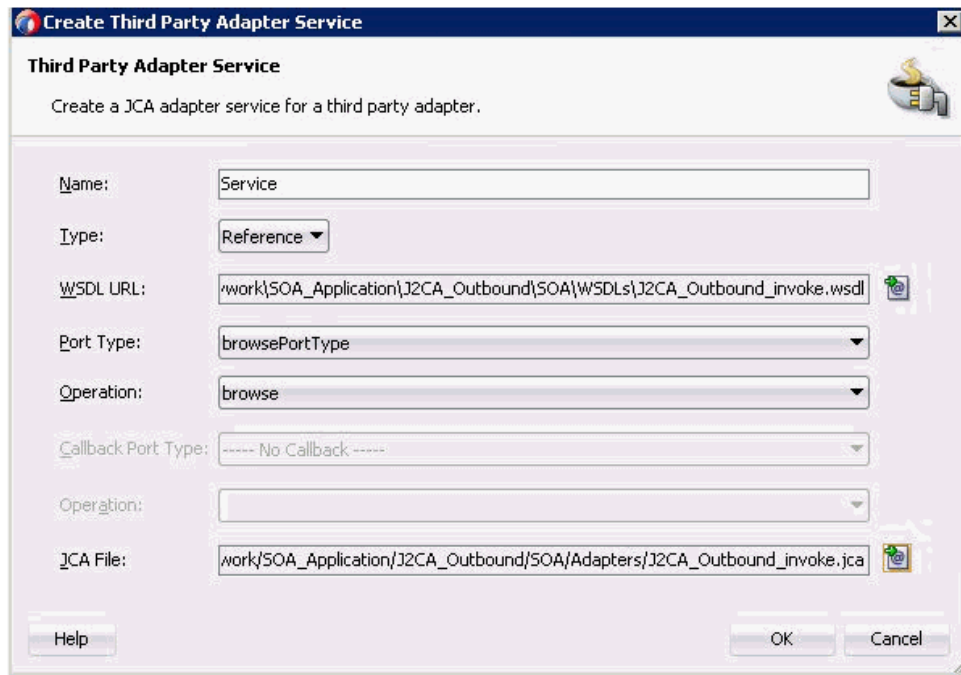


- 「はい」をクリックします。

JCA プロパティ・ファイルのコピーがプロジェクト・フォルダ内に作成されます。

図 4-21 に示すように、「サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成」ダイアログに戻ります。

図 4-21 「サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成」ダイアログ



11. 「OK」をクリックします。

サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントが作成され、「外部参照」ペインに表示されます。

これで、アウトバウンド BPEL プロセス・コンポーネントを構成する準備ができました。

#### 4.4.3.2 アウトバウンド BPEL プロセス・コンポーネントの構成

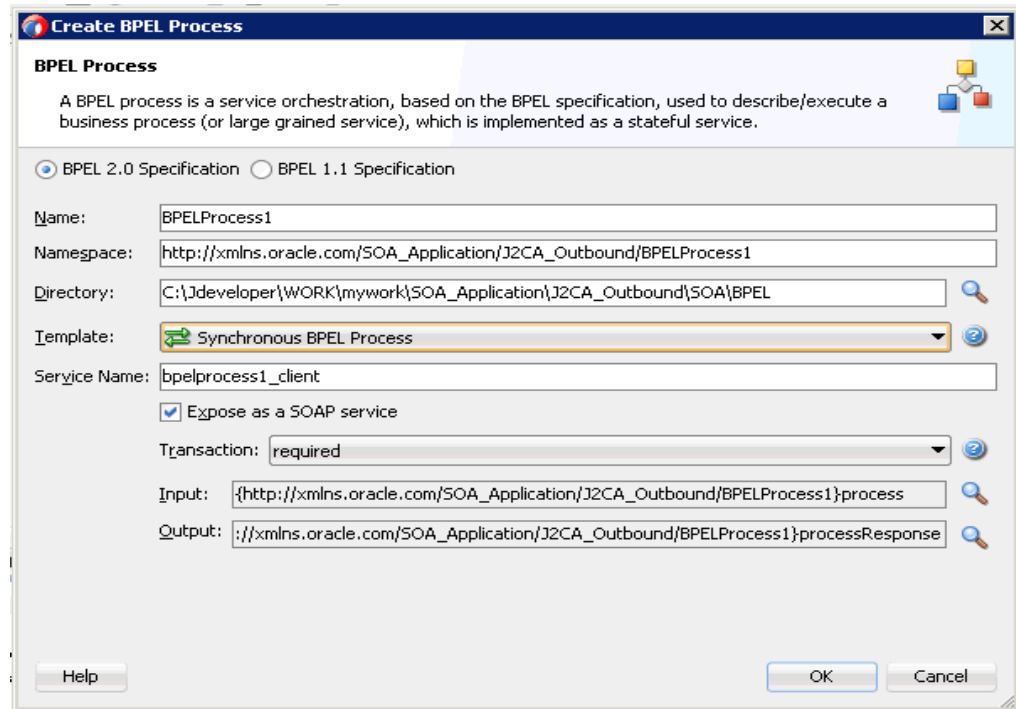
アウトバウンド BPEL プロセス・コンポーネントを構成するには、次のステップを実行します。

1. 「コンポーネント」ペインから「BPEL プロセス」コンポーネントを「コンポーネント」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

図 4-22 に示すように、「BPEL プロセスの作成」ダイアログが表示されます。

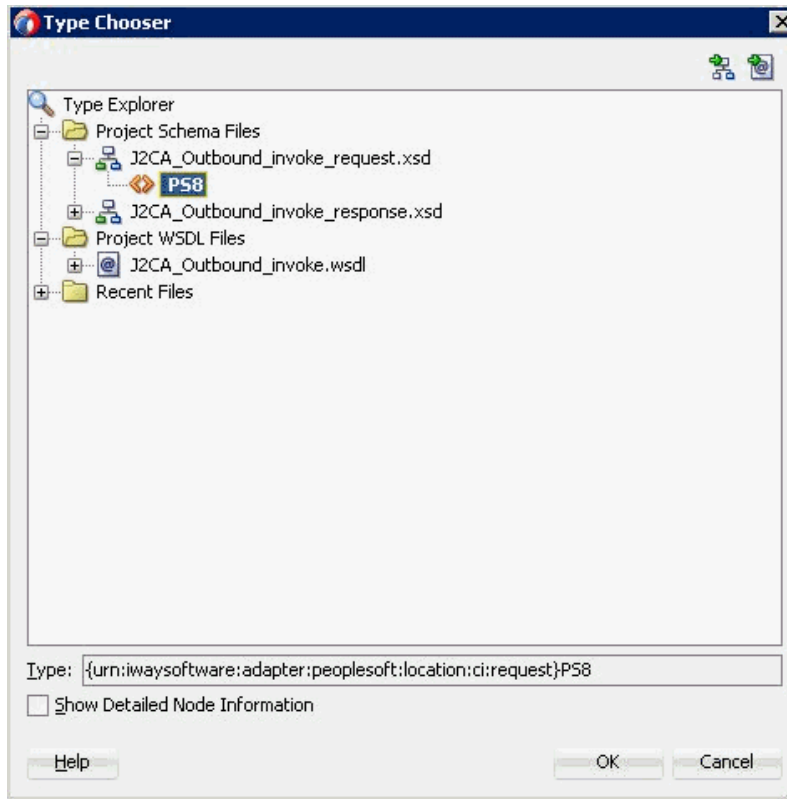


図 4-22 「BPEL プロセスの作成」 ダイアログ



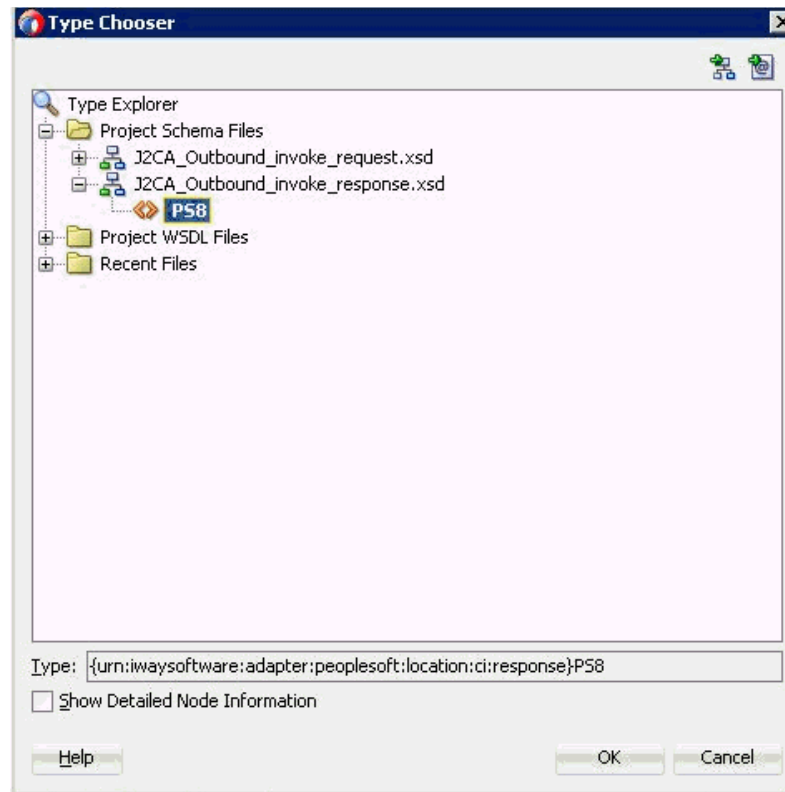
2. 「名前」フィールドで、新規のアウトバウンド BPEL プロセス・コンポーネントの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。  
デフォルトでは、「BPEL 2.0 仕様」オプションが選択されます。
3. 「テンプレート」リストで、「同期 BPEL プロセス」を選択します。
4. 関連する XML リクエスト・スキーマ・ファイルの選択用の「入力」フィールドの右にある「参照」アイコンをクリックします。  
図 4-23 に示すように、「タイプ・チューザ」ダイアログが表示されます。

図 4-23 「タイプ・チューザ」ダイアログ



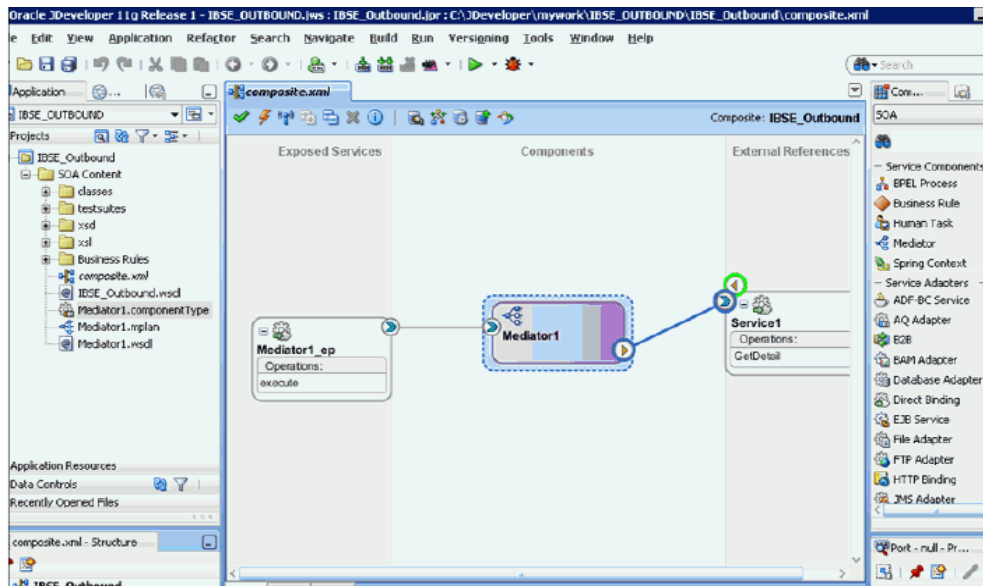
5. 「プロジェクトのスキーマ・ファイル」、「J2CA\_Outbound\_invoke\_request.xsd」の順に展開し、「PS8」を選択します。
6. 「OK」をクリックします。  
「BPEL プロセスの作成」ダイアログに戻ります。
7. 関連する XML レスポンス・スキーマ・ファイルの選択用の「出力」フィールドの右にある「参照」アイコンをクリックします。  
図 4-24 に示すように、「タイプ・チューザ」ダイアログが表示されます。

図 4-24 「タイプ・チューザ」ダイアログ



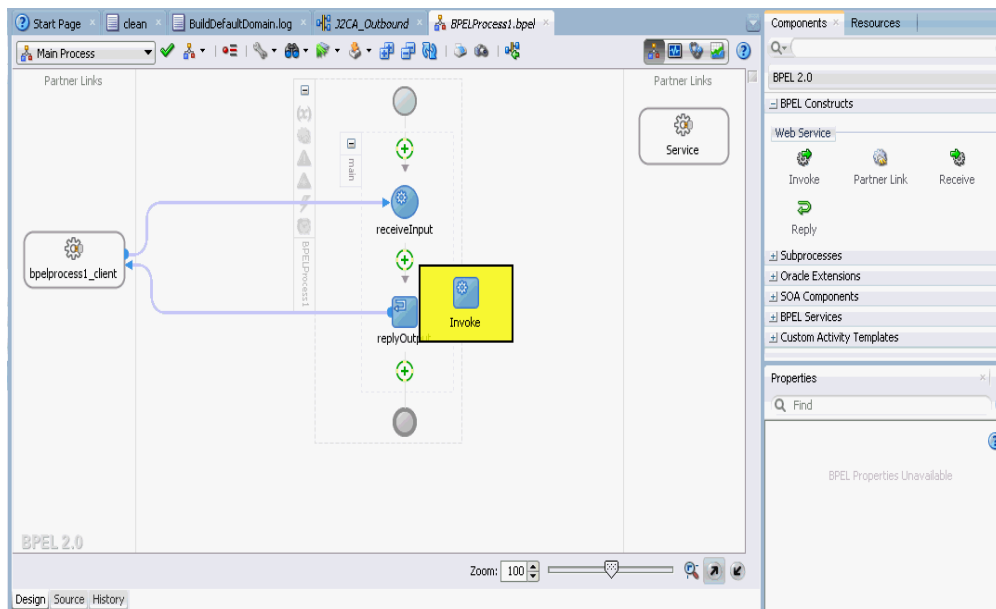
8. 「プロジェクトのスキーマ・ファイル」、「J2CA\_Outbound\_invoke\_response.xsd」の順に展開し、「PS8」を選択します。
9. 「OK」をクリックします。  
「BPEL プロセスの作成」ダイアログに戻ります。
10. 「OK」をクリックします。
11. 図 4-25 に示すように、アウトバウンド BPEL プロセス・コンポーネントとサード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネント間の接続を作成します。

図 4-25 作成された接続



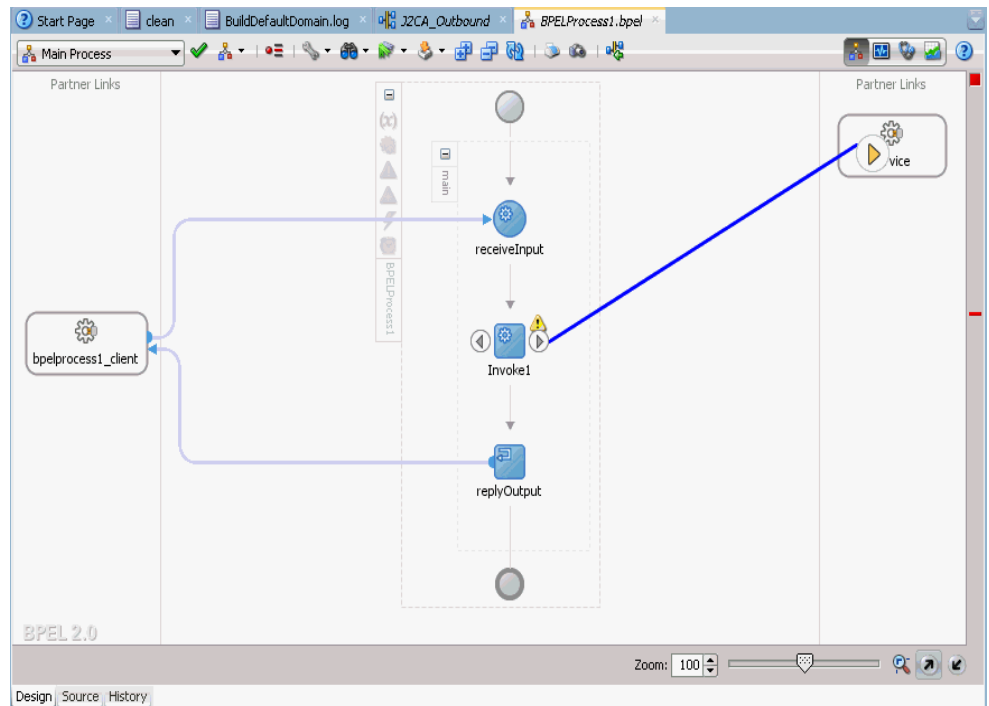
12. 「コンポーネント」 ペインで、アウトバウンド BPEL プロセス・コンポーネントをダブルクリックします。
13. 図 4-26 に示すように、「BPEL コンストラクト」の「Web サービス」の下の「Invoke」アクティビティ・コンポーネントを「コンポーネント」ペインにドラッグ・アンド・ドロップし、「receiveInput」アクティビティ・コンポーネントと「replyOutput」アクティビティ・コンポーネントの間に置きます。

図 4-26 「Invoke」アクティビティ・コンポーネント



14. 図 4-27 に示すように、新規の「Invoke」アクティビティ・コンポーネント (Service) とサード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネント (Service) の間に接続を作成します。

図 4-27 作成された接続



「起動の編集」ダイアログが表示されます。

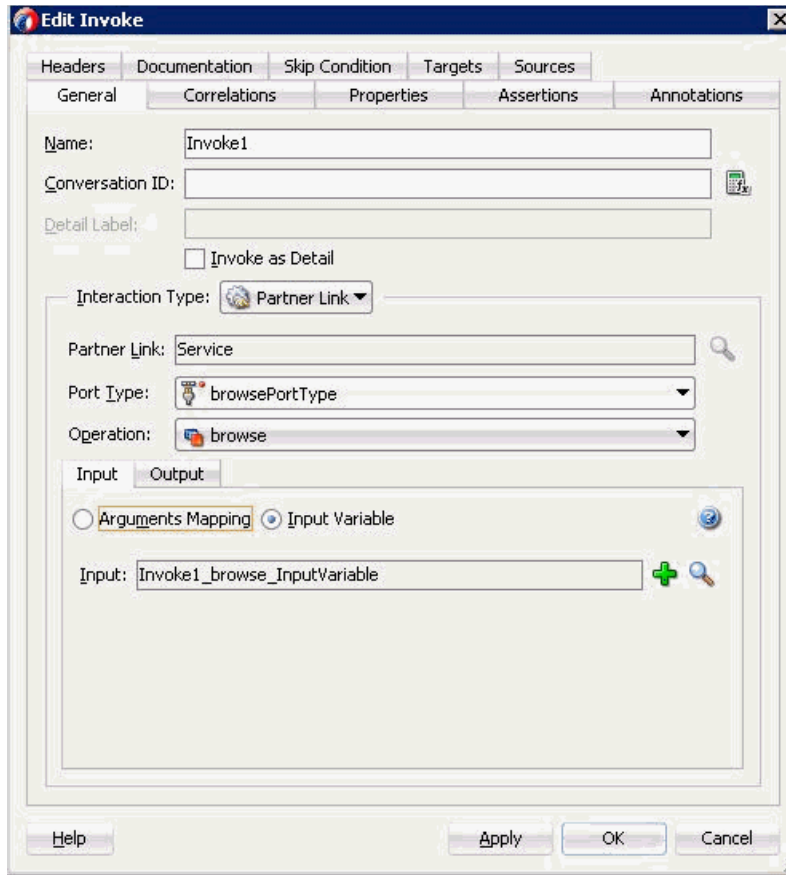
15. 新規入力変数の構成用の「入力」フィールドの右にある**プラス記号**アイコンをクリックします。

「変数の作成」ダイアログが表示されます。

16. 新規の入力変数に示されたデフォルト値を受け入れ、「**OK**」をクリックします。

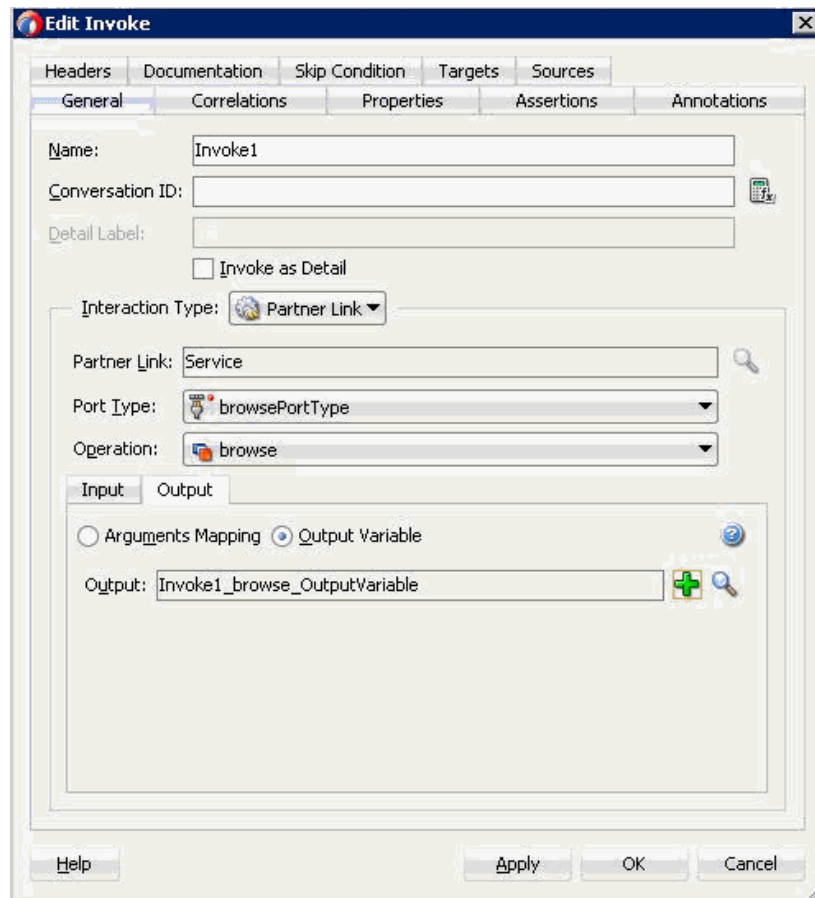
図 4-28 に示すように、「起動の編集」ダイアログに戻ります。

図 4-28 「起動の編集」ダイアログ



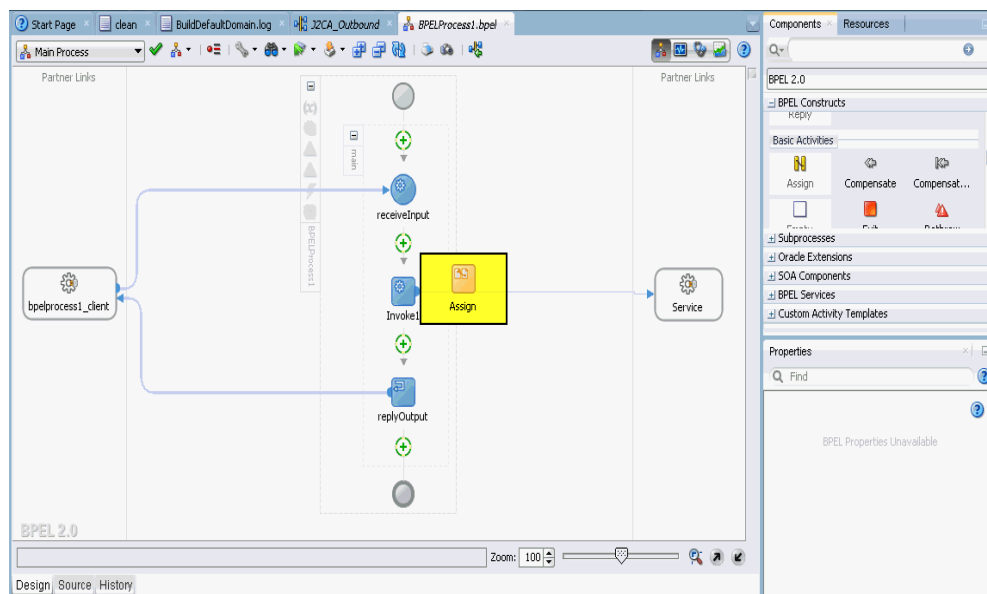
17. 「出力」タブを選択し、新規出力変数の構成用の「出力」フィールドの右にあるプラス記号アイコンをクリックします。  
「変数の作成」ダイアログが表示されます。
18. 新規の出力変数に示されたデフォルト値を受け入れ、「OK」をクリックします。  
図 4-29 に示すように、「起動の編集」ダイアログに戻ります。

図 4-29 「起動の編集」ダイアログ



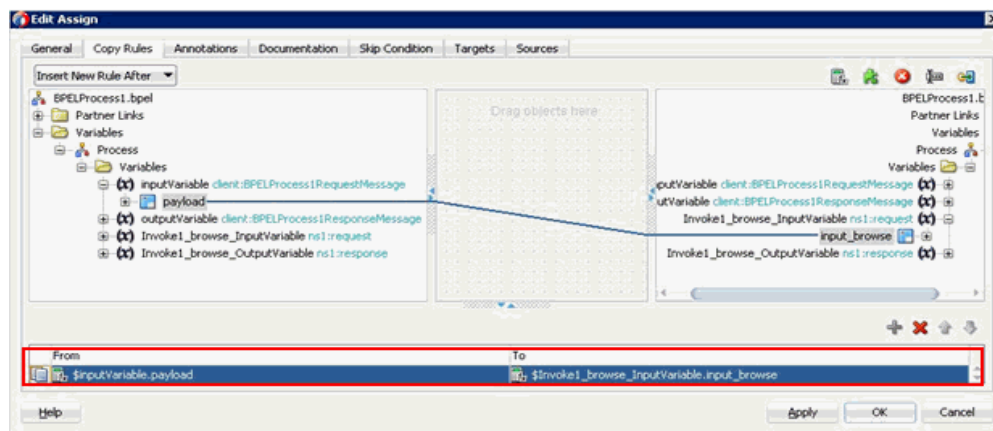
19. 「適用」、「OK」の順にクリックします。
20. 図 4-30 に示すように、「BPEL コンストラクト」の「基本アクティビティ」コンポーネントの下の「Assign」アクティビティを「コンポーネント」ペインにドラッグ・アンド・ドロップし、「Receive」アクティビティ・コンポーネント (receiveInput) と「Invoke」アクティビティ・コンポーネント (Invoke1) の間に置きます。

図 4-30 「Assign」 アクティビティ・コンポーネント



21. 新規の「Assign」アクティビティ・コンポーネント (**Assign1**) をダブルクリックします。  
「割当ての編集」ダイアログが表示されます。
22. 左ペインの「変数」の下で、「InputVariable」を展開し、「payload」を選択します。
23. 右ペインの「変数」の下で、「Invoke1\_browse\_InputVariable」を展開し、「input\_browse」を選択します。
24. 「payload」変数を「input\_browse」変数にドラッグしてマップします。  
図 4-31 に示すように、マップされた変数は強調表示された領域に移入されます。

図 4-31 「割当ての編集」ダイアログ

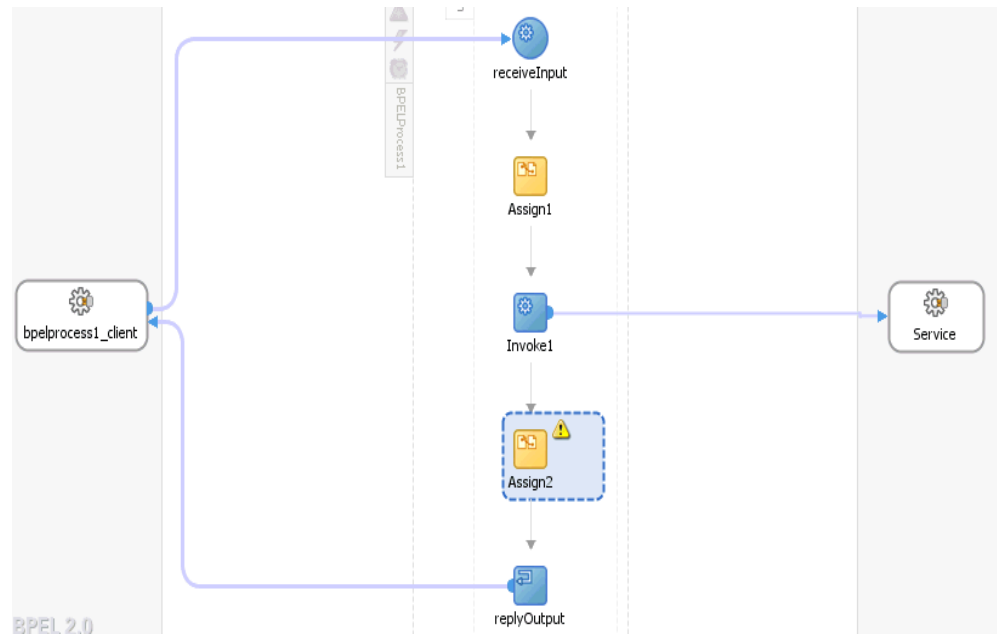


25. 「適用」、「OK」の順にクリックします。
26. 「Assign」アクティビティ・コンポーネントを「コンポーネント」ペインにドラッグ・アンド・ドロップし、「Invoke」アクティビティ (Invoke1) と「Reply」アクティビティ (replyOutput) の間に置きます。



27. 図 4-32 に示すように、新規の「Assign」アクティビティ・コンポーネント (Assign2) をダブルクリックします。

図 4-32 新規の「Assign」アクティビティ・コンポーネント

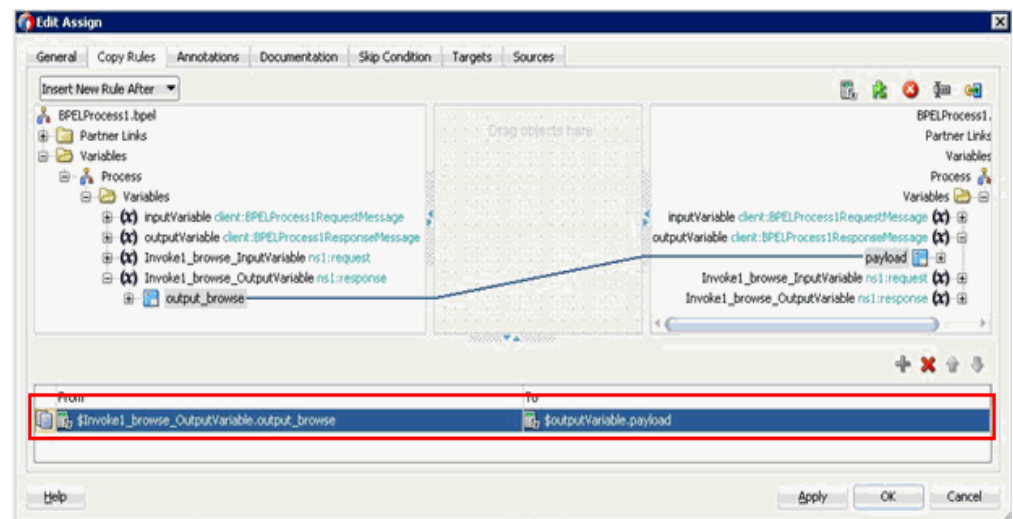


「割当ての編集」ダイアログが表示されます。

28. 左ペインの「変数」の下で、「Invoke1\_browse\_OutputVariable」を展開し、「output\_browse」を選択します。
29. 右ペインの「変数」の下で、「outputVariable」を展開し、「payload」を選択します。
30. 「output\_browse」変数を「payload」変数にドラッグしてマップします。

図 4-33 に示すように、マップされた変数は強調表示された領域に移入されます。

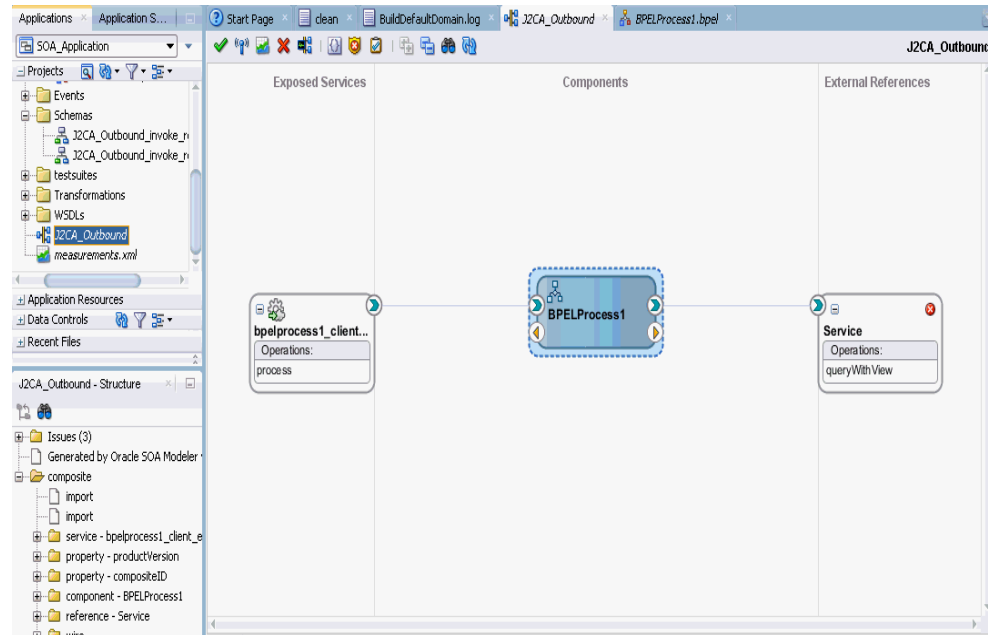
図 4-33 「割当ての編集」ダイアログ



31. 「適用」、「OK」の順にクリックします。

図 4-34 に示すように、「アクティビティ」コンポーネント・ペインに戻ります。

図 4-34 「アクティビティ」コンポーネント・ペイン



32. メニュー・バーの「すべて保存」アイコンをクリックし、構成された新規のアウトバウンド BPEL プロセス・コンポーネントを保存します。

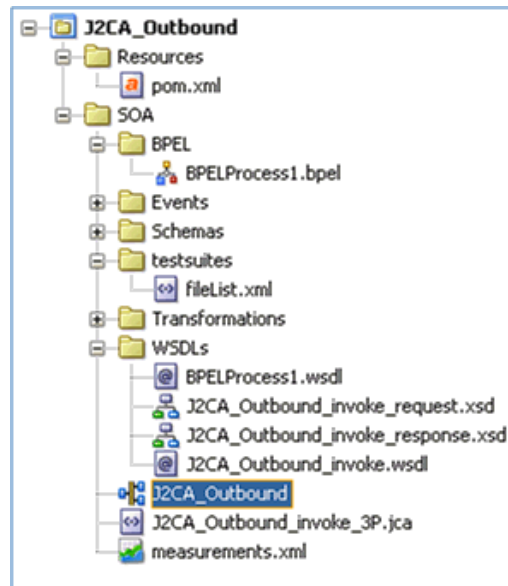
これで、BPEL アウトバウンド・プロセスをデプロイする準備ができました。

#### 4.4.3.3 12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応

12c でのデプロイメントに関する既知の問題に対応するには、次のステップを実行します。

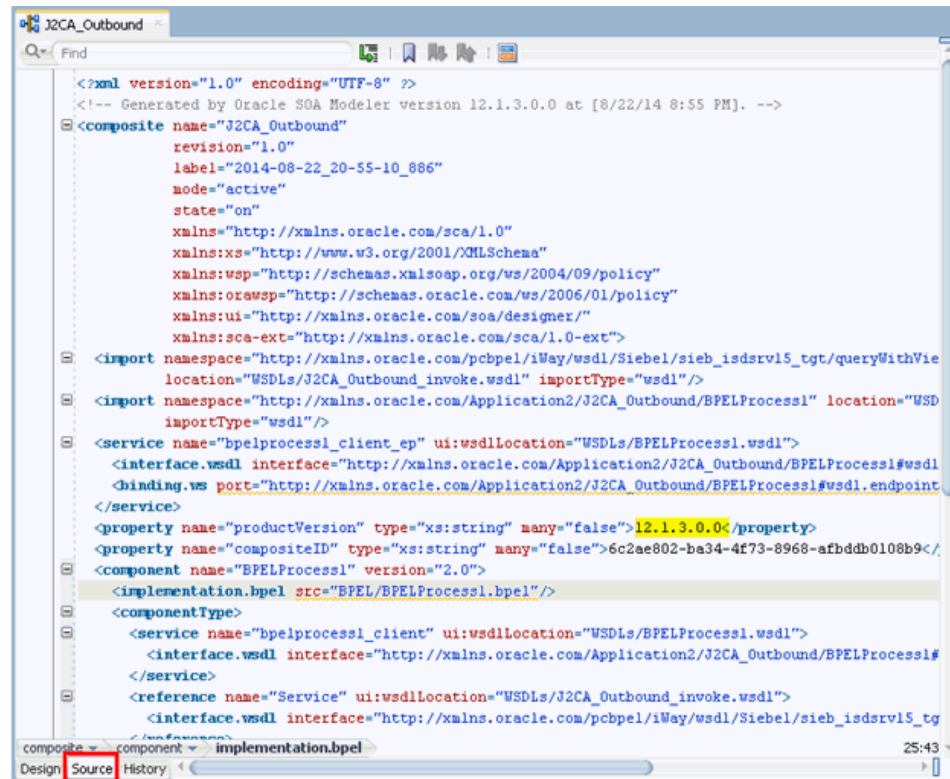
1. 図 4-35 に示すように、作成されたプロセスの **J2CA\_Outbound** (作成された BPEL プロセス) をダブルクリックします。

図 4-35 「J2CA\_Outbound」ノード



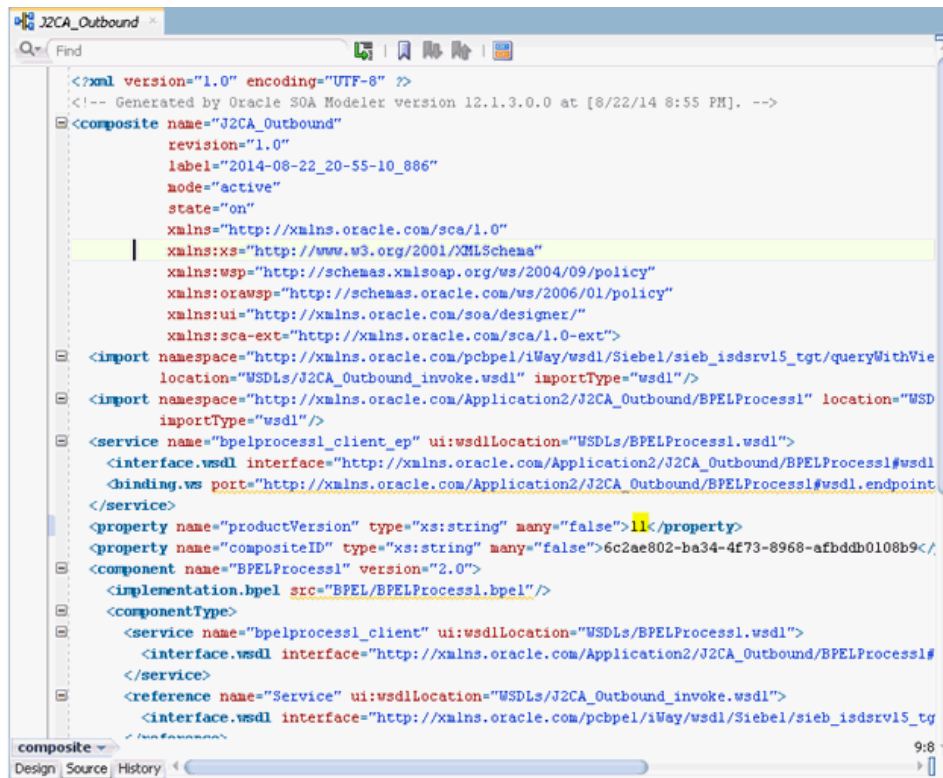
2. 図 4-36 に示すように、開いているプロセスの下の「ソース」タブをクリックします。

図 4-36 「ソース」タブ



3. 図 4-37 に示すように、「productVersion」プロパティ値を「12.1.3.0.0」から「11」に変更します。

図 4-37 プロパティ値



4. 変更を保存し、プロジェクトのデプロイに進みます。

#### 4.4.4 BPEL アウトバウンド・プロセスのデプロイ

BPEL アウトバウンド・プロセスをデプロイするには、次のステップを実行します

1. 図 4-38 に示すように、左ペインでプロジェクト名を右クリックし、「デプロイ」を選択して、「J2CA\_Outbound」をクリックします。

図 4-38 「J2CA\_Outbound」オプション

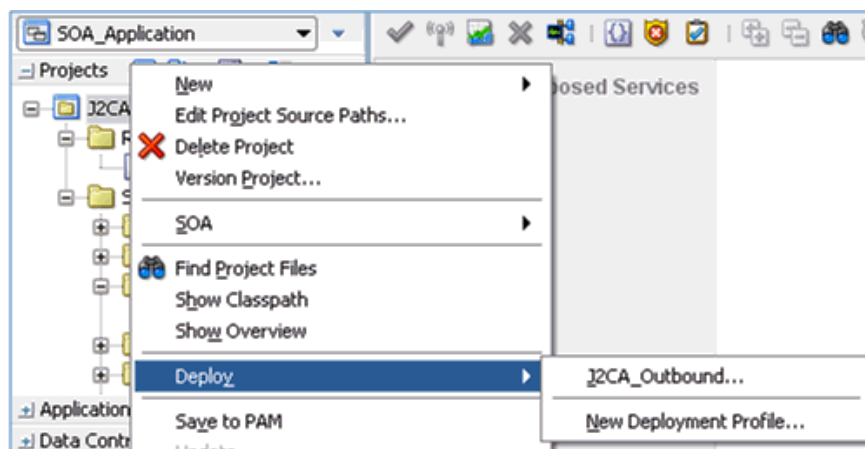
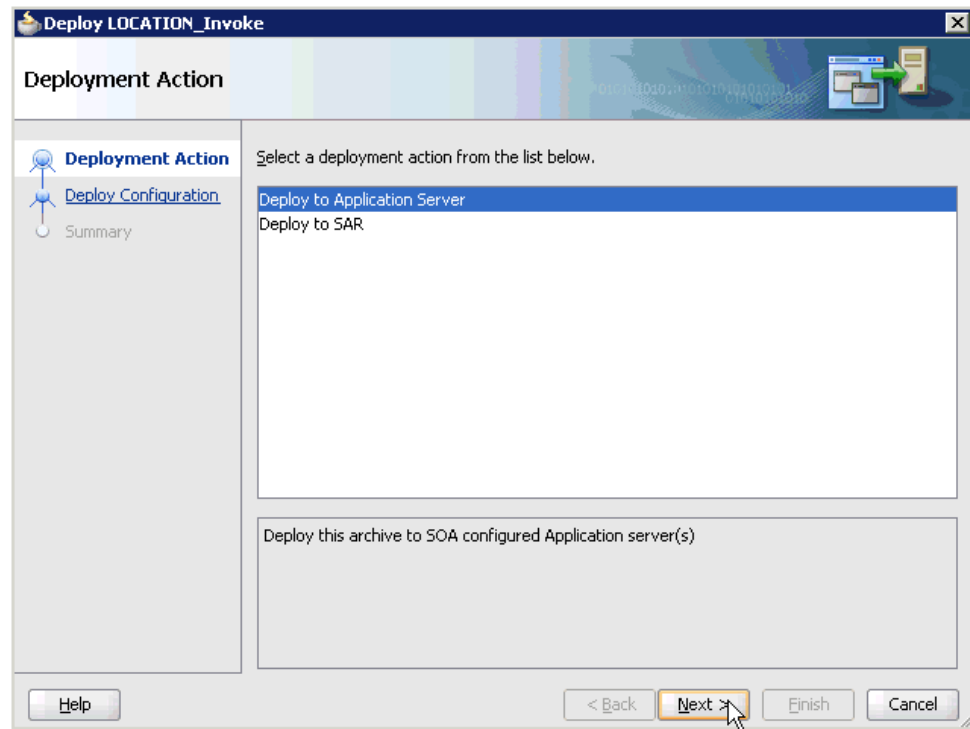


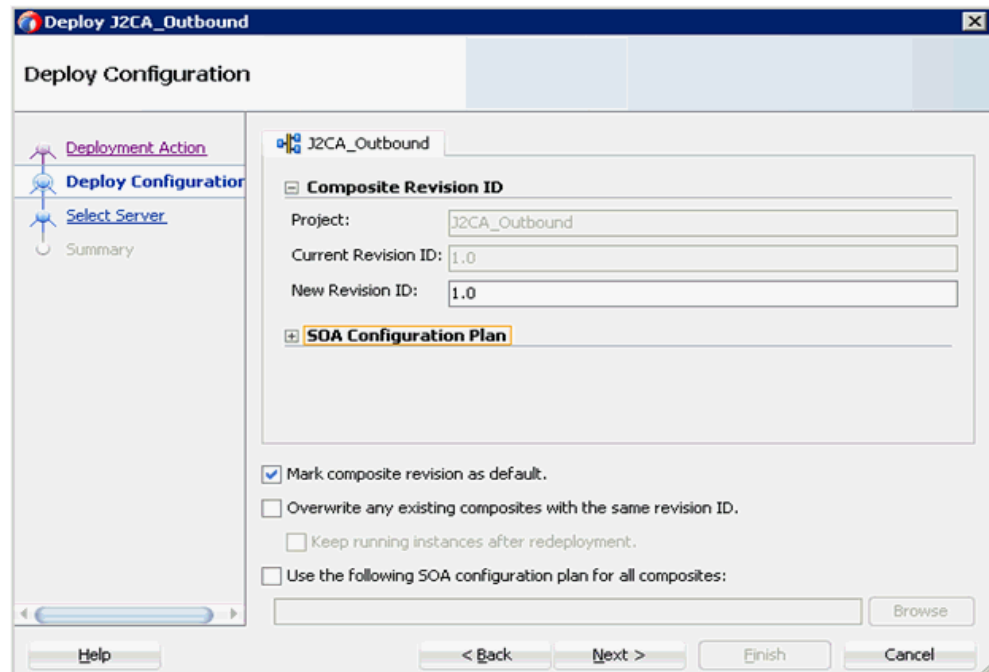
図 4-39 に示すように、「デプロイメント・アクション」ページが表示されます。

図 4-39 「デプロイメント・アクション」 ページ



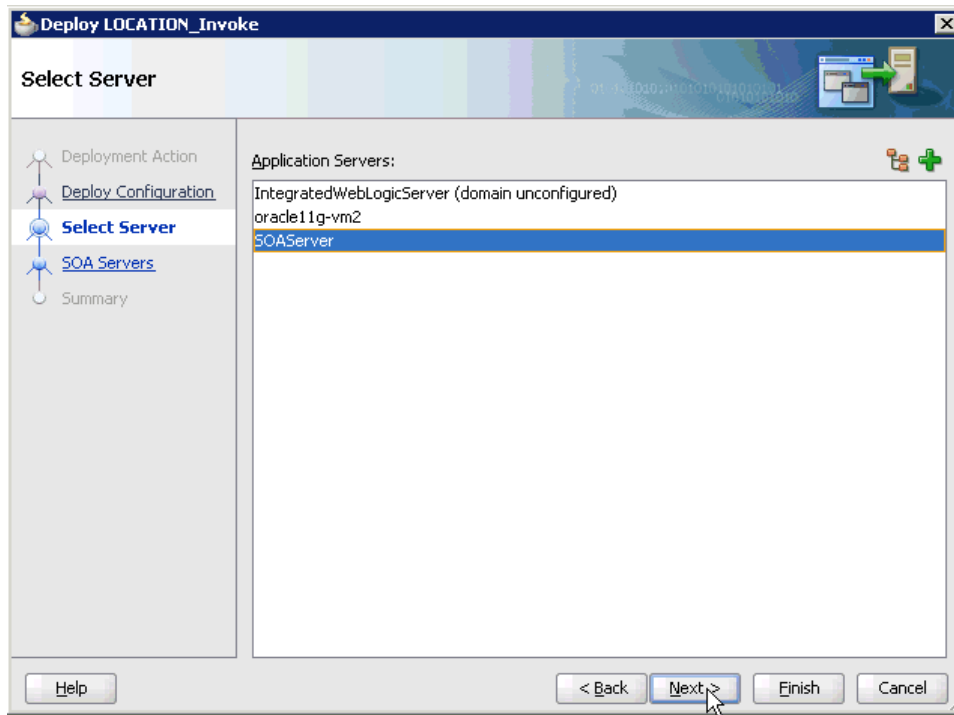
2. 「アプリケーション・サーバーへのデプロイ」が選択されていることを確認します。
3. 「次へ」をクリックします。  
 図 4-40 に示すように、「構成のデプロイ」ページが表示されます。

図 4-40 「構成のデプロイ」 ページ



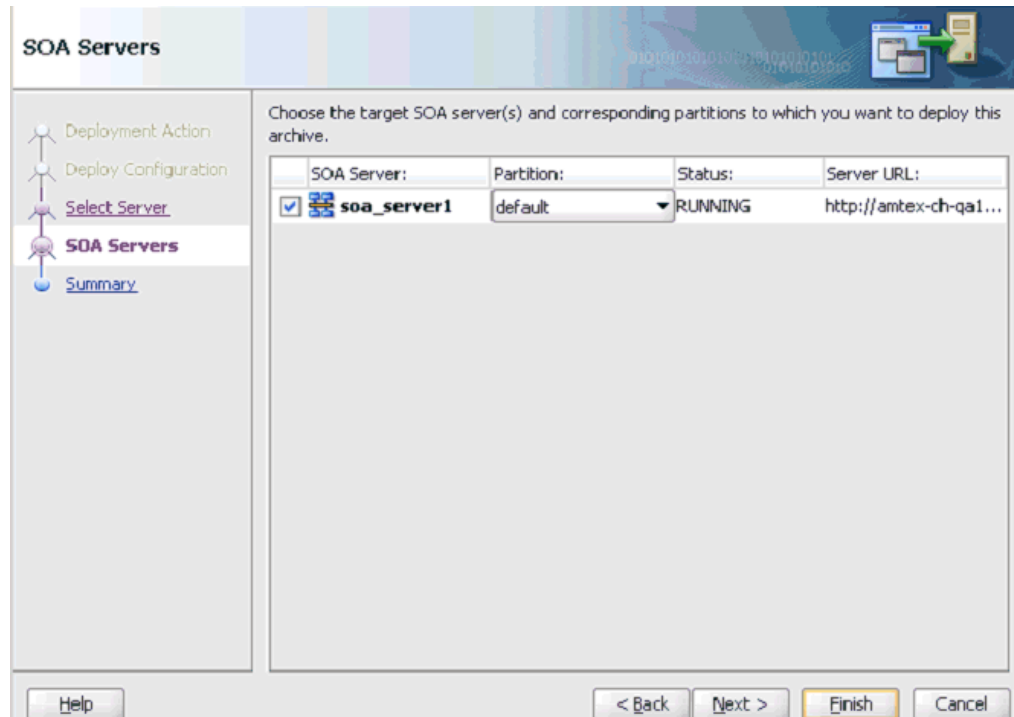
4. デフォルト値を選択したままにし、「次へ」をクリックします。  
図 4-41 に示すように、「サーバーの選択」ページが表示されます。

図 4-41 「サーバーの選択」ページ



5. 構成済の使用可能なアプリケーション・サーバーを選択し、「次へ」をクリックします。  
図 4-42 に示すように、「SOA サーバー」ページが表示されます。

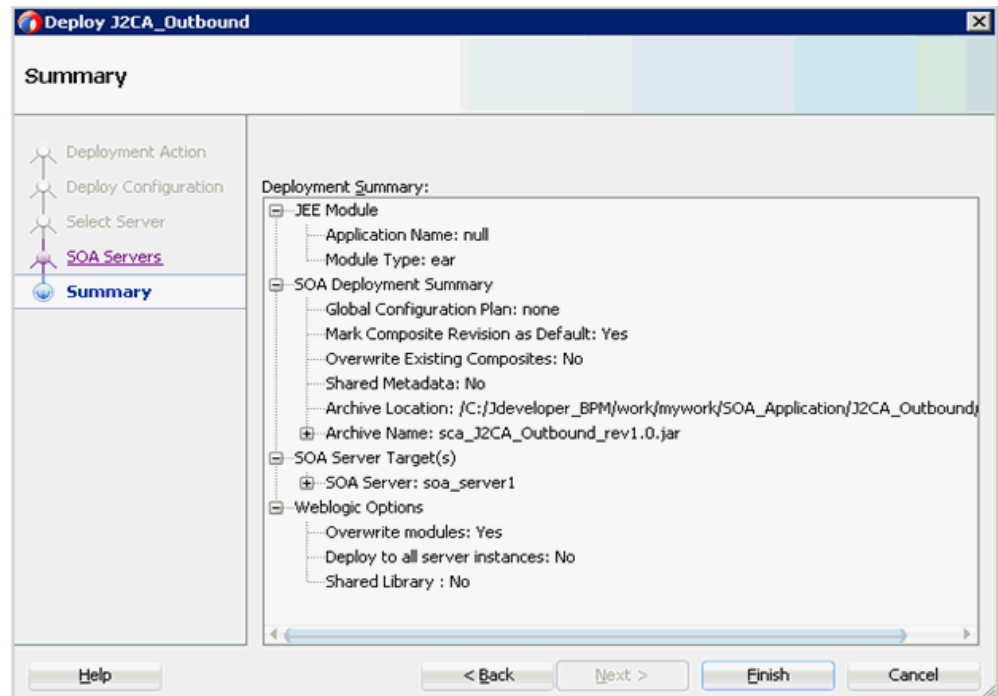
図 4-42 「SOA サーバー」 ページ



6. ターゲットの SOA サーバーを選択し、「次へ」をクリックします。

図 4-43 に示すように、「サマリー」ページが表示されます。

図 4-43 「サマリー」 ページ



7. プロジェクトに使用可能なすべてのデプロイメント情報をレビューおよび確認し、「終了」をクリックします。

図 4-44 に示すように、プロセスが正常にデプロイされます。

図 4-44 デプロイメントの成功を伝えるメッセージ



#### 4.4.5 Oracle Enterprise Manager Console での入力 XML ドキュメントの起動

Oracle Enterprise Manager Console で入力 XML ドキュメントを起動するには、次のステップを実行します

1. Oracle Enterprise Manager Console にログオンします。

---

**注意：** 12c (12.2.1.1.0) を使用しているお客様は、次のステップを実行します。

2. 左ペインの「ターゲット・ナビゲーション」をクリックし、「SOA」を展開し、「soa-infra (soa\_server1)」を選択します。
3. 「デプロイ済コンポジット」タブをクリックすると、デプロイされたすべてのコンポジットが表示されます。使用可能なプロジェクト (「J2CA\_Outbound」など) をクリックします。

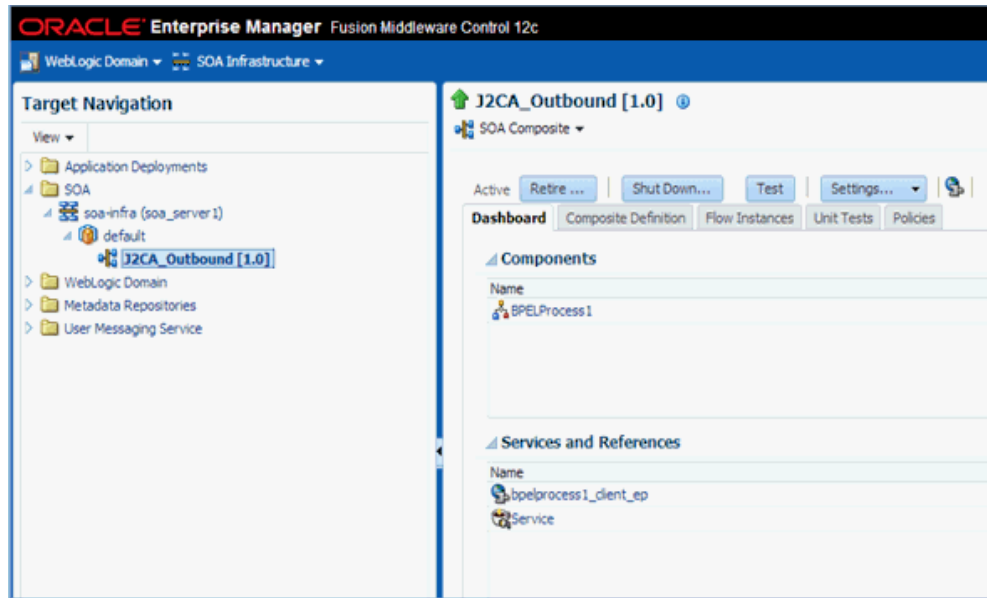
この手順のステップ 4 にスキップします。

---

2. 「SOA」を展開し、「soa-infra (soa\_server1)」を選択して、「デフォルト」をクリックします。
3. 図 4-45 に示すように、使用可能なプロジェクト (「J2CA\_Outbound」など) を選択し、「テスト」をクリックします。

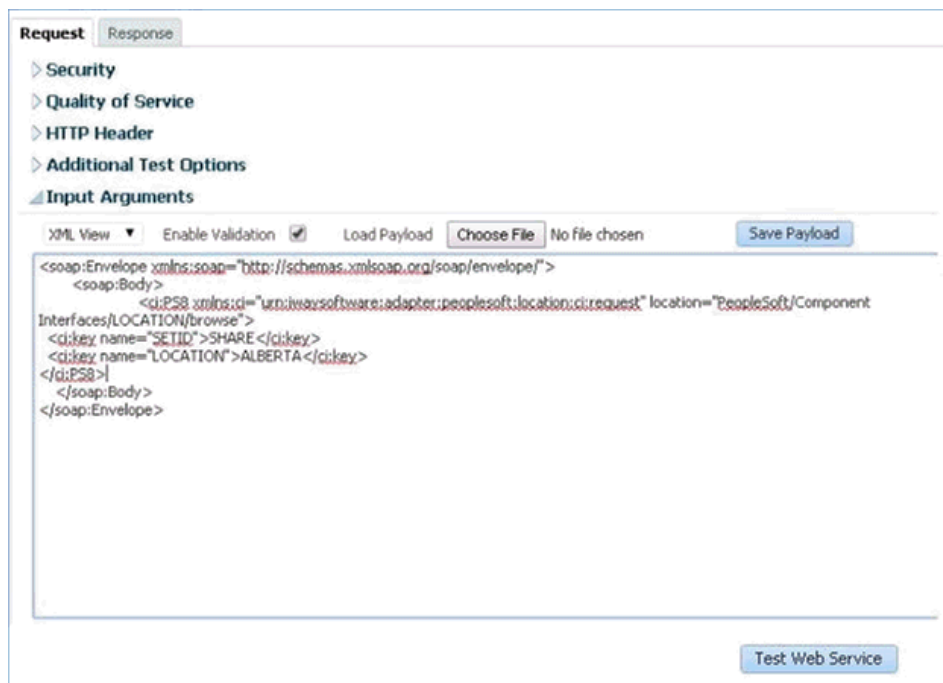


図 4-45 「テスト」 ボタン



4. 「リクエスト」 タブをクリックします。
5. 図 4-46 に示すように、リストから「XML 表示」を選択します。

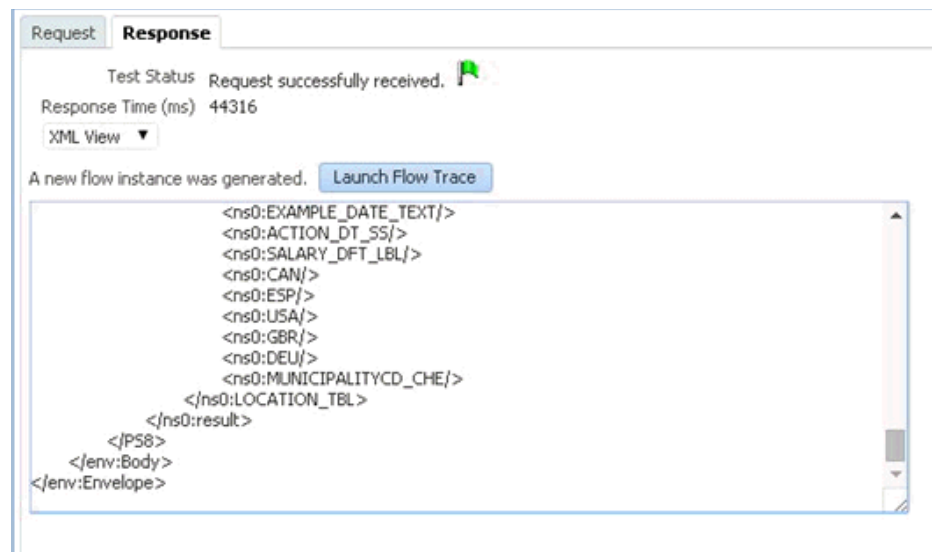
図 4-46 「入力引数」 リスト



6. 「入力引数」領域で適切な入力 XML ドキュメントを指定し、「Web サービスのテスト」をクリックします。

図 4-47 に示すように、Oracle Enterprise Manager Console に出力レスポンスが受信されます。

図 4-47 受信された出力レスポンス



#### 4.4.6 アウトバウンド BPEL およびアウトバウンド・メディエータ・プロセスのテスト

Oracle Enterprise Manager Console でアウトバウンド BPEL プロセスまたはアウトバウンド・メディエータ・プロセスをテストするとき、これらのコンソールで生成された XML エンベロープは使用しないでください。かわりに、これらを削除し、ネームスペース修飾の WSDL に準拠する、スキーマから生成された XML ペイロードを使用します。

Enterprise Manager Console を使用してメディエータ・データ・フローをテストできます。メディエータ・データ・フローおよび相互作用を作成すると、Web サービスが作成され、Oracle WebLogic Server に登録されます。メディエータ・アウトバウンド・プロセスの作成の詳細は、第 5 章「Oracle SOA Suite でのメディエータ・サービス・コンポーネントとの統合」を参照してください。

### 4.5 イベント統合のためのインバウンド BPEL プロセスの設計 (J2CA 構成)

この項では、Oracle Application Adapter for PeopleSoft を PeopleSoft と統合してイベント・データを受信する方法について説明します。この例では、PeopleSoft イベントは顧客レコードが PeopleSoft システムに追加されたときに発生しています。

このインバウンド・ユース・ケース・シナリオ用のサンプル・プロジェクトが、次に示す Application Adapter のインストール・フォルダに用意されています。

```
<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\BPEL\J2CA\Inbound_Project
```

アダプタのデザインタイム構成を完了するには、次のツールが必要です。

- Oracle Adapter アプリケーション・エクスプローラ (アプリケーション・エクスプローラ)
- Oracle JDeveloper BPEL デザイナ (JDeveloper)

---

**注意:** この章に記載されている例では JDeveloper が使用されています。

---

BPEL プロセスを設計する前に、アプリケーション・エクスプローラを使用して、各 WSDL ファイルを生成する必要があります。詳細は、4-35 ページ「イベント統合のための WSDL の生成」を参照してください。

この項では、次のトピックについて説明します。

- 4.5.1 項「イベント統合のための WSDL の生成」
- 4.5.2 項「SOA 用の空のコンポジットの作成」
- 4.5.3 項「BPEL インバウンド・プロセスの定義」
- 4.5.4 項「BPEL インバウンド・プロセスのデプロイ」
- 4.5.5 項「PeopleSoft でのイベントのトリガー」

## 4.5.1 イベント統合のための WSDL の生成

アプリケーション・エクスプローラを使用してインバウンド相互作用のための WSDL を生成するとき、各イベントに個別のチャンネルを作成し、そのチャンネルを選択する必要があります。

---

**注意:** 2つ以上のイベントで同じチャンネルが共有されている場合、正しい BPEL プロセスにイベント・メッセージが配信されないことがあります。

---

この項では、次のトピックについて説明します。

- 4.5.1.1 項「チャンネルの作成」
- 4.5.1.2 項「イベント通知のための WSDL の生成」

### 4.5.1.1 チャンネルの作成

チャンネルを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「イベント」ノードをクリックします。
2. 「PeopleSoft」ノードを展開します。

図 4-48 に示すように、ポートおよびチャンネル・ノードが左ペインに表示されます。

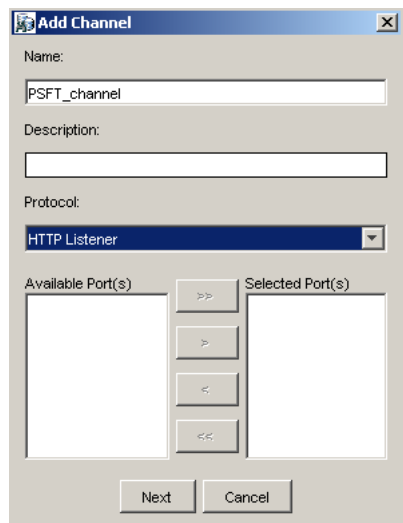
図 4-48 展開された「PeopleSoft」イベント・ノード



3. 「チャンネル」を右クリックし、「チャンネルの追加」を選択します。

図 4-49 に示すように、「チャンネルの追加」ダイアログが表示されます。

図 4-49 「チャンネルの追加」ダイアログ



次の情報を入力します。

- a. 「PSFT\_Channel」など、チャンネルの名前を入力します。
  - b. 簡単な説明を入力します (オプション)。
  - c. 「プロトコル」リストから、「HTTP リスナー」を選択します。
4. 「次へ」をクリックします。
  5. 「HTTP リスナー」ダイアログが表示されたら、次の表で指定されているようにシステム情報を入力します。

パラメータ	説明
リスナー・ポート	PeopleSoft イベント・データをリスニングするポート
Https	安全な HTTP 接続を確保するには、「https」チェック・ボックスを選択します。
同期タイプ	次のいずれかの同期オプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ REQUEST_RESPONSE</li> <li>■ REQUEST_ACK</li> </ul> <p><b>重要:</b> 同期タイプが「REQUEST」に設定されている場合、PeopleSoft チャンネルは機能しません。</p>

6. 「OK」をクリックします。

左ペインのチャンネル・ノードの下にチャンネルが表示されます。アイコン上の「X」は、そのチャンネルが現在切断されていることを示します。

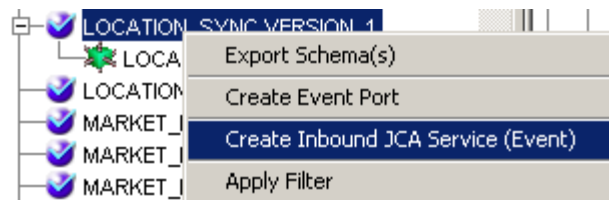
**注意:** チャンネルは BPEL PM Server で管理されているため、開始しないでください。テストおよびデバッグ目的でチャンネルを開始する場合は、ランタイム前に停止してください。

#### 4.5.1.2 イベント通知のための WSDL の生成

チャンネルを作成し、開始していないことを確認した後、アプリケーション・エクスプローラを使用してイベント用に WSDL を生成する必要があります。

1. アプリケーション・エクスプローラを起動します。
2. 「アダプタ」ノードを展開します。  
使用可能なすべてのアダプタのリストが表示されます。
3. 「PeopleSoft」を展開します。
4. 「PeopleSoft」ノードの下のターゲット名 (「PSFTtarget」など) をクリックします。  
右側の「ログオン」ペインに、保存されたパラメータが表示されます。
5. 接続パラメータを確認します。
6. ターゲット名を右クリックし、「接続」を選択します。  
「x」アイコンが消え、ターゲットが接続されたことが示されます。
7. 「メッセージ」を展開し、「LOCATION\_SYNC.VERSION\_1」を選択します。
8. 「LOCATION\_SYNC.VERSION\_1」を右クリックします。

図 4-50 インバウンド JCA サービスの作成 (イベント) オプション



9. 図 4-50 に示すように、インバウンド JCA サービスの作成 (イベント) を選択します。  
図 4-51 に示すように、「WSDL のエクスポート」ダイアログが表示されます。

図 4-51 「WSDL のエクスポート」 ダイアログ

次のステップを実行します。

- a. 「名前」 フィールドで、WSDL ファイルの名前を指定します。  
 .wsdl ファイル拡張子が自動的に追加されます。デフォルトでは、リクエスト / レスポンス型のサービス用に生成された WSDL ファイルの名前の末尾には「\_receive」が付きます。
- b. 「チャネル」 リストで、このインバウンド・サービス用に作成したチャネルを選択します。  
**重要:** 各イベントに個別のチャネルを作成する必要があります。ランタイム前にチャネルが停止していることを確認してください。
- c. 「ルート」、「ネームスペース」および「スキーマ」の3つの検証のチェック・ボックスも表示されます。複数の検証オプションを選択できます。
  - 「ルート」検証は、インバウンド XML ドキュメント内のルート要素の検証に使用します。
  - 「ネームスペース」検証は、インバウンド XML ドキュメント内のネームスペースの検証に使用します。
  - 「スキーマ」検証は、WSDL ドキュメント内のスキーマを使用したインバウンド XML ドキュメントの検証に使用します。

実行時には、検証は選択された検証オプションに基づいて処理されます。複数の検証オプションが選択されている場合、実行時に最初の検証オプションが失敗すると、残りの検証オプションは処理されません。ルート検証およびネームスペース検証は、適度な検証レベルであるとみなされます。スキーマ検証はより厳しい検証レベルです。ルート要素およびネームスペースが

PeopleSoft 環境のメッセージ間で異なるかぎり、ルート検証とネームスペース検証オプションを一緒に使用することをお勧めします。

10. 「OK」をクリックします。

これで、JDeveloper での BPEL インバウンド・プロセスの定義に必要な最初のステップである、新規の SOA アプリケーションを作成する準備ができました。

## 4.5.2 SOA 用の空のコンポジットの作成

SOA 用に空のコンポジットを作成するには、次のステップを実行します。

1. 新規の SOA アプリケーションを作成します。
2. 新規の SOA アプリケーションの名前を入力し、「次へ」をクリックします。  
「プロジェクトの名前付け」ページが表示されます。
3. プロジェクト名を入力し、「次へ」をクリックします。  
「SOA 設定の構成」ページが表示されます。
4. 「コンポジット・テンプレート」リストで「空のコンポジット」を選択し、「終了」をクリックします。

詳細は、4-9 ページ [4.4.2 項「SOA 用の空のコンポジットの作成」](#) を参照してください。

## 4.5.3 BPEL インバウンド・プロセスの定義

この項では、BPEL インバウンド・プロセスの定義方法について説明します。次のトピックで構成されています。

- [4.5.3.1 項「サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの作成」](#)
- [4.5.3.2 項「インバウンド BPEL プロセス・コンポーネントの作成」](#)

### 4.5.3.1 サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの作成

サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントを作成するには、次のステップを実行します。

1. [図 4-52](#) に示すように、「サービス・アダプタ」ペインから「サード・パーティ・アダプタ」コンポーネントを「公開されたサービス」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

図 4-52 「サード・パーティ・アダプタ」コンポーネント

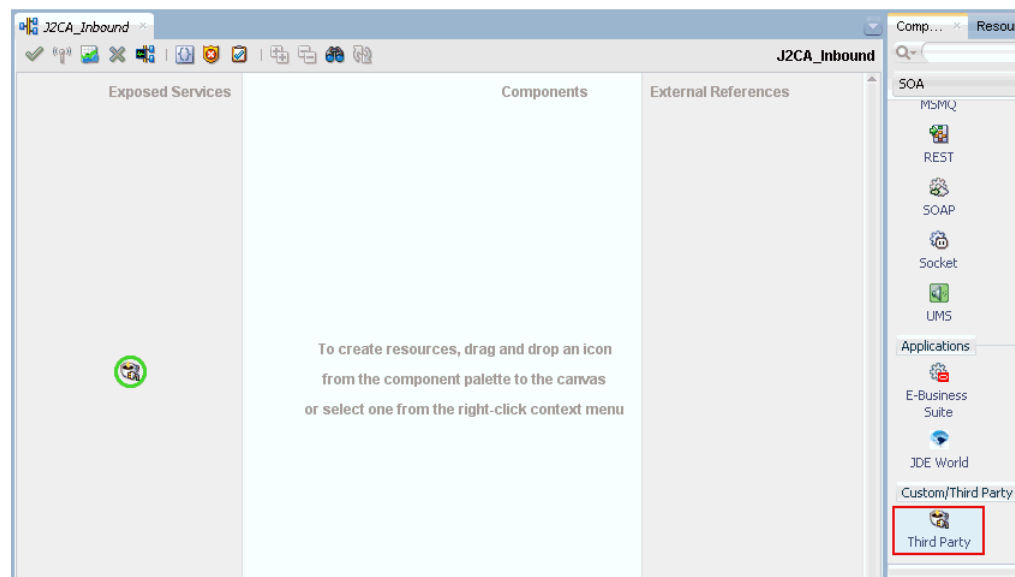
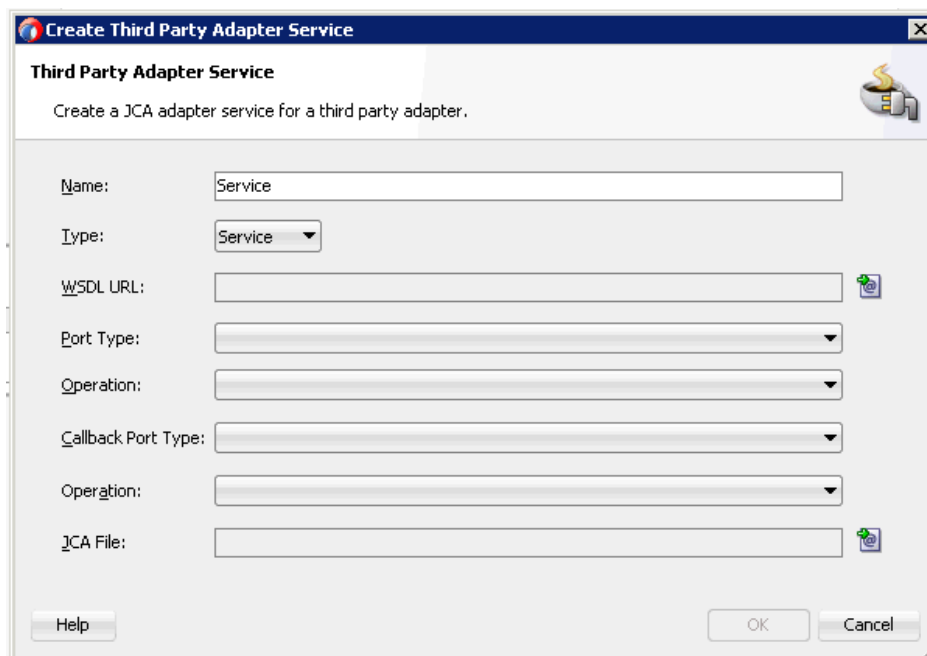


図 4-53 に示すように、「サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成」ダイアログが表示されます。

図 4-53 「サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成」ダイアログ

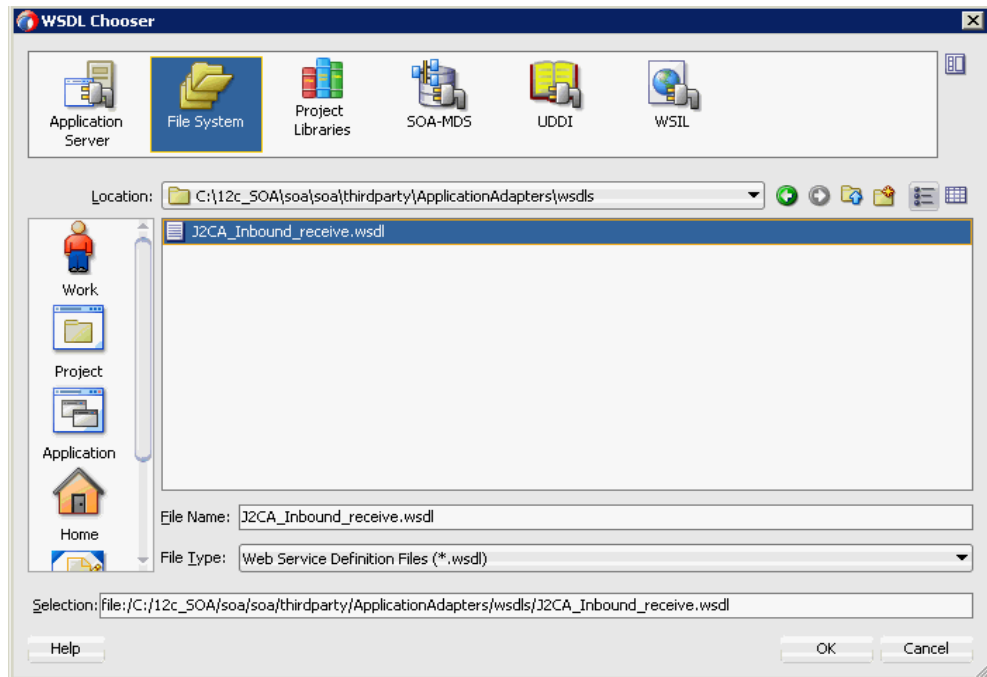


2. 「タイプ」リストで「サービス」が選択されていることを確認します (デフォルト)。
3. 「WSDL URL」フィールドの右にある既存の WSDL を検索アイコンをクリックします。

図 4-54 に示すように、「WSDL チューザ」ダイアログが表示されます。

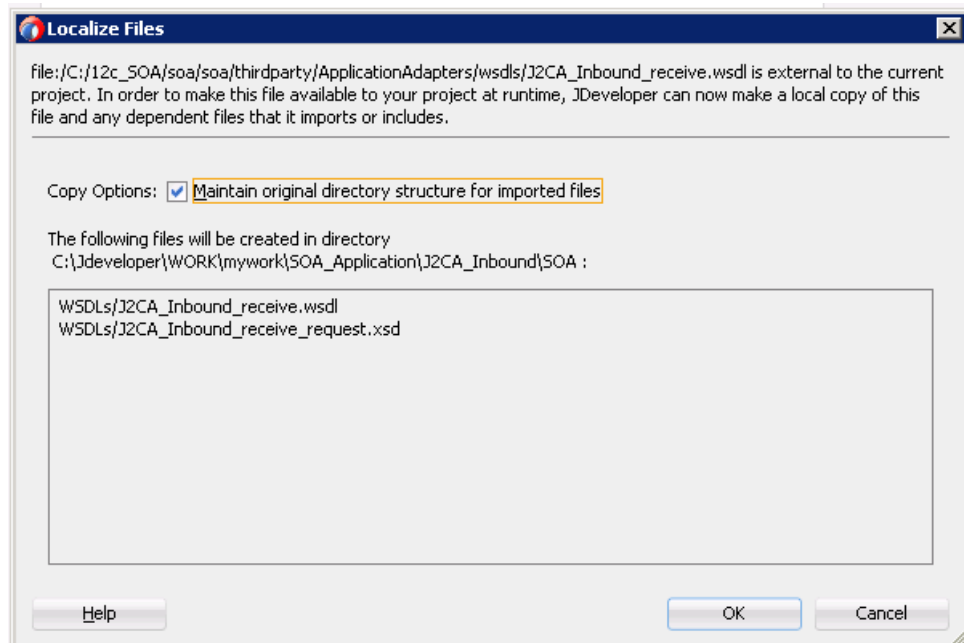


図 4-54 「WSDL チューザ」 ダイアログ



4. 次のディレクトリまでブラウザし、インバウンド WSDL ファイルを選択します。  
<ADAPTER\_HOME>\wsdls
5. 「OK」をクリックします。  
図 4-55 に示すように、「ファイルのローカライズ」ダイアログが表示されます。

図 4-55 「ファイルのローカライズ」 ダイアログ

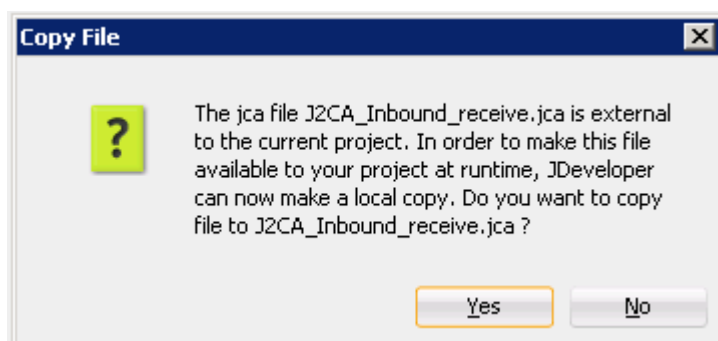


6. 「OK」をクリックします。

インバウンド WSDL ファイルおよび関連リクエスト/レスポンス XML スキーマ・ファイル (.xsd) が、作成済のプロジェクト・フォルダにインポートされます。「サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成」ダイアログに戻ります。

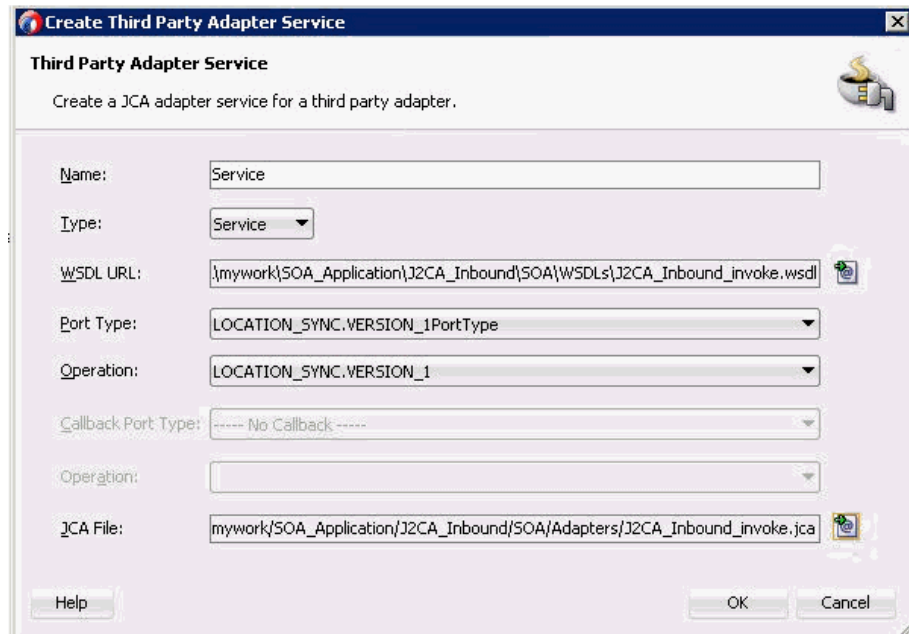
7. 「JCA ファイル」フィールドの右にある **JCA ファイルを検索** アイコンをクリックします。  
変換チューザ・ダイアログが表示されます。
8. 次のディレクトリまでブラウズし、JCA プロパティ・ファイルを選択します。  
<ADAPTER\_HOME>\wsdl.s
9. 「OK」をクリックします。  
図 4-56 に示すように、「ファイルのコピー」メッセージが表示されます。

図 4-56 「ファイルのコピー」確認メッセージ



10. 「はい」をクリックします。  
JCA プロパティ・ファイルのコピーがプロジェクト・フォルダ内に作成されます。  
図 4-57 に示すように、「サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成」ダイアログに戻ります。

図 4-57 「サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成」ダイアログ



11. 「OK」をクリックします。

サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントが作成され、「公開されたサービス」ペインに表示されます。

これで、インバウンド BPEL プロセス・コンポーネントを構成する準備ができました。

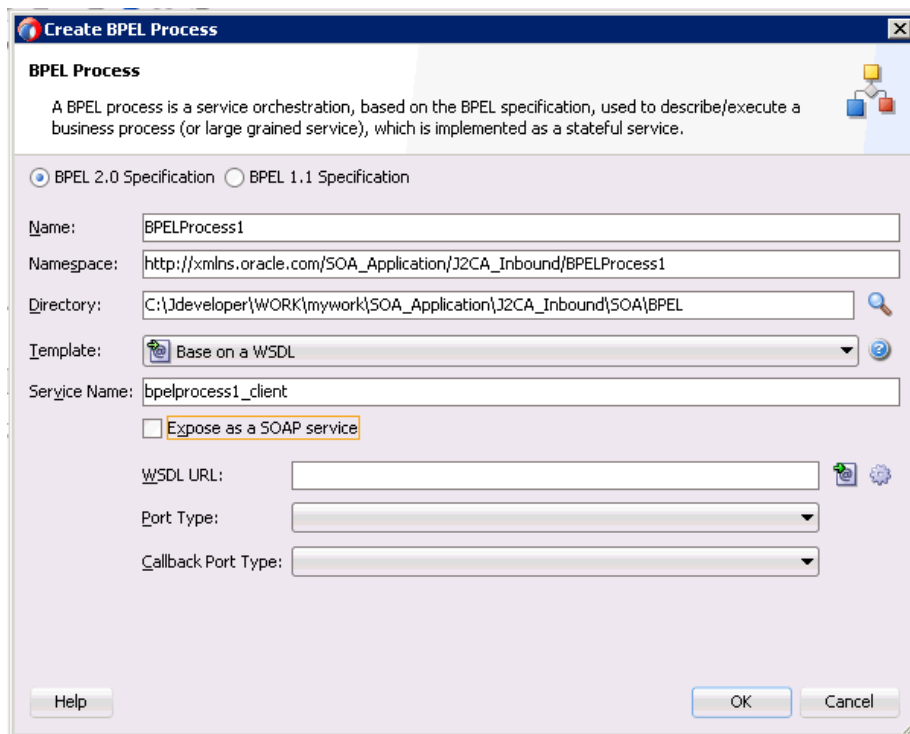
#### 4.5.3.2 インバウンド BPEL プロセス・コンポーネントの作成

インバウンド BPEL プロセス・コンポーネントを作成するには、次のステップを実行します。

1. 「サービス・コンポーネント」ペインから「BPEL プロセス」コンポーネントを「コンポーネント」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

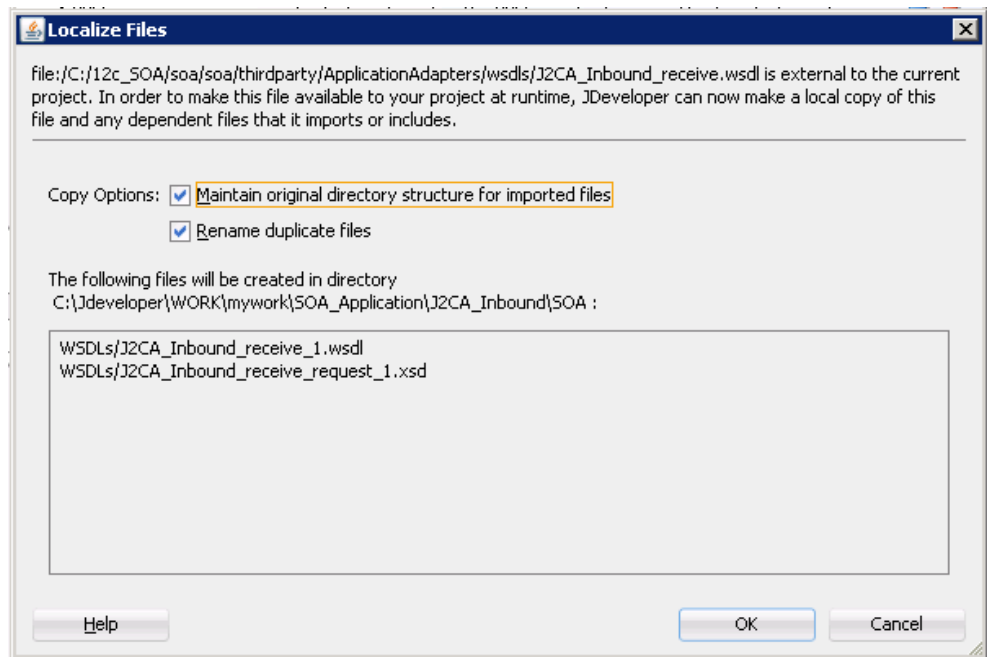
図 4-58 に示すように、「BPEL プロセスの作成」ダイアログが表示されます。

図 4-58 「BPEL プロセスの作成」 ダイアログ



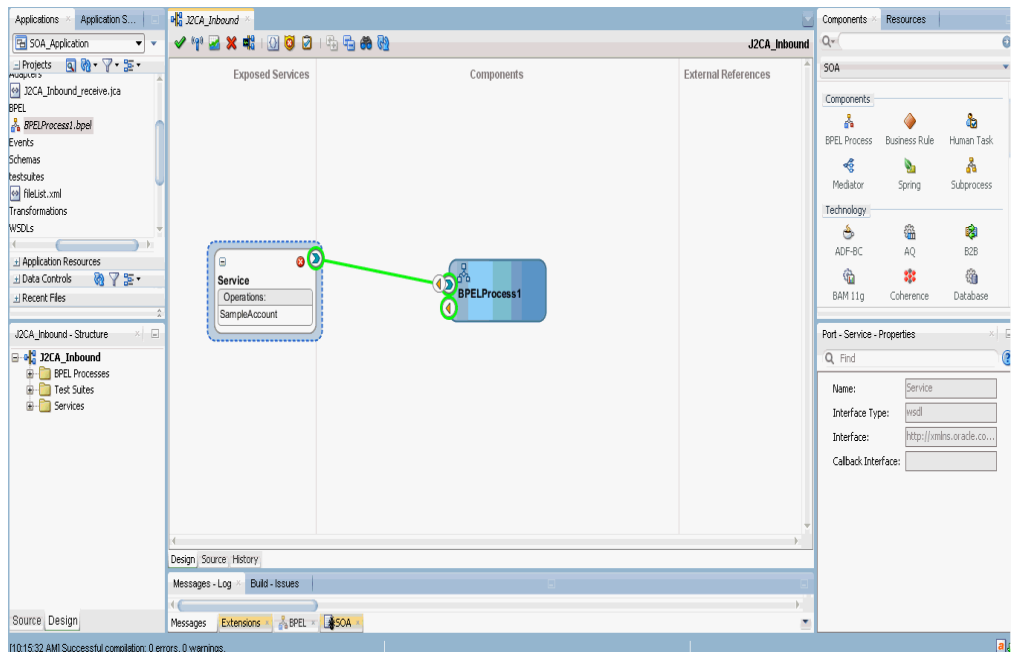
2. 「名前」フィールドで、新規のインバウンド BPEL プロセス・コンポーネントの名前を入力するか、デフォルトをそのまま使用します。  
デフォルトでは、「BPEL 2.0 仕様」オプションが選択されます。
3. 「テンプレート」リストで「WSDL に基づく」を選択します。
4. 「SOAP サービスとして公開」チェック・ボックスを選択解除します。
5. 「WSDL URL」フィールドの右にある既存の WSDL を検索アイコンをクリックします。  
「WSDL チューザ」ダイアログが表示されます。
6. 次のディレクトリからインバウンド WSDL ファイルを選択します。  
<ADAPTER\_HOME>\wsdl1s
7. 「OK」をクリックします。  
図 4-59 に示すように、「ファイルのローカライズ」ダイアログが表示されます。

図 4-59 「ファイルのローカライズ」ダイアログ



8. 「重複ファイルの名前変更」オプションを選択解除します。
9. 「OK」をクリックします。  
「BPEL プロセスの作成」ダイアログに戻ります。
10. 「OK」をクリックします。

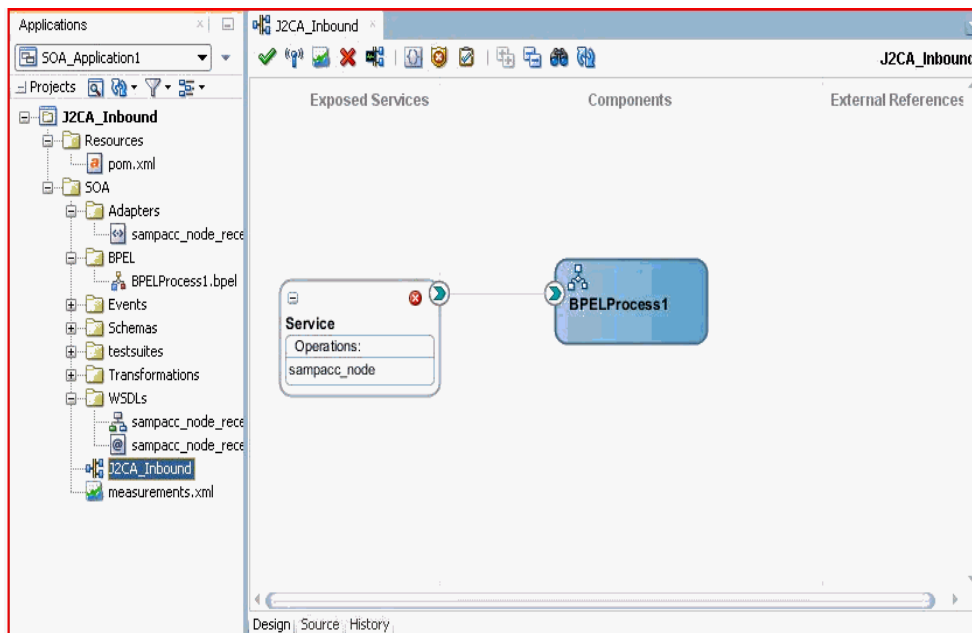
図 4-60 作成された接続



11. 図 4-60 に示すように、サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントとインバウンド BPEL プロセス・コンポーネント間の接続を作成します。

12. 左ペインの「J2CA\_Outbound」をダブルクリックします。

図 4-61 「すべて保存」アイコン



13. 図 4-61 に示すように、メニュー・バーの「すべて保存」アイコンをクリックし、構成された新規のインバウンド BPEL プロセス・コンポーネントを保存します。  
これで、BPEL インバウンド・プロセスをデプロイする準備ができました。

#### 4.5.3.3 12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応

12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応方法の詳細は、4-26 ページ 4.4.3.3 項「12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応」を参照してください。

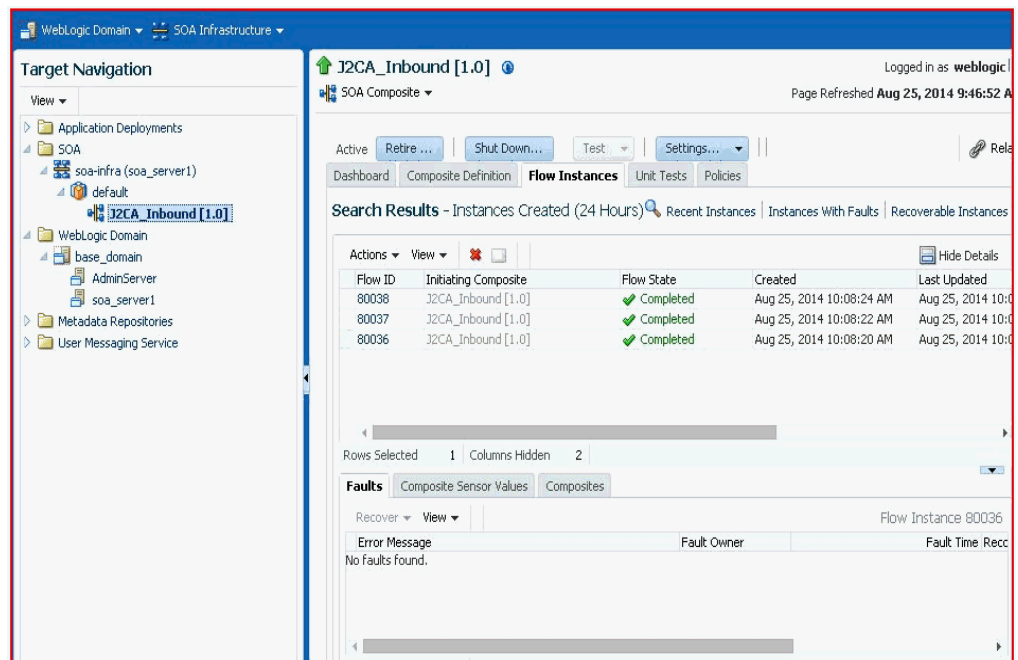
### 4.5.4 BPEL インバウンド・プロセスのデプロイ

BPEL インバウンド・プロセスをデプロイするには、次のステップを実行します

1. 左ペインでプロジェクト名を右クリックし、「デプロイ」を選択して、「J2CA\_Inbound」をクリックします。  
「デプロイメント・アクション」ページが表示されます。
2. 「アプリケーション・サーバーへのデプロイ」が選択されていることを確認します。
3. 「次へ」をクリックします。  
「構成のデプロイ」ページが表示されます。
4. デフォルト値を選択したままにし、「次へ」をクリックします。  
「サーバーの選択」ページが表示されます。
5. 構成済の使用可能なアプリケーション・サーバーを選択し、「次へ」をクリックします。  
「SOA サーバー」ページが表示されます。

6. ターゲットの SOA サーバーを選択し、「次へ」をクリックします。  
「サマリー」ページが表示されます。
  7. プロジェクトに使用可能なすべてのデプロイメント情報をレビューおよび確認し、「終了」をクリックします。  
プロセスが正常にデプロイされます。
- 詳細は、4-28 ページ 4.4.4 項「BPEL アウトバウンド・プロセスのデプロイ」を参照してください。
- 図 4-62 に示すように、イベント・メッセージが PeopleSoft を介してトリガーされると、Oracle Enterprise Manager Console 側でインスタンスが正常に受信されます。

図 4-62 受信されたインスタンス



## 4.5.5 PeopleSoft でのイベントのトリガー

イベントは、アクティビティによってアプリケーション・システムで生成されます。たとえば、システムで顧客情報が更新されたときに PeopleSoft でイベントが生成されます。次の項では、PeopleSoft でのイベントをトリガーし、Oracle Application Adapter for PeopleSoft を使用してそのイベントを確認する方法について説明します。

この項では、次のトピックについて説明します。

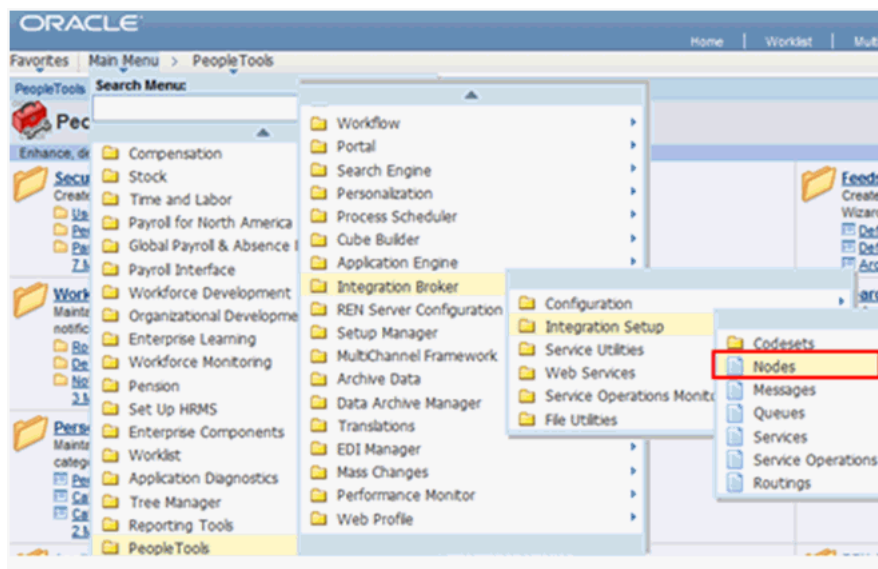
- 4.5.5.1 項「PeopleSoft でのイベントのトリガー」
- 4.5.5.2 項「結果の確認」

### 4.5.5.1 PeopleSoft でのイベントのトリガー

PeopleSoft でイベントをトリガーするには、次の手順を実行します。

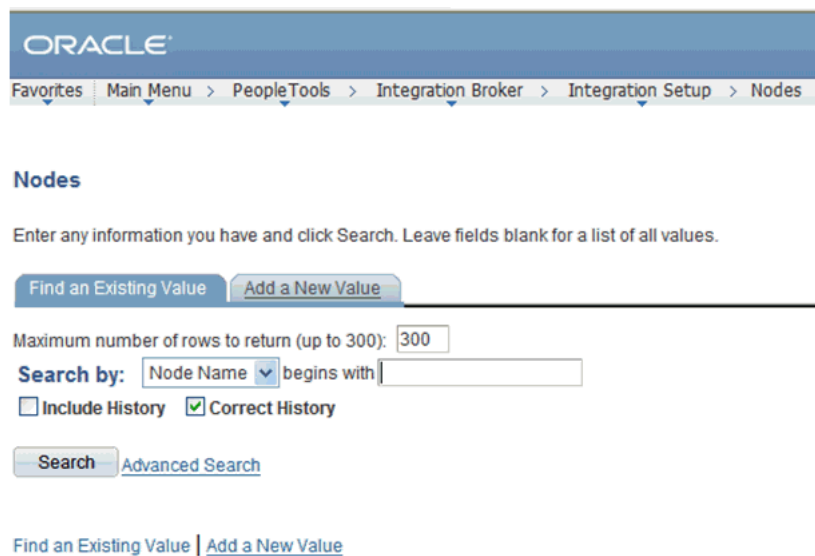
1. 図 4-63 に示すように、PeopleSoft にログインし、「PeopleTools」、「インテグレーションブローカー」、「インテグレーション設定」、「ノード」の順に選択します。

図 4-63 PeopleTools のノード定義



2. 図 4-64 に示すように、「EXTERNAL」など、使用するノード名を入力し、「検索」をクリックします。

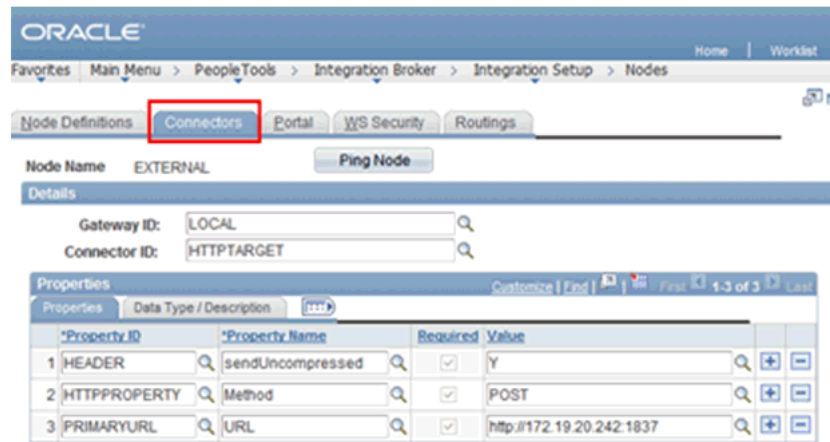
図 4-64 外部ノード名



3. 図 4-65 に示すように、「コネクタ」タブをクリックします。

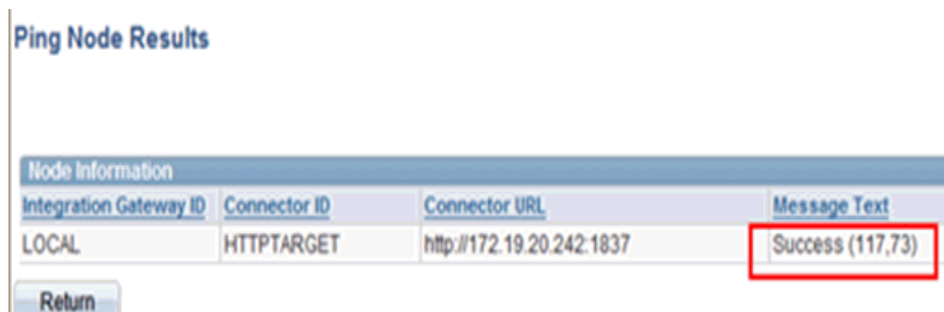


図 4-65 「コネクタ」タブ



- 「コネクタ ID」フィールドに「HTTPTARGET」と入力し、PRIMARYURL フィールドにリスナー URL およびそのポートを入力します。
- 構成を保存するには、「保存」をクリックします。  
成功したことを示すダイアログ・ウィンドウが表示されます。  
リスナー・ステータスをチェックするには、図 4-66 に示すように、「PING ノード」ボタンをクリックし、ウィンドウが表示された場合はトリガーを続行します。

図 4-66 Ping ノード



- メイン・メニューから、「インテグレーションブローカー」、「インテグレーション設定」、「サービス」の順に選択します。
- 図 4-67 に示すように、「サービス」フィールドに「LOCATION\_SYNC」と入力し、「検索」をクリックします。

図 4-67 サービス

ORACLE

Favorites Main Menu > PeopleTools > Integration Broker > Integration Setup > Services

### Services

Enter any information you have and click Search. Leave fields blank for a list of all values.

Find an Existing Value Add a New Value

Maximum number of rows to return (up to 300): 300

Service: begins with LOCATION\_SYNC

Service Alias: begins with

Object owner identifier: =

Case Sensitive

Search Clear Basic Search Save Search Criteria

8. 図 4-68 に示すように、「オペレーション」タブで「LOCATION\_SYNC.VERSION\_1」をクリックします。

図 4-68 「オペレーション」タブ

### Services

Service: LOCATION\_SYNC

Description: Location Table - Sync Message

Comments: Incremental (Component Publish) Message.

Service Alias:

Object Owner ID: HR Core Objects

Namespace: http://xmlns.oracle.com/EnterpriseHCM/services

[Link Existing Operations](#) [View WSDL](#)

**Service Operations**

Service Operation:

Operation Type:  Add

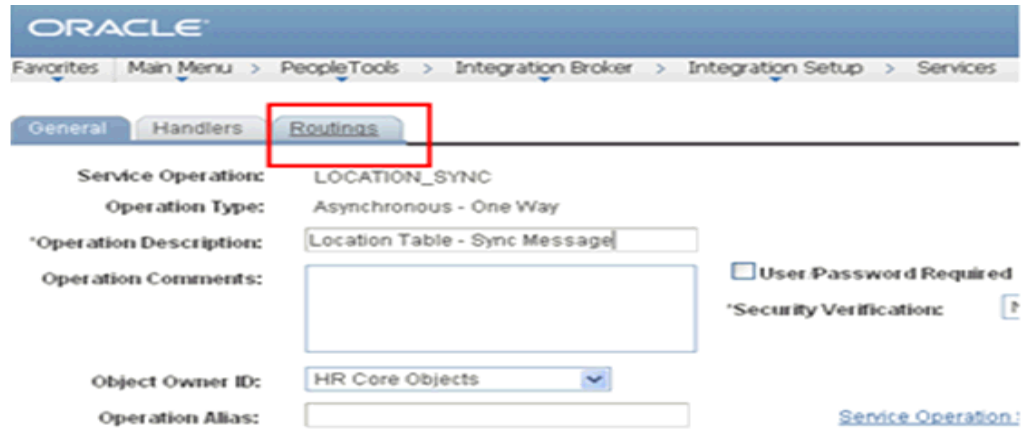
**Existing Operations** Customize | Find | View All | First 1 of 1 Last

Operation Message Links

Operation	Default Version	Description	Active	Operation Type
<b>LOCATION_SYNC.VERSION_1</b>		Location Table - Sync Message	<input checked="" type="checkbox"/>	Asynch

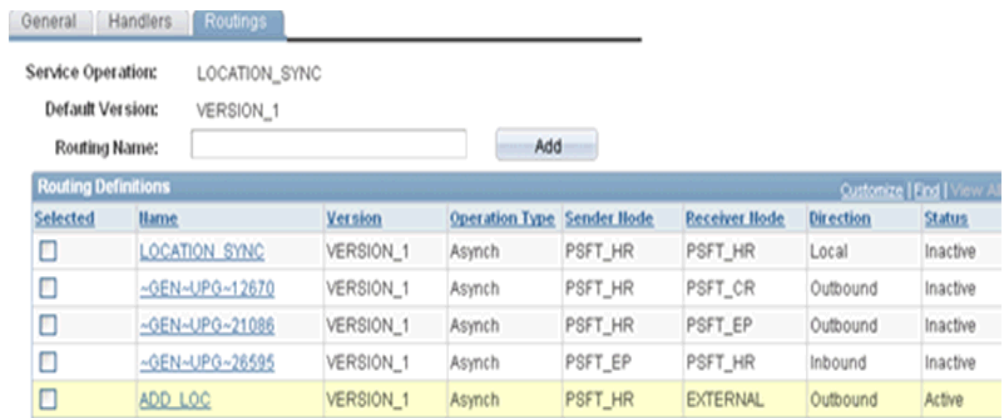
9. 図 4-69 に示すように、「ルーティング」タブをクリックします。

図 4-69 「ルーティング」タブ



10. 図 4-70 に示すように、「ルーティング定義」セクションで「ADD\_LOC」をクリックします。

図 4-70 「ルーティング定義」セクション



11. 図 4-71 に示すように、「コネクタ プロパティ」タブをクリックします。

図 4-71 「コネクタ プロパティ」 タブ

ORACLE

Favorites | Main Menu > PeopleTools > Integration Broker > Integration Setup > Services

Routing Definitions | Parameters | **Connector Properties** | Routing Properties

Routing Name: ADD\_LOC  Active

'Service Operation: LOCATION\_SYNC  System Generated

Version: VERSION\_1

'Description: ADD\_LOC [Graphical View](#)

Comments:

'Sender Node: PSFT\_HR

'Receiver Node: EXTERNAL

12. 図 4-72 に示すように、「コネクタ プロパティ」セクションで HTTP リスナーの URL およびポート番号を入力し、「保存」をクリックします。

図 4-72 「コネクタ プロパティ」 セクション

Routing Definitions | Parameters | **Connector Properties** | Routing Properties

Routing Name: ADD\_LOC

Service Operation: LOCATION\_SYNC

Service Operation Version: VERSION\_1

Gateway ID: LOCAL 🔍

Connector ID: HTTPTARGET 🔍

Property ID	Property Name	Value
HEADER	sendUncompressed	Y 🔍 + -
HTTPPROPERTY	Method	POST 🔍 + -
PRIMARYURL	URL	http://172.19.20.242:1837 🔍 + -

No Match Data

Save Return

13. 図 4-73 に示すように、左ペインの「メインメニュー」から、HRMS の設定、フェウンダーション表、「組織」、「ロケーション」の順に選択します。

図 4-73 PeopleSoft インテグレーション・ブローカーの「コネクタ」タブ

14. 更新するロケーション・レコードを検索するには、図 4-74 に示すように、「検索」をクリックし、変更を行い、「保存」をクリックします。

図 4-74 ロケーション定義ペイン

#### 4.5.5.2 結果の確認

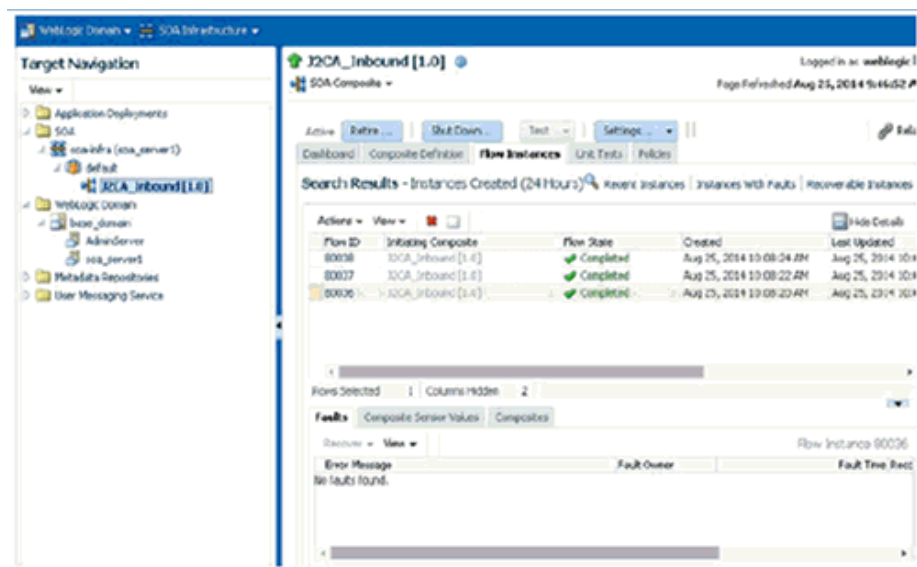
結果を確認するには、次の手順を実行します。

1. 次の URL を使用して、Oracle Enterprise Manager Console にログインします。  
<http://localhost:7001/em>

2. 「SOA」をクリックし、「soa-infra (soa\_server1)」、「default」の順に選択し、「J2CA\_Inbound」をクリックします。
3. 「フロー・インスタンス」をクリックします。

図 4-75 に示すように、インスタンスが受信されます。

図 4-75 「フロー・インスタンス」タブ



## 4.6 サービス統合のためのアウトバウンド BPEL プロセスの設計 (BSE 構成)

この項では、サービス統合のためのアウトバウンド BPM プロセスの設計方法について説明します。

このアウトバウンド・ユース・ケース・シナリオ用のサンプル・プロジェクトが、次に示す Application Adapter のインストール・フォルダに用意されています。

```
<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\BPEL\BSE\Outbound_Project
```

アウトバウンドのデザインタイム構成を完了するには、次のツールが必要です。

- Oracle Adapter アプリケーション・エクスプローラ (アプリケーション・エクスプローラ)
- Oracle JDeveloper BPEL デザイナ (JDeveloper)

この項では、次のトピックについて説明します。

- 4.6.1 項「Web サービスを使用したリクエストおよびレスポンス・サービス用の WSDL ファイルの生成」
- 4.6.2 項「SOA 用の空のコンポジットの作成」
- 4.6.3 項「BPEL アウトバウンド・プロセスの定義」

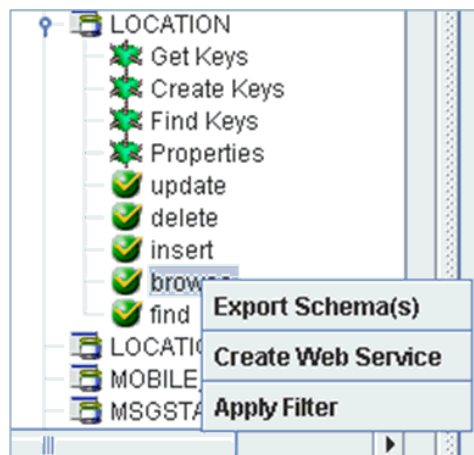
BPEL プロセスを設計する前に、アプリケーション・エクスプローラを使用して、各 WSDL ファイルを生成する必要があります。詳細は、4.6.1 項「Web サービスを使用したリクエストおよびレスポンス・サービス用の WSDL ファイルの生成」を参照してください。

## 4.6.1 Web サービスを使用したリクエストおよびレスポンス・サービス用の WSDL ファイルの生成

Web サービスを使用してリクエストおよびレスポンス・サービス用の WSDL ファイルを生成するには、次の手順を実行します。

1. アプリケーション・エクスプローラを起動し、定義済の PeopleSoft ターゲット (BSE 構成) に接続します。  
ターゲットの定義および PeopleSoft への接続の詳細は、2.4.1 項「PeopleSoft へのターゲットの定義」を参照してください。
2. PeopleSoft ターゲットを接続先まで展開します。
3. 「コンポーネント インターフェイス」を展開し、LOCATION を選択します。
4. 図 4-76 に示すように、操作にナビゲートして右クリックし、メニューから「Web サービスの作成」を選択します。

図 4-76 「Web サービスの作成」オプション



「Web サービスの作成」ダイアログが表示されます。

5. サービス名を入力し、「次へ」をクリックします。
6. 表示される次のダイアログで「OK」をクリックします。  
アプリケーション・エクスプローラで、「ビジネス・サービス」ノードに表示が切り替わり、新規の Web サービスが左ペインに表示されます。
7. 新規 Web サービスを右クリックし、メニューから「WSDL の保存」を選択します。
8. 「wsdls」フォルダの WSDL を保存し、「保存」をクリックします。

これで、JDeveloper での BPEL アウトバウンド・プロセスの定義に必要な最初のステップである、SOA 用の空のコンポジットを作成する準備ができました。

## 4.6.2 SOA 用の空のコンポジットの作成

SOA 用の空のコンポジットを作成するには、次の手順を実行します。

1. 新規の SOA アプリケーションを作成します。
2. SOA アプリケーションの名前を入力し、「次へ」をクリックします。  
「プロジェクトの名前付け」ページが表示されます。
3. プロジェクト名を入力し、「次へ」をクリックします。

「SOA 設定の構成」 ページが表示されます。

- 「コンポジット・テンプレート」 リストで「空のコンポジット」を選択し、「終了」をクリックします。

詳細は、4-9 ページ 4.4.2 項、「SOA 用の空のコンポジットの作成」を参照してください。

### 4.6.3 BPEL アウトバウンド・プロセスの定義

この項では、BPEL アウトバウンド・プロセス・コンポーネントの構成方法について説明します。

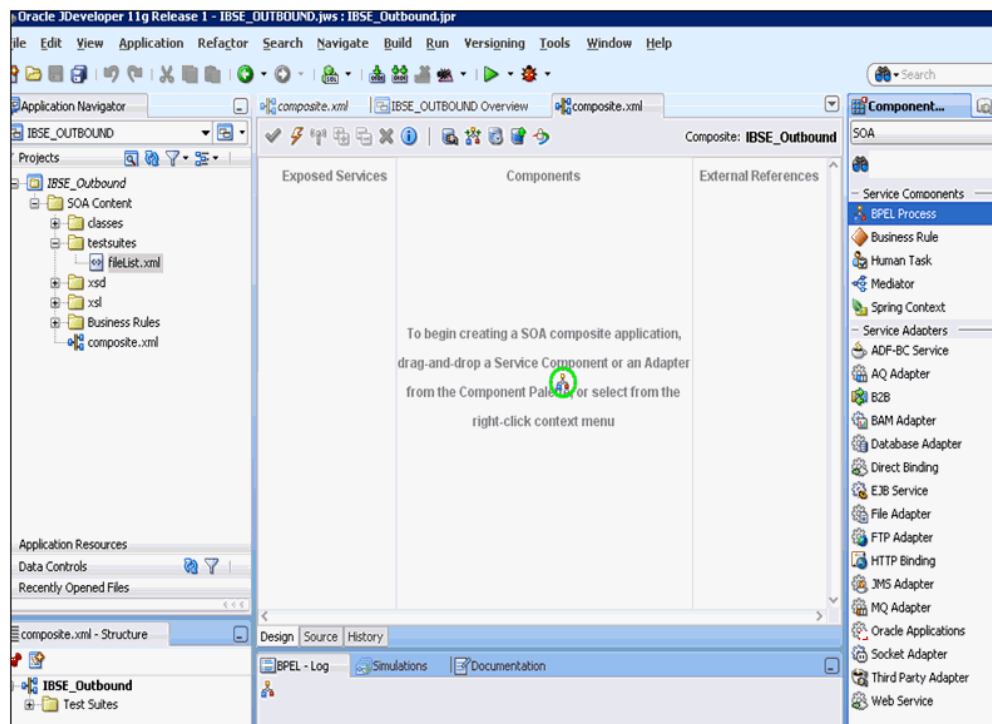
この項では、次のトピックについて説明します。

- 4.6.3.1 項「パートナ・リンクの作成」
- 4.6.3.2 項「作成されたパートナ・リンクを使用した BPEL アクティビティおよびマッピングの作成」

BPEL アウトバウンド・プロセスを定義するには、次の手順を実行します。

- 図 4-77 に示すように、「サービス・コンポーネント」ペインから「BPEL プロセス」コンポーネントを「コンポーネント」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

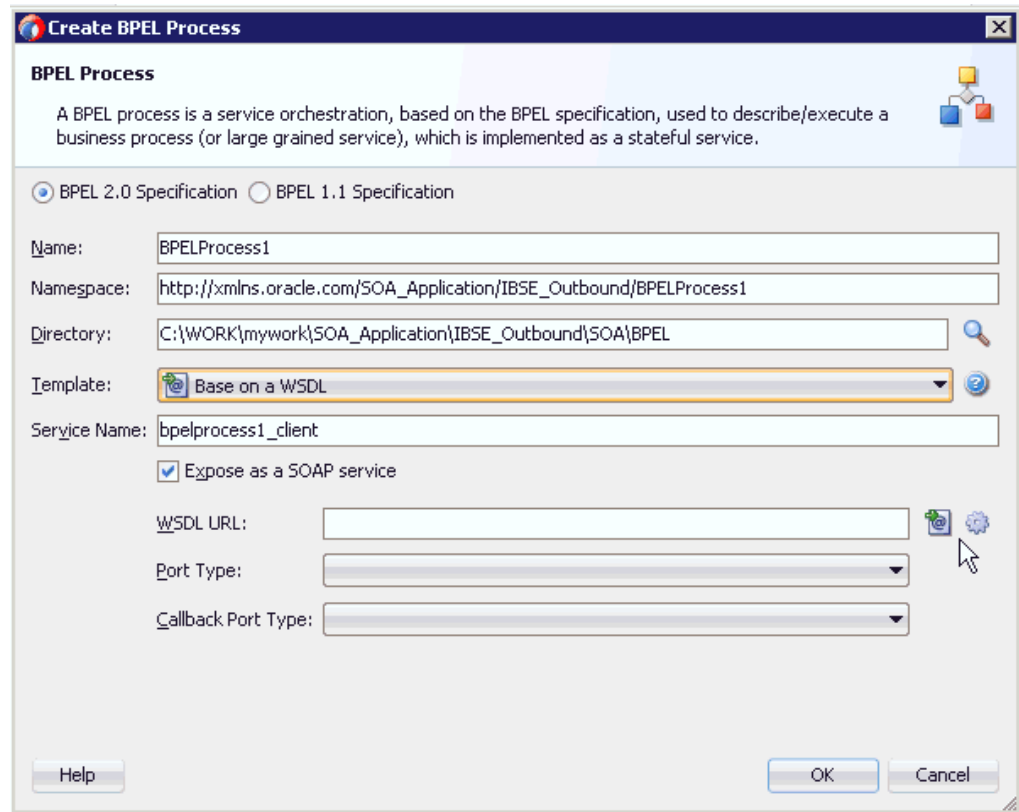
図 4-77 「BPEL プロセス」コンポーネント



- 「名前」フィールドで、新規のアウトバウンド BPEL プロセス・コンポーネントの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。  
デフォルトでは、「BPEL 2.0 仕様」オプションが選択されます。
- 「テンプレート」ドロップダウン・リストで「WSDL に基づく」を選択します。
- 図 4-78 に示すように、「WSDL URL」フィールドの右にある既存の WSDL を検索アイコンをクリックします。



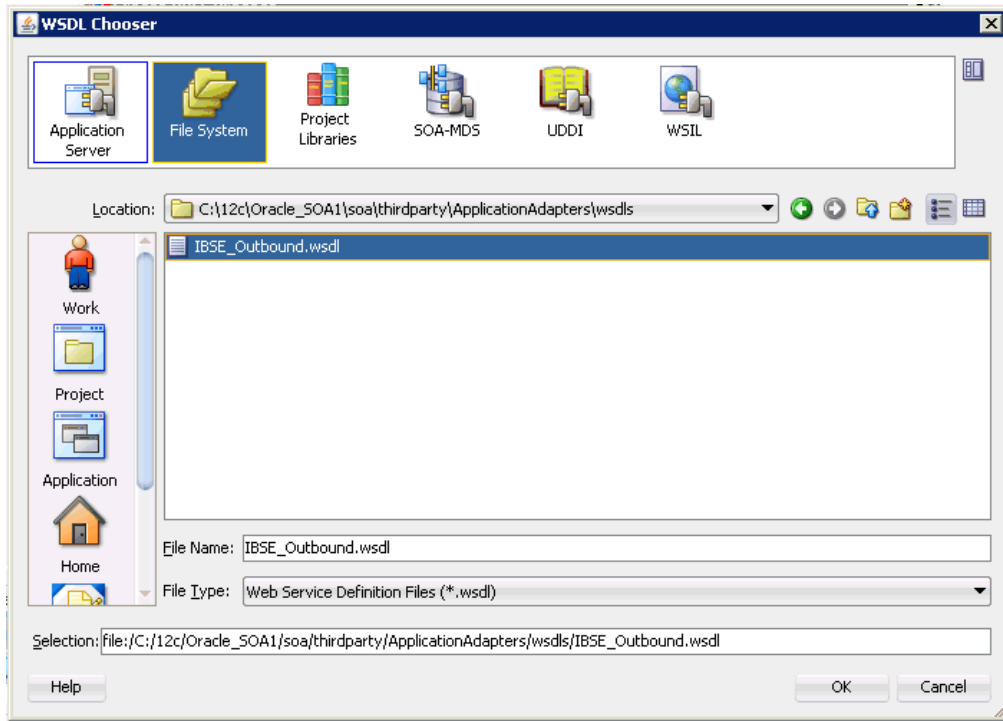
図 4-78 既存の WSDL を検索アイコン



「WSDL チューザ」ダイアログが表示されます。

5. 図 4-79 に示すように、アプリケーション・エクスプローラから WSDL をエクスポートする場所にナビゲートし、WSDL を選択して、「OK」をクリックします。

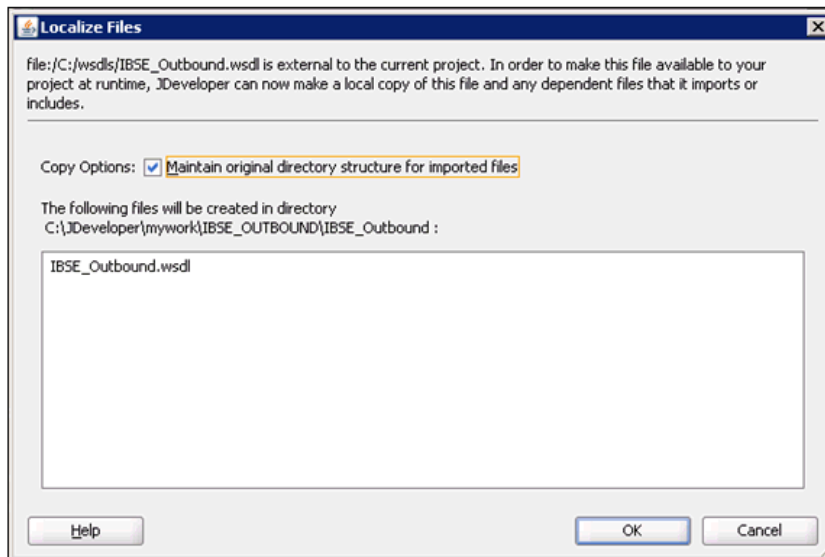
図 4-79 「WSDL チューザ」 ダイアログ



「ファイルのローカライズ」 ウィンドウが表示されます。

- 表示された「ファイルのローカライズ」ウィンドウで、「OK」をクリックします。図 4-80 に示すように、これにより、WSDL ファイルがプロジェクト・フォルダにインポートされます。

図 4-80 「ファイルのローカライズ」 ウィンドウ



「BPEL プロセスの作成」 ウィンドウが表示されます。

- 図 4-81 に示すように、「BPEL プロセス」 ペインで、「OK」をクリックします。

図 4-81 「BPEL プロセス」 ペイン

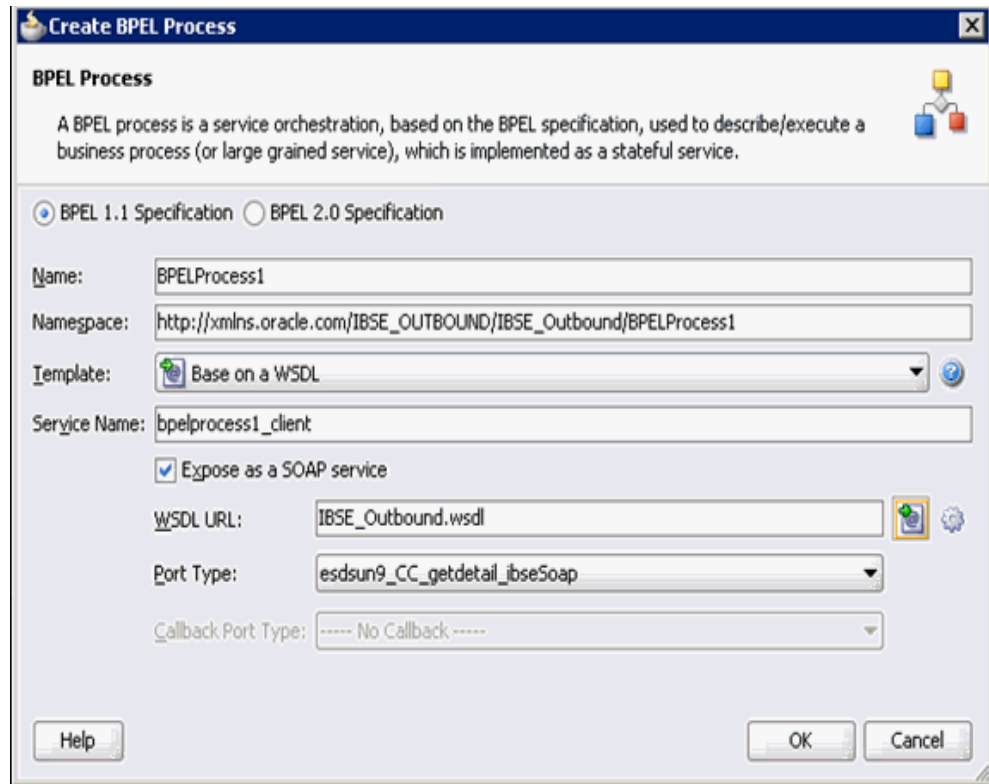
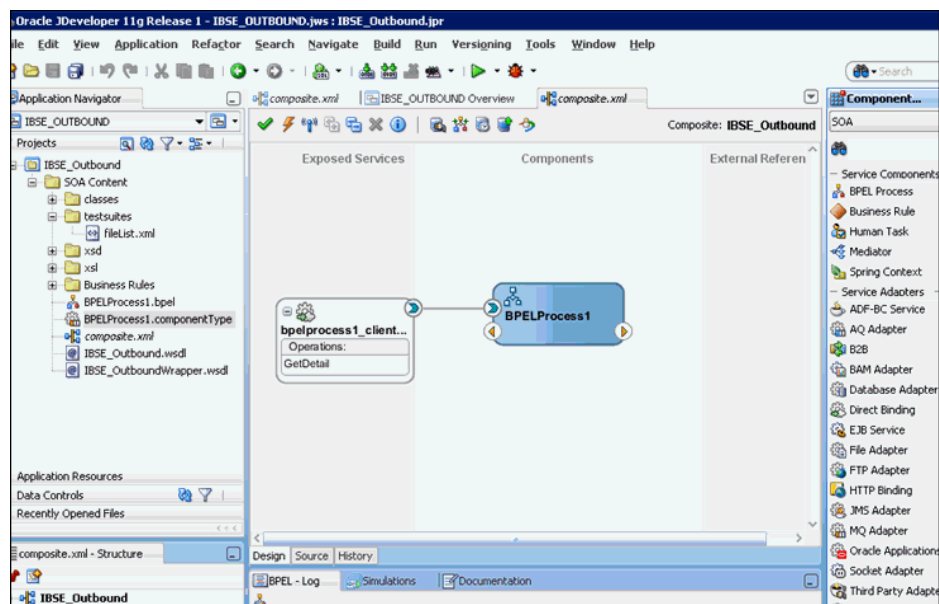


図 4-82 に示すように、「BPEL プロセス」コンポーネントが作成され、表示されます。

図 4-82 「BPEL プロセス」コンポーネント



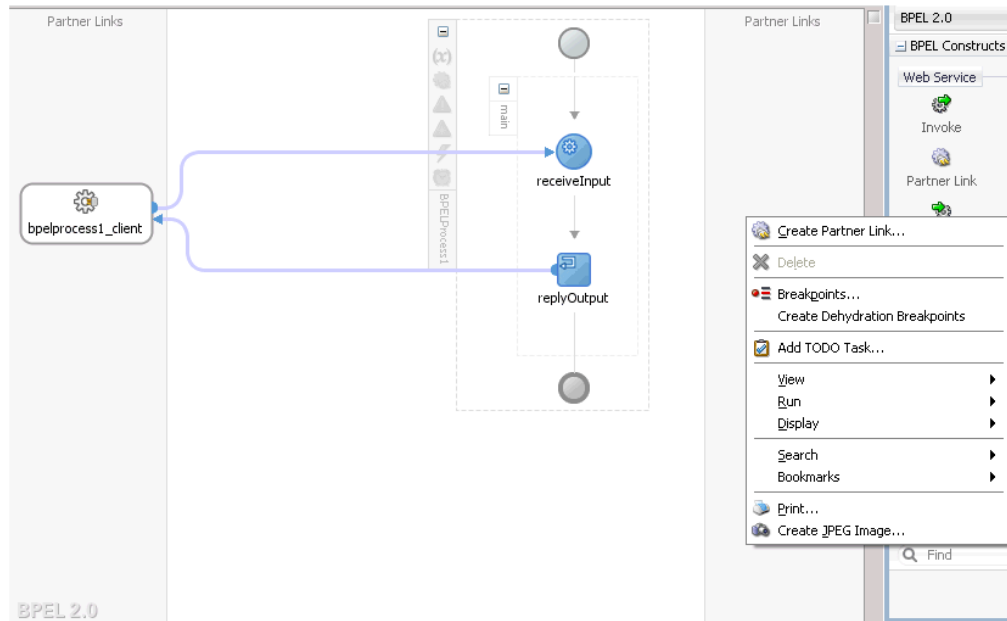
#### 4.6.3.1 パートナ・リンクの作成

この項では、パートナ・リンクを作成する方法について説明します。

パートナ・リンクを作成するには、次の手順を実行します。

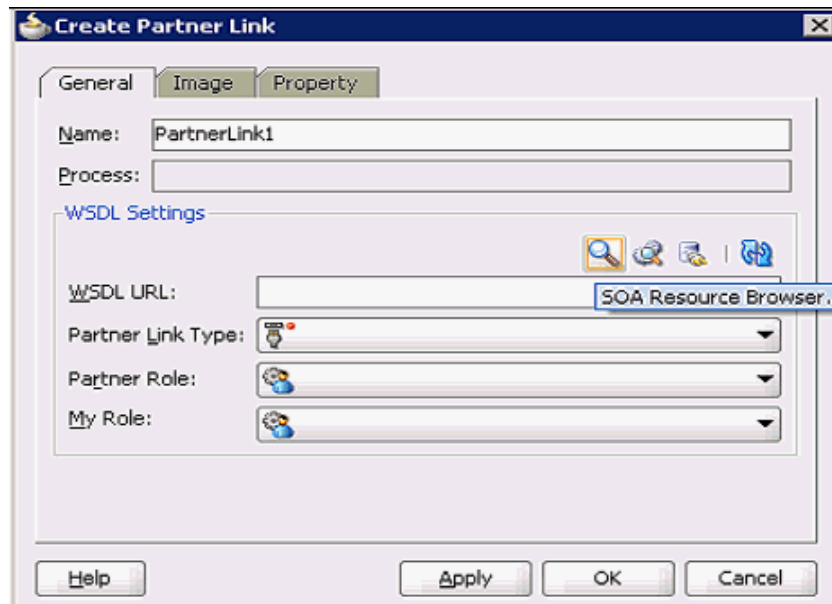
1. 「コンポーネント」ペインで、アウトバウンド BPEL プロセス・コンポーネントをダブルクリックします。
2. 図 4-83 に示すように、「パートナ・リンク」ペインを右クリックし、「パートナ・リンクの作成」を選択します。

図 4-83 パートナ・リンクの作成



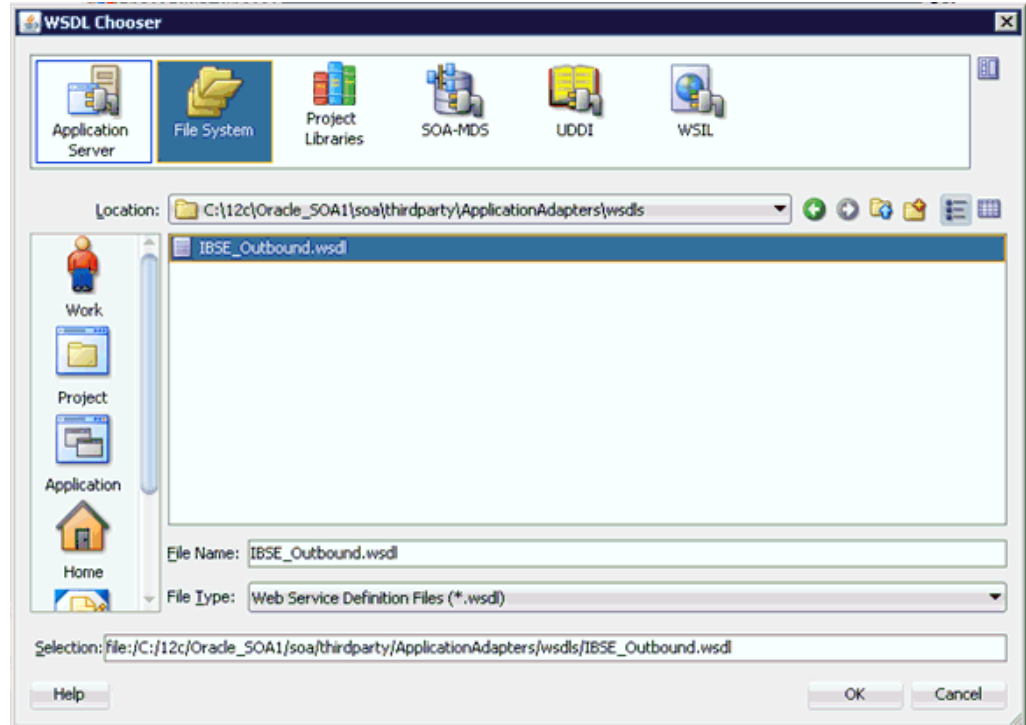
3. 図 4-84 に示すように、表示された「パートナ・リンクの作成」ウィンドウで、適切な名前を指定し、「SOA リソース・ブラウザ」ツールをクリックします。

図 4-84 「SOA リソース・ブラウザ」ツール



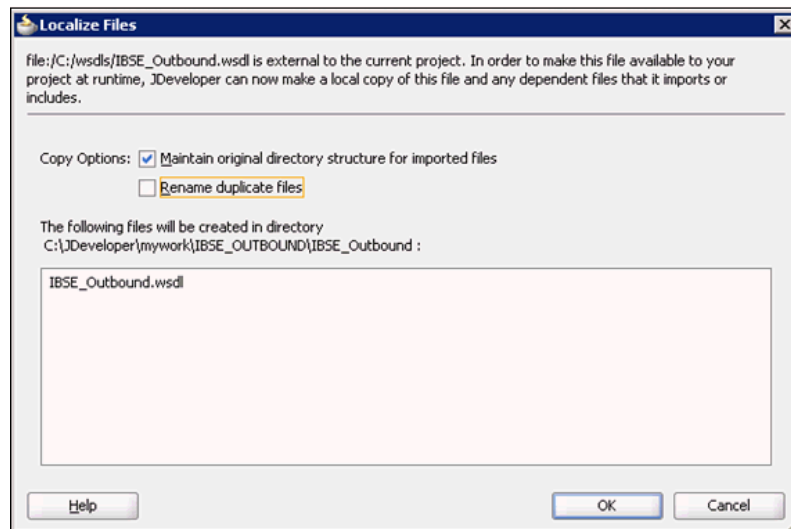
4. 図 4-85 に示すように、表示された「WSDL チューザ」ダイアログで、アプリケーション・エクスプローラから WSDL をエクスポートする場所にナビゲートし、WSDL を選択して、「OK」をクリックします。

図 4-85 「WSDL チューザ」ダイアログ



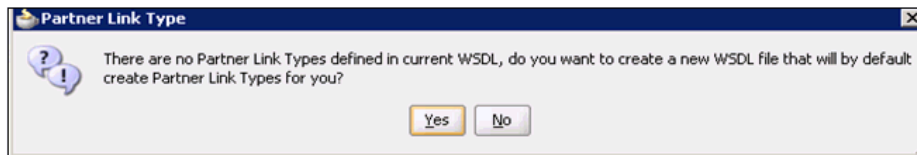
5. 図 4-86 に示すように、表示された「ファイルのローカライズ」ウィンドウで、「重複ファイルの名前変更」チェック・ボックスを選択解除し、「OK」をクリックします。

図 4-86 「ファイルのローカライズ」ウィンドウ



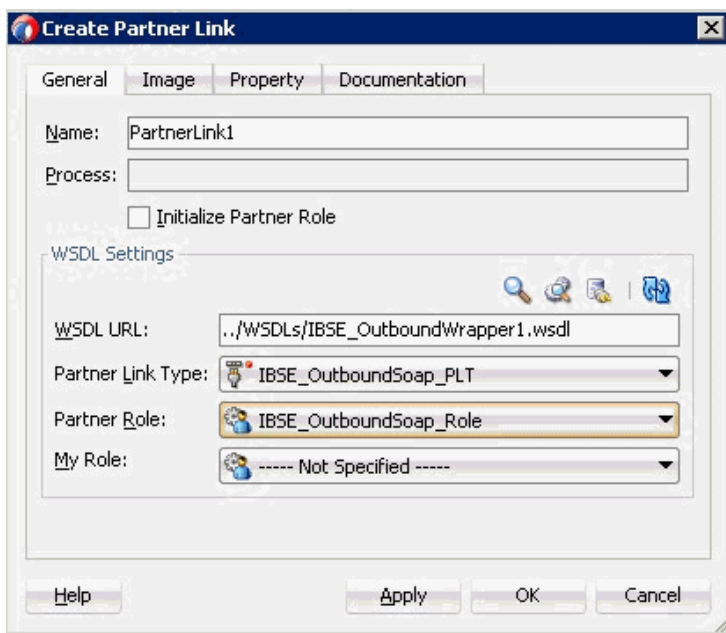
6. 図 4-87 に示すように、表示された「パートナ・リンク・タイプ」ウィンドウで、「はい」をクリックします。

図 4-87 パートナ・リンク・タイプ



7. 表示された「パートナ・リンクの作成」ウィンドウで、「パートナ・ロール」ドロップダウン・リストを展開し、使用可能なパートナ・ロールを選択します。
8. 図 4-88 に示すように、「適用」、「OK」の順にクリックします。

図 4-88 パートナ・リンクの作成



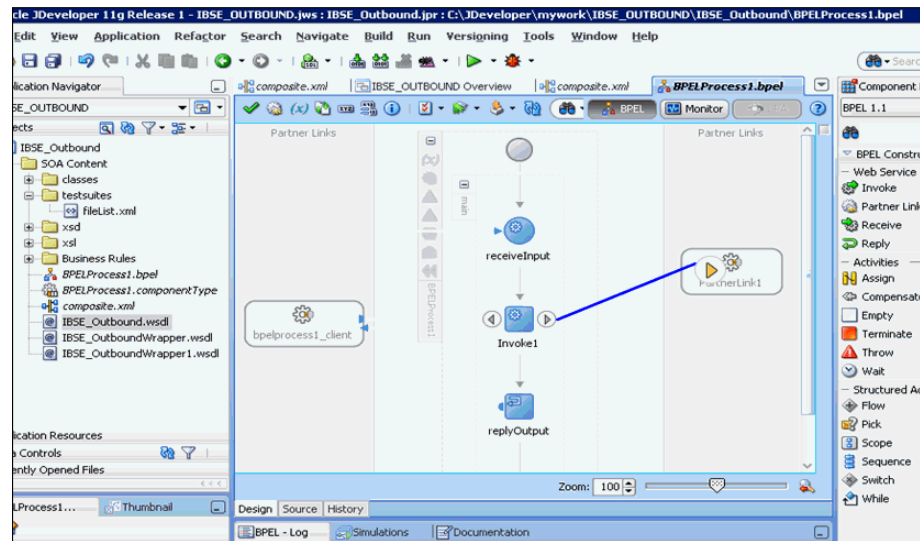
#### 4.6.3.2 作成されたパートナ・リンクを使用した BPEL アクティビティおよびマッピングの作成

この項では、作成されたパートナ・リンクを使用して BPEL アクティビティおよびマッピングを作成する方法について説明します。

作成されたパートナ・リンクを使用して BPEL アクティビティおよびマッピングを作成するには、次の手順を実行します。

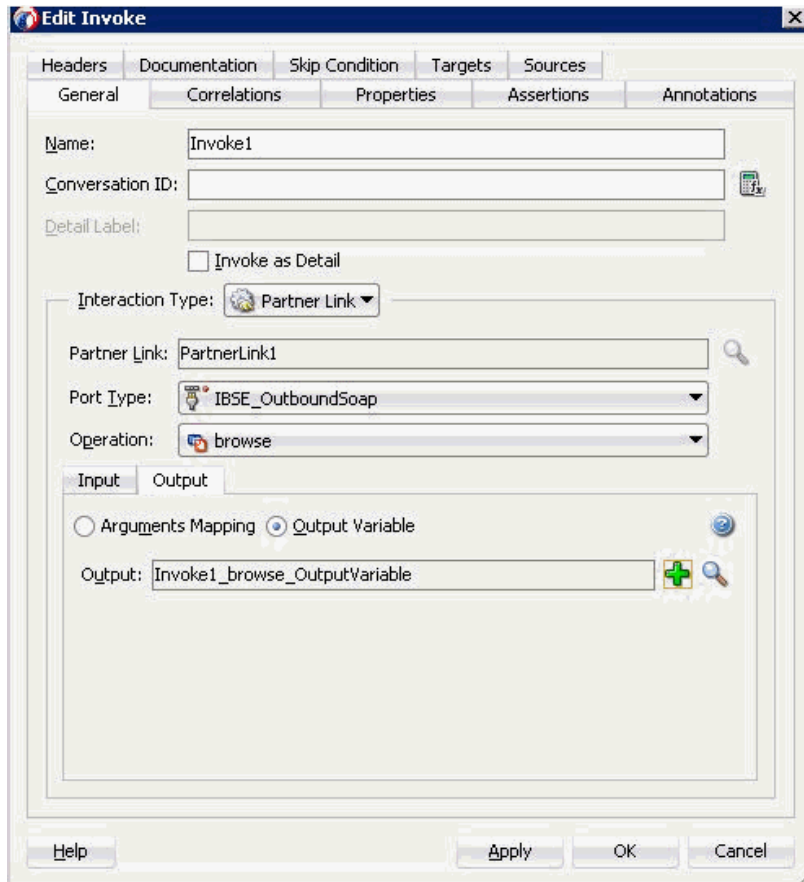
1. 「BPEL コンストラクト」から「Invoke」アクティビティ・コンポーネントを「コンポーネント」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。「receiveInput」アクティビティ・コンポーネントと「replyOutput」アクティビティ・コンポーネントの間に置きます。
2. 図 4-89 に示すように、新規の「Invoke」アクティビティ・コンポーネント (Invoke1) と「Partner Link」コンポーネント (Partner link1) の間に接続を作成します。

図 4-89 「パートナ・リンク」コンポーネント



3. 表示された「起動の編集」ウィンドウで、「入力」フィールドの右のプラス (+) アイコンをクリックして、新規入力変数を構成します。
4. 新規の入力変数に示されたデフォルト値を受け入れ、「OK」をクリックします。
5. 「出力」フィールドの右にあるプラス (+) アイコンをクリックして、新規出力変数を構成します。
6. 新規の出力変数に示されたデフォルト値を受け入れ、「OK」をクリックします。
7. 図 4-90 に示すように、「適用」、「OK」の順にクリックします。

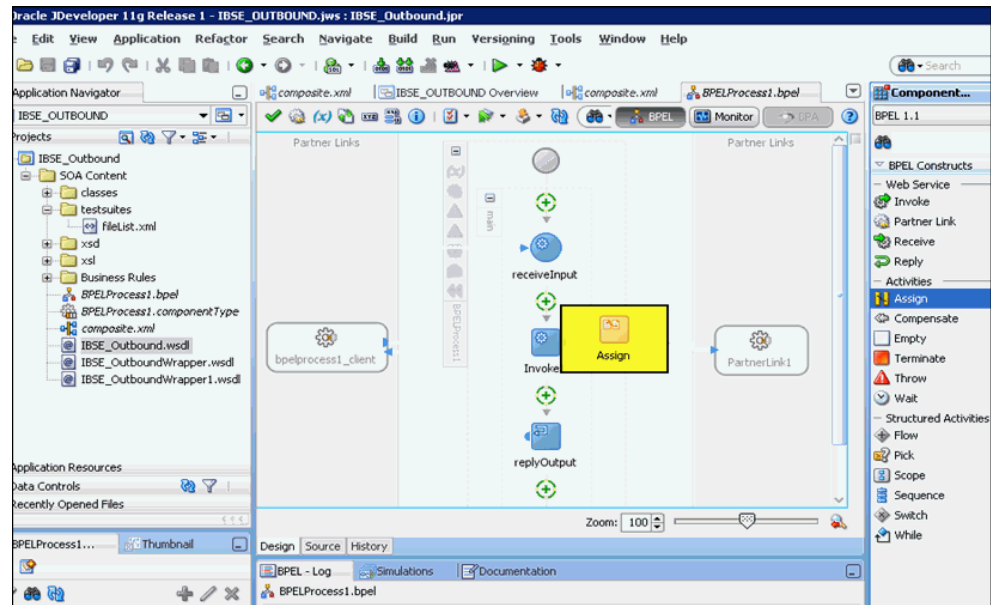
図 4-90 「起動の編集」 ウィンドウ



8. 「BPEL コンストラクト」 から「**Assign**」 アクティビティ・コンポーネントを「コンポーネント」 ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。図 4-91 に示すように、「**Receive**」 アクティビティ・コンポーネント (receiveInput) と「**Invoke**」 アクティビティ・コンポーネント (Invoke1) の間に置きます。

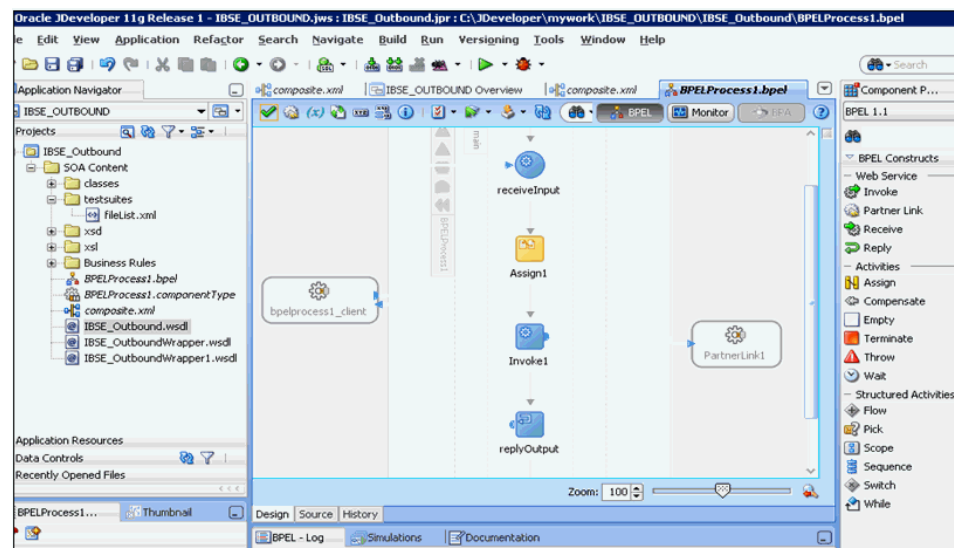


図 4-91 「Assign」 アクティビティ・コンポーネント



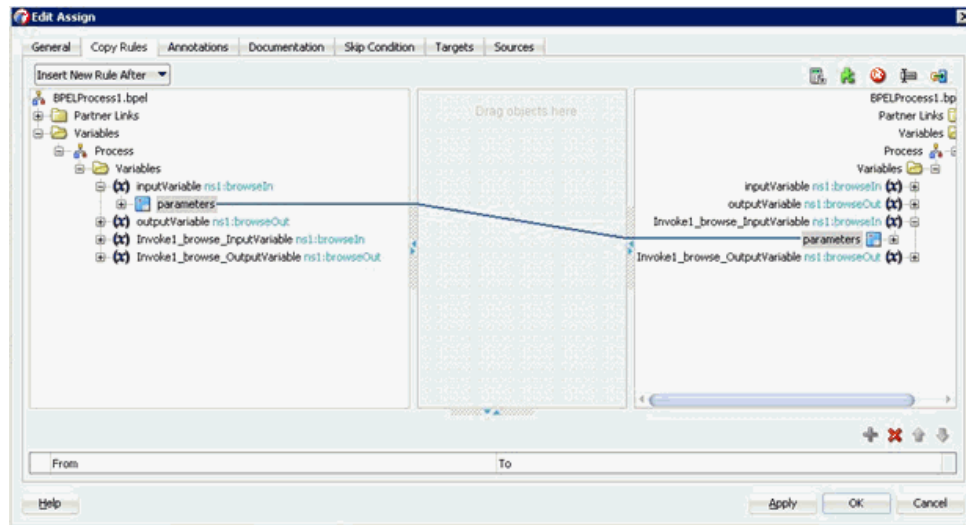
9. 図 4-92 に示すように、新規の「Assign」アクティビティ・コンポーネント (Assign1) をダブルクリックします。

図 4-92 「Assign」 アクティビティ・コンポーネント



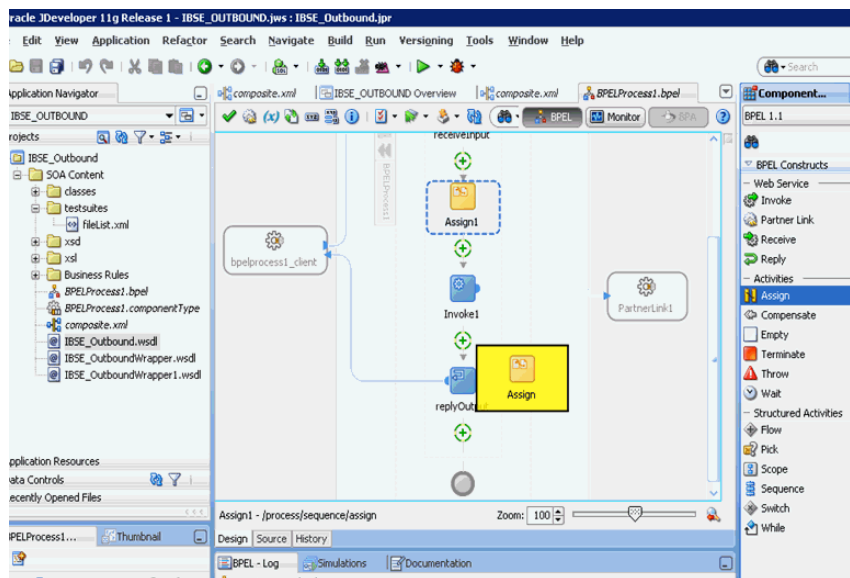
10. 左ペインの「変数」の下で、「InputVariable」を展開し、「parameters」を選択します。
11. 右ペインの「変数」の下で、「Invoke1\_browse\_InputVariable」を展開し、「parameters」を選択します。
12. 図 4-93 に示すように、「InputVariable」パラメータを「Invoke1\_browse\_InputVariable」パラメータにドラッグしてマップします。

図 4-93 「InputVariable」パラメータ



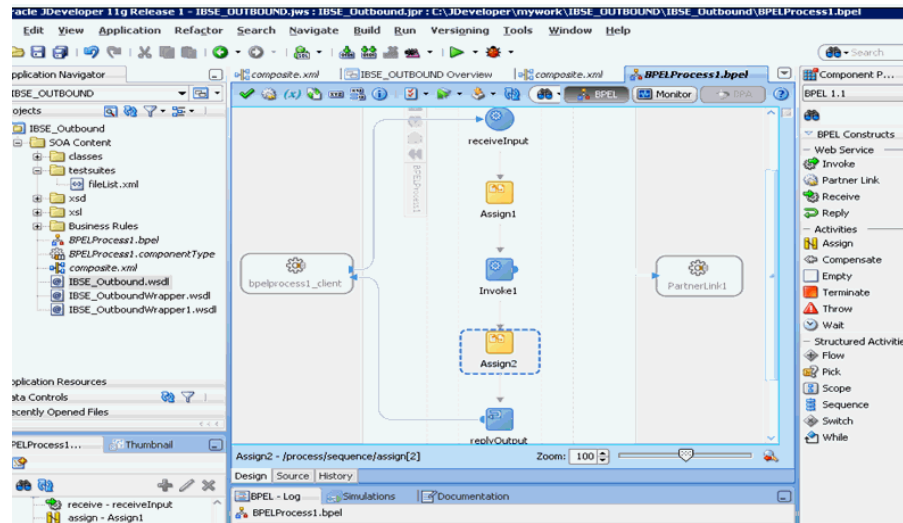
13. 「適用」、「OK」の順にクリックします。
14. 図 4-94 に示すように、「Assign」アクティビティ・コンポーネントを「コンポーネント」ペインにドラッグ・アンド・ドロップし、「Invoke」アクティビティ (Invoke1) と「Reply」アクティビティ (replyOutput) の間に置きます。

図 4-94 「Assign」アクティビティ・コンポーネント



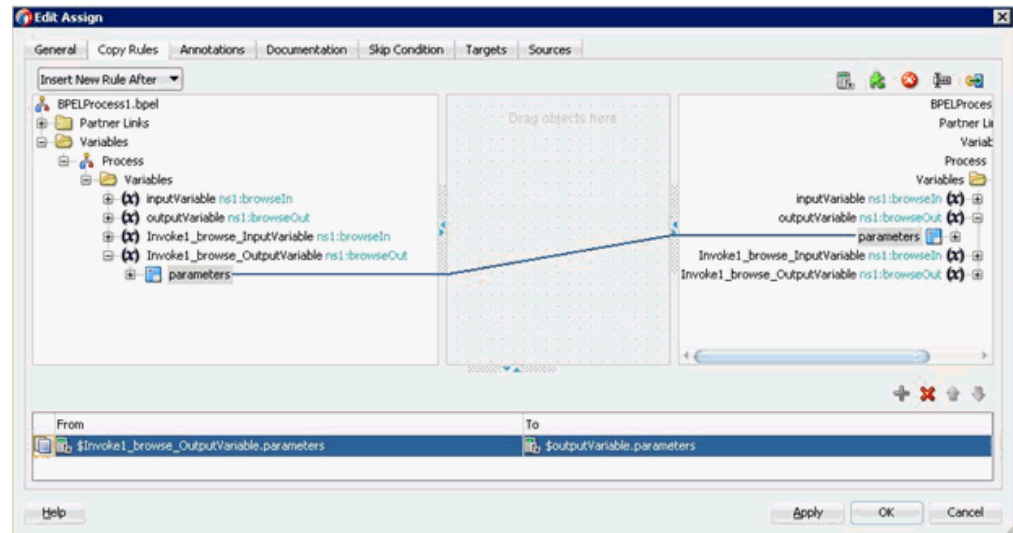
15. 図 4-95 に示すように、新規の「Assign」アクティビティ・コンポーネント (Assign2) をダブルクリックします。

図 4-95 新規の「Assign」アクティビティ・コンポーネント



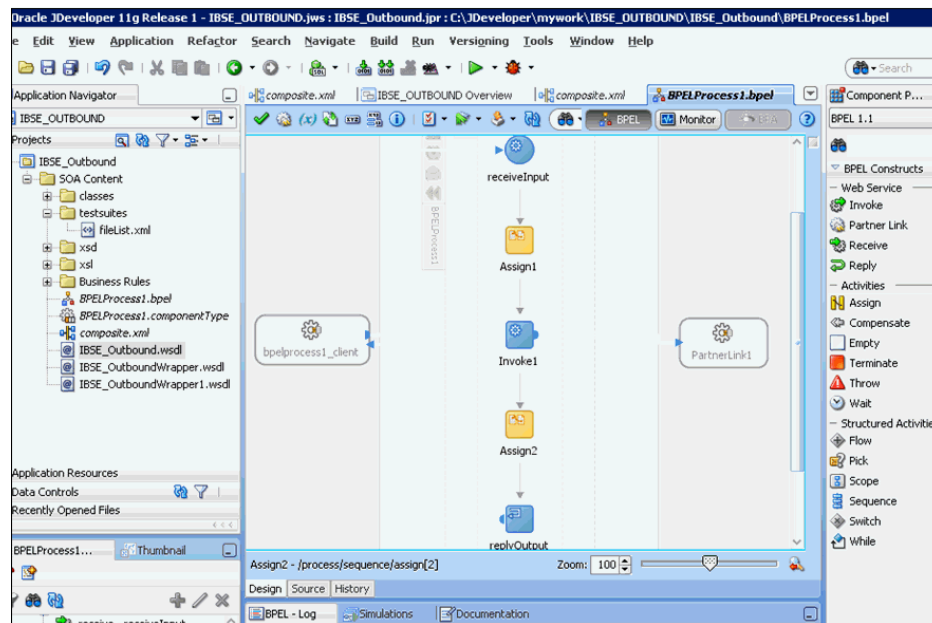
16. 左ペインの「変数」の下で、「Invoke1\_browse\_OutputVariable」を展開し、「parameters」を選択します。
17. 右ペインの「変数」の下で、「outputVariable」を展開し、「parameters」を選択します。
18. 図 4-96 に示すように、「Invoke1\_browse\_OutputVariable」パラメータを「outputVariable」パラメータにドラッグしてマップします。

図 4-96 「outputVariable」パラメータ



19. 「適用」、「OK」の順にクリックします。
- 図 4-97 に示すように、コンポーネント・ペインに戻ります。

図 4-97 コンポーネント・ペイン



20. メニュー・バーの「すべて保存」アイコンをクリックし、構成された新規のアウトバウンド BPEL プロセス・コンポーネントを保存します。

これで、BPEL アウトバウンド・プロセスをデプロイする準備ができました。手順は、4-28 ページ 4.4.4 項「BPEL アウトバウンド・プロセスのデプロイ」に記載されている手順と同じです。

デプロイ後、4-32 ページ 4.4.5 項「Oracle Enterprise Manager Console での入力 XML ドキュメントの起動」で示されているように入力 XML を起動できます。

---

## Oracle SOA Suite でのメディエータ・サービス・コンポーネントとの統合

この章では、Oracle SOA Suite でのメディエータ・サービス・コンポーネントとの統合について説明します。次のトピックが含まれています。

- [5.1 項「新規のアプリケーション・サーバー接続の構成」](#)
- [5.2 項「メディエータ・アウトバウンド・プロセスの構成 \(J2CA 構成\)」](#)
- [5.3 項「メディエータ・インバウンド・プロセスの構成 \(J2CA 構成\)」](#)
- [5.4 項「メディエータ・アウトバウンド・プロセスの構成 \(BSE 構成\)」](#)

この章で示すシナリオには、次の前提条件が必要です。

### 前提条件

インストールおよび構成に関する要件は次のとおりです。

- Oracle Application Adapter for PeopleSoft が Oracle WebLogic Server にインストールされている必要があります。
- PeopleSoft がインバウンドおよびアウトバウンド処理用に構成されている必要があります。

**関連項目：** *Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapters インストール・ガイド*

この章の例では、PeopleSoft とのサービスおよびイベント統合を示すのに必要な構成手順について説明しています。これを使用する前に、次のことについて理解する必要があります。

- サービスおよびイベント用に Oracle Application Adapter for PeopleSoft を構成する方法。詳細は、[第 2 章「Oracle Application Adapter for PeopleSoft 構成」](#)を参照してください。
- Oracle JDeveloper で新規のアプリケーション・サーバーおよび統合サーバーを構成する方法。詳細は、[第 4 章「Oracle SOA Suite での BPEL サービス・コンポーネントの統合」](#)を参照してください。

### メディエータ統合の概要

メディエータは、包括的なアプリケーション統合フレームワークを提供します。Oracle Application Adapter for PeopleSoft をメディエータと使用することにより、カスタム・コードの記述を必要とせずに、シームレスにエンタープライズ・ソフトウェアを統合できます。カスタム・コード・ソリューションではなく機能的なモデリングなので、ソフトウェア再利用が可能になり、ソフトウェアのライフサイクルで発生する複雑さや管理上の問題を削減します。この統合モデルは、高レベルの統合ロジック

と低レベルのプラットフォーム・サービスの2つのコンポーネントで構成されています。

Oracle WebLogic Server とのアダプタの統合、メディエータは次の2つのステップからなるプロセスです。

1. **デザイン・タイム**: サービスおよびイベント用に Oracle Application Adapter for PeopleSoft をアプリケーション・エクスペローラで構成します。詳細は、[第2章「Oracle Application Adapter for PeopleSoft 構成」](#)を参照してください。統合ロジックは Oracle JDeveloper でモデル化されます。メタデータはリポジトリ内に格納されます。
2. **実行時**: 基になるプラットフォームでは、このメタデータをランタイム・インストラクションとして処理し、特定のアプリケーション間の通信を可能にします。

## 5.1 新規のアプリケーション・サーバー接続の構成

Oracle JDeveloper での新規アプリケーション・サーバー接続の構成方法の詳細は、[4.3 項「新規のアプリケーション・サーバー接続の構成」](#)を参照してください。

## 5.2 メディエータ・アウトバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成)

この項では、Oracle JDeveloper でメディエータ・プロジェクトを使用して PeopleSoft システム用にメディエータ・アウトバウンド・プロセスを構成する方法について説明します。

このアウトバウンド・ユース・ケース・シナリオ用のサンプル・プロジェクトが、次に示す Application Adapter のインストール・フォルダに用意されています。

```
<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\Mediator\J2CA\Outbound_Project
```

この項では、次のトピックについて説明します。

- [5.2.1 項「SOA 用の空のコンポジットの作成」](#)
- [5.2.2 項「メディエータ・アウトバウンド・プロセスの定義」](#)
- [5.2.3 項「メディエータ・アウトバウンド・プロセスのデプロイ」](#)
- [5.2.4 項「Oracle Enterprise Manager Console での入力 XML ドキュメントの起動」](#)

### 前提条件

メディエータ・アウトバウンド・プロセスを設計する前に、アプリケーション・エクスペローラを使用して各 WSDL ファイルを生成する必要があります。詳細は、[4.4.1 項「リクエスト/レスポンス型のサービス用の WSDL の生成」](#) (4-8 ページ) を参照してください。

### 5.2.1 SOA 用の空のコンポジットの作成

SOA 用に空のコンポジットを作成するには、次のステップを実行します。

1. 新規の SOA アプリケーションを作成します。
2. 新規の SOA アプリケーションの名前を入力し、「[次へ](#)」をクリックします。  
「プロジェクトの名前付け」ページが表示されます。
3. プロジェクト名を入力し、「[次へ](#)」をクリックします。

「SOA 設定の構成」 ページが表示されます。

4. 「コンポジット・テンプレート」 リストで「空のコンポジット」を選択し、「終了」をクリックします。

詳細は、[4.4.2 項「SOA 用の空のコンポジットの作成」](#) (4-9 ページ) を参照してください。

## 5.2.2 メディエータ・アウトバウンド・プロセスの定義

この項では、メディエータ・アウトバウンド・プロセスの定義方法について説明します。次のトピックで構成されています。

- [5.2.2.1 項「サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成」](#)
- [5.2.2.2 項「アウトバウンド・メディエータ・プロセス・コンポーネントの構成」](#)
- [5.2.2.3 項「ルーティング・ルールの構成」](#)
- [5.2.2.4 項「12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応」](#)

### 5.2.2.1 サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成

サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントを作成するには、次のステップを実行します。

1. 「サービス・アダプタ」 ペインから「サード・パーティ・アダプタ」 コンポーネントを「外部参照」 ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。
2. サード・パーティ・アダプタ・サービスの名前を入力します。
3. 「タイプ」 ドロップダウン・リストで「参照」が選択されていることを確認します (デフォルト)。
4. 「WSDL URL」 フィールドの右の「既存の WSDL を検索します。」 アイコンをクリックします。
5. 次のディレクトリまでブラウズし、アウトバウンド WSDL ファイルを選択します。

```
<ADAPTER_HOME>\wsdls
```

6. 「OK」 をクリックします。
7. 「OK」 をクリックします。

アウトバウンド WSDL ファイルおよび関連リクエスト/レスポンス XML スキーマ・ファイル (.xsd) が、作成済のプロジェクト・フォルダにインポートされます。

8. 「JCA ファイル」 フィールドの右の「JCA ファイルを検索します。」 アイコンをクリックします。
9. 次のディレクトリまでブラウズし、JCA プロパティ・ファイルを選択します。

```
<ADAPTER_HOME>\wsdls
```

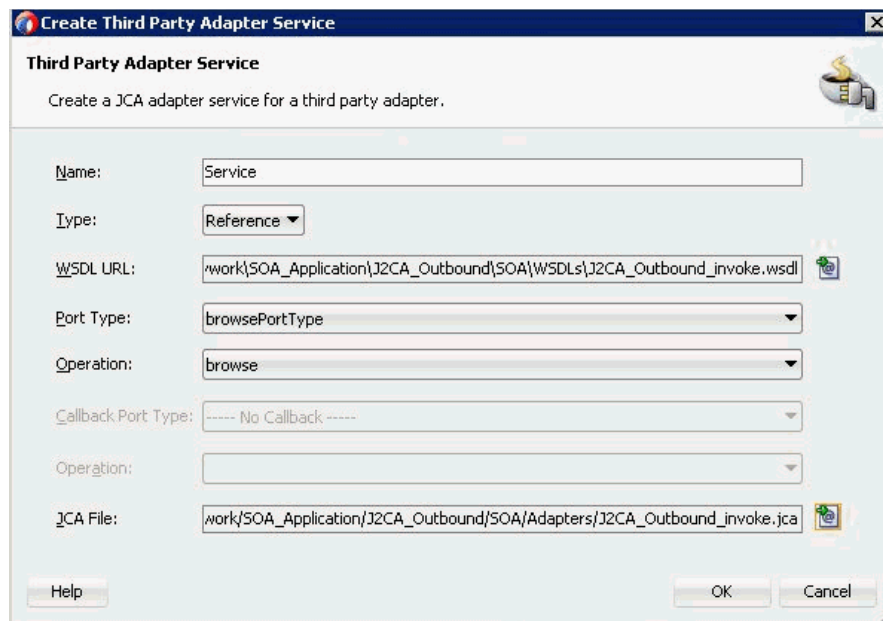
10. 「OK」 をクリックします。

「ファイルのコピー」 確認メッセージが表示されます。

11. 「はい」 をクリックします。

JCA プロパティ・ファイルのコピーがプロジェクト・フォルダ内に作成されます。

図 5-1 「サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成」ダイアログ



12. 「OK」をクリックします。

サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネント (GetDetail) が作成され、「外部参照」ペインに表示されます。

これで、アウトバウンド・メディエータ・プロセス・コンポーネントを構成する準備ができました。

詳細は、5.2.2.1 項「サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成」(5-3 ページ) を参照してください。

### 5.2.2.2 アウトバウンド・メディエータ・プロセス・コンポーネントの構成

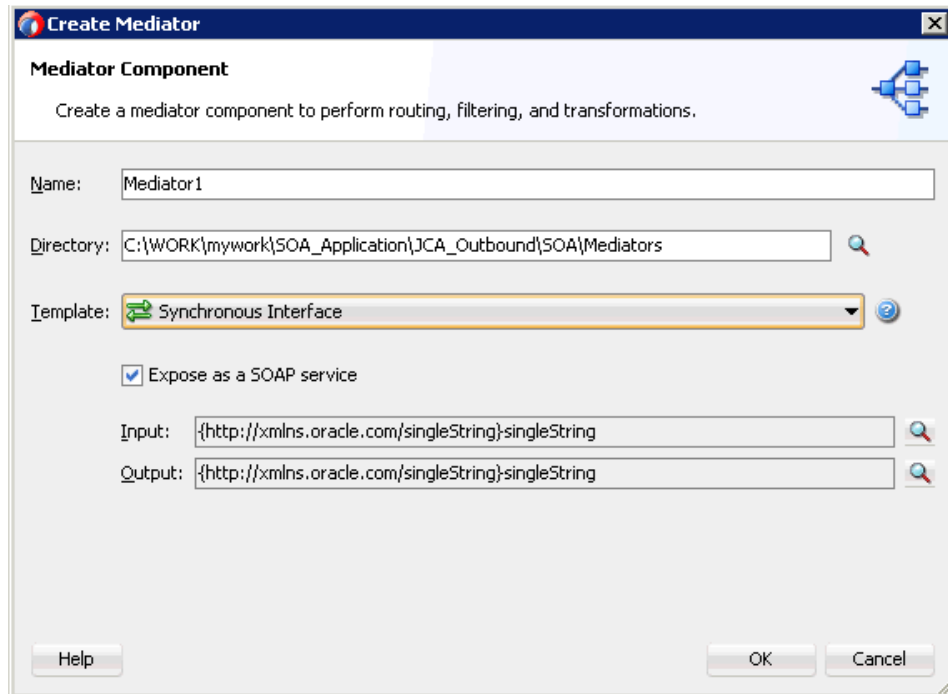
アウトバウンド・メディエータ・プロセス・コンポーネントを構成するには、次のステップを実行します。

1. 「コンポーネント」ペインからメディエータ・プロセス・コンポーネントを「コンポーネント」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

図 5-2 に示すように、「メディエータの作成」ダイアログが表示されます。



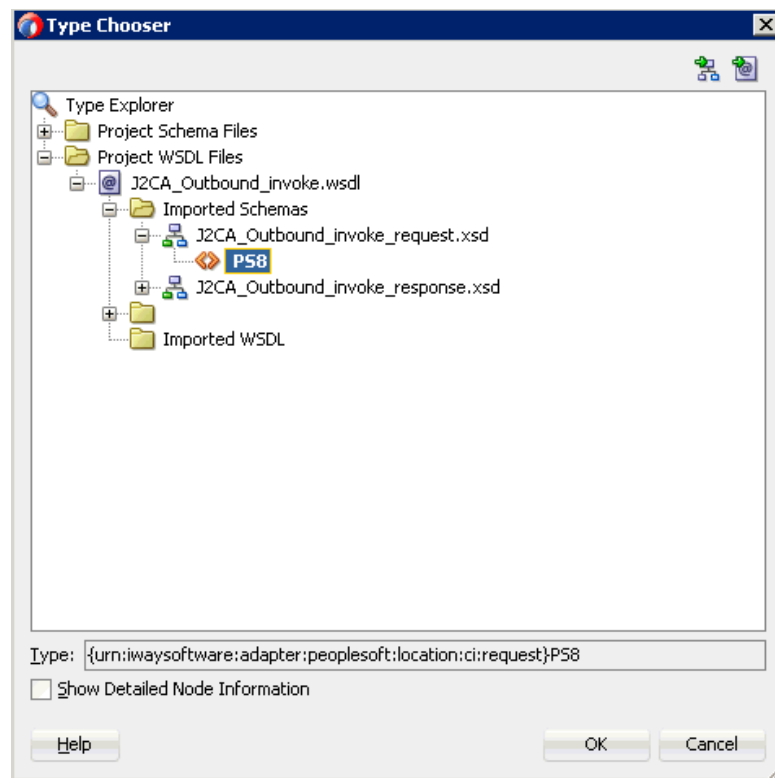
図 5-2 「メディエータの作成」ダイアログ



2. 「名前」フィールドで、新規のアウトバウンド・メディエータ・プロセス・コンポーネントの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
3. 「テンプレート」ドロップダウン・リストから、「同期インタフェース」を選択します。
4. 関連する XML リクエスト・スキーマ・ファイルの選択用の「入力」フィールドの右にある「参照」アイコンをクリックします。

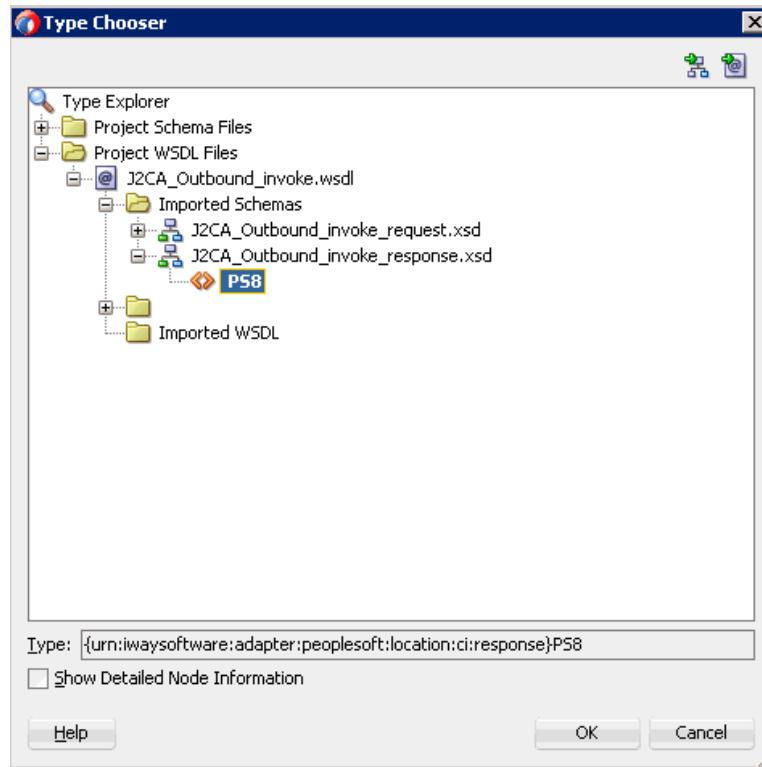
図 5-3 に示すように、「タイプ・チューザ」ダイアログが表示されます。

図 5-3 「タイプ・チューザ」ダイアログ



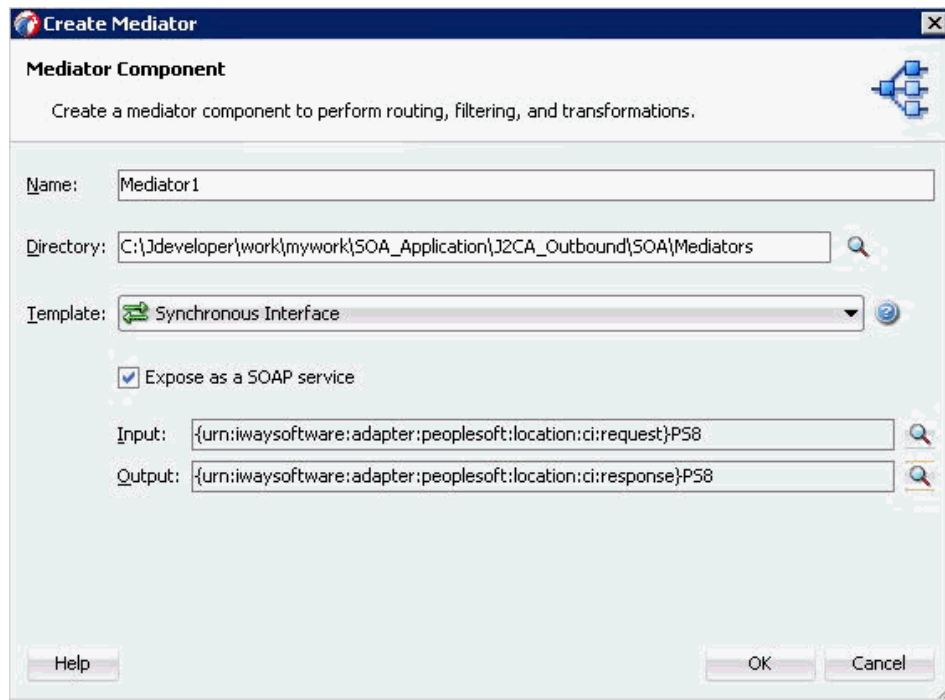
5. 「プロジェクトの WSDL ファイル」、「J2CA\_Outbound\_invoke.wsdl」、「インポートしたスキーマ」、「J2CA\_Outbound\_invoke\_request.xsd」の順に展開し、「PS8」を選択します。
6. 「OK」をクリックします。  
メディアータの作成」ダイアログに戻ります。
7. 関連する XML レスポンス・スキーマ・ファイルの選択用の「出力」フィールドの右にある「参照」アイコンをクリックします。  
図 5-4 に示すように、「タイプ・チューザ」ダイアログが表示されます。

図 5-4 「タイプ・チューザ」 ダイアログ



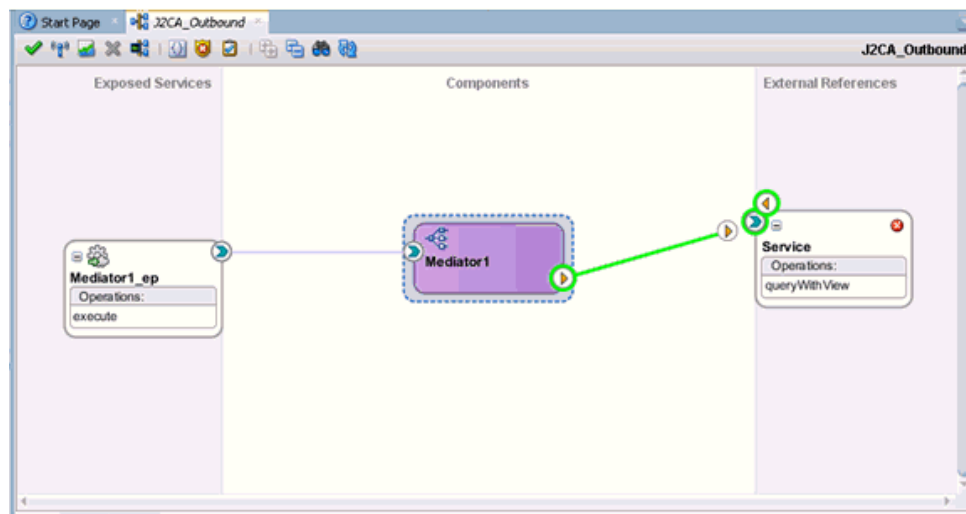
8. 「プロジェクトの WSDL ファイル」、「J2CA\_Outbound\_invoke.wsdl」、「インポートしたスキーマ」、「J2CA\_Outbound\_invoke\_response.xsd」の順に展開し、「PS8」を選択します。
9. 「OK」をクリックします。  
☒ 5-5 に示すように、「メディアエータの作成」ダイアログに戻ります。

図 5-5 「メディエータの作成」 ダイアログ



10. 「OK」をクリックします。
11. 図 5-6 に示すように、アウトバウンド・メディエータ・プロセス・コンポーネントとサード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネント間の接続を作成します。

図 5-6 作成された接続



これで、ルーティング・ルールを構成する準備ができました。

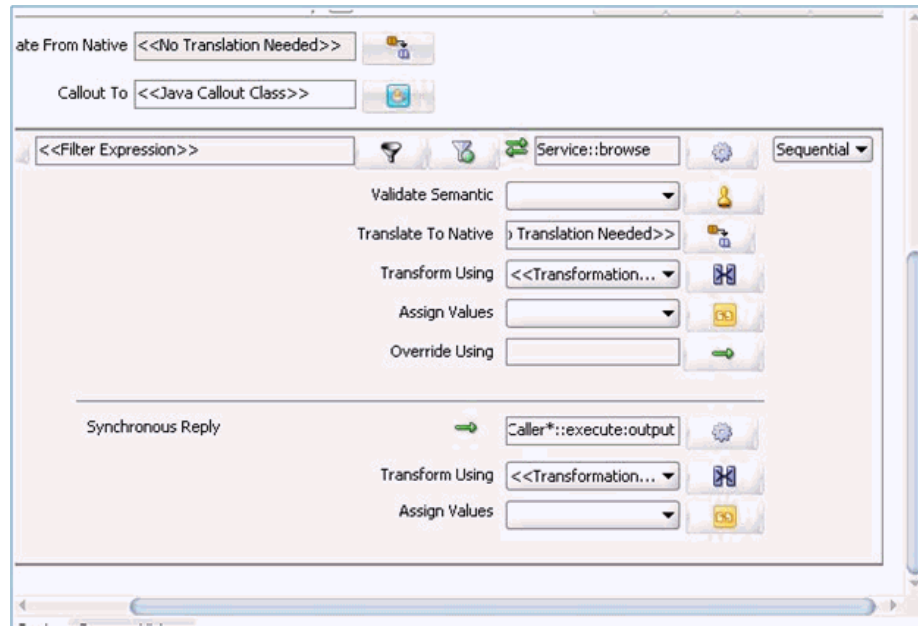
### 5.2.2.3 ルーティング・ルールの構成

メディエータ・アウトバウンド・プロセス・コンポーネントのルーティング・ルールを構成するには、次のステップを実行します。

1. 「コンポーネント」ペインで、アウトバウンド・メディエータ・プロセス・コンポーネントをダブルクリックします。

図 5-7 に示すように、「ルーティング・ルール」ダイアログが表示されます。

図 5-7 「ルーティング・ルール」ダイアログ



2. 「<<フィルタ式>>」領域で、「次を使用して変換」フィールドの右にあるアイコンをクリックします。

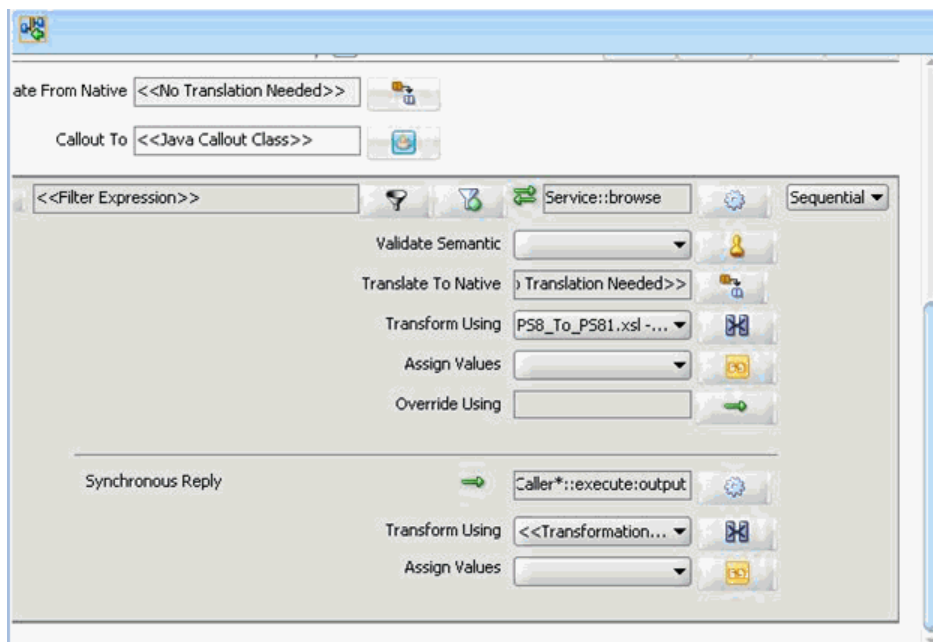
図 5-8 に示すように、「リクエスト・トランスフォーメーション・マップ」ダイアログが表示されます。

図 5-8 「リクエスト・トランスフォーメーション・マップ」ダイアログ



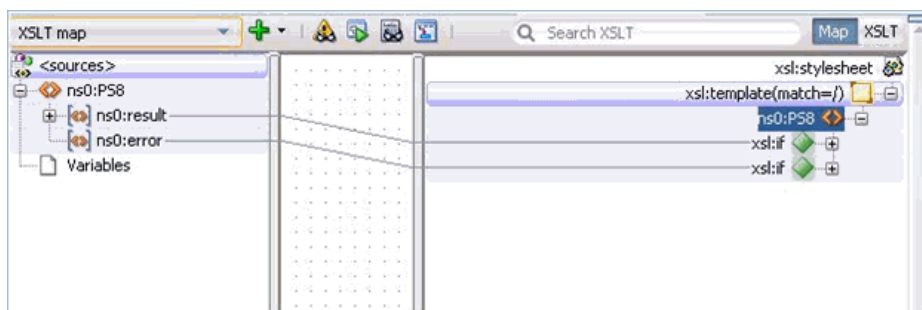
3. 「追加」(「+」)アイコンをクリックします。  
「トランスフォーメーション・マップの作成」ページが表示されます。
4. タイプとして「XSLT」が選択されていることを確認し、「OK」をクリックします。
5. 「OK」をクリックします。
6. 「ns0:PS8」ソース要素を「ns0:PS8」ターゲット要素にマップします。  
「自動マップ・プリファレンス」ダイアログが表示されます。
7. デフォルト値を維持し、「OK」をクリックします。
8. 図 5-9 に示すように、「ルーティング・ルール」ダイアログに戻ります。

図 5-9 「ルーティング・ルール」 ダイアログ



9. 「同期リプライ」領域で、「次を使用して変換」フィールドの右にあるアイコンをクリックします。  
「リプライ・トランスフォーメーション・マップ」ダイアログが表示されます。
10. 「追加」(「+」)アイコンをクリックします。  
「トランスフォーメーションの作成」ページが表示されます。
11. タイプとして「XSLT」が選択されていることを確認し、「OK」をクリックします。  
マッピング・ページが表示されます。
12. 「OK」をクリックします。
13. 「ns0:PS8」ソース要素を「ns0:PS8」ターゲット要素にマップします。  
「自動マップ・プリファレンス」ダイアログが表示されます。
14. デフォルト値を維持し、「OK」をクリックします。  
図 5-10 に示すように、マッピングが完成します。

図 5-10 完成したマッピング



15. メニュー・バーの「すべて保存」アイコンをクリックし、構成された新規のアウトバウンド・メディエータ・プロセス・コンポーネントを保存します。

#### 5.2.2.4 12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応

12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応方法の詳細は、[4.4.3.3 項「12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応」](#) (4-26 ページ) を参照してください。

### 5.2.3 メディエータ・アウトバウンド・プロセスのデプロイ

メディエータ・アウトバウンド・プロセスをデプロイするには、次のステップを実行します

1. 左ペインでプロジェクト名を右クリックし、「デプロイ」を選択して、「J2CA\_Outbound」をクリックします。  
「デプロイメント・アクション」ページが表示されます。
2. 「アプリケーション・サーバーにデプロイ」が選択されていることを確認します。
3. 「次へ」をクリックします。  
「構成のデプロイ」ページが表示されます。
4. デフォルト値を選択したままにし、「次へ」をクリックします。  
「サーバーの選択」ページが表示されます。
5. 構成済の使用可能なアプリケーション・サーバーを選択し、「次へ」をクリックします。  
「SOA サーバー」ページが表示されます。
6. ターゲットの SOA サーバーを選択し、「次へ」をクリックします。  
「サマリー」ページが表示されます。
7. プロジェクトに使用可能なすべてのデプロイメント情報をレビューおよび確認し、「終了」をクリックします。  
詳細は、[4.4.4 項「BPEL アウトバウンド・プロセスのデプロイ」](#) (4-28 ページ) を参照してください。

### 5.2.4 Oracle Enterprise Manager Console での入力 XML ドキュメントの起動

詳細は、[4.4.5 項「Oracle Enterprise Manager Console での入力 XML ドキュメントの起動」](#) (4-32 ページ) を参照してください。

## 5.3 メディエータ・インバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成)

この項では、Oracle JDeveloper でメディエータ・プロジェクトを使用して PeopleSoft システム用にメディエータ・インバウンド・プロセスを構成する方法について説明します。

このインバウンド・ユース・ケース・シナリオ用のサンプル・プロジェクトが、次に示す Application Adapter のインストール・フォルダに用意されています。

```
<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\Mediator\J2CA\Inbound_Project
```

この項では、次のトピックについて説明します。

- 5.3.1 項「SOA 用の空のコンポジットの作成」
- 5.3.2 項「メディエータ・インバウンド・プロセスの定義」

#### 前提条件

メディエータ・インバウンド・プロセスを設計する前に、アプリケーション・エクスプローラを使用して各 WSDL ファイルを生成する必要があります。詳細は、[4.5.1 項「イベント統合のための WSDL の生成」](#) (4-35 ページ) を参照してください。

### 5.3.1 SOA 用の空のコンポジットの作成

SOA 用に空のコンポジットを作成するには、次のステップを実行します。

1. 新規の SOA アプリケーションを作成します。
2. 新規の SOA アプリケーションの名前を入力し、「次へ」をクリックします。  
「プロジェクトの名前付け」ページが表示されます。
3. プロジェクト名を入力し、「次へ」をクリックします。  
「SOA 設定の構成」ページが表示されます。
4. 「コンポジット・テンプレート」リストで「空のコンポジット」を選択し、「終了」をクリックします。

詳細は、[4.4.2 項「SOA 用の空のコンポジットの作成」](#) (4-9 ページ) を参照してください。

### 5.3.2 メディエータ・インバウンド・プロセスの定義

この項では、メディエータ・インバウンド・プロセスの定義方法について説明します。次のトピックが含まれています。

- [5.3.2.1 項「サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成」](#)
- [5.3.2.2 項「ファイル・アダプタを使用したインバウンド・メディエータ・プロセス・コンポーネントの構成」](#)
- [5.3.2.3 項「ルーティング・ルールの構成」](#)
- [5.3.2.4 項「12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応」](#)

#### 5.3.2.1 サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成

サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントを作成するには、次のステップを実行します。

1. 「サービス・アダプタ」ペインから「サード・パーティ・アダプタ」コンポーネントを「公開されたサービス」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。  
「サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成」ダイアログが表示されます。
2. サード・パーティ・アダプタ・サービスの名前を入力します。
3. 「タイプ」ドロップダウン・リストで「サービス」が選択されていることを確認します (デフォルト)。
4. 「WSDL URL」フィールドの右の「既存の WSDL を検索します。」アイコンをクリックします。  
「WSDL チューザ」ダイアログが表示されます。



5. 次のディレクトリまでブラウザし、インバウンド WSDL ファイルを選択します。

<ADAPTER\_HOME>\wsdls

6. 「OK」をクリックします。

「ファイルのローカライズ」ダイアログが表示されます。

7. 「OK」をクリックします。

インバウンド WSDL ファイルおよび関連リクエスト/レスポンス・スキーマ・ファイル (.xsd) が、作成済のプロジェクト・フォルダにインポートされます。

「サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成」ダイアログに戻ります。

8. 「JCA ファイル」フィールドの右の「JCA ファイルを検索します。」アイコンをクリックします。

変換チューザ・ダイアログが表示されます。

9. 次のディレクトリまでブラウザし、JCA プロパティ・ファイルを選択します。

<ADAPTER\_HOME>\wsdls

10. 「OK」をクリックします。

「ファイルのコピー」確認メッセージが表示されます。

11. 「はい」をクリックします。

JCA プロパティ・ファイルのコピーがプロジェクト・フォルダ内に作成されます。

「サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成」ダイアログに戻ります。

12. 「OK」をクリックします。

サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントが作成され、「公開されたサービス」ペインに表示されます。

これで、インバウンド・メディエータ・プロセス・コンポーネントを構成する準備ができました。

詳細は、[4.5.3.1 項「サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの作成」](#) (4-39 ページ) を参照してください。

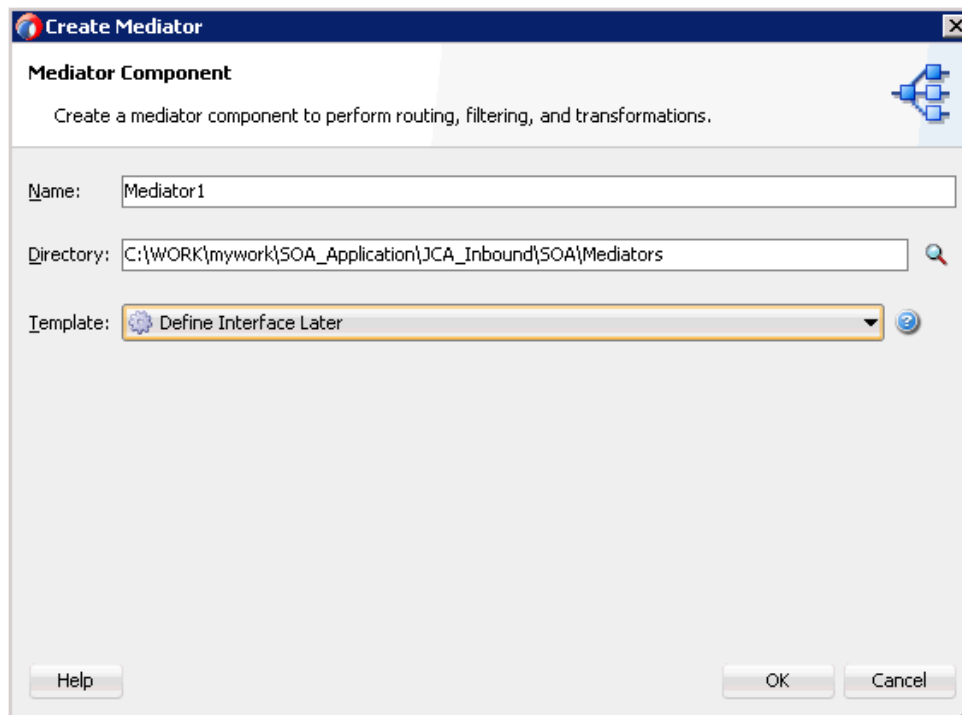
### 5.3.2.2 ファイル・アダプタを使用したインバウンド・メディエータ・プロセス・コンポーネントの構成

ファイル・アダプタを使用してインバウンド・メディエータ・プロセス・コンポーネントを構成するには、次のステップを実行します

1. 「サービス・コンポーネント」ペインから **メディエータ・プロセス・コンポーネント** を「コンポーネント」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

[図 5-11](#) に示すように、「メディエータの作成」ダイアログが表示されます。

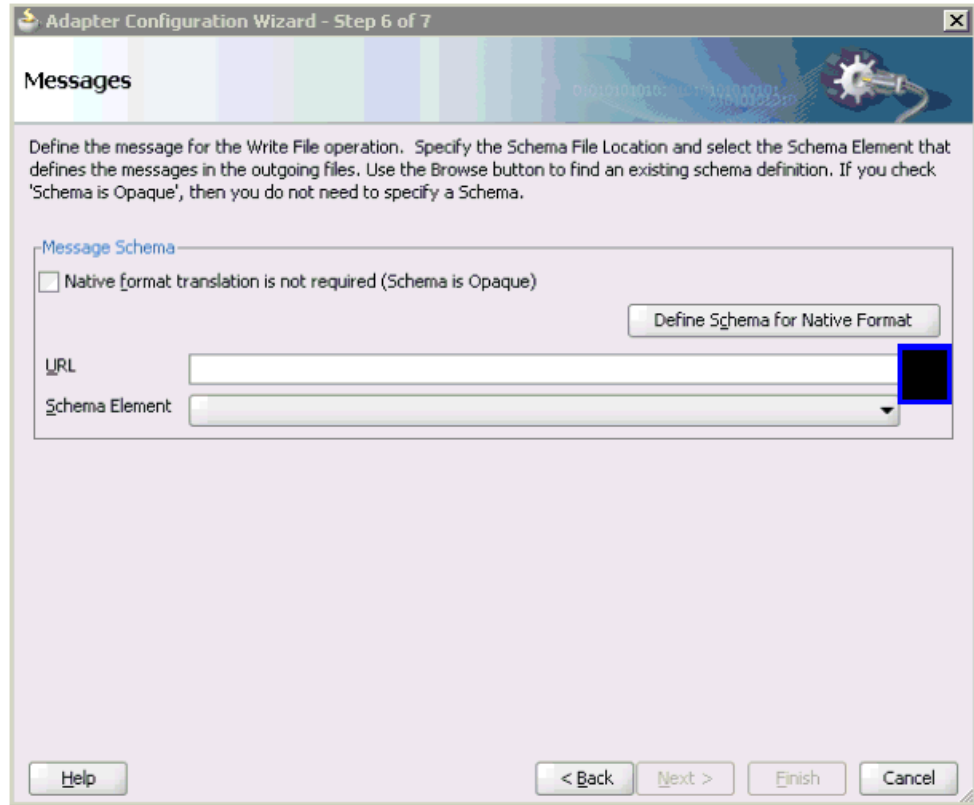
図 5-11 「メディエータの作成」 ダイアログ



2. 「名前」フィールドで、新規のインバウンド・メディエータ・プロセス・コンポーネントの名前を入力します。
3. 「テンプレート」ドロップダウン・リストから、「**インタフェースを後で定義**」を選択します。
4. 「**OK**」をクリックします。  
新規メディエータ・プロセス・コンポーネントが「コンポーネント」ペインに追加されます。
5. 「テクノロジー・アダプタ」ペインから「**ファイル**」コンポーネントを「外部参照」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。  
ファイル・アダプタ構成ウィザードが表示されます。
6. 新規のファイル・アダプタの名前を入力し、「**次へ**」をクリックします。  
「アダプタ・インタフェース」ページが表示されます。
7. 「**操作およびスキーマから定義 (後で指定)**」オプションが選択されていることを確認します。
8. 「**次へ**」をクリックします。  
「操作」ページが表示されます。
9. 「**次へ**」をクリックします。
10. 「操作タイプ」オプションのリストから「**Write File**」を選択し、「操作名」(「Write」など)を指定します。
11. 「**次へ**」をクリックします。  
「ファイル構成」ページが表示されます。
12. 出力ファイルの書き込み先となるファイル・システム上の場所を指定します。

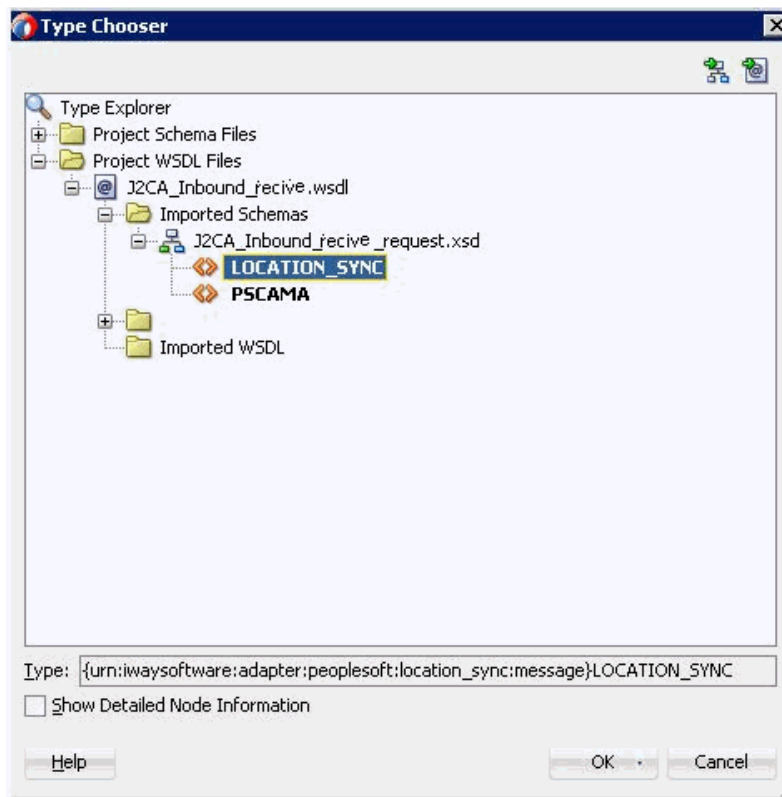
13. 「ファイル命名規則」フィールドで、出力ファイルの名前を指定します。
14. 「次へ」をクリックします。  
☒ 5-12 に示すように、「メッセージ」ページが表示されます。

**図 5-12 「メッセージ」ページ**



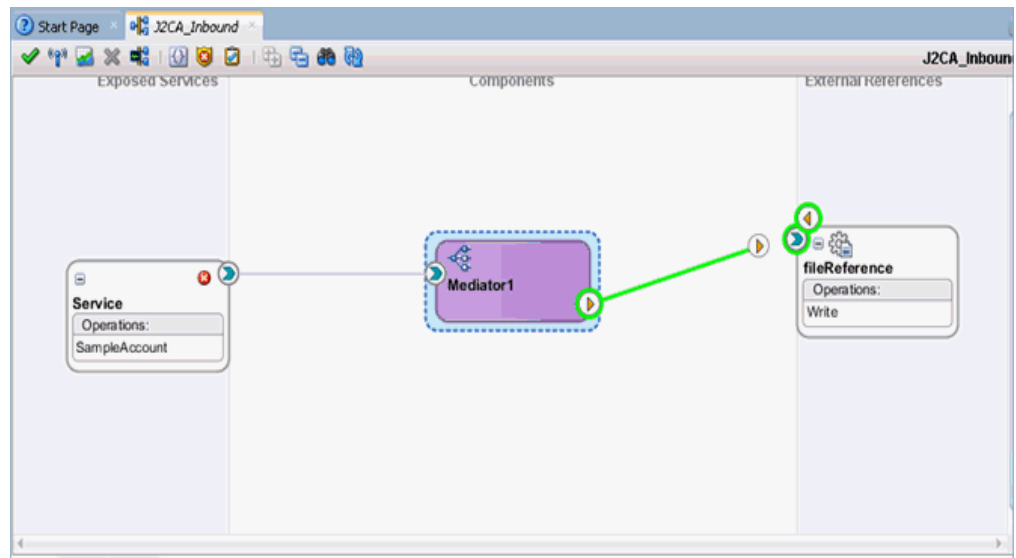
15. 「URL」フィールドの右にある「参照」をクリックします。  
☒ 5-13 に示すように、「タイプ・チューザ」ダイアログが表示されます。

図 5-13 「タイプ・チューザ」 ダイアログ



16. 「プロジェクトの WSDL ファイル」、「J2CA\_Inbound\_receive.wsdl」、「インポートしたスキーマ」、「J2CA\_Inbound\_receive\_request.xsd」の順に展開し、「LOCATION\_SYNC」を選択します。
17. 「OK」をクリックします。  
「メッセージ」ページに戻ります。
18. 「次へ」をクリックします。  
「終了」ページが表示されます。
19. 「終了」をクリックします。
20. インバウンド・メディアータ・プロセス・コンポーネントとサード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネント間の接続を作成します。
21. 図 5-14 に示すように、インバウンド・メディアータ・プロセス・コンポーネントとファイル・アダプタ・コンポーネント間の接続を作成します。

図 5-14 作成された接続



これで、ルーティング・ルールを構成する準備ができました。

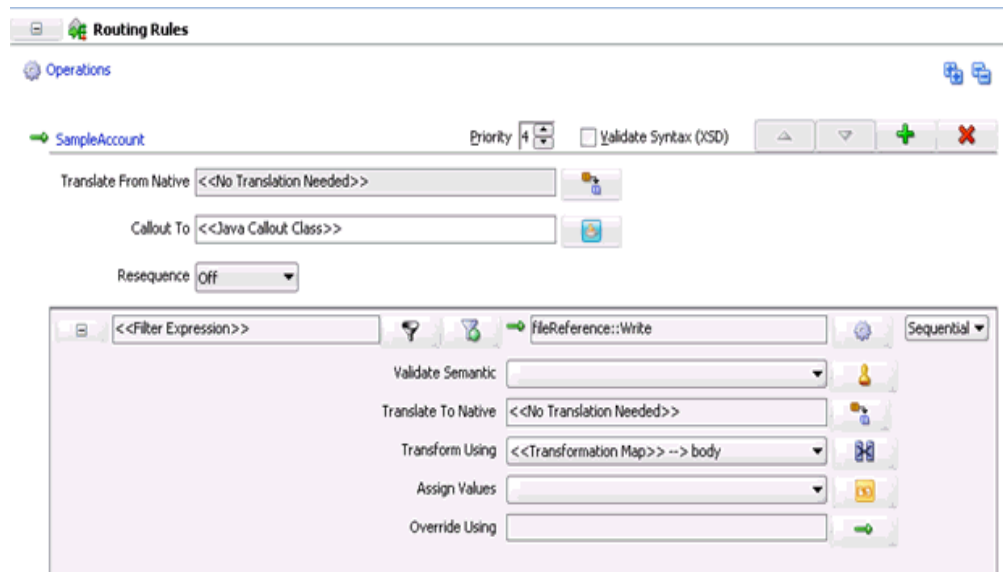
### 5.3.2.3 ルーティング・ルールの構成

メディエータ・インバウンド・プロセス・コンポーネントのルーティング・ルールを構成するには、次のステップを実行します。

1. 「コンポーネント」 ページで、インバウンド・メディエータ・プロセス・コンポーネントをダブルクリックします。

図 5-15 に示すように、「ルーティング・ルール」 ダイアログが表示されます。

図 5-15 「ルーティング・ルール」 ダイアログ



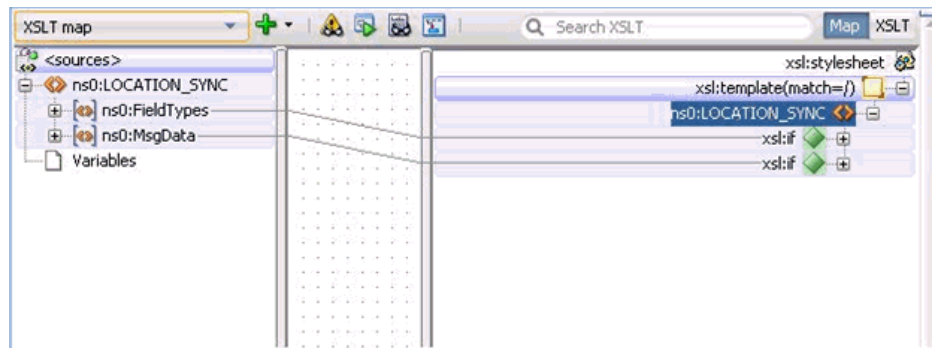
2. 「<<フィルタ式>>」 領域で、「次を使用して変換」 フィールドの右にあるアイコンをクリックします。

「リクエスト・トランスフォーメーション・マップ」 ダイアログが表示されます。

3. 「追加」 (「+」) アイコンをクリックします。タイプとして「XSLT」が選択されていることを確認し、「OK」をクリックします。
4. 「OK」をクリックします。

図 5-16 に示すように、マッピング・ページが表示されます。

図 5-16 マッピング・ページ



5. 「OK」をクリックします。
6. 「ns0:LOCATION\_SYNC」ソース要素を「ns0:LOCATION\_SYNC」ターゲット要素にマップします。  
「自動マップ・プリファレンス」ダイアログが表示されます。
7. デフォルト値を維持し、「OK」をクリックします。  
マッピングが完成しました。
8. メニュー・バーの「すべて保存」アイコンをクリックし、構成された新規のインバウンド・メディエータ・プロセス・コンポーネントを保存します。

#### 5.3.2.4 12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応

12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応方法の詳細は、[4.4.3.3 項「12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応」](#) (4-26 ページ) を参照してください。

これで、メディエータ・インバウンド・プロセスをデプロイする準備ができました。手順は、[4.5.4 項「BPEL インバウンド・プロセスのデプロイ」](#) (4-46 ページ) に記載されている手順と同じです。

PeopleSoft を介してイベント・メッセージがトリガーされたら、出力 XML が、ファイル・アダプタ・コンポーネントで指定済の場所で受信されます。PeopleSoft でのイベントのトリガーの詳細は、[4.5.5 項「PeopleSoft でのイベントのトリガー」](#) (4-47 ページ) を参照してください。

## 5.4 メディエータ・アウトバウンド・プロセスの構成 (BSE 構成)

この項では、Oracle JDeveloper でメディエータ・プロジェクトを使用して PeopleSoft システム用にメディエータ・アウトバウンド・プロセスを構成する方法について説明します。

このアウトバウンド・ユース・ケース・シナリオ用のサンプル・プロジェクトが、次に示す Application Adapter のインストール・フォルダに用意されています。

```
<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\Mediator\BSE\Outbound_Project
```

この項では、次のトピックについて説明します。

- [5.4.1 項「SOA 用の空のコンポジットの作成」](#)
- [5.4.2 項「メディエータ・アウトバウンド・プロセスの定義」](#)

#### 前提条件

メディエータ・アウトバウンド・プロセスを設計する前に、アプリケーション・エクスプローラを使用して各 WSDL ファイルを生成する必要があります。詳細は、[4.6.1 項「Web サービスを使用したリクエストおよびレスポンス・サービス用の WSDL ファイルの生成」](#) (4-55 ページ) を参照してください。

### 5.4.1 SOA 用の空のコンポジットの作成

SOA 用に空のコンポジットを作成するには、次のステップを実行します。

1. 新規の SOA アプリケーションを作成します。
2. SOA アプリケーションの名前を入力し、「次へ」をクリックします。
3. プロジェクト名を入力し(「IBSE\_Outbound」など)、「次へ」をクリックします。
4. 「コンポジット・テンプレート」リストで「空のコンポジット」を選択し、「終了」をクリックします。

詳細は、[4.4.2 項「SOA 用の空のコンポジットの作成」](#) (4-39 ページ) を参照してください。

### 5.4.2 メディエータ・アウトバウンド・プロセスの定義

この項では、メディエータ・アウトバウンド・プロセスの定義方法について説明します。次のトピックが含まれています。

- [5.4.2.1 項「SOAP サービスの構成」](#)
- [5.4.2.2 項「メディエータ・コンポーネントの作成」](#)
- [5.4.2.3 項「ルーティング・ルールの構成」](#)

#### 5.4.2.1 SOAP サービスの構成

SOAP サービスを構成するには、次のステップを実行します。

1. 「テクノロジ・アダプタ」ペインから「SOAP」ノードを「外部参照」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。
2. SOAP サービスの適切な名前を入力し、「WSDL URL」フィールドの右にある既存の WSDL を検索アイコンをクリックします。
3. 表示された「SOA リソース・ブラウザ」ウィンドウで、「ファイル・システム」タブを選択し、アプリケーション・エクスプローラから WSDL をエクスポートする場所にナビゲートし、WSDL を選択して、「OK」をクリックします。
4. 「Web サービスの作成」ウィンドウで、「OK」をクリックします。
5. 表示された「ファイルのローカライズ」ウィンドウで、「OK」をクリックします。これにより、WSDL ファイルがプロジェクト・フォルダにインポートされます。

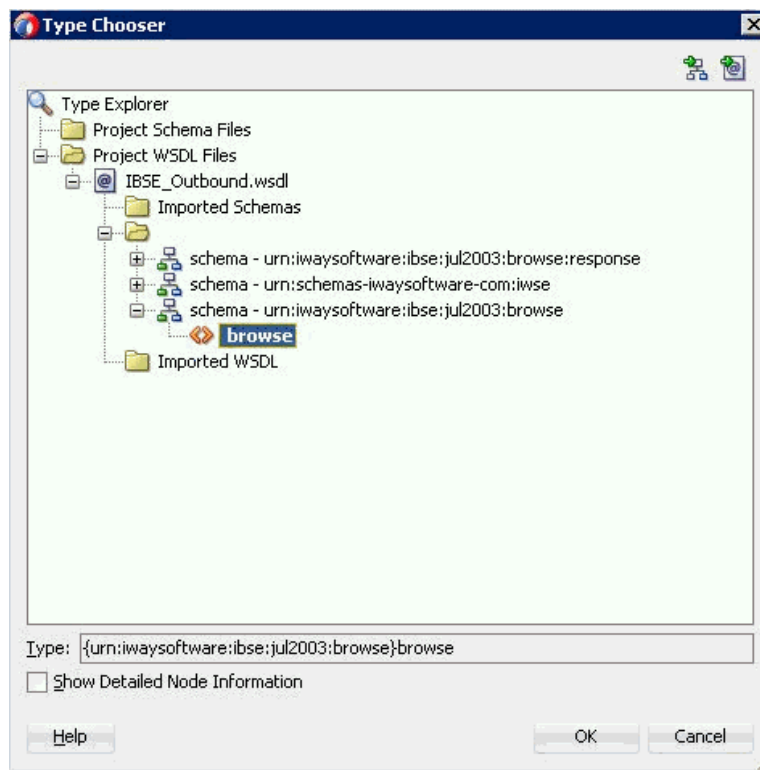
Web サービスが作成され、表示されます。

#### 5.4.2.2 メディエータ・コンポーネントの作成

メディエータ・コンポーネントを作成するには、次のステップを実行します。

1. コンポーネント・ペインから**メディアータ・コンポーネント**をコンポーネント・ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。
2. 「名前」フィールドで、新規のアウトバウンド・メディアータ・プロセス・コンポーネントの名前を入力します。
3. テンプレート・ドロップダウン・リストから、**同期インタフェース**を選択します。
4. 関連する XML リクエスト・スキーマ・ファイルの選択用の「入力」フィールドの右にある「参照」アイコンをクリックします。
5. 図 5-17 に示すように、「タイプ・チューザ」ダイアログで、「プロジェクトの WSDL ファイル」を展開し、「**IBSE\_Outbound.wsdl**」を選択して、「**browse**」をクリックします。

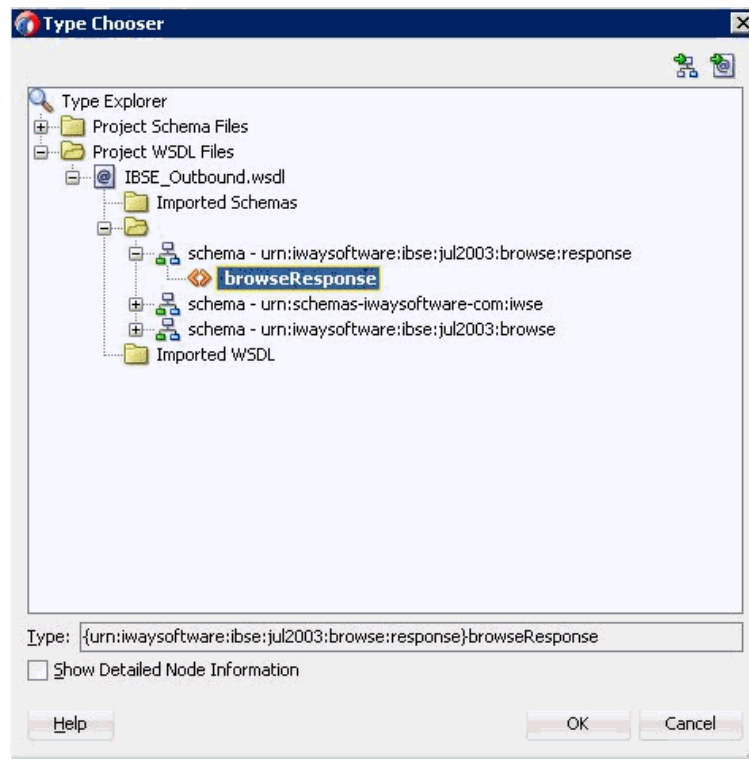
図 5-17 「タイプ・チューザ」ダイアログ



6. 「OK」をクリックします。
7. 関連する XML レスポンス・スキーマ・ファイルの選択用の「出力」フィールドの右にある「参照」アイコンをクリックします。
8. 図 5-18 に示すように、「タイプ・チューザ」ダイアログで、「プロジェクトの WSDL ファイル」を展開し、「**IBSE\_Outbound.wsdl**」を選択して、「**browseResponse**」をクリックします。

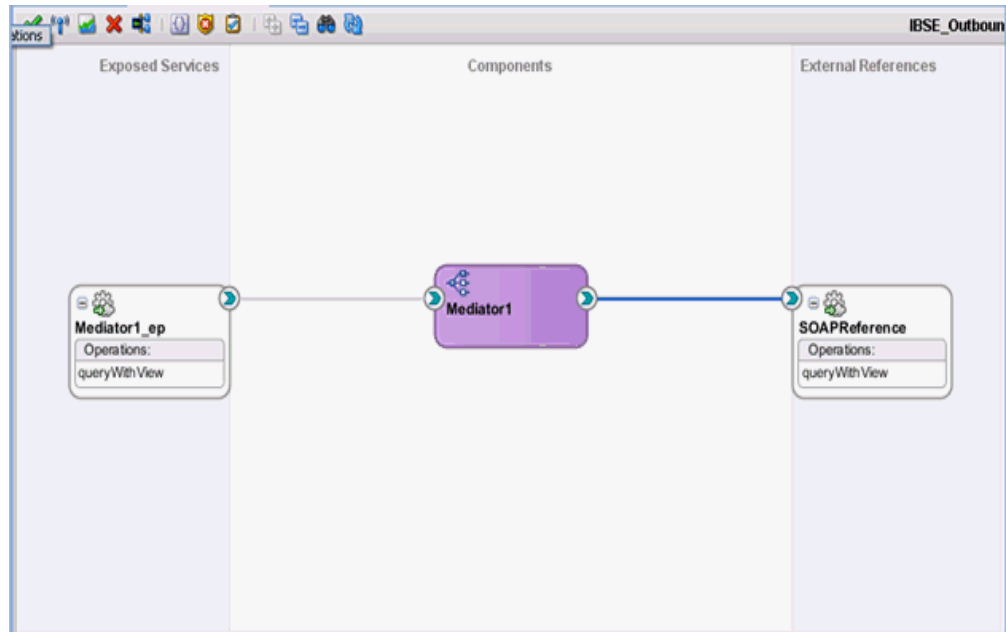


図 5-18 「タイプ・チューザ」 ダイアログ



9. 「OK」 をクリックします。
10. 「OK」 をクリックします。  
メディエータ・コンポーネントが作成され、表示されます。
11. 図 5-19 に示すように、メディエータ・コンポーネントと SOAP サービス・コンポーネント間の接続を作成します。

図 5-19 作成された接続

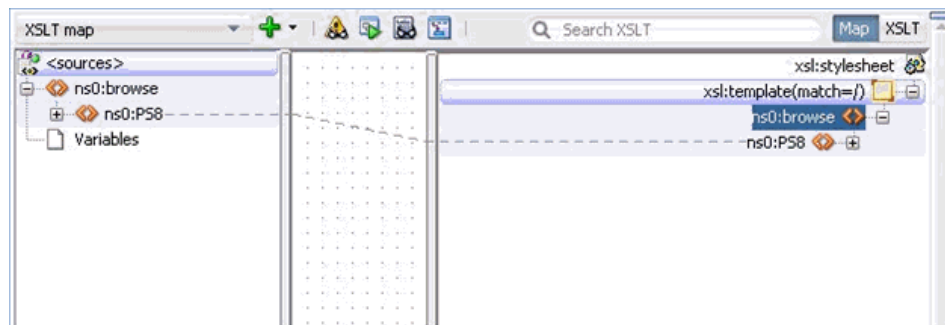


#### 5.4.2.3 ルーティング・ルール構成

ルーティング・ルールを構成するには、次のステップを実行します。

1. 「コンポーネント」 ペインで、「メディエータ」 コンポーネントをダブルクリックします。
2. 「静的ルーティング」 セクションの「<<フィルタ式>>」 領域で、「次を使用して変換」 フィールドの右にあるアイコンをクリックします。
3. 表示された「リクエスト・トランスフォーメーション・マップ」 ウィンドウで、「追加」 (「+」) アイコンをクリックします。「トランスフォーメーション・マップの作成」 ダイアログ・ボックスでタイプとして **XSLT** が選択されていることを確認し、「OK」 をクリックします。
4. 「OK」 をクリックします。
5. 図 5-20 に示すように、「ns0:browse」 ソース要素を「ns0:browse」 ターゲット要素にマップします。

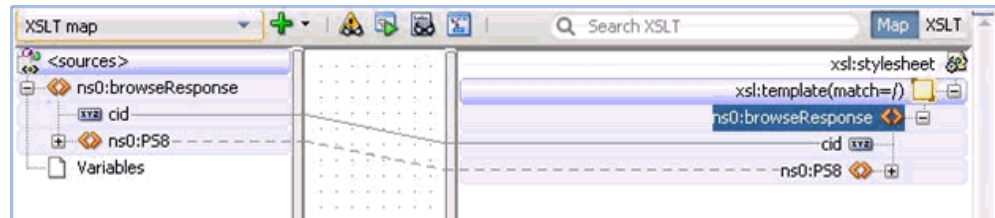
図 5-20 「GetDetail\_To\_GetDetail.xsl」 タブ



6. 表示された「自動マップ・プリファレンス」 ウィンドウで、デフォルト値を維持し、「OK」 をクリックします。

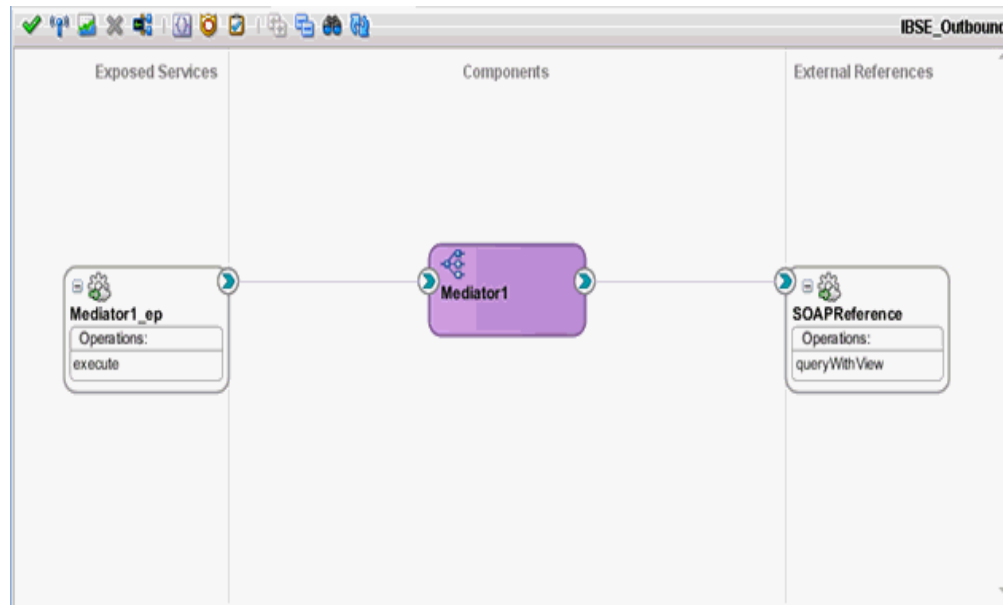
7. 「同期リプライ」領域で、「次を使用して変換」フィールドの右にあるアイコンをクリックします。
8. 表示された「リプライ・トランスフォーメーション・マップ」ウィンドウで、「追加」(「+」)アイコンをクリックします。「トランスフォーメーション・マップの作成」ダイアログ・ボックスでタイプとして **XSLT** が選択されていることを確認し、「OK」をクリックします。
9. 図 5-21 に示すように、「ns0:browseResponse」ソース要素を「ns0:browseResponse」ターゲット要素にマップします。

図 5-21 ソース要素とターゲット要素



10. 表示された「自動マップ・プリファレンス」ウィンドウで、デフォルト値を維持し、「OK」をクリックします。
11. 左ペインの「composite.xml」をダブルクリックします。
12. 図 5-22 に示すように、メニュー・バーの「すべて保存」アイコンをクリックし、構成された新規のアウトバウンド・メディエータ・コンポーネントを保存します。

図 5-22 「すべて保存」アイコン



これで、メディエータ IBSE アウトバウンド・プロセスをデプロイする準備ができました。手順は、5.2.3 項「メディエータ・アウトバウンド・プロセスのデプロイ」(5-11 ページ)に記載されている手順と同じです。

デプロイ後、4.4.5 項「Oracle Enterprise Manager Console での入力 XML ドキュメントの起動」(4-32 ページ)で示されているように入力 XML を起動できます。



---

## Oracle SOA Suite での BPM サービス・コンポーネントの統合

Oracle Application Adapter for PeopleSoft には、Oracle Business Process Management (BPM) がシームレスに統合されており、Web サービスの簡易な統合を可能にします。Oracle BPM は、サービス指向アーキテクチャ (SOA) に基づいており、Web Service Definition Language (WSDL) ドキュメントとして公開されているアダプタ・サービスを使用します。

この章の内容は次のとおりです。

- 6.1 項「概要」
- 6.2 項「アダプタのデプロイメント」
- 6.3 項「新規のアプリケーション・サーバー接続の構成」
- 6.4 項「変換を使用したサービス統合のためのアウトバウンド BPM プロセスの設計 (J2CA 構成)」
- 6.5 項「変換を使用したイベント統合のためのインバウンド BPM プロセスの設計 (J2CA 構成)」
- 6.6 項「変換を使用したサービス統合のためのアウトバウンド BPM プロセスの設計 (BSE 構成)」

### 6.1 概要

Oracle BPM を統合するには、Oracle Application Adapter for PeopleSoft が Oracle BPM と同じ WLS コンテナにデプロイされている必要があります。また、基になるアダプタ・サービスは、アダプタのリクエスト/レスポンス (アウトバウンド) とイベント通知 (インバウンド) の両方のサービス用に Oracle Application Adapter アプリケーション・エクスペローラ (アプリケーション・エクスペローラ) でデザインタイム中に生成される WSDL ファイルとして公開される必要があります。詳細は、「[WSDL の生成 \(J2CA 構成のみ\)](#)」(2-10 ページ) を参照してください。

生成された WSDL ファイルは、インバウンドまたはアウトバウンド・アダプタ・サービスにそれぞれ適切な BPM プロセスの設計に使用されます。完成した BPM プロセスは、JDeveloper で正常にコンパイルされ、BPM サーバーにデプロイされる必要があります。BPM サーバーへのデプロイメント後すぐに、新規構築されたプロセスはすべて自動的に Oracle Enterprise Manager Console にデプロイされ、BPM プロセスの実行、監視、管理、およびアダプタ・イベントのリスニングを行うことができます。

## 6.2 アダプタのデプロイメント

インストール中、Oracle Application Adapter for PeopleSoft は、WLS コンテナ内の J2CA 1.0 リソース・アダプタとしてデプロイされます。アダプタは Oracle BPM と同じ WLS コンテナ内にデプロイされる必要があります。

## 6.3 新規のアプリケーション・サーバー接続の構成

Oracle JDeveloper での新規アプリケーション・サーバー接続の構成方法の詳細は、[4.3 項「新規のアプリケーション・サーバー接続の構成」](#) (4-2 ページ) を参照してください。

## 6.4 変換を使用したサービス統合のためのアウトバウンド BPM プロセスの設計 (J2CA 構成)

この項では、変換を使用したサービス統合のためのアウトバウンド BPM プロセスの設計方法について説明します。

このアウトバウンド・ユース・ケース・シナリオ用のサンプル・プロジェクトが、次に示す Application Adapter のインストール・フォルダに用意されています。

```
<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\BPM\J2CA\Outbound_Project
```

アウトバウンドのデザインタイム構成を完了するには、次のツールが必要です。

- Oracle Adapter アプリケーション・エクスプローラ (アプリケーション・エクスプローラ)
- Oracle JDeveloper BPM デザイナ (JDeveloper)

---

**注意：** この章に記載されている例では JDeveloper が使用されています。

---

この項では、次のトピックについて説明します。

- [6.4.1 項「BPM 用の空のコンポジットの作成」](#)
- [6.4.2 項「BPM アウトバウンド・プロセスの定義」](#)
- [6.4.3 項「12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応」](#)
- [6.4.4 項「BPM アウトバウンド・プロセスのデプロイ」](#)
- [6.4.5 項「Oracle Enterprise Manager Console での入力 XML ドキュメントの起動」](#)

BPM プロセスを設計する前に、アプリケーション・エクスプローラを使用して、各 WSDL ファイルを生成する必要があります。詳細は、[4.4.1 項「リクエスト/レスポンス型のサービス用の WSDL の生成」](#) (4-8 ページ) を参照してください。

### 6.4.1 BPM 用の空のコンポジットの作成

BPM 用に空のコンポジットを作成するには、次のステップを実行します。

1. 新規の BPM アプリケーションを作成します。
2. 新規の BPM アプリケーションの名前を入力し、「[次へ](#)」をクリックします。  
「プロジェクトの名前付け」ページが表示されます。

3. プロジェクト名を入力し、プロジェクト機能で「BPM」を選択して、「次へ」をクリックします。  
「SOA 設定の構成」ページが表示されます。
4. 「コンポジット・テンプレート」リストで「空のコンポジット」を選択し、「終了」をクリックします。

## 6.4.2 BPM アウトバウンド・プロセスの定義

この項では、BPM アウトバウンド・プロセスの定義方法について説明します。次のトピックが含まれています。

- 6.4.2.1 項「サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成」
- 6.4.2.2 項「アウトバウンド BPM プロセス・コンポーネントの構成」
- 6.4.2.3 項「書込み操作のファイル・アダプタの作成」

### 6.4.2.1 サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成

サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントを作成するには、次のステップを実行します。

1. 作成したプロジェクトをダブルクリックして、コンポーネントをロードします。
2. 「カスタム / サード・パーティ」ペインから「サード・パーティ・アダプタ」コンポーネントを「外部参照」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。  
サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成ダイアログが表示されます。
3. サード・パーティ・アダプタ・サービスの名前を入力します。
4. 「タイプ」リストで「参照」が選択されていることを確認します (デフォルト)。
5. 「WSDL URL」フィールドの右にある既存の WSDL を検索アイコンをクリックします。  
WSDL チューザ・ダイアログが表示されます。
6. 次のディレクトリまでブラウザし、アウトバウンド WSDL ファイルを選択します。  
<ADAPTER\_HOME>\wsdl.s
7. 「OK」をクリックします。  
ファイルのローカライズ・ダイアログが表示されます。
8. 「OK」をクリックします。  
アウトバウンド WSDL ファイルおよび関連リクエスト / レスポンス XML スキーマ・ファイル (.xsd) が、作成済のプロジェクト・フォルダにインポートされます。  
サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成ダイアログに戻ります。
9. 「JCA ファイル」フィールドの右にある JCA ファイルを検索アイコンをクリックします。  
トランスフォーメーション・マップ・ダイアログが表示されます。
10. 次のディレクトリまでブラウザし、JCA プロパティ・ファイルを選択します。  
<ADAPTER\_HOME>\wsdl.s
11. 「OK」をクリックします。  
ファイルのコピーメッセージが表示されます。

- 「はい」をクリックします。

JCA プロパティ・ファイルのコピーがプロジェクト・フォルダ内に作成されます。  
サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成ダイアログに戻ります。

- 「OK」をクリックします。

サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントが作成され、「外部参照」ペインに表示されます。

これで、アウトバウンド BPM プロセス・コンポーネントを構成する準備ができました。

スクリーン・ショットを含む詳細は、[4.4.3.1 項「サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成」](#) (4-11 ページ) を参照してください。

### 6.4.2.2 アウトバウンド BPM プロセス・コンポーネントの構成

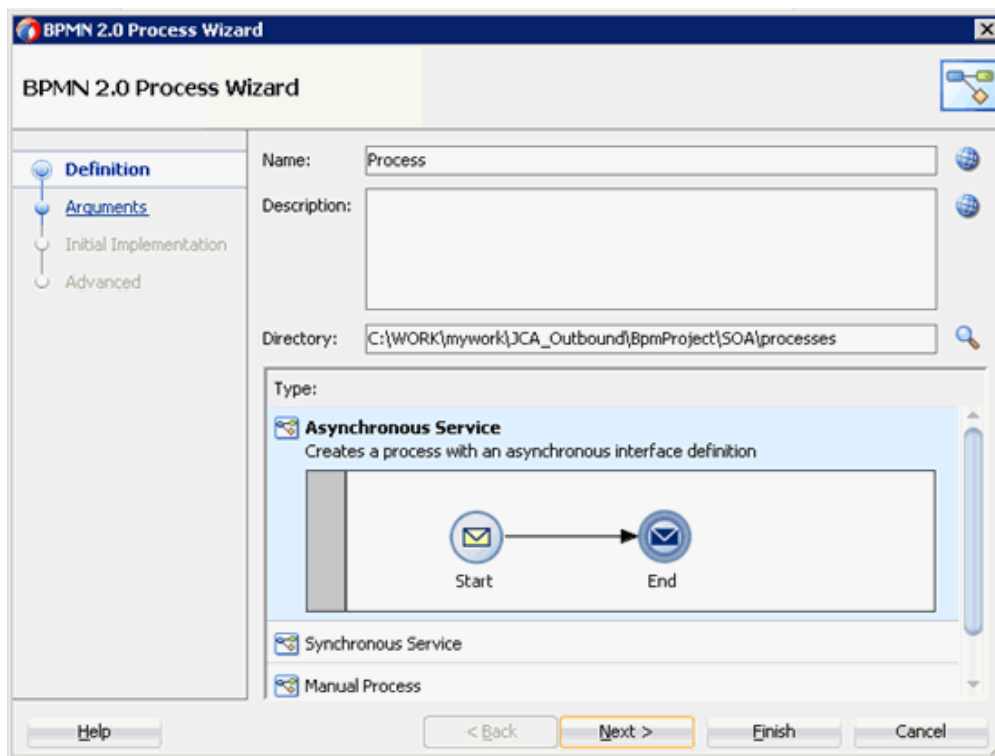
この項では、アウトバウンド BPM プロセス・コンポーネントの構成方法について説明します。

アウトバウンド BPM プロセス・コンポーネントを構成するには、次のステップを実行します。

- コンポーネント・ペインから **BPMN プロセス・コンポーネント** をコンポーネント・ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

図 6-1 に示すように、BPMN プロセスの作成ダイアログが表示されます。

図 6-1 BPMN プロセスの作成ダイアログ

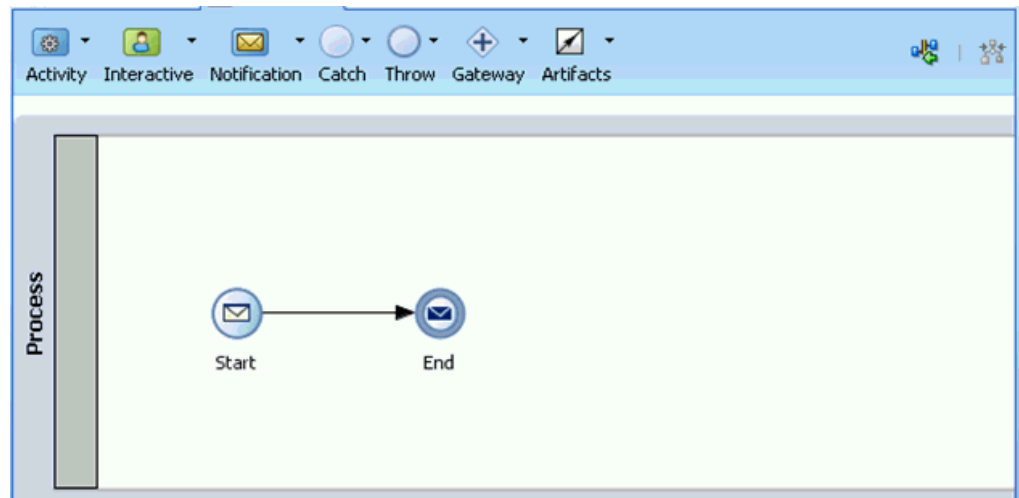


- 「タイプ」領域で選択されているデフォルトのオプション (非同期サービス) を受け入れ、「終了」をクリックします。

図 6-2 に示すように、BPMN プロセスが表示されます。

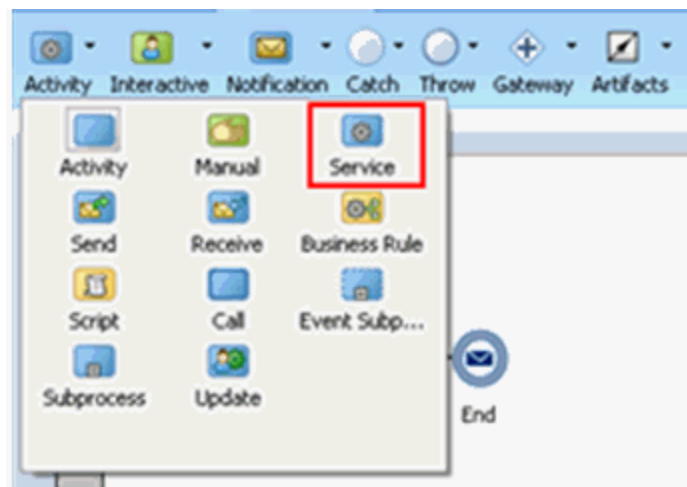


図 6-2 BPMN プロセス



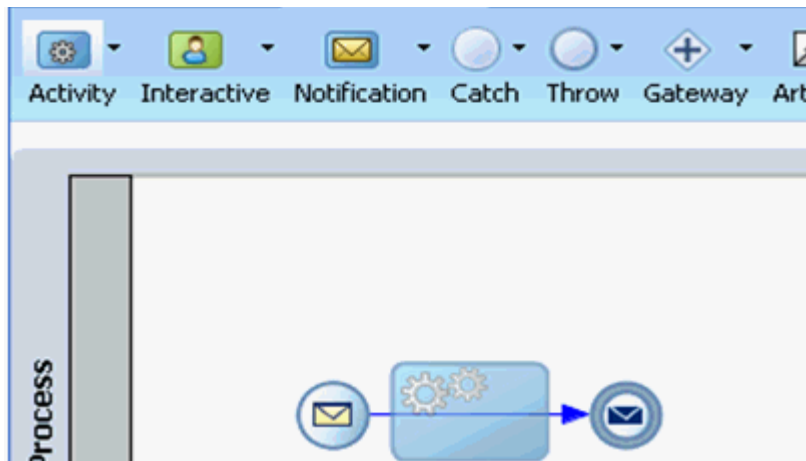
3. 図 6-3 に示すように、「アクティビティ」ドロップダウン・メニューをクリックし、「サービス」を選択します。

図 6-3 アクティビティドロップダウン・メニュー



4. 図 6-4 に示すように、「Start」イベント・コンポーネントと「End」イベント・コンポーネント間の伝送路に「サービス」アイコンをドロップします。

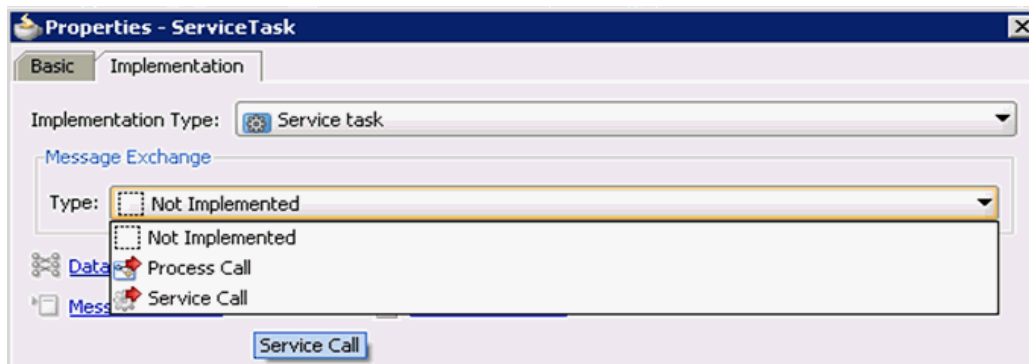
図 6-4 アクティビティアイコン



「プロパティ - ServiceTask」ウィンドウが表示されます。

5. 実装タブをクリックします。
6. 図 6-5 に示すように、「メッセージ交換」の「タイプ」リストから「サービス・コール」を選択します。

図 6-5 サービス・コール



7. 図 6-6 に示すように、「サービス」フィールドの右にある「参照」アイコンをクリックします。

図 6-6 「参照」アイコン

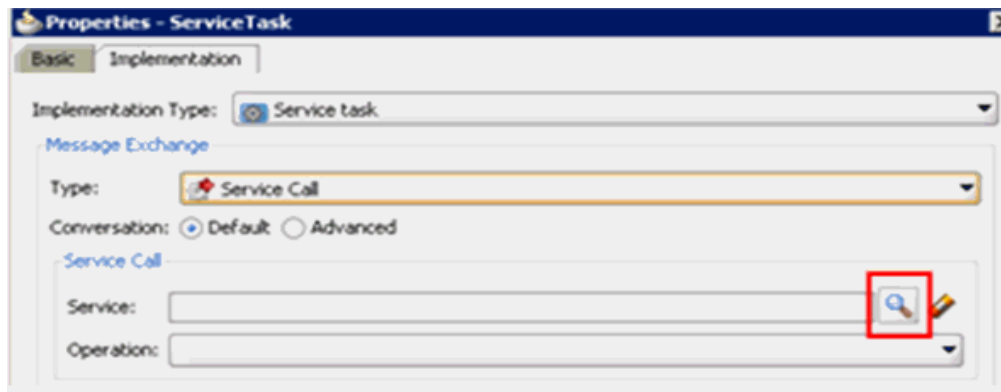
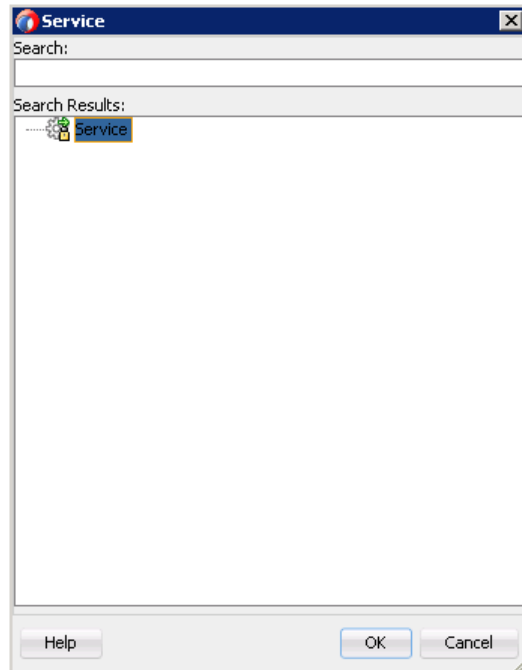


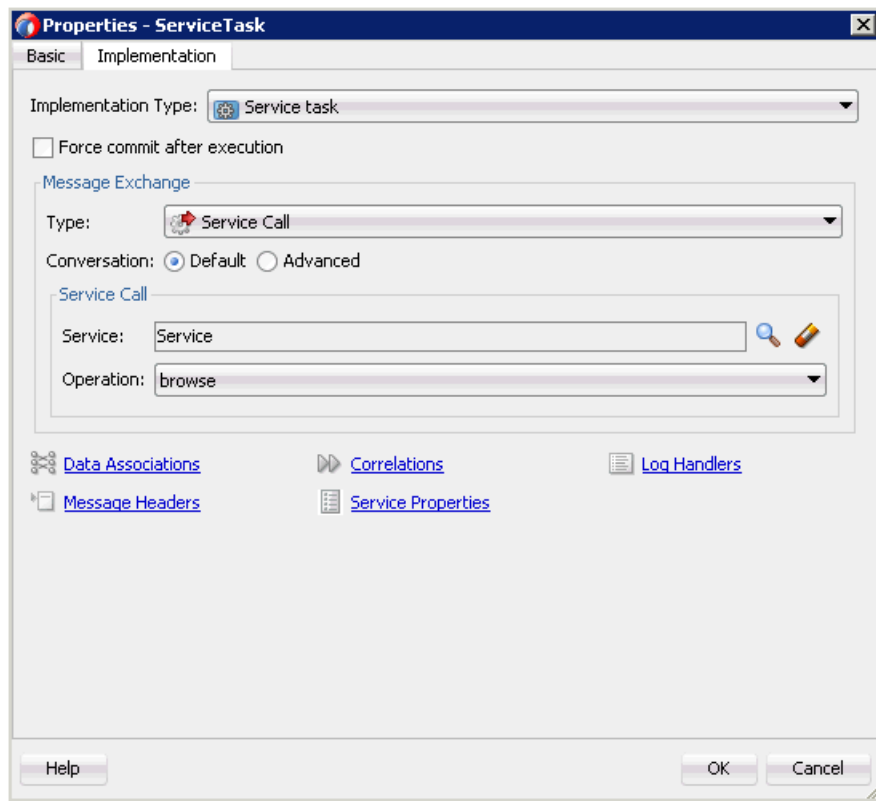
図 6-7 に示すように、「サービス」ダイアログが表示されます。

図 6-7 「サービス」ダイアログ



8. 作成されたサード・パーティ・サービスを選択し、「OK」をクリックします。  
図 6-8 に示すように、「プロパティ - ServiceTask」ダイアログに戻ります。

図 6-8 「プロパティ - ServiceTask」 ダイアログ



9. 「データ・アソシエーション」ハイパーリンクをクリックします。  
「データ・アソシエーション」ダイアログが表示されます。
10. 図 6-9 に示すように、左ペインで「プロセス」の下にある「データ・オブジェクト」ノードを右クリックし、「新規」を選択します。

図 6-9 「新規」オプション

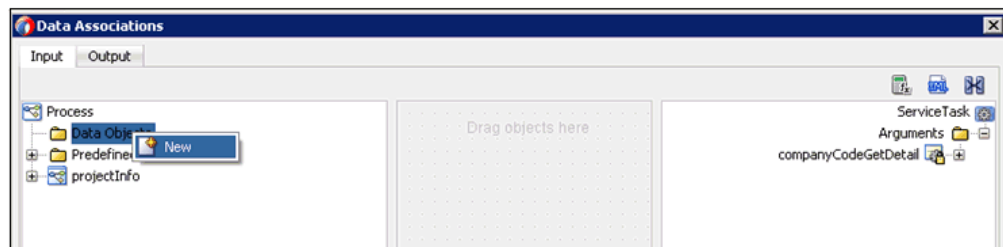
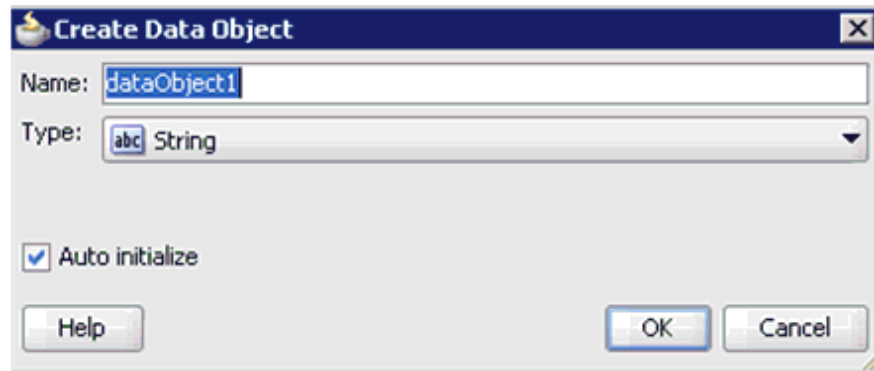


図 6-10 に示すように、データ・オブジェクトの作成ダイアログが表示されます。

図 6-10 データ・オブジェクトの作成ダイアログ



11. 図 6-11 に示すように、「名前」フィールドに名前を入力し（「Request」など）、「タイプ」フィールドのドロップダウン・ボタンをクリックして、リストから「参照」を選択します。

図 6-11 データ・オブジェクトの作成ダイアログ

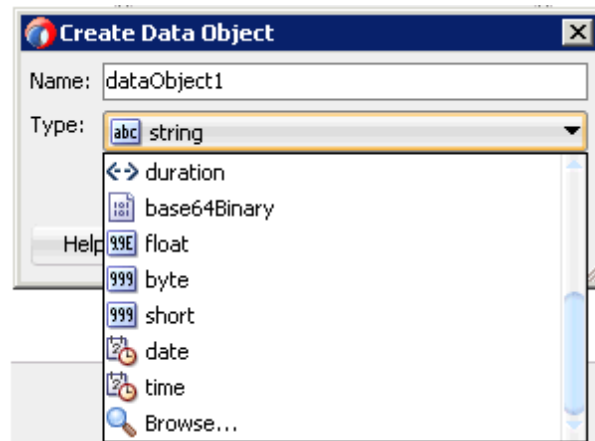
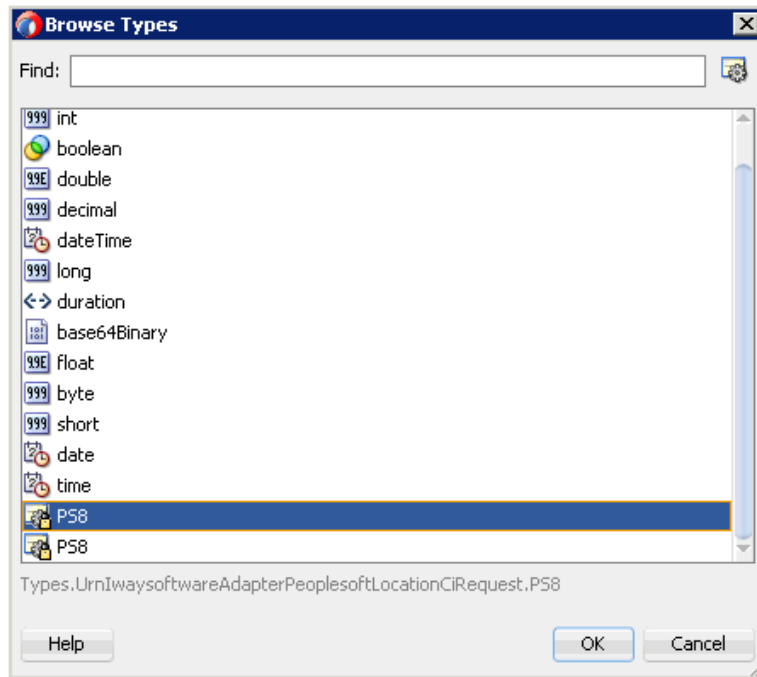


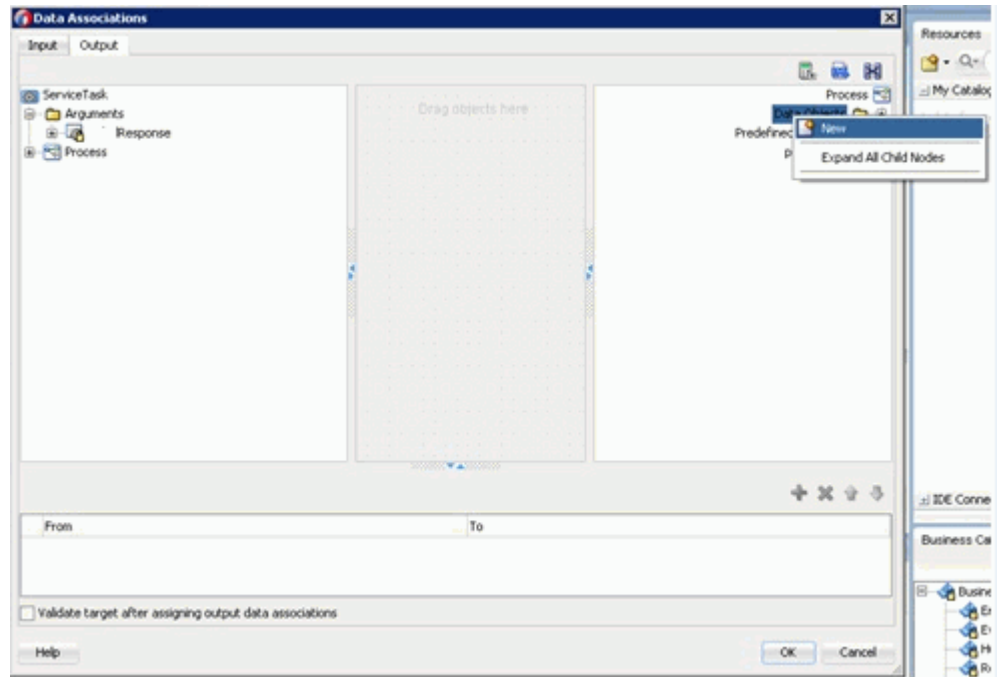
図 6-12 に示すように、参照タイプ・ダイアログが表示されます。

図 6-12 参照タイプ・ダイアログ



12. 最初のコンポーネントを選択し (「PS8」など)、「OK」をクリックします。  
データ・オブジェクトの作成ダイアログに戻ります。
13. 「OK」をクリックします。  
作成されたデータ・オブジェクト (「Request」など) が「データ・アソシエーション」ダイアログの「データ・オブジェクト」ノードの下に表示されます。
14. 図 6-13 に示すように、「出力」タブの右ペインで「データ・オブジェクト」ノードを右クリックし、「新規」を選択して、データ・オブジェクトをもう 1 つ作成します。

図 6-13 「データ・アソシエーション」 ダイアログ

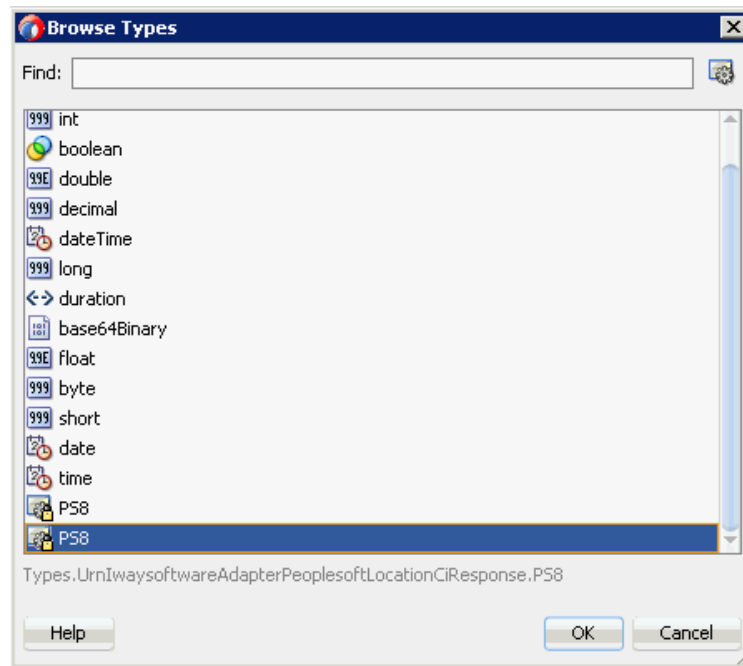


データ・オブジェクトの作成ダイアログが表示されます。

- 「名前」フィールドに名前を入力し(「Response」など)、「タイプ」フィールドのドロップダウン・ボタンをクリックして、リストから「参照」を選択します。

図 6-14 に示すように、参照タイプ・ダイアログが表示されます。

図 6-14 参照タイプ・ダイアログ



- 2 番目のコンポーネントを選択し(「P58」など)、「OK」をクリックします。

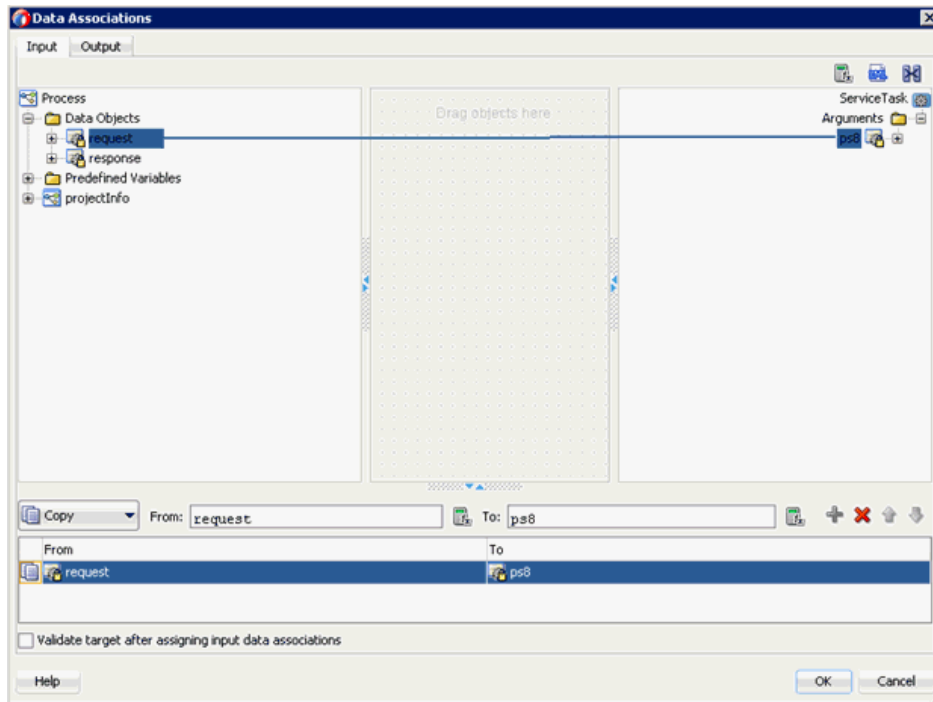
データ・オブジェクトの作成ダイアログに戻ります。

17. 「OK」をクリックします。

作成されたデータ・オブジェクト(「Response」など)が「データ・アソシエーション」ダイアログの「プロセス」ノードの下に表示されます。

18. 図 6-15 に示すように、「入力」タブの左ペインで「データ・オブジェクト」ノードの下にある「Request」データ・オブジェクトを選択し、左ペインの「引数」ノードの下にある「PS8」にドラッグして接続します。

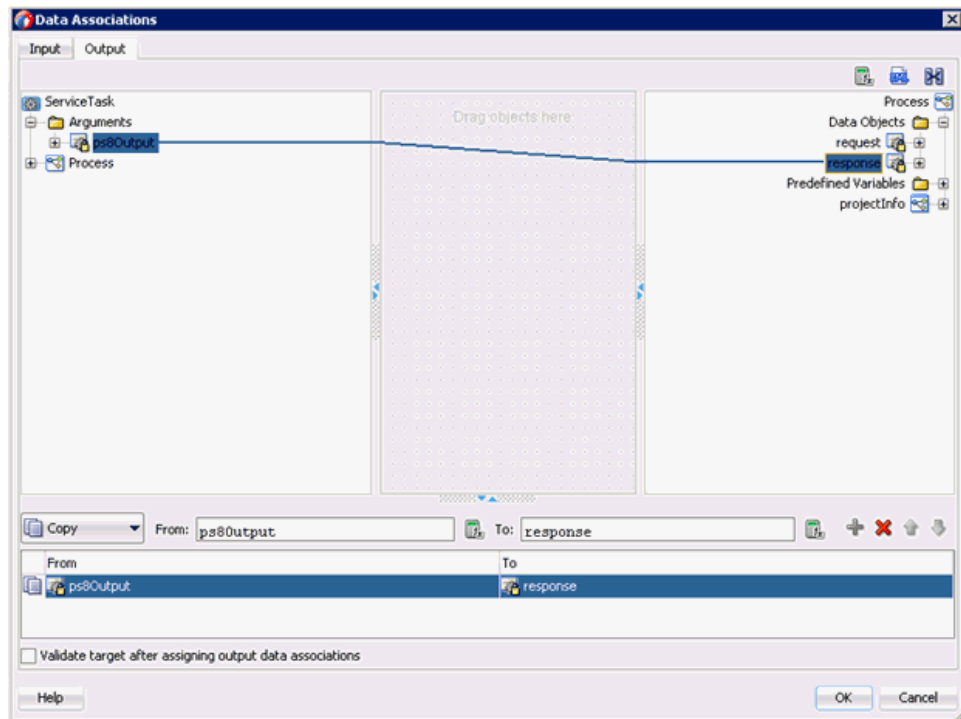
図 6-15 「Request」データ・オブジェクト



19. 図 6-16 に示すように、「出力」タブをクリックし、左ペインの「引数」ノードの下にある「ps8Output」を選択し、「データ・オブジェクト」ノードの下にある「Response」データ・オブジェクトにドラッグして接続します。



図 6-16 「Response」 データ・オブジェクト



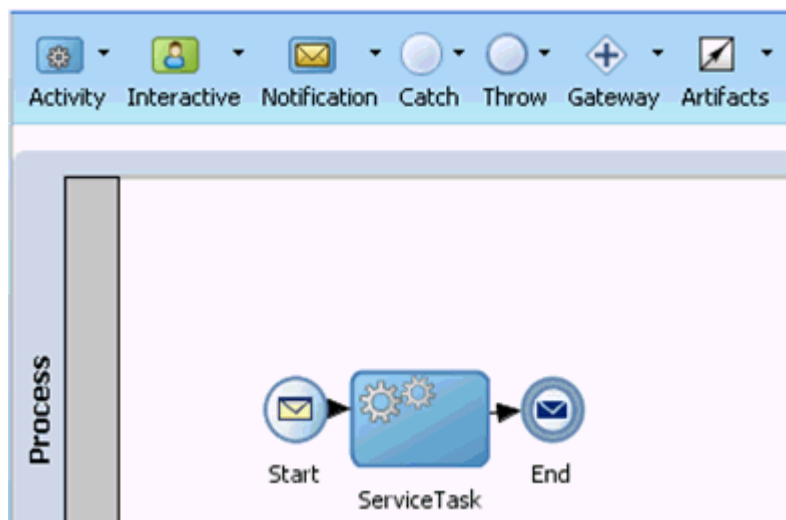
20. 「OK」をクリックします。

「プロパティ - ServiceTask」ダイアログに戻ります。

21. 「OK」をクリックします。

図 6-17 に示すように、「Start」イベント・コンポーネントと「End」イベント・コンポーネント間に「サービス・タスク」が作成されます。

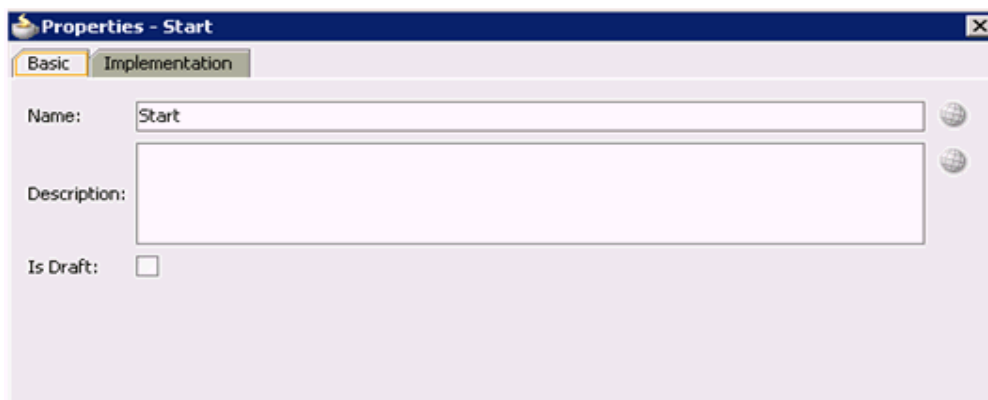
図 6-17 サービス・タスク



22. プロセスを保存し、「Start」イベント・コンポーネントをダブルクリックします。

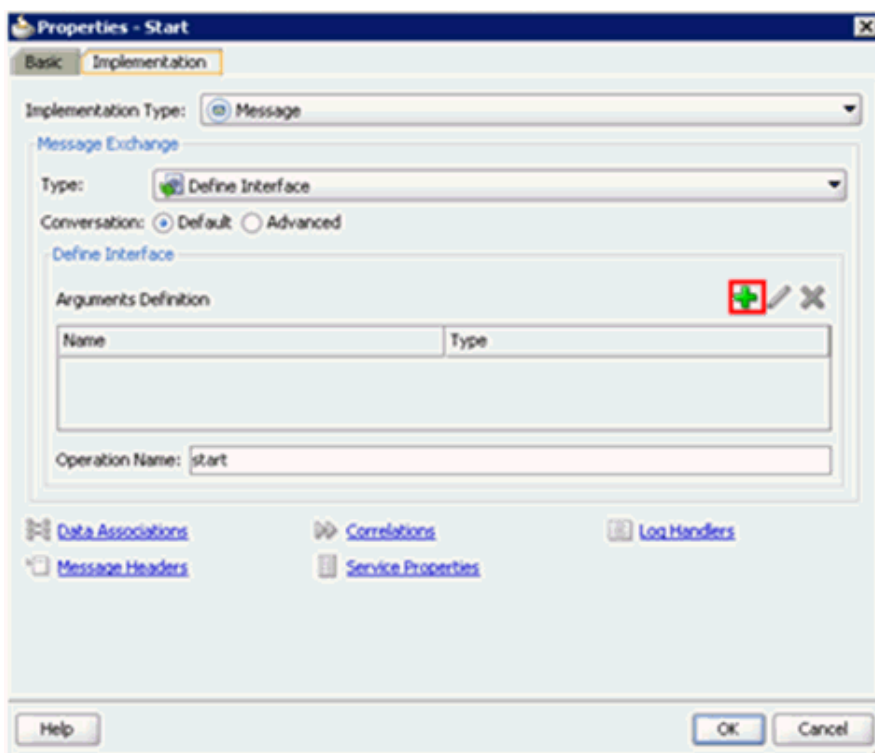
図 6-18 に示すように、「プロパティ - Start」ダイアログが表示されます。

図 6-18 「プロパティ - Start」ダイアログ



23. 図 6-19 に示すように、**実装**タブをクリックします。

図 6-19 実装タブ



24. 引数の定義フィールドの右にある**プラス・アイコン**をクリックします。

引数の作成ダイアログが表示されます。

25. 図 6-20 に示すように、「名前」フィールドに名前を入力し (デフォルトでは「argument1」)、 「タイプ」フィールドのドロップダウン・ボタンをクリックして、リストから「参照」を選択します。

図 6-20 引数の作成ダイアログ

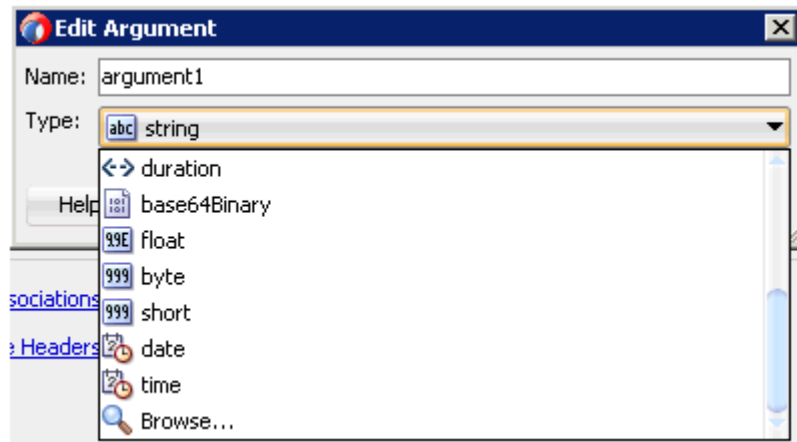
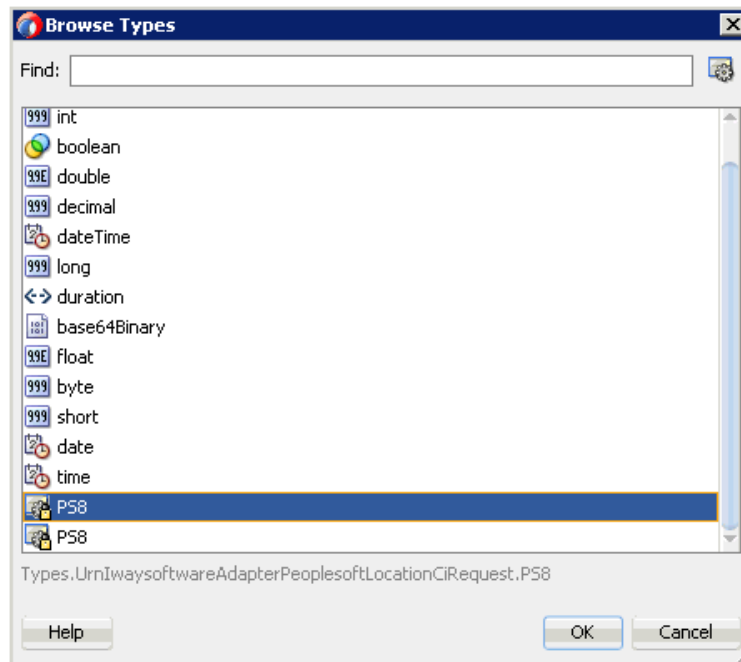


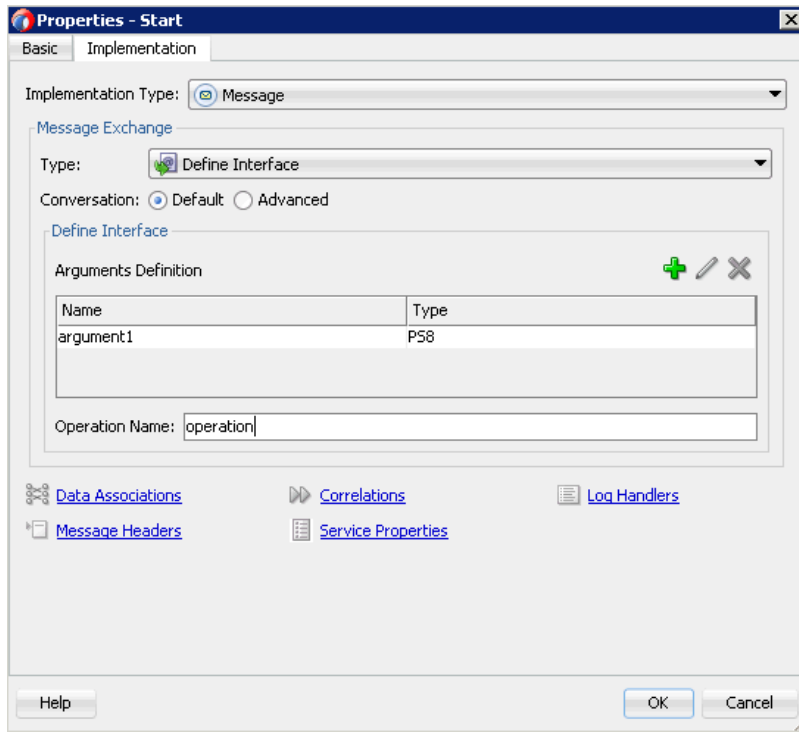
図 6-21 に示すように、参照タイプ・ダイアログが表示されます。

図 6-21 参照タイプ・ダイアログ



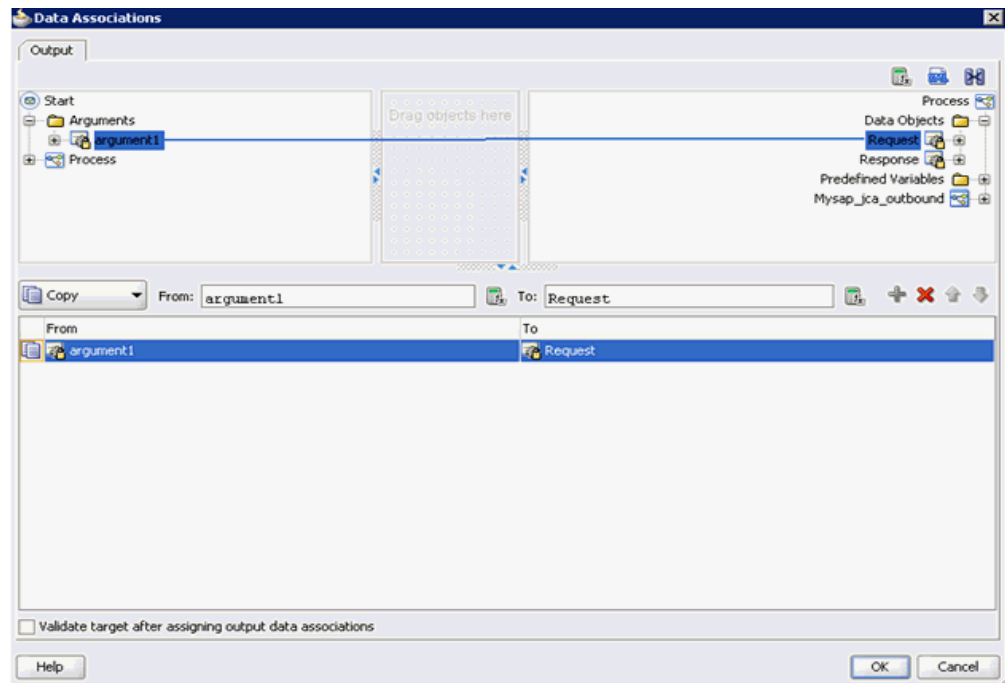
26. 最初のコンポーネントを選択し (「PS8」など)、「OK」をクリックします。  
引数の作成ダイアログに戻ります。
27. 「OK」をクリックします。  
「プロパティ - Start」ダイアログに戻ります。
28. 図 6-22 に示すように、操作名フィールドで「start」(デフォルト)を「operation」に変更します。  
**注意:** この変更は、古い BPM ペイロードと連携させるために必要です。

図 6-22 操作名フィールド



29. 「データ・アソシエーション」ハイパーリンクをクリックします。  
「データ・アソシエーション」ダイアログが表示されます。
30. 左ペインの「引数」ノードの下にある「argument1」を選択し、右ペインの「データ・オブジェクト」の下にある「Request」データ・オブジェクトにドラッグして接続します。
31. 図 6-23 に示すように、「OK」をクリックします。

図 6-23 「OK」 ボタン

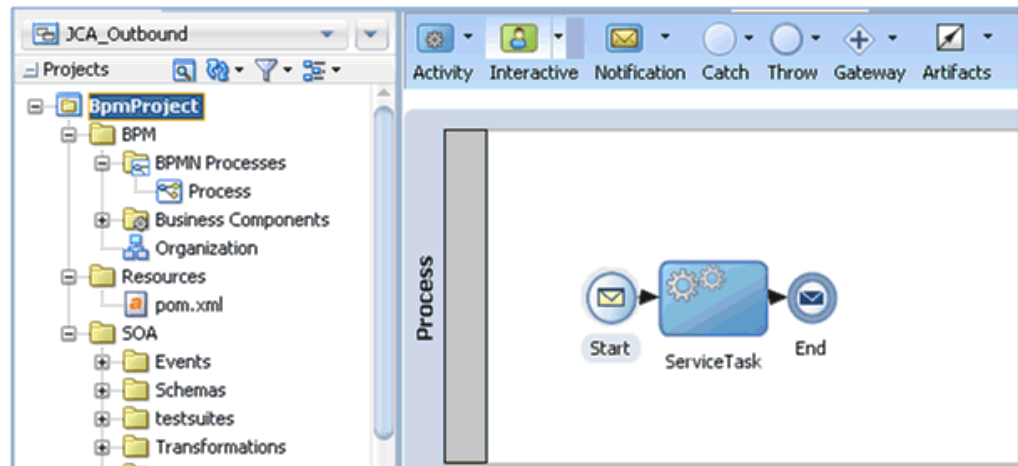


「プロパティ - Start」 ダイアログに戻ります。

32. 「OK」 をクリックします。

図 6-24 に示すように、「プロセス」 ワークスペース領域に戻ります。

図 6-24 「プロセス」 ワークスペース領域



33. 作成したプロジェクトをダブルクリックして、コンポーネントをロードします。
34. メニュー・バーで「すべて保存」アイコンをクリックし、構成された新規のアウトバウンド BPM プロセス・コンポーネントを保存します。

これで書込み操作のファイル・アダプタを作成する準備ができました。

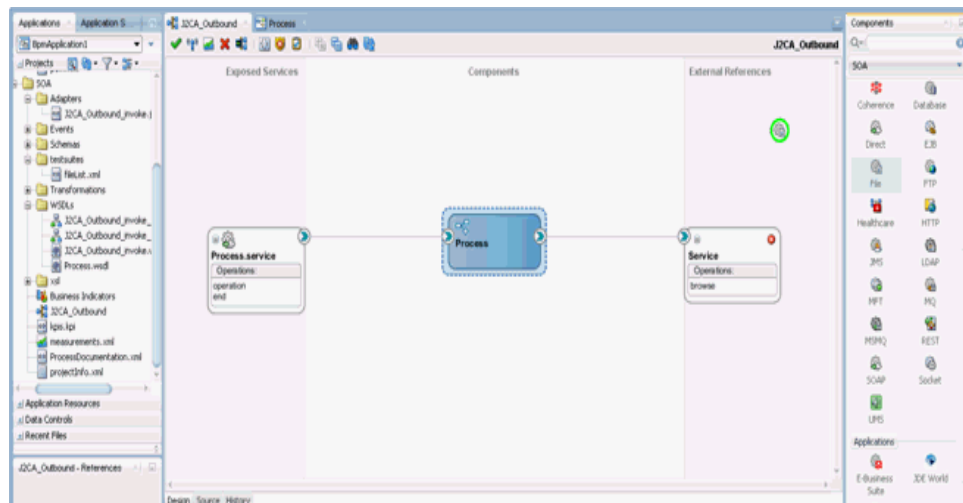
#### 6.4.2.3 書込み操作のファイル・アダプタの作成

この項では、書込み操作のファイル・アダプタの作成方法について説明します。

書き込み操作のファイル・アダプタを作成するには、次のステップを実行します。

1. 図 6-25 に示すように、「テクノロジー・アダプタ」ペインから「ファイル・アダプタ」コンポーネントを「外部参照」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

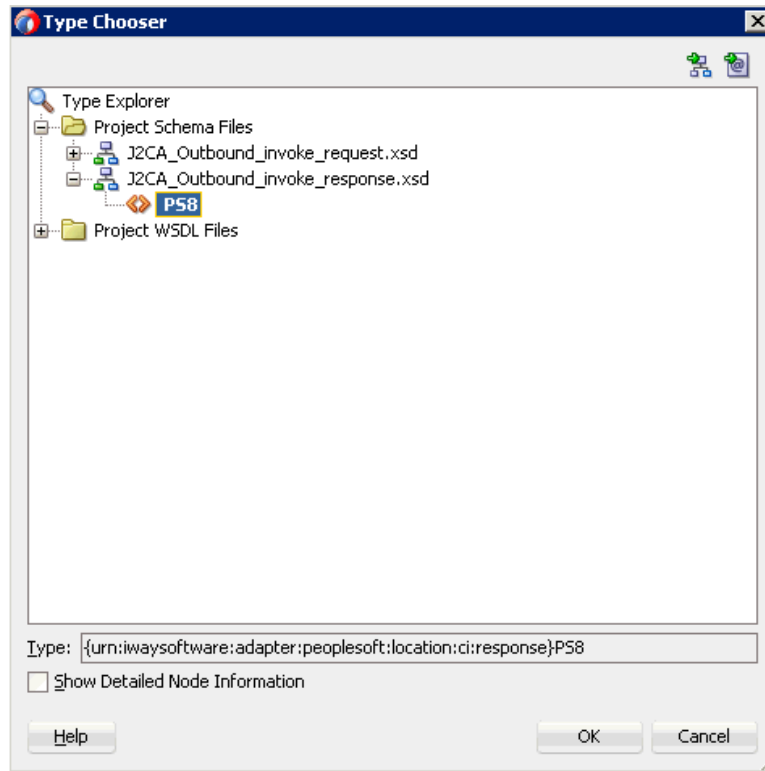
図 6-25 「ファイル・アダプタ」コンポーネント



アダプタ構成ウィザードが表示されます。

2. 参照名 (「FileWrite」など) を入力します。
3. 「次へ」をクリックします。  
アダプタ・インタフェース・ページが表示されます。
4. 操作およびスキーマから定義 (後で指定) オプションが選択されていることを確認します。
5. 「次へ」をクリックします。  
「ファイル・サーバーの接続」ページが表示されます。
6. 「次へ」をクリックします。  
「操作」ページが表示されます。
7. 操作タイプ・オプションのリストから **Write File** を選択し、操作名 (「Write」など) を指定します。
8. 「次へ」をクリックします。  
ファイル構成ページが表示されます。
9. 出力ファイルの書き込み先となるファイル・システム上の場所を指定します。
10. 「ファイル命名規則」フィールドで、出力ファイルの名前を指定します。
11. 「次へ」をクリックします。  
「メッセージ」ページが表示されます。
12. 「URL」フィールドの右にある「参照」をクリックします。  
図 6-26 に示すように、「タイプ・チューザ」ダイアログが表示されます。

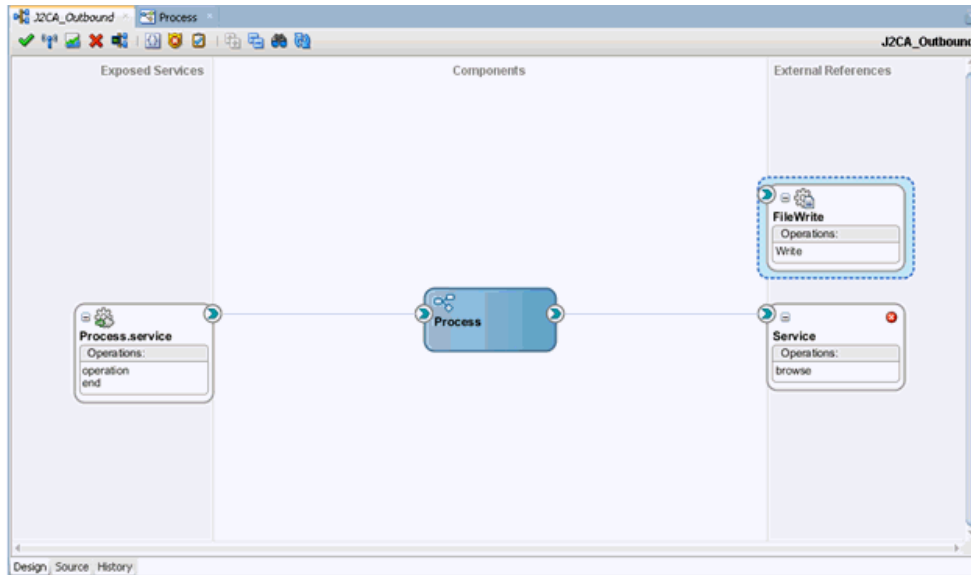
図 6-26 「タイプ・チューザ」ダイアログ



13. プロジェクトのスキーマ・ファイル、「J2CA\_Outbound\_invoke\_response.xsd」の順に展開します。
14. 使用可能なスキーマを選択します (「PS8」など)。
15. 「OK」をクリックします。  
「メッセージ」ページに戻ります。
16. 「次へ」をクリックします。  
「終了」ページが表示されます。
17. 「終了」をクリックします。

図 6-27 に示すように、「外部参照」ペインでファイル・アダプタ・サービスが作成されます。

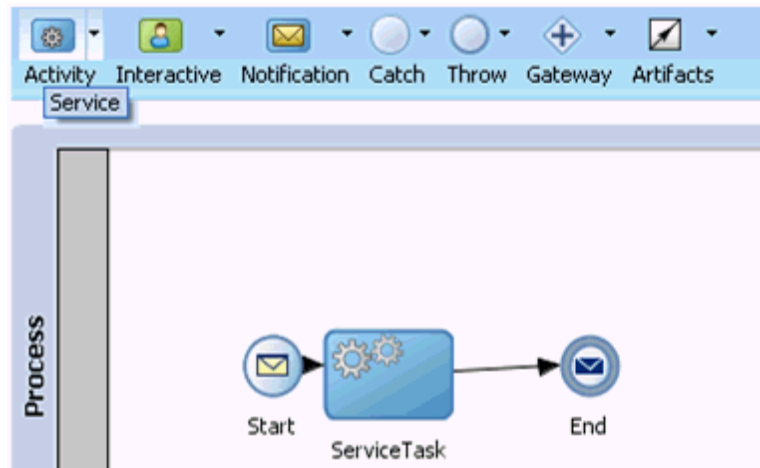
図 6-27 ファイル・アダプタ・サービス



18. BPMN プロセス・コンポーネントをダブルクリックします。

図 6-28 に示すように、BPMN プロセスが表示されます。

図 6-28 BPMN プロセス

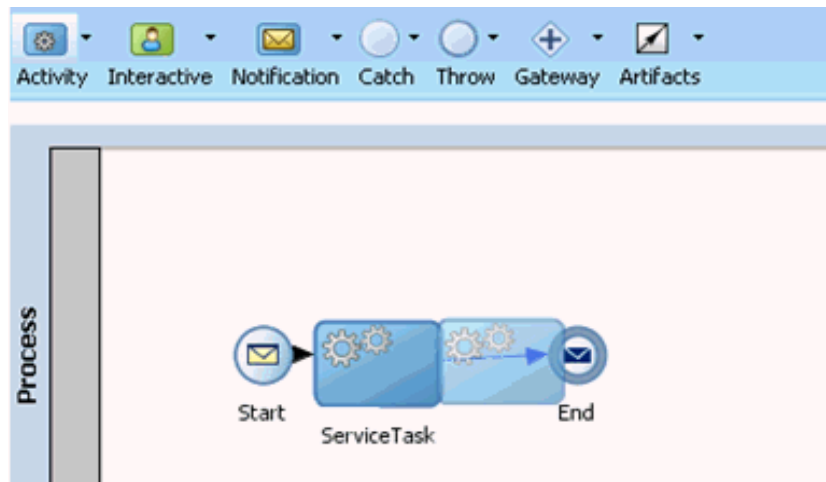


19. 「アクティビティ」アイコンをクリックし、「サービス」を選択します。

20. 図 6-29 に示すように、「サービス・タスク」イベント・コンポーネントと「End」イベント・コンポーネント間の伝送路に「サービス」アイコンをドロップします。



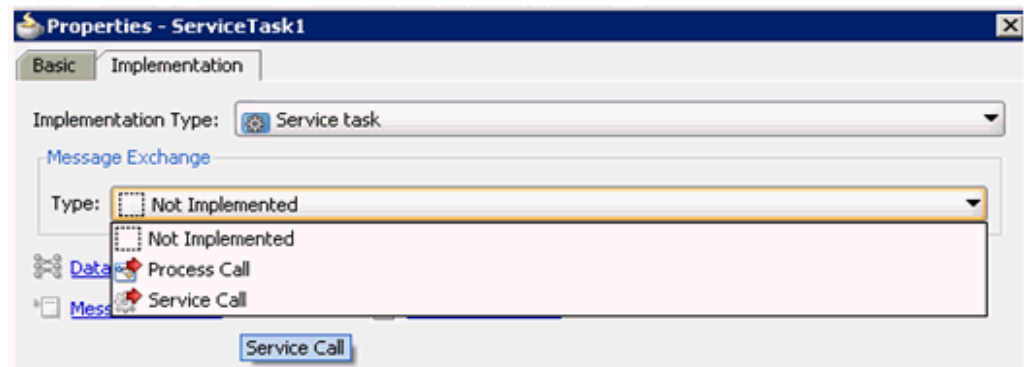
図 6-29 「アクティビティ」アイコン



「プロパティ - ServiceTask1」ダイアログが表示されます。

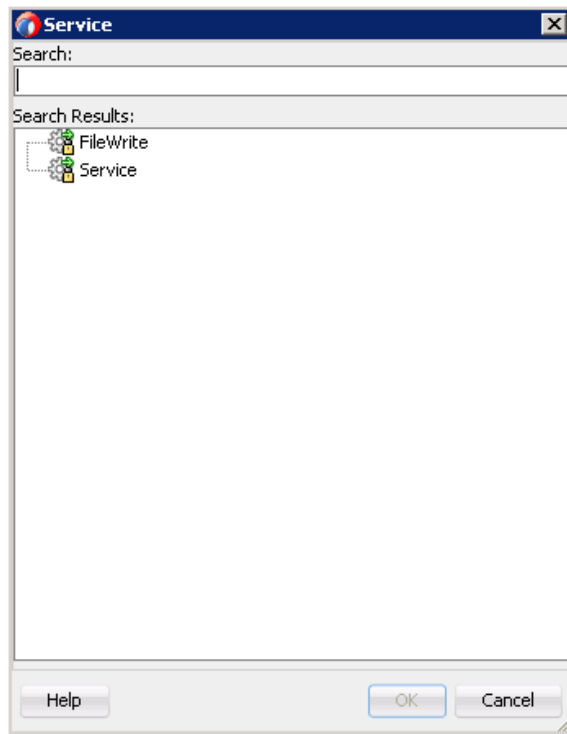
21. 実装タブをクリックします。
22. 図 6-30 に示すように、「メッセージ交換」セクションの「タイプ」ドロップダウン・リストから「サービス・コール」を選択します。

図 6-30 サービス・コール



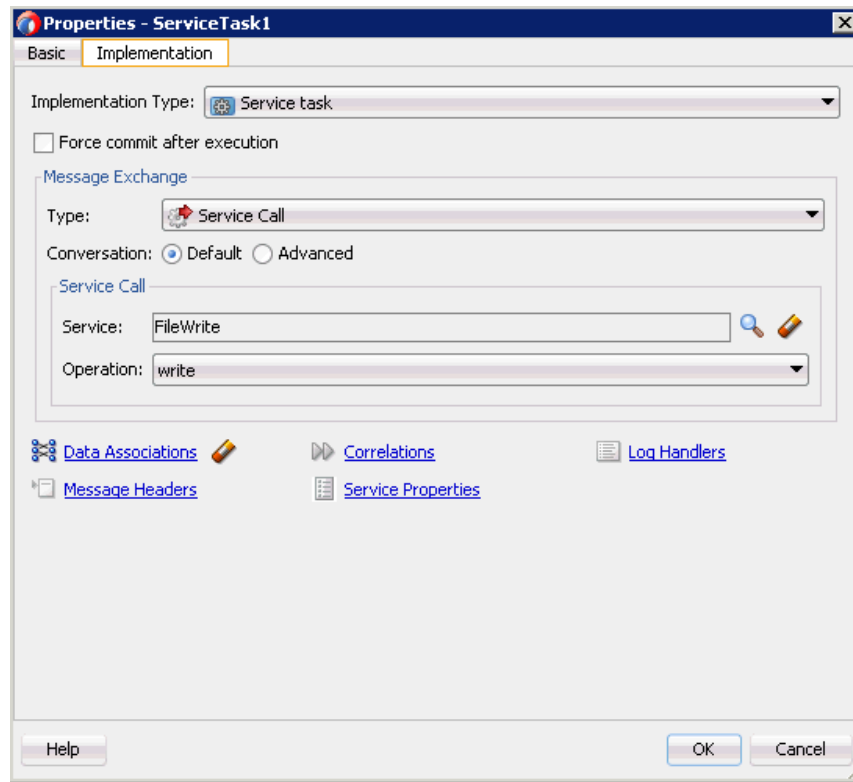
23. 「サービス」フィールドの右にある「参照」アイコンをクリックします。  
 図 6-31 に示すように、「サービス」ダイアログが表示されます。

図 6-31 「サービス」 ダイアログ



24. 作成された書込み操作のサービスを選択し (「FileWrite」など)、「OK」をクリックします。  
図 6-32 に示すように、「プロパティ - ServiceTask1」ダイアログに戻ります。

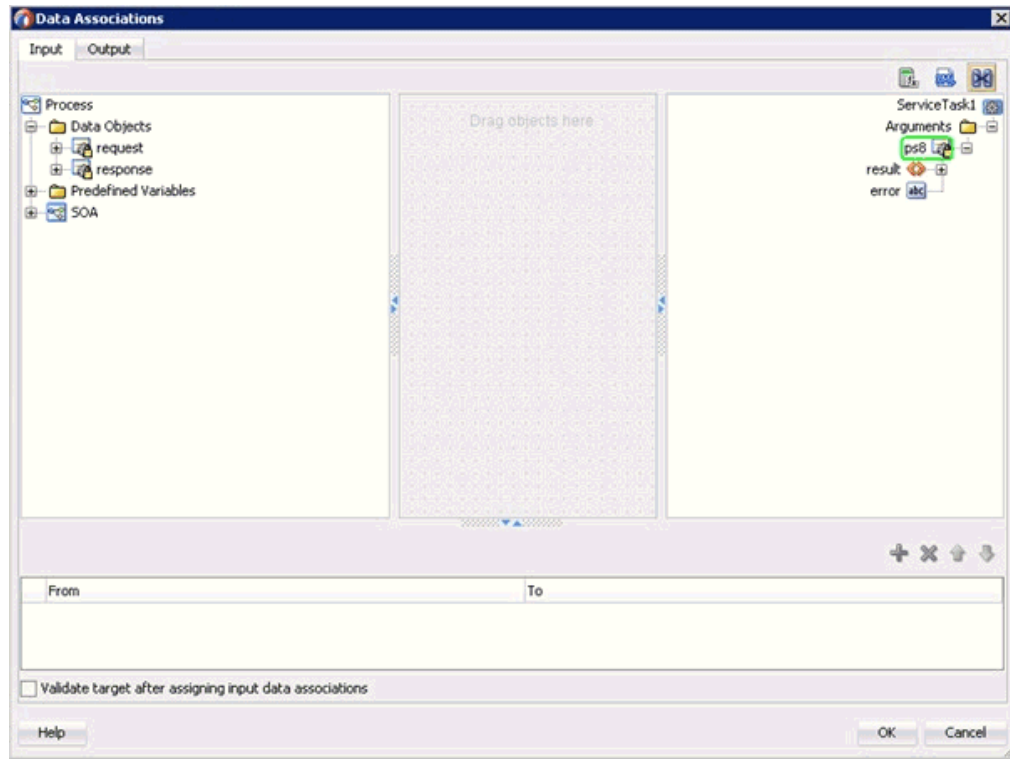
図 6-32 「プロパティ - ServiceTask1」ダイアログ



25. 「データ・アソシエーション」ハイパーリンクをクリックします。

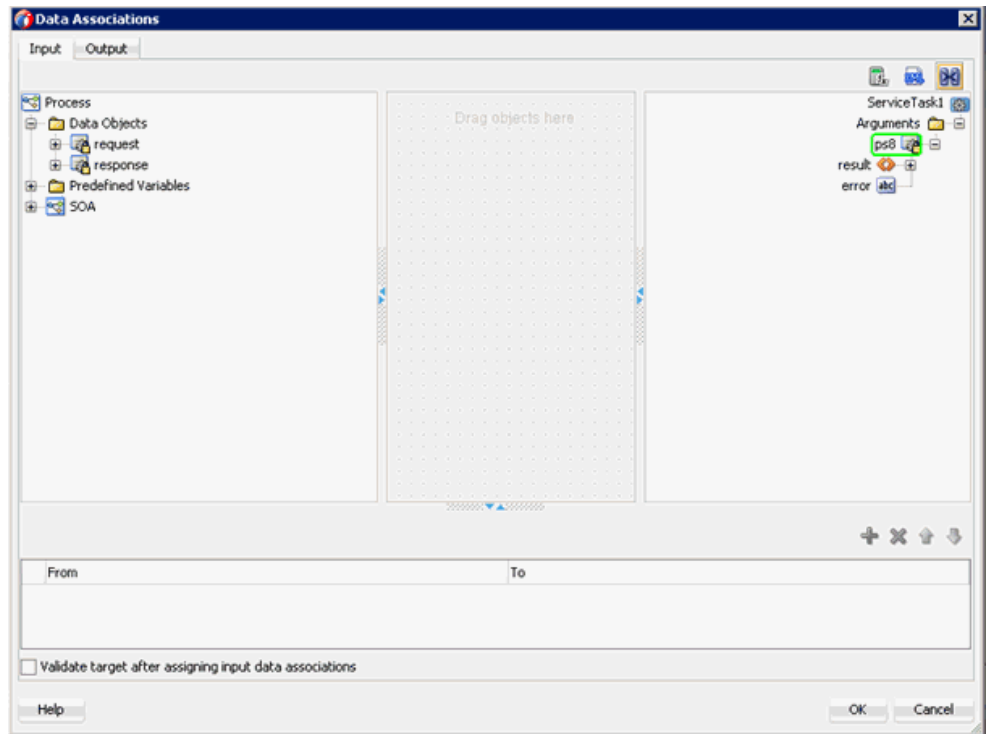
図 6-33 に示すように、「データ・アソシエーション」ダイアログが表示されます。

図 6-33 「データ・アソシエーション」 ダイアログ



26. 「入力」 タブで、右ペインの上部にある XSL 変換アイコンをクリックします。
27. 図 6-34 に示すように、XSL 変換アイコンを「PS8」ノードにドラッグ・アンド・ドロップします。

図 6-34 CompanyCodePeopleSoftResponse ノード

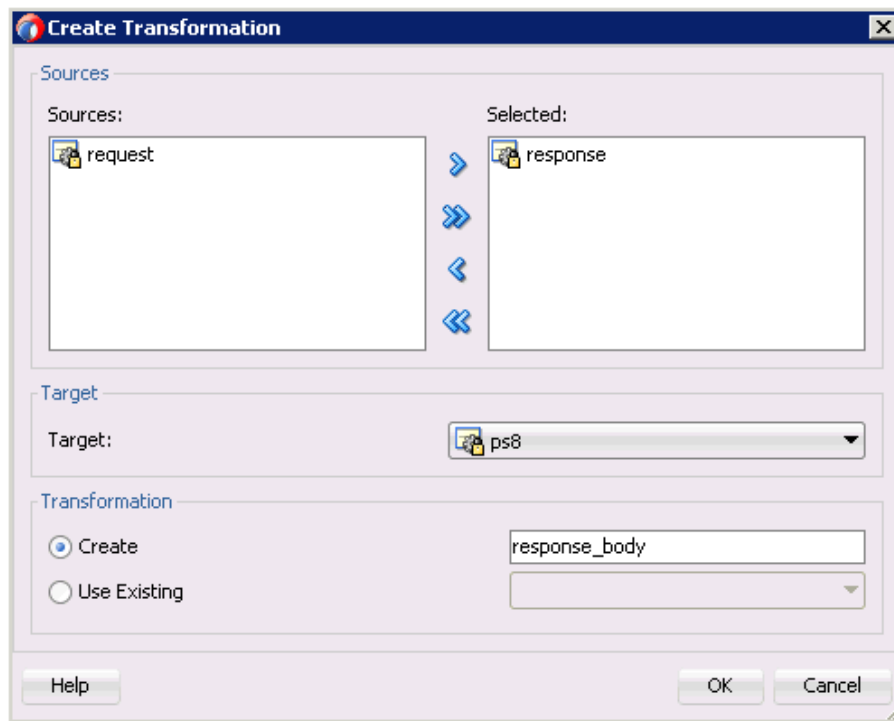


変換の作成ダイアログが表示されます。

28. ソース・セクションで「Response」を選択し、右矢印記号をクリックします。

図 6-35 に示すように、「Response」オブジェクトが選択された要素領域に追加されます。

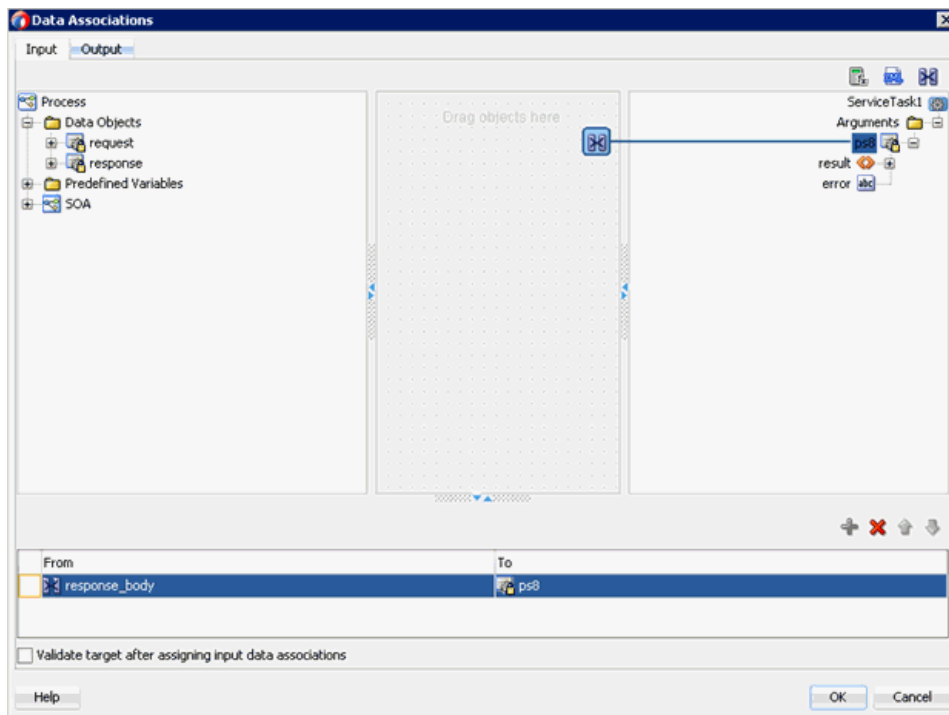
図 6-35 「Response」 オブジェクト



29. 「OK」をクリックして、「ターゲット」ドロップダウン・リストで選択されたデフォルト値と「作成」フィールドのデフォルト名を受け入れます。

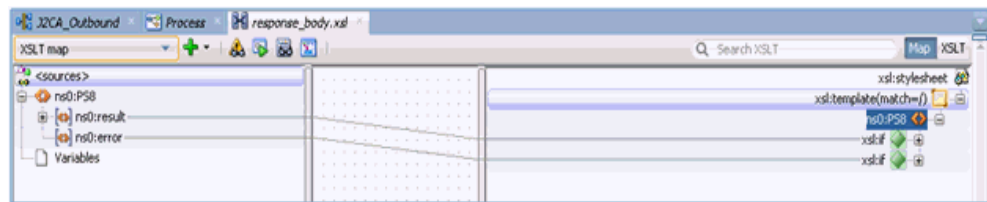
図 6-36 に示すように、XSL 変換が作成された「データ・アソシエーション」ダイアログ・ウィンドウに戻ります。

図 6-36 「データ・アソシエーション」ダイアログ



30. 「OK」をクリックします。  
「プロパティ - ServiceTask1」 ダイアログに戻ります。
31. 「OK」をクリックします。  
「Response\_body.xml」 タブが表示されます。
32. ソース要素とターゲット要素を自動マップします。  
自動マップ・プリファレンス・ダイアログが表示されます。
33. デフォルト値を受け入れ、「OK」をクリックします。  
図 6-37 に示すように、変換が完成します。

図 6-37 完成した変換



34. トランスフォーメーションを保存します。
35. 「プロセス」 ワークスペース領域に戻ります。  
「ServiceTask」 コンポーネントと 「End」 イベント・コンポーネント間に 「ServiceTask1」 コンポーネントが作成されます。
36. メニュー・バーで 「すべて保存」 アイコンをクリックし、構成された新規のアウトバウンド BPM プロセス・コンポーネントを保存します。  
これで、アウトバウンド BPM プロセスをデプロイする準備ができました。

### 6.4.3 12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応

12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応方法の詳細は、[4.4.3.3 項「12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応」](#) (4-26 ページ) を参照してください。

### 6.4.4 BPM アウトバウンド・プロセスのデプロイ

メディアエータ・アウトバウンド・プロセスをデプロイするには、次のステップを実行します

1. 左ペインでプロジェクト名を右クリックし、「デプロイ」を選択して、「J2CA\_Outbound」をクリックします。  
デプロイメント・アクション・ページが表示されます。
2. アプリケーション・サーバーにデプロイが選択されていることを確認します。
3. 「次へ」をクリックします。  
構成のデプロイ・ページが表示されます。
4. デフォルト値を選択したままにし、「次へ」をクリックします。  
サーバーの選択ページが表示されます。
5. 構成済の使用可能なアプリケーション・サーバーを選択し、「次へ」をクリックします。

SOA サーバー・ページが表示されます。

6. ターゲットの SOA サーバーを選択し、「次へ」をクリックします。  
「サマリー」ページが表示されます。
7. プロジェクトに使用可能なすべてのデプロイメント情報をレビューおよび確認し、「終了」をクリックします。

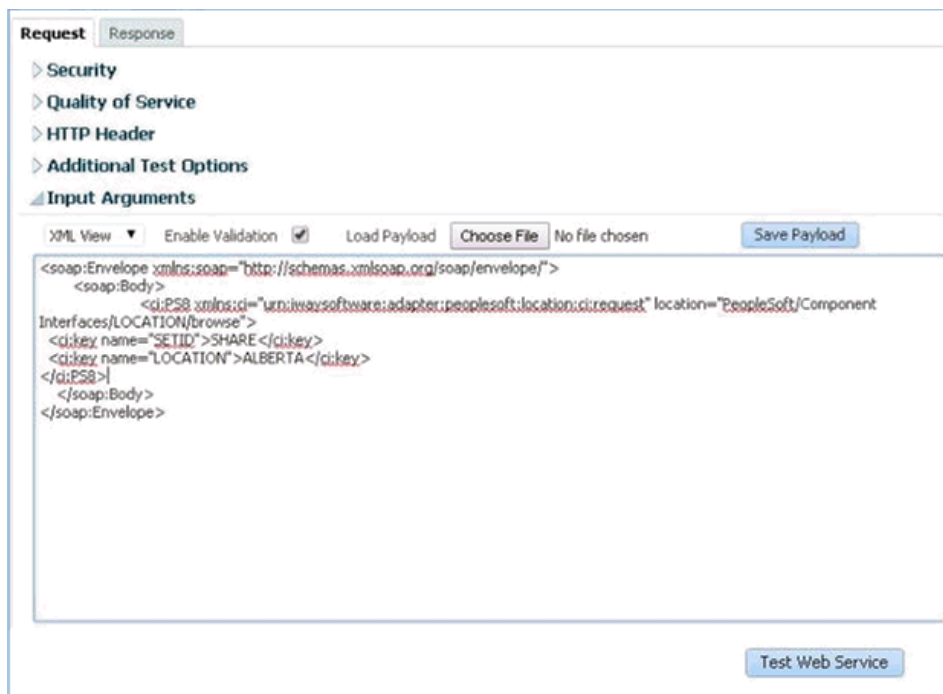
詳細は、4.4.4 項「BPEL アウトバウンド・プロセスのデプロイ」(4-32 ページ)を参照してください。

## 6.4.5 Oracle Enterprise Manager Console での入力 XML ドキュメントの起動

Oracle Enterprise Manager Console で入力 XML ドキュメントを起動するには、次のステップを実行します

1. Oracle Enterprise Manager Console にログオンします。
2. 左ペインでドメイン、「SOA」フォルダの順に展開します。
3. 使用可能なプロジェクト(「J2CA\_Outbound」など)を選択します。
4. 「テスト」をクリックします。
5. 「リクエスト」タブをクリックします。

図 6-38 「リクエスト」タブ

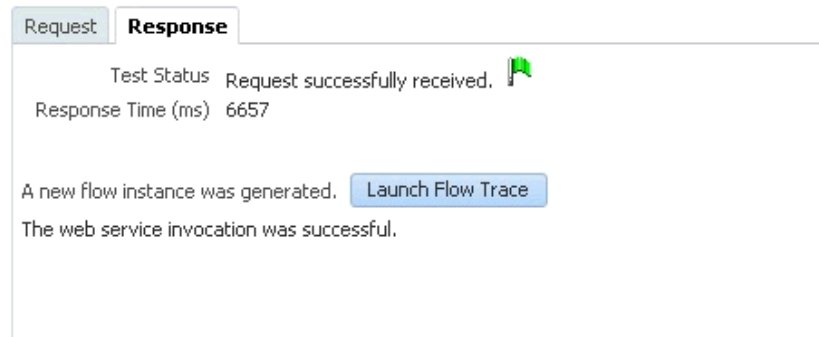


6. 図 6-38 に示すように、「値」フィールドに適切な入力値を入力し、Web サービスのテストをクリックします。

図 6-39 に示すように、Oracle Enterprise Manager Console で起動に成功したことを示すレスポンスが「レスポンス」タブで受信されます。



図 6-39 受信されたレスポンス



7. ファイル・システムの定義済出力ディレクトリにナビゲートし、受信された XML レスポンス・ドキュメントを開きます。

XML レスポンス・ドキュメントには、値と生成された出力が含まれます。

## 6.5 変換を使用したイベント統合のためのインバウンド BPM プロセスの設計 (J2CA 構成)

この項では、Oracle Application Adapter for PeopleSoft を PeopleSoft と統合してイベント・データを受信する方法について説明します。

このインバウンド・ユース・ケース・シナリオ用のサンプル・プロジェクトが、次に示す Application Adapter のインストール・フォルダに用意されています。

```
<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\BPM\J2CA\Inbound_Project
```

アダプタのデザインタイム構成を完了するには、次のツールが必要です。

- Oracle Adapter アプリケーション・エクスプローラ (アプリケーション・エクスプローラ)
- Oracle JDeveloper BPM デザイナ (JDeveloper)

---

**注意:** この章に記載されている例では JDeveloper が使用されています。

---

この項では、次のトピックについて説明します。

- [6.5.1 項「BPM 用の空のコンポジットの作成」](#)
- [6.5.2 項「BPM インバウンド・プロセスの定義」](#)

BPM プロセスを設計する前に、アプリケーション・エクスプローラを使用して、各 WSDL ファイルを生成する必要があります。詳細は、[4.5.1 項「イベント統合のための WSDL の生成」](#) (4-35 ページ) を参照してください。

### 6.5.1 BPM 用の空のコンポジットの作成

Oracle JDeveloper での新規アプリケーション・サーバー接続の構成方法の詳細は、[4.3 項「新規のアプリケーション・サーバー接続の構成」](#) (4-2 ページ) を参照してください。

## 6.5.2 BPM インバウンド・プロセスの定義

この項では、BPM インバウンド・プロセスの定義方法について説明します。次のトピックが含まれています。

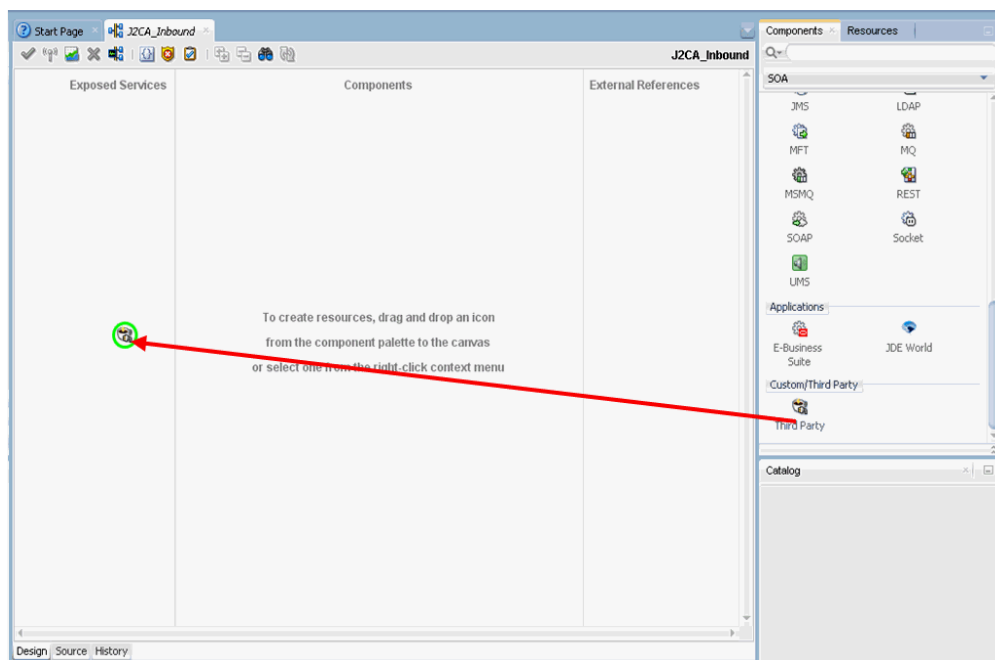
- 6.5.2.1 項「サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成」
- 6.5.2.2 項「インバウンド BPM プロセス・コンポーネントの構成」
- 6.5.2.3 項「書込み操作のファイル・アダプタの作成」
- 6.5.2.4 項「12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応」

### 6.5.2.1 サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成

サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントを作成するには、次のステップを実行します。

1. 作成したプロジェクトをダブルクリックして、コンポーネントをロードします。
2. 図 6-40 に示すように、「カスタム/サード・パーティ」ペインから「サード・パーティ・アダプタ」コンポーネントを公開された参照ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

図 6-40 「サード・パーティ・アダプタ」コンポーネント



サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成ダイアログが表示されます。

3. サード・パーティ・アダプタ・サービスの名前を入力します。
4. 「タイプ」リストで「サービス」が選択されていることを確認します (デフォルト)。
5. 「WSDL URL」フィールドの右にある既存の WSDL を検索アイコンをクリックします。

WSDL チューザ・ダイアログが表示されます。

6. 「ファイル・システム」を選択し、次のディレクトリまでブラウザしてインバウンド WSDL ファイルを選択します。

```
<ADAPTER_HOME>\wsdl
```

7. 「OK」をクリックします。

ファイルのローカライズ・ダイアログが表示されます。

8. 「OK」をクリックします。

インバウンド WSDL ファイルおよび関連 receive\_request XML スキーマ・ファイル (.xsd) が、作成済のプロジェクト・フォルダにインポートされます。

サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成ダイアログに戻ります。

9. 「JCA ファイル」フィールドの右にある **JCA ファイルを検索** アイコンをクリックします。

変換チューザ・ダイアログが表示されます。

10. 「ファイル・システム」を選択し、次のディレクトリまでブラウザして JCA プロパティ・ファイルを選択します。

```
<ADAPTER_HOME>\wsdl
```

11. 「OK」をクリックします。

ファイルのコピーメッセージが表示されます。

12. 「はい」をクリックします。

JCA プロパティ・ファイルのコピーがプロジェクト・フォルダ内に作成されます。

サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成ダイアログに戻ります。

13. 「OK」をクリックします。

サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネント (**matmas**) が作成され、公開された参照ペインに表示されます。

これで、インバウンド BPM プロセス・コンポーネントを構成する準備ができました。

詳細は、[4.4.3.1 項「サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成」](#) (4-11 ページ) を参照してください。

### 6.5.2.2 インバウンド BPM プロセス・コンポーネントの構成

この項では、インバウンド BPM プロセス・コンポーネントの構成方法について説明します。

インバウンド BPM プロセス・コンポーネントを構成するには、次のステップを実行します。

1. コンポーネント・ペインから **BPMN プロセス**・コンポーネントをコンポーネント・ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

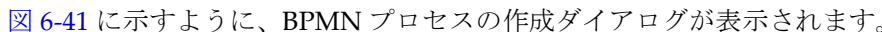
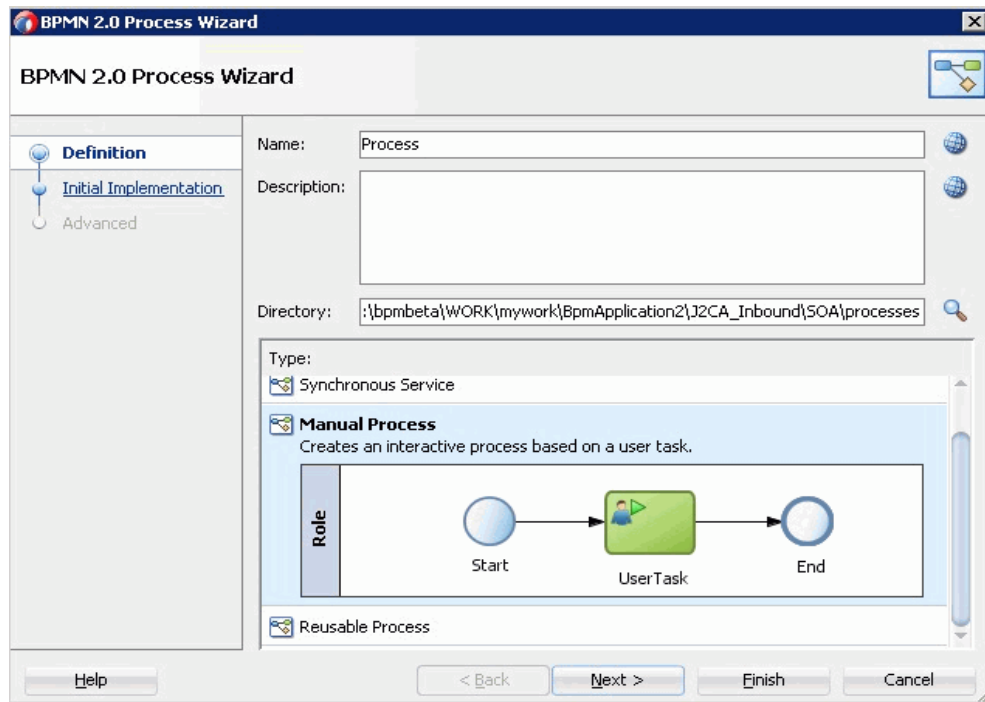
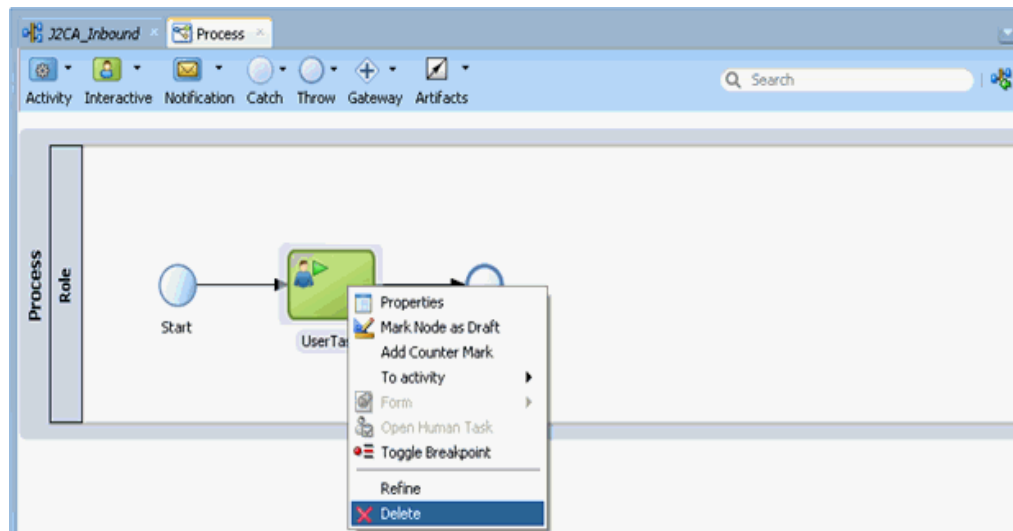
 **図 6-41** に示すように、BPMN プロセスの作成ダイアログが表示されます。

図 6-41 BPMN プロセスの作成ダイアログ



2. 「タイプ」セクションで手動プロセスを選択します。
3. 「終了」をクリックします。  
図 6-42 に示すように、BPMN プロセスが表示されます。

図 6-42 BPMN プロセス



4. **UserTask** を右クリックし、メニューから「削除」を選択します。
5. **Start** イベント・コンポーネントをダブルクリックします。  
「プロパティ - Start」ダイアログが表示されます。
6. 実装タブをクリックします。

7. 「実装タイプ」リストからメッセージを選択します。
8. 「メッセージ交換」の「タイプ」ドロップダウン・リストから「インタフェースの使用」を選択します。
9. 図 6-43 に示すように、「参照」フィールドの右の「参照」アイコンをクリックします。

図 6-43 「参照」アイコン

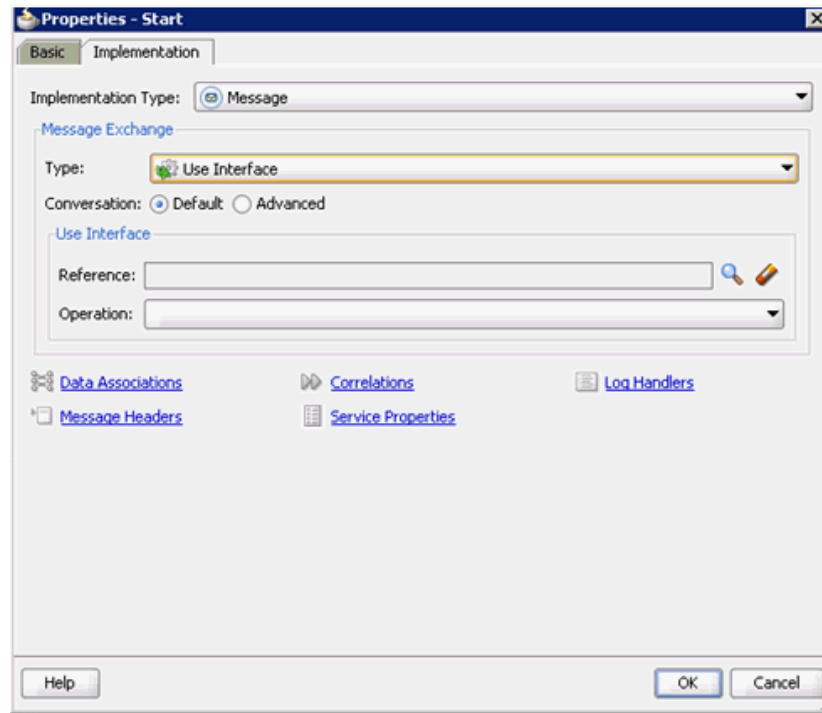
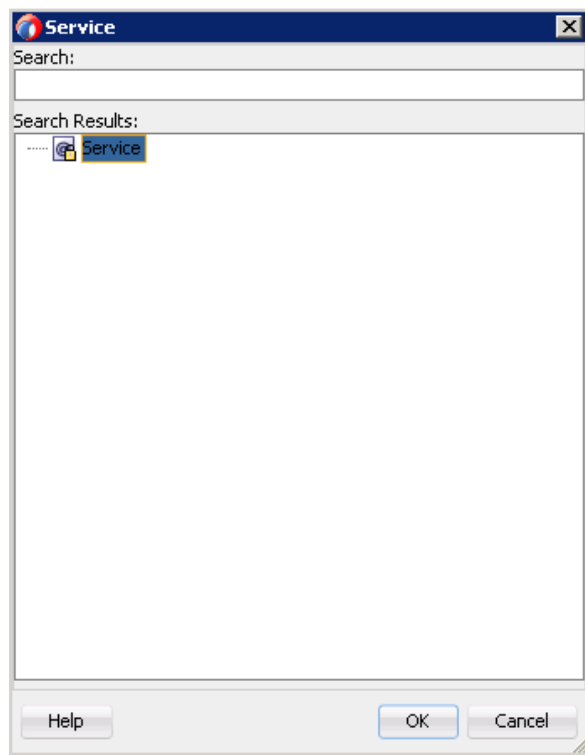


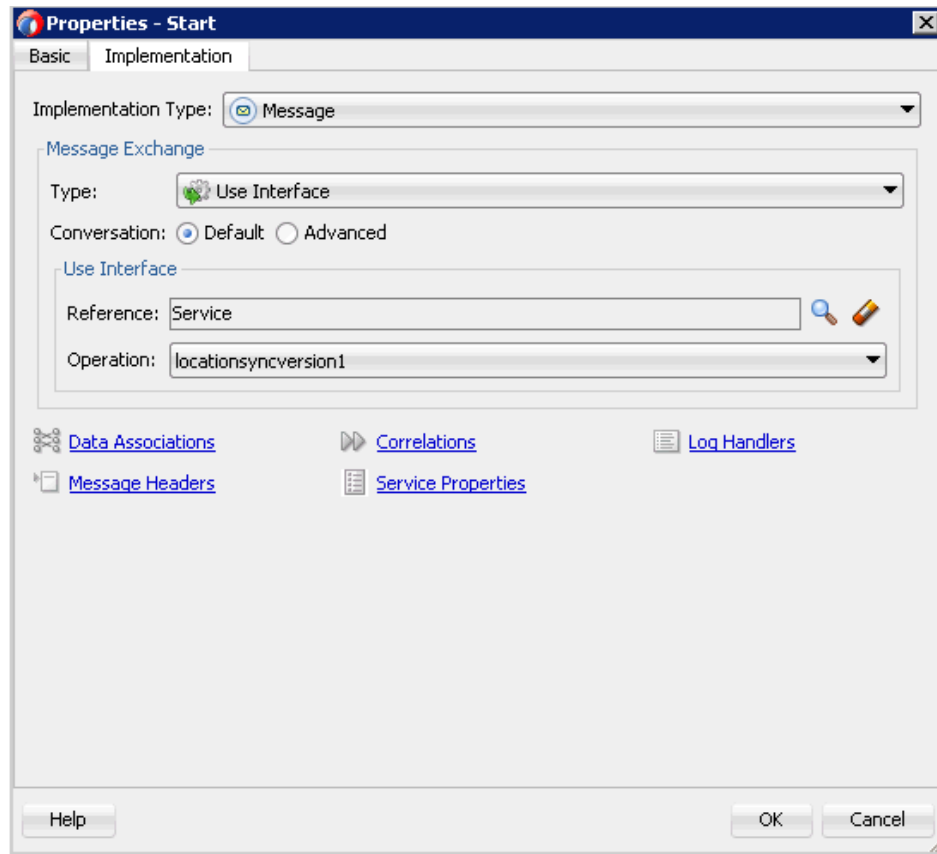
図 6-44 に示すように、「サービス」ダイアログが表示されます。

図 6-44 「サービス」 ダイアログ



10. 作成されたサード・パーティ・サービスを選択し、「OK」をクリックします。  
図 6-45 に示すように、「プロパティ - Start」ダイアログに戻ります。

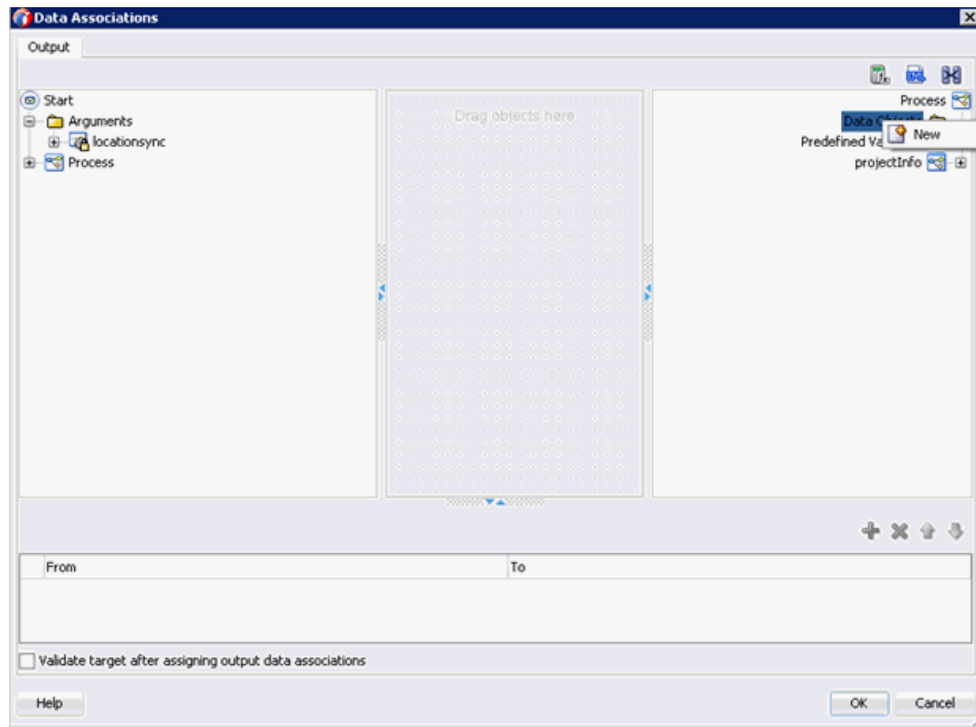
図 6-45 「プロパティ - Start」ダイアログ



11. 「データ・アソシエーション」アイコンをクリックします。

図 6-46 に示すように、「データ・アソシエーション」ダイアログが表示されます。

図 6-46 「データ・アソシエーション」 ダイアログ



12. 右ペインのデータ・オブジェクト・ノードを右クリックし、「新規」を選択します。

データ・オブジェクトの作成ダイアログが表示されます。

13. 図 6-47 に示すように、「名前」フィールドに名前を入力し、「タイプ」フィールドのドロップダウン・ボタンをクリックして、リストから「参照」を選択します。

図 6-47 データ・オブジェクトの作成ダイアログ

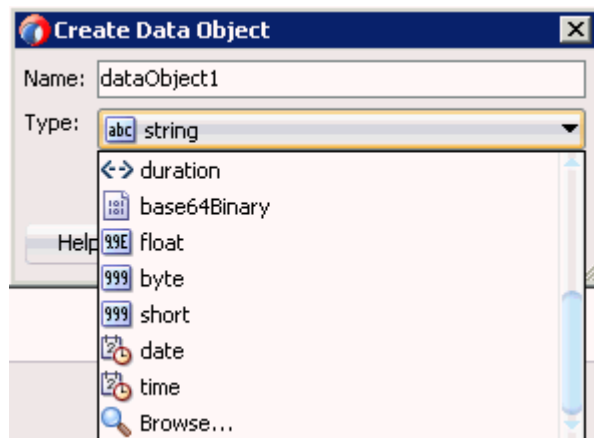
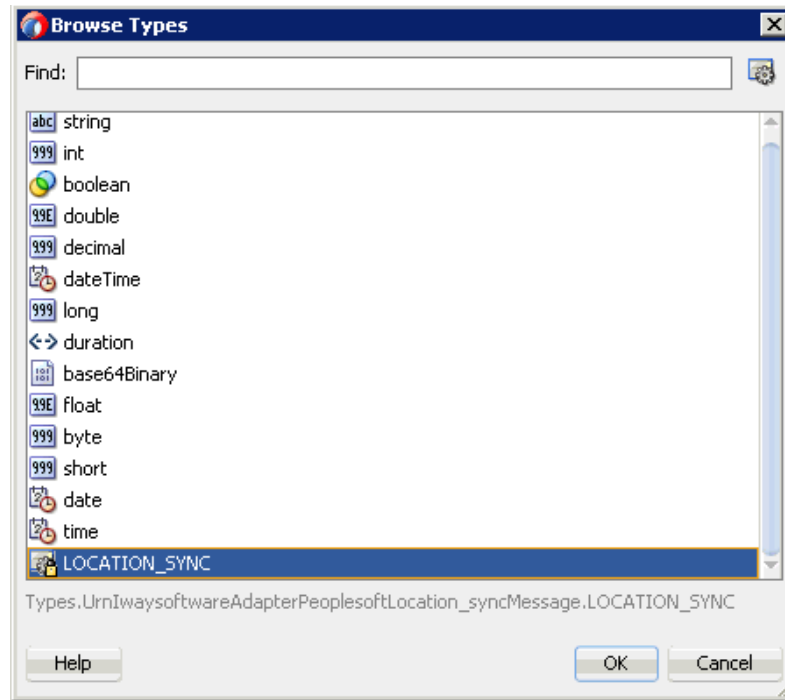


図 6-48 に示すように、参照タイプ・ダイアログが表示されます。



図 6-48 参照タイプ・ダイアログ



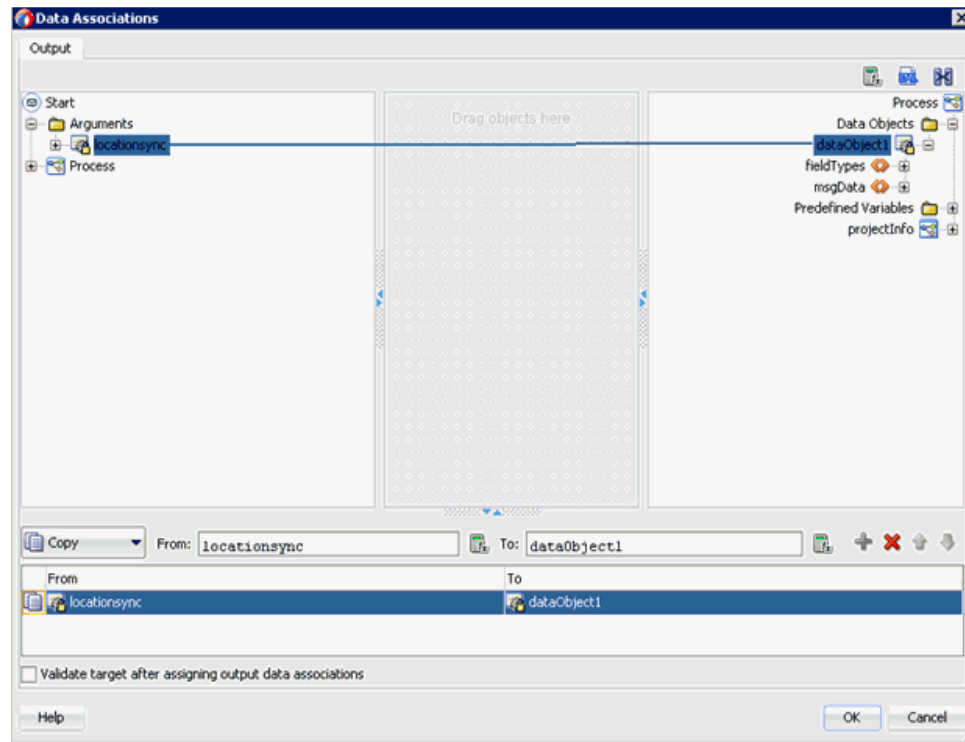
14. コンポーネントを選択し、「OK」をクリックします。

データ・オブジェクトの作成ダイアログに戻ります。

15. 「OK」をクリックします。

図 6-49 に示すように、作成されたデータ・オブジェクトが「データ・アソシエーション」ダイアログの「データ・オブジェクト」ノードの下に表示されます。

図 6-49 「データ・アソシエーション」 ダイアログ



16. 左ペインの Start ノードの下にある「locationsync」引数を選択し、右ペインのデータ・オブジェクトにドラッグします。
17. 「OK」をクリックします。  
「プロパティ - Start」ダイアログに戻ります。
18. 「OK」をクリックします。  
「プロセス」ワークスペース領域に戻ります。
19. 作成したプロジェクトをダブルクリックして、コンポーネントをロードします。
20. メニュー・バーの「すべて保存」アイコンをクリックし、構成された新規のインバウンド BPM プロセス・コンポーネントを保存します。  
これで書込み操作のファイル・アダプタを作成する準備ができました。

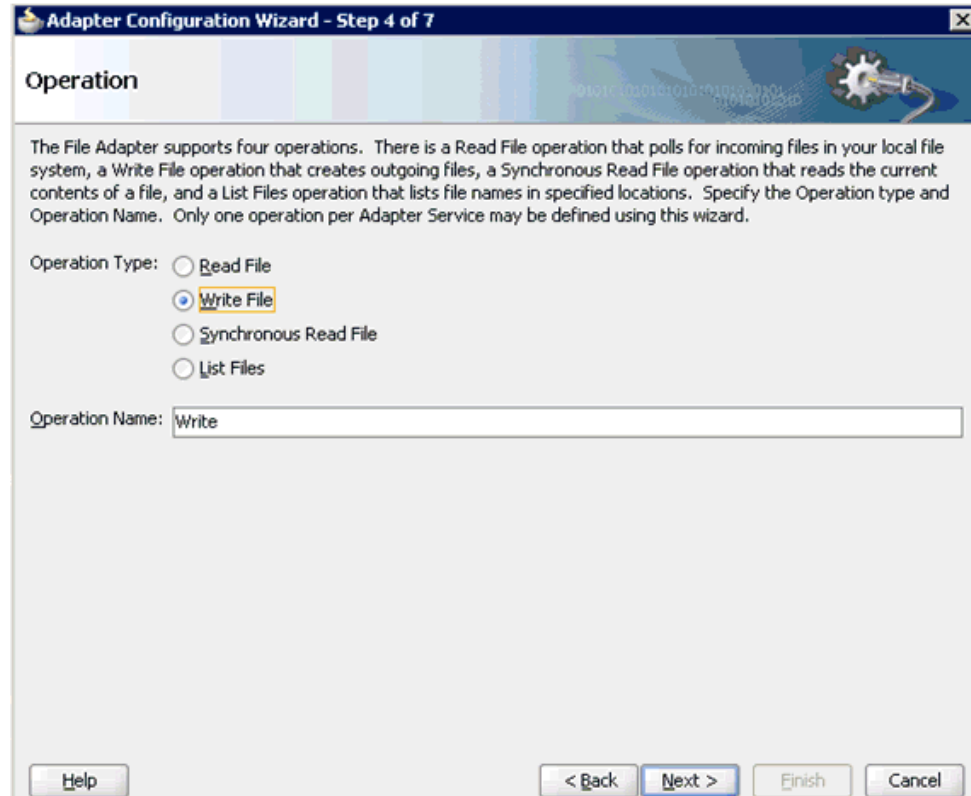
### 6.5.2.3 書込み操作のファイル・アダプタの作成

この項では、書込み操作のファイル・アダプタの作成方法について説明します。  
書込み操作のファイル・アダプタを作成するには、次のステップを実行します。

1. 「テクノロジ・アダプタ」ペインから「ファイル・アダプタ」コンポーネントを「外部参照」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。  
アダプタ構成ウィザードが表示されます。
2. 「名前」フィールドに新規のファイル・アダプタの名前を入力し、「次へ」をクリックします。  
アダプタ・インタフェース・ページが表示されます。
3. 操作およびスキーマから定義（後で指定）オプションが選択されていることを確認します。

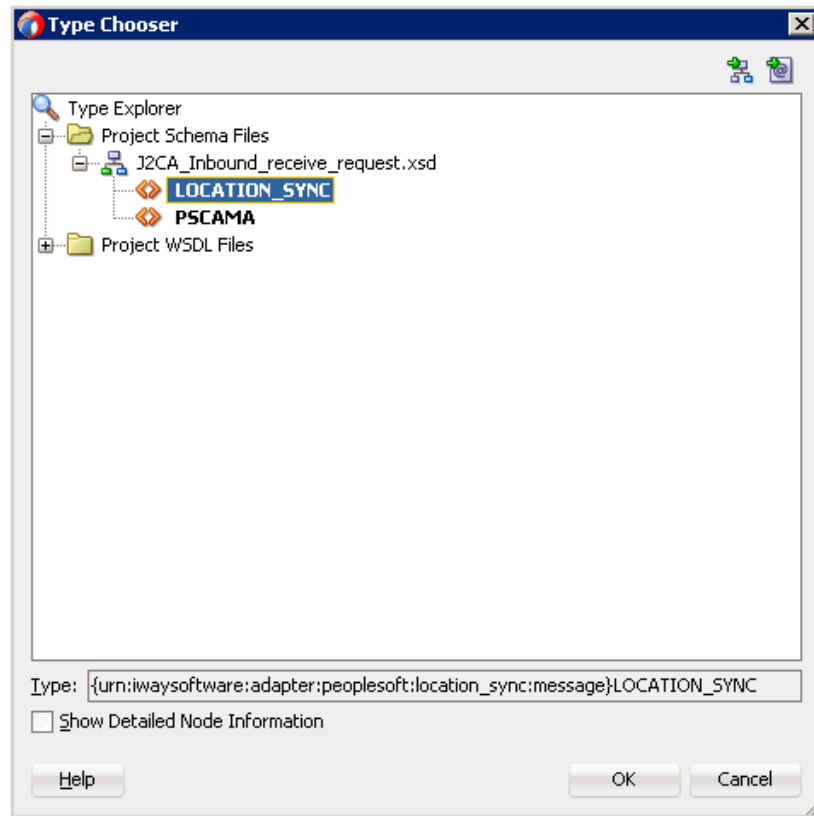
4. 「次へ」をクリックします。  
「ファイル・サーバーの接続」ページが表示されます。
5. 「次へ」をクリックします。  
図 6-50 に示すように、「操作」ページが表示されます。

図 6-50 「操作」ページ



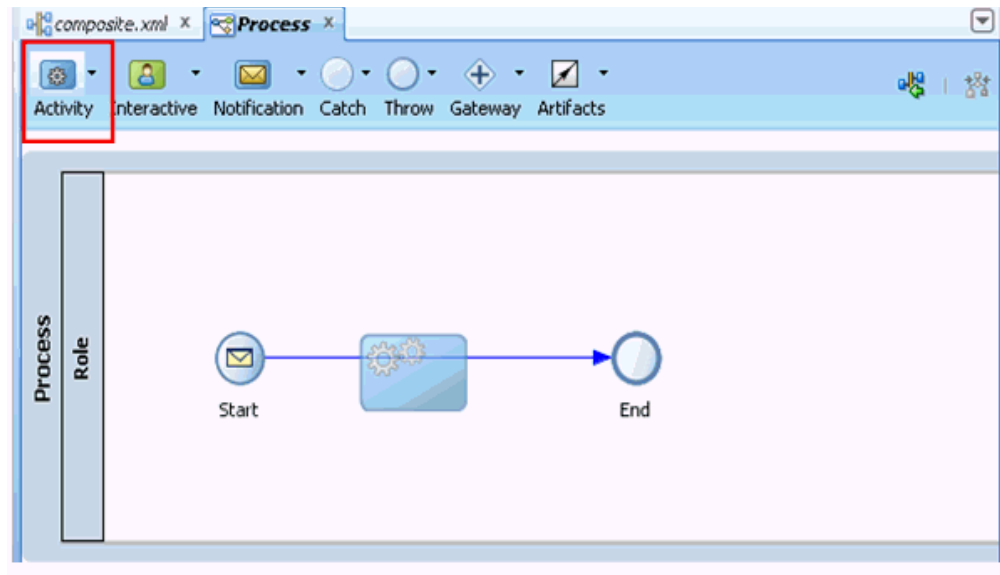
6. 操作タイプ・オプションのリストから **Write File** を選択し、操作名 (「Write」など) を指定します。
7. 「次へ」をクリックします。  
ファイル構成ページが表示されます。
8. 出力ファイルの書込み先となるファイル・システム上の場所を指定します。
9. 「ファイル命名規則」フィールドで、出力ファイルの名前を指定します。
10. 「次へ」をクリックします。  
「メッセージ」ページが表示されます。
11. 「URL」フィールドの右にある「参照」をクリックします。  
図 6-51 に示すように、「タイプ・チューザ」ダイアログが表示されます。

図 6-51 「タイプ・チューザ」 ダイアログ



12. プロジェクトのスキーマ・ファイル、「J2CA\_Inbound\_receive\_request.xsd」の順に展開します。
13. 使用可能なスキーマを選択します。
14. 「OK」をクリックします。  
「メッセージ」ページに戻ります。
15. 「次へ」をクリックします。  
「終了」ページが表示されます。
16. 「終了」をクリックします。  
「外部参照」ペインでファイル・アダプタ・サービスが作成されます。
17. BPMN プロセス・コンポーネントをダブルクリックします。  
BPMN プロセスが表示されます。
18. 「アクティビティ」アイコンをクリックし、「サービス」を選択します。
19. 図 6-52 に示すように、「Start」と「End」イベント・コンポーネント間の伝送路に「サービス」アイコンをドロップします。

図 6-52 アクティビティアイコン

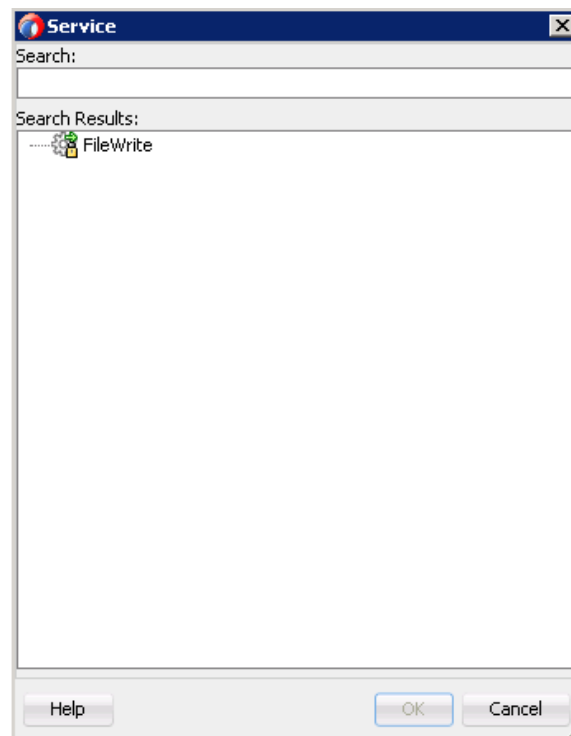


「プロパティ - ServiceTask」 ダイアログが表示されます。

20. 実装タブをクリックします。
21. 「実装タイプ」 リストから「サービス・タスク」を選択します。
22. 「メッセージ交換」の「タイプ」リストから「サービス・コール」を選択します。
23. 「サービス」フィールドの右にある「参照」アイコンをクリックします。

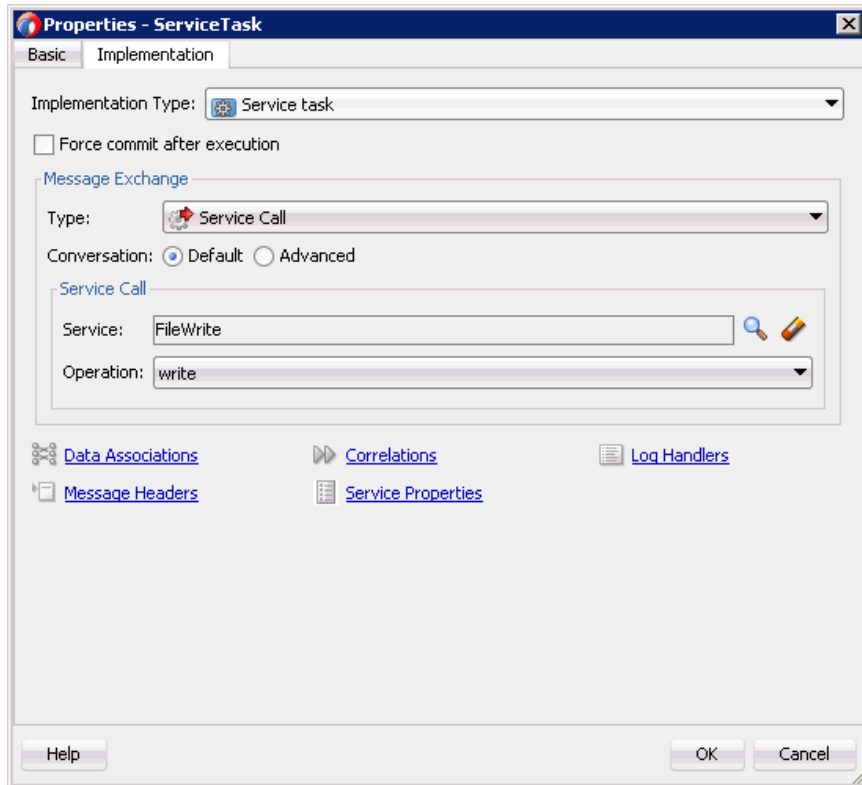
図 6-53 に示すように、「タイプ」ダイアログが表示されます。

図 6-53 「タイプ」ダイアログ



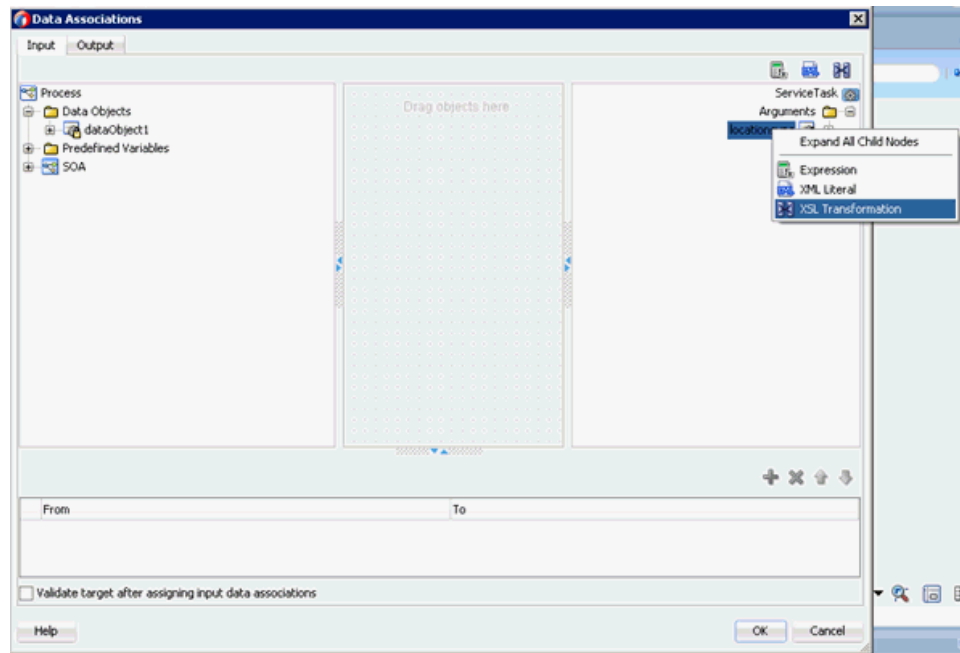
24. 作成された書込み操作のサービスを選択し、「OK」をクリックします。  
図 6-54 に示すように、「プロパティ - ServiceTask」ダイアログに戻ります。

図 6-54 「プロパティ - ServiceTask」ダイアログ



25. 「データ・アソシエーション」ハイパーリンクをクリックします。  
「データ・アソシエーション」ダイアログが表示されます。
26. 図 6-55 に示すように、右ペインで「locationsync」引数を右クリックし、XSL 変換を選択します。

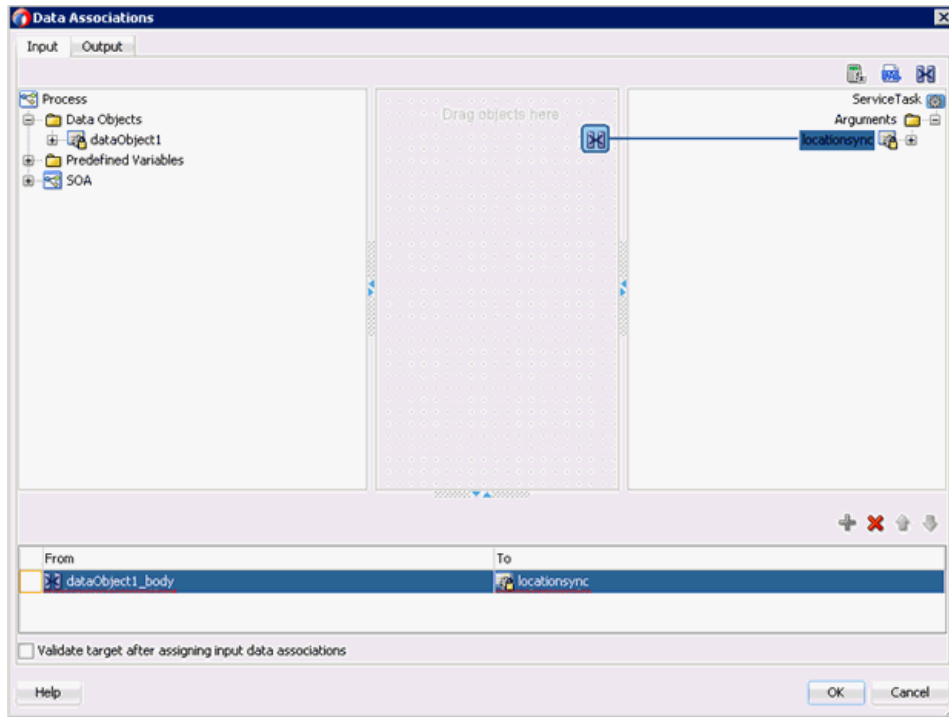
図 6-55 XSL 変換



変換の作成ダイアログが表示されます。

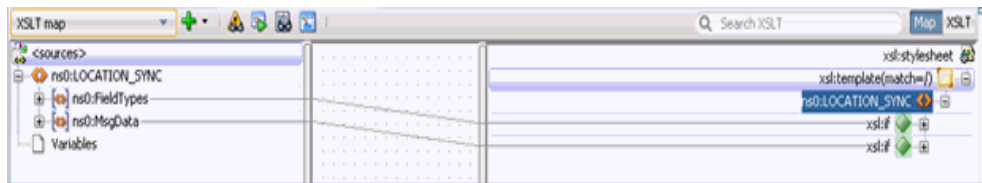
27. ソース領域で作成されたデータ・オブジェクトを選択し、右矢印アイコンをクリックします。作成されたデータ・オブジェクトが選択された要素領域に追加されます。
28. 「OK」をクリックします。  
図 6-56 に示すように、「データ・アソシエーション」ダイアログに戻ります。

図 6-56 「データ・アソシエーション」 ダイアログ



29. 「OK」をクリックします。  
「プロパティ - ServiceTask」ダイアログに戻ります。
30. 「OK」をクリックします。  
「dataobject1\_body.xml」タブが表示されます。
31. ソース要素とターゲット要素を自動マップします。  
自動マップ・プリファレンス・ダイアログが表示されます。
32. デフォルト値を受け入れ、「OK」をクリックします。  
図 6-57 に示すように、変換が完成します。

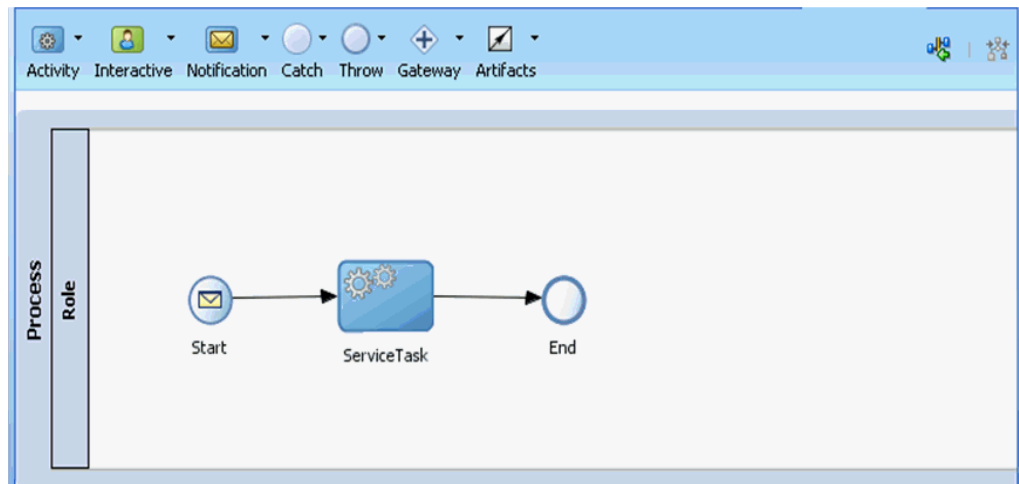
図 6-57 完成した変換



33. トランスフォーメーションを保存します。
34. 図 6-58 に示すように、「プロセス」ワークスペース領域に戻ります。



図 6-58 「プロセス」ワークスペース領域



「Start」 イベント・コンポーネント間に「ServiceTask」が作成されます。

35. メニュー・バーの「すべて保存」アイコンをクリックし、構成された新規のインバウンド BPM プロセス・コンポーネントを保存します。

#### 6.5.2.4 12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応

12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応方法の詳細は、[4.4.3.3 項「12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応」](#) (4-26 ページ) を参照してください。

これで、インバウンド BPM プロセスをデプロイする準備ができました。手順は、[4.5.4 項「BPEL インバウンド・プロセスのデプロイ」](#) (4-46 ページ) に記載されている手順と同じです。PeopleSoft でのイベントのトリガー方法の詳細は、[4.5.5 項「PeopleSoft でのイベントのトリガー」](#) (4-47 ページ) を参照してください。

## 6.6 変換を使用したサービス統合のためのアウトバウンド BPM プロセスの設計 (BSE 構成)

この項では、Oracle JDeveloper で BPM プロジェクトを使用して PeopleSoft システム用に BPM アウトバウンド・プロセスを構成する方法について説明します。

このアウトバウンド・ユース・ケース・シナリオ用のサンプル・プロジェクトが、次に示す Application Adapter のインストール・フォルダに用意されています。

```
<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\BPM\BSE\Outbound_Project
```

アウトバウンドのデザインタイム構成を完了するには、次のツールが必要です。

- Oracle Adapter アプリケーション・エクスプローラ (アプリケーション・エクスプローラ)
- Oracle JDeveloper BPM デザイナ (JDeveloper)

この項では、次のトピックについて説明します。

- [6.6.1 項「BPM 用の空のコンポジットの作成」](#)
- [6.6.2 項「BPM アウトバウンド・プロセスの定義」](#)

### 前提条件

BPM アウトバウンド・プロセスを設計する前に、アプリケーション・エクスプローラを使用して各 WSDL ファイルを生成する必要があります。詳細は、[4.6.1 項「Web サービスを使用したリクエストおよびレスポンス・サービス用の WSDL ファイルの生成」](#) (4-55 ページ) を参照してください。

## 6.6.1 BPM 用の空のコンポジットの作成

BPM 用に空のコンポジットを作成するには、次のステップを実行します。

1. 新規の BPM アプリケーションを作成します。
2. BPM アプリケーションの名前を入力し、「次へ」をクリックします。
3. プロジェクト名フィールドに名前を入力し、「次へ」をクリックします。
4. コンポジット・テンプレート・リストで空のコンポジットを選択し、「終了」をクリックします。

詳細は、[4.4.2 項「SOA 用の空のコンポジットの作成」](#) (4-9 ページ) を参照してください。

## 6.6.2 BPM アウトバウンド・プロセスの定義

この項では、BPM アウトバウンド・プロセスの定義方法について説明します。次のトピックが含まれています。

- [6.6.2.1 項「Web サービス・コンポーネントの構成」](#)
- [6.6.2.2 項「BPM プロセス・コンポーネントの構成」](#)
- [6.6.2.3 項「書込み操作のファイル・アダプタの作成」](#)

### 6.6.2.1 Web サービス・コンポーネントの構成

Web サービス・コンポーネントを構成するには、次のステップを実行します。


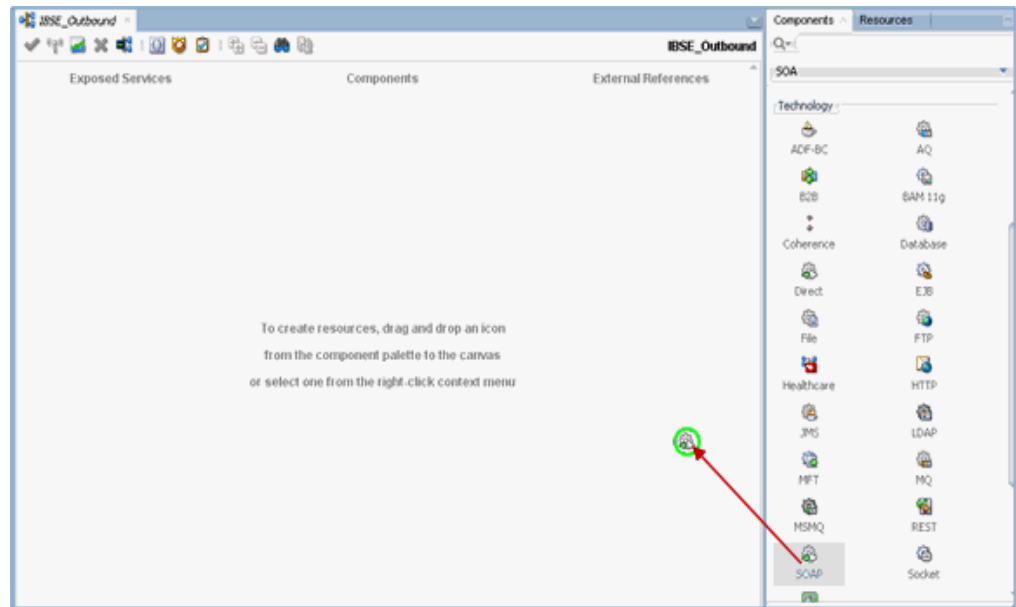
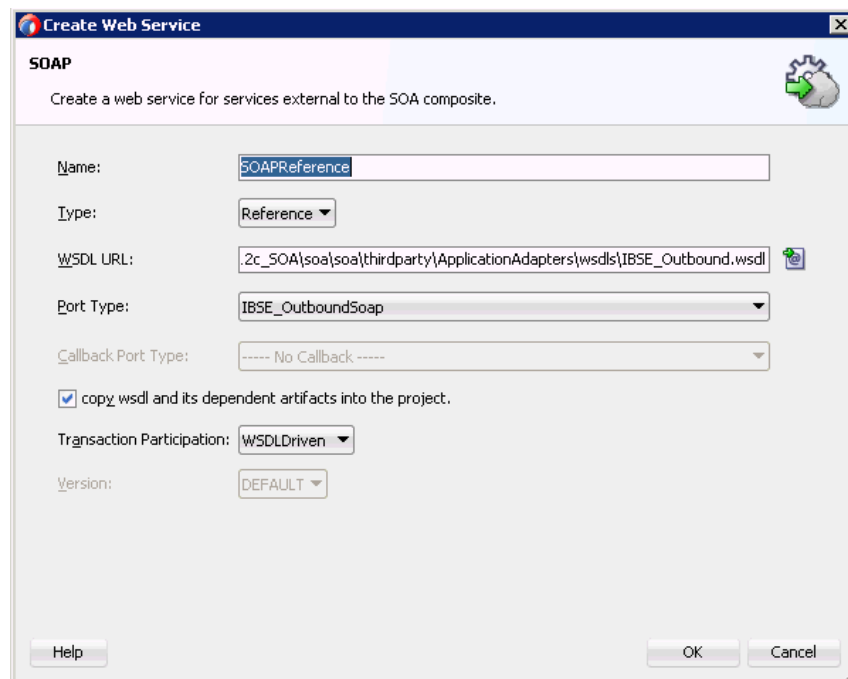
1. 作成したプロジェクトをダブルクリックして、コンポーネントをロードします。
2.  [図 6-59](#) に示すように、「テクノロジー・アダプタ」ペインから「Web サービス」ノードを「外部参照」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

図 6-59 「Web サービス」 ノード



3. Web サービスの適切な名前を入力し、「WSDL URL」フィールドの右にある**既存の WSDL を検索**アイコンをクリックします。
4. 表示された WSDL チューザ・ウィンドウで、アプリケーション・エクスプローラから WSDL をエクスポートする場所にナビゲートし、WSDL を選択します。
5. 「OK」をクリックします。
6. 図 6-60 に示すように、「Web サービス」ペインで、「OK」をクリックします。

図 6-60 「Web サービス」 ペイン



7. 表示されたファイルのローカライズ・ウィンドウで、「OK」をクリックします。  
これにより、WSDL ファイルがプロジェクト・フォルダにインポートされます。

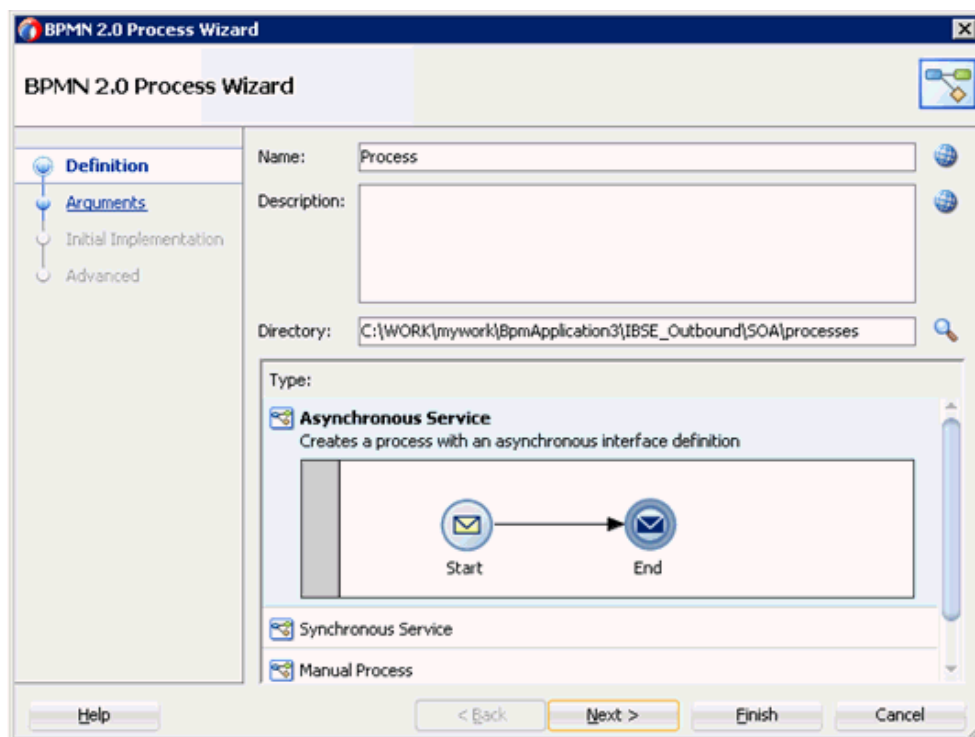
### 6.6.2.2 BPM プロセス・コンポーネントの構成

この項では、アウトバウンド BPM プロセス・コンポーネントの構成方法について説明します。

BPM コンポーネントを構成するには、次のステップを実行します。

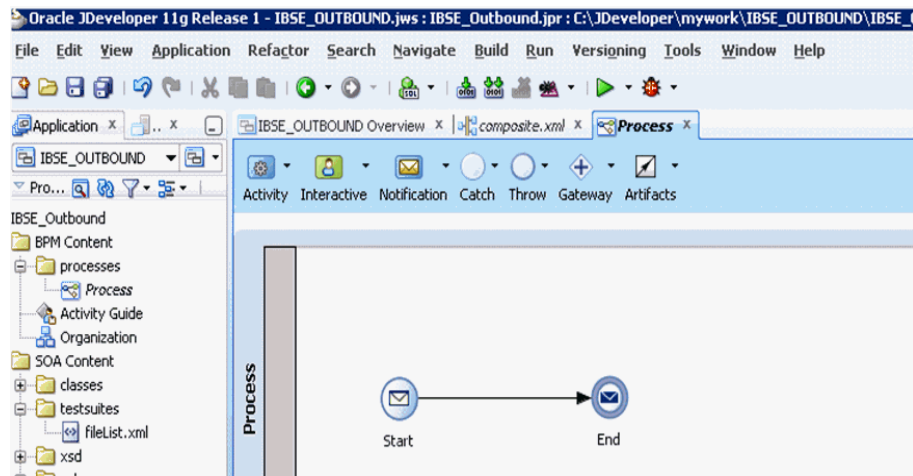
1. コンポーネント・ペインから **BPMN プロセス・コンポーネント** をコンポーネント・ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。
2. 図 6-61 に示すように、「タイプ」領域で選択されているデフォルトのオプション (非同期サービス) を受け入れ、「終了」をクリックします。

図 6-61 「タイプ」領域



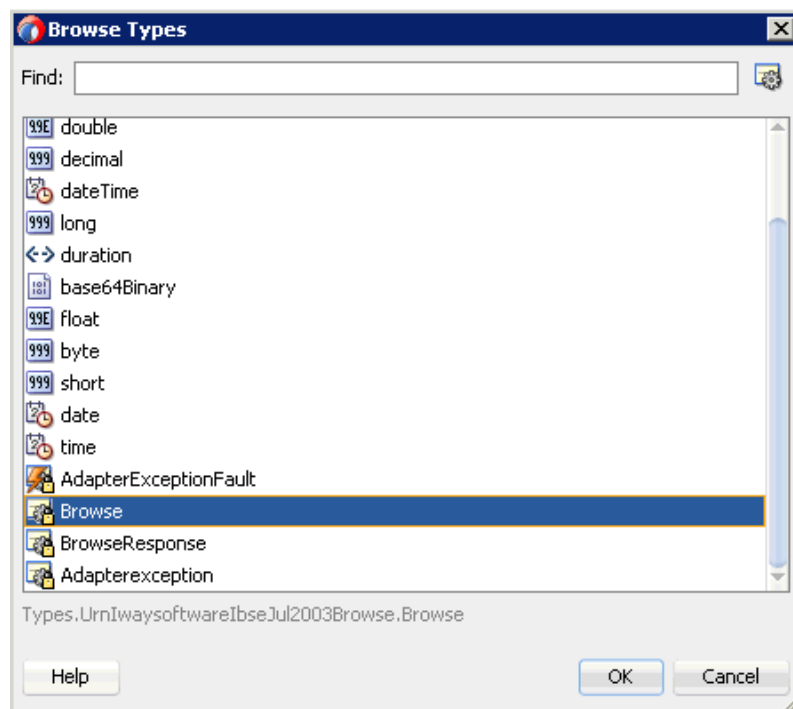
3. 図 6-62 に示すように、Start イベント・コンポーネントをダブルクリックします。

図 6-62 Start イベント・コンポーネント



4. 表示された「プロパティ - Start」ウィンドウで、**実装**タブをクリックします。
5. 引数の定義フィールドの右にあるプラス (「+」) アイコンをクリックします。  
引数の編集ウィンドウが表示されます。
6. 「名前」フィールドに名前を入力し、「タイプ」ドロップダウン・リストをクリックして、「参照」を選択します。
7. 図 6-63 に示すように、「Request」コンポーネントを選択し (「browse」など)、「OK」をクリックします。

図 6-63 「Request」コンポーネント



8. 表示された引数の編集ウィンドウで、「OK」をクリックします。  
「プロパティ - Start」ウィンドウが表示されます。

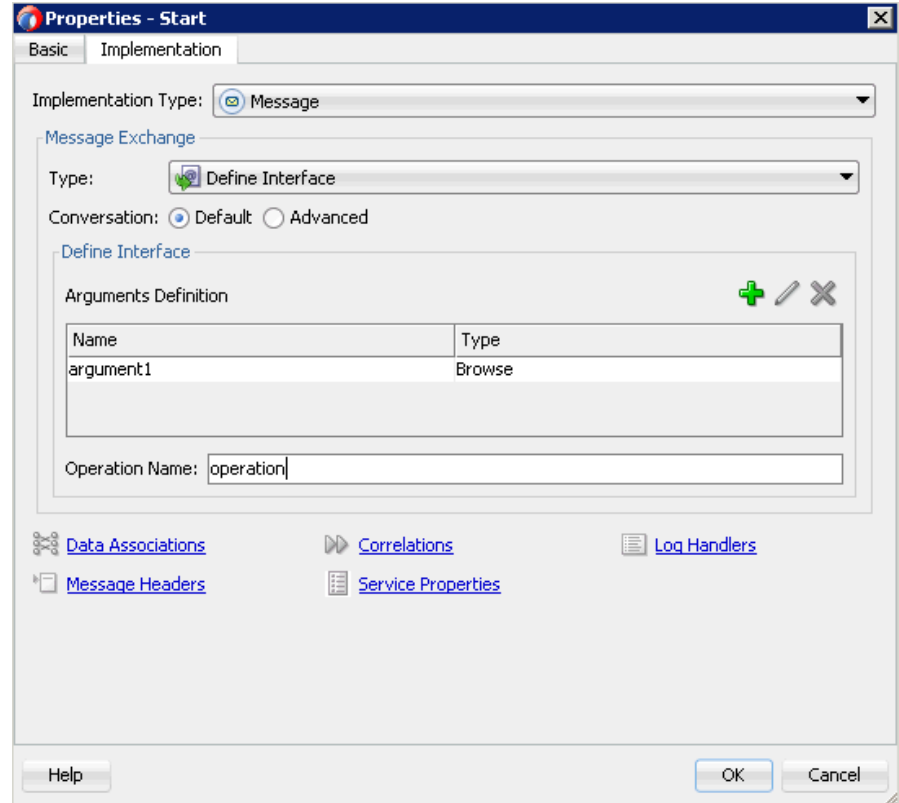
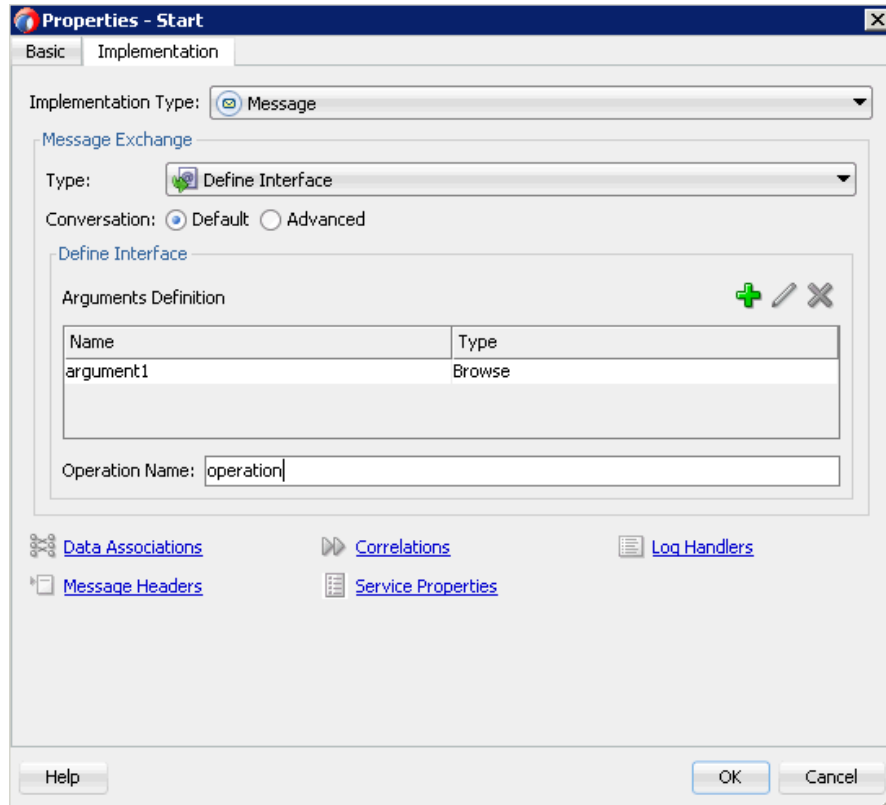
9. 操作名フィールドで、デフォルト・エントリを「start」から「operation」に変更します。
10.  6-64 に示すように、「データ・アソシエーション」ハイパーリンクをクリックします。

図 6-64 「プロパティ - Start」ウィンドウ



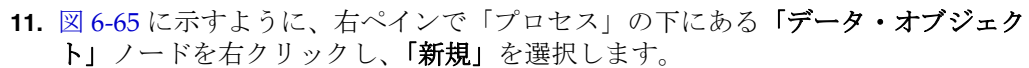
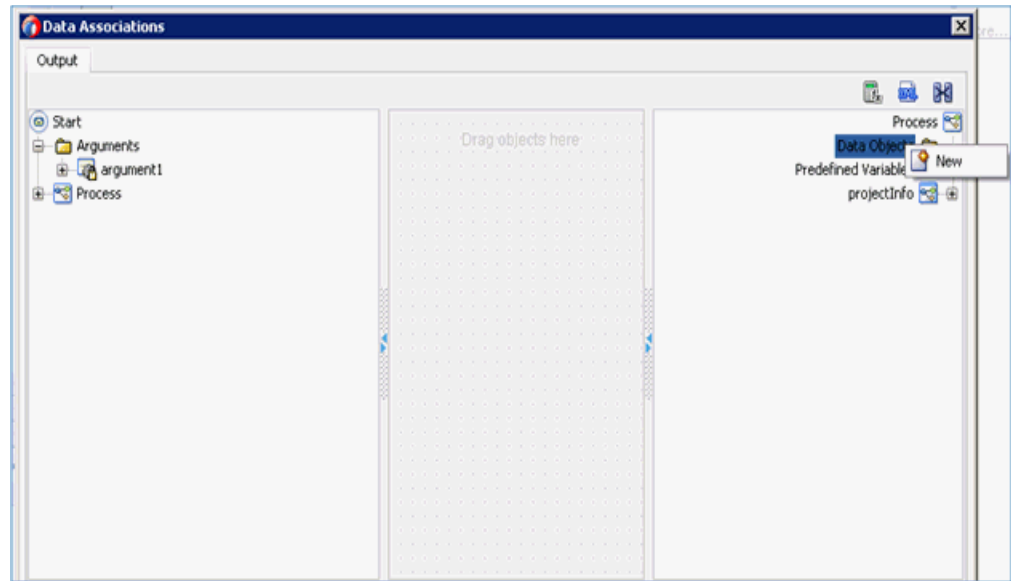
11.  6-65 に示すように、右ペインで「プロセス」の下にある「データ・オブジェクト」ノードを右クリックし、「新規」を選択します。

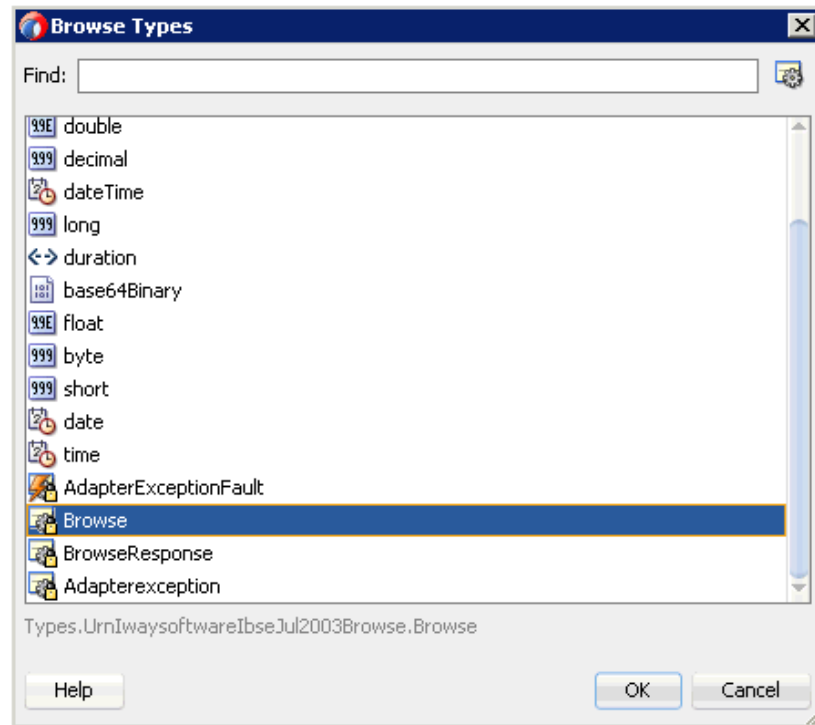
図 6-65 「データ・オブジェクト」ノード



データ・オブジェクトの作成ウィンドウが表示されます。

12. 「名前」フィールドに名前を入力し、「タイプ」ドロップダウン・リストをクリックして、「参照」を選択します。
13. 図 6-66 に示すように、「Request」コンポーネントを選択し（「Browse」など）、「OK」をクリックします。

図 6-66 「Request」コンポーネント

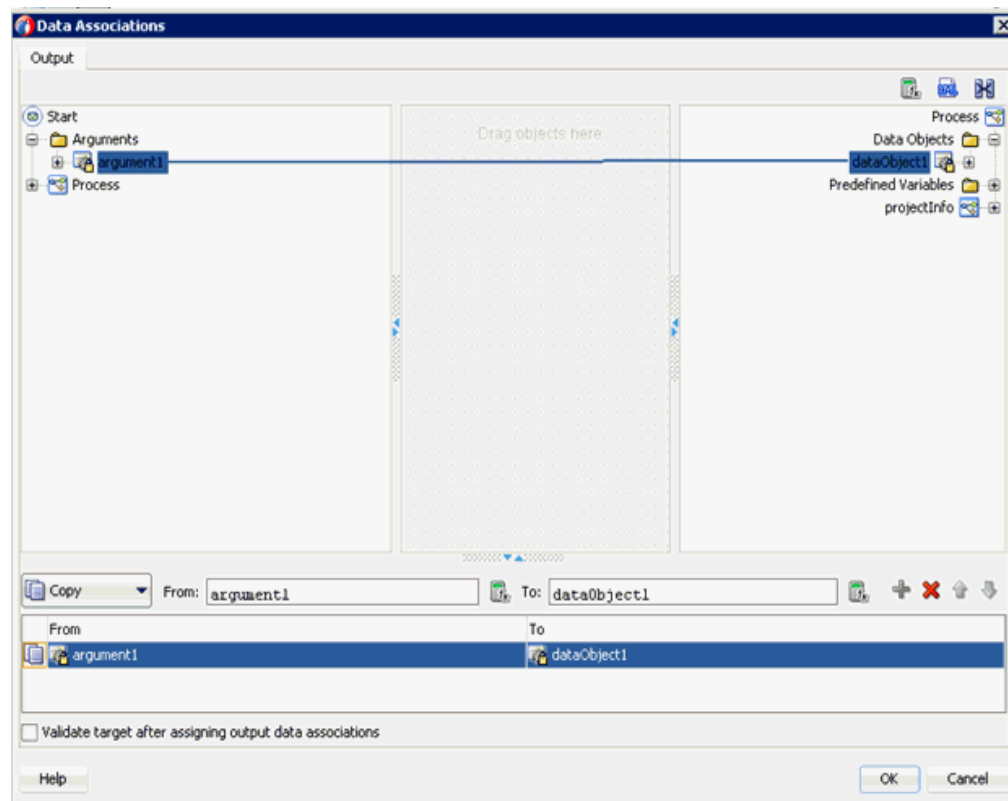


14. データ・オブジェクトの作成ウィンドウで、「OK」をクリックします。

「データ・アソシエーション」ウィンドウが表示されます。

15. 左ペインの「引数」ノードの下にある「argument1」を選択し、右ペインの「データ・オブジェクト」の下にある「dataObject1」にドラッグして接続します。
16. 図 6-67 に示すように、「OK」をクリックします。

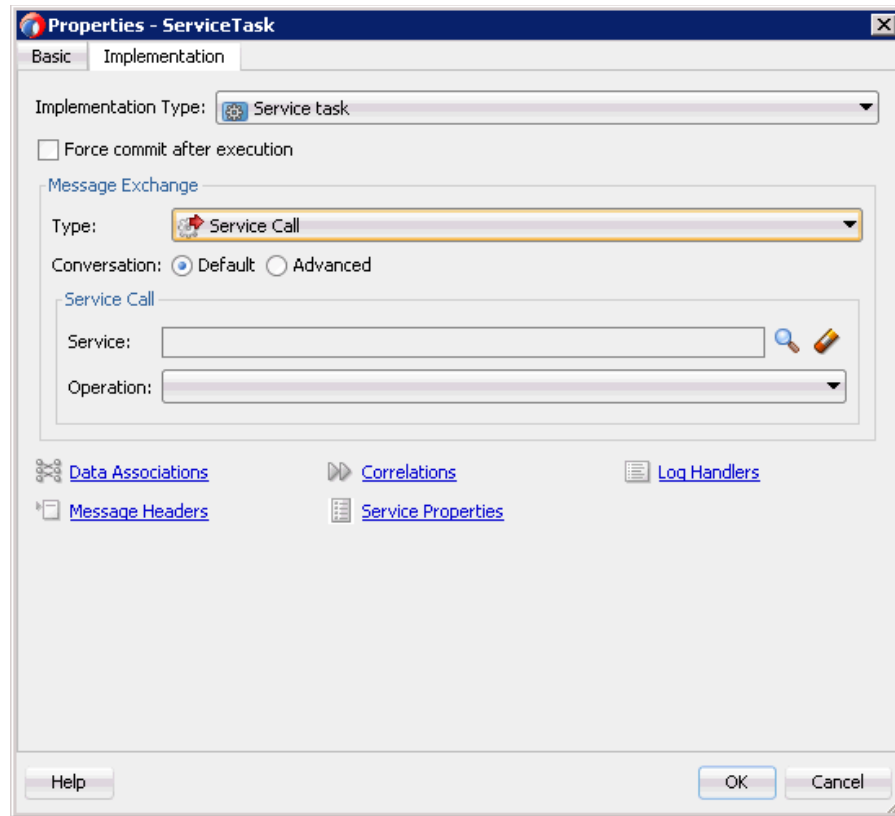
図 6-67 データ・アソシエーション



17. 表示された「プロパティ - Start」ウィンドウで、「OK」をクリックします。  
「プロセス」ワークスペース領域に戻ります。
18. 「アクティビティ」ドロップダウン・メニューをクリックし、「サービス」を選択します。
19. 「Start」イベント・コンポーネントと「End」イベント・コンポーネント間の伝送路に「サービス」アイコンをドロップします。
20. 表示された「プロパティ - ServiceTask」ウィンドウで、**実装**タブをクリックします。
21. 「メッセージ交換」の「タイプ」リストから「サービス・コール」を選択します。
22. 図 6-68 に示すように、「サービス」フィールドの右にある「参照」アイコンをクリックします。



図 6-68 「参照」アイコン



「サービス」ウィンドウが表示されます。


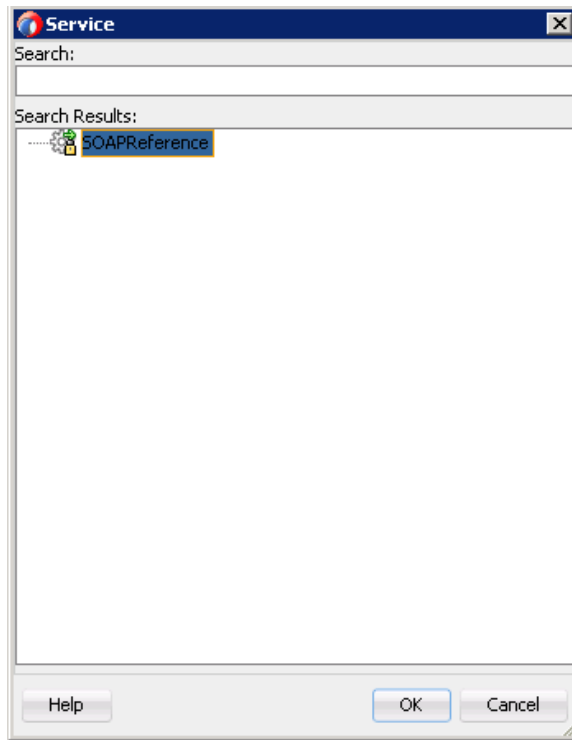
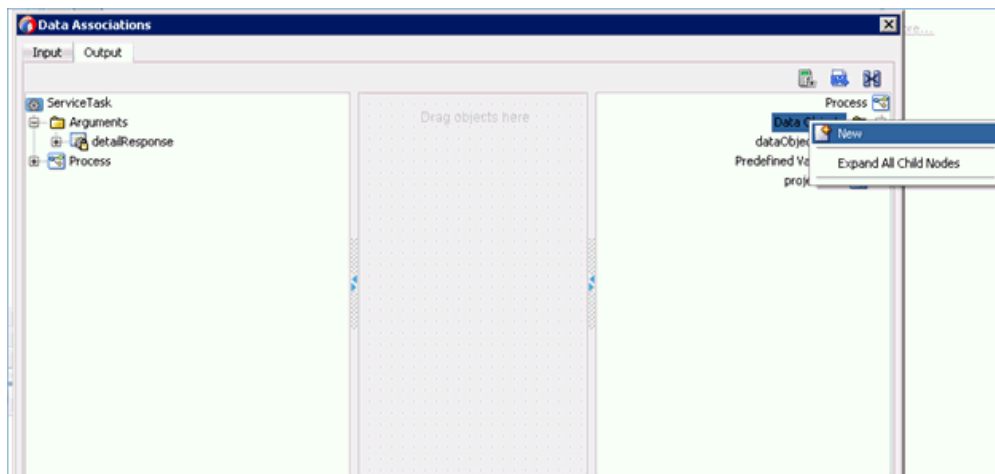
23.  6-69 に示すように、作成された Web サービスを選択し、「OK」をクリックします。

図 6-69 作成された Web サービス



24. 表示された「プロパティ - ServiceTask」ウィンドウで、「データ・アソシエーション」ハイパーリンクをクリックします。  
「データ・アソシエーション」ウィンドウが表示されます。
25. 図 6-70 に示すように、「出力」タブの右ペインで「データ・オブジェクト」ノードを右クリックし、「新規」を選択して、レスポンス・データ・オブジェクトを作成します。

図 6-70 「データ・オブジェクト」ノード

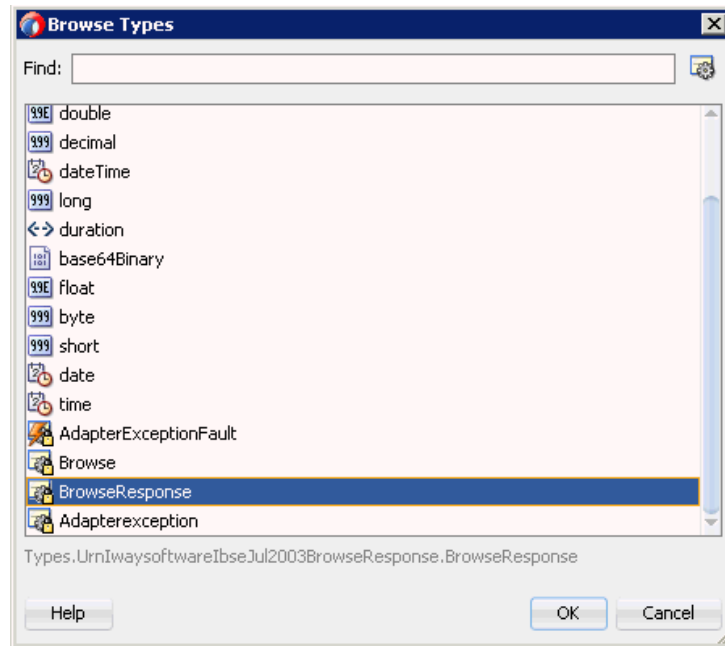


データ・オブジェクトの作成ウィンドウが表示されます。

26. 「名前」フィールドに名前を入力し、「タイプ」ドロップダウン・リストをクリックして、「参照」を選択します。

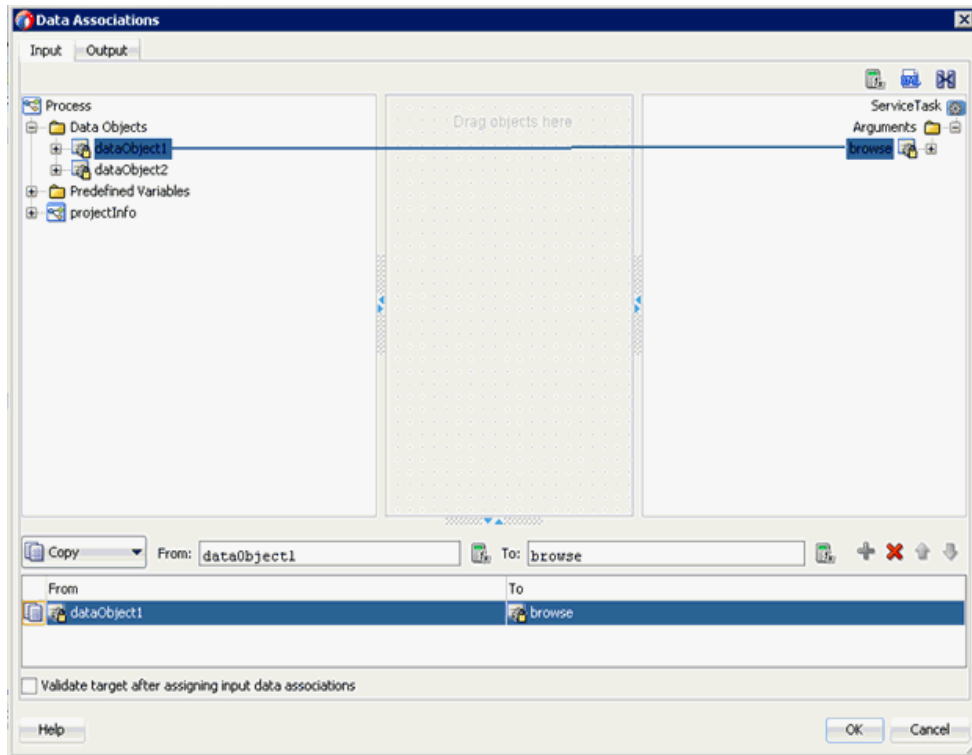
27. 図 6-71 に示すように、「Response」コンポーネントを選択し（「BrowseResponse」など）、「OK」をクリックします。

図 6-71 「Response」コンポーネント（「BrowseResponse」）



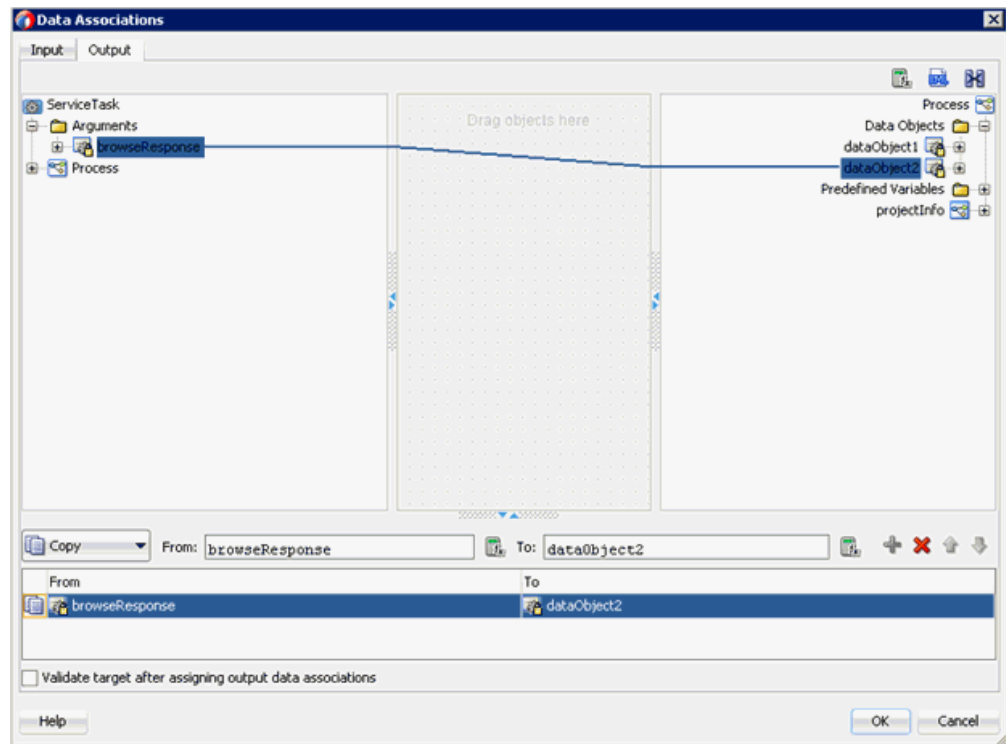
28. データ・オブジェクトの作成ウィンドウで、「OK」をクリックします。  
「データ・アソシエーション」ウィンドウが表示されます。
29. 図 6-72 に示すように、「入力」タブの左ペインで「データ・オブジェクト」ノードの下にある「dataObject1」を選択し、左ペインの「引数」ノードの下にある「browse」ノードにドラッグして接続します。

図 6-72 データ・アソシエーション



30. 「出力」タブをクリックし、左ペインの「引数」ノードの下にある「browseResponse」を選択し、「データ・オブジェクト」ノードの下にある「dataObject2」に接続します。
31. 図 6-73 に示すように、「OK」をクリックします。

図 6-73 「出力」 タブ



32. 表示された「プロパティ - ServiceTask」ウィンドウで、「OK」をクリックします。
33. メニュー・バーの「すべて保存」アイコンをクリックし、構成された新規のアウトバウンド BPM プロセス・コンポーネントを保存します。
34. 左ペインの「composite.xml」ノードをダブルクリックします。

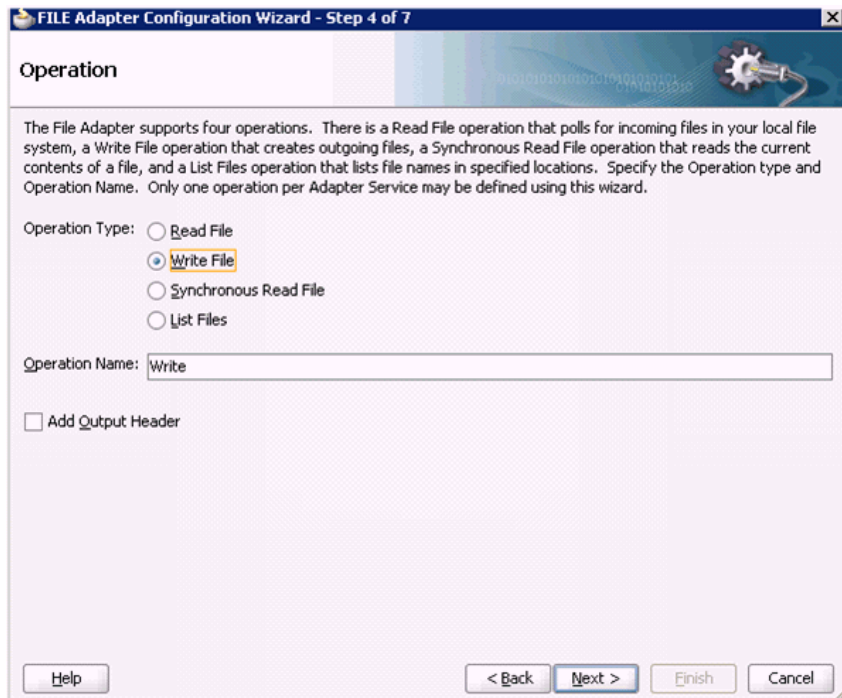
### 6.6.2.3 書込み操作のファイル・アダプタの作成

この項では、書込み操作のファイル・アダプタの作成方法について説明します。

書込み操作のファイル・アダプタを作成するには、次のステップを実行します。

1. 「テクノロジー・アダプタ」ペインから「ファイル・アダプタ」コンポーネントを「外部参照」ペインにドラッグ・アンド・ドロップし、ファイル・アダプタの名前を入力します。
2. 表示されたアダプタ・インタフェース・ペインで、**操作およびスキーマから定義 (後で指定)** オプションが選択されていることを確認し、「次へ」をクリックします。
3. 「次へ」をクリックします。
4. 図 6-74 に示すように、表示された「操作」ペインで、操作タイプ・オプションのリストから **Write File** を選択し、「次へ」をクリックします。

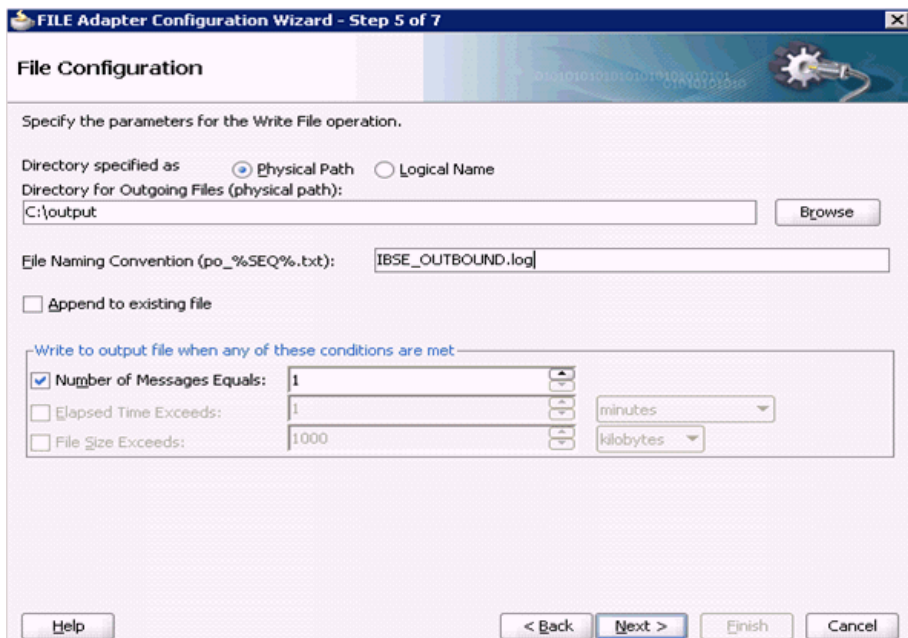
図 6-74 「操作」 ペイン



ファイル構成ペインが表示されます。

5. 「発信ファイルのディレクトリ (物理パス)」フィールドで、出力ファイルの書き込み先となるファイル・システム上の場所を指定します。
6. 「ファイル命名規則」フィールドで、出力ファイルの名前を指定します。
7. 図 6-75 に示すように、「次へ」をクリックします。

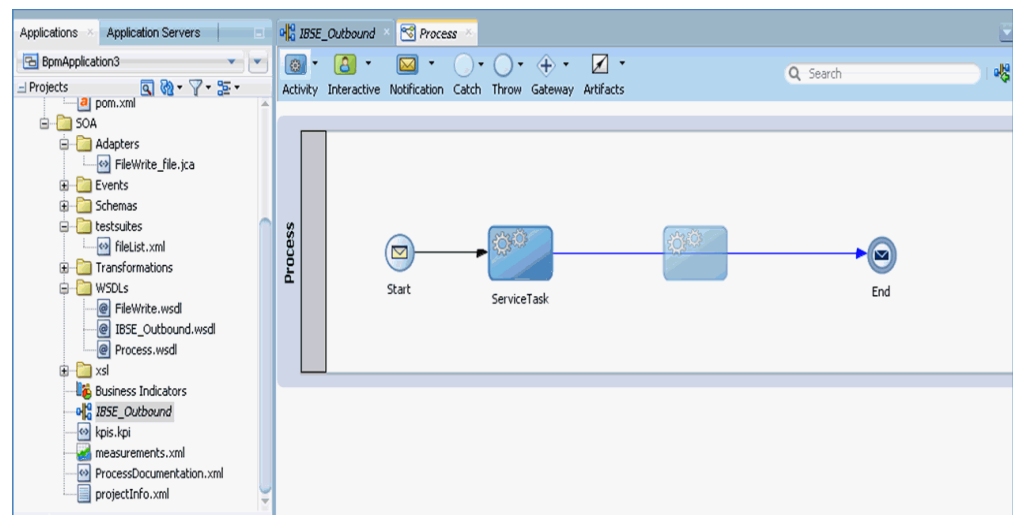
図 6-75 ファイル構成ペイン



「メッセージ」ペインが表示されます。

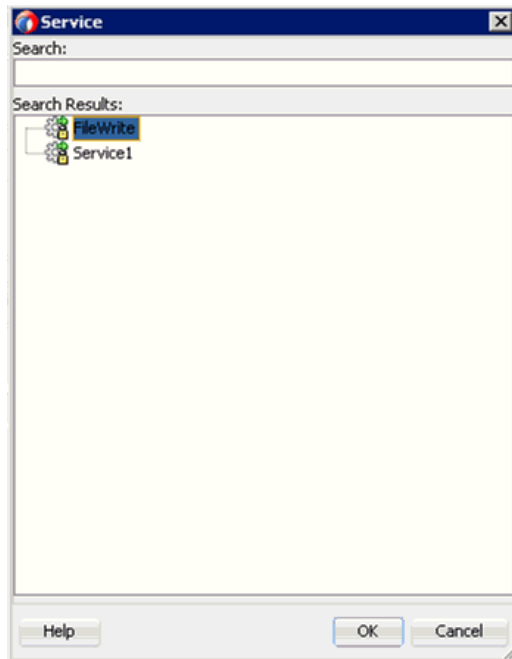
8. 「URL」フィールドの右にある「参照」をクリックします。
9. 表示された「タイプ・チューザ」ウィンドウで、「プロジェクトの WSDL ファイル」、「IBSE\_Outbound.wsdl」、インライン・スキーマの順に展開し、「browseResponse」を選択します。
10. 「OK」をクリックします。
11. 「メッセージ」ペインで、「次へ」をクリックします。
12. 表示された「終了」ペインで、「終了」をクリックします。
13. 「アクティビティ」アイコンをクリックします。
14. 図 6-76 に示すように、「サービス・タスク」イベント・コンポーネントと「End」イベント・コンポーネント間の伝送路にアクティビティアイコンをドロップします。

図 6-76 「アクティビティ」アイコン



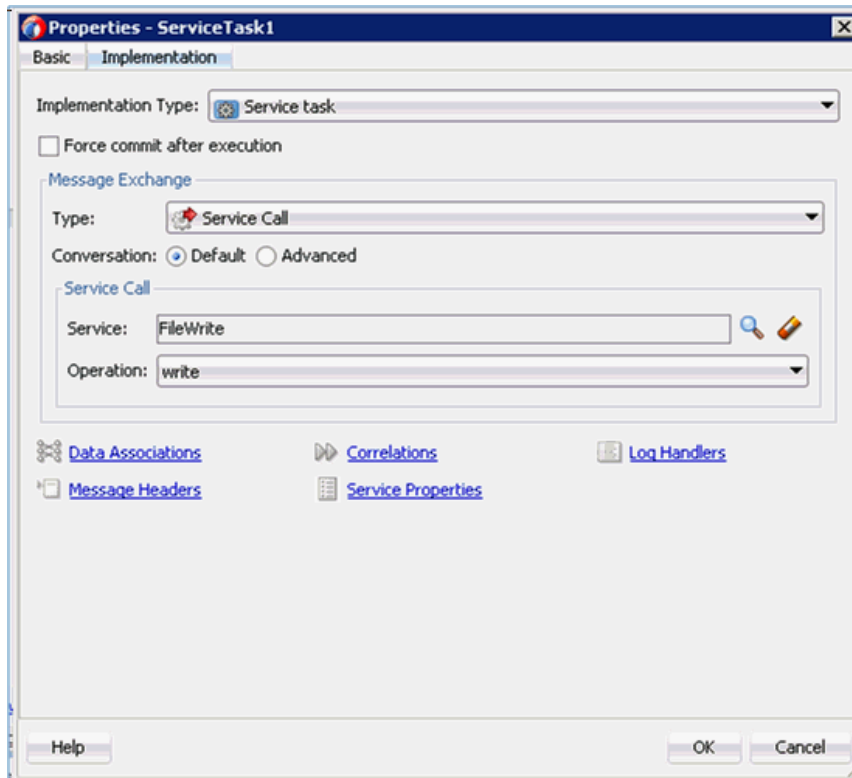
15. 表示された「プロパティ - ServiceTask1」ウィンドウで、**実装**タブをクリックします。
16. 「メッセージ交換」セクションの「タイプ」ドロップダウン・リストから「サービス・コール」を選択します。
17. 「サービス」フィールドの右の「参照」アイコンをクリックします。
18. 図 6-77 に示すように、作成された書込み操作用のサービスを選択し、「OK」をクリックします。

図 6-77 「サービス」 ウィンドウ



19. 図 6-78 に示すように、「プロパティ - ServiceTask1」 ウィンドウで、「データ・アソシエーション」ハイパーリンクをクリックします。

図 6-78 データ・アソシエーション

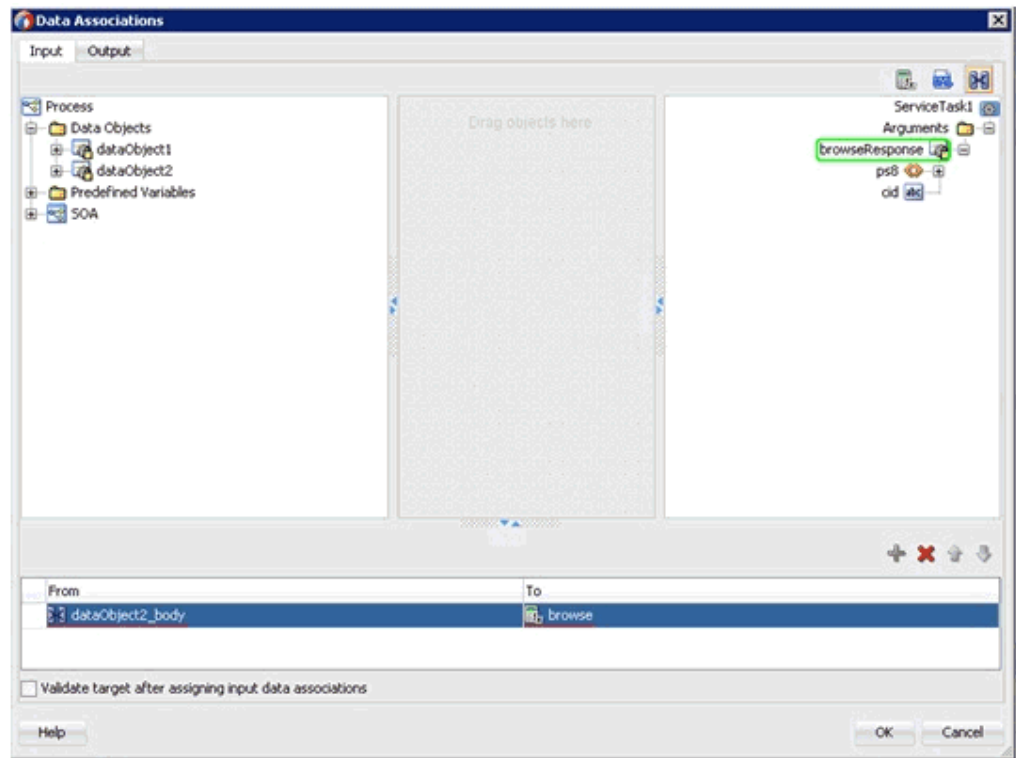


20. 「入力」 タブで、右ペインの上部にある **XSL 変換** アイコンをクリックします。



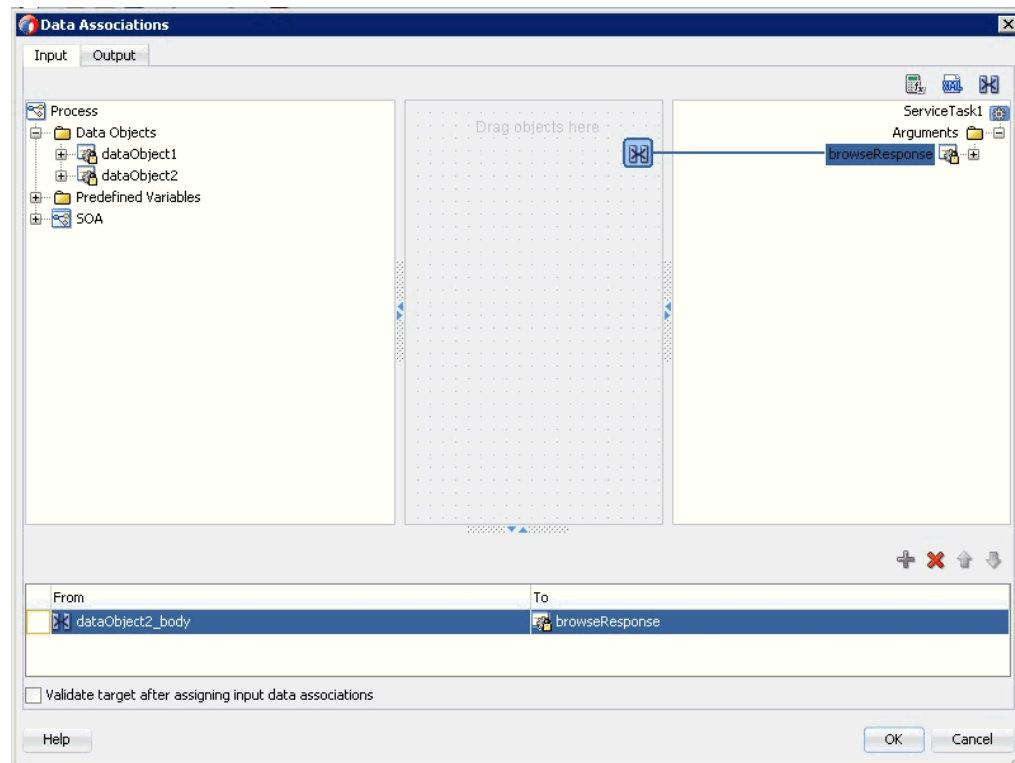
21. 図 6-79 に示すように、XSL 変換アイコンを「browseResponse」ノードにドラッグ・アンド・ドロップします。

図 6-79 「browseResponse」ノード



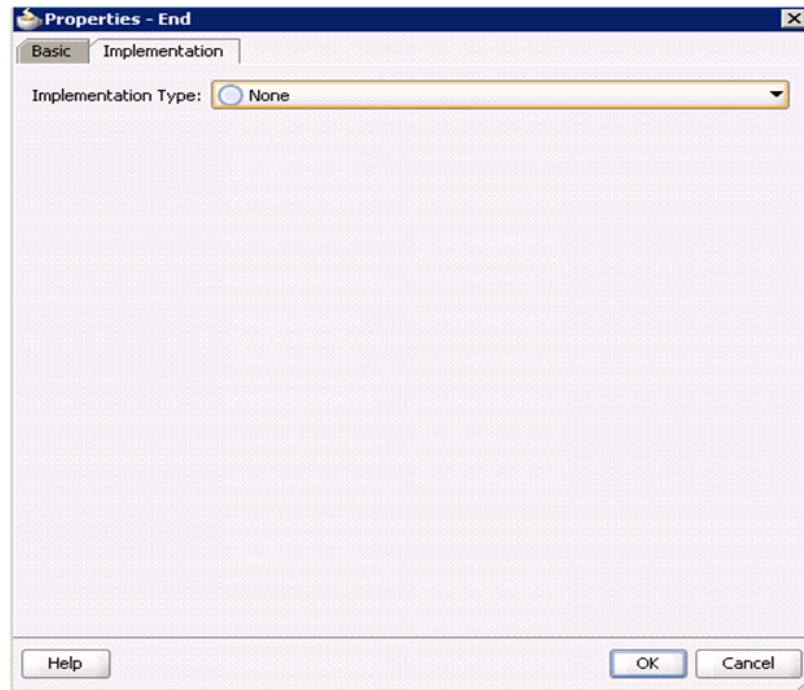
22. 表示された変換の作成ウィンドウで、ソース・セクションの「dataObject2」を選択し、右矢印記号をクリックします。
23. 「OK」をクリックして、「ターゲット」ドロップダウン・リストで選択されたデフォルト値と「作成」フィールドのデフォルト名を受け入れます。
24. 図 6-80 に示すように、「データ・アソシエーション」ウィンドウで、「OK」をクリックします。

図 6-80 「データ・アソシエーション」 ウィンドウ



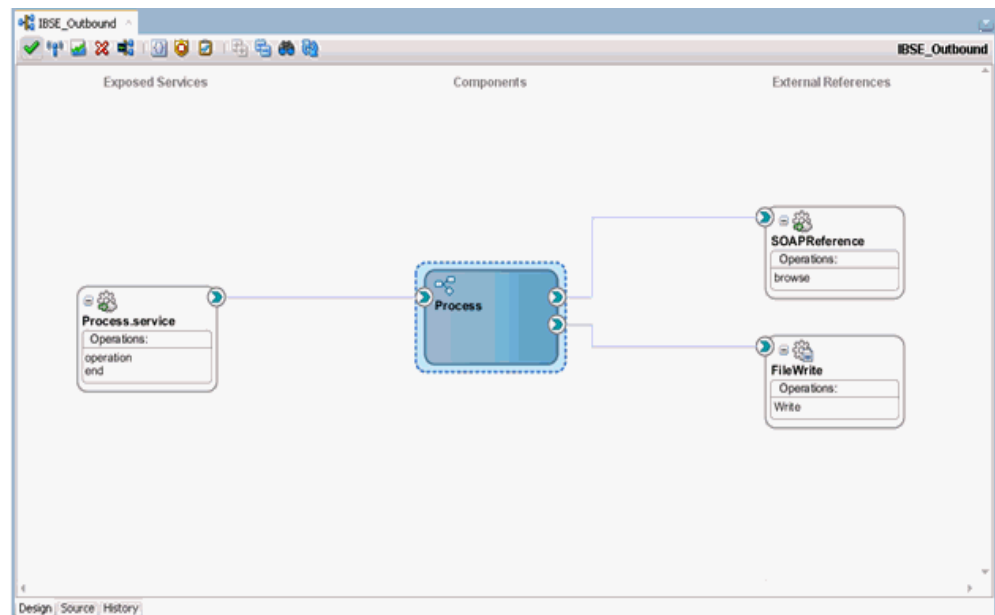
25. 「プロパティ - ServiceTask1」 ウィンドウで、「OK」をクリックします。
26. 「response\_body.xml」 タブで、「ns:browseResponse」ソース要素を「ns:browseResponse」ターゲット要素にマップします。
27. 表示された自動マップ・プリファレンス・ウィンドウで、デフォルト値を維持し、「OK」をクリックします。
28. 「プロセス」ワークスペース領域に戻り、「End」イベント・コンポーネントをダブルクリックします。
29. 表示された「プロパティ - End」ウィンドウで、**実装**タブをクリックします。
30. 「実装タイプ」ドロップダウン・リストから「なし」を選択します。
31. 図 6-81 に示すように、「OK」をクリックします。

図 6-81 実装タブ



32. 図 6-82 に示すように、メニュー・バーの「すべて保存」アイコンをクリックし、構成された新規のアウトバウンド BPM コンポーネントを保存します。

図 6-82 「すべて保存」アイコン



これで、BPM BSE アウトバウンド・プロセスをデプロイする準備ができました。手順は、6.4.4 項「BPM アウトバウンド・プロセスのデプロイ」(6-27 ページ)に記載されている手順と同じです。

デプロイ後、6.4.5 項「Oracle Enterprise Manager Console での入力 XML ドキュメントの起動」(6-28 ページ)で示されているように入力 XML を起動できます。



---

---

# sbconsoleを使用したOracle Service Bus用の アウトバウンドおよびインバウンド・プロセス の構成

---

---

**注意：** リリース 12c (12.2.1.0.0) では、sbconsole を使用した Oracle Service Bus 用のアウトバウンドおよびインバウンド・プロセスの構成方法が変更されています。

sbconsole を使用して Oracle Service Bus 用のプロセスを作成する場合は、『Oracle Fusion Middleware Application Adapters リリース・ノート for 12c (12.2.1.0.0)』の第2章「sbconsole を使用した Oracle Service Bus 用のアウトバウンドおよびインバウンド・プロセスの構成」を参照してください。

---

---

Oracle Application Adapter for PeopleSoft は、Oracle Service Bus (OSB) とシームレスに統合されており、Web サービスの簡易な統合を可能にします。OSB は、サービス指向アーキテクチャ (SOA) に基づいています。OSB は、Web Service Definition Language (WSDL) ドキュメントとして公開されているアダプタ・サービスを使用します。

この章の内容は次のとおりです。

- 7.1 項「Application Adapter と Oracle Service Bus の統合の概要」
- 7.2 項「sbconsole を使用したアウトバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成)」
- 7.3 項「sbconsole を使用したインバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成)」
- 7.4 項「sbconsole を使用したアウトバウンド・プロセスの構成 (BSE 構成)」
- 7.5 項「Oracle Service Bus を使用した JMS プロキシ・サービスの構成 (J2CA 構成)」
- 7.6 項「Oracle Service Bus を使用した HTTP プロキシ・サービスの構成 (J2CA 構成)」

## 7.1 Application Adapter と Oracle Service Bus の統合の概要

Oracle Service Bus (OSB) と統合するには、Oracle Application Adapter for PeopleSoft が OSB と同じ Oracle WebLogic Server にデプロイされている必要があります。また、基になるアダプタ・サービスは、アダプタのリクエスト/レスポンス (アウトバウンド) とイベント通知 (インバウンド) の両方のサービス用に Oracle Application Adapter アプリケーション・エクスペローラ (アプリケーション・エクスペローラ) でデザインタイム中に生成される WSDL ファイルとして公開される必要があります。

## 7.2 sbconsole を使用したアウトバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成)

この項では、J2CA 構成で sbconsole を使用してアウトバウンド・プロセスを構成する方法について説明します。

このアウトバウンド・ユース・ケース・シナリオ用のサンプル・プロジェクトが、次に示す Application Adapter のインストール・フォルダに用意されています。

```
<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\OSB\J2CA\PeopleSoft_Sample_J2CA_OSB_Outbound_Project
```

この項では、次のトピックについて説明します。

- 7.2.1 項「Oracle Service Bus の起動およびプロジェクト・フォルダの作成」
- 7.2.2 項「Oracle Service Bus 統合のためのアプリケーション・エクスプローラのクラス・パスの設定」
- 7.2.3 項「アプリケーション・エクスプローラから Oracle Service Bus への WSDL の公開」
- 7.2.4 項「WSDL ベースのビジネス・サービスの構成」
- 7.2.5 項「ファイル・タイプ・ビジネス・サービスの構成」
- 7.2.6 項「パイプラインとプロキシ・サービスの構成」

### 7.2.1 Oracle Service Bus の起動およびプロジェクト・フォルダの作成

この項では、Oracle Service Bus (OSB) を起動してプロジェクト・フォルダを作成する方法について説明します。

Oracle Service Bus を起動してプロジェクト・フォルダを作成するには、次のステップを実行します。

1. 構成済の Oracle WebLogic Server ドメインの Oracle WebLogic Server を起動します。
2. Web ブラウザで次の URL を入力して、Oracle Service Bus コンソールを起動します。

```
http://hostname:port/sbconsole
```

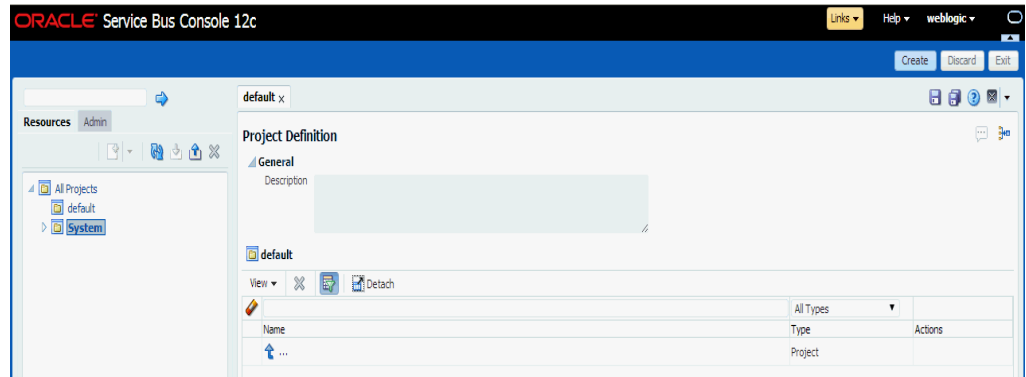
ここで、*hostname* は Oracle WebLogic Server が稼働しているマシンの名前で、*port* は使用しているドメイン用のポートです。

Oracle Service Bus コンソールのログオン・ページが表示されます。

3. 有効なユーザー名およびパスワードを使用して、Oracle Service Bus コンソールにログオンします。

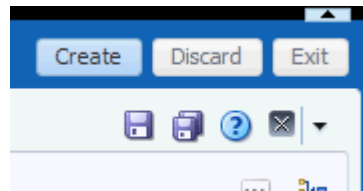
図 7-1 に示すように、Oracle Service Bus コンソールのホーム・ページが表示されます。

図 7-1 Oracle Service Bus コンソールのホーム・ページ



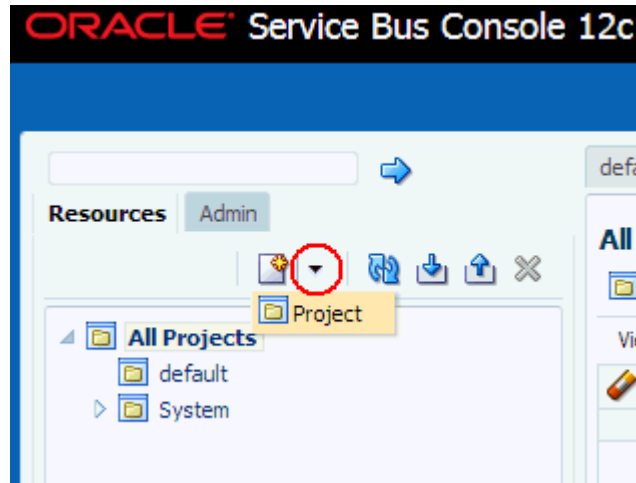
4. 図 7-2 に示すように、Oracle Service Bus セッションの右ペインで「作成」をクリックします。

図 7-2 Oracle Service Bus セッション



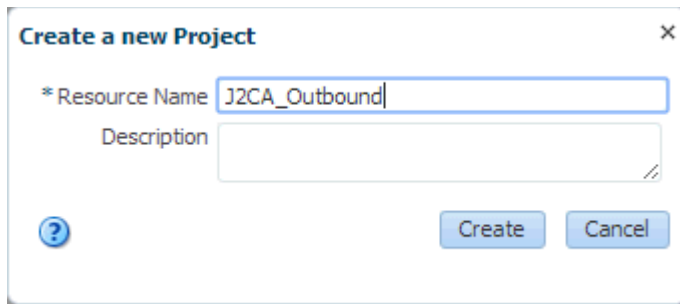
5. 図 7-3 に示すように、「すべてのプロジェクト」を選択し、左ペインの下矢印をクリックして、「プロジェクト」を選択します。

図 7-3 「すべてのプロジェクト」フォルダ



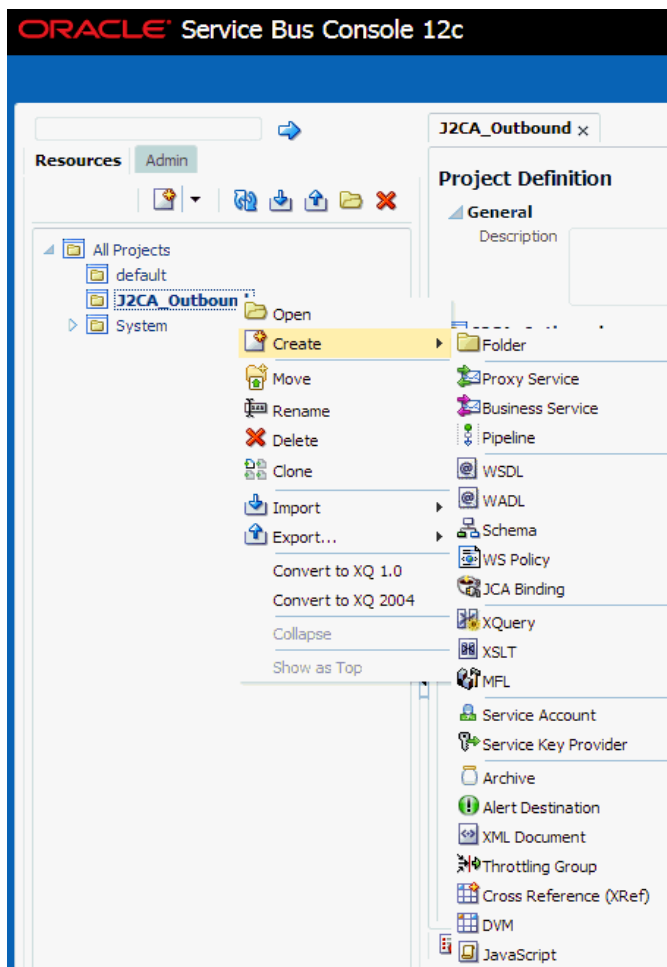
- 図 7-4 に示すように、「新規プロジェクトの作成」ウィンドウが表示されます。

図 7-4 新規プロジェクトの作成ウィンドウ



6. 「リソース名」フィールドに新規プロジェクトの有効な名前 (「J2CA\_Outbound」など) を入力し、「作成」をクリックします。  
新規プロジェクトが正常に作成され、リストに表示されます。
7. 図 7-5 に示すように、新規に作成されたプロジェクトを右クリックし、「作成」を選択して、「フォルダ」をクリックします。

図 7-5 「作成」オプション



「新規フォルダの作成」ウィンドウが表示されます。

8. 「リソース名」フィールドに「**Business Service**」と入力し、「作成」をクリックします。



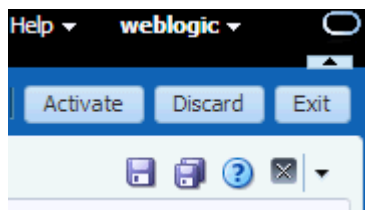
- ステップ7および8を繰り返して、「Proxy Service」という名前のフォルダと「Wsdls」という名前のフォルダを作成します。  
図7-6に示すように、「Business Service」フォルダ、「Proxy Service」フォルダ、「Wsdls」フォルダが左ペインのプロジェクト・ノードの下に表示されます。

図7-6 プロジェクト・ノード



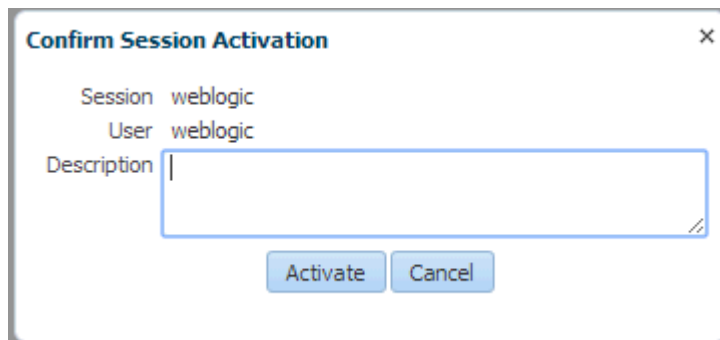
- 図7-7に示すように、Oracle Service Bus セッションの右ペインで「アクティブ化」をクリックします。

図7-7 「アクティブ化」ボタン



- 図7-8に示すように、「セッションのアクティブ化の確認」ページで、「アクティブ化」をクリックして変更を保存します。

図7-8 「セッションのアクティブ化の確認」ウィンドウ



## 7.2.2 Oracle Service Bus 統合のためのアプリケーション・エクスプローラのクラス・パスの設定

アプリケーション・エクスプローラを起動し、これを使用して WSDL を Oracle Service Bus (OSB) コンソール (プロジェクトまたはフォルダ) に公開する前に、OSB ユーザーは次のステップを実行する必要があります。

1. コマンド・プロンプト・ウィンドウを開きます。
2. 次のディレクトリに移動します。  

```
<ORACLE_HOME>\user_projects\domains\base_domain\bin
```
3. **setDomainEnv.cmd** (Windows) または **./setDomainEnv.sh** (UNIX、Linux) を実行します。  

このコマンドは、OSB Console を WSDL を公開するためのアプリケーション・エクスプローラから Oracle WebLogic Server API へのアクセス用クラス・パスを設定します。
4. コマンド・プロンプト・ウィンドウを開けたままにします。
5. 次のディレクトリに移動します。  

```
<ADAPTER_HOME>\tools\iwae\bin
```
6. **ae.bat** (Windows) または **iwae.sh** (UNIX、Linux) を実行してアプリケーション・エクスプローラを起動します。  

これで、アプリケーション・エクスプローラから OSB Console に WSDL を公開する準備ができました。

## 7.2.3 アプリケーション・エクスプローラから Oracle Service Bus への WSDL の公開

アプリケーション・エクスプローラから Oracle Service Bus に WSDL を公開するには、次のステップを実行します。

1. アプリケーション・エクスプローラを起動し、J2CA 構成および PeopleSoft ターゲットに接続します。  

詳細は、[第 2 章「Oracle Application Adapter for PeopleSoft 構成」](#) (2-1 ページ) を参照してください。
2. PeopleSoft ターゲットを接続先まで展開します。
3. コンポーネント・インタフェースを展開し、**LOCATION** を選択します。
4. 操作にナビゲートして右クリックし、**アウトバウンド JCA サービスの作成 (リクエスト/レスポンス)** を選択します。  

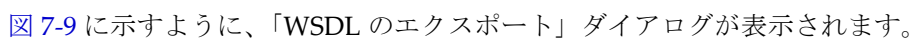
 [図 7-9](#) に示すように、「WSDL のエクスポート」ダイアログが表示されます。

図 7-9 「WSDL のエクスポート」ダイアログ

5. 「名前」フィールドに、WSDL ファイルのデフォルトのファイル名が表示されます。デフォルトを受け入れるか、任意の名前を指定します。
6. OSB にエクスポート・オプションを選択します。
7. 「ロケーション」フィールドで、WSDL ドキュメントの公開先となる Oracle Service Bus 内のフォルダ名を入力します。

このロケーションは、Oracle Service Bus のプロジェクト名と、オプションで 1 つ以上のフォルダ名で構成されます。プロジェクト名およびフォルダ名はいずれもスラッシュ文字の「/」で区切る必要があります。

8. 「ホスト」フィールドで、Oracle Service Bus がインストールされているマシンの名前を入力します。
9. 「ポート」フィールドで、Oracle Service Bus により使用されるポートを入力します。
10. 「ユーザー」フィールドで、Oracle Service Bus へのアクセス用のユーザー名を入力します。
11. 「パスワード」フィールドで、Oracle Service Bus へのアクセス用のパスワードを入力します。
12. 「OK」をクリックします。

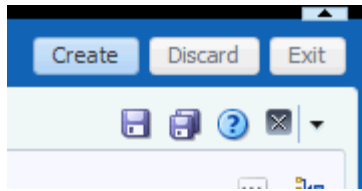
WSDL が「WSDL のエクスポート」ダイアログで指定されている場所に公開され、Oracle Service Bus でビジネス・サービスまたはプロキシ・サービスとともに使用できるようになります。

## 7.2.4 WSDL ベースのビジネス・サービスの構成

WSDL ベースのビジネス・サービスを構成するには、次のステップを実行します。

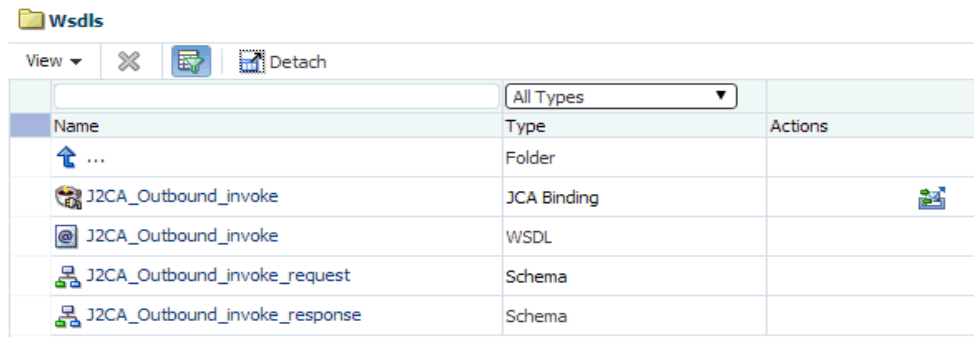
1. 図 7-10 に示すように、Oracle Service Bus コンソールを開き、Oracle Service Bus セッションの右ペインで「作成」をクリックします。

図 7-10 「作成」 ボタン



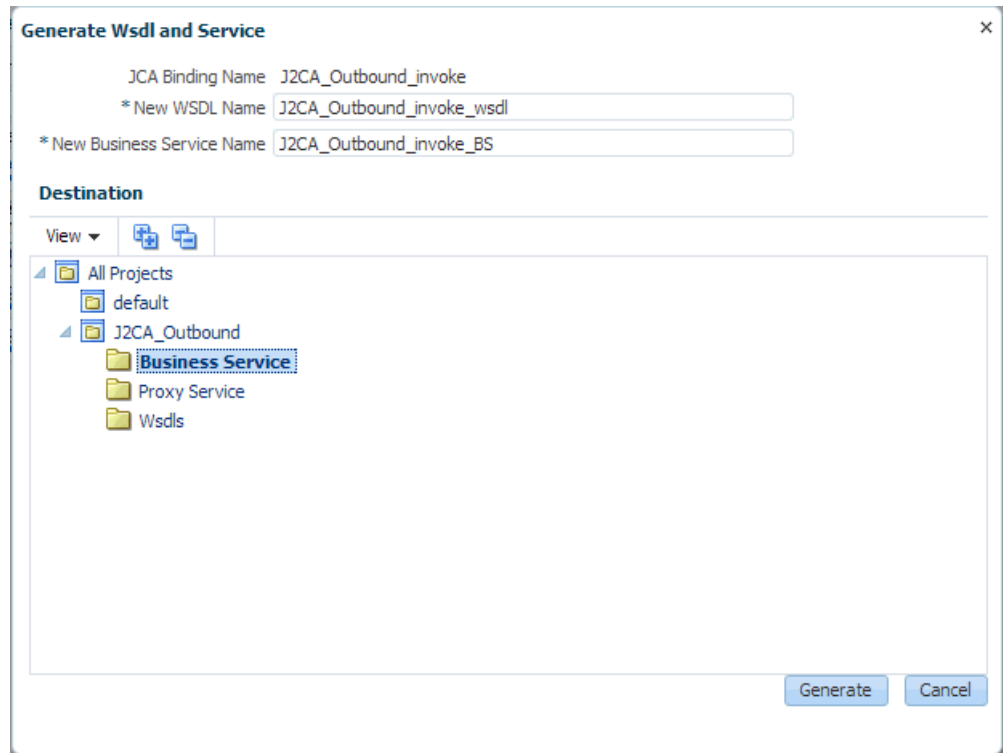
2. 図 7-11 に示すように、左ペインで作成された WSDL フォルダ (「Wsdls」など) をダブルクリックし、右ペインでエクスポートされた WSDL がリストに表示されていることを確認します。

図 7-11 「Wsdls」 フォルダ



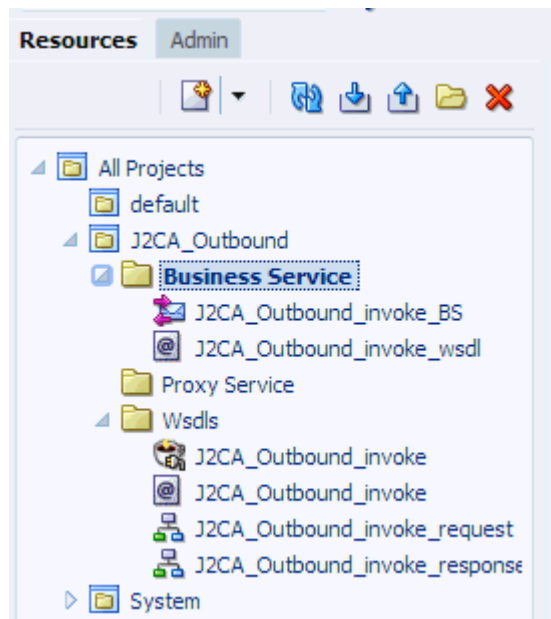
3. 「アクション」列で、JCA バインディングに関連するアイコンをクリックします。  
 図 7-12 に示すように、「WSDL とサービスの生成」ウィンドウが表示されます。

図 7-12 「WSDL とサービスの生成」ウィンドウ



4. 新規 WSDL の名前および新規ビジネス・サービスの名前を対応するフィールドに入力します。
5. 「宛先」領域で、使用可能なプロジェクトを選択し、ビジネス・サービスに指定されているサブフォルダを選択します。
6. 「生成」をクリックします。
7. 図 7-13 に示すように、プロジェクト・フォルダの下にある「**Business Service**」を展開し、生成された WSDL およびビジネス・サービスがリストに表示されていることを確認します。

図 7-13 「Business Service」フォルダ

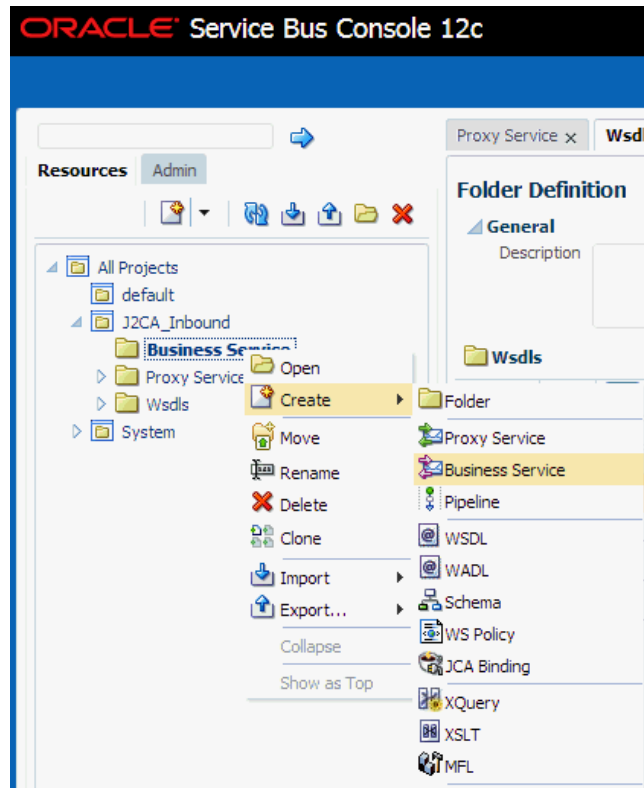


## 7.2.5 ファイル・タイプ・ビジネス・サービスの構成

ファイル・タイプ・ビジネス・サービスを構成するには、次のステップを実行します。

1. 図 7-14 に示すように、左ペインで作成した「**Business Service**」フォルダを右クリックし、「作成」を選択して、「**ビジネス・サービス**」をクリックします。

図 7-14 「Business Service」フォルダ



「ビジネス・サービスの作成」ウィンドウが表示されます。

2. 図 7-15 に示すように、「リソース名」フィールドにビジネス・サービスの名前を入力し、「サービス定義」の下にある「トランスポート」セクションで「ファイル」オプションを選択して、「次へ」をクリックします。

図 7-15 サービス定義

The screenshot shows the 'Create Business Service' dialog box with the following details:

- Progress bar: Create (active), Type, Transport.
- Create Service**
  - \*Resource Name: File\_Out
  - Description: (empty)
- Service Definition**
  - WSDL Based Service: (radio button unselected)
  - Name: (text field)
  - Path: (text field)
  - Port/Binding: (dropdown menu)
  - Transport: file (dropdown menu)
- Buttons: Back, Next, Create, Cancel.

- 「サービス・タイプ」セクションで、「メッセージ・サービス」を選択します。デフォルトでは、「リクエスト・タイプ」は「XML」に設定されており、「レスポンス・タイプ」は「なし」に設定されています。図 7-16 に示すように、「次へ」をクリックします。

図 7-16 サービス・タイプの構成ページ

The screenshot shows the 'Create Business Service' dialog box with the following details:

- Progress bar: Create, Type (active), Transport.
- Service Type**
  - WSDL Based Service: (radio button unselected)
  - Any SOAP Service: (radio button unselected)
  - Any XML Service: (radio button unselected)
  - Messaging Service: (radio button selected)
- Request Type: XML (dropdown menu)
- Schema Name: (text field)
- Path: (text field)
- Element/Type: (dropdown menu)
- Response Type: None (dropdown menu)
- Buttons: Back, Next, Create, Cancel.



- 「エンドポイント URI」フィールドで、ファイル・システム上の送信先フォルダへのパスを入力します。
- 図 7-17 に示すように、「作成」をクリックします。

図 7-17 「トランスポート」ページ

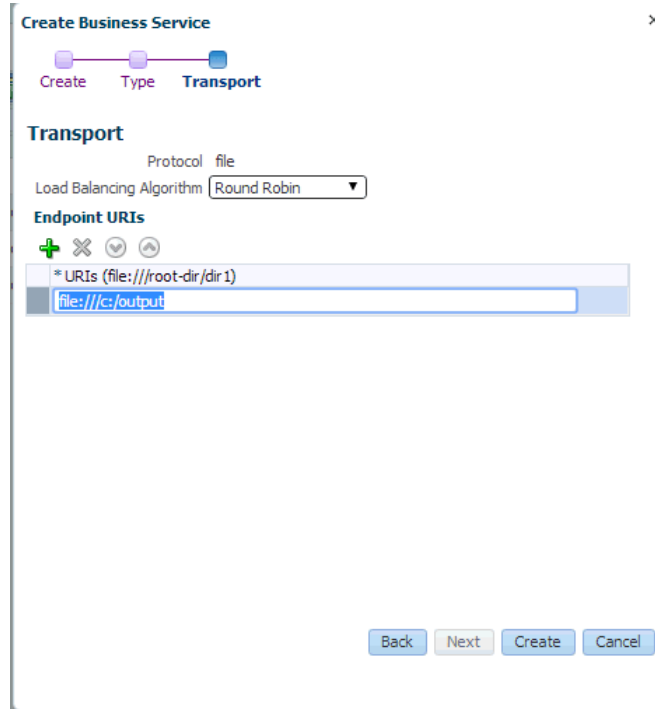
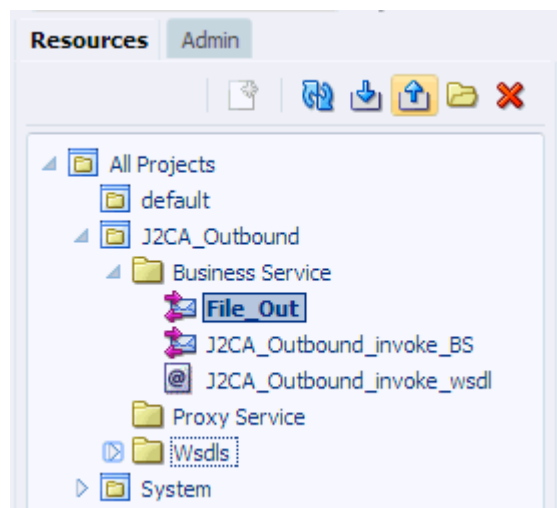


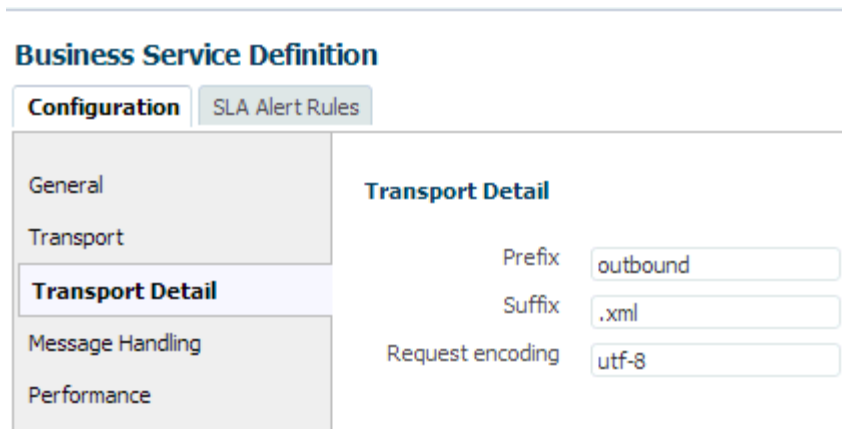
図 7-18 に示すように、「File\_Out」ビジネス・サービスが作成され、「Business Service」の下に表示されます。

図 7-18 「File\_Out」ビジネス・サービス



- 図 7-19 に示すように、「File\_Out」をダブルクリックし、左ペインで「トランスポートの詳細」をクリックして、受信される出力ファイルの接頭辞および接尾辞を入力します。

図 7-19 トランスポートの詳細



7. 図 7-20 に示すように、右隅の「保存」または「すべて保存」アイコンをクリックします。

図 7-20 「保存」/「すべて保存」アイコン

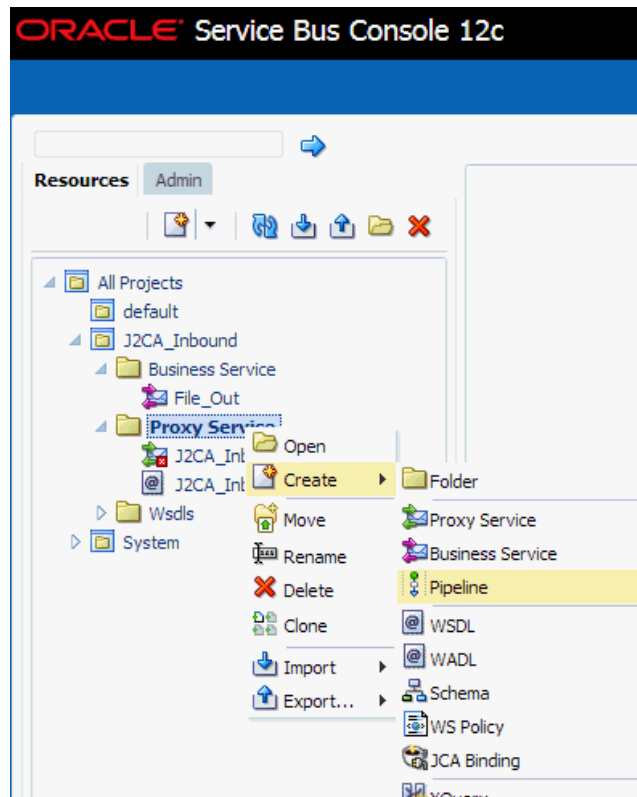


## 7.2.6 パイプラインとプロキシ・サービスの構成

パイプラインを構成するには、次のステップを実行します。

1. 図 7-21 に示すように、「Proxy Service」フォルダを右クリックし、「作成」を選択して、「パイプライン」をクリックします。

図 7-21 「パイプライン」オプション



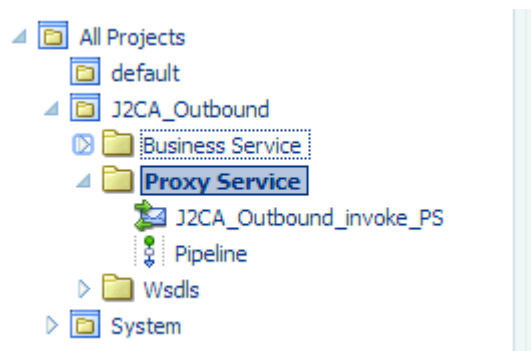
「パイプラインの作成」ウィンドウが表示されます。

2. 「パイプライン名」フィールドに名前を入力します。デフォルトでは、「プロキシ・サービスとして公開」が選択されています。図 7-22 に示すように、プロキシ・サービス名を必要に応じて変更し、「トランスポート」をファイルに設定して、「作成」をクリックします。

図 7-22 「パイプラインの作成」ウィンドウ

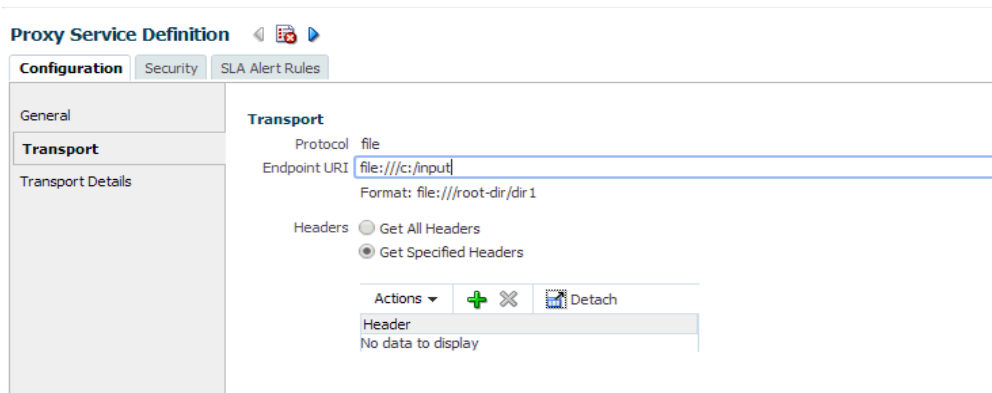
図 7-23 に示すように、作成されたパイプラインとプロキシ・サービスが「Proxy Service」の下に表示されます。

図 7-23 「Pipeline」ノード



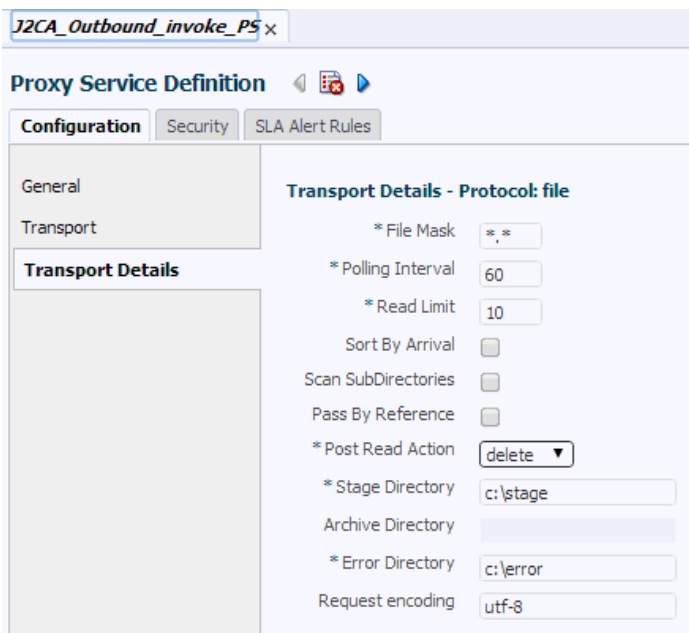
- 作成されたプロキシ・サービスをダブルクリックし、左ペインで「トランスポート」をクリックします。図 7-24 に示すように、「エンドポイント URI」フィールドに入力場所を指定します。

図 7-24 トランスポート



4. 図 7-25 に示すように、左ペインで「トランスポートの詳細」をクリックし、「ステージ・ディレクトリ」フィールドと「エラー・ディレクトリ」フィールドに場所を指定します。

図 7-25 トランスポートの詳細



5. 図 7-26 に示すように、右隅の「すべて保存」アイコンをクリックします。

図 7-26 「すべて保存」アイコン



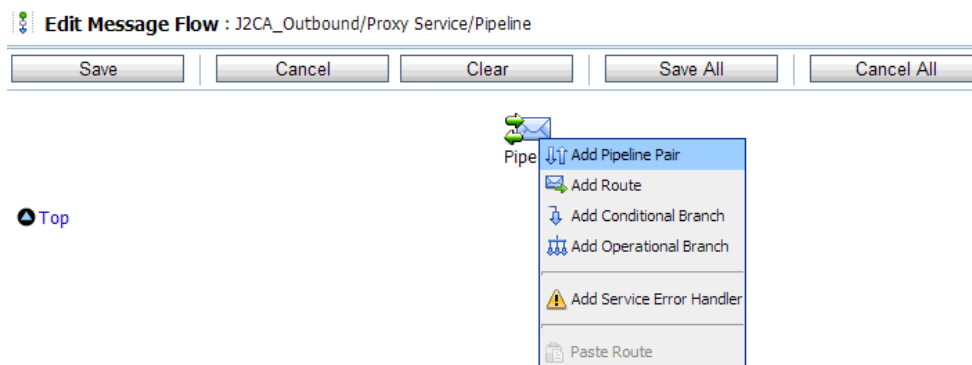
6. 図 7-27 に示すように、「Pipeline」ノードをダブルクリックし、右ペインで「メッセージ・フローを開く」アイコンをクリックして、メッセージ・フローを開きます。

図 7-27 「メッセージ・フローを開く」アイコン



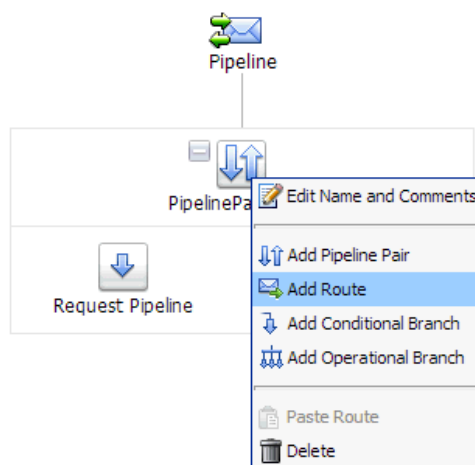
7. 図 7-28 に示すように、「プロキシ・サービス」アイコンをクリックし、メニューから「パイプライン・ペアの追加」を選択します。

図 7-28 「パイプライン・ペアの追加」オプション



8. 図 7-29 に示すように、**PipelinePairNode1** アイコンをクリックし、メニューから「ルートの追加」を選択します。

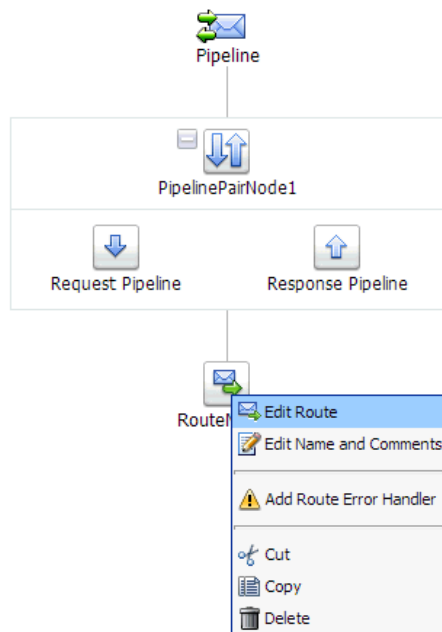
図 7-29 「ルートの追加」オプション



RouteNode1 アイコンが PipelinePairNode1 アイコンの下に追加されます。

9. 図 7-30 に示すように、RouteNode1 アイコンをクリックし、メニューから「ルートの編集」を選択します。

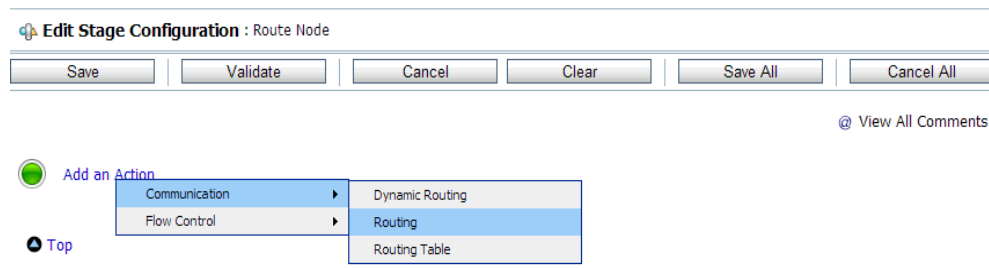
図 7-30 「ルート編集」オプション



「ステージ構成の編集」ワークスペース領域が表示されます。

10. 図 7-31 に示すように、「アクションの追加」をクリックし、「通信」を選択して、「ルーティング」をクリックします。

図 7-31 「ステージ構成の編集」ワークスペース領域



11. 図 7-32 に示すように、<サービス>をクリックします。

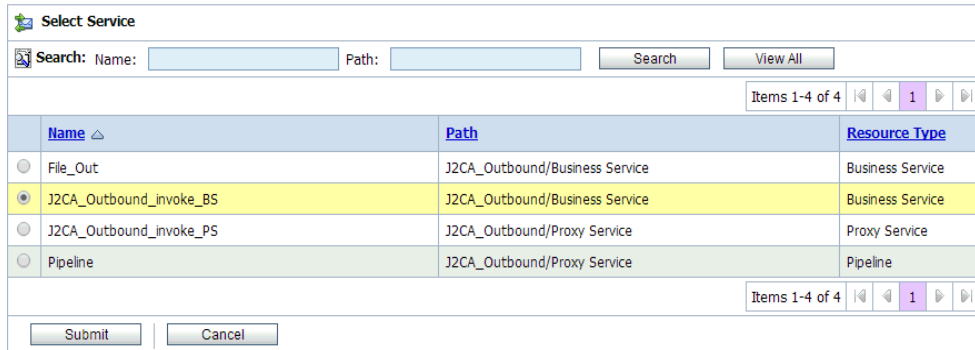
図 7-32 アクション



「サービスの選択」ダイアログが表示されます。

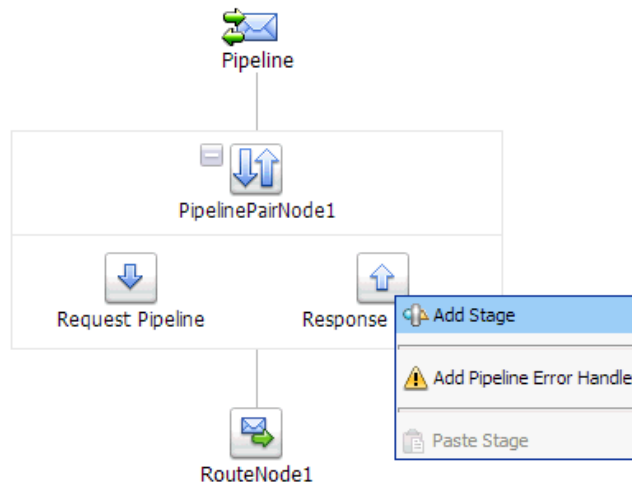
12. 図 7-33 に示すように、PeopleSoft 用に構成された WSDL タイプ・ビジネス・サービスを選択し、「発行」をクリックします。

図 7-33 「サービスの選択」ダイアログ



13. リストから操作属性として PeopleSoft ビジネス・オブジェクトの名前を選択し、「保存」をクリックします。
14. 図 7-34 に示すように、「レスポンス・パイプライン」アイコンをクリックし、メニューから「ステージの追加」を選択します。

図 7-34 「レスポンス・パイプライン」アイコン

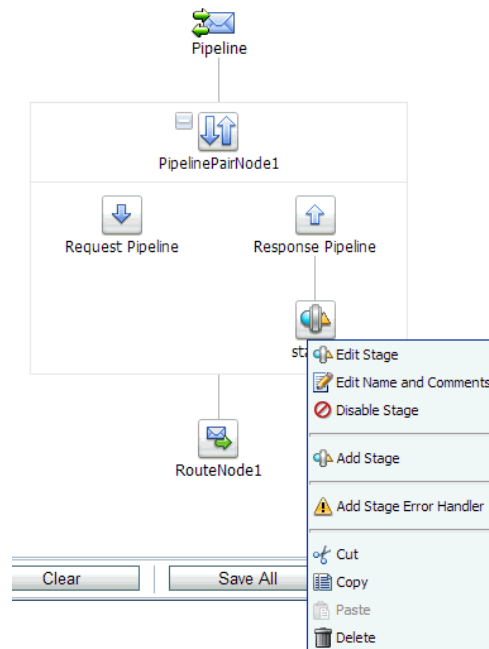


ステージ 1 アイコンが「リクエスト・パイプライン」アイコンの下に追加されます。

15. 図 7-35 に示すように、「ステージ 1」アイコンをクリックし、メニューから「ステージの編集」を選択します。



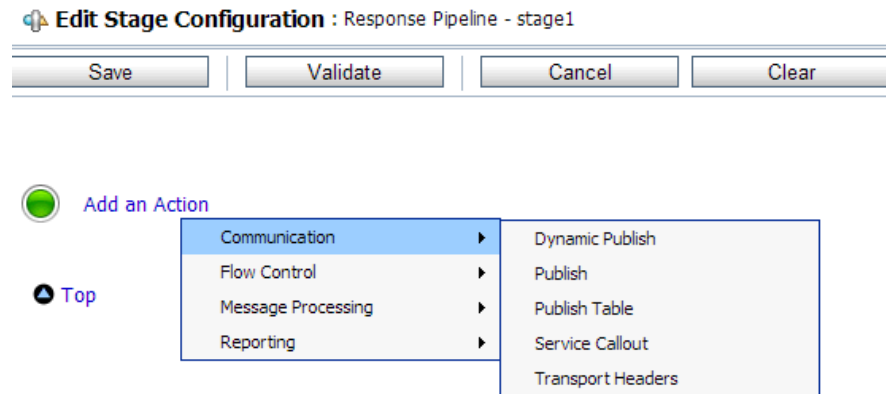
図 7-35 「ステージの編集」オプション



「ステージ構成の編集」ワークスペース領域が表示されます。

16. 図 7-36 に示すように、「アクションの追加」をクリックし、「通信」を選択して、「パブリッシュ」をクリックします。

図 7-36 「ステージ構成の編集」ワークスペース領域



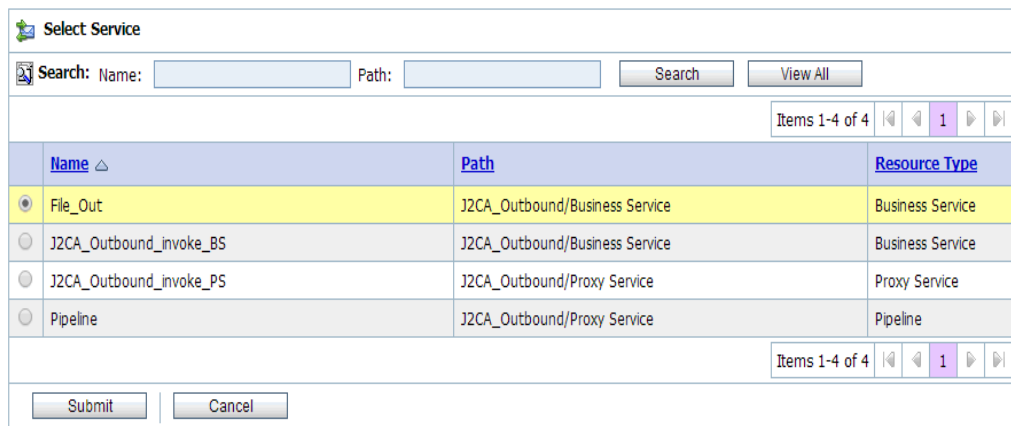
17. 図 7-37 に示すように、<サービス>をクリックします。

図 7-37 <サービス> アクション



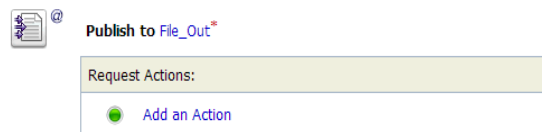
18. 図 7-38 に示すように、「サービスの選択」ダイアログで、ファイル・タイプ・ビジネス・サービスを選択し、「発行」をクリックします。

図 7-38 「サービスの選択」ダイアログ



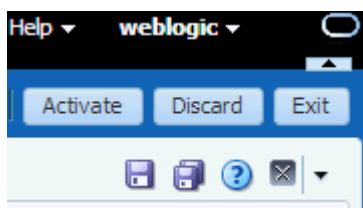
19. 図 7-39 に示すように、「すべて保存」をクリックします。

図 7-39 「すべて保存」ボタン



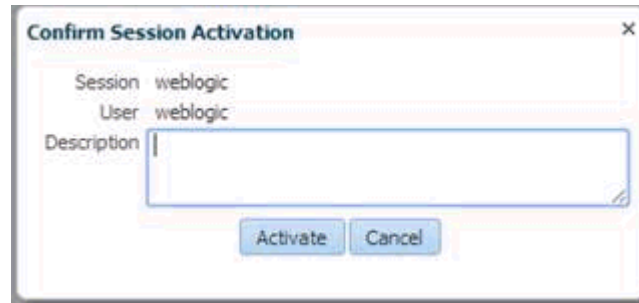
20. 図 7-40 に示すように、Oracle Service Bus セッションの右ペインで「アクティブ化」をクリックします。

図 7-40 「アクティブ化」ボタン



21. 図 7-41 に示すように、「アクティブ化」をクリックして変更を保存します。

図 7-41 セッションのアクティブ化の確認



22. 入力 XML ファイルをコピーして構成済の入力フォルダ (「C:\input」など) に貼付けます。構成済の出力場所 (「C:\output」など) で出力が受信されたことを確認します。

## 7.3 sbconsole を使用したインバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成)

この項では、J2CA 構成で sbconsole を使用してインバウンド・プロセスを構成する方法について説明します。

このインバウンド・ユース・ケース・シナリオ用のサンプル・プロジェクトが、次に示す Application Adapter のインストール・フォルダに用意されています。

```
<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\OSB\J2CA\PeopleSoft_Sample_J2CA_OSB_Inbound_Project
```

この項では、次のトピックについて説明します。

- 7.3.1 項「Oracle Service Bus の起動およびプロジェクト・フォルダの作成」
- 7.3.2 項「Oracle Service Bus 統合のためのアプリケーション・エクスプローラのクラス・パスの設定」
- 7.3.3 項「アプリケーション・エクスプローラから Oracle Service Bus への WSDL の公開」
- 7.3.4 項「WSDL ベースのプロキシ・サービスの構成」
- 7.3.5 項「ファイル・タイプ・ビジネス・サービスの構成」
- 7.3.6 項「パイプラインの構成」

### 7.3.1 Oracle Service Bus の起動およびプロジェクト・フォルダの作成

Oracle Service Bus の起動およびプロジェクト・フォルダの作成の詳細は、7.2.1 項「Oracle Service Bus の起動およびプロジェクト・フォルダの作成」(7-2 ページ) を参照してください。

## 7.3.2 Oracle Service Bus 統合のためのアプリケーション・エクスプローラのクラス・パスの設定

Oracle Service Bus 統合のためのアプリケーション・エクスプローラのクラス・パスの設定の詳細は、7.2.2 項「Oracle Service Bus 統合のためのアプリケーション・エクスプローラのクラス・パスの設定」(7-6 ページ)を参照してください。

## 7.3.3 アプリケーション・エクスプローラから Oracle Service Bus への WSDL の公開

アプリケーション・エクスプローラから Oracle Service Bus に WSDL を公開するには、次のステップを実行します。

1. アプリケーション・エクスプローラを起動し、J2CA 構成および PeopleSoft ターゲットに接続します。  
詳細は、第 2 章「Oracle Application Adapter for PeopleSoft 構成」(2-1 ページ)を参照してください。
2. `PeopleSoft` チャンネルを作成します。  
詳細は、4.5.1.1 項「チャンネルの作成」(4-35 ページ)を参照してください。
3. 接続先のターゲットの下で、「メッセージ」を展開し、「LOCATION\_SYNC.VERSION\_1」を選択します。
4. 「LOCATION\_SYNC.VERSION\_1」を右クリックし、コンテキスト・メニューからインバウンド JCA サービスの作成 (イベント) を選択します。

図 7-42 に示すように、「WSDL のエクスポート」ダイアログが表示されます。

図 7-42 「WSDL のエクスポート」ダイアログ

5. 「名前」フィールドに、WSDL ファイルのデフォルトのファイル名が表示されます。デフォルトを受け入れるか、任意の名前を指定します。
6. 「チャンネル」リストで、このインバウンド・サービス用に作成したチャンネルを選択します。
7. 「ルート」、「ネームスペース」および「スキーマ」の3つの検証のチェック・ボックスも表示されます。複数の検証オプションを選択できます。
8. **OSB にエクスポート・オプション**を選択します。
9. 「ロケーション」フィールドで、WSDL ドキュメントの公開先となる Oracle Service Bus 内のフォルダ名を入力します。  
このロケーションは、Oracle Service Bus のプロジェクト名と、オプションで1つ以上のフォルダ名で構成されます。プロジェクト名およびフォルダ名はいずれもスラッシュ文字の「/」で区切る必要があります。
10. 「ホスト」フィールドで、Oracle Service Bus がインストールされているマシンの名前を入力します。
11. 「ポート」フィールドで、Oracle Service Bus により使用されるポートを入力します。
12. 「ユーザー」フィールドで、Oracle Service Bus へのアクセス用のユーザー名を入力します。
13. 「パスワード」フィールドで、Oracle Service Bus へのアクセス用のパスワードを入力します。
14. 「OK」をクリックします。

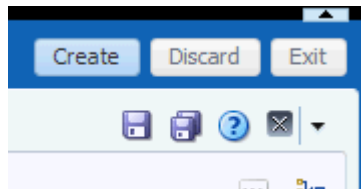
インバウンド WSDL が「WSDL のエクスポート」ダイアログで指定されている場所に公開され、Oracle Service Bus でプロキシ・サービスとともに使用できるようになります。

### 7.3.4 WSDL ベースのプロキシ・サービスの構成

WSDL ベースのプロキシ・サービスを構成するには、次のステップを実行します。

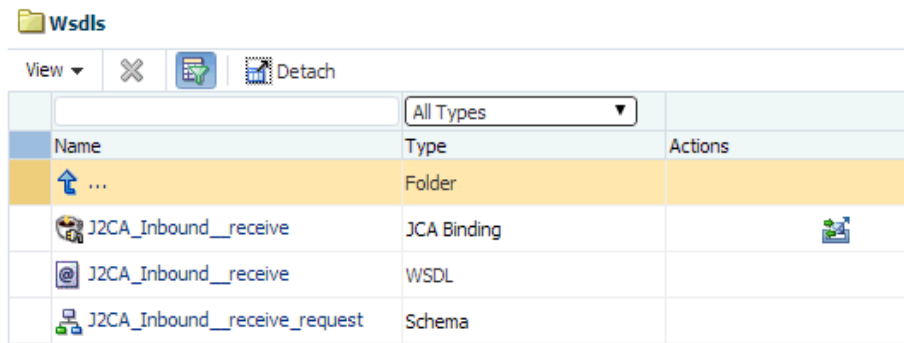
1. [図 7-43](#) に示すように、Oracle Service Bus コンソールを開き、Oracle Service Bus セッションの右ペインで「作成」をクリックします。

**図 7-43 「作成」ボタン**



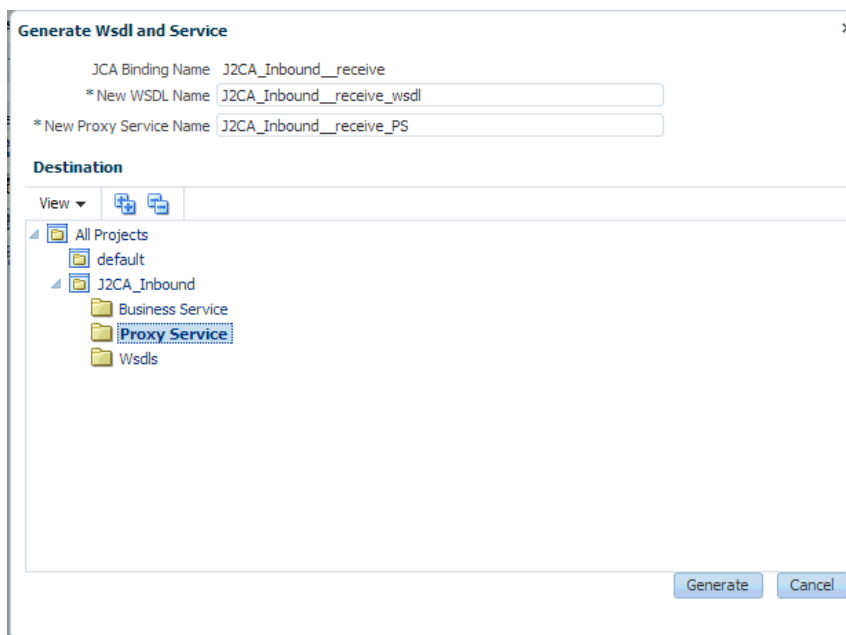
2. [図 7-44](#) に示すように、左ペインで作成された WSDL フォルダ（「Wsdls」など）をダブルクリックし、右ペインでエクスポートされた WSDL がリストに表示されていることを確認します。

図 7-44 エクスポートされた WSDL



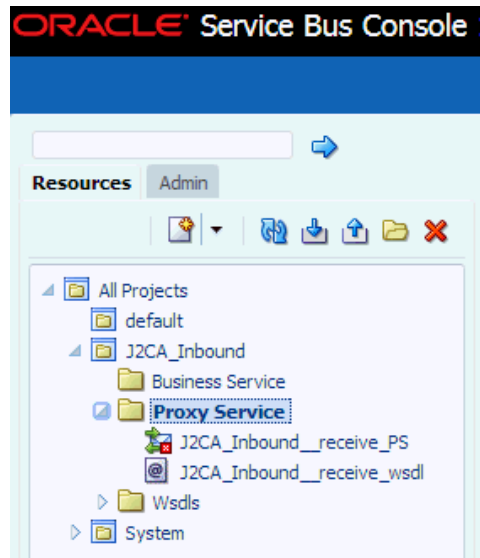
- 「アクション」列で、JCA バインディングに関連するアイコンをクリックします。  
図 7-45 に示すように、「WSDL とサービスの生成」ページが表示されます。

図 7-45 「WSDL とサービスの生成」ページ



- 新規 WSDL の名前および新規プロキシ・サービスの名前を対応するフィールドに入力します。
- 「宛先」領域で、プロキシ・サービスに指定されている使用可能なプロジェクトおよびサブフォルダを選択します。
- 「生成」をクリックします。
- 図 7-46 に示すように、「プロジェクト・エクスプローラ」の下にある「Proxy Service」を展開し、生成された WSDL およびプロキシ・サービスがリストに表示されていることを確認します。

図 7-46 生成された WSDL

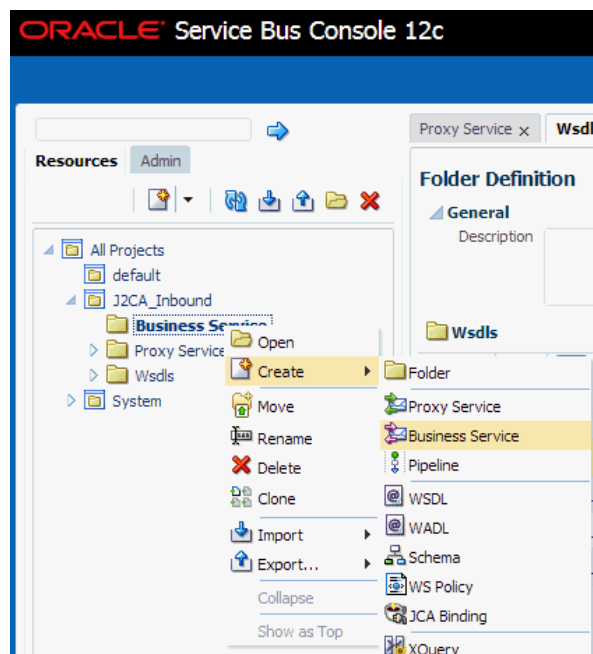


### 7.3.5 ファイル・タイプ・ビジネス・サービスの構成

ファイル・タイプ・ビジネス・サービスを構成するには、次のステップを実行します。

1. 図 7-47 に示すように、左ペインで作成した「Business Service」フォルダを右クリックし、「作成」を選択して、「ビジネス・サービス」をクリックします。

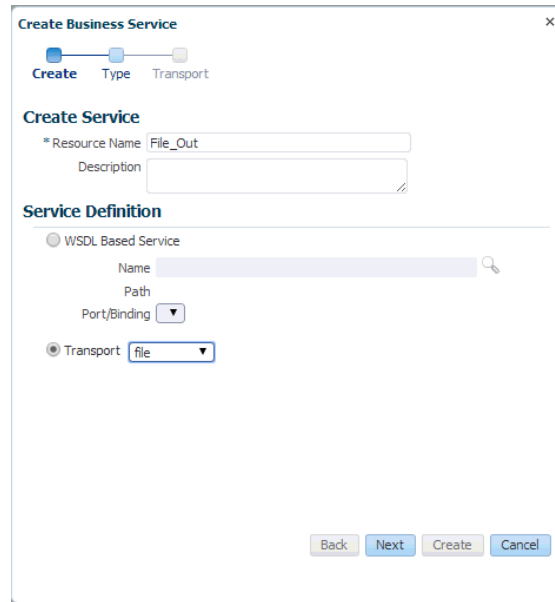
図 7-47 「Business Service」フォルダ



「ビジネス・サービスの作成」ウィンドウが表示されます。

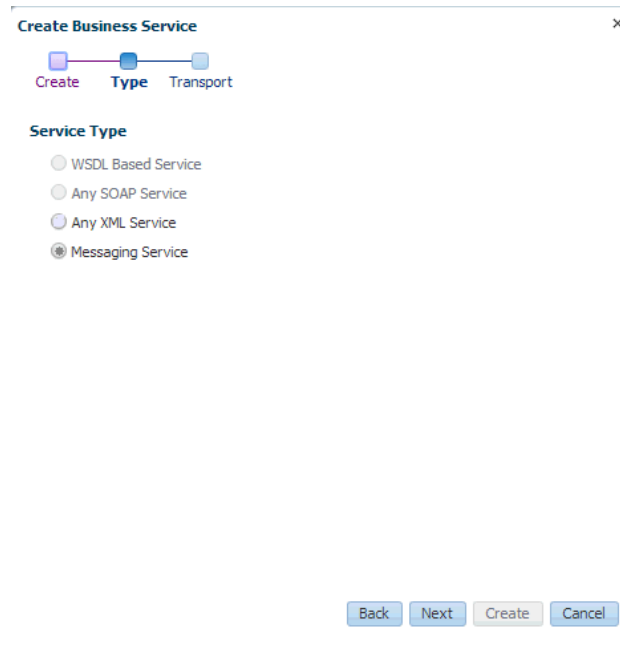
2. 図 7-48 に示すように、「リソース名」フィールドにビジネス・サービスの名前を入力し、「サービス定義」領域の「トランスポート」ドロップダウン・リストから「ファイル」オプションを選択します。

図 7-48 「ビジネス・サービスの作成」ウィンドウ



3. 「次へ」をクリックします。
4. 図 7-49 に示すように、「サービス・タイプ」領域で、サービス・タイプとして「メッセージ・サービス」を選択します。

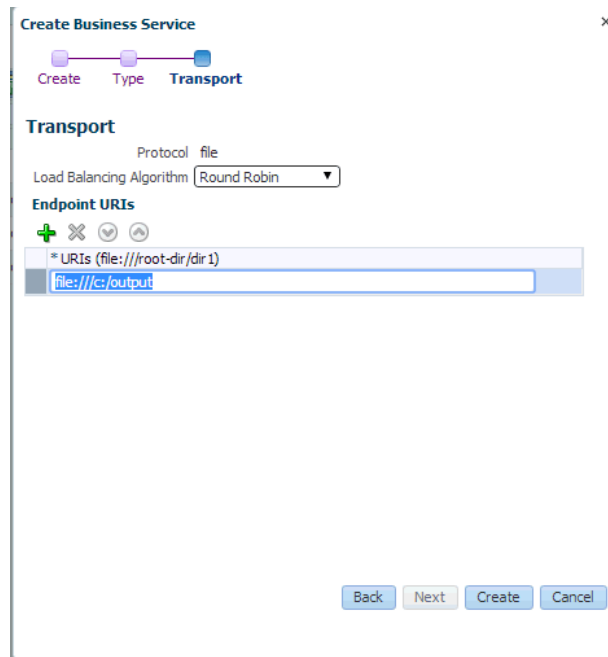
図 7-49 「サービス・タイプ」領域



5. 「次へ」をクリックします。  
図 7-50 に示すように、「トランスポート」ページが表示されます。



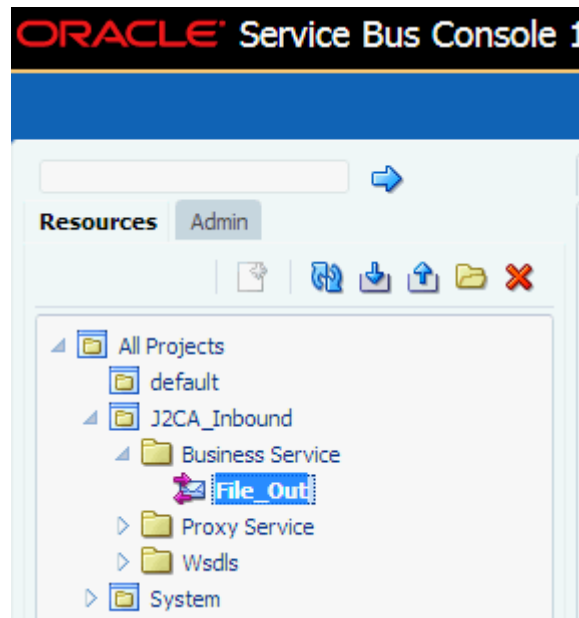
図 7-50 「トランスポート」 ページ



6. 「エンドポイント URI」フィールドで、ファイル・システム上の送信先フォルダへのパスを入力し、「作成」をクリックします。

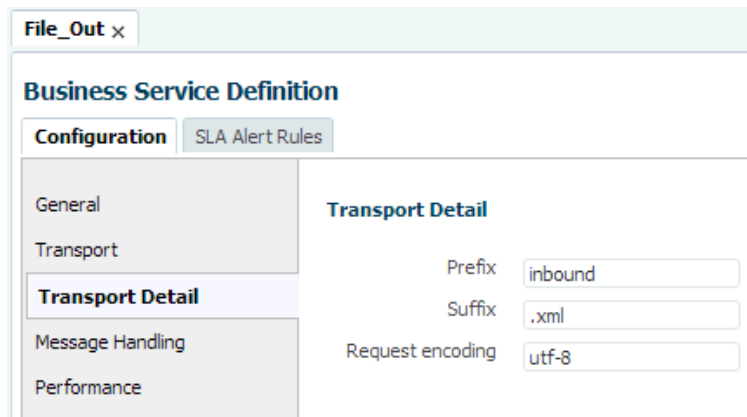
図 7-51 に示すように、「File\_Out」ビジネス・サービスが作成され、「Business Service」の下に表示されます。

図 7-51 「File\_Out」ビジネス・サービス



7. 図 7-52 に示すように、「File\_Out」をダブルクリックし、左ペインで「トランスポートの詳細」をクリックして、受信される出力ファイルの接頭辞および接尾辞を入力します。

図 7-52 「トランスポートの詳細」ページ



8. 図 7-53 に示すように、右隅の「保存」または「すべて保存」アイコンをクリックします。

図 7-53 保存アイコン

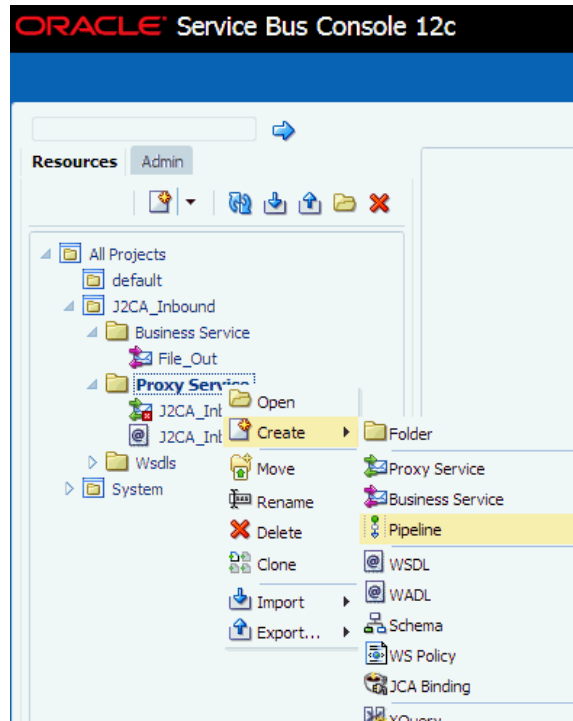


### 7.3.6 パイプラインの構成

パイプラインを構成するには、次のステップを実行します。

1. 図 7-54 に示すように、作成したプロキシ・サービスを右クリックし、「作成」を選択して、「パイプライン」をクリックします。

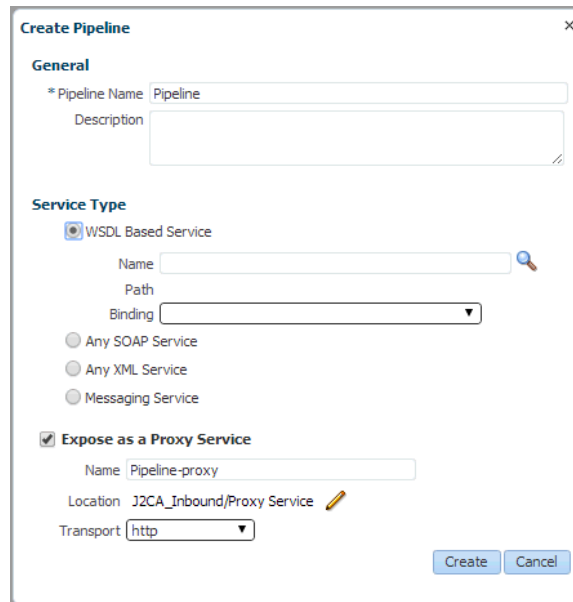
図 7-54 「パイプライン」オプション



「パイプラインの作成」ウィンドウが表示されます。

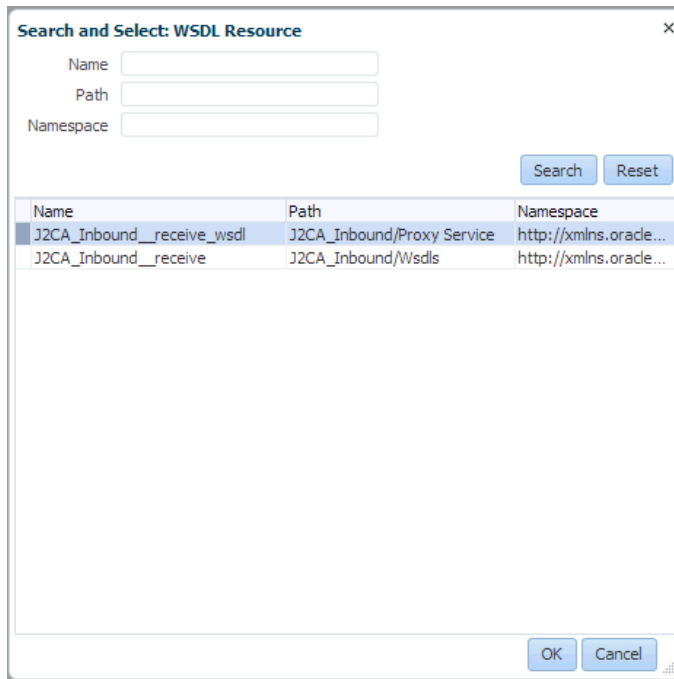
2. 図 7-55 に示すように、「パイプライン名」フィールドに名前を入力し、サービス・タイプとして「WSDL ベース・サービス」を選択します。

図 7-55 「パイプラインの作成」ウィンドウ



3. 「検索」アイコンをクリックし、図 7-56 に示すように、表示された「検索と選択: WSDL リソース」ウィンドウで、「J2CA\_Inbound\_receive\_wsdl」を選択し、「OK」をクリックします。

図 7-56 「検索と選択: WSDL リソース」ウィンドウ



「パイプラインの作成」ウィンドウが開きます。

- 図 7-57 に示すように、「プロキシ・サービスとして公開」のチェック・ボックスを選択解除し、「作成」をクリックします。

図 7-57 「パイプラインの作成」ウィンドウ

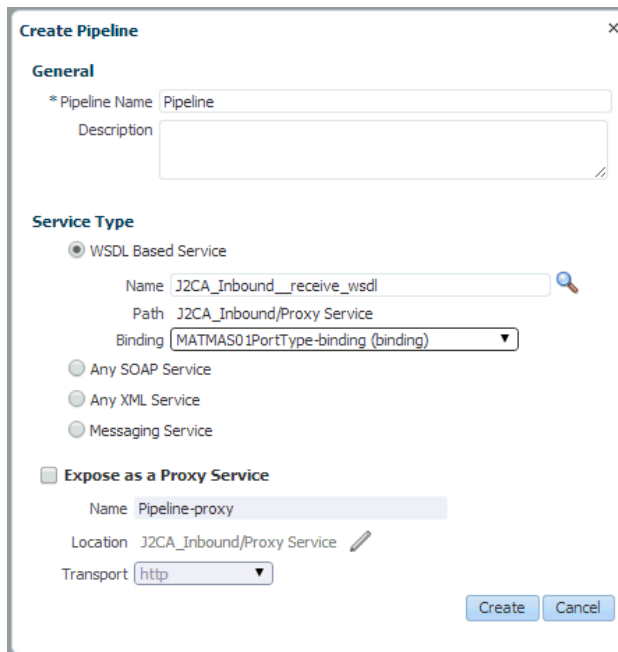
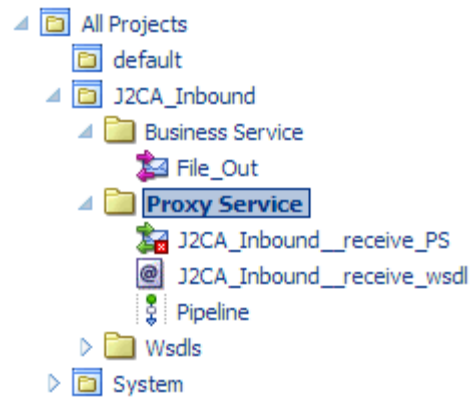


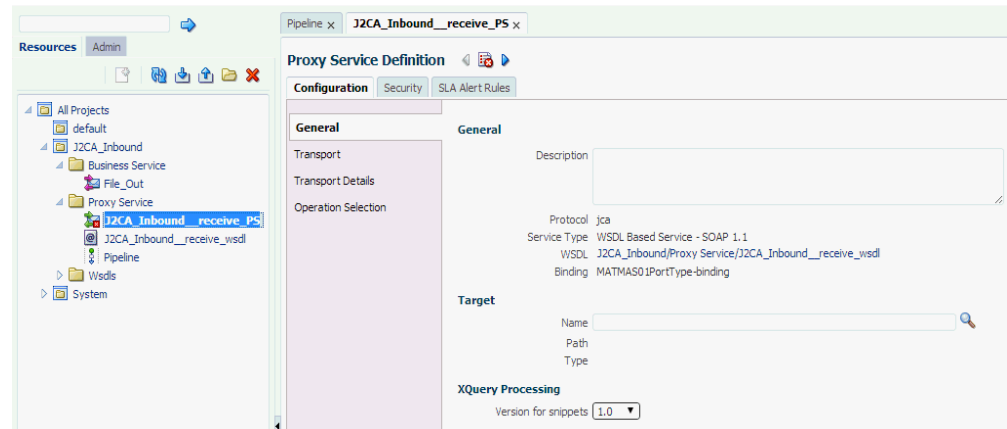
図 7-58 に示すように、パイプラインが作成され、「Proxy Service」の下に表示されます。

図 7-58 プロキシ・サービス・パイプライン



5. 図 7-59 に示すように、左ペインで「Proxy Service」の下にある「J2CA\_Inbound\_\_receive\_PS」ノードをダブルクリックし、右ペインで「対象」領域の「検索」アイコンをクリックします。

図 7-59 「プロキシ・サービス定義」ウィンドウ

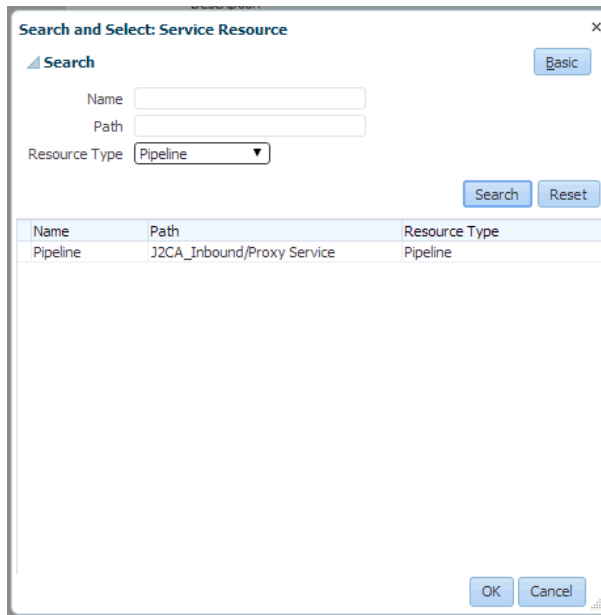


「検索と選択: サービス・リソース」ウィンドウが表示されます。

6. 「リソース・タイプ」ドロップダウン・リストから「パイプライン」を選択し、「検索」ボタンをクリックします。

図 7-60 に示すように、パイプラインが表示されます。

図 7-60 「検索と選択: サービス・リソース」ウィンドウ



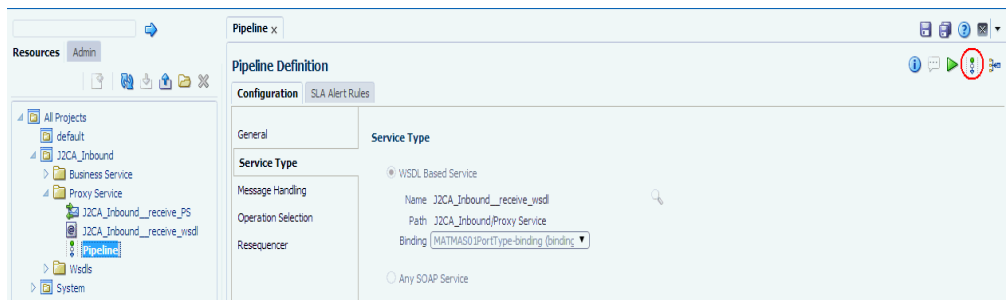
7. パイプラインを選択し、「OK」をクリックします。
8. 図 7-61 に示すように、右隅の「保存」または「すべて保存」アイコンをクリックします。

図 7-61 「保存」アイコンと「すべて保存」アイコン



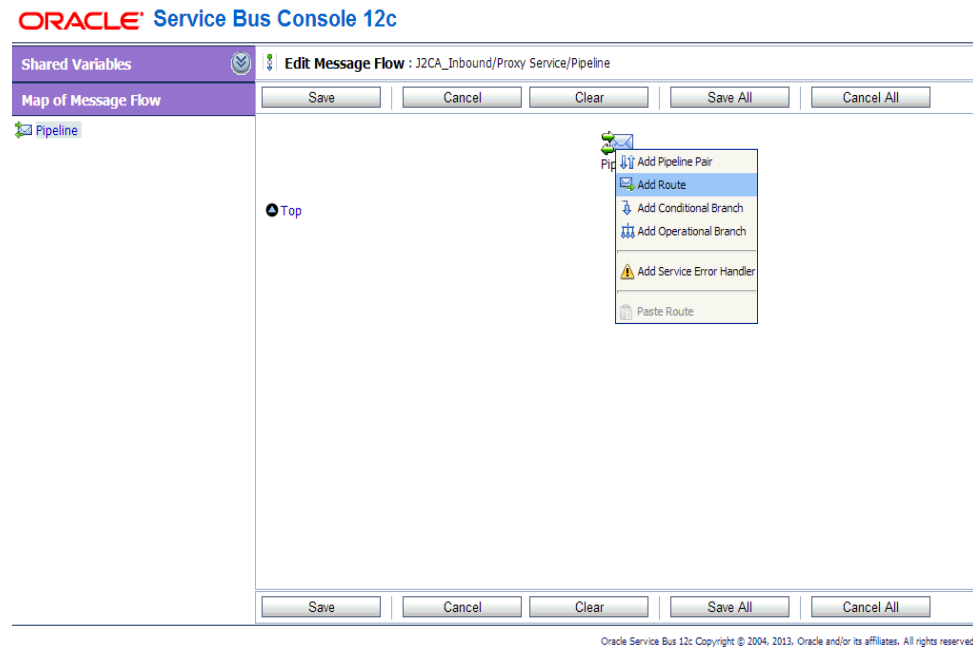
9. 図 7-62 に示すように、左ペインで「Proxy Service」フォルダの下にある「Pipeline」をダブルクリックし、右ペインで下向きのアイコンをクリックしてメッセージ・フローを開きます。

図 7-62 メッセージ・フロー



10. 図 7-63 に示すように、表示されたプロキシ・サービス・アイコンをクリックし、メニューから「ルート追加」を選択します。

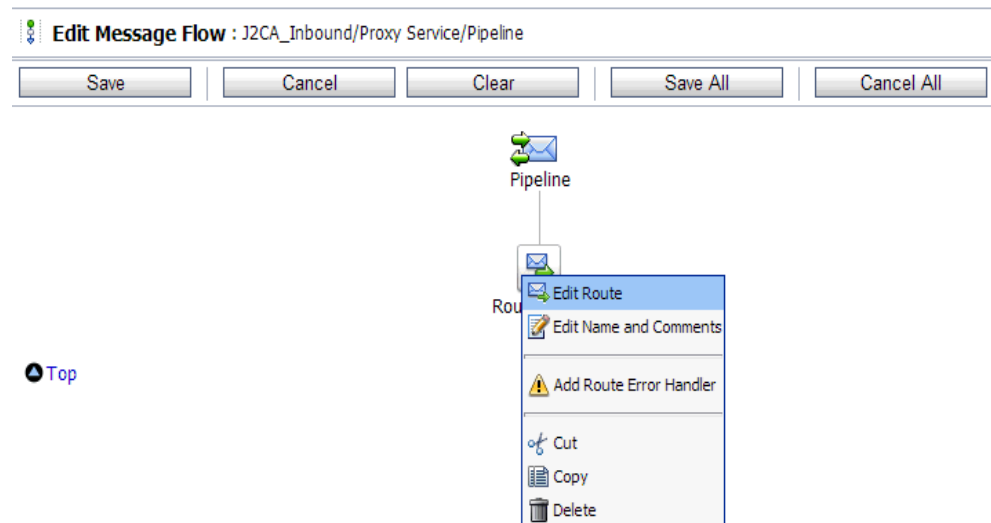
図 7-63 「ルートの追加」オプション



RouteNode1 アイコンが追加されます。

11. 図 7-64 に示すように、RouteNode1 アイコンをクリックし、メニューから「ルートの編集」を選択します。

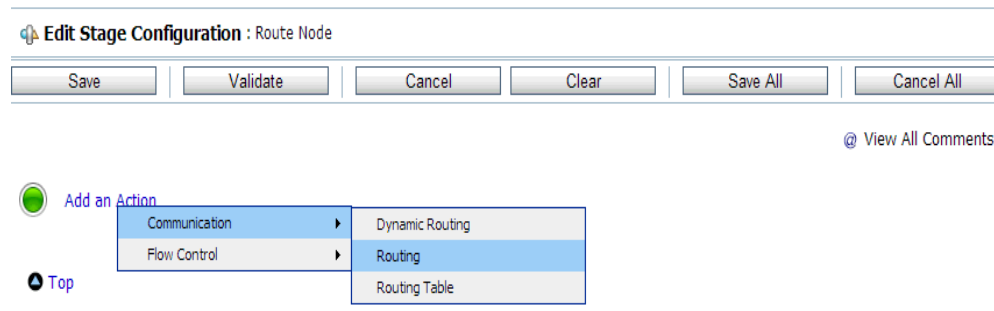
図 7-64 「ルートの編集」オプション



「ステージ構成の編集」ワークスペース領域が表示されます。

12. 図 7-65 に示すように、「アクションの追加」をクリックし、メニューから「通信」を選択して、「ルーティング」をクリックします。

図 7-65 「ステージ構成の編集」ワークスペース



13. 図 7-66 に示すように、<サービス> をクリックします。

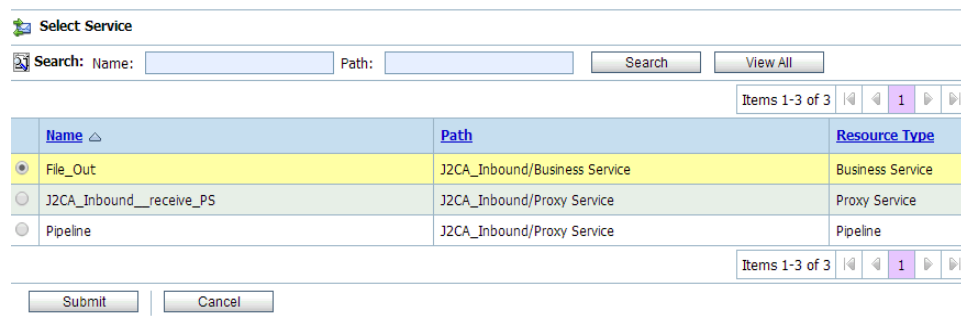
図 7-66 サービスへのルーティング・アクション



「サービスの選択」ダイアログが表示されます。

14. 図 7-67 に示すように、「File\_Out」ビジネス・サービスを選択し、「発行」をクリックします。

図 7-67 「サービスの選択」ダイアログ

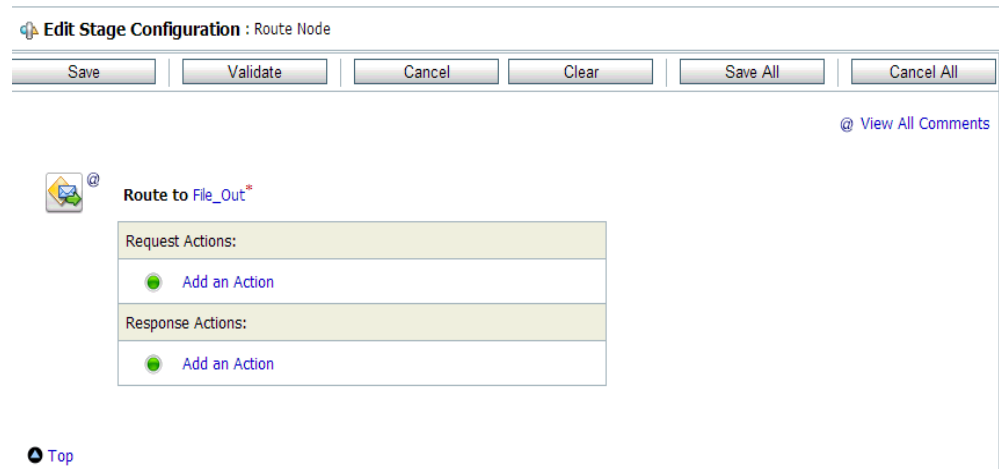


「ステージ構成の編集」ワークスペース領域に戻ります。

15. 図 7-68 に示すように、「すべて保存」をクリックします。

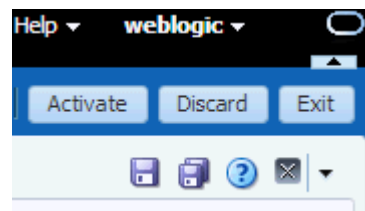


図 7-68 「ステージ構成の編集」 ワークスペース領域



16. 図 7-69 に示すように、Oracle Service Bus セッションの右ペインで「アクティブ化」をクリックします。

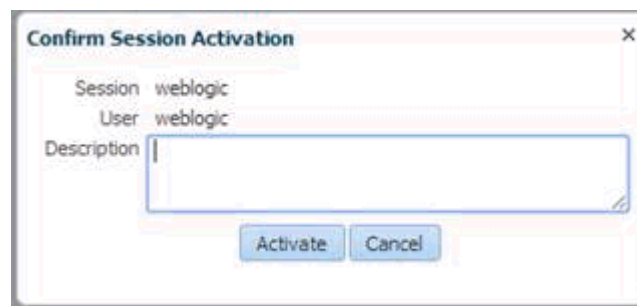
図 7-69 「アクティブ化」 ボタン



「セッションのアクティブ化の確認」ウィンドウが表示されます。

17. 図 7-70 に示すように、「アクティブ化」をクリックして変更を保存します。

図 7-70 「セッションのアクティブ化の確認」ウィンドウ



18. PeopleSoft システムからのイベントをトリガーし、構成済の出力ロケーションで受信されたことを確認します。

イベントのトリガーの詳細は、4.5.5 項「PeopleSoft でのイベントのトリガー」(4-47 ページ) を参照してください。

## 7.4 sbconsole を使用したアウトバウンド・プロセスの構成 (BSE 構成)

この項では、BSE 構成で sbconsole を使用してアウトバウンド・プロセスを構成する方法について説明します。

このアウトバウンド・ユース・ケース・シナリオ用のサンプル・プロジェクトが、次に示す Application Adapter のインストール・フォルダに用意されています。

```
<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\OSB\BSE\PeopleSoft_Sample_BSE_OSB_Outbound_Project
```

この項では、次のトピックについて説明します。

- 7.4.1 項「Oracle Service Bus の起動およびプロジェクト・フォルダの作成」
- 7.4.2 項「Oracle Service Bus 統合のためのアプリケーション・エクスプローラのクラス・パスの設定」
- 7.4.3 項「アプリケーション・エクスプローラから Oracle Service Bus への WSDL の公開」
- 7.4.4 項「ファイル・タイプ・ビジネス・サービスの構成」
- 7.4.5 項「WSDL ベースのビジネス・サービスの構成」
- 7.4.6 項「パイプラインとプロキシ・サービスの構成」

### 7.4.1 Oracle Service Bus の起動およびプロジェクト・フォルダの作成

Oracle Service Bus の起動およびプロジェクト・フォルダの作成の詳細は、7.2.1 項「Oracle Service Bus の起動およびプロジェクト・フォルダの作成」(7-2 ページ)を参照してください。

### 7.4.2 Oracle Service Bus 統合のためのアプリケーション・エクスプローラのクラス・パスの設定

Oracle Service Bus 統合のためのアプリケーション・エクスプローラのクラス・パスの設定の詳細は、7.2.2 項「Oracle Service Bus 統合のためのアプリケーション・エクスプローラのクラス・パスの設定」(7-6 ページ)を参照してください。

### 7.4.3 アプリケーション・エクスプローラから Oracle Service Bus への WSDL の公開

この項では、アプリケーション・エクスプローラ (BSE 構成) から Oracle Service Bus に WSDL を公開する方法について説明します。

1. アプリケーション・エクスプローラを起動し、BSE 構成および PeopleSoft ターゲットに接続します。
2. コンポーネント・インタフェースを展開し、**Location** を選択します。
3. 操作にナビゲートして右クリックし、メニューから「**Web サービスの作成**」を選択します。

図 7-71 に示すように、「Web サービスの作成」ダイアログが表示されます。

図 7-71 「Web サービスの作成」ダイアログ

4. サービス名を入力し、「次へ」をクリックします。
5. 表示される次のダイアログで「OK」をクリックします。  
アプリケーション・エクスプローラで、「ビジネス・サービス」ノードに表示が切り替わり、新規の Web サービスが左ペインに表示されます。
6. 新規 Web サービスを右クリックし、メニューから「WSDL のエクスポート」を選択します。

図 7-72 に示すように、「WSDL のエクスポート」ダイアログが表示されます。

図 7-72 「WSDL のエクスポート」ダイアログ

7. 「名前」フィールドに、WSDL ファイルのデフォルトのファイル名が表示されます。デフォルトを受け入れるか、任意の名前を指定します。
8. 「ロケーション」フィールドで、WSDL ドキュメントの公開先となる場所を入力します。  
このロケーションは、Oracle Service Bus のプロジェクト名と、オプションで 1 つ以上のフォルダ名で構成されます。プロジェクト名およびフォルダ名はいずれもスラッシュ文字の「/」で区切る必要があります。
9. 「ホスト」フィールドで、Oracle Service Bus が稼働しているマシンの名前を入力します。
10. 「ポート」フィールドで、使用しているドメインのポートを入力します。

11. 「ユーザー」フィールドで、Oracle Service Bus へのアクセス用のユーザー名を入力します。
12. 「パスワード」フィールドで、Oracle Service Bus へのアクセス用のパスワードを入力します。
13. 「OK」をクリックします。

WSDL が「WSDL のエクスポート」ダイアログで指定されている場所に公開され、Oracle Service Bus でビジネス・サービスまたはプロキシ・サービスとともに使用できるようになります。

#### 7.4.4 ファイル・タイプ・ビジネス・サービスの構成

ファイル・タイプ・ビジネス・サービスの構成の詳細は、7.2.5 項「ファイル・タイプ・ビジネス・サービスの構成」(7-10 ページ) を参照してください。

#### 7.4.5 WSDL ベースのビジネス・サービスの構成

この項では、Oracle Service Bus コンソールを使用した WSDL タイプ・ビジネス・サービスの構成方法について説明します。

WSDL ベースのビジネス・サービスを構成するには、次のステップを実行します。

1. 左ペインで「Business Service」フォルダを右クリックし、「ビジネス・サービス」を選択します。

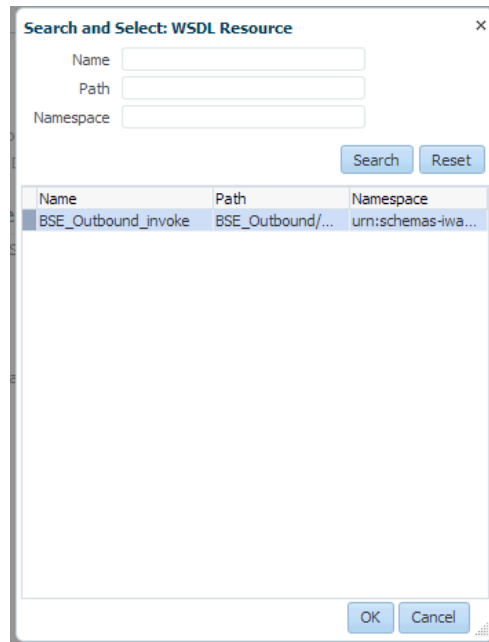
図 7-73 に示すように、「ビジネス・サービスの作成」ウィンドウが表示されます。

図 7-73 「ビジネス・サービスの作成」ウィンドウ

2. ビジネス・サービスの名前を入力し、「サービス定義」領域で「WSDL ベース・サービス」オプションを選択して、検索アイコンをクリックします。

図 7-74 に示すように、「検索と選択: WSDL リソース」ウィンドウが表示されます。

図 7-74 「検索と選択: WSDL リソース」ウィンドウ



3. 「検索」ボタンをクリックし、BSE アウトバウンド WSDL を選択して、「OK」をクリックします。  
「ビジネス・サービスの作成」ウィンドウに戻ります。
4. 「次へ」をクリックします。
5. 図 7-75 に示すように、デフォルト値を受け入れ、「作成」ボタンをクリックします。

図 7-75 「ビジネス・サービスの作成」ウィンドウ

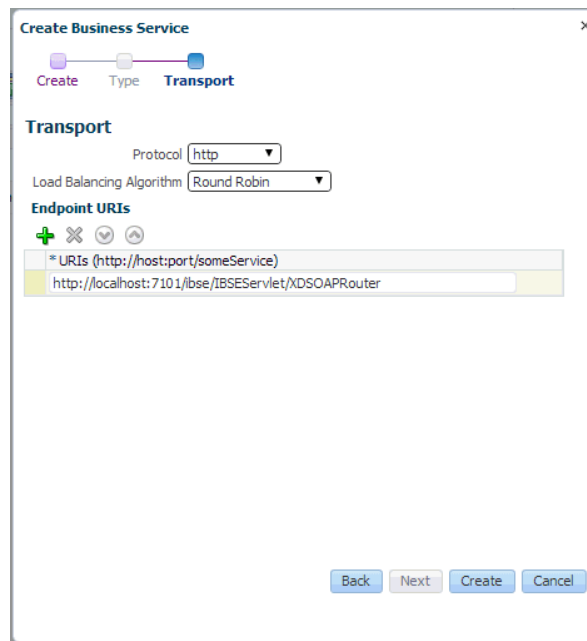
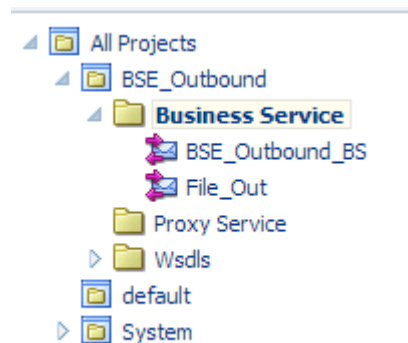


図 7-76 に示すように、作成された WSDL ベースのビジネス・サービスが「Business Service」フォルダの下に表示されます。

図 7-76 WSDL ベースのビジネス・サービス

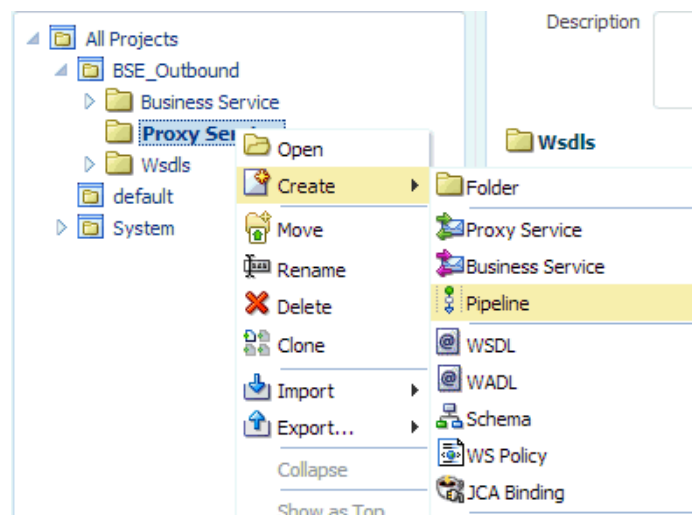


## 7.4.6 パイプラインとプロキシ・サービスの構成

この項では、Oracle Service Bus コンソールを使用したプロキシ・サービスの構成方法について説明します。

1. 図 7-77 に示すように、「Proxy Service」フォルダを右クリックし、「作成」を選択して、「パイプライン」をクリックします。

図 7-77 「パイプライン」オプション



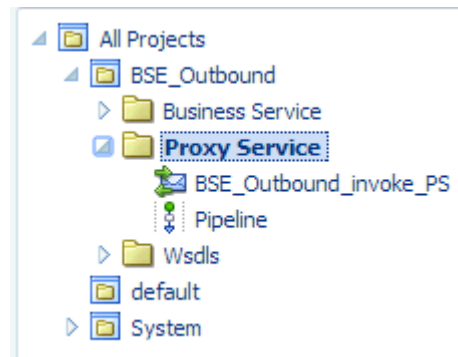
「パイプラインの作成」ウィンドウが表示されます。

2. 「パイプライン名」フィールドに名前を入力します。デフォルトでは、「プロキシ・サービスとして公開」が選択されています。図 7-78 に示すように、プロキシ・サービス名を必要に応じて変更し、「トランスポート」をファイルに設定して、「作成」をクリックします。

図 7-78 「パイプラインの作成」ウィンドウ

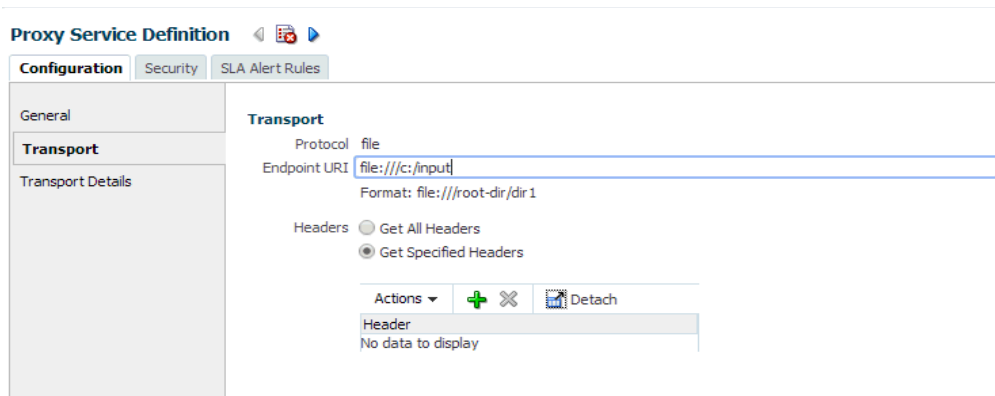
図 7-79 に示すように、作成されたパイプラインとプロキシ・サービスが「Proxy Service」の下に表示されます。

図 7-79 「Pipeline」ノード



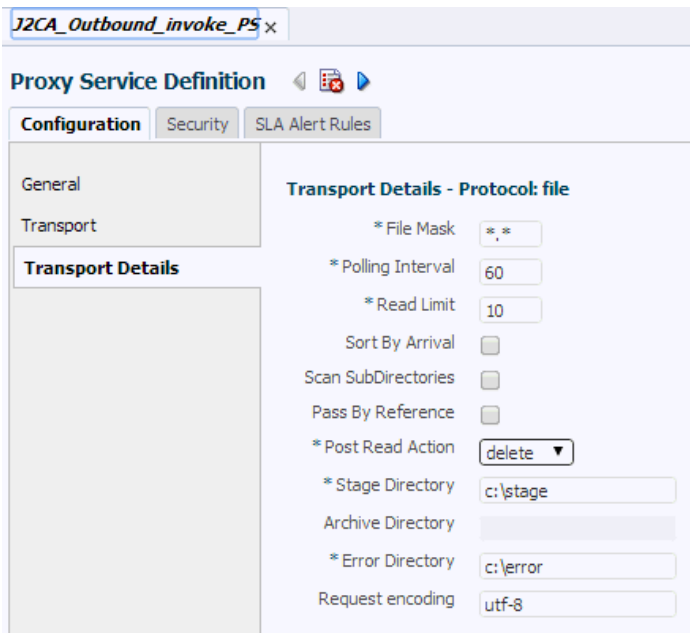
- 作成されたプロキシ・サービスをダブルクリックし、左ペインで「トランスポート」をクリックします。図 7-80 に示すように、「エンドポイント URI」フィールドに入力場所を指定します。

図 7-80 「トランスポート」



4. 図 7-81 に示すように、左ペインで「トランスポートの詳細」をクリックし、「ステージ・ディレクトリ」フィールドと「エラー・ディレクトリ」フィールドに場所を指定します。

図 7-81 トランスポートの詳細



5. 図 7-82 に示すように、右隅の「すべて保存」アイコンをクリックします。

図 7-82 「すべて保存」アイコン



6. 図 7-83 に示すように、「Pipeline」ノードをダブルクリックし、右ペインで「メッセージ・フローを開く」アイコンをクリックして、メッセージ・フローを開きます。

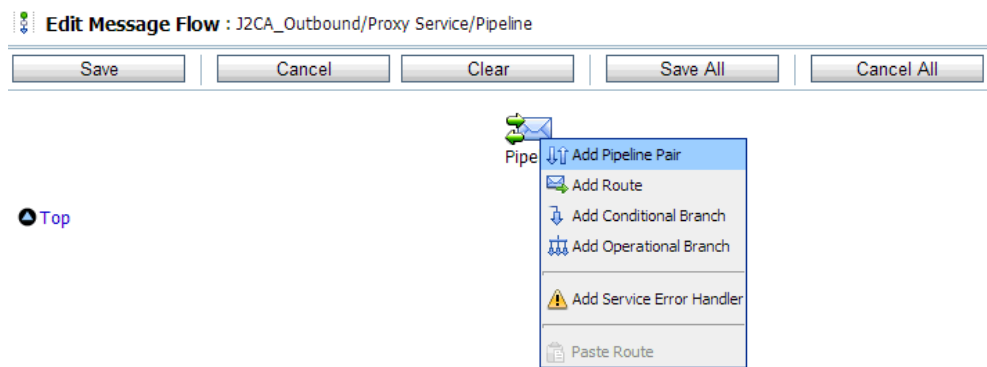


図 7-83 「メッセージ・フローを開く」アイコン



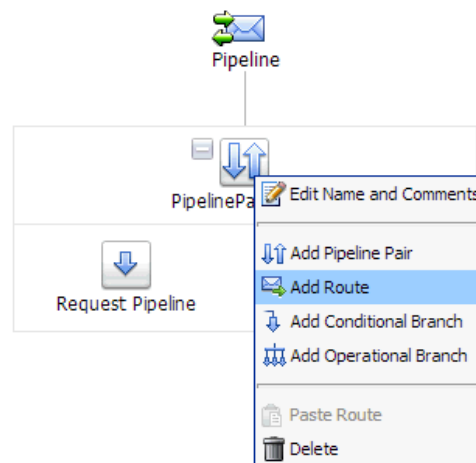
7. 図 7-84 に示すように、「プロキシ・サービス」アイコンをクリックし、メニューから「パイプライン・ペアの追加」を選択します。

図 7-84 「パイプライン・ペアの追加」オプション



8. 図 7-85 に示すように、PipelinePairNode1 アイコンをクリックし、メニューから「ルートへの追加」を選択します。

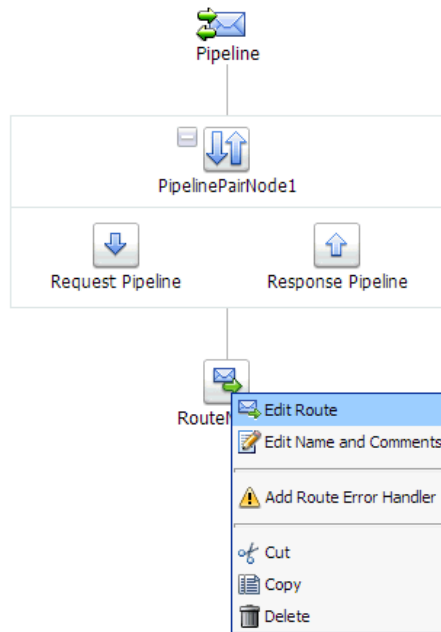
図 7-85 「ルートへの追加」オプション



RouteNode1 アイコンが PipelinePairNode1 アイコンの下に追加されます。

9. 図 7-86 に示すように、RouteNode1 アイコンをクリックし、メニューから「ルートへの編集」を選択します。

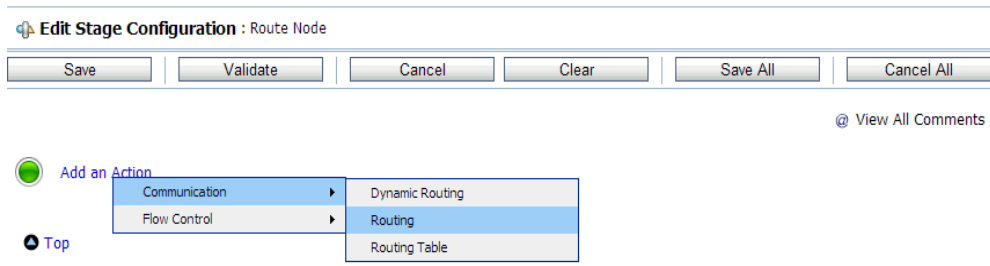
図 7-86 「ルート編集」オプション



「ステージ構成の編集」ワークスペース領域が表示されます。

10. 図 7-87 に示すように、「アクションの追加」をクリックし、「通信」を選択して、「ルーティング」をクリックします。

図 7-87 「ステージ構成の編集」ワークスペース領域



11. 図 7-88 に示すように、<サービス>をクリックします。

図 7-88 アクション



「サービスの選択」ダイアログが表示されます。

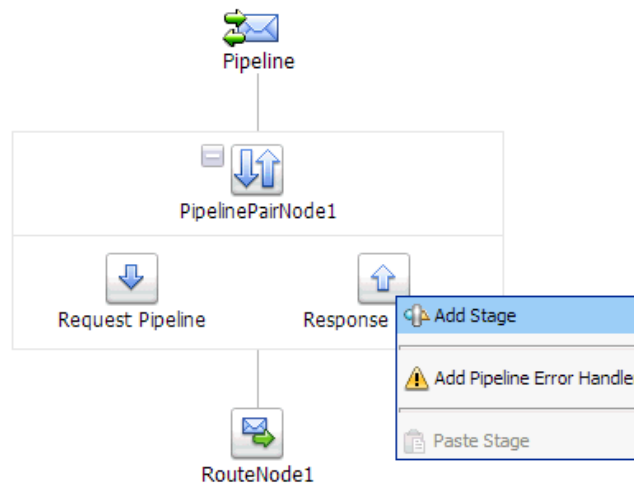
12. 図 7-89 に示すように、PeopleSoft 用に構成された WSDL タイプ・ビジネス・サービスを選択し、「発行」をクリックします。

図 7-89 「サービスの選択」ダイアログ

Name	Path	Resource Type
BSE_Outbound_BS	BSE_Outbound/Business Service	Business Service
BSE_Outbound_invoke_PS	BSE_Outbound/Proxy Service	Proxy Service
File_Out	BSE_Outbound/Business Service	Business Service
Pipeline	BSE_Outbound/Proxy Service	Pipeline

13. リストから操作属性として PeopleSoft ビジネス・オブジェクトの名前を選択し、「保存」をクリックします。
14. 図 7-90 に示すように、「レスポンス・パイプライン」アイコンをクリックし、メニューから「ステージの追加」を選択します。

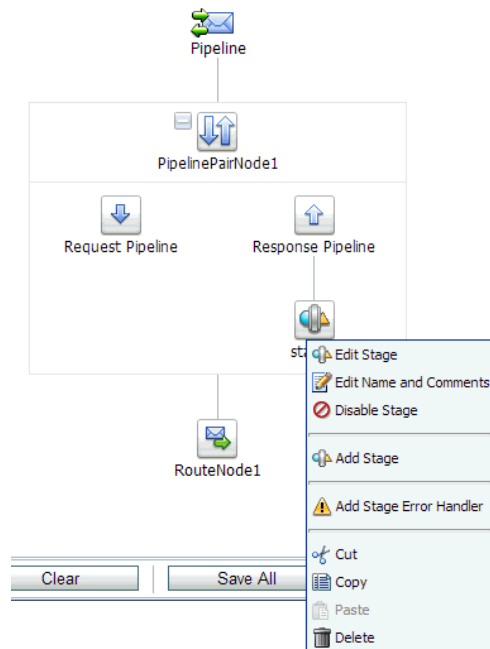
図 7-90 「レスポンス・パイプライン」アイコン



ステージ 1 アイコンが「リクエスト・パイプライン」アイコンの下に追加されます。

15. 図 7-91 に示すように、「ステージ 1」アイコンをクリックし、メニューから「ステージの編集」を選択します。

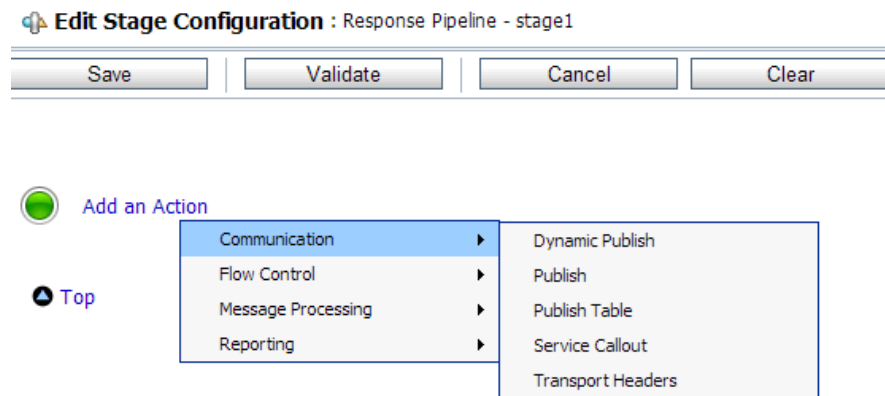
図 7-91 「ステージの編集」オプション



「ステージ構成の編集」ワークスペース領域が表示されます。

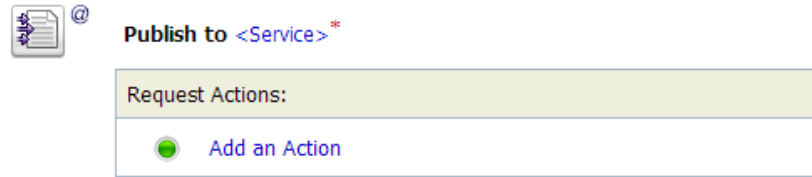
- 図 7-92 に示すように、「アクションの追加」をクリックし、「通信」を選択して、「パブリッシュ」をクリックします。

図 7-92 「ステージ構成の編集」ワークスペース領域



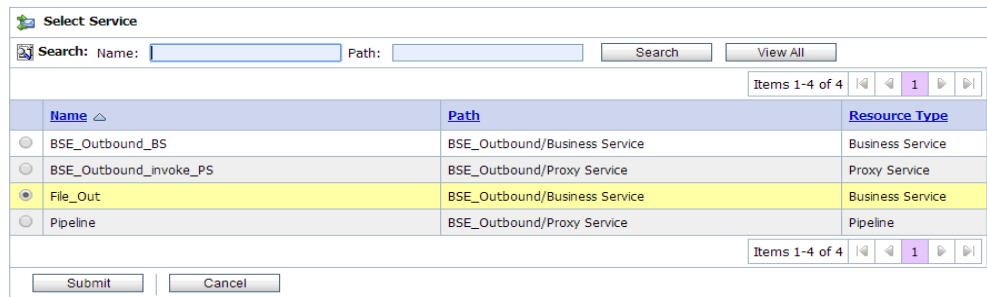
- 図 7-93 に示すように、<サービス>をクリックします。

図 7-93 < サービス > アクション



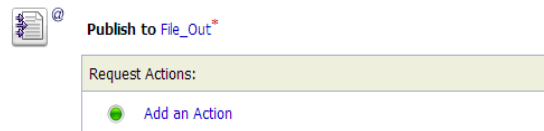
18. 図 7-94 に示すように、「サービスの選択」ダイアログで、ファイル・タイプ・ビジネス・サービスを選択し、「発行」をクリックします。

図 7-94 「サービスの選択」ダイアログ



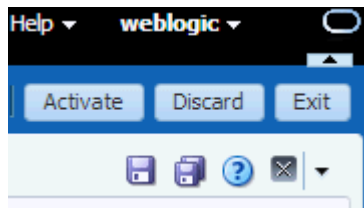
19. 図 7-95 に示すように、「すべて保存」をクリックします。

図 7-95 「すべて保存」ボタン



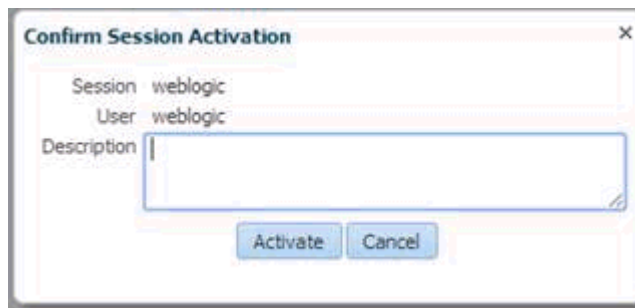
20. 図 7-96 に示すように、Oracle Service Bus セッションの右ペインで「アクティブ化」をクリックします。

図 7-96 「アクティブ化」ボタン



21. 図 7-97 に示すように、「アクティブ化」をクリックして変更を保存します。

図 7-97 セッションのアクティブ化の確認



22. 入力 XML ファイルをコピーして構成済の入力フォルダ (「C:\input」など) に貼付けます。

構成済の出力場所 (「C:\output」など) で出力が受信されたことを確認します。

## 7.5 Oracle Service Bus を使用した JMS プロキシ・サービスの構成 (J2CA 構成)

この項では、J2CA 構成で Oracle Service Bus を使用して JMS プロキシ・サービスを構成する方法について説明します。

1. Oracle Service Bus の起動および必要なプロジェクト・フォルダの作成

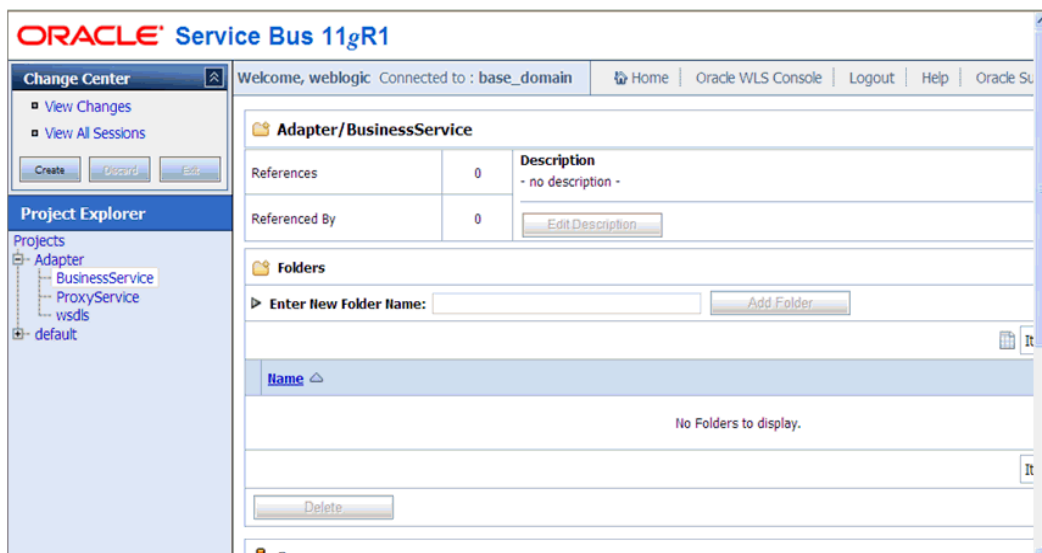
詳細は、7.2.1 項「Oracle Service Bus の起動およびプロジェクト・フォルダの作成」(7-2 ページ) を参照してください。

2. WSDL を生成してアプリケーション・エクスプローラから作成済のプロジェクト・フォルダに公開します。公開済の WSDL を使用して、ビジネス・サービスを作成します。

詳細は、7.2.3 項「アプリケーション・エクスプローラから Oracle Service Bus への WSDL の公開」(7-6 ページ) を参照してください。

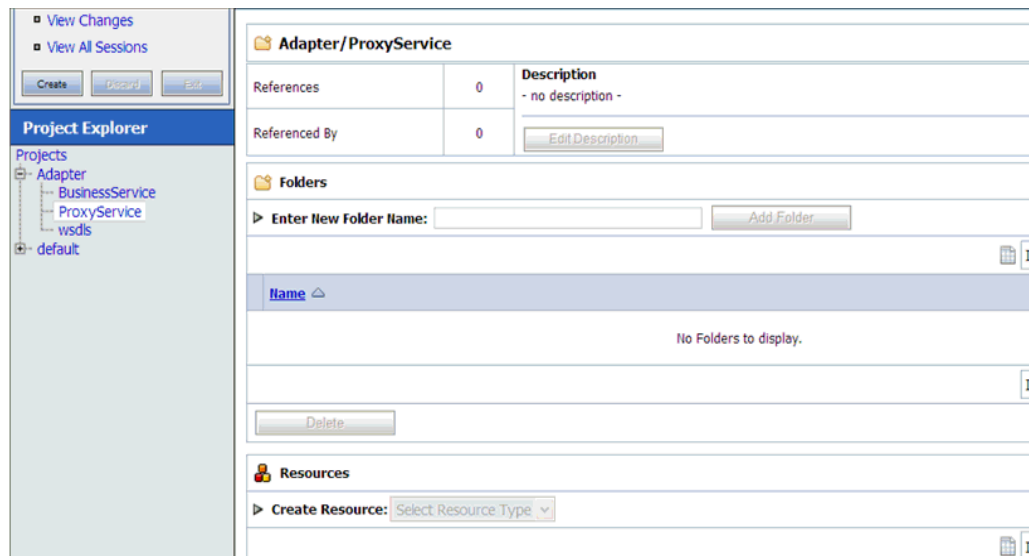
3. 図 7-98 に示すように、Service Bus コンソール・ページが開きます。

図 7-98 Service Bus コンソール



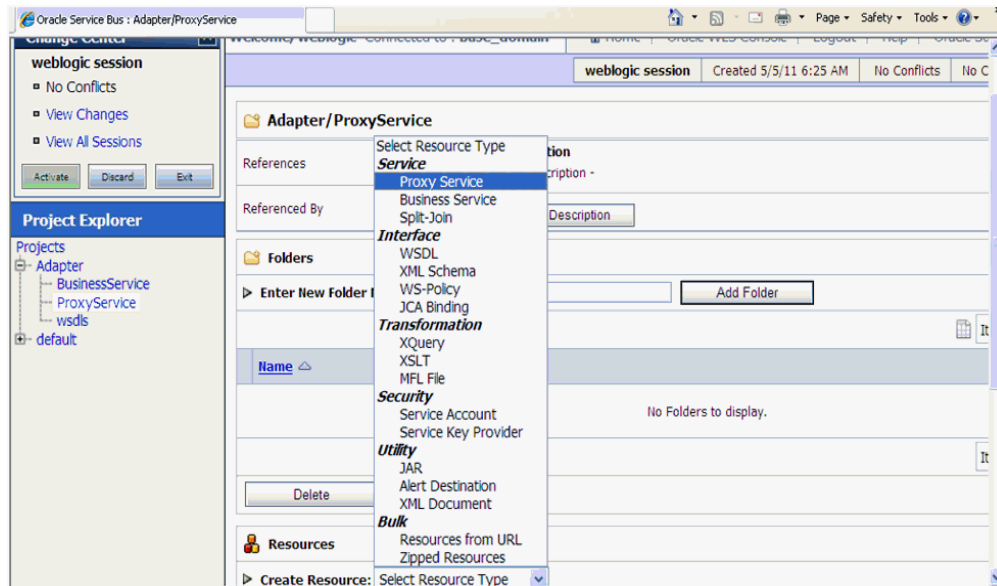
4. 図 7-99 に示すように、左ペインで「ProxyService」プロジェクト・フォルダを選択し、「作成」をクリックします。

図 7-99 プロキシ・サービス



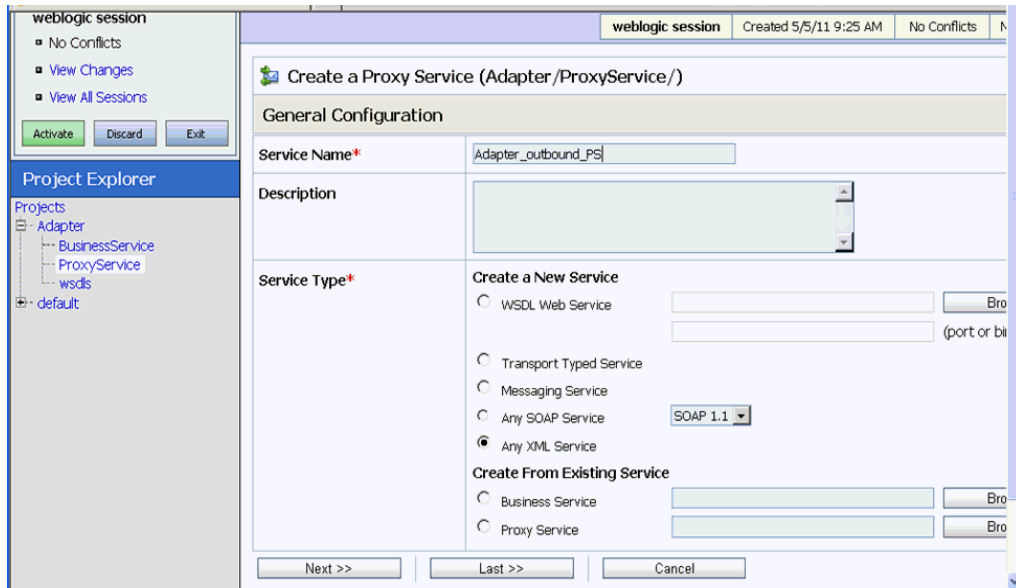
5. 図 7-100 に示すように、右ペインで「リソースの作成」リストから「プロキシ・サービス」を選択します。

図 7-100 「リソースの作成」メニュー



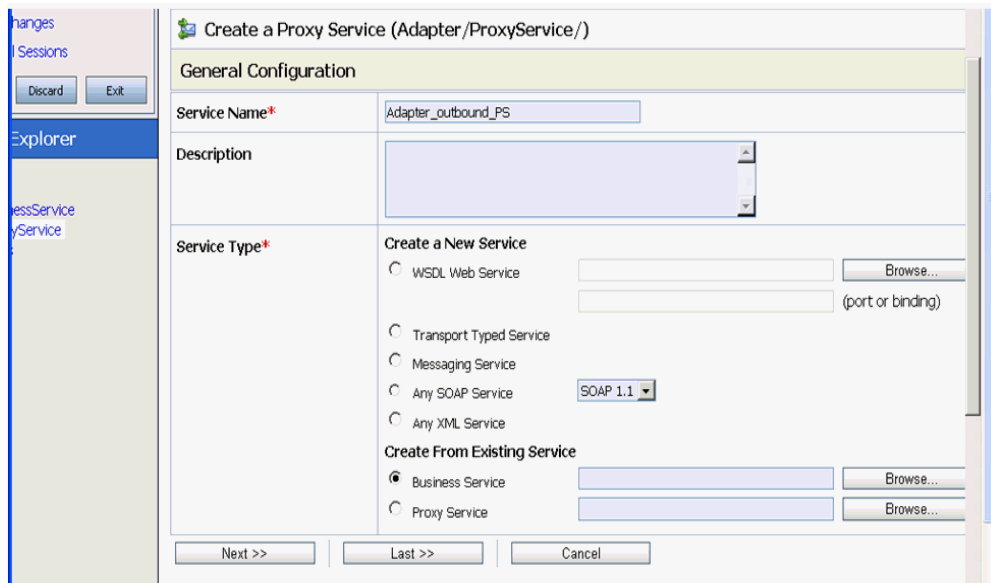
6. 図 7-101 に示すように、「サービス名」フィールドに適切な名前を入力します。

図 7-101 サービス名



7. 図 7-102 に示すように、「サービス・タイプ」セクションで、「既存のサービスから作成」の下にある「ビジネス・サービス」ラジオ・ボタンを選択し、「参照」をクリックします。

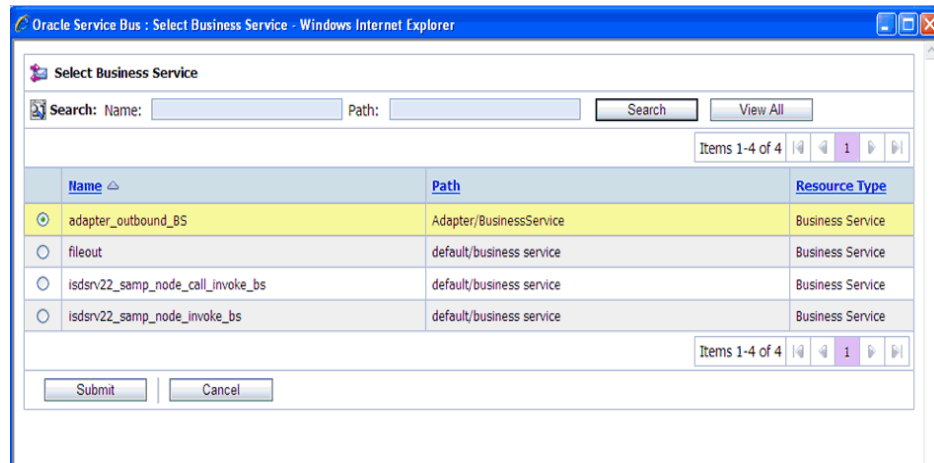
図 7-102 ビジネス・サービス



8. 図 7-103 に示すように、既存のビジネス・サービスを選択し、「発行」をクリックします。

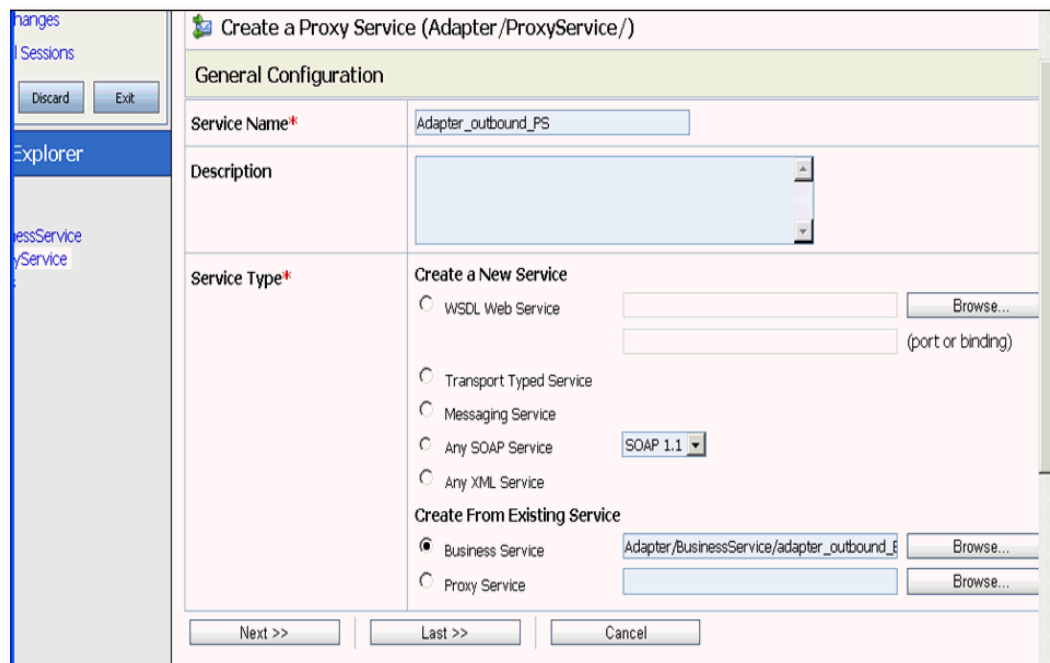


図 7-103 既存のビジネス・サービス



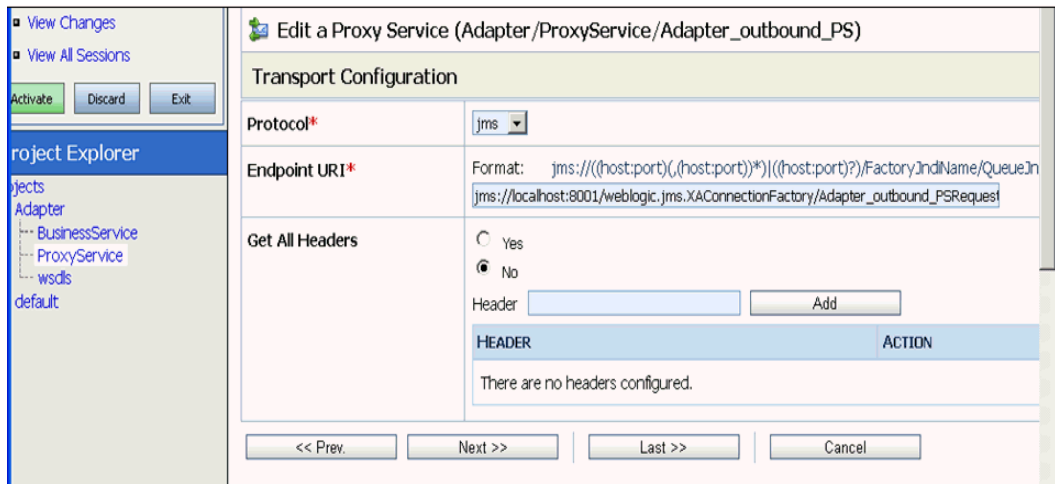
9. 図 7-104 に示すように、「次へ」をクリックします。

図 7-104 次



10. 図 7-105 に示すように、「プロトコル」リストから「jms」を選択し、「次へ」をクリックします。

図 7-105 「プロトコル」 リスト

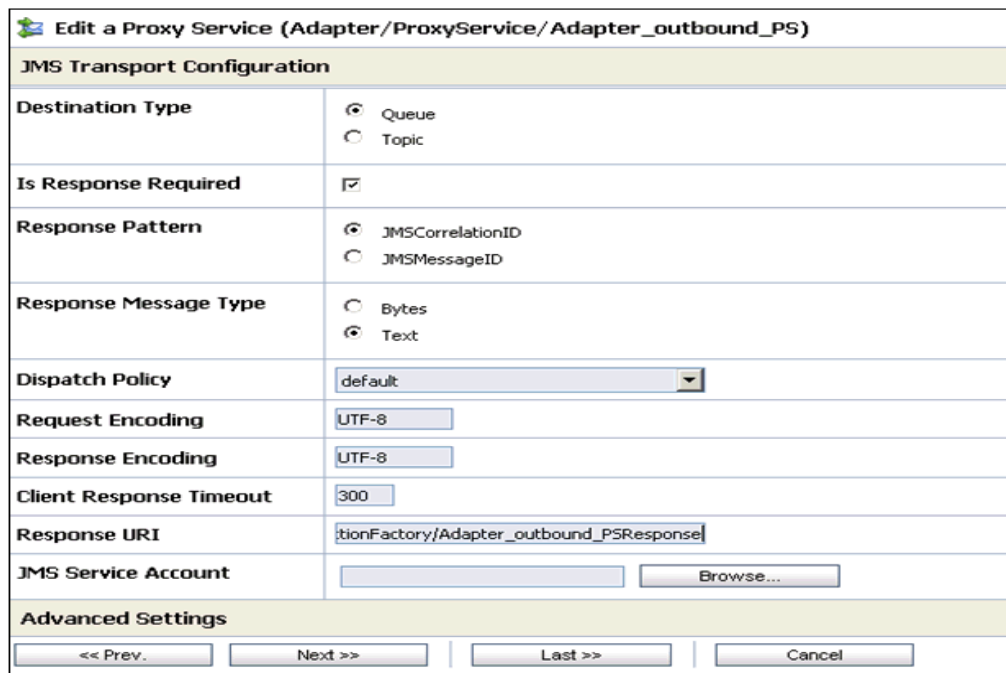


11. 図 7-106 に示すように、次のパラメータを指定します。
  - a. 「宛先タイプ」セクションで、「キュー」を選択します。
  - b. 「レスポンスが必要」チェック・ボックスを選択します。
  - c. 「レスポンス・メッセージ・タイプ」セクションで、「テキスト」を選択します。
  - d. 「レスポンス URI」フィールドに、「トランスポート構成」で使用したエンドポイント URI を入力し、「Request」を「Response」に変更します。

次に例を示します。

jms://localhost:8001/weblogic.jms.XAConnectionFactory/Adapter\_outbound\_PSResponse

図 7-106 プロキシ・サービスの編集



12. 「次へ」をクリックします。

図 7-107 に示すように、「操作選択構成」ペインが表示されます。

図 7-107 「操作選択構成」ペイン

13. 「SOAP 本体タイプ」が選択されていることを確認し、「次へ」をクリックします。

14. 図 7-108 に示すように、「トランザクションが必要」ボックスを有効にし、「次へ」をクリックします。

図 7-108 メッセージ処理

15. 図 7-109 に示すように、「保存」をクリックします。

図 7-109 Save

Use SSL	Disabled
Is Response Required	Enabled
Request Encoding	UTF-8
Response Encoding	UTF-8
Response Pattern	JMSCorrelationID
JNDI Timeout	0
Response URI	jms://localhost:8001/weblogic.jms.XAConnectionFactory/Adapter_outbound_BSResponse
Response Message Type	Text
Client Response Timeout	300
Is XA Required	False
<b>Operation Selection Configuration</b>	
Selection Algorithm	SOAP Body Type
<b>Message Handling Configuration</b>	
Transaction Required	Enabled
Same Transaction For Response	Disabled
Content Streaming	Disabled
<input data-bbox="381 762 521 787" type="button" value=" &lt;&lt; Prev. "/> <input data-bbox="570 762 709 787" type="button" value=" Save "/> <input data-bbox="758 762 898 787" type="button" value=" Cancel "/>	

図 7-110 に示すように、作成したプロキシ・サービスが保存されます。

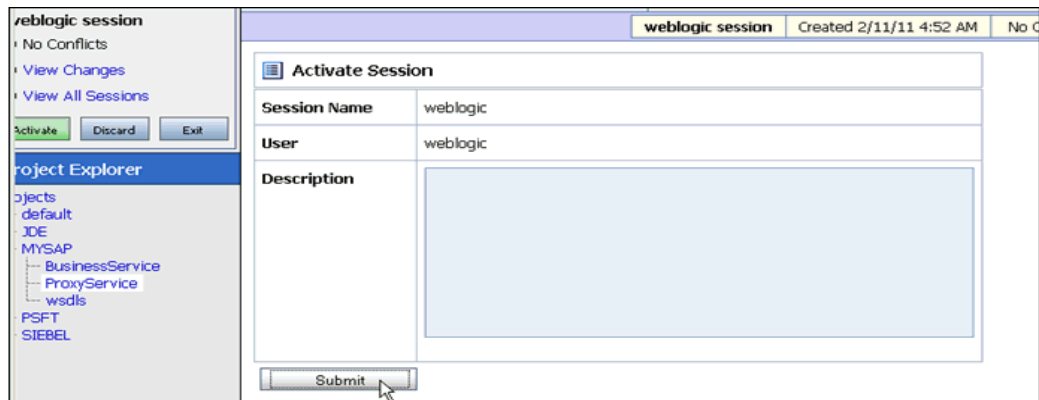
図 7-110 プロキシ・サービス

The screenshot shows the Oracle Service Bus console interface. On the left, the 'Project Explorer' pane displays a tree structure with 'Adapter' selected. The main workspace is divided into 'Folders' and 'Resources' sections. The 'Resources' section contains a table with the following data:

Name	Resource Type	Actions
Adapter_outbound_PS	Proxy Service	[Refresh] [Refresh] [Refresh]

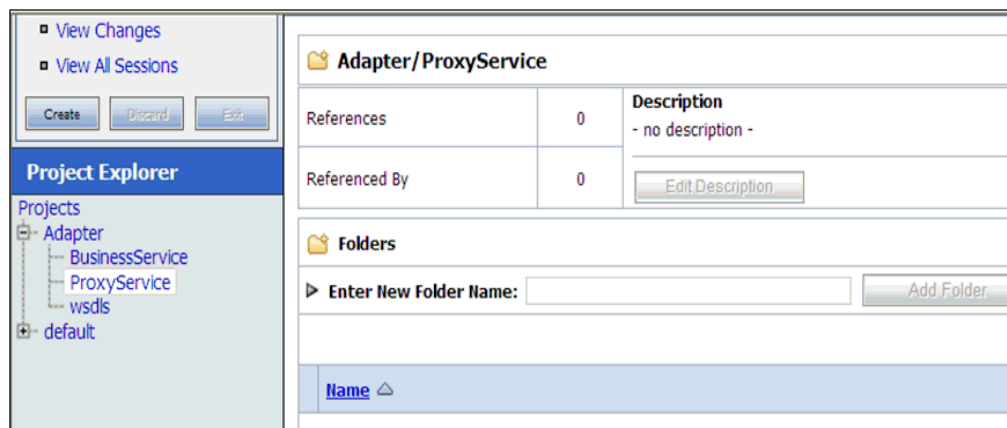
16. 図 7-111 に示すように、左ペインで「アクティブ化」をクリックし、「発行」をクリックします。

図 7-111 セッションのアクティブ化



17. 図 7-112 に示すように、左ペインで、「プロジェクト」フォルダの下にある「ProxyService」をクリックします。

図 7-112 アダプタ /ProxyService



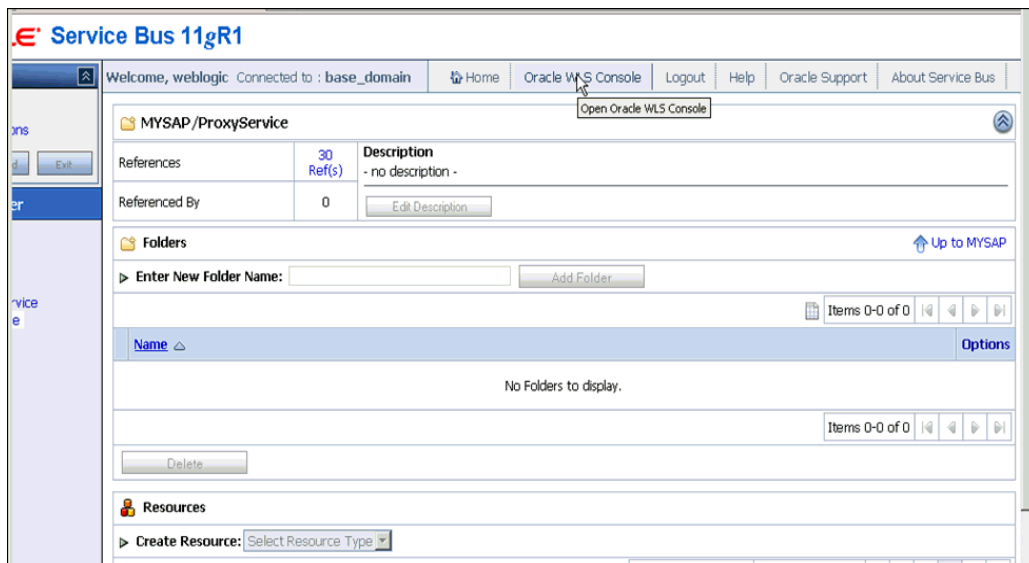
18. 図 7-113 に示すように、作成されたプロキシ・サービスに対する「テスト・コンソールの起動」アイコンをクリックします。

図 7-113 「テスト・コンソールの起動」アイコン



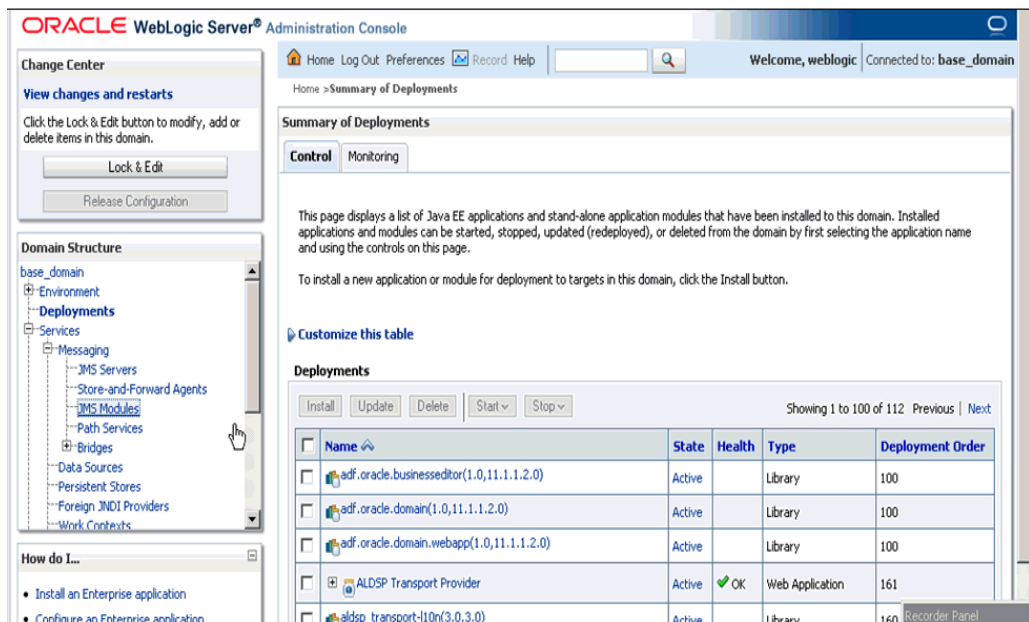
19. 「ペイロード」の入力値を指定し、「直接呼出し」ボックスを選択解除して、「実行」をクリックします。
20. レスポンス・ドキュメントをレビューし、「閉じる」をクリックします。
21. 図 7-114 に示すように、「Oracle WLS コンソール」タブをクリックします。

図 7-114 ProxyService



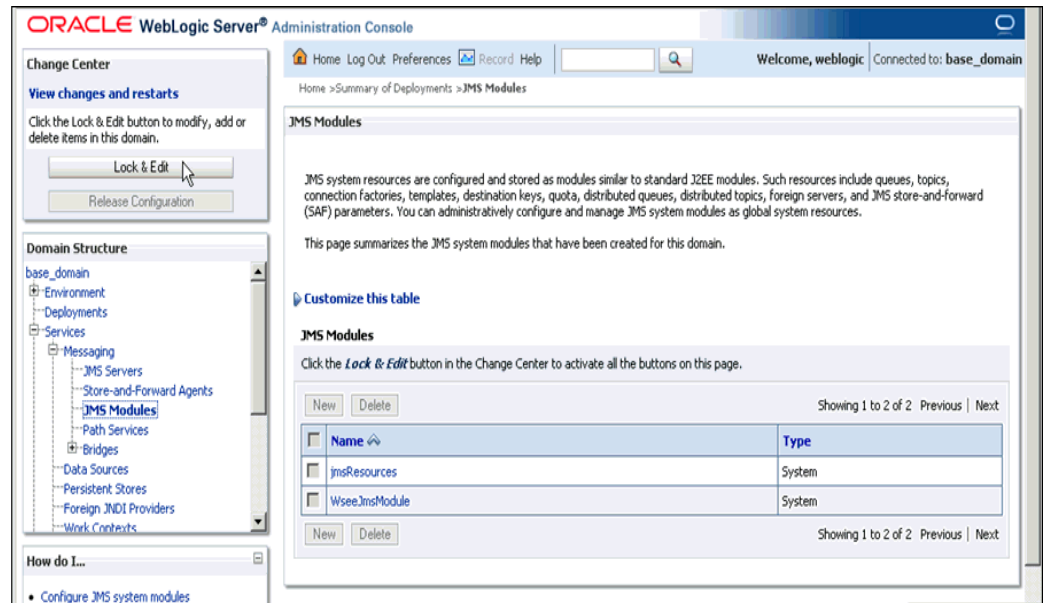
22. 図 7-115 に示すように、Oracle WLS コンソールで、「サービス」を展開し、「メッセージング」を展開して、「JMS モジュール」をクリックします。

図 7-115 Oracle WLS コンソール



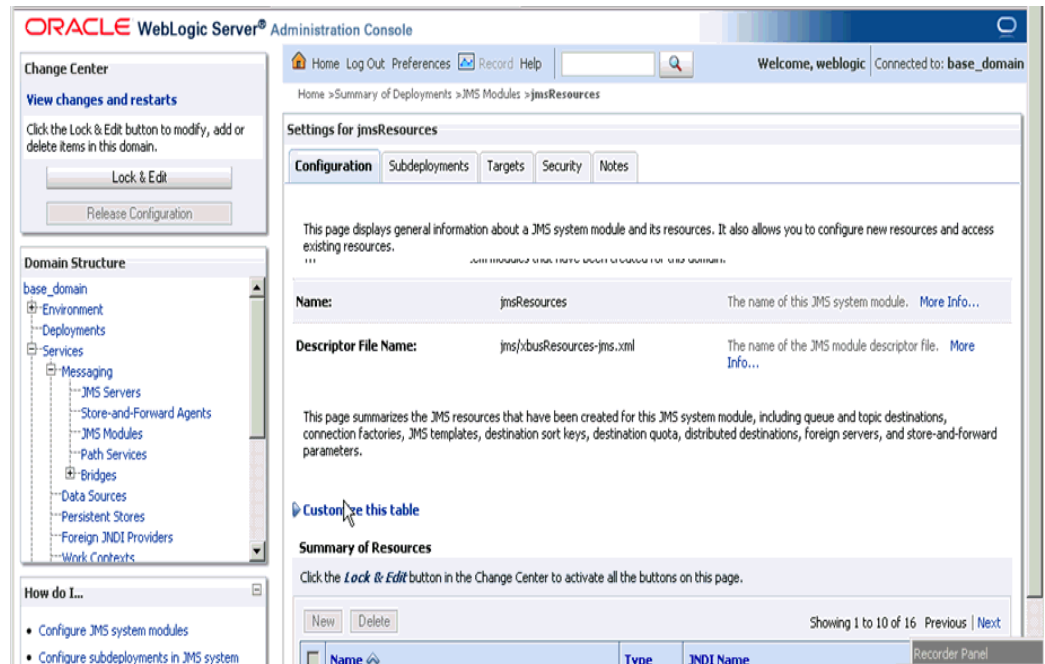
23. 図 7-116 に示すように、「jmsResources」をクリックします。

図 7-116 JMS モジュール



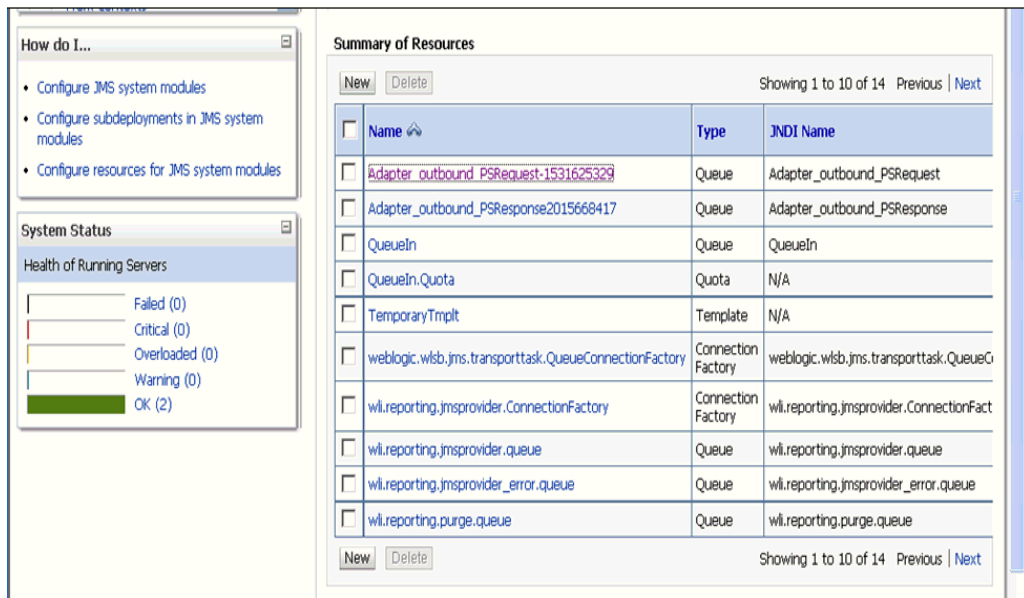
24. 図 7-117 に示すように、ロック & 編集をクリックします。

図 7-117 構成設定



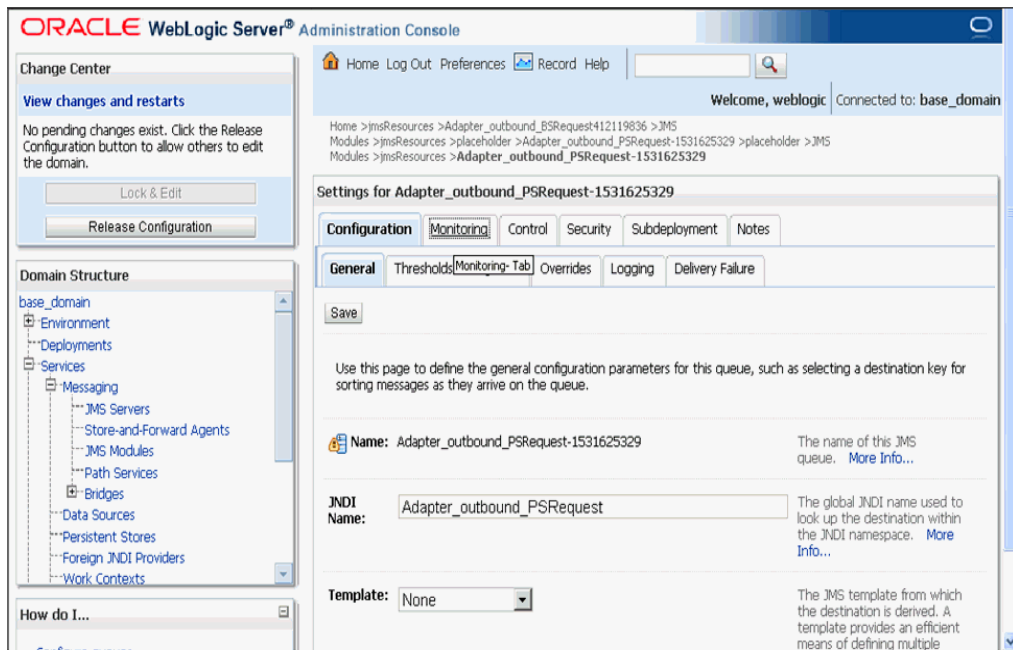
25. 図 7-118 に示すように、適切なリクエスト・リンク (「Adapter\_outbound\_PSRequest」など) をクリックします。

図 7-118 Adapter\_outbound\_PSRequest



26. 図 7-119 に示すように、「モニタリング」タブをクリックします。

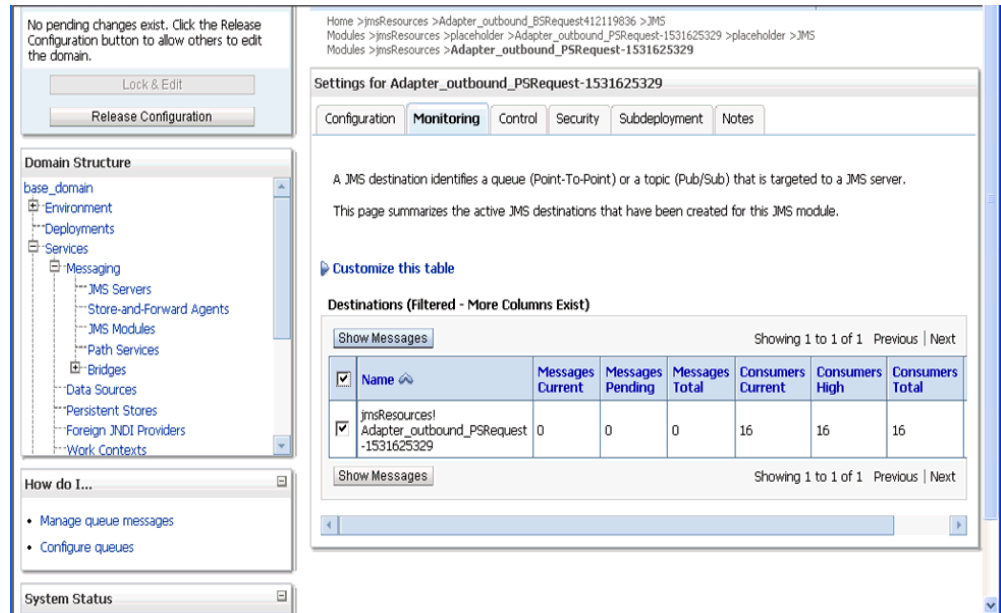
図 7-119 「モニタリング」タブ



27. 図 7-120 に示すように、チェック・ボックスを選択し、「メッセージの表示」をクリックします。

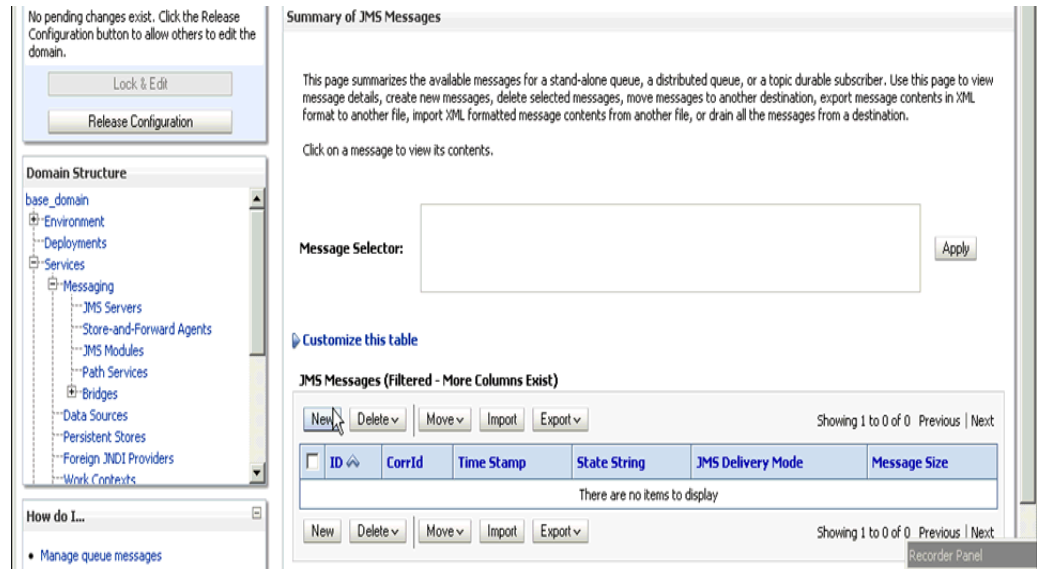


図 7-120 アダプタ設定



28. 図 7-121 に示すように、「新規」をクリックします。

図 7-121 JMS メッセージ



29. 「本文」フィールドに入力ペイロードを入力し、「OK」をクリックします。

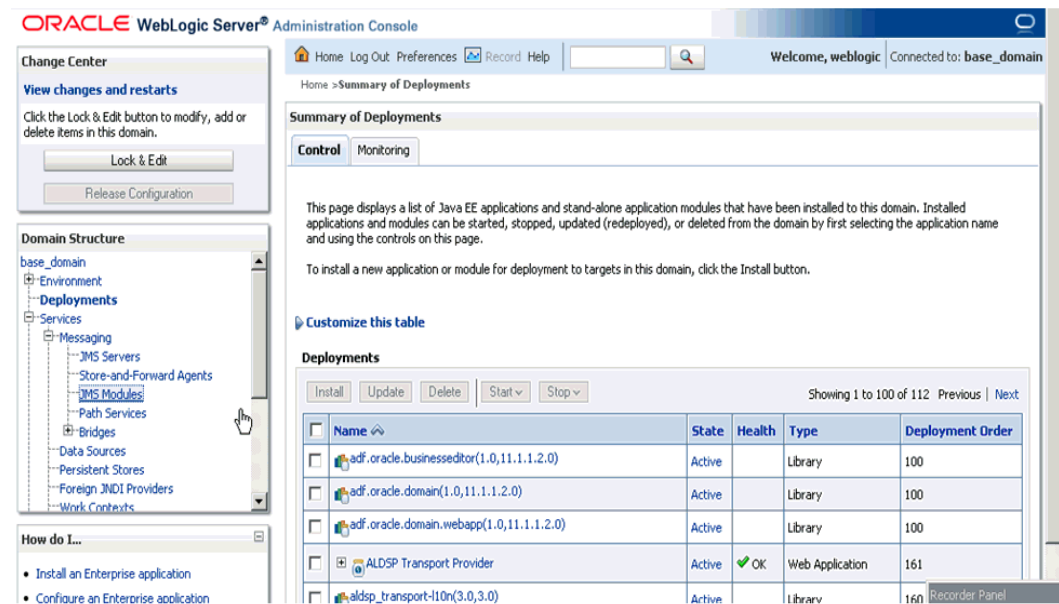
図 7-122 に示すように、成功メッセージが表示されます。

図 7-122 JMS の成功メッセージ



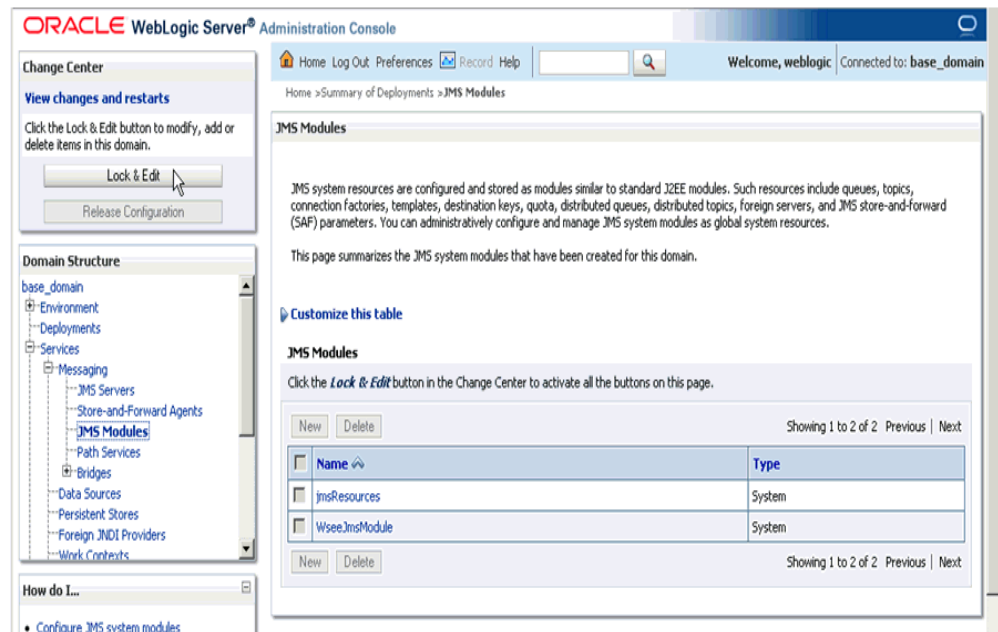
30. 図 7-123 に示すように、Oracle WLS コンソールで、「サービス」を展開し、「メッセージング」を展開して、「JMS モジュール」をクリックします。

図 7-123 JMS モジュール



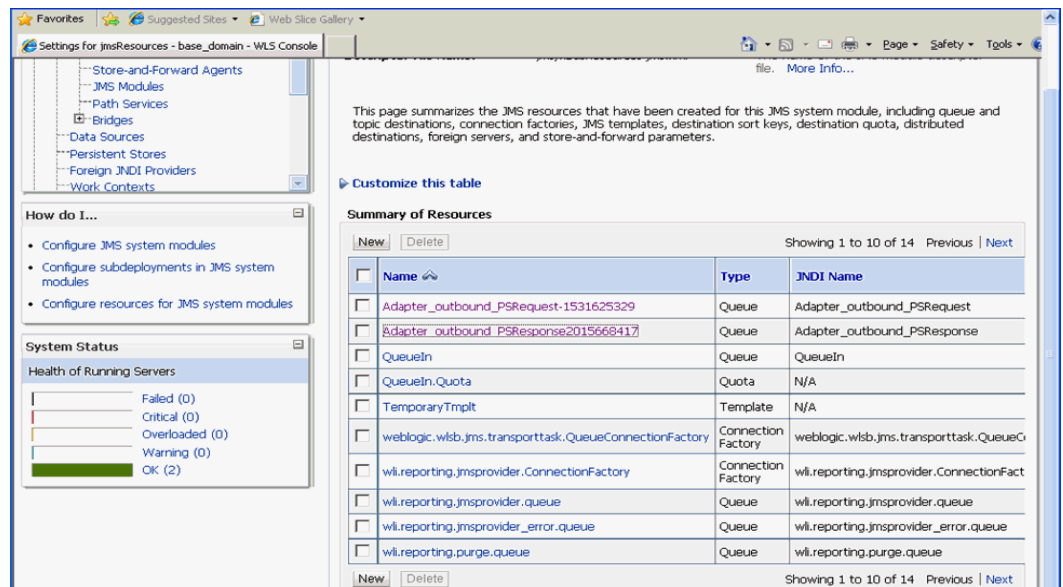
31. 図 7-124 に示すように、「jmsResources」をクリックします。

図 7-124 jmsResources



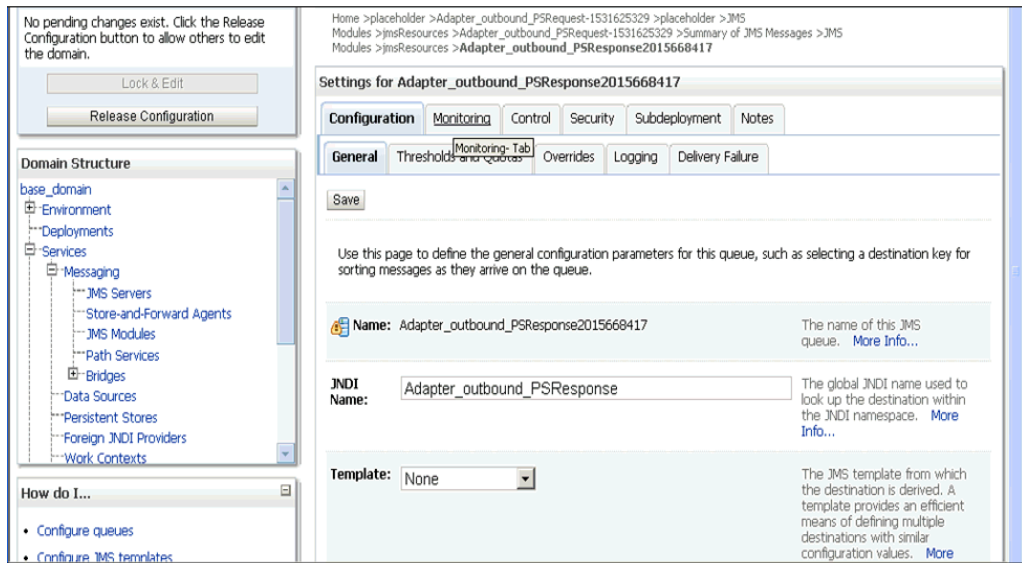
32. 図 7-125 に示すように、適切なレスポンス・リンク (「Adapter\_outbound\_PSResponse」など) をクリックします。

図 7-125 リソースのサマリー



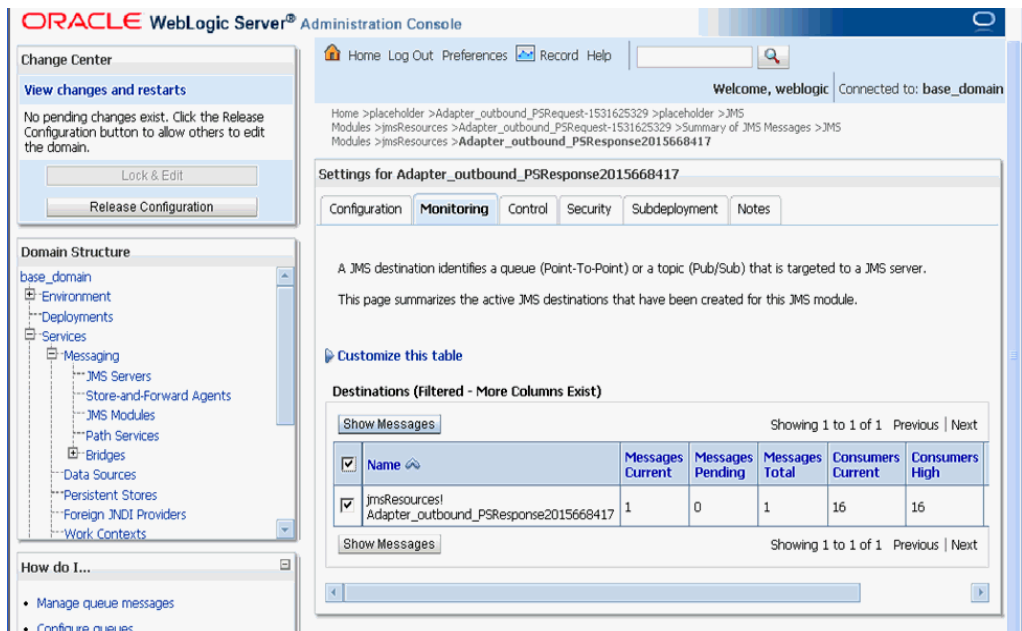
33. 図 7-126 に示すように、「モニタリング」タブをクリックします。

図 7-126 「モニタリング」タブ



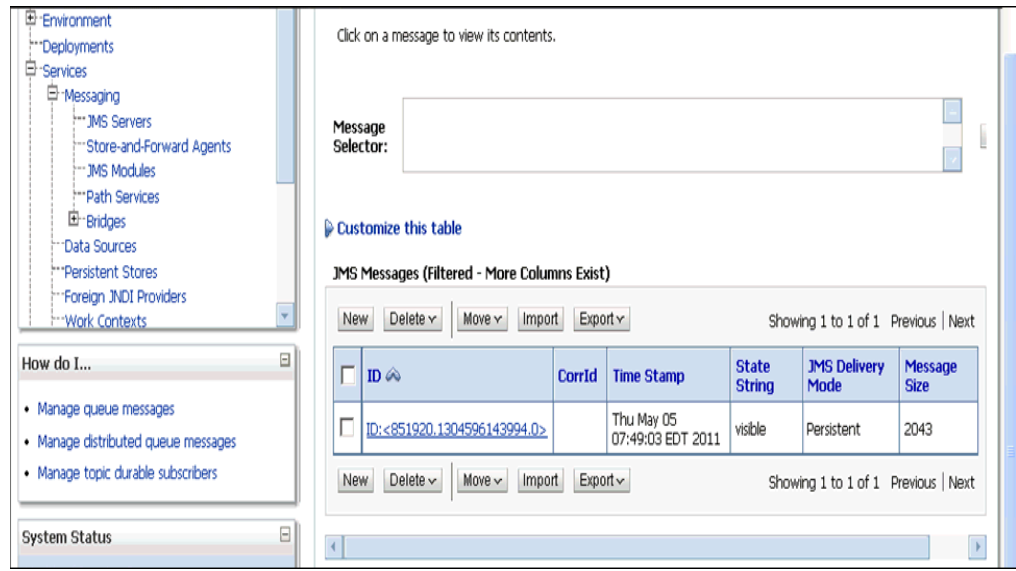
34. 図 7-127 に示すように、チェック・ボックスを選択し、「メッセージの表示」をクリックします。

図 7-127 宛先のメッセージ



35. 図 7-128 に示すように、「ID」リンクをクリックします。

図 7-128 JMS メッセージ



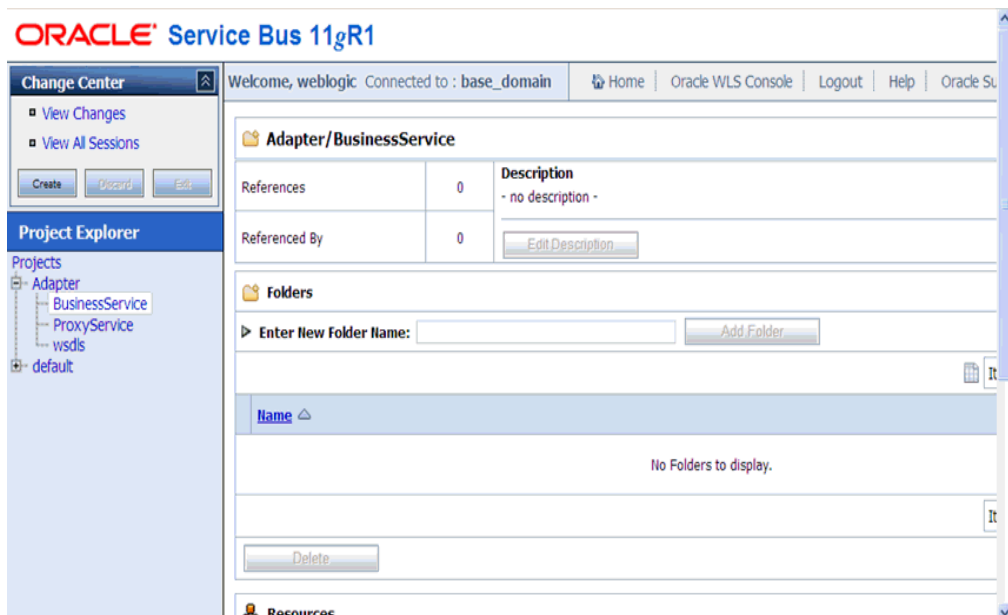
レスポンス・ドキュメントが「テキスト」フィールドの下に表示されます。

## 7.6 Oracle Service Bus を使用した HTTP プロキシ・サービスの構成 (J2CA 構成)

この項では、J2CA 構成で Oracle Service Bus を使用して HTTP プロキシ・サービスを構成する方法について説明します。

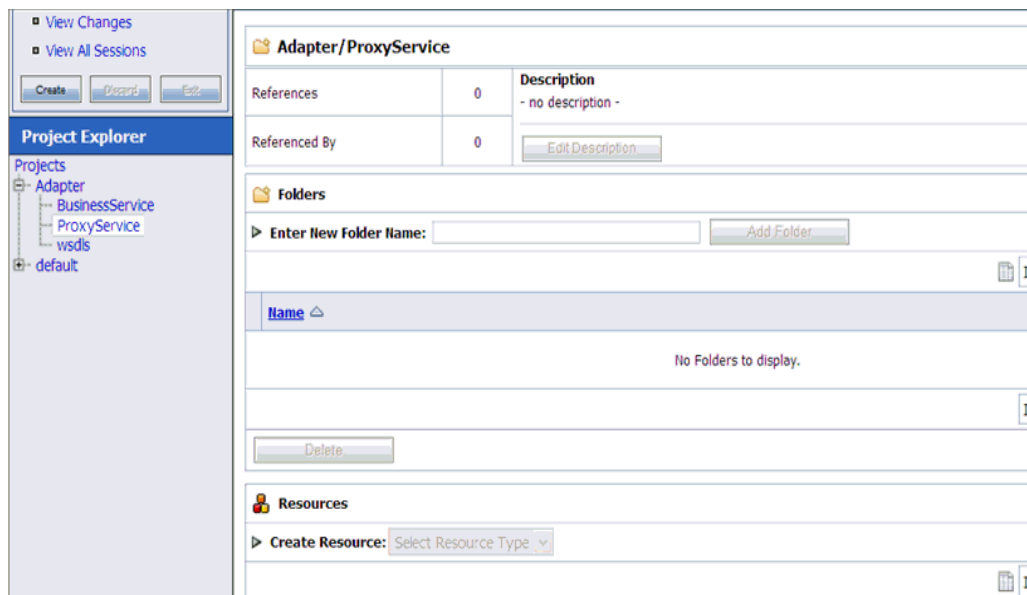
1. Oracle Service Bus を起動し、必要なプロジェクト・フォルダを作成します。  
詳細は、[7.2.1 項「Oracle Service Bus の起動およびプロジェクト・フォルダの作成」](#) (7-2 ページ) を参照してください。
2. WSDL を生成してアプリケーション・エクスプローラから作成済のプロジェクト・フォルダに公開し、公開済の WSDL を使用してビジネス・サービスを作成します。  
詳細は、[7.2.3 項「アプリケーション・エクスプローラから Oracle Service Bus への WSDL の公開」](#) (7-6 ページ) を参照してください。
3. [図 7-129](#) に示すように、Service Bus コンソール・ページが開きます。

図 7-129 Service Bus コンソール・ページ



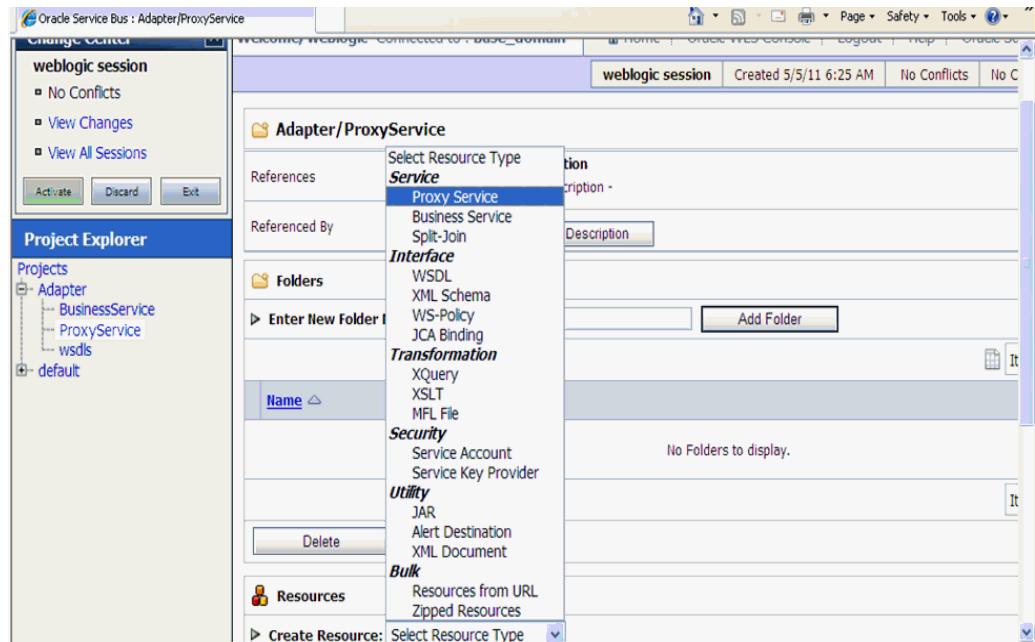
4. 図 7-130 に示すように、「プロジェクト・エクスプローラ」で「ProxyService」プロジェクト・フォルダを選択し、「作成」をクリックします。

図 7-130 プロジェクト・エクスプローラ



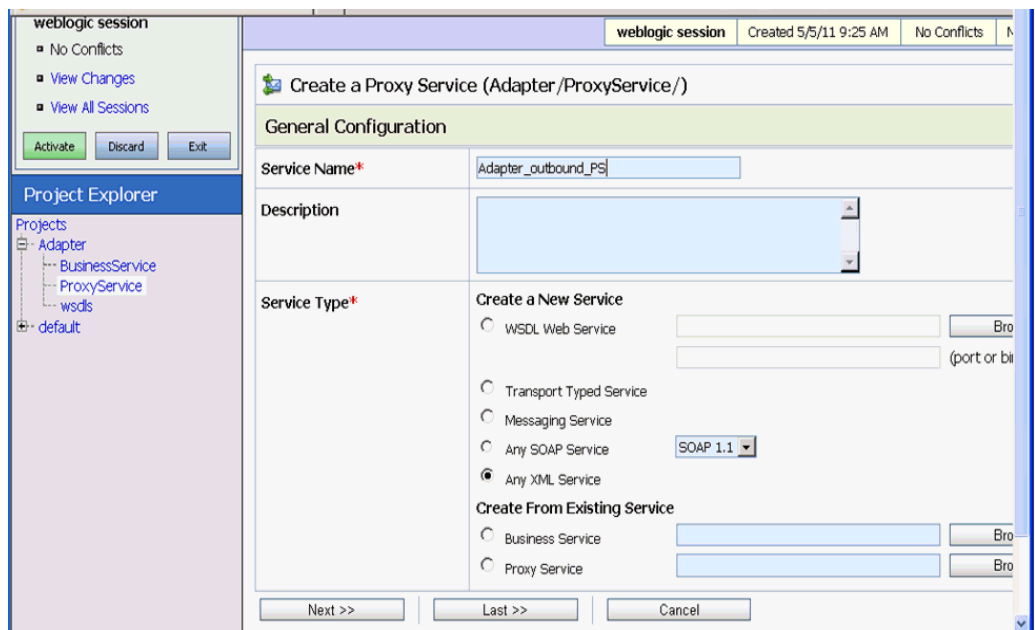
5. 図 7-131 に示すように、「リソースの作成」リストで「プロキシ・サービス」を選択します。

図 7-131 プロキシ・サービス



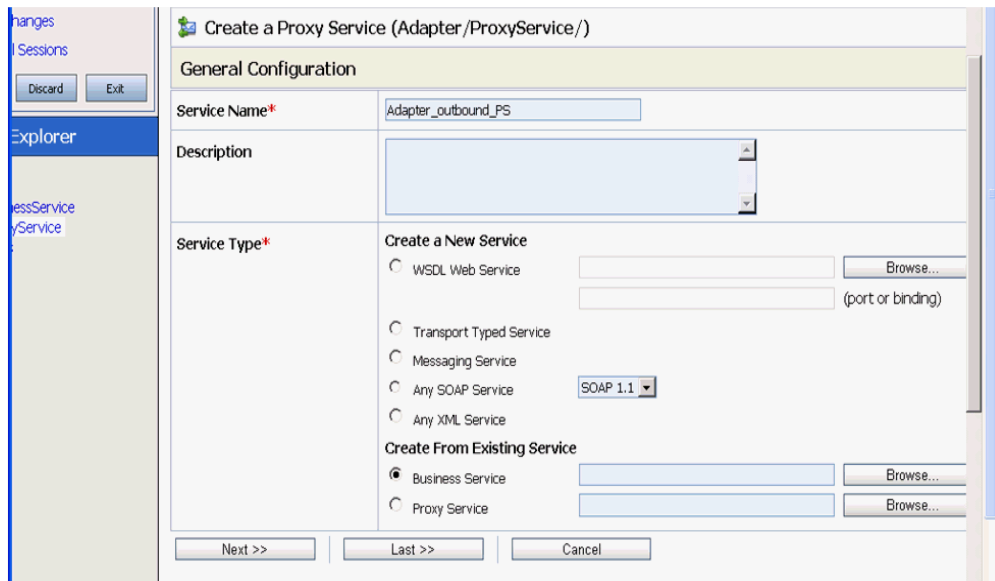
6. 図 7-132 に示すように、「サービス名」フィールドに適切な名前を入力します。

図 7-132 サービス名



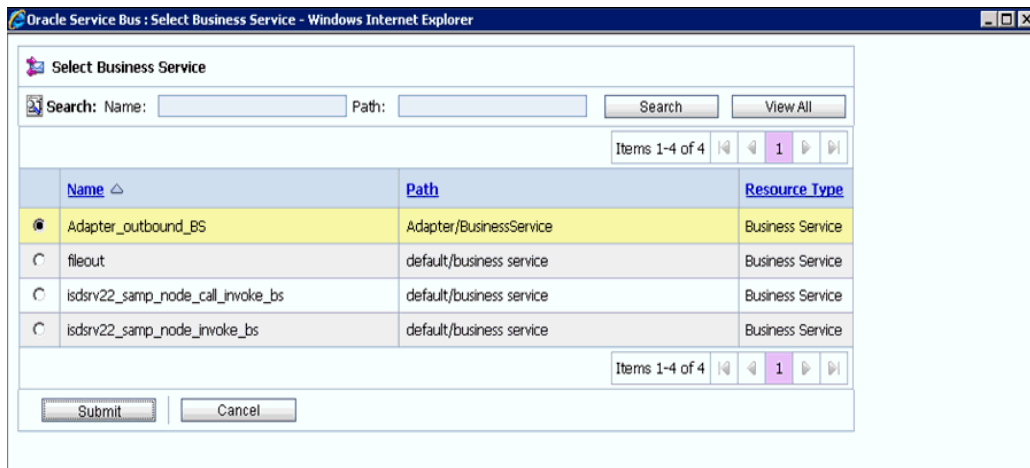
7. 図 7-133 に示すように、「サービス・タイプ」セクションで、「既存のサービスから作成」の下にある「ビジネス・サービス」ラジオ・ボタンを選択し、「参照」をクリックします。

図 7-133 一般的な構成



8. 図 7-134 に示すように、既存のビジネス・サービスを選択し、「発行」をクリックします。

図 7-134 ビジネス・サービス



9. 図 7-135 に示すように、「次へ」をクリックします。



図 7-135 一般的な構成

The screenshot shows the 'Create a Proxy Service (Adapter/ProxyService/)' dialog box. The 'General Configuration' section is active. The 'Service Name' field contains 'Adapter\_outbound\_PS'. The 'Description' field is empty. Under 'Service Type', the 'Create From Existing Service' section is selected, with 'Business Service' chosen. The 'Adapter/BusinessService/Adapter\_outbc' is entered in the adjacent field. At the bottom, the 'Next >>' button is highlighted.

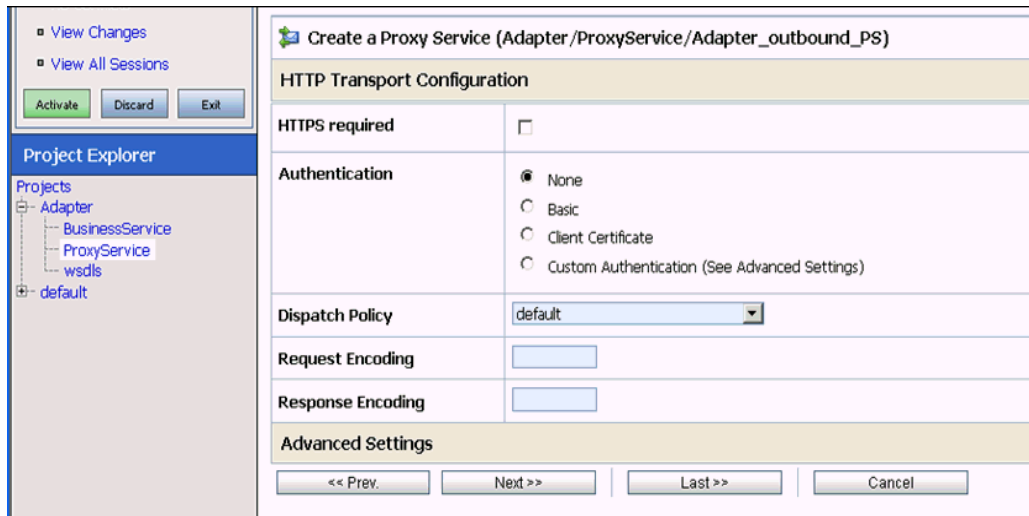
10. 図 7-136 に示すように、「プロトコル」リストで「http」を選択し、「次へ」をクリックします。

図 7-136 トランスポート構成

The screenshot shows the 'Create a Proxy Service (Adapter/ProxyService/Adapter\_outbound\_PS)' dialog box, now on the 'Transport Configuration' tab. The 'Protocol' dropdown is set to 'http'. The 'Endpoint URI' field contains '/Adapter/ProxyService/Adapter\_outbound\_PS'. Under 'Get All Headers', 'No' is selected. At the bottom, the 'Next >>' button is highlighted.

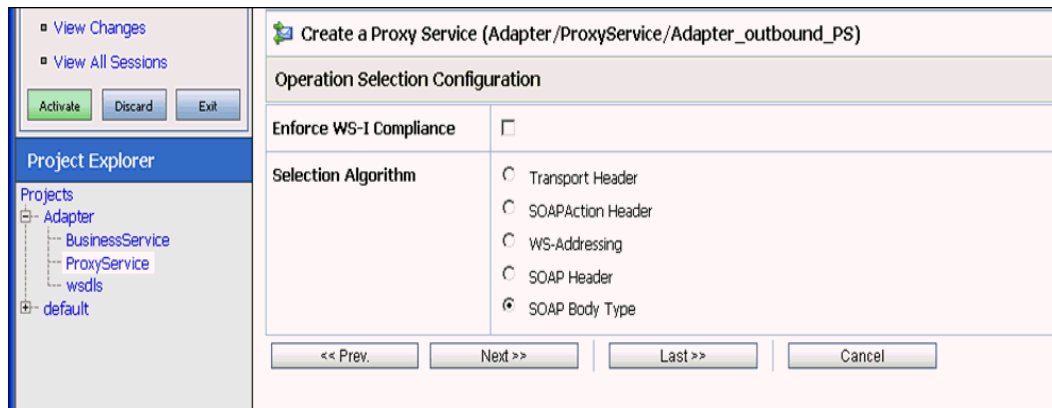
11. 図 7-137 に示すように、「次へ」をクリックします。

図 7-137 HTTP トラnsポート構成



12. 図 7-138 に示すように、「次へ」をクリックします。

図 7-138 操作選択構成



13. 図 7-139 に示すように、「トランザクションが必要」チェック・ボックスを有効にし、「次へ」をクリックします。

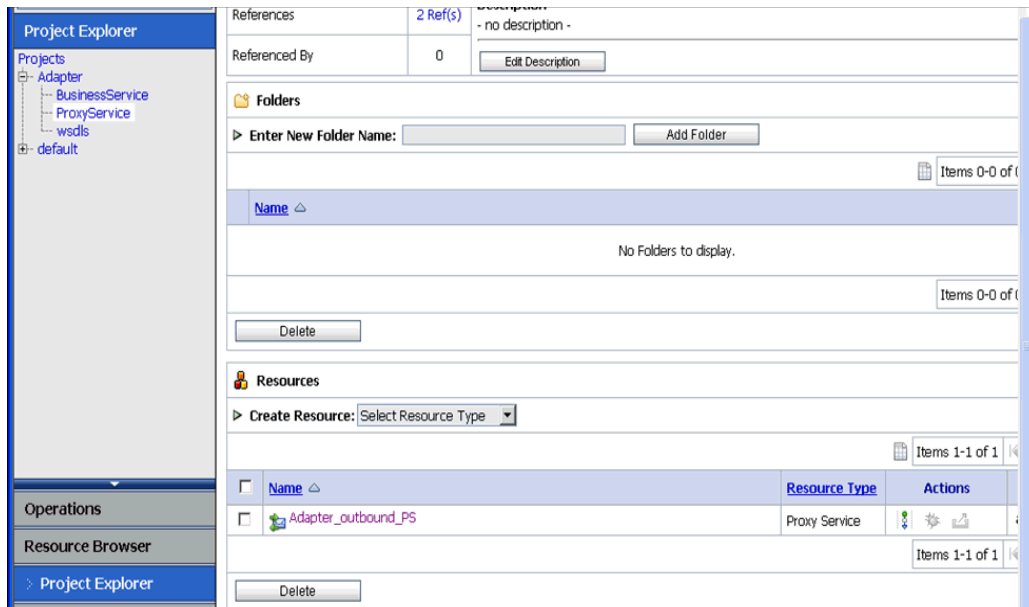
図 7-139 メッセージ処理

14. 図 7-140 に示すように、「保存」をクリックします。

図 7-140 Save

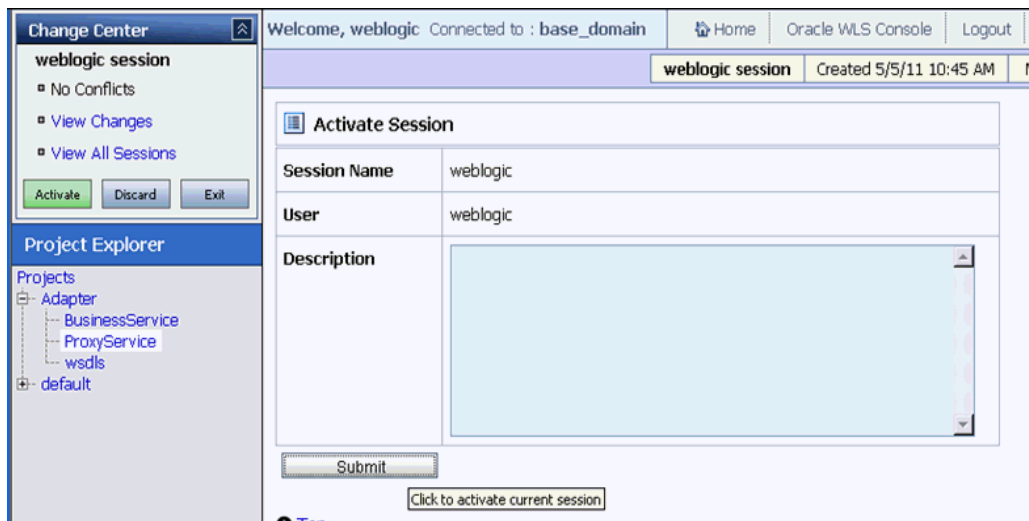
図 7-141 に示すように、作成したプロキシ・サービスが保存されます。

図 7-141 プロキシ・サービス



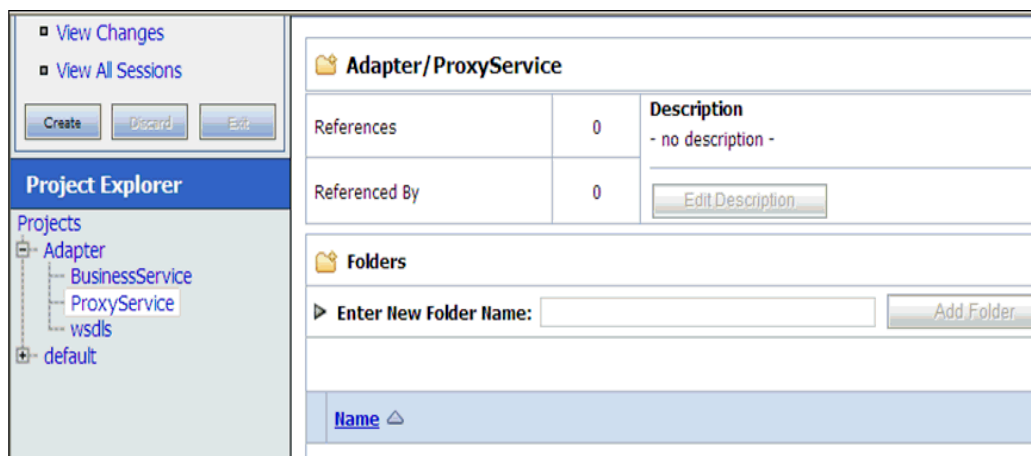
15. 図 7-142 に示すように、左ペインで「アクティブ化」をクリックし、右ペインで「発行」をクリックします。

図 7-142 セッションのアクティブ化



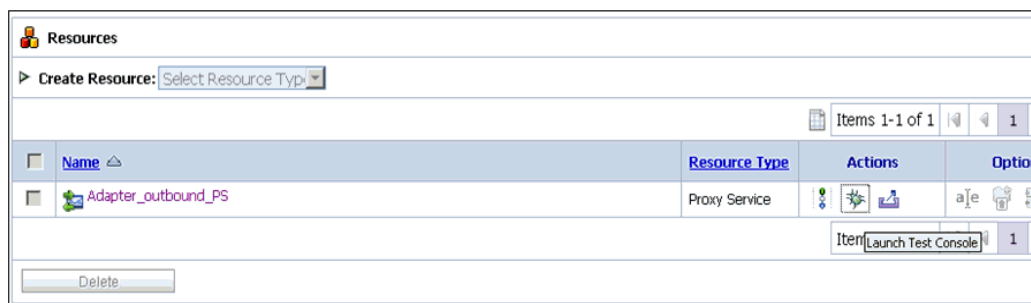
16. 図 7-143 に示すように、左ペインで「プロジェクト」フォルダの「ProxyService」をクリックします。

図 7-143 ProxyService



17. 図 7-144 に示すように、作成されたプロキシ・サービスに対する「テスト・コンソールの起動」アイコンをクリックします。

図 7-144 テスト・コンソールの起動



18. 「直接呼出し」チェック・ボックスを選択解除し、「ペイロード」の入力値を指定して、「実行」をクリックします。
19. 「レスポンス・ドキュメント」をレビューします。



---

# JDeveloperを使用したOracle Service Bus用の アウトバウンドおよびインバウンド・プロセス の構成

Oracle Application Adapter for PeopleSoft は、Oracle JDeveloper とシームレスに統合されており、Web サービスの簡易な統合を可能にします。

この章には次の項があります。

- 8.1 項「JDeveloper を使用した OSB アウトバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成)」
- 8.2 項「JDeveloper を使用した OSB インバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成)」
- 8.3 項「JDeveloper を使用した OSB アウトバウンド・プロセスの構成 (BSE 構成)」
- 8.4 項「JDeveloper を使用した JMS インバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成)」
- 8.5 項「JDeveloper を使用した JMS アウトバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成)」
- 8.6 項「JDeveloper を使用した HTTP アウトバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成)」

## 8.1 JDeveloper を使用した OSB アウトバウンド・プロセスの 構成 (J2CA 構成)

この項では、J2CA 構成で Oracle JDeveloper を使用して PeopleSoft システム用に OSB アウトバウンド・プロセスを構成する方法について説明します。

このアウトバウンド・ユース・ケース・シナリオ用のサンプル・プロジェクトが、次に示す Application Adapter のインストール・フォルダに用意されています。

```
<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\OSB_
JDeveloper\J2CA\PeopleSoft_Sample_J2CA_OSB_Outbound_Project
```

この項では、次のトピックについて説明します。

- 8.1.1 項「OSB 用のサービス・バス・アプリケーションの作成」
- 8.1.2 項「OSB アウトバウンド・プロセスの定義」
- 8.1.3 項「OSB アウトバウンド・プロセスのデプロイ」

### 前提条件

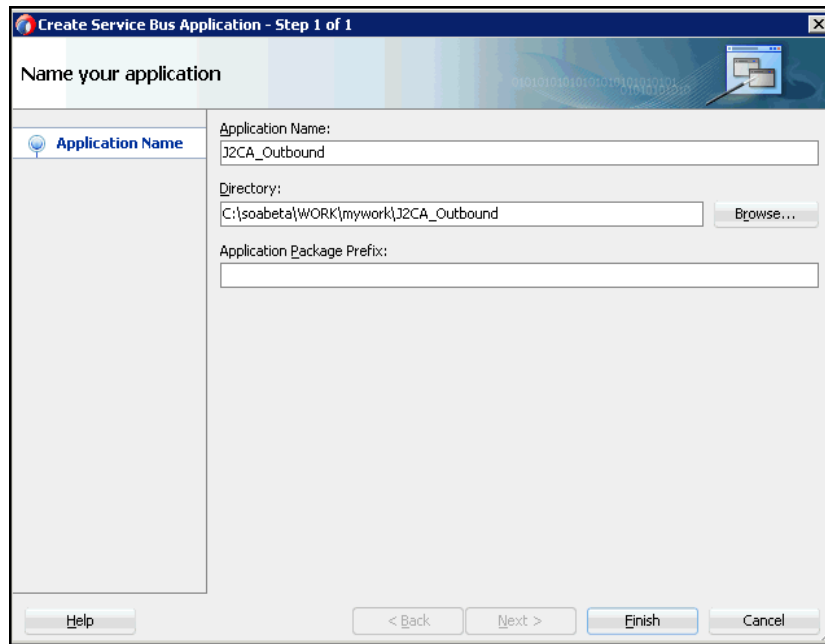
OSB アウトバウンド・プロセスを設計する前に、アプリケーション・エクスプローラを使用して各 WSDL ファイルを生成する必要があります。詳細は、[4.4.1 項「リクエスト/レスポンス型のサービス用の WSDL の生成」](#) (4-8 ページ) を参照してください。

### 8.1.1 OSB 用のサービス・バス・アプリケーションの作成

OSB 用のサービス・バス・アプリケーションを作成するには、JDeveloper で次のステップを実行します。

1. 新規の OSB アプリケーションを作成します。
2. 図 8-1 に示すように、OSB アプリケーションの名前を入力し (「J2CA\_Outbound」など)、「終了」をクリックします。

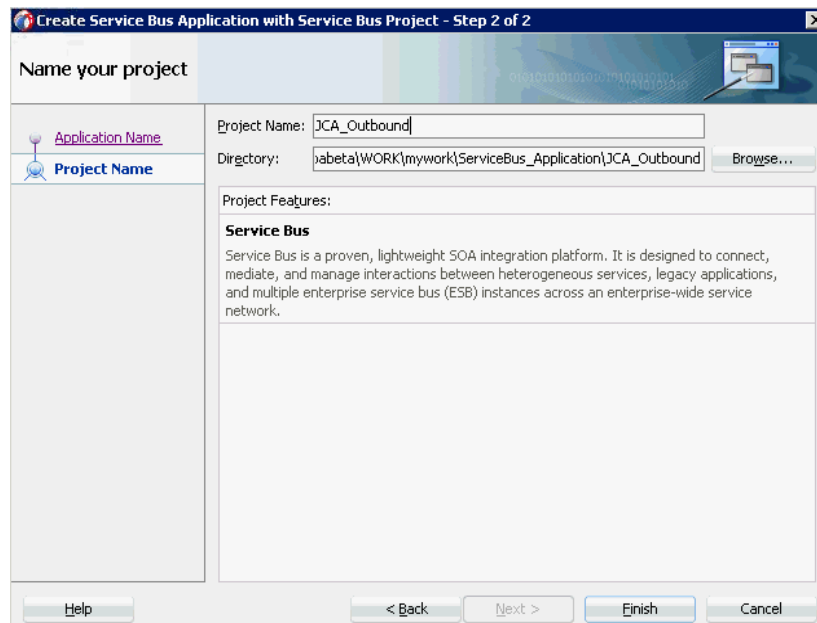
図 8-1 「アプリケーションの名前付け」 ペイン



3. 図 8-2 に示すように、プロジェクト名を入力し (「JCA\_Outbound」など)、「終了」をクリックします。



図 8-2 「プロジェクトの名前付け」 ペイン



## 8.1.2 OSB アウトバウンド・プロセスの定義

この項では、OSB アウトバウンド・プロセスの定義方法について説明します。次のトピックが含まれています。

- 8.1.2.1 項「サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成」
- 8.1.2.2 項「ファイル・トランスポート・タイプ・ビジネス・サービスの構成」
- 8.1.2.3 項「プロキシ・サービスとパイプラインの作成」
- 8.1.2.4 項「ルーティング・ルールの構成」

### 8.1.2.1 サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成

ビジネス・サービスとともにサード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントを作成するには、次のステップを実行します。

1. 図 8-3 に示すように、Service Bus コンポーネント・ペインから「サード・パーティ・アダプタ」コンポーネントを「外部サービス」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

図 8-3 「サード・パーティ・アダプタ」コンポーネント

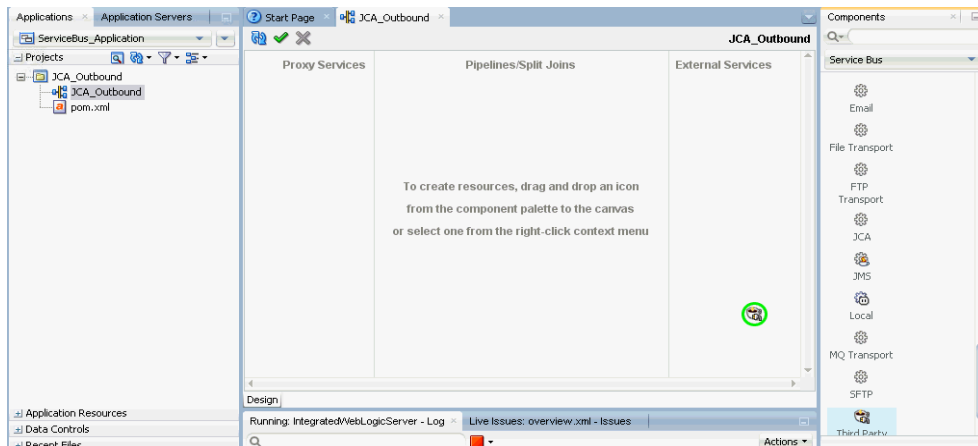
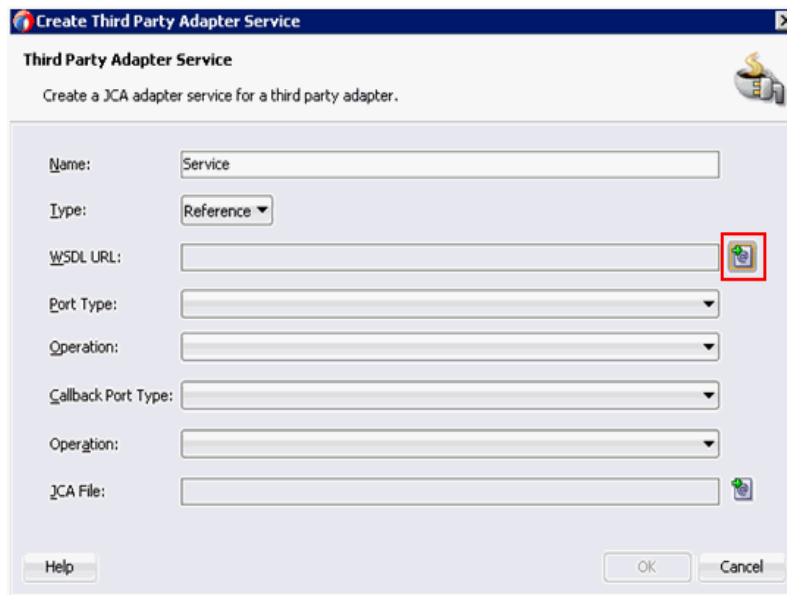


図 8-4 に示すように、サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成ダイアログが表示されます。

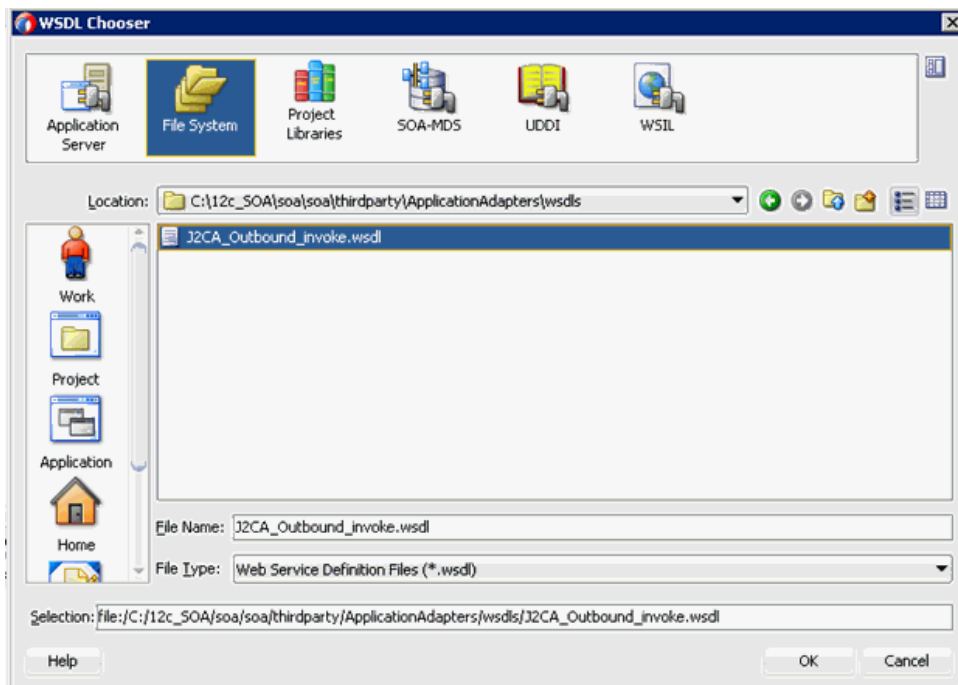
図 8-4 サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成ペイン



2. サード・パーティ・アダプタ・サービスの適切な名前を入力します。この名前はビジネス・サービス名として使用されます。
3. 「タイプ」ドロップダウン・リストで「参照」が選択されていることを確認します (デフォルト)。
4. 「WSDL URL」フィールドの右にある既存の WSDL を検索アイコンをクリックします。

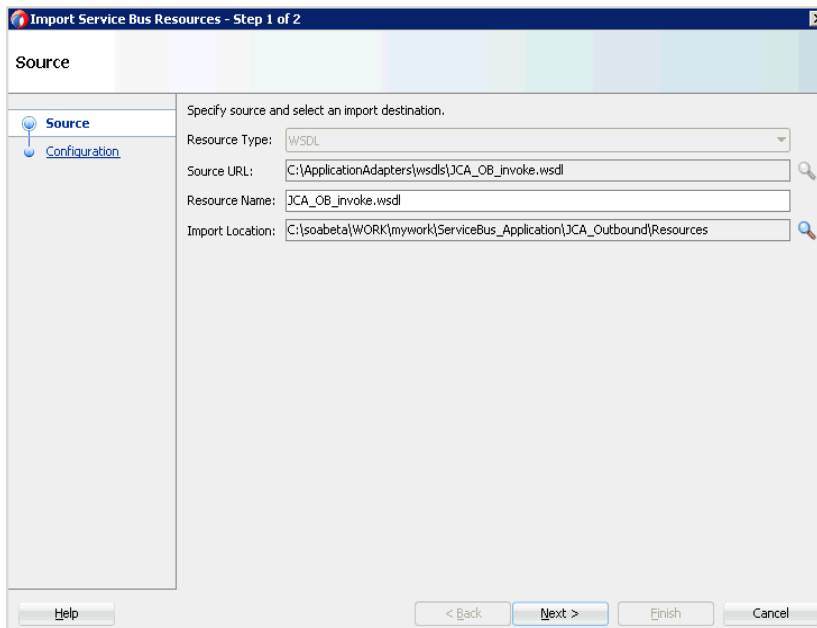
図 8-5 に示すように、「WSDL チューザ」ダイアログが表示されます。

図 8-5 「WSDL チューザ」 ダイアログ



5. 「ファイルシステム」タブを選択し、WSDL ディレクトリをブラウズしてアウトバウンド WSDL ファイルを選択します。
6. 「OK」をクリックします。  
「Service Bus リソースのインポート」ダイアログが表示されます。
7. 図 8-6 に示すように、「次へ」をクリックします。

図 8-6 「ソース」 ペイン



8. 「構成」ペインで、「終了」をクリックします。

サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成ダイアログに戻ります。

9. 「JCA ファイル」フィールドの右にある JCA ファイルを検索アイコンをクリックします。

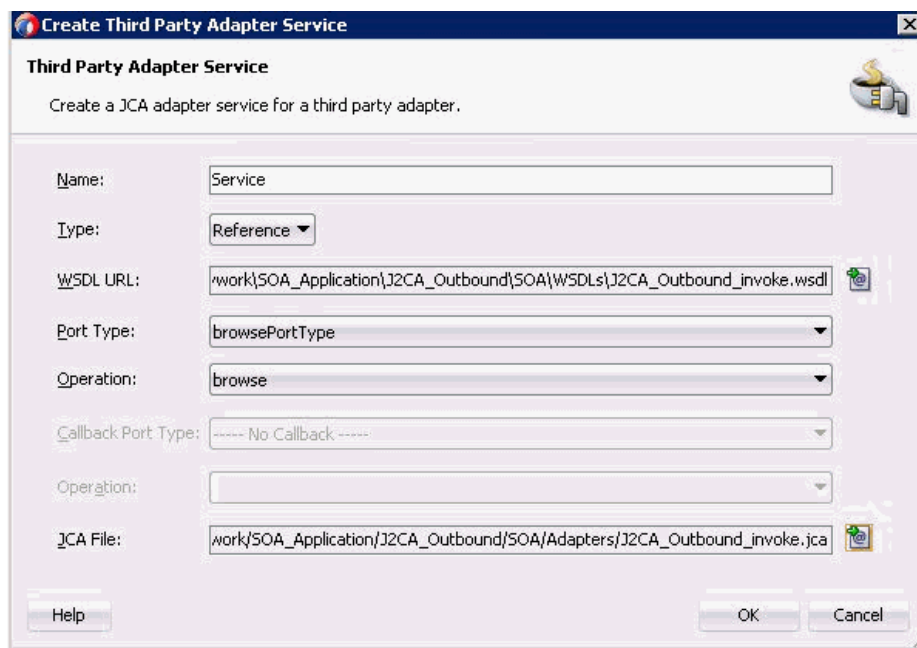
変換チューザ・ダイアログが表示されます。

10. WSDL ディレクトリから JCA プロパティ・ファイルを選択します。
11. 「OK」をクリックします。ファイルのコピーメッセージが表示されます。
12. 「はい」をクリックします。

JCA プロパティ・ファイルのコピーがプロジェクト・フォルダ内に作成されます。

図 8-7 に示すように、サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成ダイアログに戻ります。

図 8-7 サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成ダイアログ



13. 「OK」をクリックします。

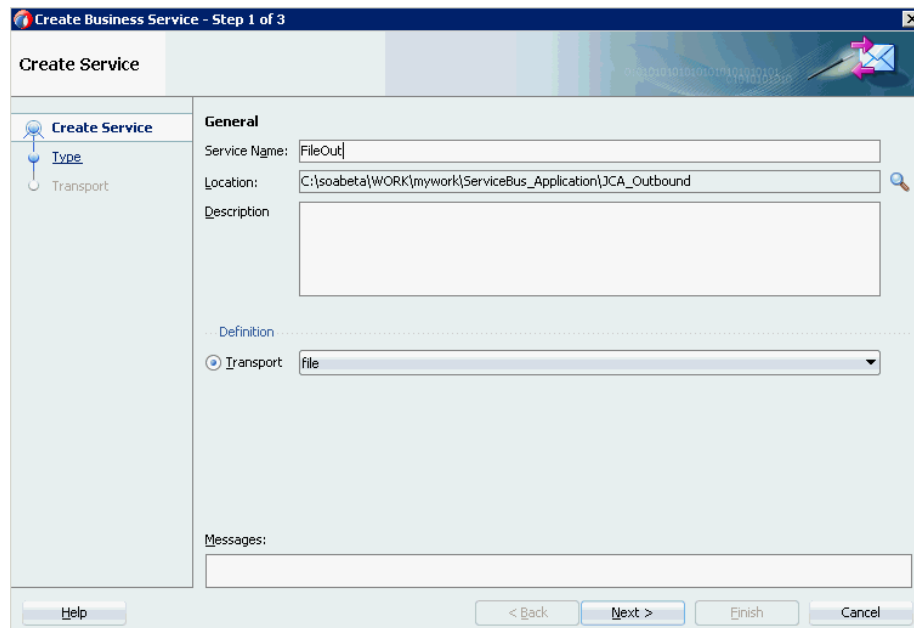
ビジネス・サービス・コンポーネントが「外部サービス」ペインに作成されます。

### 8.1.2.2 ファイル・トランスポート・タイプ・ビジネス・サービスの構成

ファイル・トランスポート・ビジネス・サービスを作成するには、次のステップを実行します。

1. 「拡張」ペインから「ファイル・トランスポート」コンポーネントを「外部サービス」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。  
「ビジネス・サービスの作成」ダイアログが表示されます。
2. 図 8-8 に示すように、「サービス名」フィールドにビジネス・サービスの任意の名前を入力し(「FileOut」など)、「次へ」をクリックします。

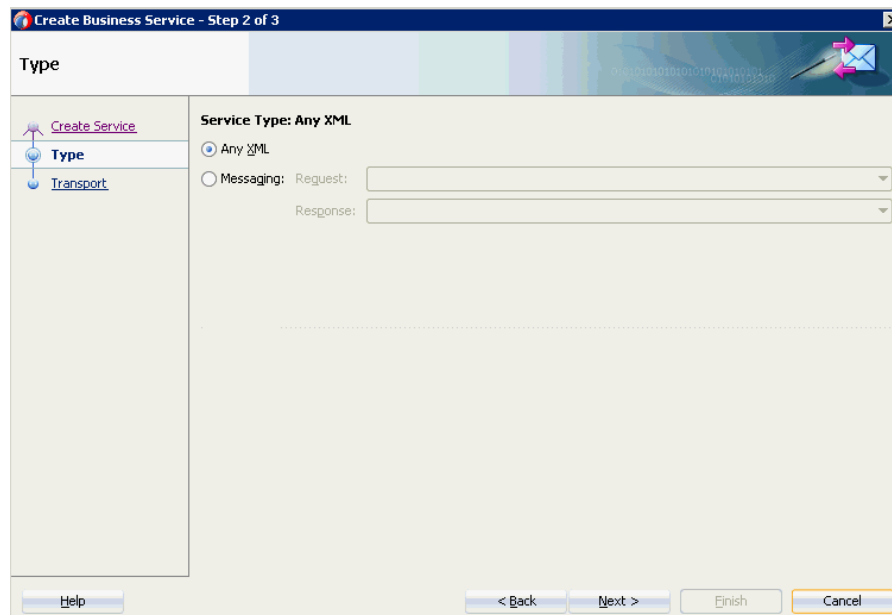
図 8-8 「サービスの作成」 ペイン



「タイプ」 ペインが表示されます。「任意の XML」 オプションがデフォルトで選択されています。

3. 図 8-9 に示すように、「次へ」をクリックします。

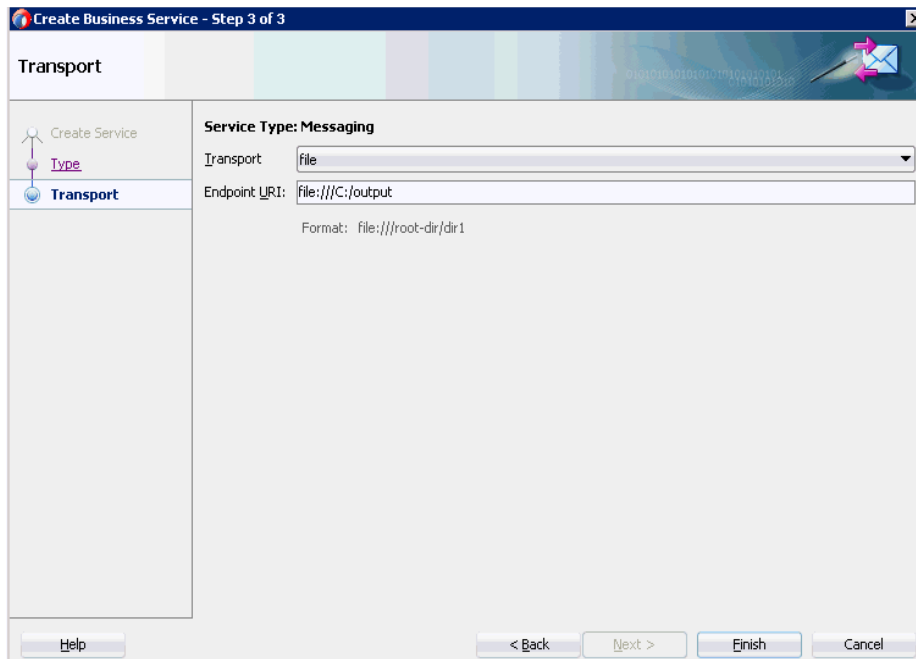
図 8-9 「タイプ」 ペイン



「トランスポート」 ペインが表示されます。

4. 図 8-10 に示すように、「エンドポイント URI」 フィールドに出力場所を指定し (「c:/output」 など)、「終了」をクリックします。

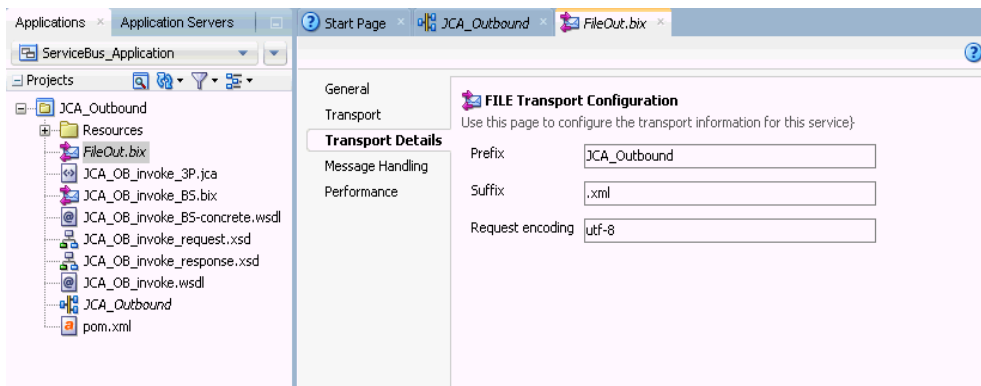
図 8-10 「トランスポート」 ペイン



ファイル・トランスポート・ビジネス・サービスの「FileOut」が作成され、表示されます。

5. 作成されたビジネス・サービスの「FileOut」をダブルクリックし、図 8-11 に示すように、「トランスポートの詳細」タブの「接頭辞」フィールドと「接尾辞」フィールドに値を入力します。

図 8-11 トランスポートの詳細

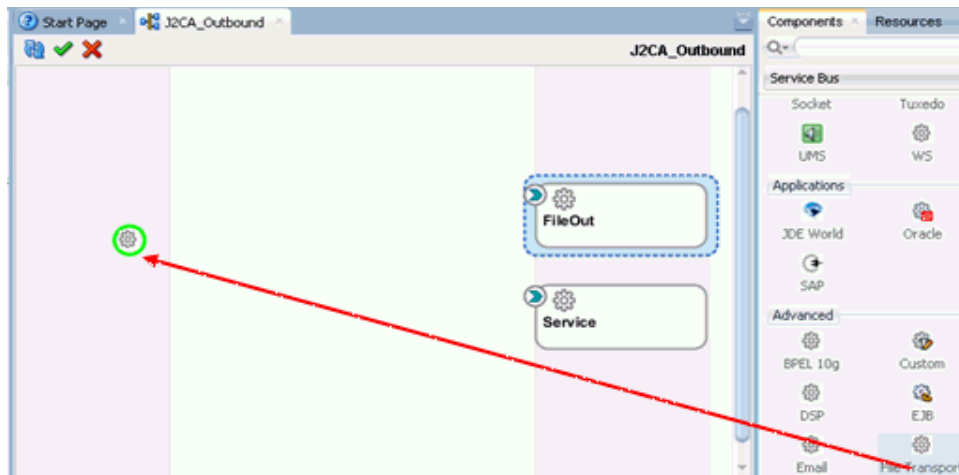


### 8.1.2.3 プロキシ・サービスとパイプラインの作成

プロキシ・サービスとパイプラインを作成するには、次のステップを実行します。

1. 図 8-12 に示すように、拡張コンポーネント・ペインから「ファイル・トランスポート」コンポーネントを「プロキシ・サービス」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

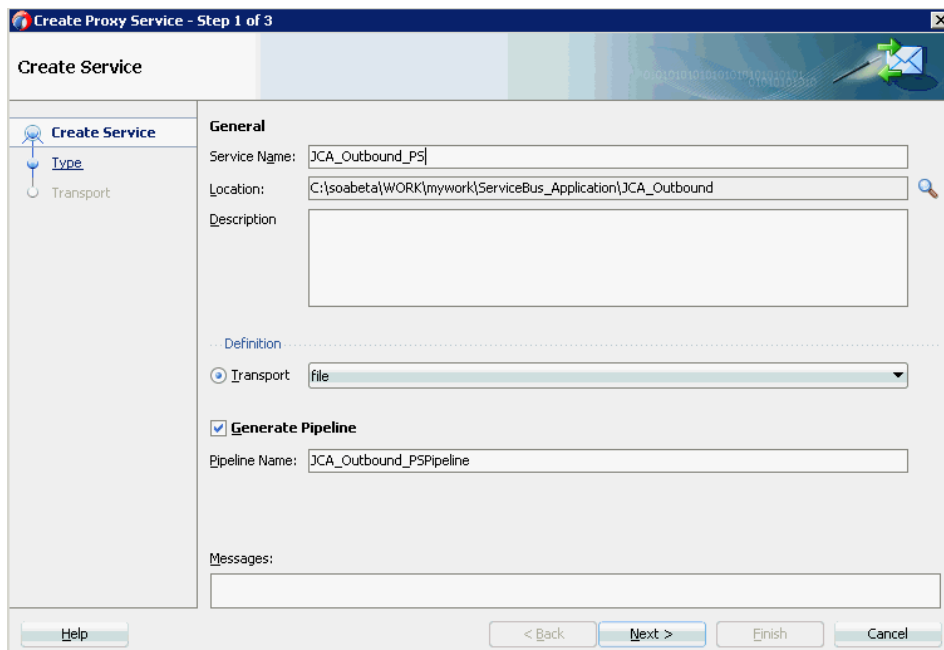
図 8-12 「ファイル・トランスポート」コンポーネント



「プロキシ・サービスの作成」ペインが表示されます。

2. 「サービス名」フィールドにプロキシ・サービスの任意の名前を入力します (「JCA\_Outbound\_PS」など)。デフォルトで、「パイプラインの生成」が選択されています。
3. 図 8-13 に示すように、「次へ」をクリックします。

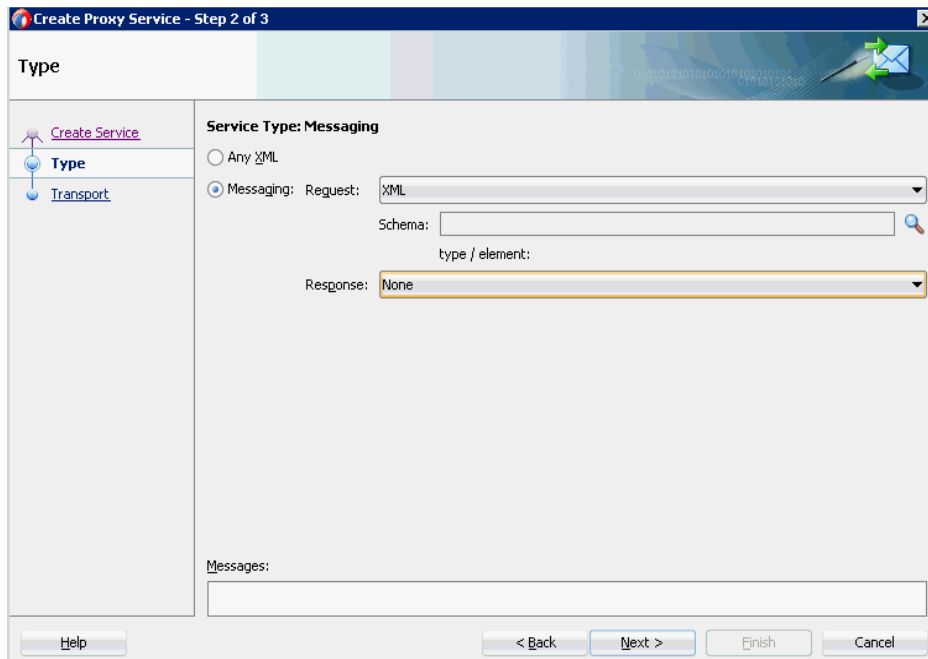
図 8-13 「サービスの作成」ペイン



「タイプ」ペインが表示されます。

4. 図 8-14 に示すように、メッセージング・オプションを選択し、「リクエスト」を「XML」に、「レスポンス」を「なし」に設定して、「次へ」をクリックします。

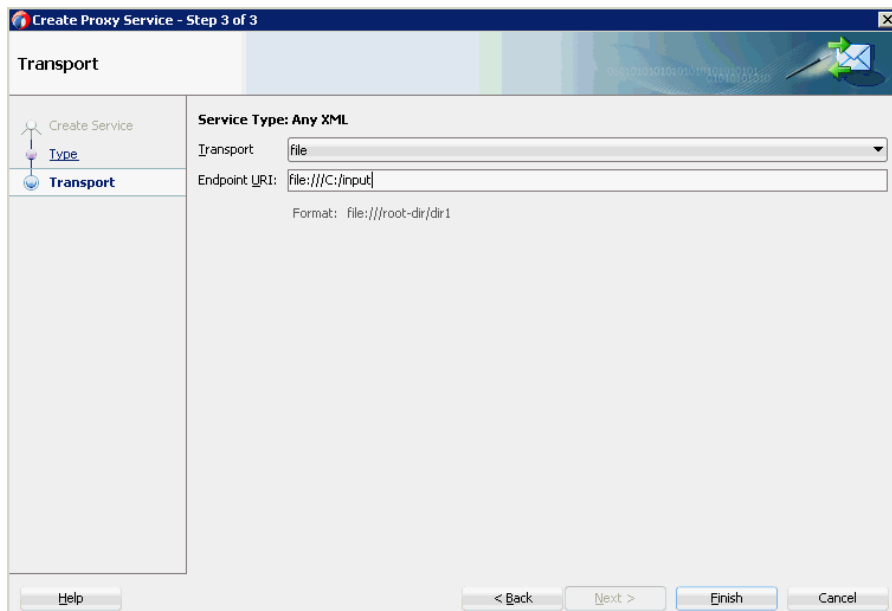
図 8-14 「タイプ」 ペイン



「トランスポート」 ウィンドウが表示されます。

5. 図 8-15 に示すように、「エンドポイント URI」 フィールドに入力場所を指定し（「c:/input」 など）、「終了」をクリックします。

図 8-15 「トランスポート」 ウィンドウ

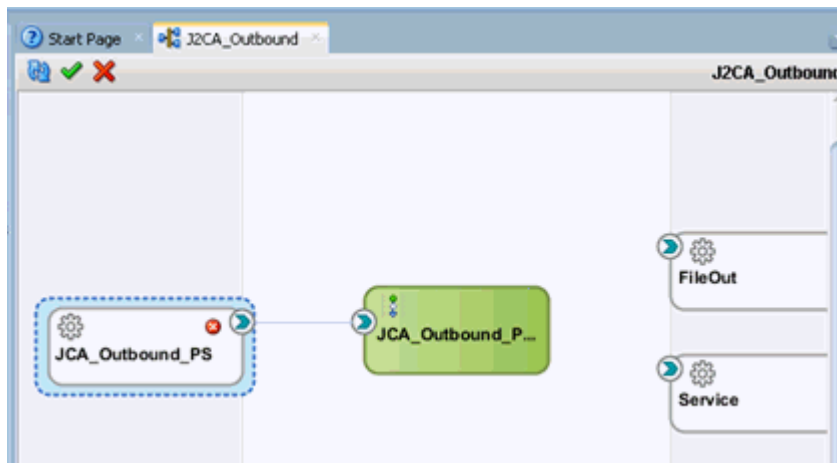


プロキシ・サービスとパイプラインが作成され、表示されます。

6. 図 8-16 に示すように、作成されたプロキシ・サービス（「JCA\_Outbound\_PS」 など）をダブルクリックします。

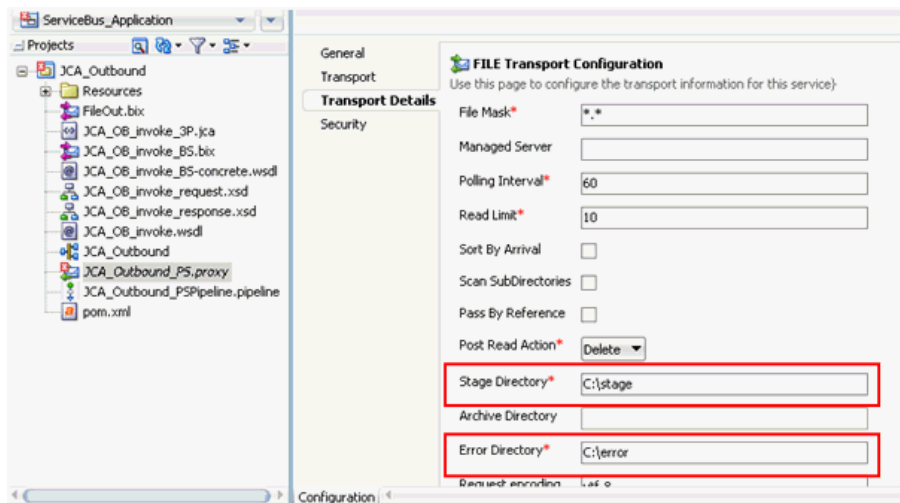


図 8-16 プロキシ・サービスの編集



7. 図 8-17 に示すように、表示されたプロキシ・サービスの構成ページで、「トランスポートの詳細」を選択し、ステージ・ディレクトリとエラー・ディレクトリの値を入力します。

図 8-17 ファイル・トランスポート構成



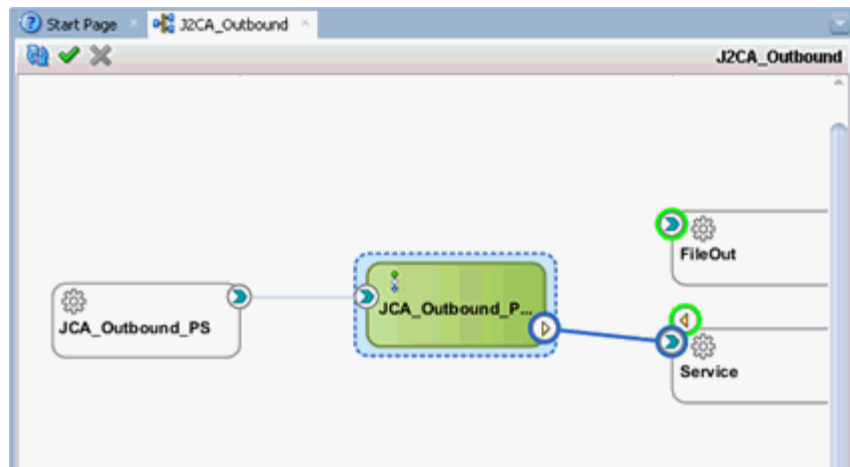
8. 保存し、プロキシ・サービスの構成ページを閉じます。

#### 8.1.2.4 ルーティング・ルールの構成

ルーティング・ルールを構成するには、次のステップを実行します。

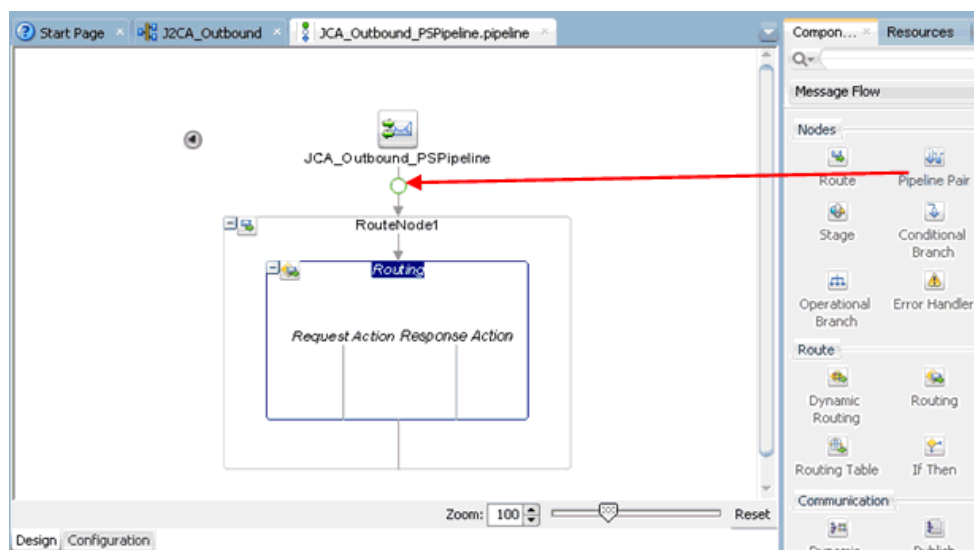
1. 図 8-18 に示すように、パイプラインをビジネス・サービス (「Service」など) に接続します。

図 8-18 ビジネス・サービス・パイプライン



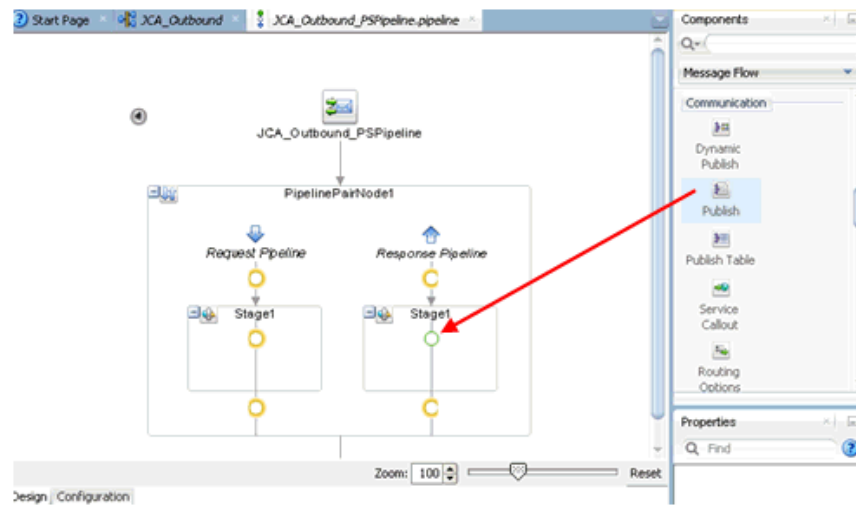
2. 「パイプライン/分割結合」 ペインでパイプライン (「JCA\_Outbound\_PSPipeline」など) をダブルクリックします。  
パイプラインの構成ページが表示されます。
3. 図 8-19 に示すように、「ノード」 ペインから「パイプライン・ペア」 ノードをパイプライン (「JCA\_Outbound\_PSPipeline」など) の下にある領域にドラッグ・アンド・ドロップします。

図 8-19 「パイプライン・ペア」 ノード



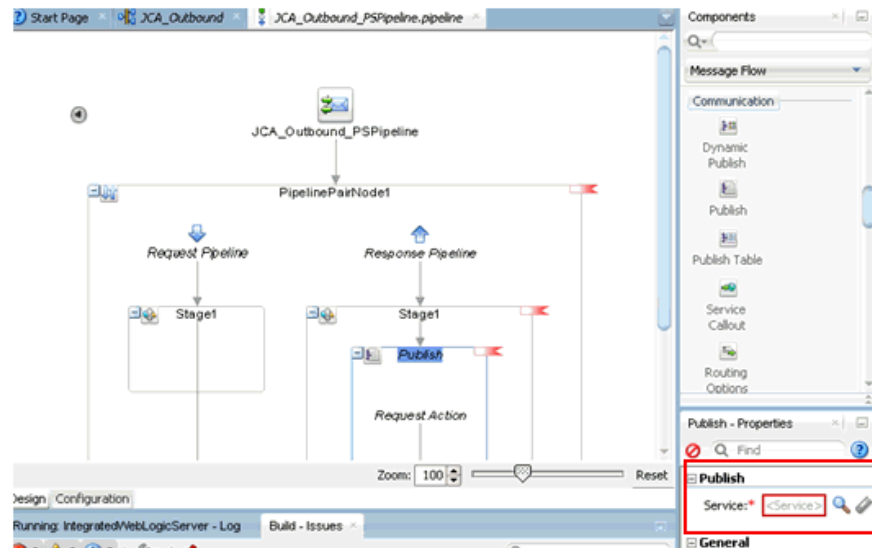
4. 図 8-20 に示すように、「通信」 ペインから「公開」 ノードを「レスポンス・パイプライン」の「ステージ 1」の下にある領域にドラッグ・アンド・ドロップします。

図 8-20 「公開」ノード



5. 図 8-21 に示すように、公開プロパティの右ペインでサービス・フィールドの右にある参照アイコンをクリックします。

図 8-21 参照アイコン



6. 図 8-22 に示すように、表示された「リソース・チューザ」ウィンドウで、「Fileout.bix」ファイル・トランスポート・ビジネス・サービスを選択し、「OK」をクリックします。

図 8-22 リソース・チューザ

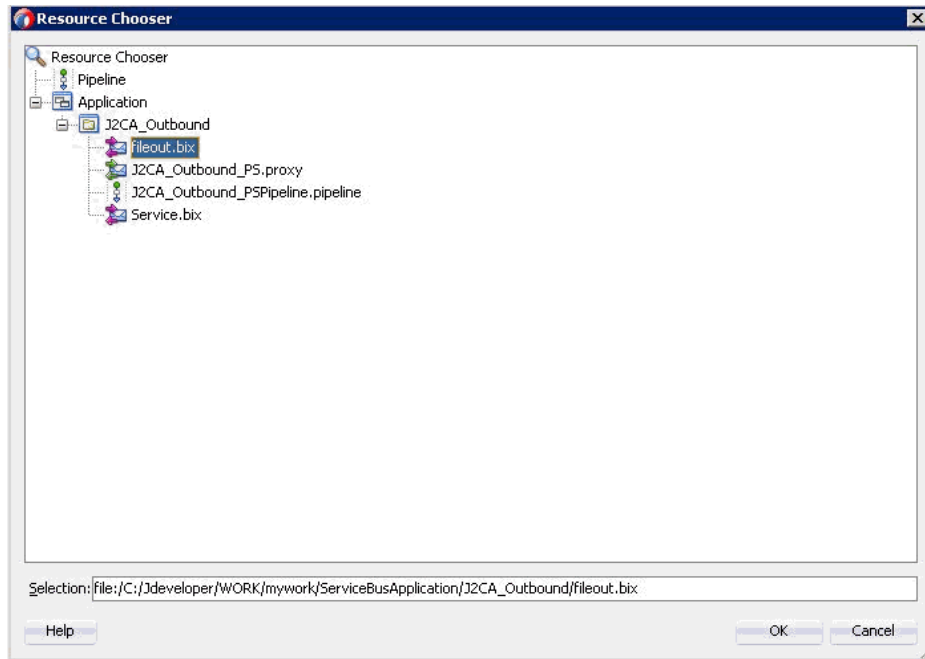
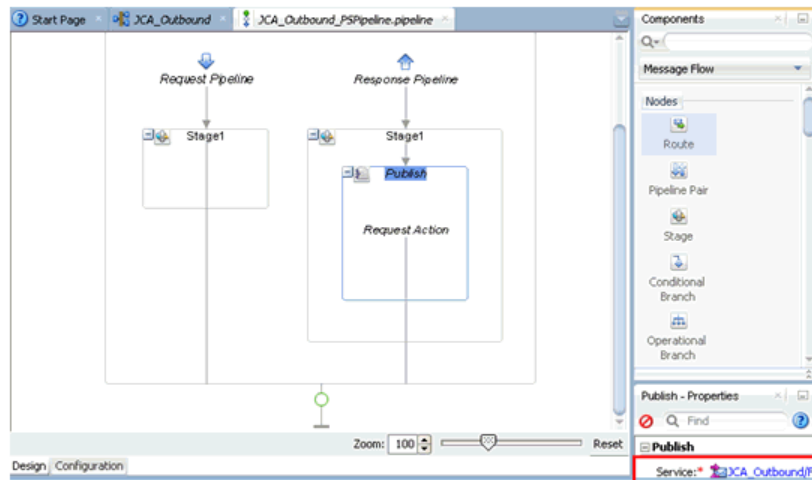


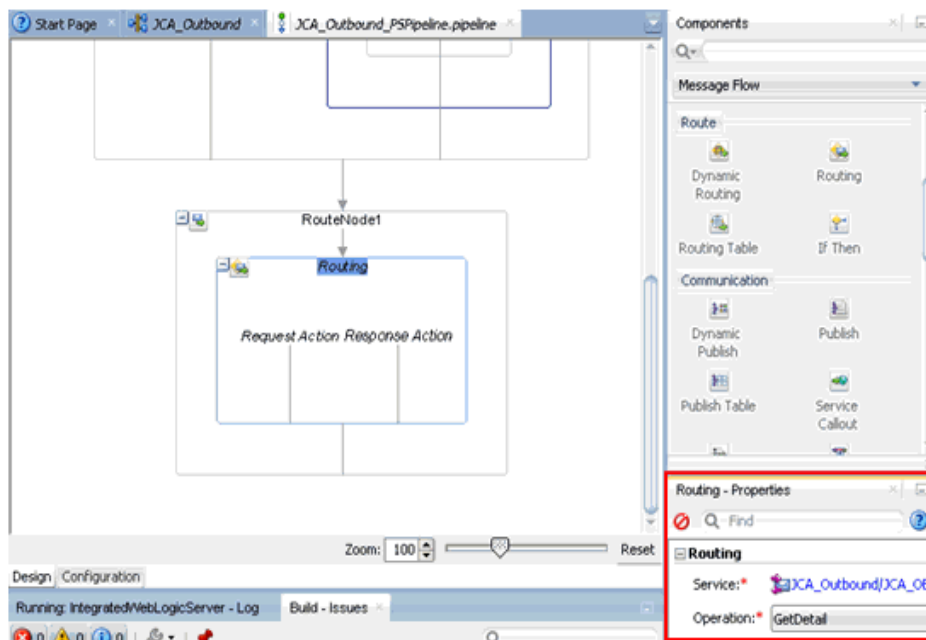
図 8-23 に示すように、右ペインで、選択したサービスが「公開」ペインに構成されます。

図 8-23 「公開」ペイン



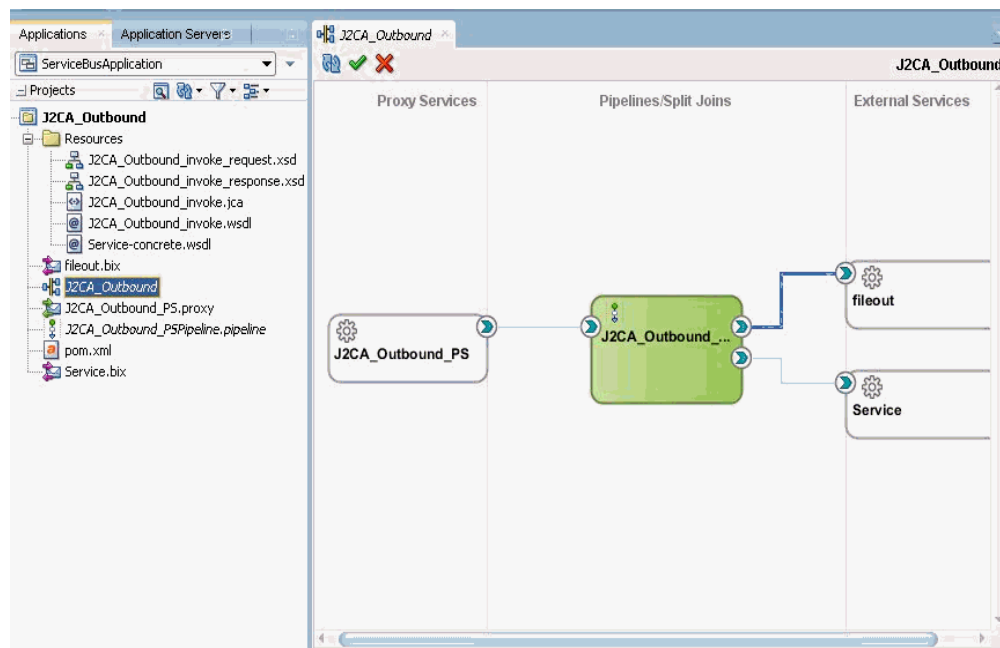
7. 図 8-24 に示すように、ルーティングをクリックしてサービスが適切に選択されていることを確認します。

図 8-24 パイプラインの構成



8. 保存し、パイプラインの構成ページを閉じます。
9. 図 8-25 に示すように、overview.xml ファイル (「J2CA\_Outbound」など) をダブルクリックし、メニュー・バーの「すべて保存」をクリックして OSB プロセスを保存します。

図 8-25 「すべて保存」アイコン

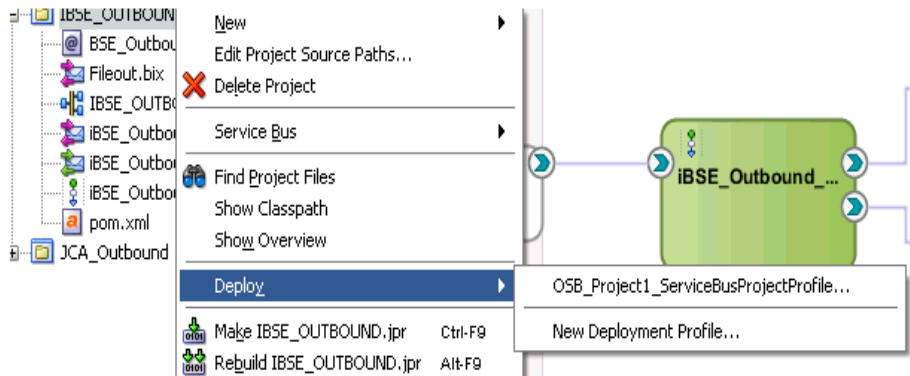


### 8.1.3 OSB アウトバウンド・プロセスのデプロイ

OSB アウトバウンド・プロセスをデプロイするには、次のステップを実行します。

1. 図 8-26 に示すように、OSB プロジェクトを右クリックし、「デプロイ」を選択して、「OSB\_Project1\_ServiceBusProjectProfile...」を選択します。

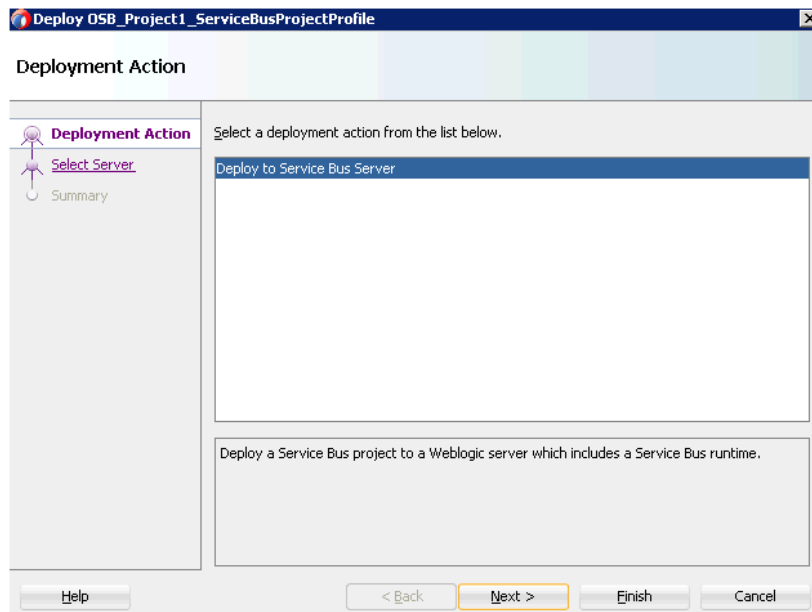
図 8-26 「デプロイ」オプション



「デプロイメント・アクション」ページが表示されます。

2. 図 8-27 に示すように、「次へ」をクリックします。

図 8-27 「デプロイメント・アクション」ページ



「サーバーの選択」ページが表示されます。

3. 図 8-28 に示すように、構成済の使用可能なアプリケーション・サーバーを選択し、「次へ」をクリックします。

図 8-28 「サーバーの選択」 ページ

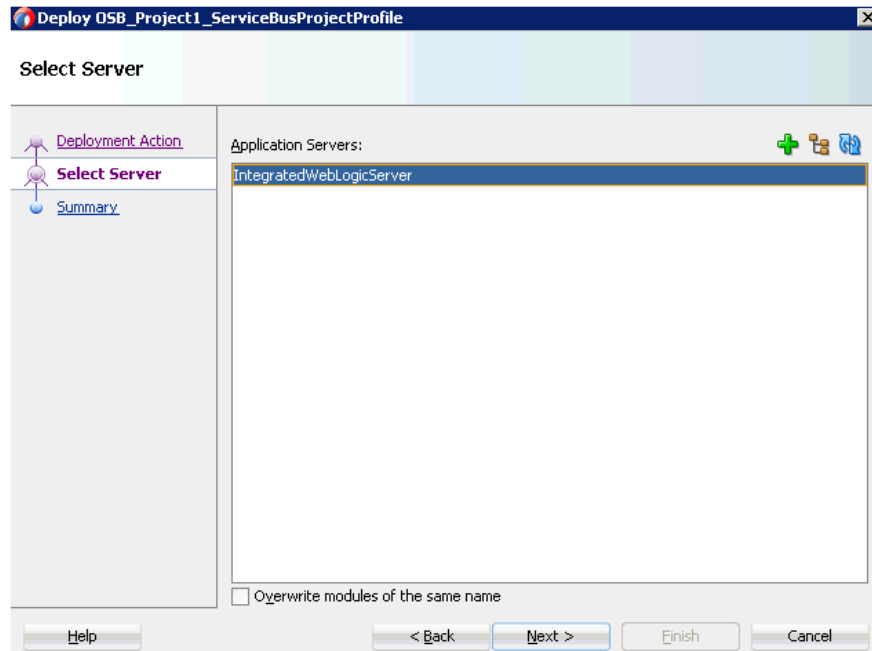
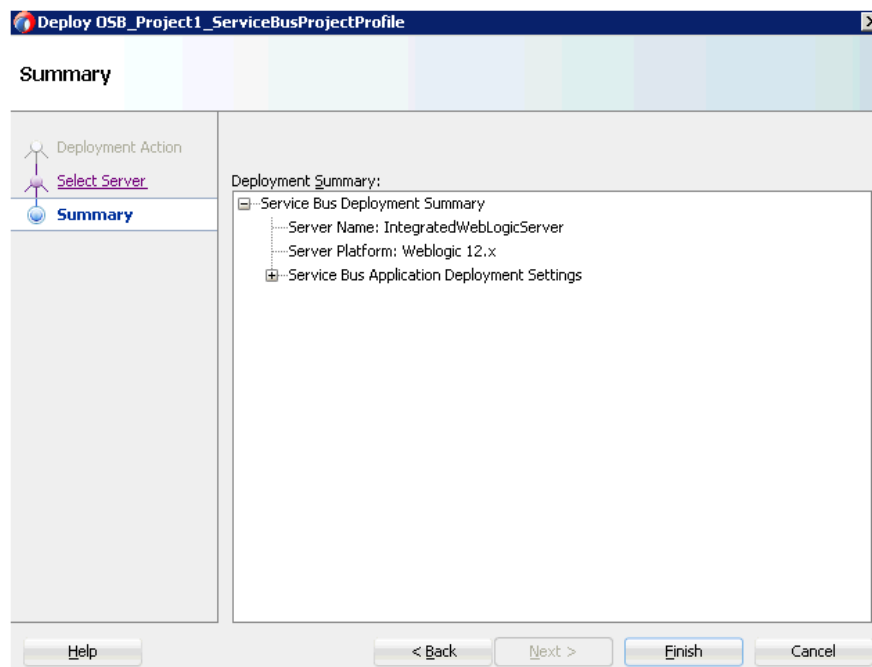


図 8-29 に示すように、「サマリー」 ページが表示されます。

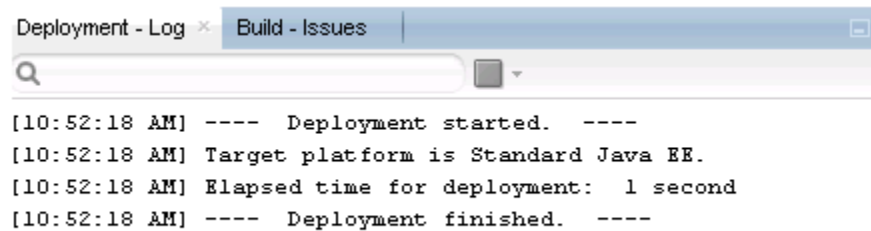
図 8-29 「サマリー」 ページ



4. プロジェクトに使用可能なすべてのデプロイメント情報をレビューおよび確認し、「終了」をクリックします。

図 8-30 に示すように、プロセスが正常にデプロイされます。

図 8-30 デプロイメントの成功を伝えるメッセージ



5. 入力 XML ファイルをコピーして構成済の入力フォルダ (「C:\input」など) に貼付けます。

構成済の出力場所 (「C:\output」など) で出力が受信されたことを確認します。

## 8.2 JDeveloper を使用した OSB インバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成)

この項では、J2CA 構成で Oracle JDeveloper を使用して PeopleSoft システム用に OSB インバウンド・プロセスを構成する方法について説明します。

このインバウンド・ユース・ケース・シナリオ用のサンプル・プロジェクトが、次に示す Application Adapter のインストール・フォルダに用意されています。

```
<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\OSB_
JDeveloper\J2CA\PeopleSoft_Sample_J2CA_OSB_Inbound_Project
```

この項では、次のトピックについて説明します。

- 8.2.1 項「OSB 用のサービス・バス・アプリケーションの作成」
- 8.2.2 項「OSB インバウンド・プロセスの定義」
- 8.2.3 項「OSB インバウンド・プロセスのデプロイ」

### 前提条件

OSB インバウンド・プロセスを設計する前に、アプリケーション・エクスプローラを使用して各 WSDL ファイルを生成する必要があります。詳細は、[4.5.1 項「イベント統合のための WSDL の生成」](#) (4-35 ページ) を参照してください。

### 8.2.1 OSB 用のサービス・バス・アプリケーションの作成

OSB インバウンド・プロセスを構成するには、OSB 用のサービス・バス・アプリケーションを作成する必要があります。詳細は、[8.1.1 項「OSB 用のサービス・バス・アプリケーションの作成」](#) (8-2 ページ) を参照してください。

### 8.2.2 OSB インバウンド・プロセスの定義

この項では、OSB インバウンド・プロセスの定義方法について説明します。次のトピックが含まれています。

- 8.2.2.1 項「サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成」
- 8.2.2.2 項「パイプラインの作成」
- 8.2.2.3 項「ファイル・トランスポート・タイプ・ビジネス・サービスの構成」



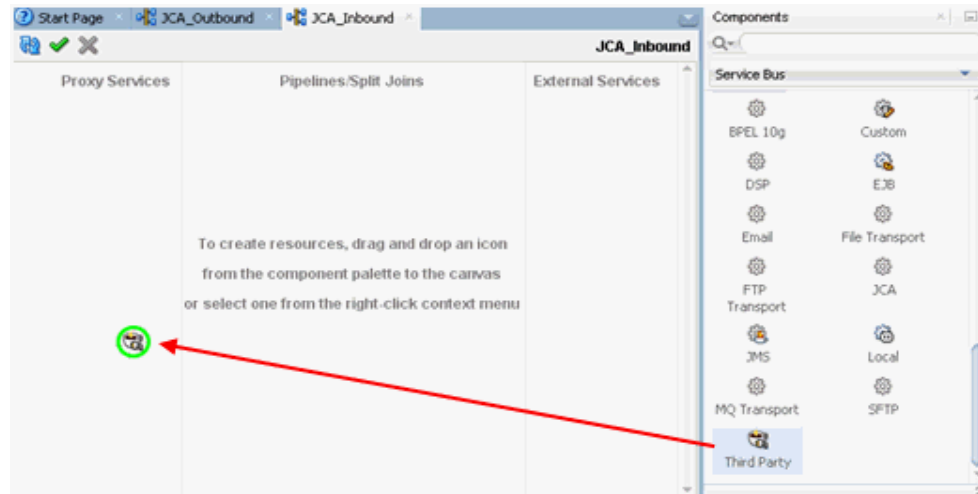
- 8.2.2.4 項「ルーティング・ルール」の構成

### 8.2.2.1 サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成

サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントを作成するには、次のステップを実行します。

1. 図 8-31 に示すように、Service Bus コンポーネント・ペインからサード・パーティアダプタ・コンポーネントを「プロキシ・サービス」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

図 8-31 サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネント



サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成ダイアログが表示されます。

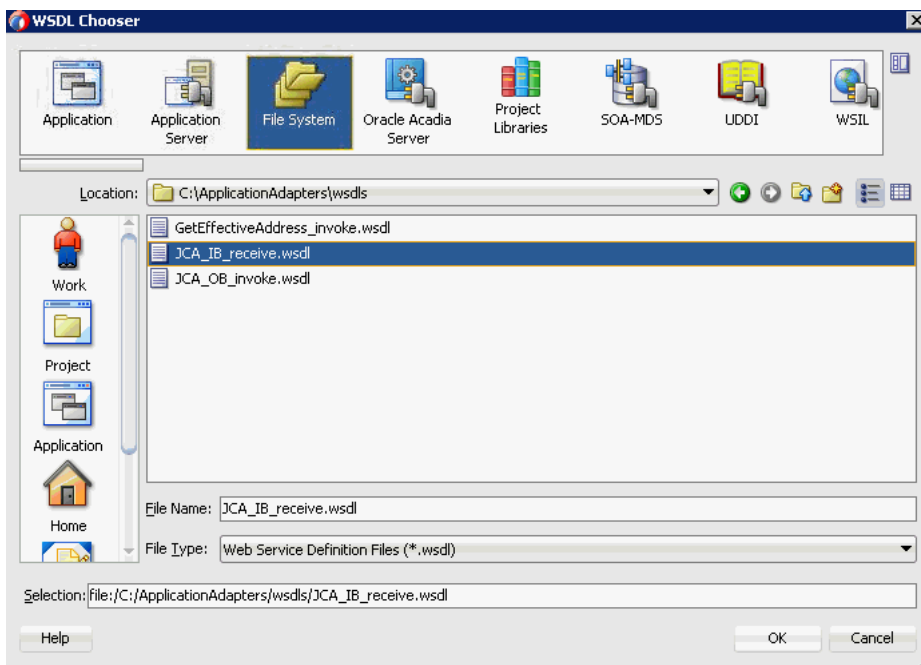
2. サード・パーティ・アダプタ・サービスの任意の名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
3. 「タイプ」ドロップダウン・リストで「サービス」が選択されていることを確認します (デフォルト)。
4. 図 8-32 に示すように、「WSDL URL」フィールドの右にある既存の WSDL を検索アイコンをクリックします。

図 8-32 サード・パーティ・アダプタ・サービス・ダイアログ



図 8-33 に示すように、「WSDL チューザ」ダイアログが表示されます。

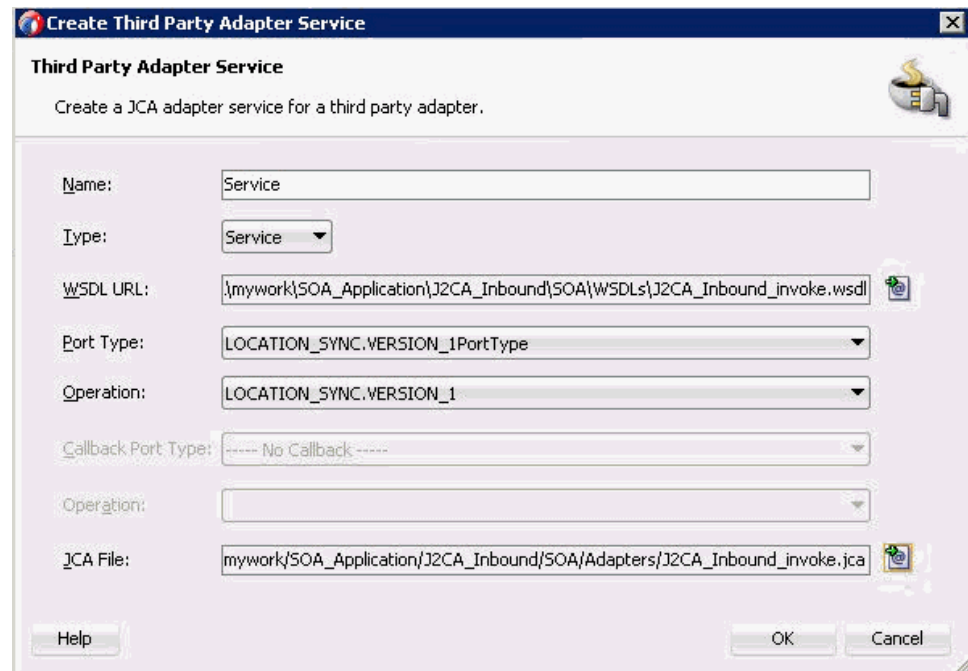
図 8-33 「WSDL チューザ」ダイアログ



5. 「ファイルシステム」フォルダを選択し、WSDL ディレクトリをブラウズしてインバウンド WSDL ファイルを選択します。
6. 「OK」をクリックします。  
「Service Bus リソースのインポート」ダイアログが表示されます。
7. 「次へ」をクリックします。

8. 「構成」ウィンドウで、「終了」をクリックします。  
 サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成ダイアログに戻ります。
9. 「JCA ファイル」フィールドの右にある JCA ファイルを検索アイコンをクリックします。  
 変換チューザ・ダイアログが表示されます。
10. WSDL ディレクトリから JCA プロパティ・ファイルを選択します。
11. 「OK」をクリックします。  
 ファイルのコピーメッセージが表示されます。
12. 「はい」をクリックします。  
 JCA プロパティ・ファイルのコピーがプロジェクト・フォルダ内に作成されます。  
 図 8-34 に示すように、サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成ダイアログに戻ります。

図 8-34 サード・パーティ・アダプタ・サービスの作成ダイアログ



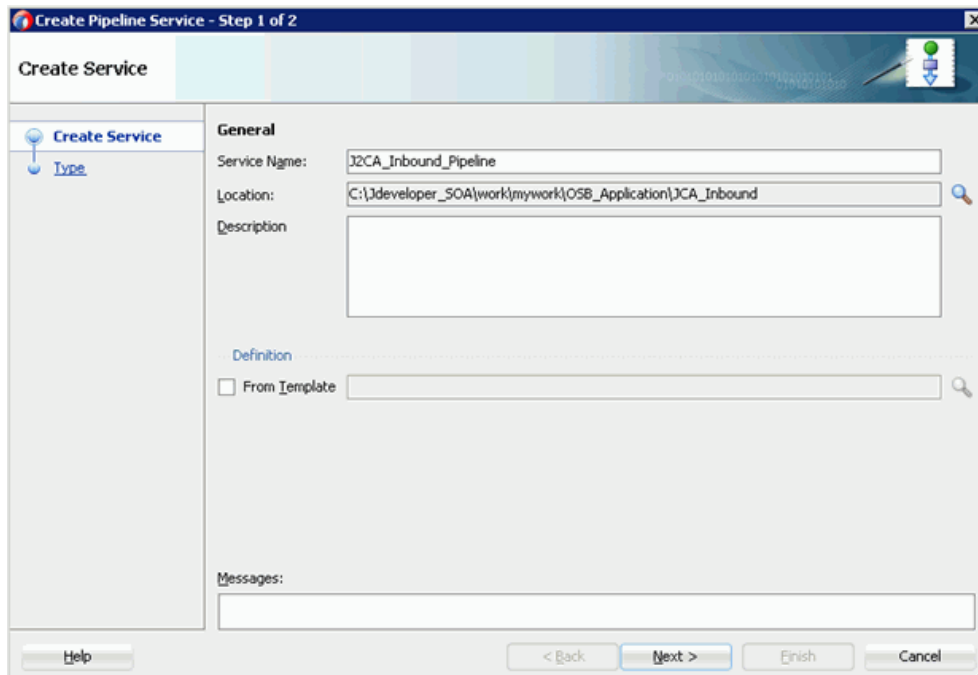
13. 「OK」をクリックします。  
 サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントが作成され、「プロキシ・サービス」ペインに表示されます。

### 8.2.2.2 パイプラインの作成

インバウンド・プロキシ・サービスとパイプラインを生成するには、次のステップを実行します。

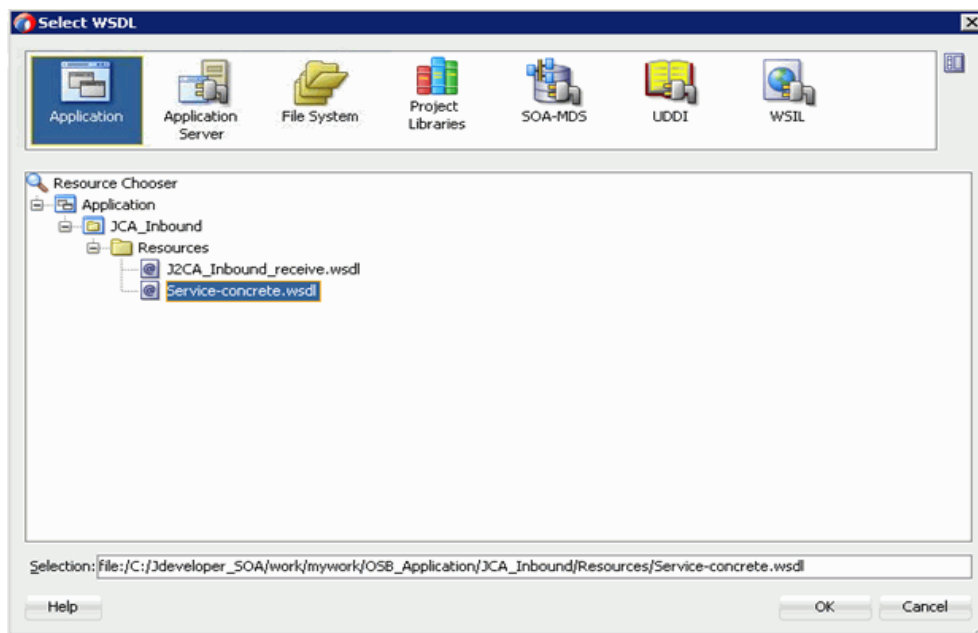
1. Service Bus で、「リソース」をクリックします。
2. 「パイプライン」を「パイプライン/分割結合」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。
3. 図 8-35 に示すように、パイプラインの名前を入力し、「次へ」をクリックします。

図 8-35 「サービスの作成」 ページ



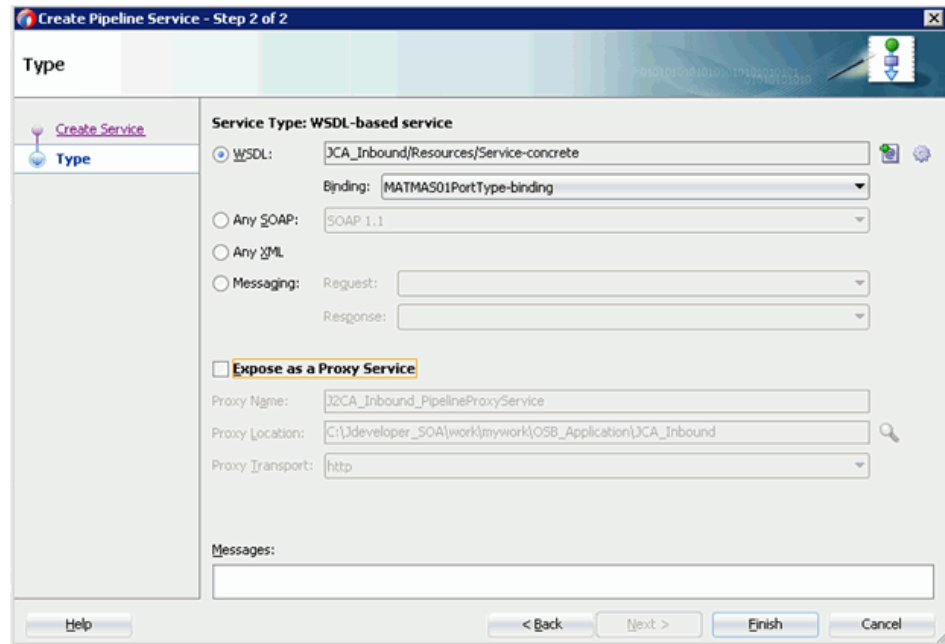
4. 「パイプライン・サービスの作成」 ウィンドウで、「WSDL」 オプションを選択し、WSDL URL をクリックします。
5. 図 8-36 に示すように、WSDL チューザ・ウィンドウで「アプリケーション」を選択し、適切な OSB プロジェクトの「service-concrete.wsdl」を選択して、「OK」をクリックします。

図 8-36 「WSDL の選択」 ページ



6. 図 8-37 に示すように、「プロキシ・サービスとして公開」 チェック・ボックスを選択解除し、「終了」をクリックします。

図 8-37 「タイプ」 ページ



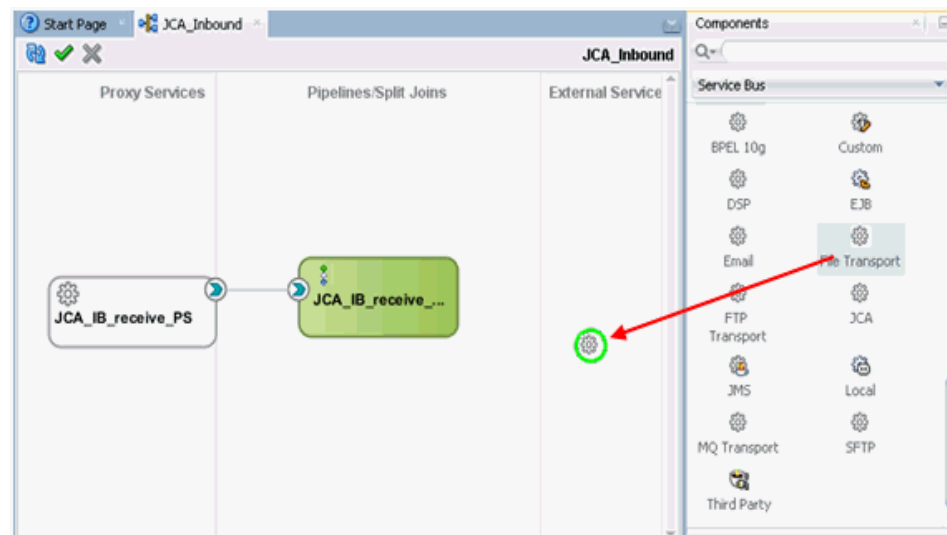
7. 「プロキシ・サービス」を「パイプライン/分割結合」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

### 8.2.2.3 ファイル・トランスポート・タイプ・ビジネス・サービスの構成

ファイル・トランスポート・タイプ・ビジネス・サービスを作成するには、次のステップを実行します。

1. 図 8-38 に示すように、「拡張」ペインから「ファイル・トランスポート」コンポーネントを「外部サービス」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

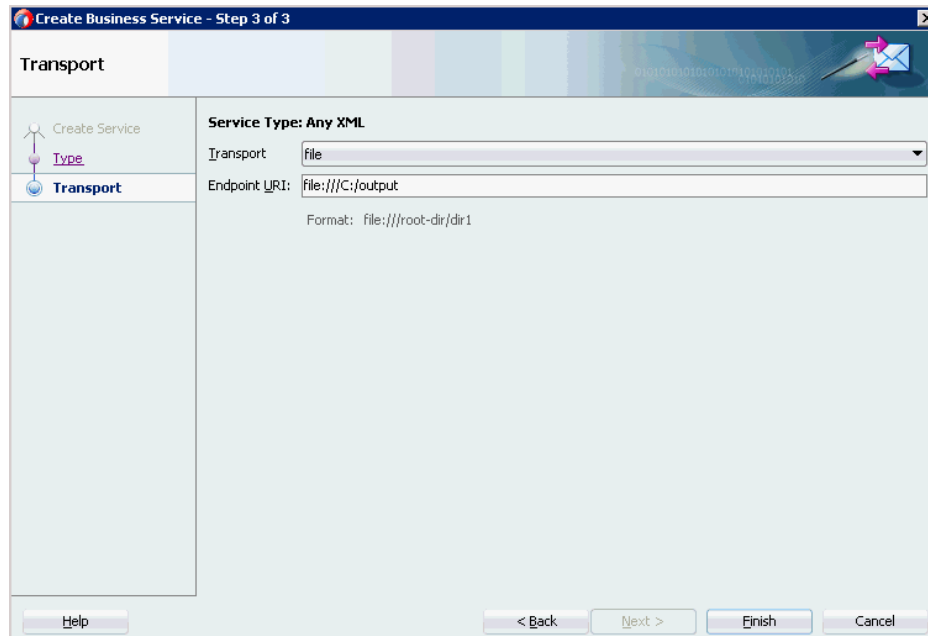
図 8-38 「ファイル・トランスポート」ノード



「ビジネス・サービスの作成」ダイアログが表示されます。

2. 「サービス名」フィールドにビジネス・サービスの任意の名前を入力し (「FileOut」など)、「次へ」をクリックします。  
表示される「タイプ」ウィンドウで、「任意の XML」オプションがデフォルトで選択されています。
3. 「次へ」をクリックします。
4. 図 8-39 に示すように、表示された「トランスポート」ウィンドウで、「エンドポイント URI」フィールドに出力場所を指定し (「c:\output」など)、「終了」をクリックします。

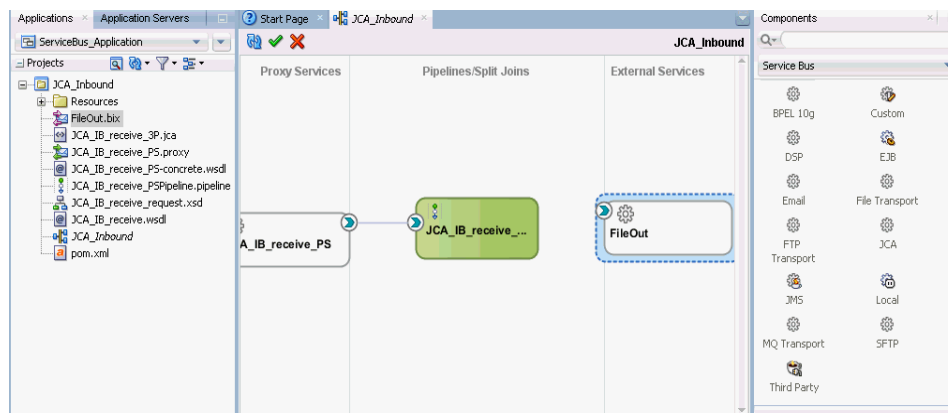
図 8-39 「トランスポート」 ペイン



「FileOut」ビジネス・サービスが作成されます。

5. 図 8-40 に示すように、「FileOut」ビジネス・サービスをダブルクリックします。

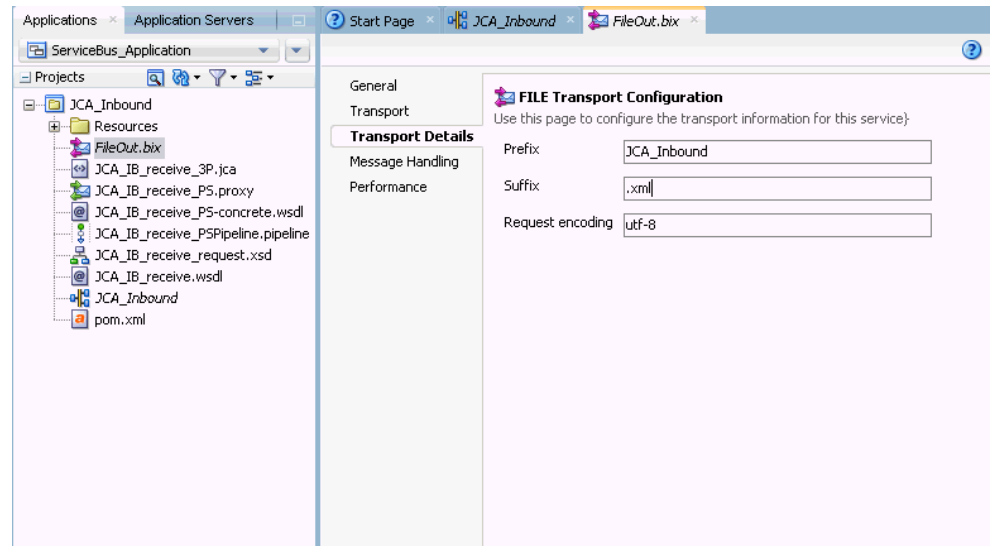
図 8-40 「FileOut」ビジネス・サービス



「構成」 ページが表示されます。

6. 図 8-41 に示すように、「トランスポートの詳細」タブにナビゲートし、「接頭辞」フィールドと「接尾辞」フィールドに値を入力します。

図 8-41 ファイル・トランスポート構成



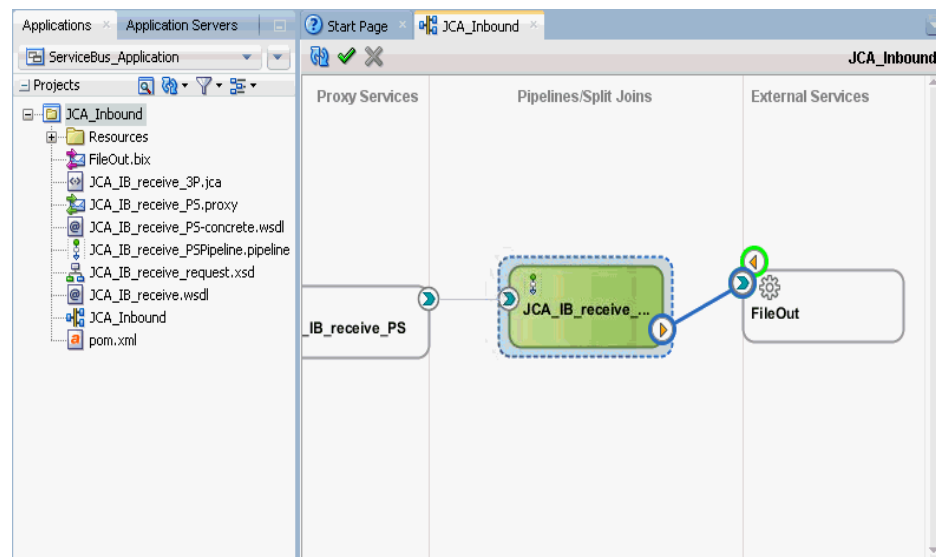
7. 保存し、「構成」ページを閉じます。

### 8.2.2.4 ルーティング・ルールの構成

ルーティング・ルールを構成するには、次のステップを実行します。

1. 図 8-42 に示すように、パイプライン (「JCA\_IB\_receive\_PSPipeline」など) とファイル・タイプ・ビジネス・サービス (「FileOut」など) の間に接続を作成します。

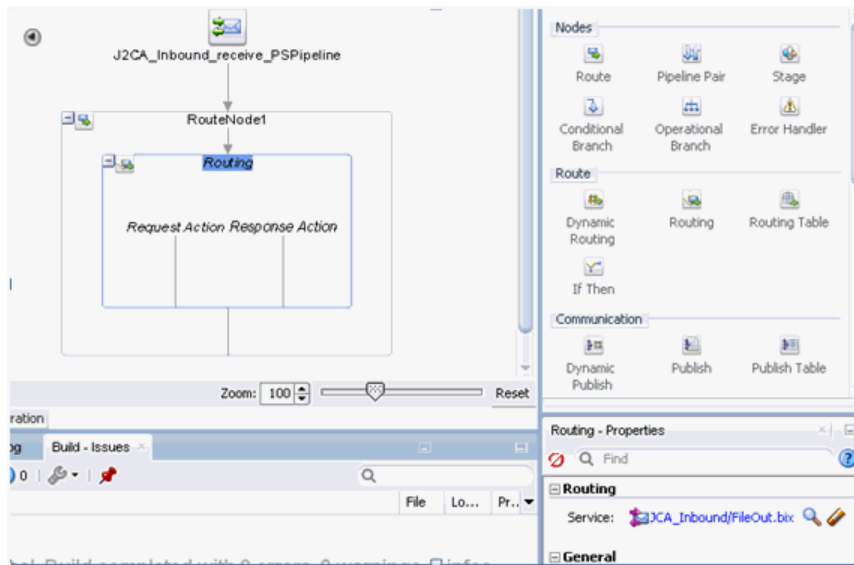
図 8-42 プロキシと「FileOut」のマッピング



2. パイプライン (「J2CA\_Inbound\_receive\_PSPipeline」など) をダブルクリックします。

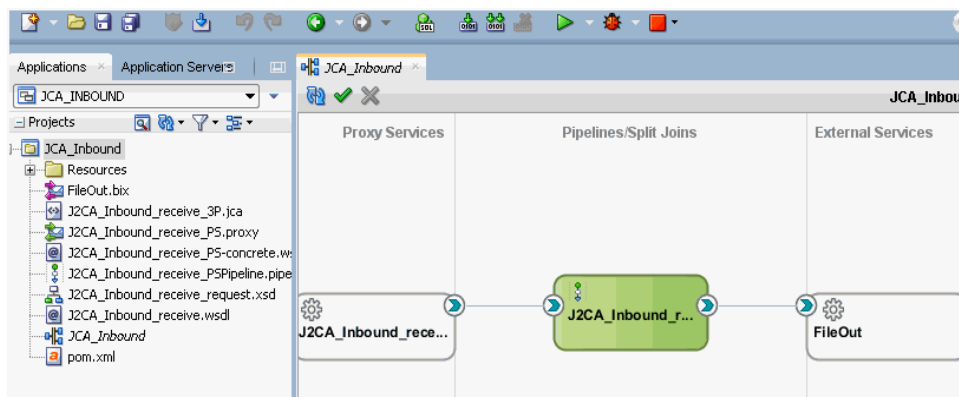
3. 図 8-43 に示すように、ルーティング・ペインをクリックし、ファイル・タイプ・ビジネス・サービス (「FileOut」 など) が「サービス」フィールドに適切に構成されていることを確認します。

図 8-43 ルーティング・ペイン



4. 保存し、パイプラインの構成ページを閉じます。
5. 図 8-44 に示すように、overview.xml ファイル (「JCA\_Inbound」 など) をダブルクリックし、メニュー・バーの「すべて保存」をクリックして OSB プロセスを保存します。

図 8-44 すべて保存



### 8.2.3 OSB インバウンド・プロセスのデプロイ

作成した OSB インバウンド・プロセスをデプロイするには、8.1.3 項「OSB アウトバウンド・プロセスのデプロイ」(8-16 ページ)のステップ 1～4 を参照してください。

OSB インバウンド・プロセスが正常にデプロイされた後、PeopleSoft システムからのイベントをトリガーし、構成済の出力場所 (「C:\output」 など) で受信されたことを確認します。

イベントのトリガーの詳細は、4.5.5 項「PeopleSoft でのイベントのトリガー」(4-47 ページ)を参照してください。



## 8.3 JDeveloper を使用した OSB アウトバウンド・プロセスの構成 (BSE 構成)

この項では、BSE 構成で Oracle JDeveloper を使用して PeopleSoft システム用に OSB アウトバウンド・プロセスを構成する方法について説明します。

このアウトバウンド・ユース・ケース・シナリオ用のサンプル・プロジェクトが、次に示す Application Adapter のインストール・フォルダに用意されています。

```
<ADAPTER_HOME>\etc\sample\PeopleSoft_Samples.zip\PeopleSoft_Samples\OSB_
JDeveloper\BSE\PeopleSoft_Sample_BSE_OSB_Outbound_Project
```

この項では、次のトピックについて説明します。

- [8.3.1 項「OSB 用のサービス・バス・アプリケーションの作成」](#)
- [8.3.2 項「OSB アウトバウンド・プロセスの定義」](#)
- [8.3.3 項「OSB アウトバウンド・プロセスのデプロイ」](#)

### 前提条件

OSB アウトバウンド・プロセスを設計する前に、アプリケーション・エクスプローラを使用して各 WSDL ファイルを生成する必要があります。詳細は、[4.6.1 項「Web サービスを使用したリクエストおよびレスポンス・サービス用の WSDL ファイルの生成」](#) (4-55 ページ) を参照してください。

### 8.3.1 OSB 用のサービス・バス・アプリケーションの作成

OSB アウトバウンド・プロセスを構成するには、OSB 用のサービス・バス・アプリケーションを作成する必要があります。詳細は、[8.1.1 項「OSB 用のサービス・バス・アプリケーションの作成」](#) (8-2 ページ) を参照してください。

### 8.3.2 OSB アウトバウンド・プロセスの定義

この項では、OSB アウトバウンド・プロセスの定義方法について説明します。次のトピックが含まれています。

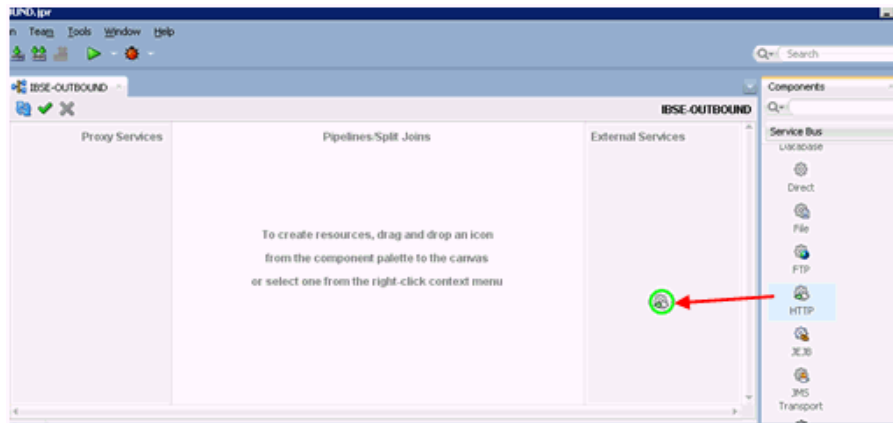
- [8.3.2.1 項「WSDL ベースのビジネス・サービスの構成」](#)
- [8.3.2.2 項「プロキシ・サービスとパイプラインの作成」](#)
- [8.3.2.3 項「ファイル・トランスポート・タイプ・ビジネス・サービスの構成」](#)
- [8.3.2.4 項「ルーティング・ルールの構成」](#)

#### 8.3.2.1 WSDL ベースのビジネス・サービスの構成

WSDL ベースのビジネス・サービスを構成するには、次のステップを実行します。

1. [図 8-45](#) に示すように、「テクノロジー・コンポーネント」ペインから「HTTP」コンポーネントを「外部サービス」領域にドラッグ・アンド・ドロップします。

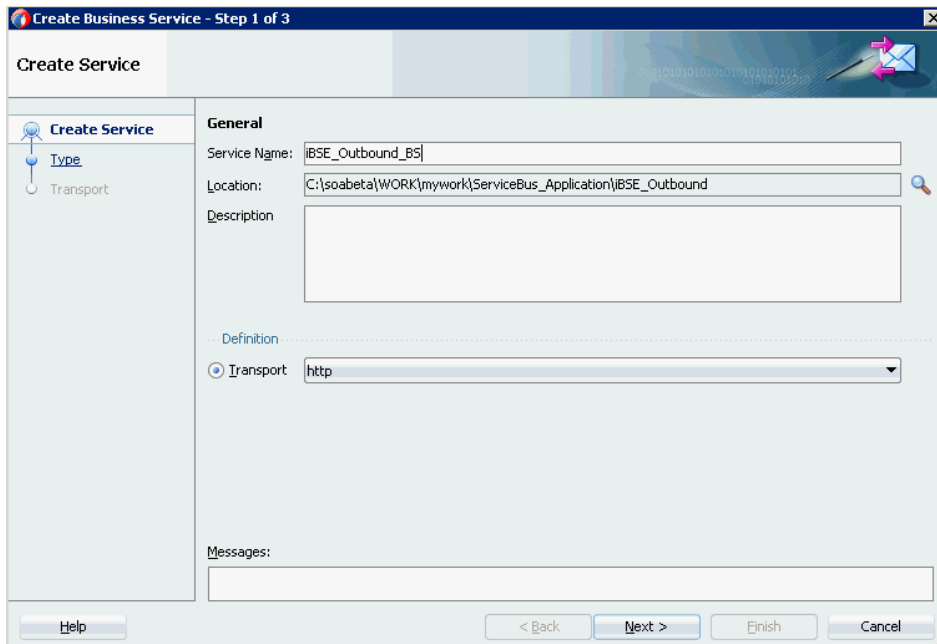
図 8-45 「HTTP」コンポーネント



「ビジネス・サービスの作成」ウィンドウが表示されます。

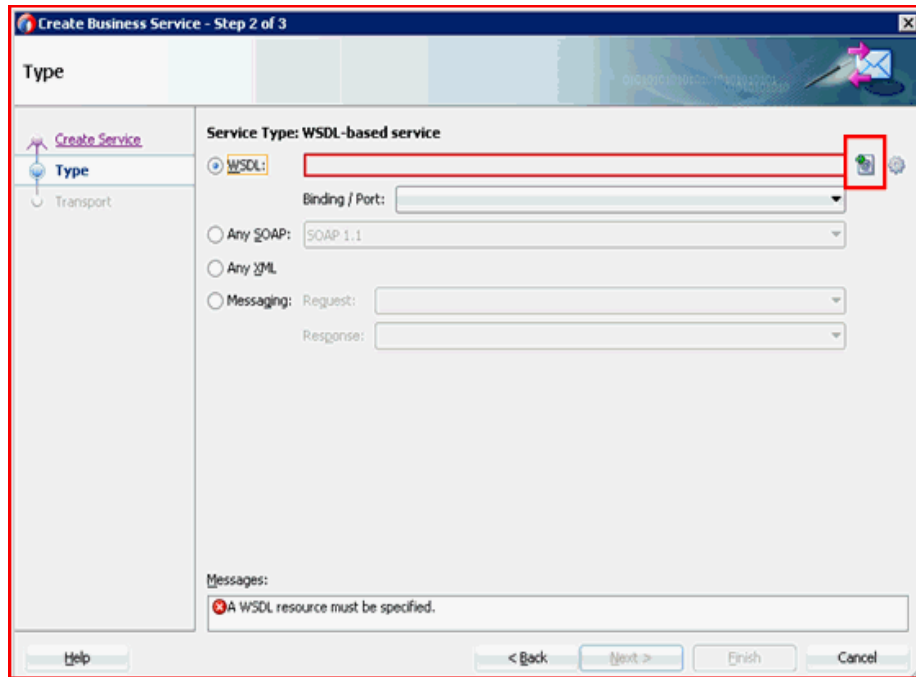
2. 図 8-46 に示すように、「サービス名」フィールドにビジネス・サービスの任意の名前を入力し、「次へ」をクリックします。

図 8-46 ビジネス・サービスの作成



3. 図 8-47 に示すように、表示された「サービス・タイプ」ウィンドウで、「WSDL」オプションを選択し、「WSDL の選択」アイコンをクリックします。

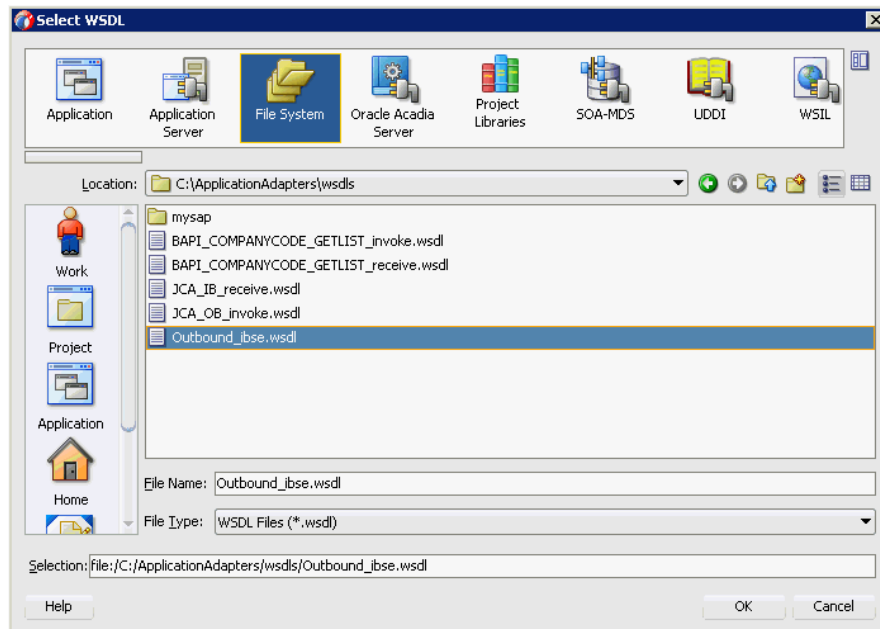
図 8-47 「タイプ」 ペイン



「WSDL の選択」 ウィンドウが表示されます。

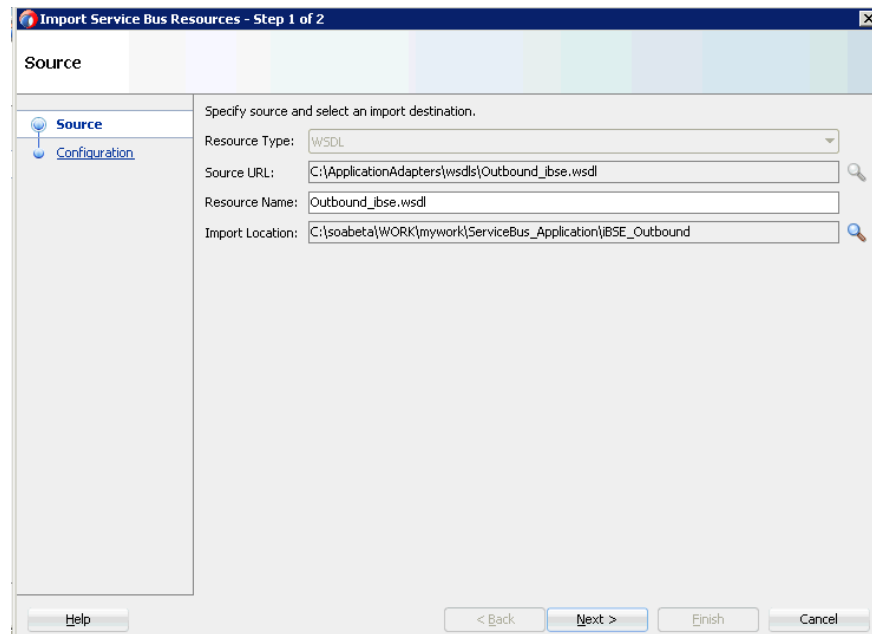
4. 図 8-48 に示すように、「ファイルシステム」フォルダ・アイコンを選択し、WSDL の場所をブラウズして iBSE WSDL ファイルを選択し、「OK」をクリックします。

図 8-48 「WSDL の選択」 ウィンドウ



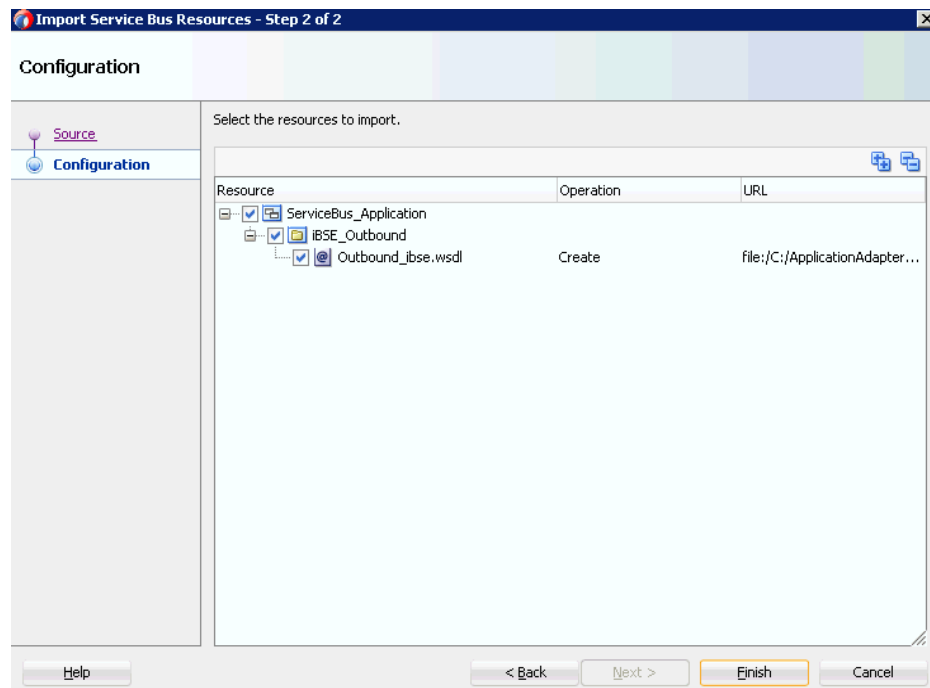
5. 図 8-49 に示すように、表示された「ソース」ペインで、「次へ」をクリックします。

図 8-49 「ソース」 ペイン



6. 図 8-50 に示すように、表示された「構成」ペインで、「終了」をクリックします。

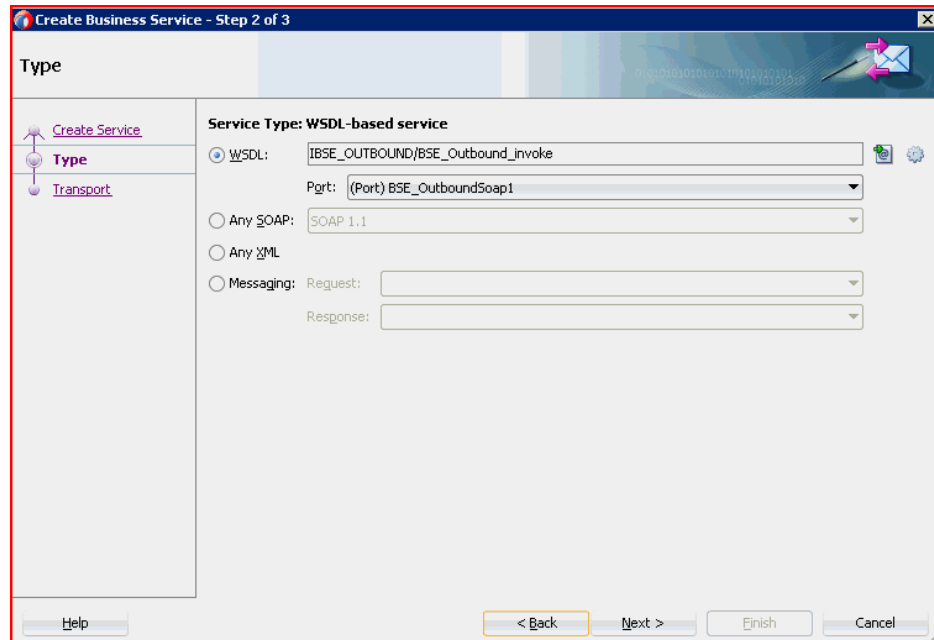
図 8-50 構成ペイン



「ビジネス・サービスの作成」ウィンドウに戻ります。

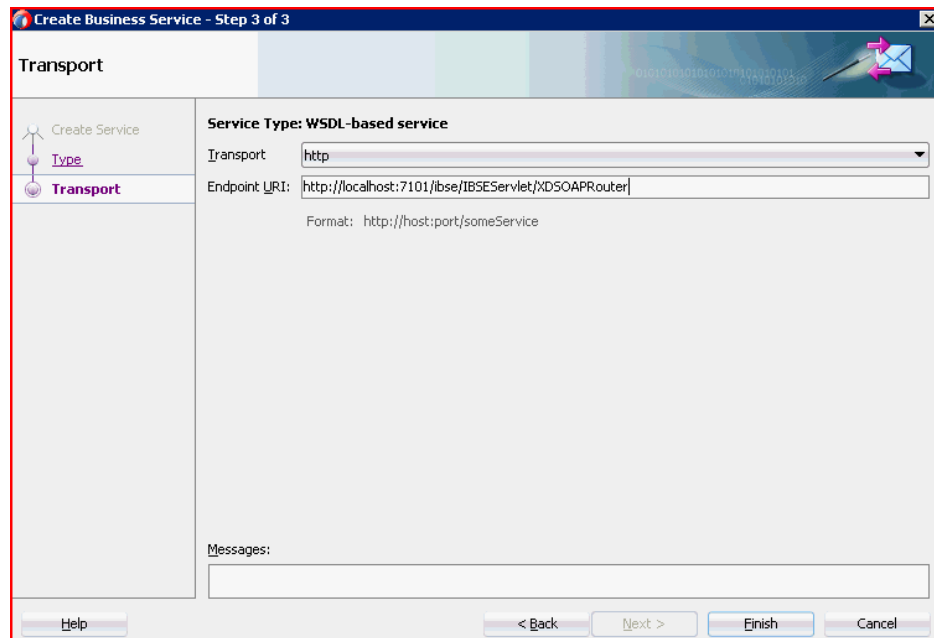
7. 図 8-51 に示すように、表示された「タイプ」ペインで、「次へ」をクリックします。

図 8-51 「タイプ」 ペイン



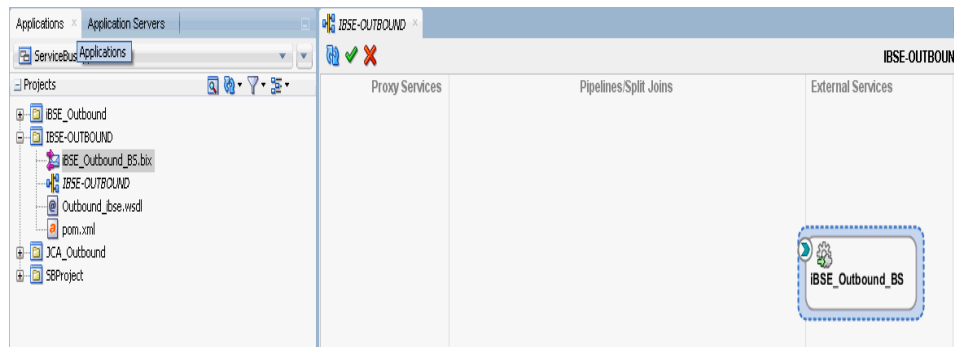
8. 図 8-52 に示すように、表示された「トランスポート」ウィンドウで、ホスト名やポート番号が異なる場合には「エンドポイント URI」フィールドを変更し、「終了」をクリックします。

図 8-52 「トランスポート」 ペイン



- 図 8-53 に示すように、ビジネス・サービスが作成され、「外部サービス」ペインに表示されます。

図 8-53 「外部サービス」 ペイン

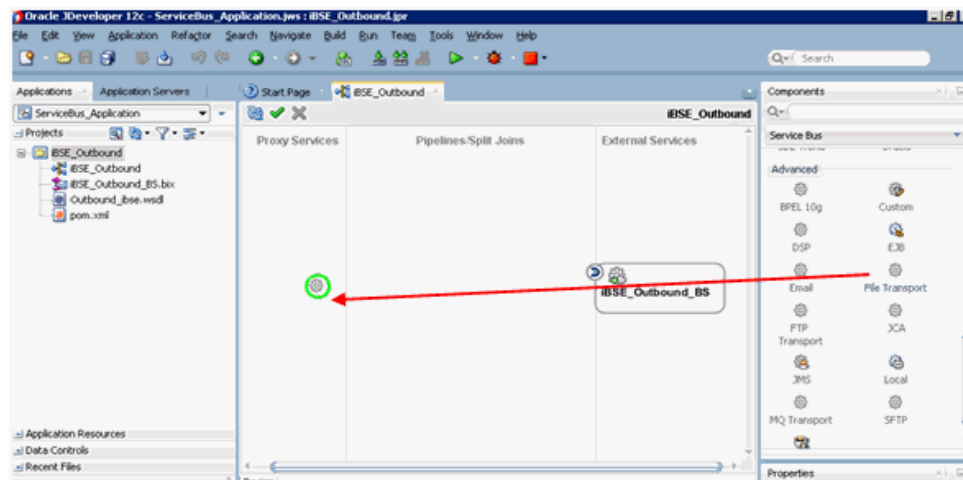


### 8.3.2.2 プロキシ・サービスとパイプラインの作成

プロキシ・サービスとパイプラインを作成するには、次のステップを実行します。

1. 図 8-54 に示すように、拡張コンポーネント・ペインから「ファイル・トランスポート」コンポーネントを「プロキシ・サービス」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

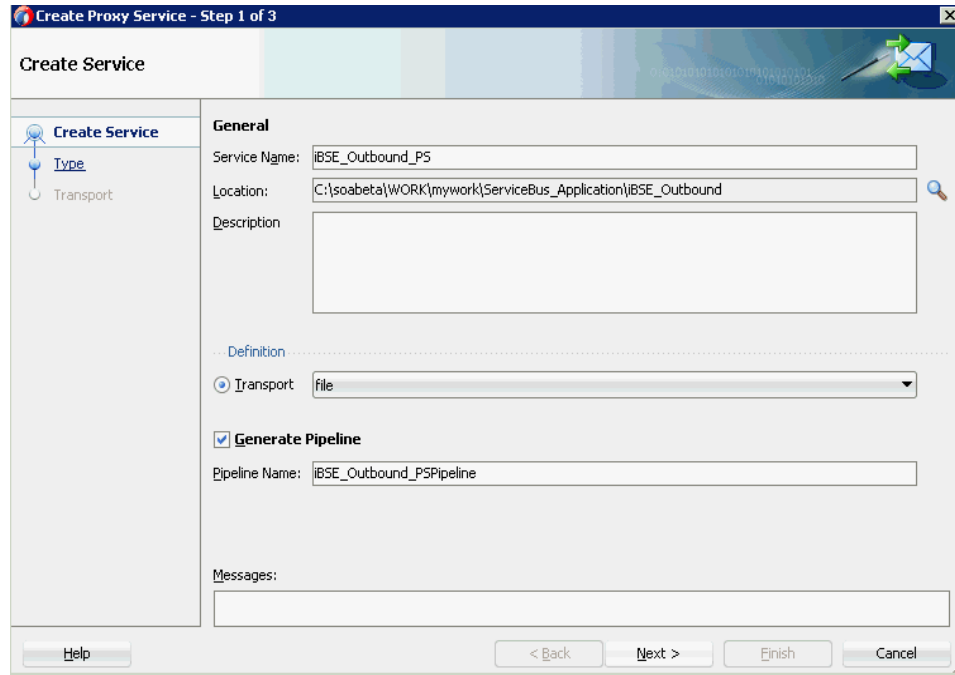
図 8-54 「ファイル・トランスポート」コンポーネント



「プロキシ・サービスの作成」 ペインが表示されます。

2. 「サービス名」フィールドにプロキシ・サービスの任意の名前を入力します (「JCA\_Outbound\_PS」など)。デフォルトで、「パイプラインの生成」が選択されています。
3. 図 8-55 に示すように、「次へ」をクリックします。

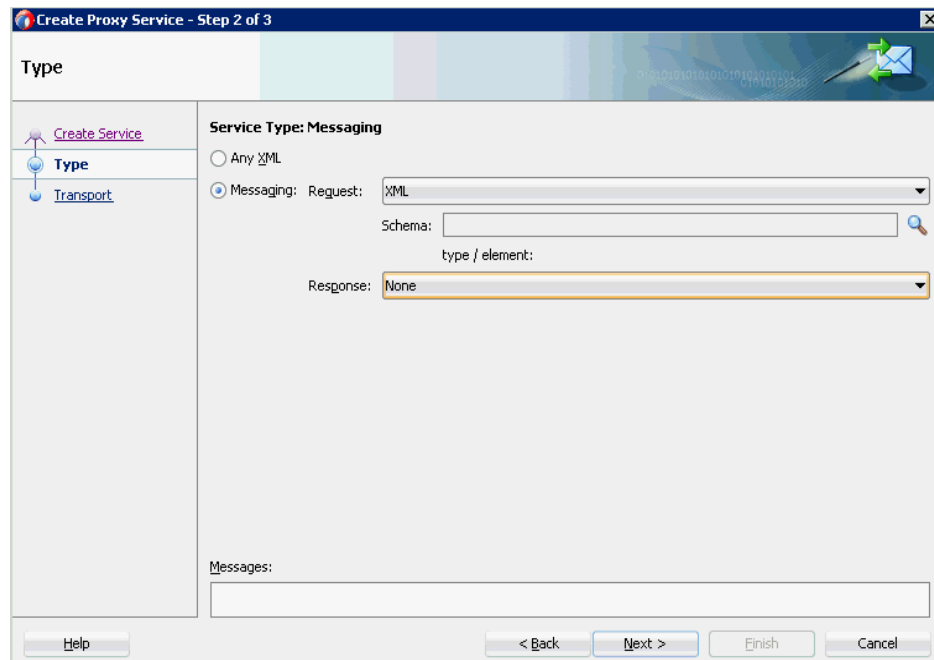
図 8-55 「サービスの作成」 ペイン



「タイプ」 ペインが表示されます。

4. 図 8-56 に示すように、メッセージング・オプションを選択し、「リクエスト」を「XML」に、「レスポンス」を「なし」に設定して、「次へ」をクリックします。

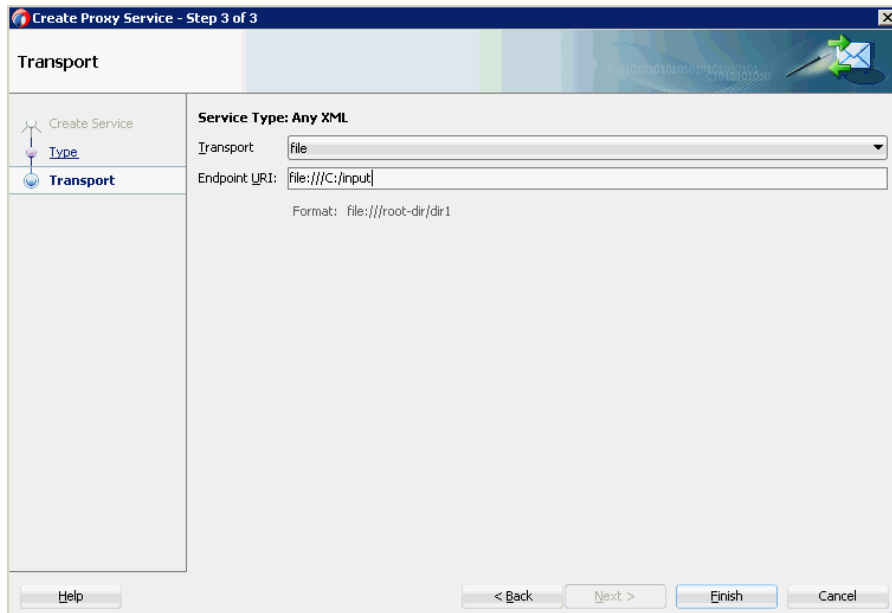
図 8-56 「タイプ」 ペイン



「トランスポート」 ウィンドウが表示されます。

5. 図 8-57 に示すように、「エンドポイント URI」 フィールドに入力場所を指定し（「c:/input」 など）、「終了」 をクリックします。

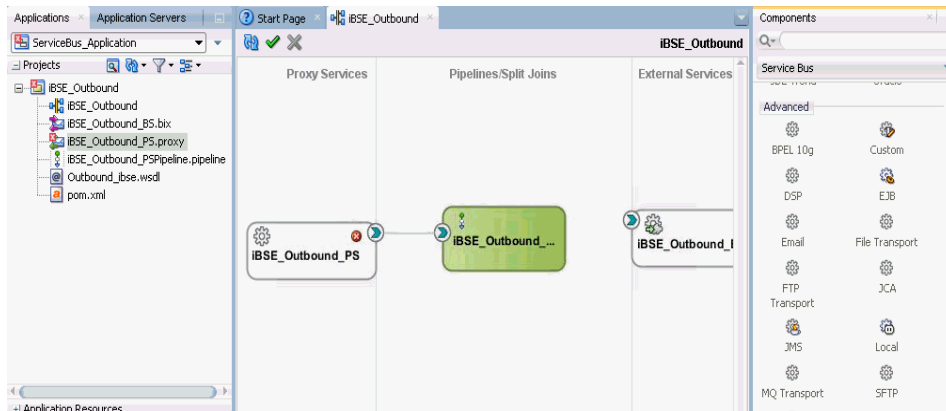
図 8-57 「トランスポート」 ウィンドウ



プロキシ・サービスとパイプラインが作成され、表示されます。

- 図 8-58 に示すように、作成されたプロキシ・サービス (「iBSE\_Outbound\_PS」など) をダブルクリックします。

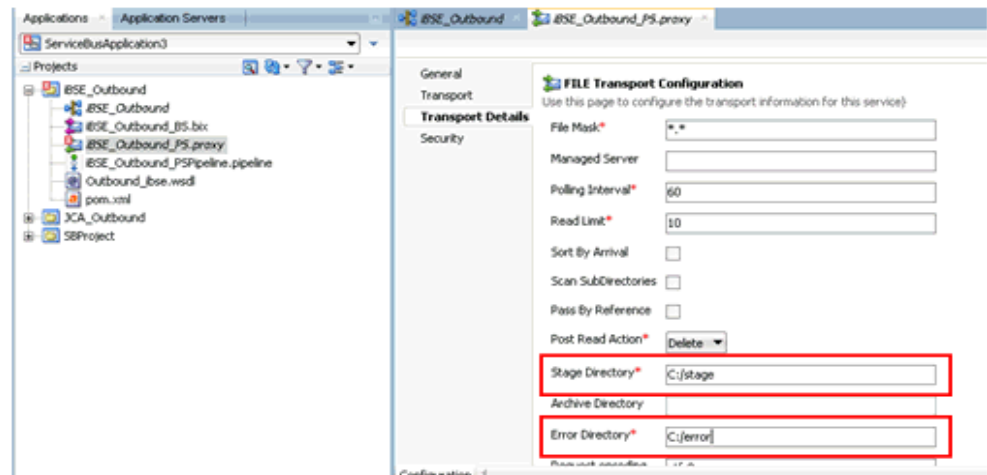
図 8-58 プロキシ・サービスの編集



- 図 8-59 に示すように、表示されたプロキシ・サービスの構成ページで、「トランスポートの詳細」を選択し、ステージ・ディレクトリとエラー・ディレクトリの値を入力します。

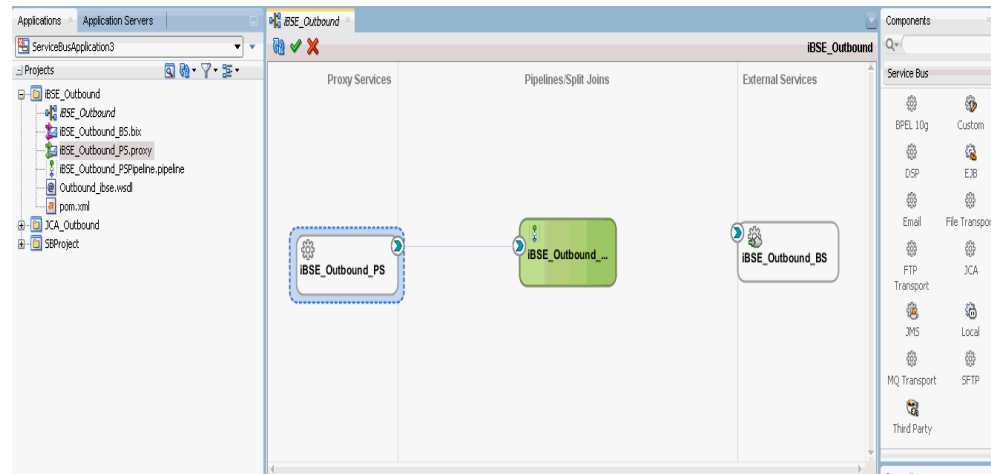


図 8-59 ファイル・トランスポート構成



8. 保存し、プロキシ・サービスの構成ページを閉じます。
9. overview.xml ファイル (「iBSE\_Outbound」など) をダブルクリックします。  
☒ 図 8-60 に示すように、プロキシ・サービスが更新されて表示されます。

図 8-60 プロキシ・サービス

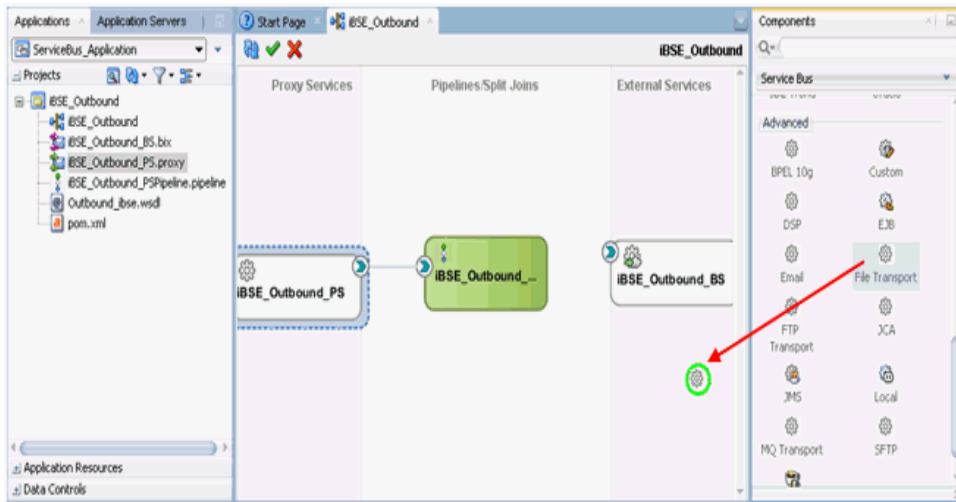


### 8.3.2.3 ファイル・トランスポート・タイプ・ビジネス・サービスの構成

ファイル・トランスポート・タイプ・ビジネス・サービスを作成するには、次のステップを実行します。

1. ☒ 図 8-61 に示すように、「拡張」ペインから「ファイル・トランスポート」コンポーネントを「外部サービス」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

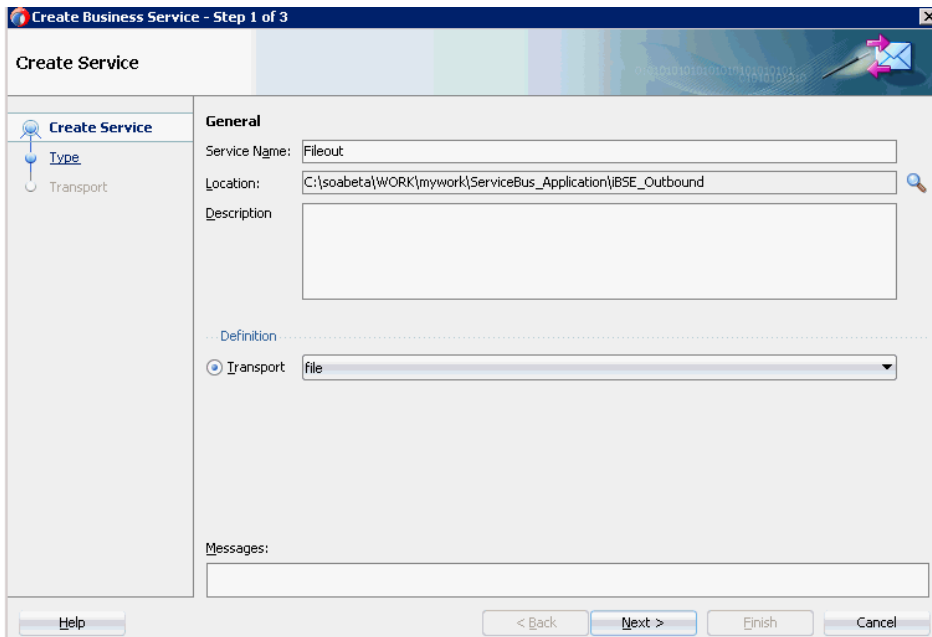
図 8-61 「ファイル・トランスポート」コンポーネント



「ビジネス・サービスの作成」ダイアログが表示されます。

2. 図 8-62 に示すように、「サービス名」フィールドにビジネス・サービスの任意の名前を入力し(「FileOut」など)、「次へ」をクリックします。

図 8-62 「サービスの作成」ペイン



「タイプ」ペインが表示されます。「任意の XML」オプションがデフォルトで選択されています。

3. 「次へ」をクリックします。  
「トランスポート」ペインが表示されます。
4. 図 8-63 に示すように、「エンドポイント URI」フィールドに出力場所を指定し(「c:/output」など)、「終了」をクリックします。

図 8-63 「トランスポート」 ペイン

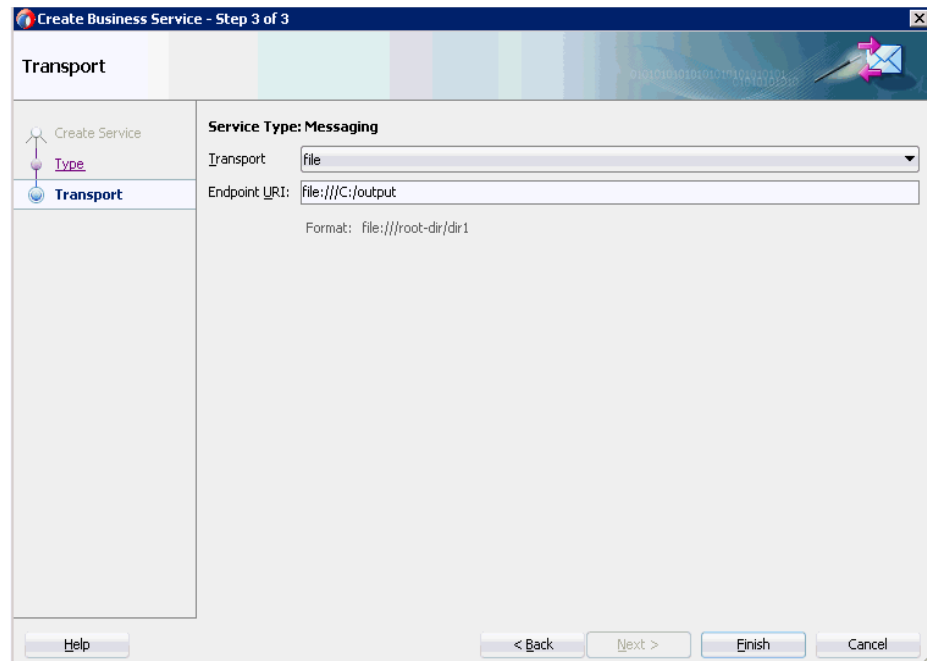
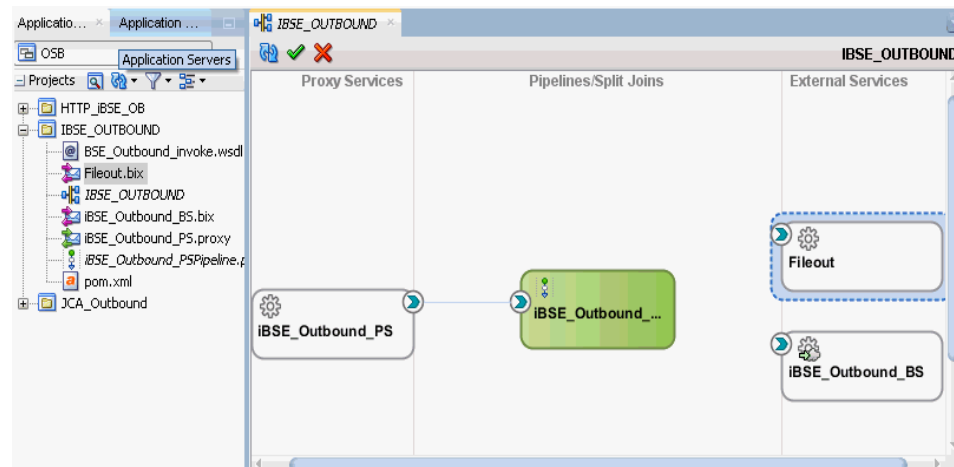


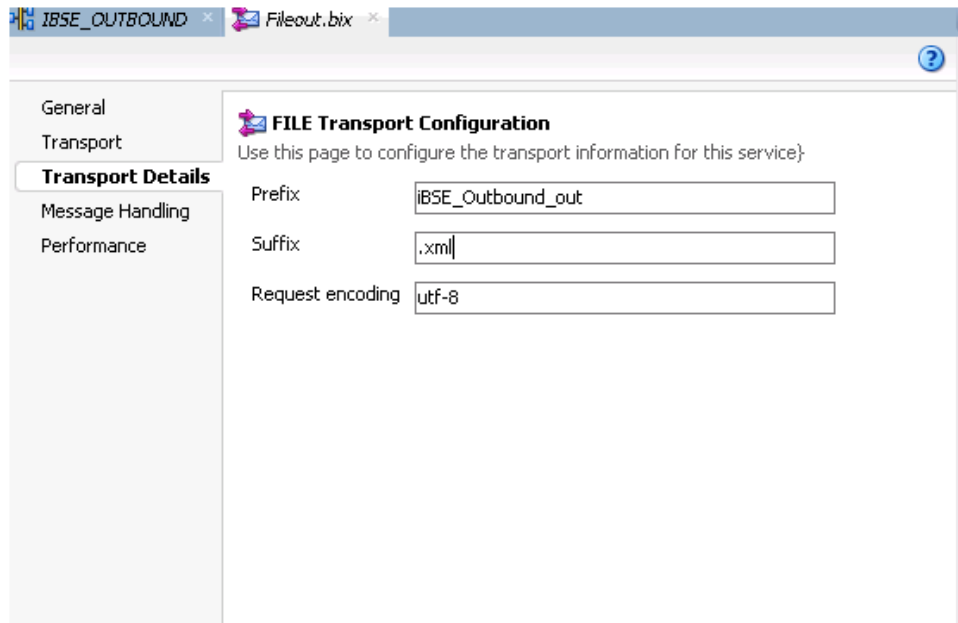
図 8-64 に示すように、ファイル・トランスポート・ビジネス・サービスの「FileOut」が作成され、表示されます。

図 8-64 「FileOut」 ビジネス・サービス



5. 作成されたビジネス・サービスの「FileOut」をダブルクリックし、図 8-65 に示すように、「トランスポートの詳細」タブの「接頭辞」フィールドと「接尾辞」フィールドに値を入力します。

図 8-65 トランスポートの詳細



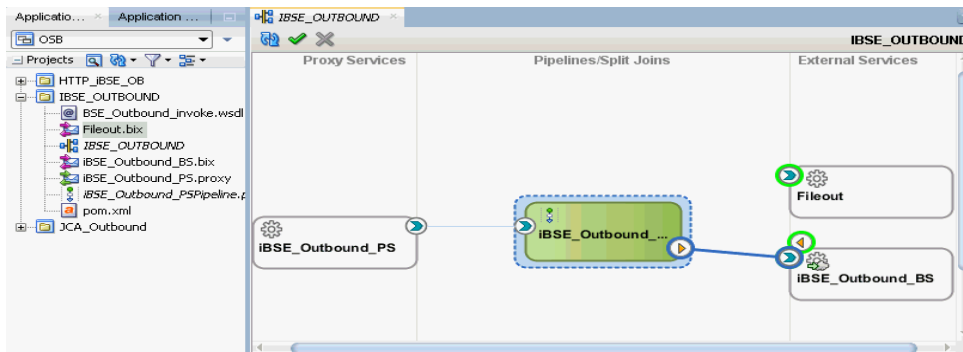
6. 保存し、構成ページを閉じて、overview.xml(「iBSE\_Outbound」など)をダブルクリックします。

### 8.3.2.4 ルーティング・ルール構成

ルーティング・ルールを構成するには、次のステップを実行します。

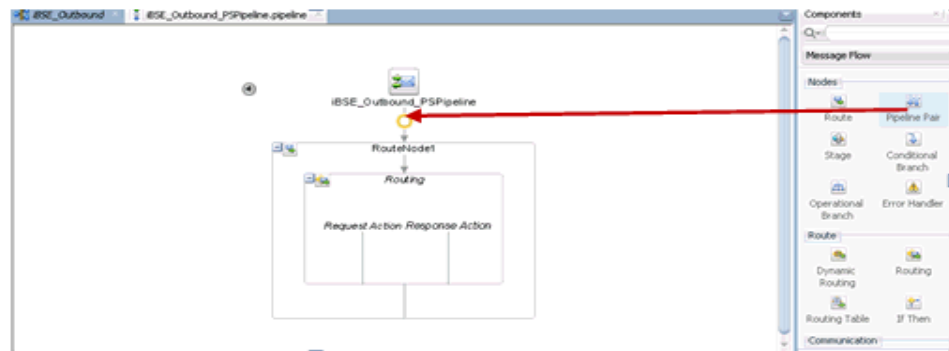
1. 図 8-66 に示すように、パイプライン・コンポーネント(「iBSE\_Outbound\_PSPipeline」など)と WSDL ベースのビジネス・サービス(「iBSE\_Outbound\_BS」など)の間に接続を作成します。

図 8-66 パイプライン・コンポーネント



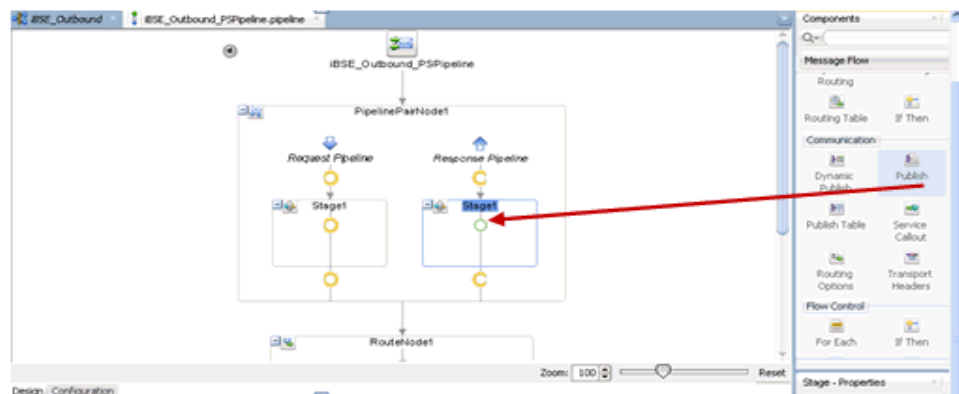
2. 「パイプライン/分割結合」ペインでパイプライン・コンポーネント(「iBSE\_Outbound\_PSPipeline」など)をダブルクリックします。
3. 図 8-67 に示すように、「ノード」ペインから「パイプライン・ペア」ノードをパイプライン(「iBSE\_Outbound\_PSPipeline」など)と RouteNode1 の間の領域にドラッグ・アンド・ドロップします。

図 8-67 「パイプライン・ペア」ノード



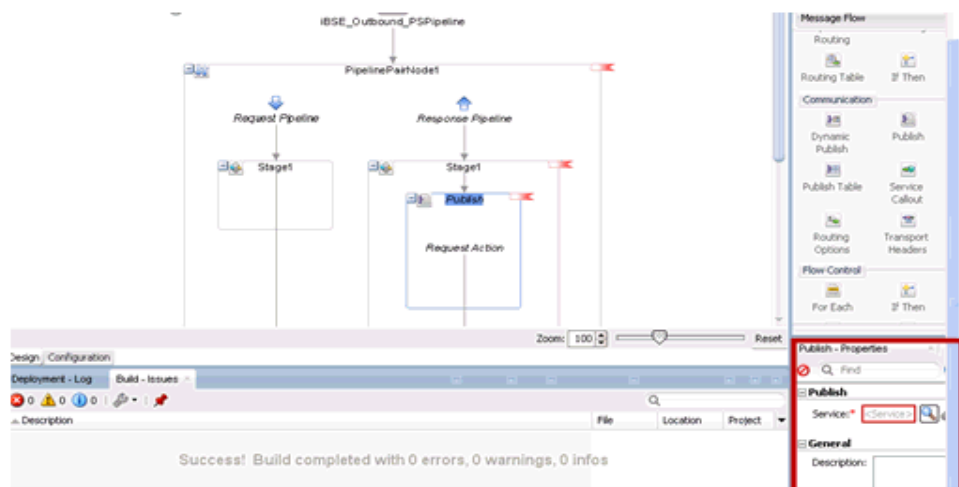
4. 図 8-68 に示すように、「通信」ペインから「公開」ノードを「レスポンス・パイプライン」の「ステージ 1」の下にある領域にドラッグ・アンド・ドロップします。

図 8-68 「公開」ノード



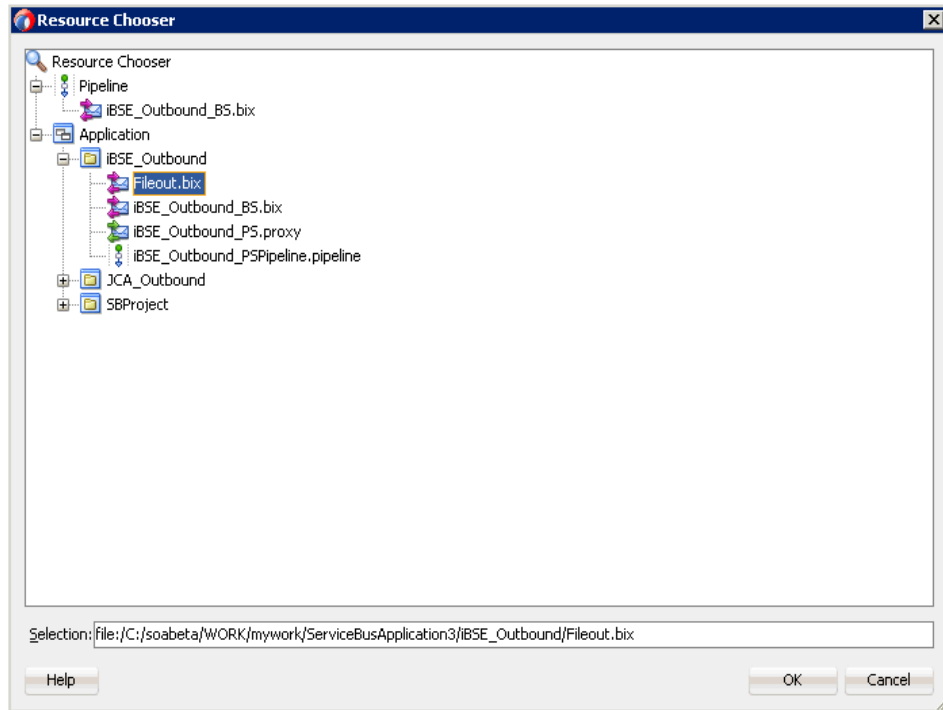
5. 図 8-69 に示すように、公開プロパティの右ペインでサービス・フィールドの右にある参照アイコンをクリックします。

図 8-69 参照アイコン



- 図 8-70 に示すように、表示された「リソース・チューザ」ウィンドウで、「Fileout.bix」ファイル・トランスポート・ビジネス・サービスを選択し、「OK」をクリックします。

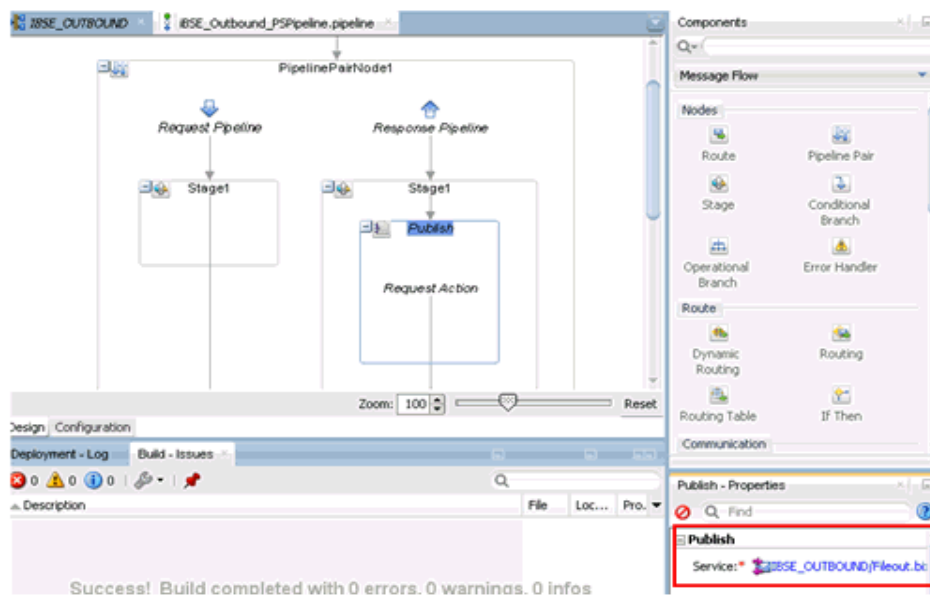
図 8-70 リソース・チューザ



パイプラインの構成ページに戻ります。

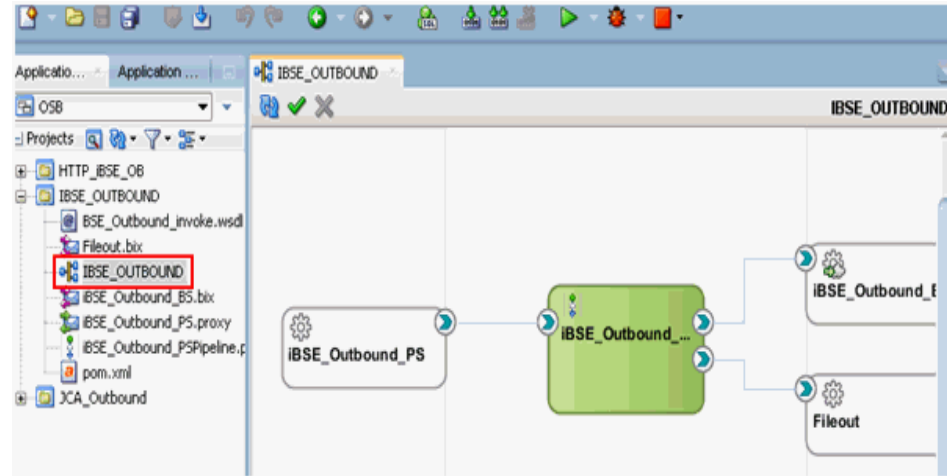
- 図 8-71 に示すように、右ペインで、選択したサービスが「公開」ペインに構成されます。

図 8-71 「公開」ペイン



7. 保存し、パイプラインの構成ページを閉じます。
8. 図 8-72 に示すように、overview.xml ファイル (「IBSE\_Outbound」など) をダブルクリックし、メニュー・バーの「すべて保存」をクリックして OSB プロセスを保存します。

図 8-72 「すべて保存」アイコン



### 8.3.3 OSB アウトバウンド・プロセスのデプロイ

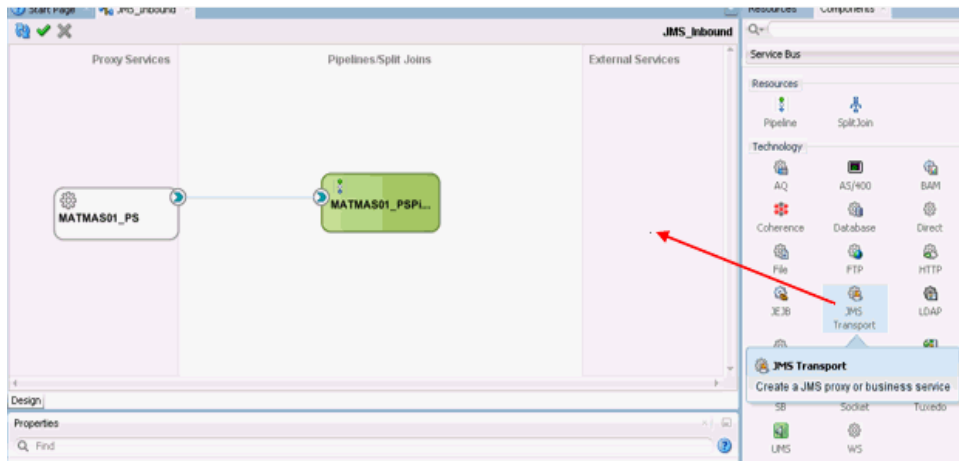
作成した OSB アウトバウンド・プロセスをデプロイし、入力 XML ドキュメントを起動するには、8.1.3 項「OSB アウトバウンド・プロセスのデプロイ」(8-16 ページ) を参照してください。

## 8.4 JDeveloper を使用した JMS インバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成)

この項では、J2CA 構成で Oracle JDeveloper を使用して PeopleSoft システム用に JMS インバウンド・プロセスを構成する方法について説明します。

1. JMS プロセスを設計する前に、アプリケーション・エクスプローラを使用して、各 WSDL ファイルを生成する必要があります。詳細は、4.5.1 項「イベント統合のための WSDL の生成」(4-35 ページ) を参照してください。
2. Oracle JDeveloper を起動し、OSB 用のサービス・バス・アプリケーションを作成します。詳細は、8.1.1 項「OSB 用のサービス・バス・アプリケーションの作成」(8-2 ページ) を参照してください。
3. サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントを作成します。詳細は、8.2.2.1 項「サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成」(8-19 ページ) を参照してください。
4. JCA バインディング・ファイルからプロキシ・サービスとパイプラインを作成します。詳細は、8.2.2.2 項「パイプラインの作成」(8-21 ページ) を参照してください。
5. JMS トランスポート・ビジネス・サービスを作成し、次のステップを実行します。
  - a. 図 8-73 に示すように、「テクノロジー・コンポーネント」ペインから「JMS トランスポート」コンポーネントを「外部サービス」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

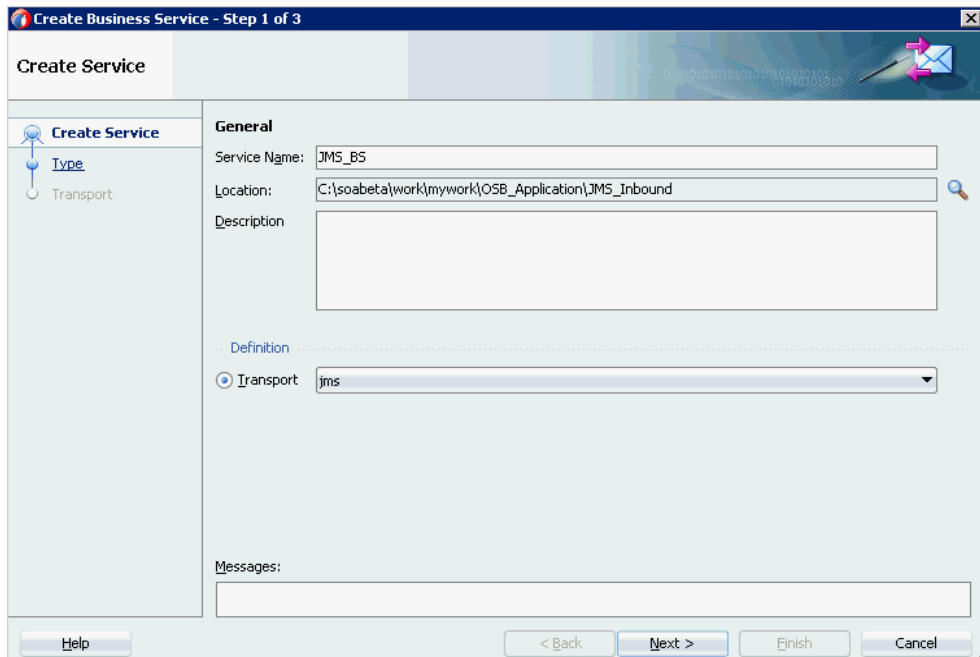
図 8-73 「JMS トランスポート」コンポーネント



「ビジネス・サービスの作成」ダイアログが表示されます。

- b. 図 8-74 に示すように、「サービス名」フィールドにビジネス・サービスの任意の名前を入力し (「JMS\_BS」など)、「次へ」をクリックします。

図 8-74 「サービスの作成」ペイン



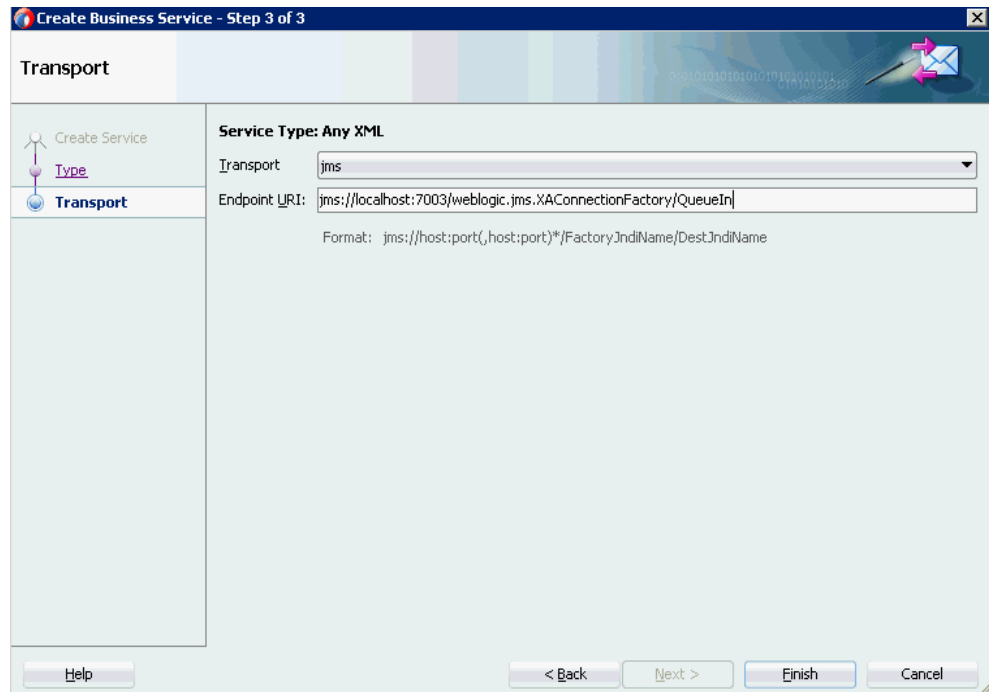
- c. 表示された「タイプ」ウィンドウで、「任意の XML」を選択し、「次へ」をクリックします。

「トランスポート」ウィンドウが表示されます。

- d. 図 8-75 に示すように、「エンドポイント URI」フィールドで「DestJndiName」を「QueueIn」に置き換えて適切なホスト名とポート番号に変更し (「jms://localhost:7003/weblogic.jms.XAConnectionFactory/QueueIn」など)、「終了」をクリックします。



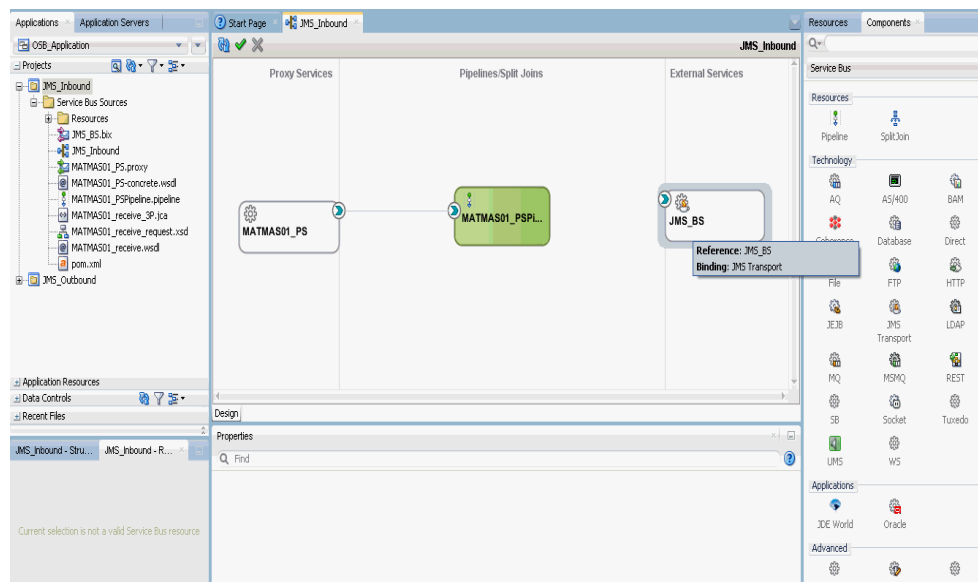
図 8-75 「トランスポート」 ウィンドウ



JMS ビジネス・サービスが作成され、表示されます。

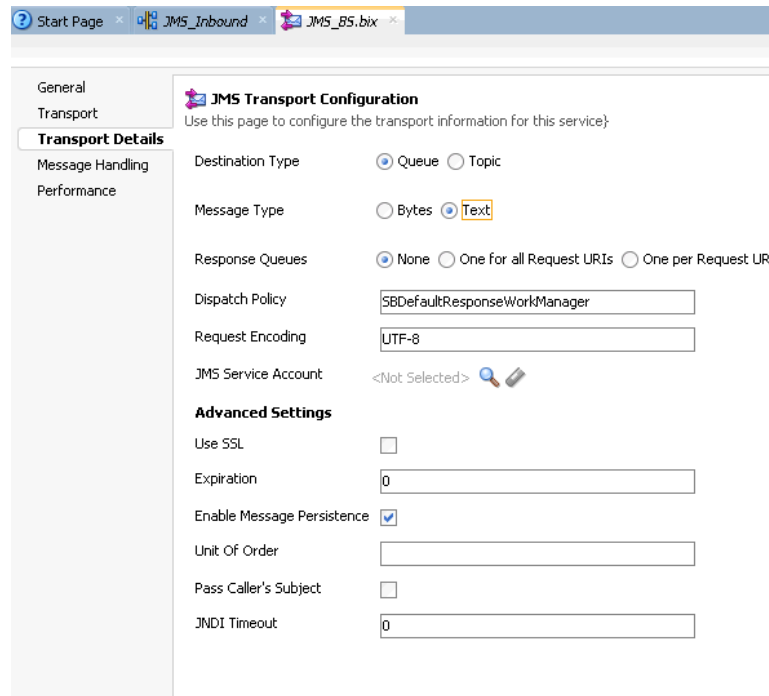
- e. 図 8-76 に示すように、「JMS\_BS」をダブルクリックします。

図 8-76 JMS ビジネス・サービス



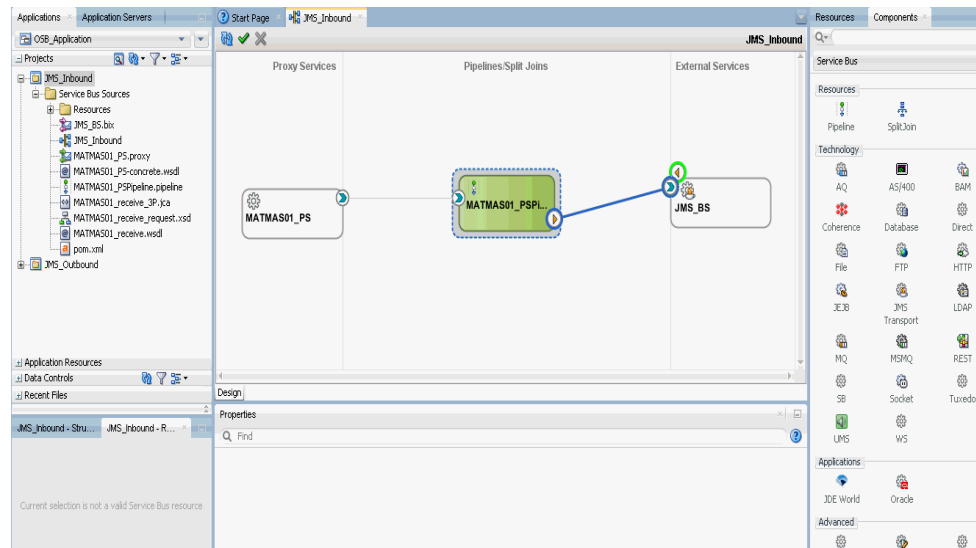
- f. 図 8-77 に示すように、表示されたビジネス・サービスの構成ページにおいて、「トランスポートの詳細」タブで次のパラメータを指定します。

図 8-77 JMS トランスポート構成



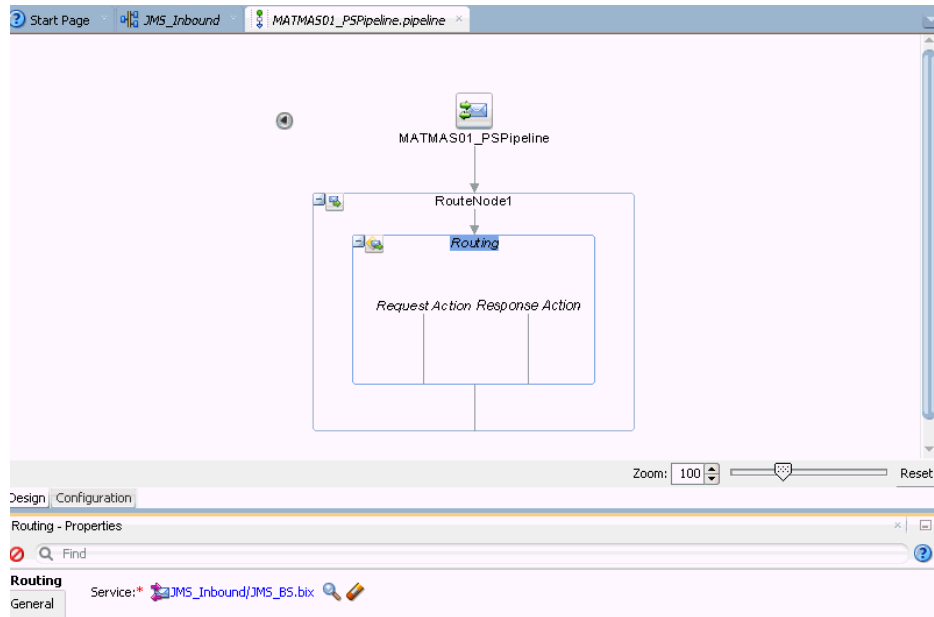
- g. 「宛先タイプ」セクションで、「キュー」を選択します。
  - h. 「メッセージ・タイプ」セクションで、「テキスト」を選択します。
6. 保存し、ビジネス・サービスの「構成」ページを閉じます。
  7. 図 8-78 に示すように、パイプライン (「xxxx\_PSPipeline」など) と JMS ビジネス・サービス (「JMS\_BS」など) の間に接続を作成します。

図 8-78 「構成」ページ



8. パイプラインをダブルクリックします。  
 図 8-79 に示すように、パイプラインの構成ページが表示されます。

図 8-79 パイプラインの構成

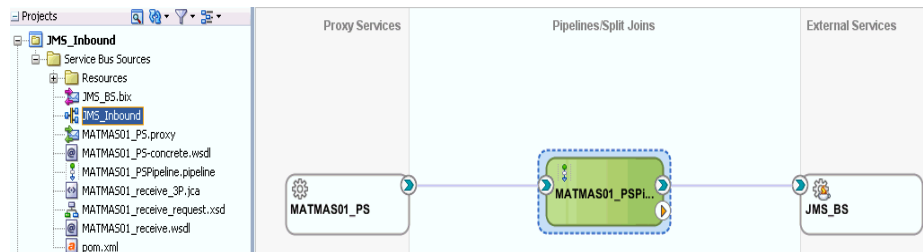


9. 詳細が適切に構成されていることを確認してから、保存し、パイプラインの構成ページを閉じます。

コンポジット・エディタ・ウィンドウに戻ります。

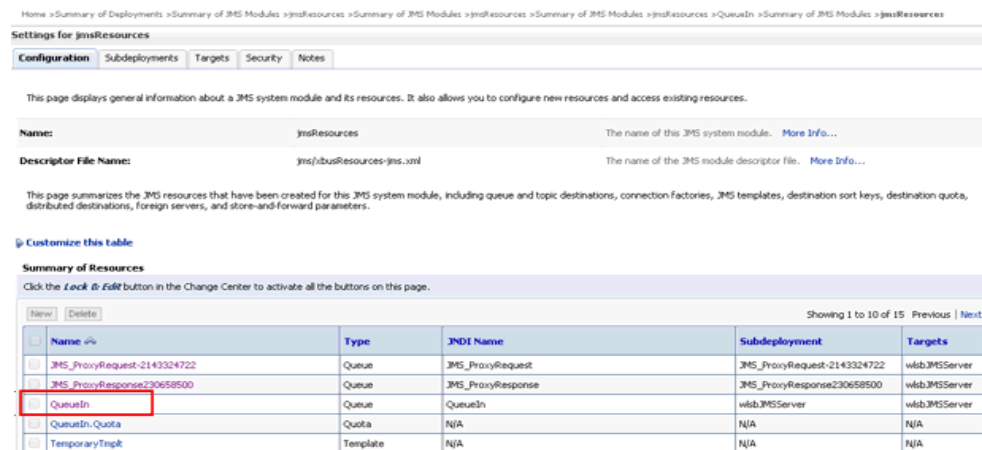
10. 図 8-80 に示すように、メニュー・バーで「すべて保存」をクリックして、OSB JMS プロセスを保存します。

図 8-80 「すべて保存」アイコン



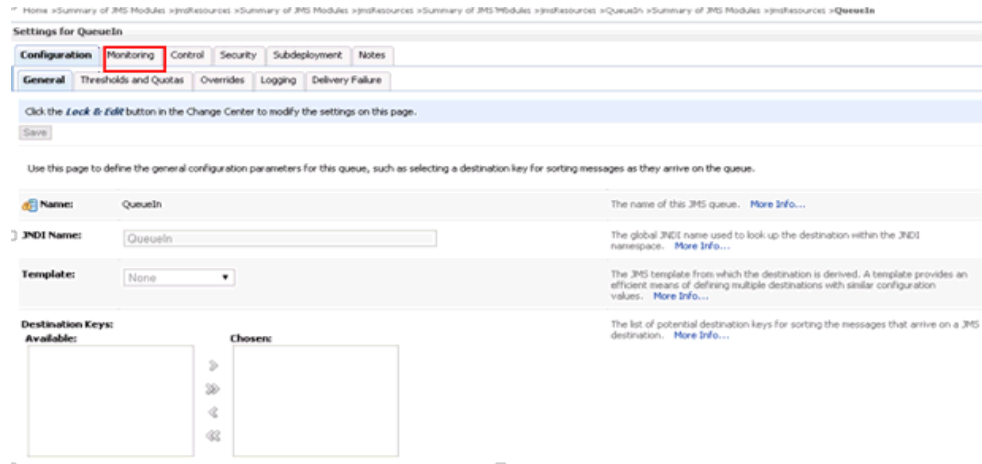
11. OSB JMS インバウンド・プロセスをデプロイします。詳細は、8.2.3 項「OSB インバウンド・プロセスのデプロイ」(8-26 ページ)を参照してください。
12. プロセスが正常にデプロイされた後、イベント・メッセージをトリガーします。詳細は、4.5.5 項「PeopleSoft でのイベントのトリガー」(4-47 ページ)を参照してください。
13. Oracle WLS コンソールにログオンします。
14. Oracle WLS コンソールで、「サービス」を展開し、「メッセージング」をクリックし、「JMS モジュール」を選択して、**jmsResources** をクリックします。
15. 図 8-81 に示すように、適切なレスポンス・リンク (「QueueIn」など) をクリックします。

図 8-81 「QueueIn」 レスポンス・リンク



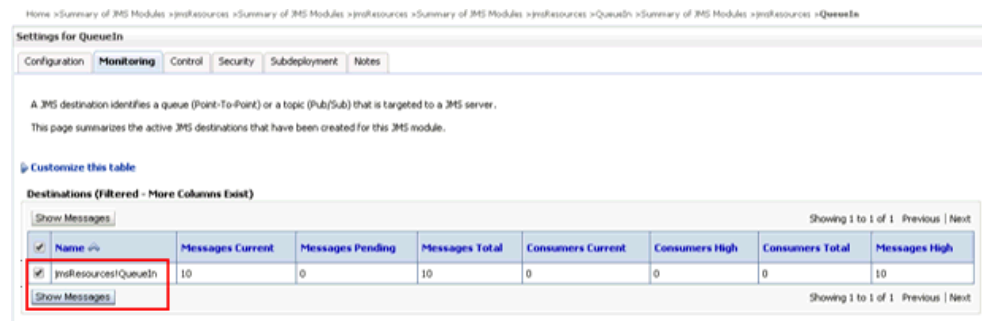
16. 図 8-82 に示すように、「モニタリング」タブをクリックします。

図 8-82 「モニタリング」タブ



17. 図 8-83 に示すように、チェック・ボックスを選択し、「メッセージの表示」ボタンをクリックします。

図 8-83 「メッセージの表示」ボタン



18. 適切な日時の ID リンクをクリックします。

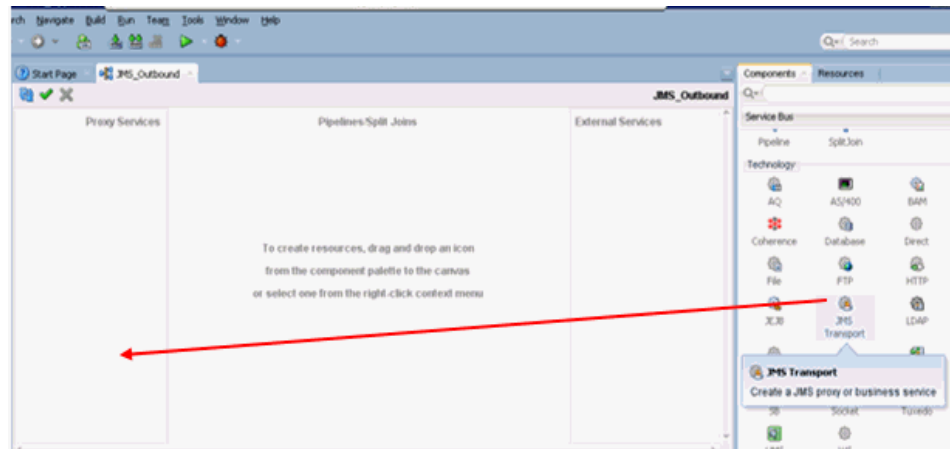
レスポンス・ドキュメントが「テキスト」フィールドの下に表示されます。

## 8.5 JDeveloper を使用した JMS アウトバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成)

この項では、J2CA 構成で Oracle JDeveloper を使用して PeopleSoft システム用に JMS アウトバウンド・プロセスを構成する方法について説明します。

1. JMS プロセスを設計する前に、アプリケーション・エクスプローラを使用して、各 WSDL ファイルを生成する必要があります。詳細は、4.4.1 項「リクエスト/レスポンス型のサービス用の WSDL の生成」(4-8 ページ) を参照してください。
2. Oracle JDeveloper を起動し、OSB 用のサービス・バス・アプリケーションを作成します。詳細は、8.1.1 項「OSB 用のサービス・バス・アプリケーションの作成」(8-2 ページ) を参照してください。
3. サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントを作成します。詳細は、8.1.2.1 項「サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成」(8-3 ページ) を参照してください。
4. JCA バインディング・ファイルから WSDL ベースのビジネス・サービスを作成します。詳細は、8.1.2.2 項「ファイル・トランスポート・タイプ・ビジネス・サービスの構成」(8-6 ページ) を参照してください。
5. JMS プロキシ・サービスとパイプラインを作成し、次のステップを実行します。
  - a. 図 8-84 に示すように、「テクノロジー・コンポーネント」ペインから「JMS トランスポート」コンポーネントを「プロキシ・サービス」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

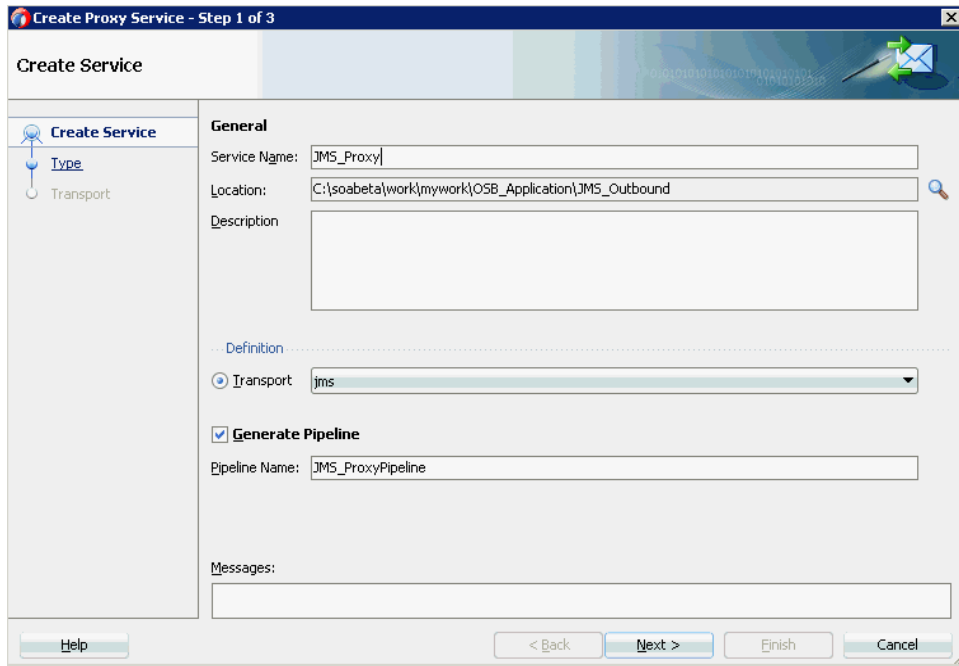
図 8-84 「JMS トランスポート」コンポーネント



「ビジネス・サービスの作成」ダイアログが表示されます。

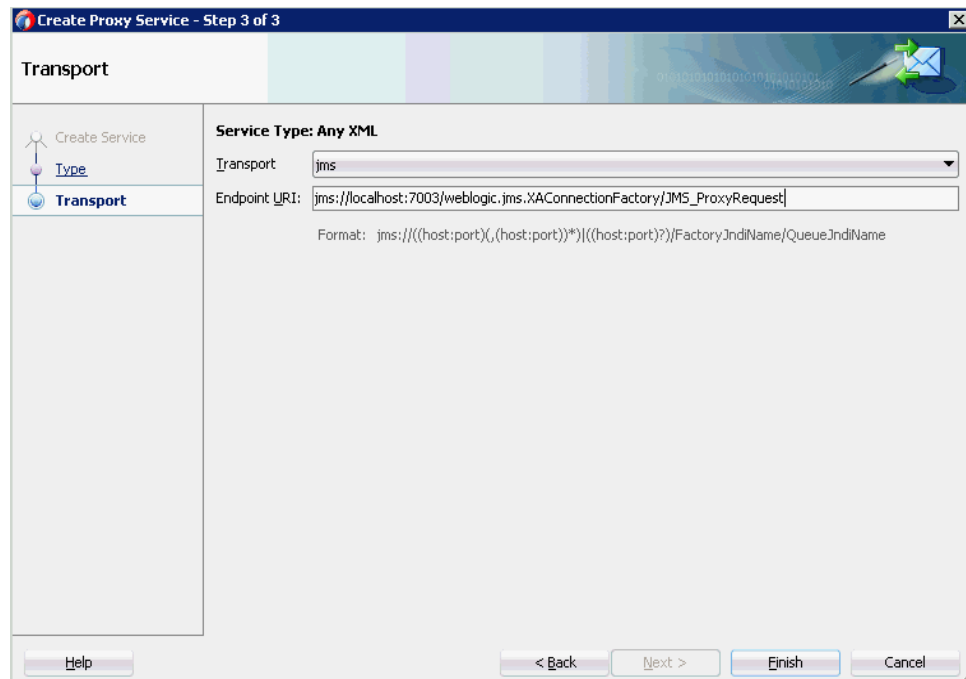
- b. 「サービス名」フィールドにプロキシ・サービスの任意の名前を入力します（「JMS\_Proxy」など）。デフォルトで、「パイプラインの生成」が選択されています。
- c. 図 8-85 に示すように、「次へ」をクリックします。

図 8-85 「プロキシ・サービスの作成」 ペイン



- d. 表示された「タイプ」ウィンドウで、「任意の XML」を選択し、「次へ」をクリックします。  
「トランスポート」ウィンドウが表示されます。
- e. 図 8-86 に示すように、「エンドポイント URI」フィールドを置き換えて適切なホスト名とポート番号に変更し (「jms://localhost:7003/weblogic.jms.XAConnectionFactory/JMS\_ProxyRequest」など)、「終了」をクリックします。

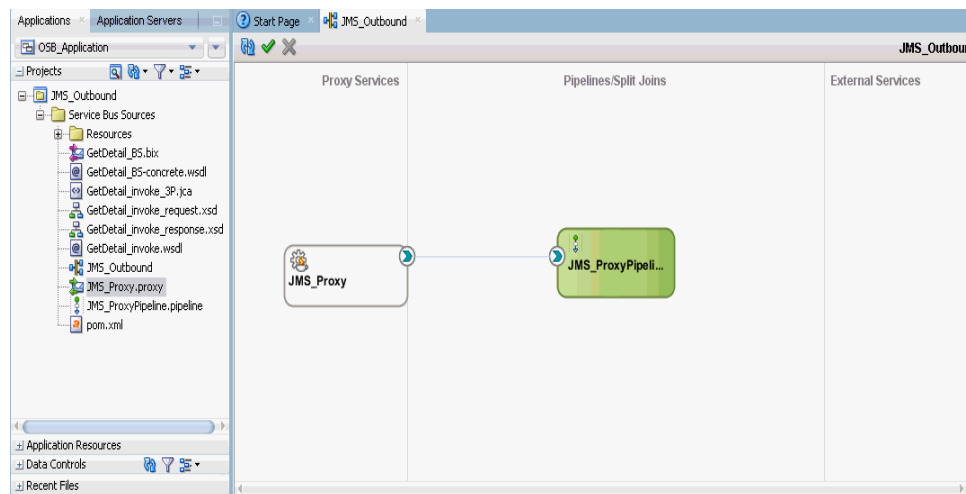
図 8-86 「トランスポート」 ウィンドウ



JMS プロキシ・サービスとパイプラインが作成され、表示されます。

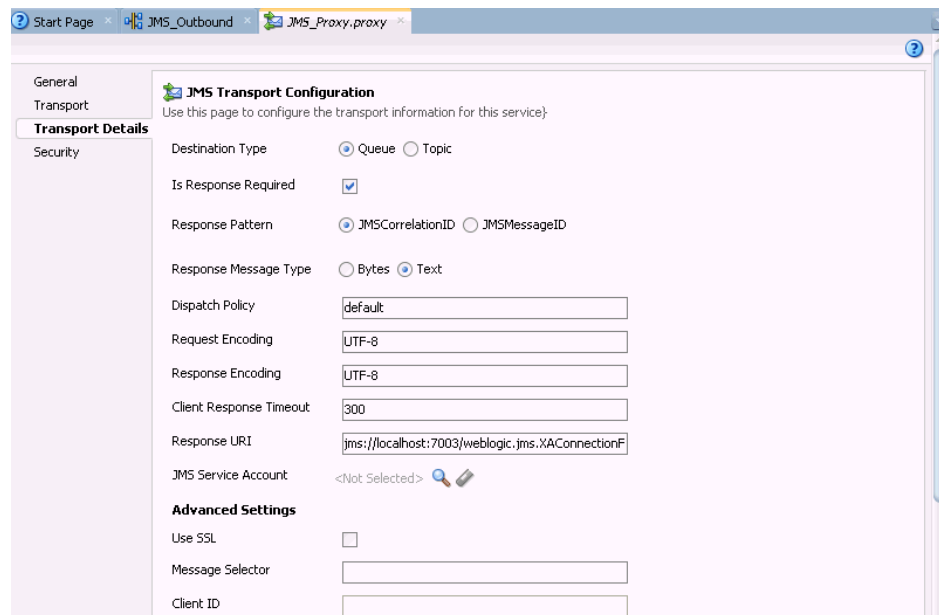
- f. 図 8-87 に示すように、作成されたプロキシ・サービス（「JMS\_Proxy」など）をダブルクリックします。

図 8-87 JMS プロキシ・サービス



- g. 図 8-88 に示すように、表示されたプロキシ・サービスの構成ページにおいて、「トランスポートの詳細」タブで次のパラメータを指定します。

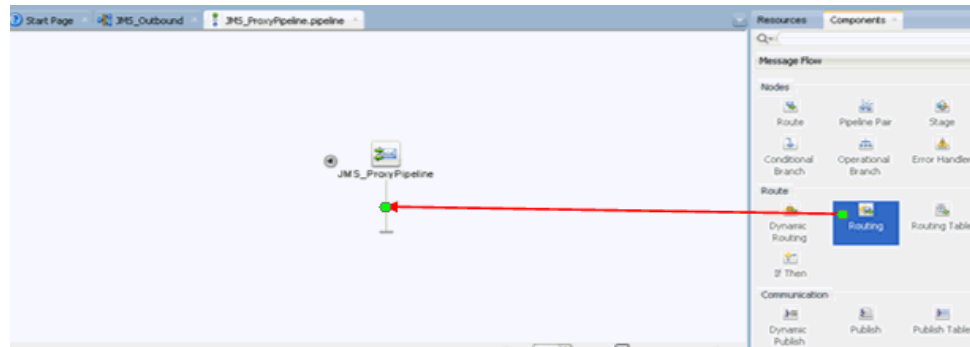
図 8-88 JMS トランスポート構成



- h. 「宛先タイプ」セクションで、「キュー」を選択します。
- i. レスポンスが必要チェック・ボックスを選択します。
- j. レスポンス・メッセージ・タイプセクションで、「テキスト」を選択します。
- k. 「レスポンス URI」フィールドに、JMS トランスポート構成で使用したエンドポイント URI を入力し、「Request」を「Response」に変更します。次に例を示します。  
`jms://localhost:7003/weblogic.jms.XAConnectionFactory/JMS_ProxyResponse`
6. 保存し、プロキシ・サービスの「構成」ページを閉じます。
7. ルーティング・ルールを構成し、次のステップを実行します。
  - a. 「パイプライン/分割結合」ペインでパイプライン(「JMS\_ProxyPipeline」など)をダブルクリックします。  
 パイプラインの構成ページが表示されます。
  - b. 図 8-89 に示すように、ルート・セクションからルーティング・コンポーネントをパイプライン(「JMS\_ProxyPipeline」など)の下にある領域にドラッグ・アンド・ドロップします。

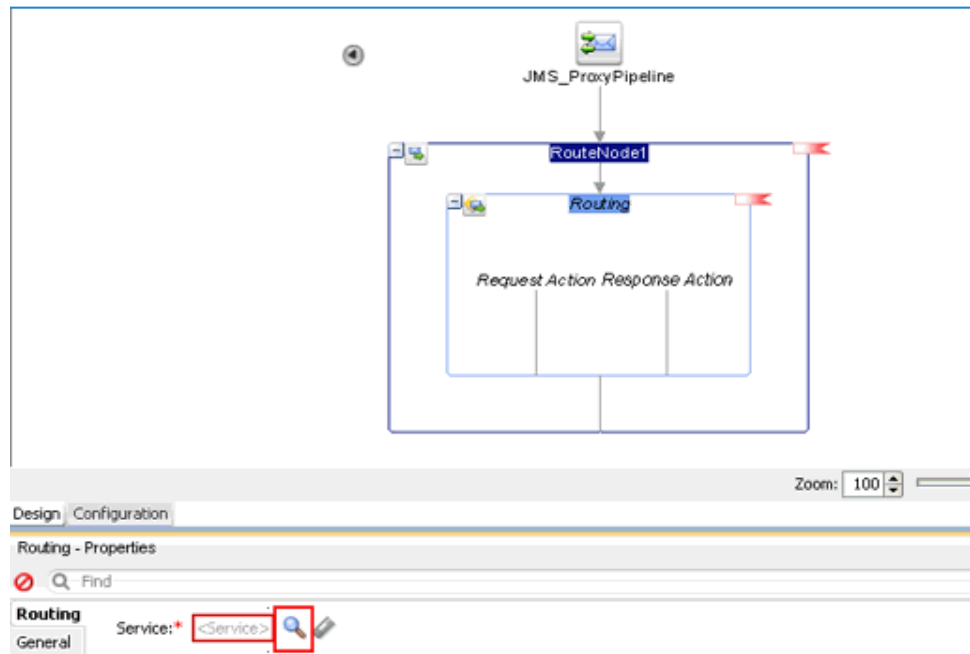


図 8-89 ルーティング・コンポーネント



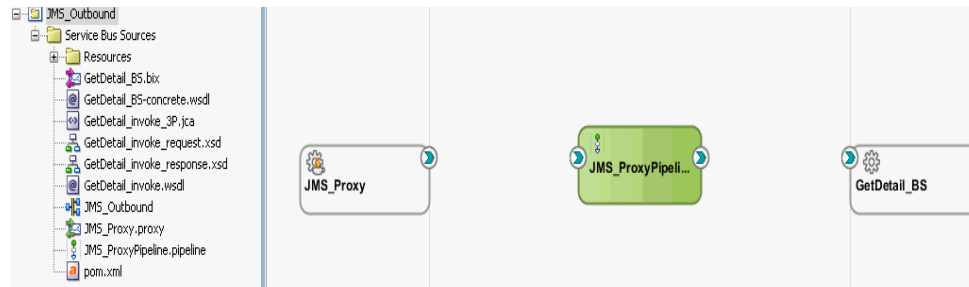
- c. 図 8-90 に示すように、パイプラインの構成ページで、ルーティングを選択し、ルーティング プロパティ・ペインのサービス・フィールドの右にある参照アイコンをクリックします。

図 8-90 サービスの参照



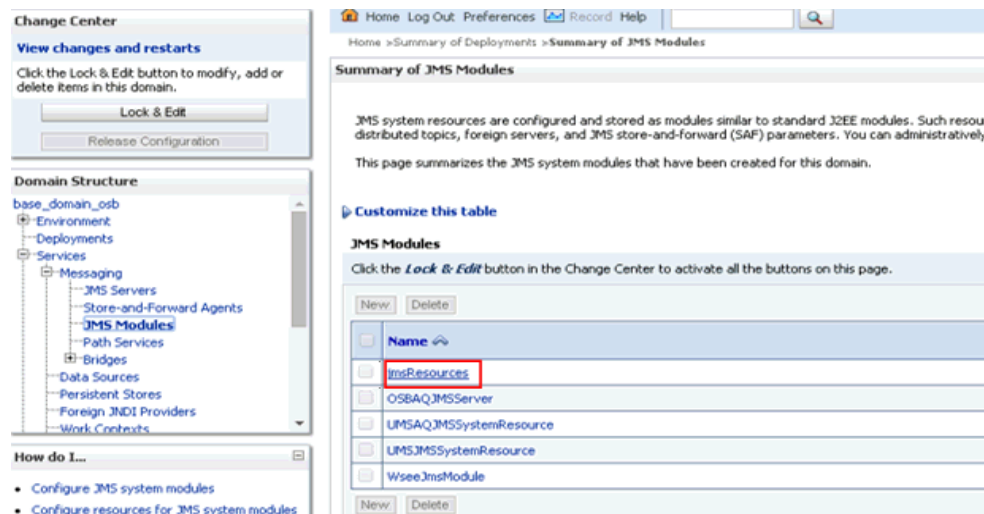
- d. 表示された「リソース・チューザ」ウィンドウで、WSDL ベースのビジネス・サービス (「xxxxx\_BS.bix」など) を選択し、「OK」をクリックします。  
パイプラインの構成ページに戻ります。
- e. 保存し、パイプラインの構成ページを閉じます。  
コンポジット・エディタ・ウィンドウに戻ります。
- f. 図 8-91 に示すように、メニュー・バーで「すべて保存」をクリックして、OSB JMS プロセスを保存します。

図 8-91 「トランスポート」 ウィンドウ



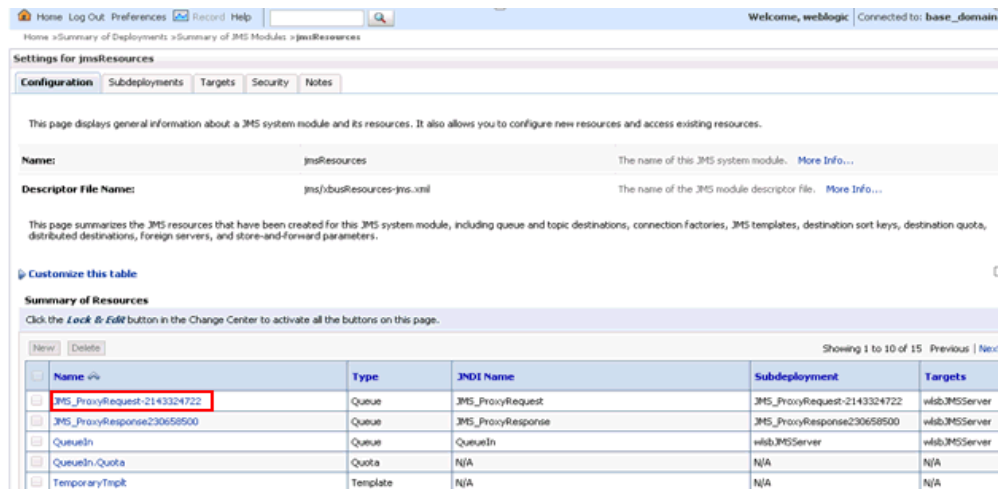
8. OSB JMS アウトバウンド・プロセスをデプロイします。詳細は、8.1.3 項「OSB アウトバウンド・プロセスのデプロイ」(8-16 ページ)を参照してください。
9. プロセスが正常にデプロイされた後、Oracle WLS コンソールにログオンします。
10. 図 8-92 に示すように、Oracle WLS コンソールで、「サービス」を展開し、「メッセージング」をクリックし、「JMS モジュール」を選択して、**jmsResources** をクリックします。

図 8-92 JMS リソース



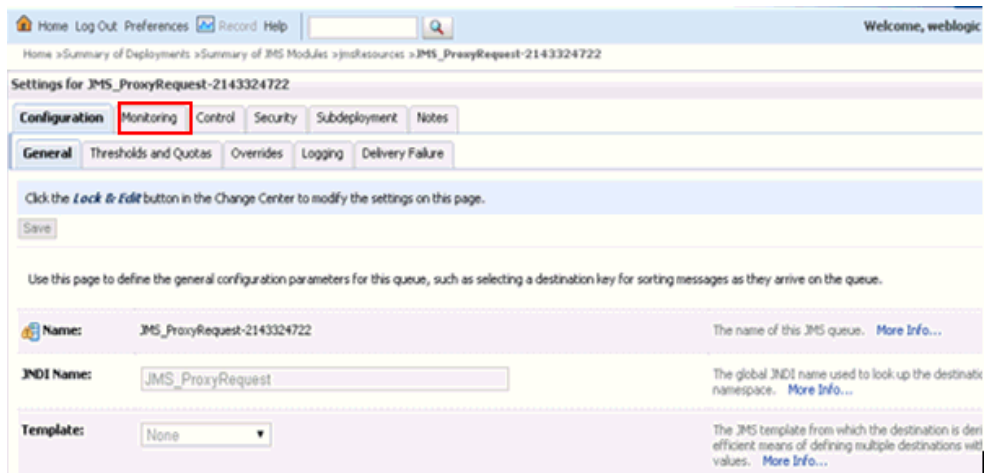
11. 図 8-93 に示すように、適切なリクエスト・リンク (「JMS\_ProxyRequest」など) をクリックします。

図 8-93 「JMS\_ProxyRequest」 リンク



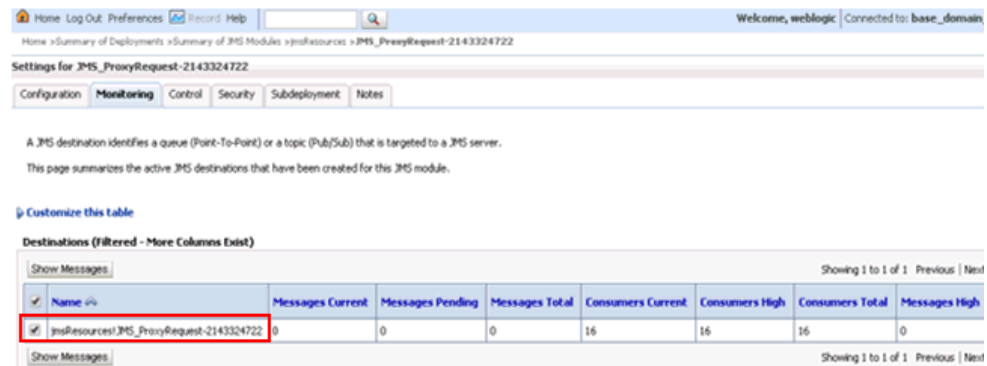
12. 図 8-94 に示すように、「モニタリング」タブをクリックします。

図 8-94 「モニタリング」タブ



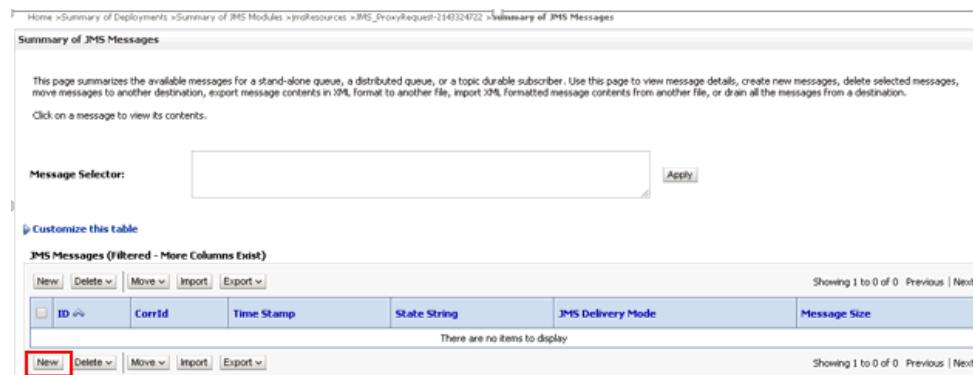
13. 図 8-95 に示すように、チェック・ボックスを選択し、「メッセージの表示」ボタンをクリックします。

図 8-95 「メッセージの表示」ボタン



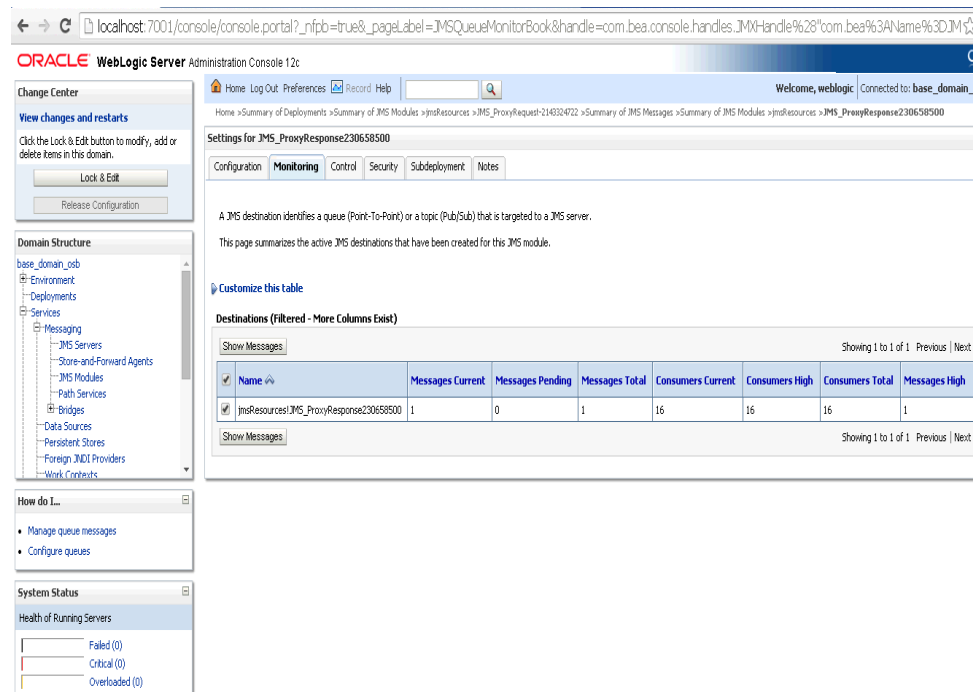
14. 図 8-96 に示すように、「新規」をクリックします。

図 8-96 JMS メッセージ



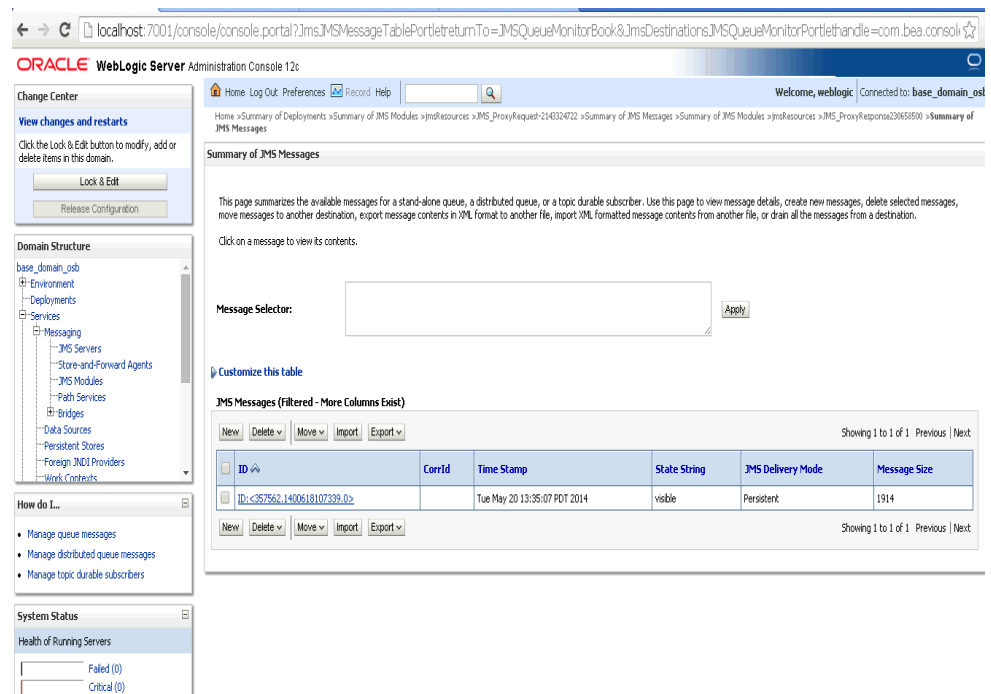
15. 「本文」フィールドに入力ペイロードを入力し、「OK」をクリックします。
16. Oracle WLS コンソールで、「サービス」を展開し、「メッセージング」をクリックし、「JMS モジュール」を選択して、**jmsResources** をクリックします。
17. 適切なレスポンス・リンク (「JMS\_ProxyResponse」など) をクリックします。
18. 「モニタリング」タブをクリックします。
19. 図 8-97 に示すように、チェック・ボックスを選択し、「メッセージの表示」をクリックします。

図 8-97 宛先のメッセージ



20. 図 8-98 に示すように、適切な日時の ID リンクをクリックします。

図 8-98 「JMS メッセージのサマリー」 ウィンドウ



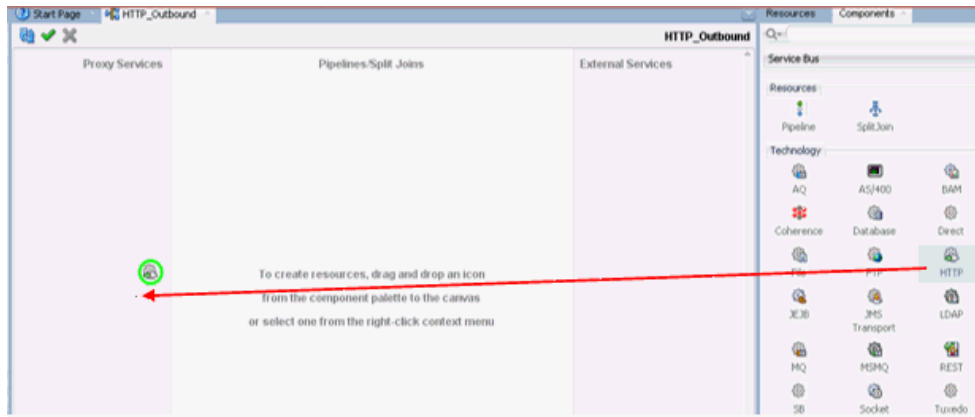
レスポンス・ドキュメントが「テキスト」フィールドの下に表示されます。

## 8.6 JDeveloper を使用した HTTP アウトバウンド・プロセスの構成 (J2CA 構成)

この項では、J2CA 構成で Oracle JDeveloper を使用して PeopleSoft システム用に HTTP アウトバウンド・プロセスを構成する方法について説明します。

1. HTTP アウトバウンド・プロセスを設計する前に、アプリケーション・エクスプローラを使用して各 WSDL ファイルを生成する必要があります。詳細は、[4.4.1 項「リクエスト/レスポンス型のサービス用の WSDL の生成」](#) (4-8 ページ) を参照してください。
2. Oracle JDeveloper を起動し、OSB 用のサービス・バス・アプリケーションを作成します。詳細は、[8.1.1 項「OSB 用のサービス・バス・アプリケーションの作成」](#) (8-2 ページ) を参照してください。
3. サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントを作成します。詳細は、[8.1.2.1 項「サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成」](#) (8-3 ページ) を参照してください。
4. HTTP プロキシ・サービスとパイプラインを作成し、次のステップを実行します。
  - a. [図 8-99](#) に示すように、「テクノロジー・コンポーネント」ペインから「HTTP」コンポーネントを「プロキシ・サービス」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。

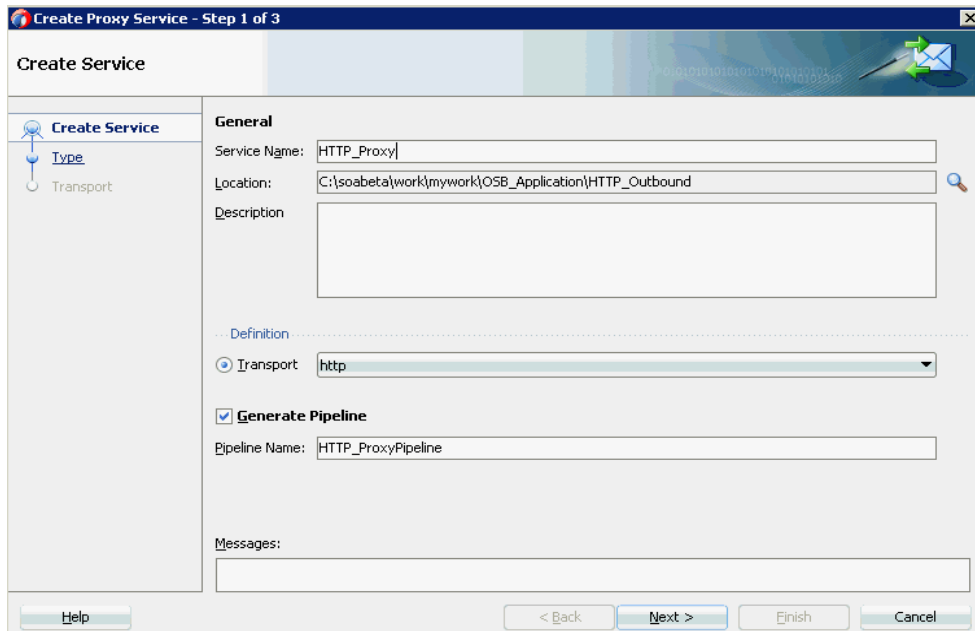
図 8-99 「HTTP」コンポーネント



「プロキシ・サービスの作成」ダイアログが表示されます。

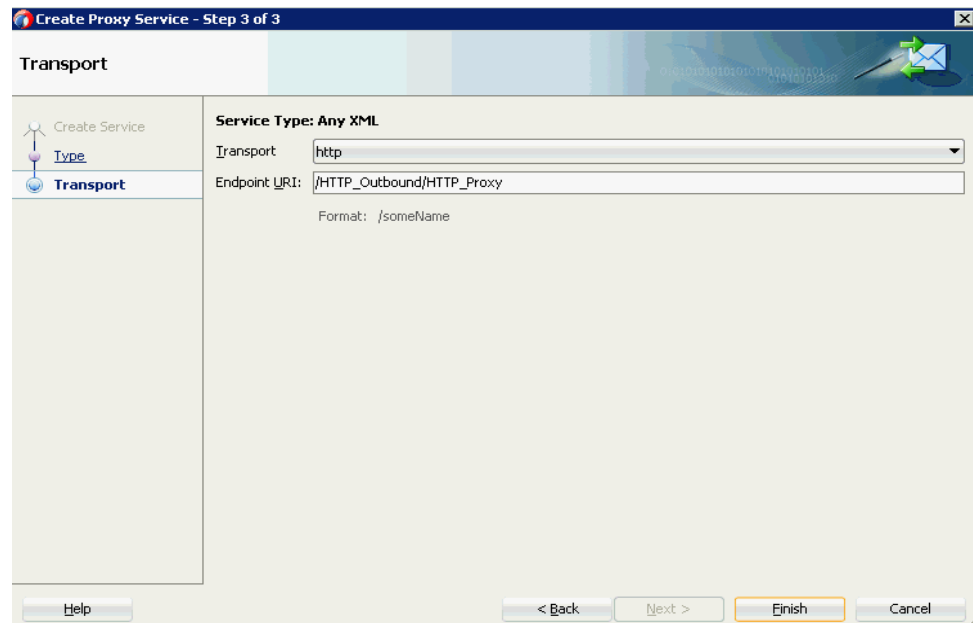
- b. 「サービス名」フィールドにプロキシ・サービスの任意の名前を入力します (「HTTP\_Proxy」など)。デフォルトで、「パイプラインの生成」が選択されています。
- c. 図 8-100 に示すように、「次へ」をクリックします。

図 8-100 「プロキシ・サービスの作成」ペイン



- d. 表示された「タイプ」ウィンドウで、「任意の XML」を選択し、「次へ」をクリックします。  
「トランスポート」ウィンドウが表示されます。
- e. 図 8-101 に示すように、デフォルト値をそのまま使用し、「終了」をクリックします。

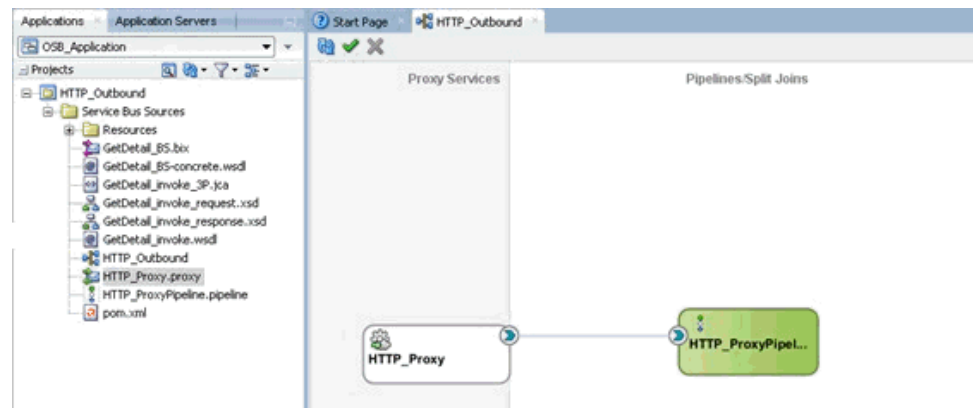
図 8-101 「トランスポート」ウィンドウ



HTTP プロキシ・サービスとパイプラインが作成され、表示されます。

- f. [図 8-102](#) に示すように、「パイプライン/分割結合」ペインで作成されたパイプライン(「HTTP\_ProxyPipeline」など)をダブルクリックします。

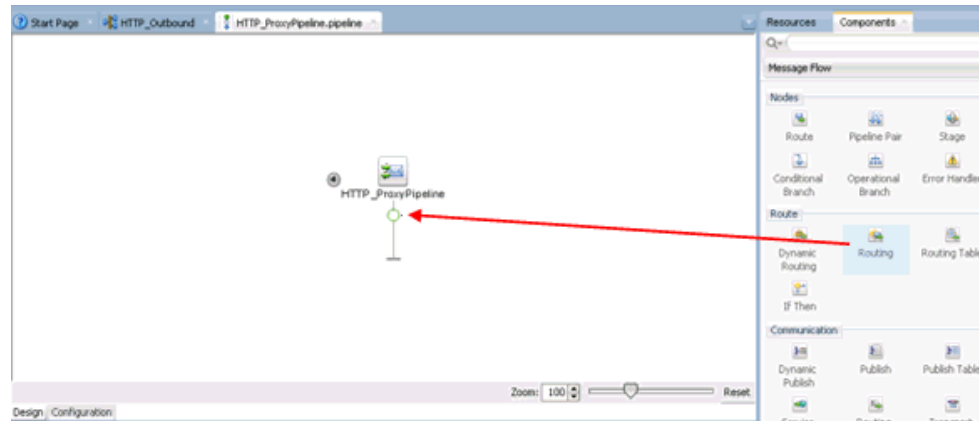
図 8-102 プロキシ・サービス



パイプラインの構成ページが表示されます。

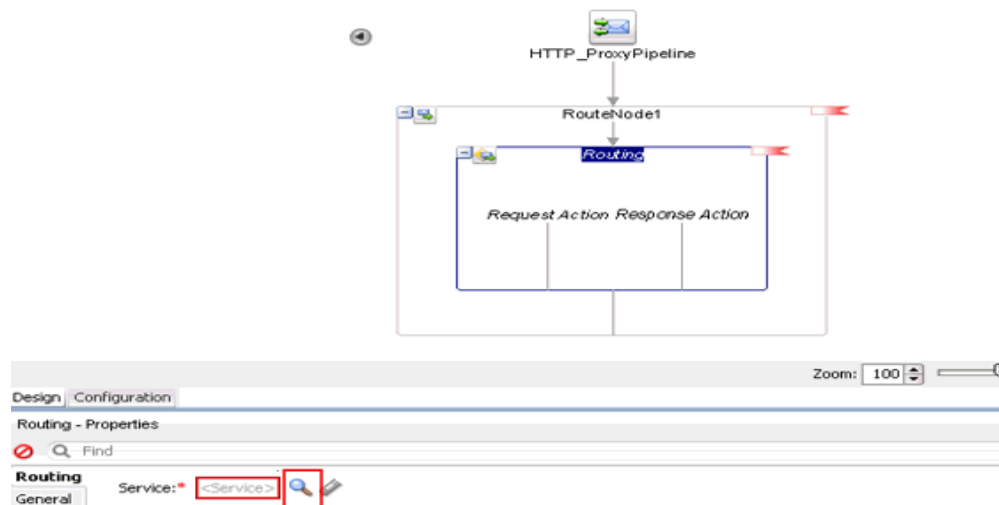
5. ルーティング・ルールを構成し、次のステップを実行します。
  - a. [図 8-103](#) に示すように、ルート・セクションからルーティング・コンポーネントをパイプライン(「HTTP\_ProxyPipeline」など)の下にある領域にドラッグ・アンド・ドロップします。

図 8-103 ルーティング・コンポーネント



- b. 図 8-104 に示すように、パイプラインの構成ページで、ルーティングを選択し、ルーティングプロパティ・ペインのサービス・フィールドの右にある参照アイコンをクリックします。

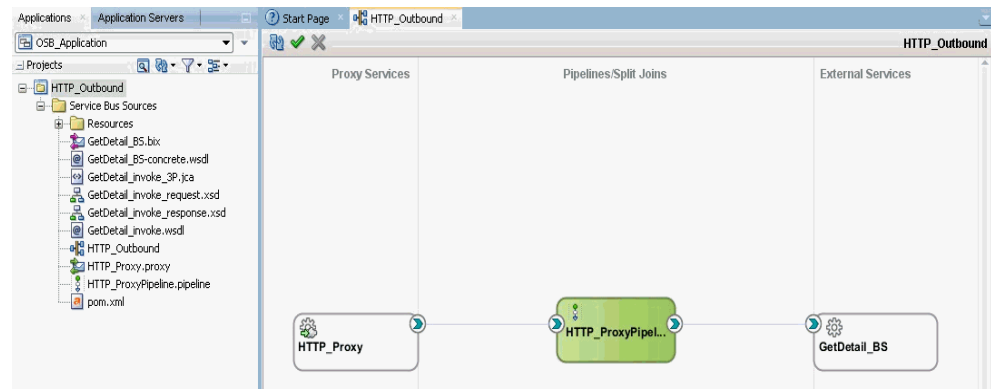
図 8-104 サービスの参照



- c. 表示された「リソース・チューザ」ウィンドウで、WSDL ベースのビジネス・サービス (「xxxxx\_BS.bix」など) を選択し、「OK」をクリックします。  
パイプラインの構成ページに戻ります。
- d. 保存し、パイプラインの構成ページを閉じます。  
コンポジット・エディタ・ウィンドウに戻ります。
- e. 図 8-105 に示すように、メニュー・バーで「すべて保存」をクリックして、OSB HTTP プロセスを保存します。

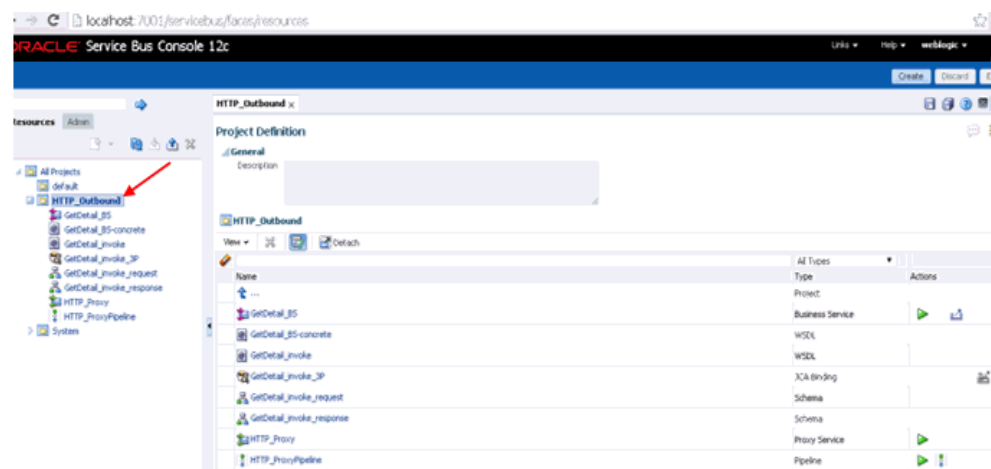


図 8-105 「トランスポート」 ウィンドウ



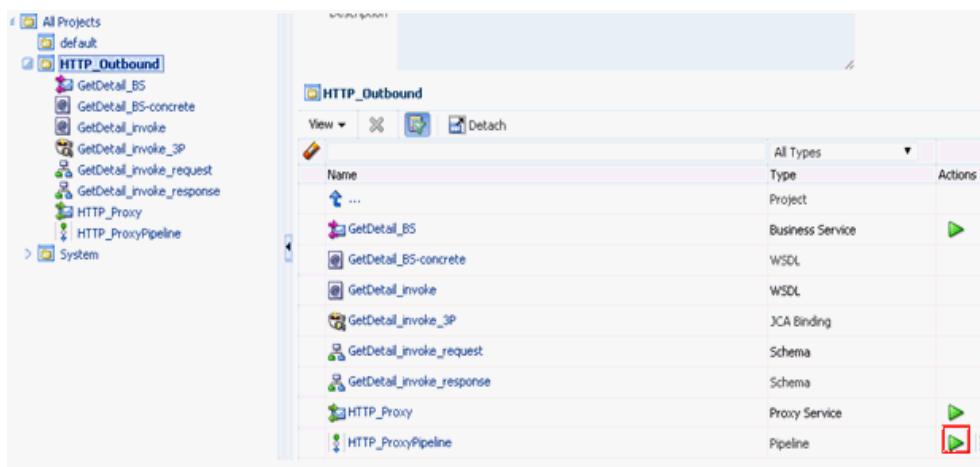
6. OSB HTTP アウトバウンド・プロセスをデプロイします。詳細は、8.1.3 項「OSB アウトバウンド・プロセスのデプロイ」(8-16 ページ)を参照してください。
7. プロセスが正常にデプロイされた後、Service Bus コンソールにログオンします。
8. 図 8-106 に示すように、Service Bus コンソールで、デプロイされた HTTP アウトバウンド・プロジェクト(「HTTP\_Outbound」など)をクリックします。

図 8-106 Service Bus コンソール



9. 図 8-107 に示すように、作成されたパイプラインに対する OSB コンソールのテスト・アイコンをクリックします。

図 8-107 OSB コンソールのテスト・アイコン



10. 表示された OSB コンソールのテスト・ページで、入力 XML を指定し、「実行」ボタンをクリックします。

表示された OSB コンソールのテスト・ページで、レスポンスが受信されます。

この章では、Oracle Application Adapter for PeopleSoft の主要な機能について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 9.1 項「ロギング機能の構成」
- 9.2 項「診断機能の構成」
- 9.3 項「SOA デバッグ機能の構成」
- 9.4 項「例外フィルタ」
- 9.5 項「Oracle SOA Suite (BPEL、メディエータまたは BPM) の資格証明マッピング」
- 9.6 項「Oracle Service Bus (OSB) の資格証明マッピング」

## 9.1 ロギング機能の構成

Oracle 12c (12.2.1.0.0) では、J2CA および BSE アダプタ・ログは、次の場所で入手可能な `{server-name}-diagnostic.log` ファイルの Oracle ログで更新されます。

```
<ORACLE_HOME>\user_projects\domains\base_domain\servers\<server_Name>\logs.
```

---

**注意：** J2CA 用アプリケーション・エクスプローラのログ・ファイルは、`<ADAPTER_HOME>\config\xxxxxx\log` フォルダの下に作成されます。xxxxxx はアプリケーション・エクスプローラで作成された J2CA 構成の名前です。アプリケーション・エクスプローラでの各 J2CA 構成には、名前付き J2CA 構成フォルダの下に対応するログ・フォルダが存在します。

---

この項では、ロギング機能の構成方法について説明します。次のトピックが含まれています。

- 9.1.1 項「J2CA コネクタ・アプリケーションのログ・ファイル管理の構成」
- 9.1.2 項「Business Services Engine (BSE) のログ・ファイル管理の構成」

### 9.1.1 J2CA コネクタ・アプリケーションのログ・ファイル管理の構成

J2CA コネクタ・アプリケーションのログ・ファイル管理は、次の場所で定義されるログ出力によって制御されます。

```
<ORACLE_HOME>\user_projects\domains\base_domain\config\fmwconfig\servers\${server-name}\logging.xml
```

新しいログ出力が EM コンソールから管理される場合、このファイルに追加する必要があります。

次に例を示します。

```
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf' level='NOTIFICATION:1'  
useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.classloader' level='NOTIFICATION:1'  
useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.connection' useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.connection.IAEAdapter'  
useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.connection.Sample'  
useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.connection.PeopleSoft'  
useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.inbound' useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.inbound.IAEAdapter'  
useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.inbound.Sample' useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.inbound.PeopleSoft'  
useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.outbound' useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.outbound.IAEAdapter'  
useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.outbound.Sample' useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.outbound.PeopleSoft'  
useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.transaction' useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.transaction.IAEAdapter'  
useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.transaction.Sample'  
useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.transaction.PeopleSoft'  
useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.IAEAdapter' useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.Sample' useParentHandlers='true' />  
<logger name='oracle.soa.adapter.iwaf.PeopleSoft' useParentHandlers='true' />
```

これにより、「oracle.soa.adapter.iwaf」の下にあるすべてのログ出力のロギング・レベルが、Oracle によるデフォルトの設定レベルである「NOTIFICATION:1 (INFO)」に設定されます。

次のステップを実行して、すべてのログ出力のロギング・レベルを EM コンソールから構成することもできます。

1. 構成済の Oracle WebLogic Server ドメインの Oracle WebLogic Server を起動します。
2. Web ブラウザで次の URL を入力して、Oracle WebLogic Server Enterprise Manager Console を起動します。

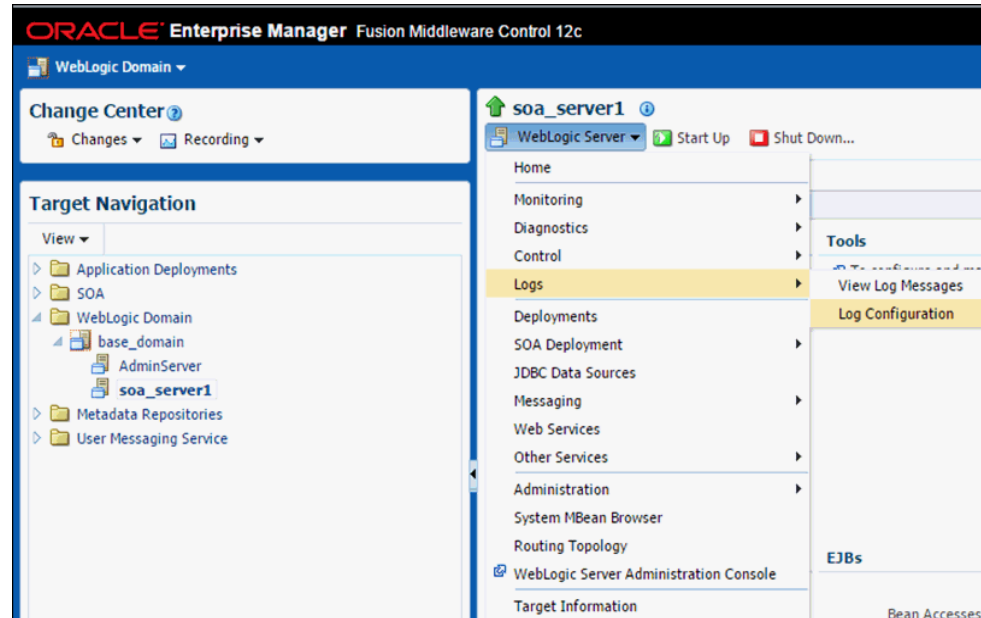
```
http://host name:port/em
```

ここで、host name は Oracle WebLogic Server が稼働しているシステムの名前で、port は稼働している Oracle WebLogic Server のポートです。Oracle WebLogic Server のデフォルト・ポートは 7001 です。ただし、この値はインストールによって異なる場合があります。

3. 管理者権限を持つアカウントを使用して、Oracle WebLogic Server 管理コンソールにログインします。

- 「ターゲット・ナビゲーション」ペインの下で、「WebLogic ドメイン」をクリックし、作成したドメインを選択して、適切なサーバー（管理対象サーバーまたは統合サーバー）をクリックします。
- 図 9-1 に示すように、「サーバー」ペインで、「WebLogic Server」を展開し、「ログ」を選択して、「ログ構成」をクリックします。

図 9-1 「ログ構成」オプション



- 図 9-2 に示すように、「ログ・レベル」タブの下で、「oracle.soa.adapter.iwaf」が表示されるまで Oracle ルート・ログ出力を展開します。

図 9-2 「ログ・レベル」タブ

**Log Configuration**  
Use this page to configure basic and advanced log configuration settings.

Log Levels | Log Files | QuickTrace

This page allows you to configure the log level for both persistent loggers and active runtime loggers. Persistent loggers are loggers that are saved in a configuration file when a component is started. The log levels for these loggers are persisted across component restarts. Runtime loggers are automatically created during runtime and become active when an area is exercised. For example, oracle.j2ee.ejb.deployment.Logger is a runtime logger that becomes active when an EJB module is deployed. Log levels for runtime loggers are not persisted across component restarts.

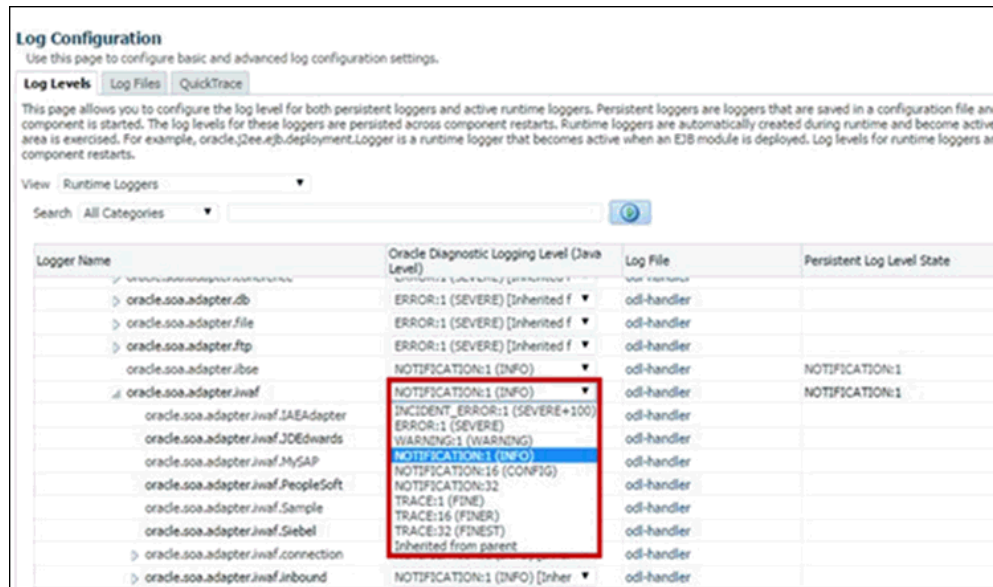
View: Runtime Loggers

Search: All Categories

Logger Name	Oracle Diagnostic Logging Level (Java Level)	Log File	Persistent Log Level State
oracle.soa.adapter.db	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f	odl-handler	
oracle.soa.adapter.file	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f	odl-handler	
oracle.soa.adapter.ftp	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f	odl-handler	
oracle.soa.adapter.ibse	NOTIFICATION:1 (INFO)	odl-handler	NOTIFICATION:1
oracle.soa.adapter.iwaf	NOTIFICATION:1 (INFO)	odl-handler	NOTIFICATION:1
oracle.soa.adapter.iwaf.IAEAdapter	NOTIFICATION:1 (INFO) [Inher	odl-handler	
oracle.soa.adapter.iwaf.JDEdwards	NOTIFICATION:1 (INFO) [Inher	odl-handler	
oracle.soa.adapter.iwaf.MySAP	NOTIFICATION:1 (INFO) [Inher	odl-handler	
oracle.soa.adapter.iwaf.PeopleSoft	NOTIFICATION:1 (INFO) [Inher	odl-handler	
oracle.soa.adapter.iwaf.Sample	NOTIFICATION:1 (INFO) [Inher	odl-handler	
oracle.soa.adapter.iwaf.Siebel	NOTIFICATION:1 (INFO) [Inher	odl-handler	
oracle.soa.adapter.iwaf.connection	NOTIFICATION:1 (INFO) [Inher	odl-handler	
oracle.soa.adapter.iwaf.inbound	NOTIFICATION:1 (INFO) [Inher	odl-handler	

7. 図 9-3 に示すように、「Oracle Diagnostic Logging レベル (Java レベル)」列で、「oracle.soa.adapter.iwaf」ドロップダウン・リストから必要なログ・レベルを選択します。

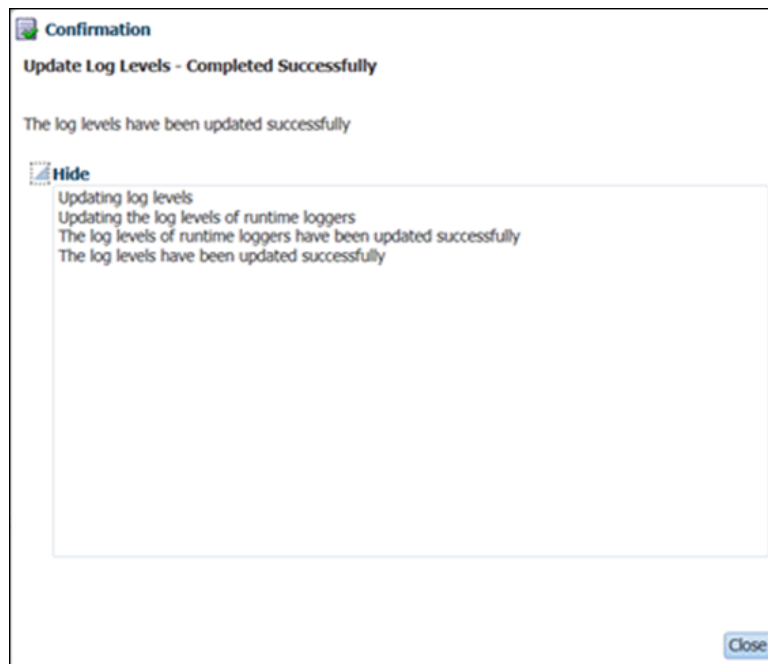
図 9-3 「Oracle Diagnostic Logging レベル (Java レベル)」列



8. 「適用」をクリックします。

図 9-4 に示すように、更新が正常に完了したことを示す確認メッセージが表示されます。

図 9-4 確認メッセージ



9. 「閉じる」をクリックします。

次の表は、「ログ・レベル」プロパティが `{server-name}-diagnostic.log` で EM コンソール内の対応する「ログ・レベル」プロパティ設定に基づいてどのように更新されるかを示しています。

**表 9-1 「ログ・レベル」プロパティ設定**

EM コンソールで設定された「ログ・レベル」	<code>{server-name}-diagnostic.log</code> で更新された「ログ・レベル」
ERROR:1	ERROR
WARNING:1	WARNING
NOTIFICATION:1	NOTIFICATION
NOTIFICATION:16	NOTIFICATION
NOTIFICATION:32	NOTIFICATION
TRACE:1	NOTIFICATION
TRACE:16	NOTIFICATION
TRACE:32	TRACE:32

**注意：** EM コンソールでログ・レベルを TRACE:32 に設定すると、`{server-name}-diagnostic.log` のログ・レベルが TRACE:32 に更新されて、ログに「FINEST」の詳細 (アダプタに渡された入力、アダプタから受信されたレスポンスなど) が表示されます。

開発環境およびテスト環境の場合、「TRACE:32」は、すべてのログ詳細が表示される、望ましいログ・レベルです。本番環境の場合、望ましいログ・レベルは「ERROR」です。

ログ・メッセージはディスク・ファイルに書き込まれ、ファイル・パスは「ログ・ファイル」タブで参照できます。「ログ・ファイル」表の「ハンドラ名」は、「ログ・レベル」表の「ログ・ファイル」の名前に対応しています。図 9-5 に示すように、「oracle.soa.adapter」の下の階層にあるすべてのログ出力は、現在「odl-handler」によって処理されています。

**図 9-5 「ログ構成」ペイン**

The screenshot shows the 'Log Configuration' page with the following table:

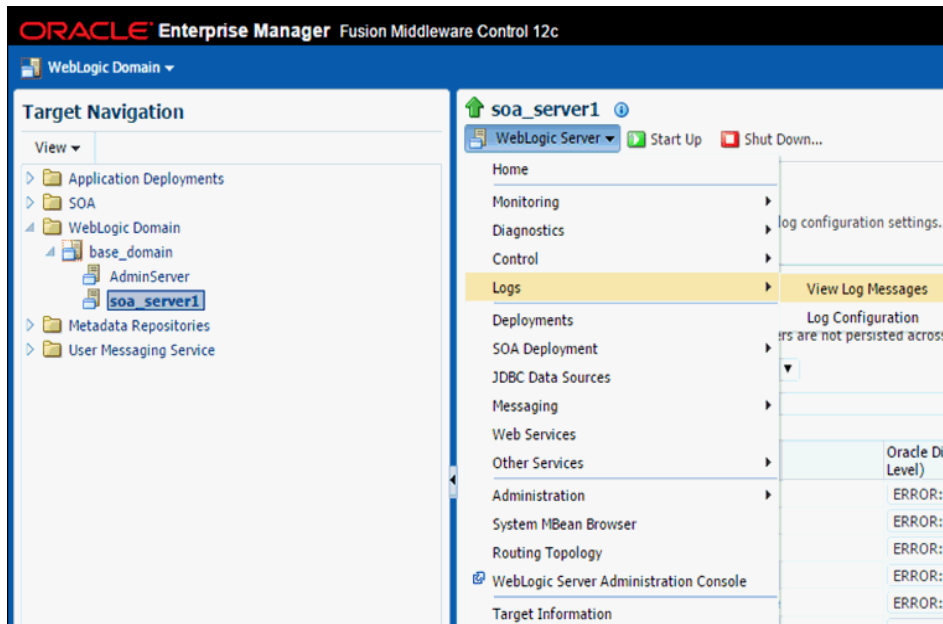
Handler Name	Log Path	Log File Format
em-log-handler	<code>\${domain.home}/servers/\${weblogic.Name}/sysman/log/emoms.log</code>	Oracle Diagnostics Logging
em-trc-handler	<code>\${domain.home}/servers/\${weblogic.Name}/sysman/log/emoms.trc</code>	Oracle Diagnostics Logging
odl-handler	<code>\${domain.home}/servers/\${weblogic.Name}/logs/\${weblogic.Name}-diagnostic.log</code>	Oracle Diagnostics Logging
owsm-message-ha...	<code>\${domain.home}/servers/\${weblogic.Name}/logs/owsm/msglogging/diagnostic.log</code>	Oracle Diagnostics Logging
soa-tracking-trc-h...	<code>\${domain.home}/servers/\${weblogic.Name}/logs/\${weblogic.Name}-soa-tracking.trc</code>	Oracle Diagnostics Logging

ログは、次の場所で入手できる `{server-name}-diagnostic.log` で更新されます。

```
<ORACLE_HOME>\user_projects\domains\base_domain\servers\<server_Name>\logs
```

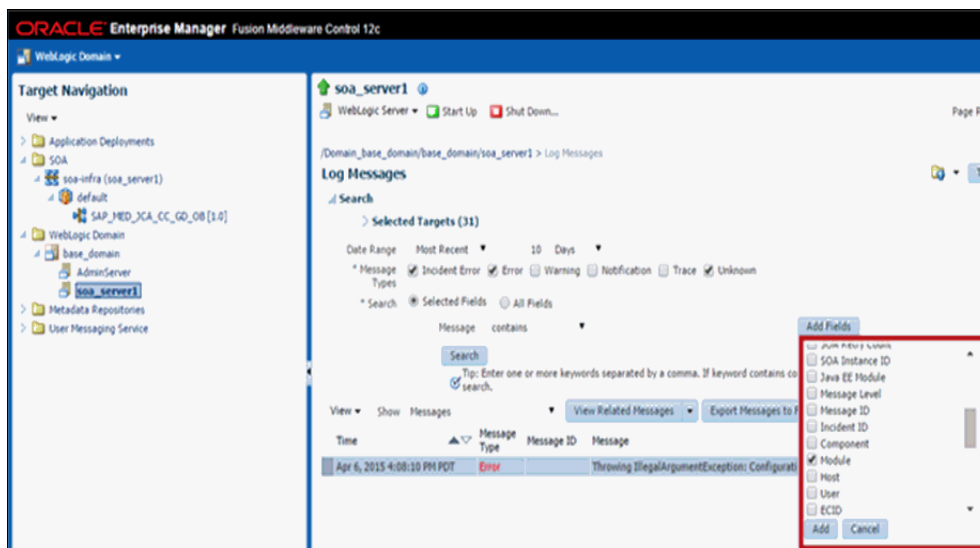
10. 図 9-6 に示すように、「サーバー」 ペインで、「WebLogic Server」 ドロップダウン・リストをクリックし、「ログ」 を選択し、「ログ・メッセージの表示」 をクリックすると、EM コンソールにログ・メッセージが表示されます。

図 9-6 「ログ・メッセージの表示」 オプション



11. 「ログ・メッセージ」 ペインで、必要な検索基準を入力します。図 9-7 に示すように、対象のログ出力の名前が含まれる「モジュール」 フィールドを検索基準に追加することもできます。

図 9-7 「モジュール」 フィールド



12. 「追加」 をクリックします。
13. 図 9-8 に示すように、「モジュール」 フィールドに対象のログ出力の名前を入力し、必要に応じて追加のメッセージ・タイプ (「警告」、「通知」、「トレース」 など) を選択して、「検索」 をクリックします。



図 9-8 「ログ・メッセージ」 ペイン

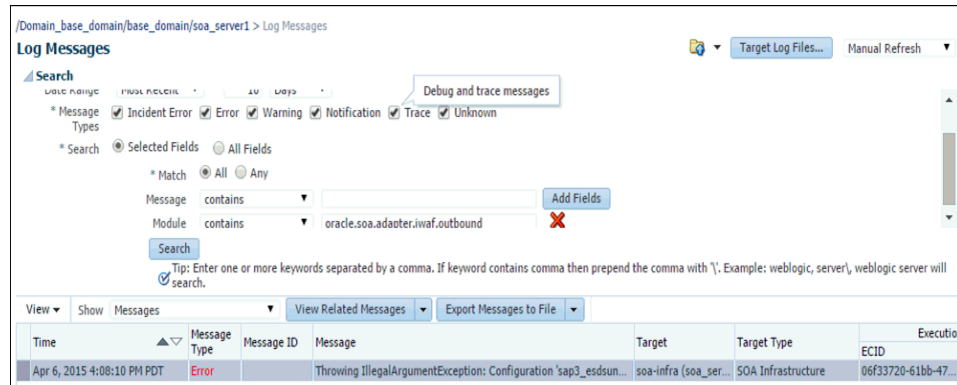
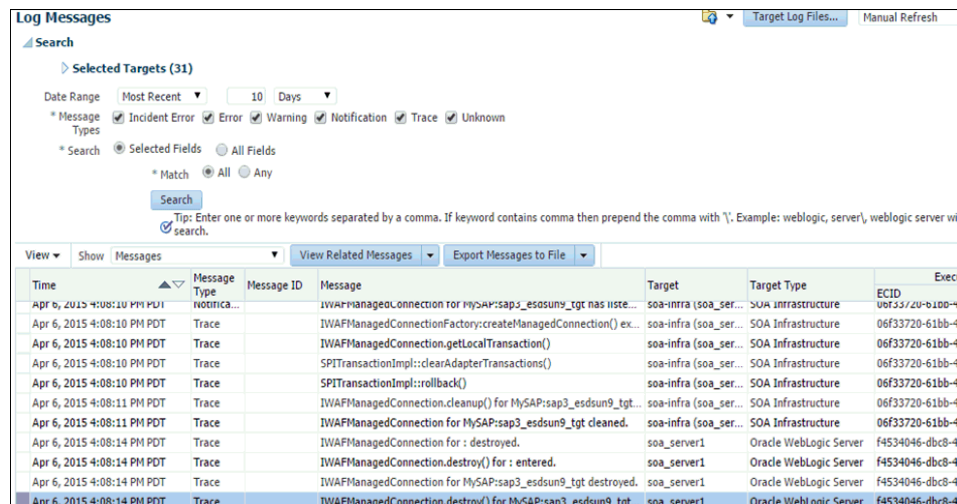


図 9-9 に示すように、指定されたログ出力のメッセージが、検索基準の下の表に表示されます。

図 9-9 ログ出力のメッセージ



14. 表の任意の行を選択します。図 9-10 に示すように、同じ詳細を取得するには、「関連メッセージの表示」ドロップダウン・リストをクリックし、「ECID」(実行コンテキスト ID)を選択します。

図 9-10 「ECID」 オプション

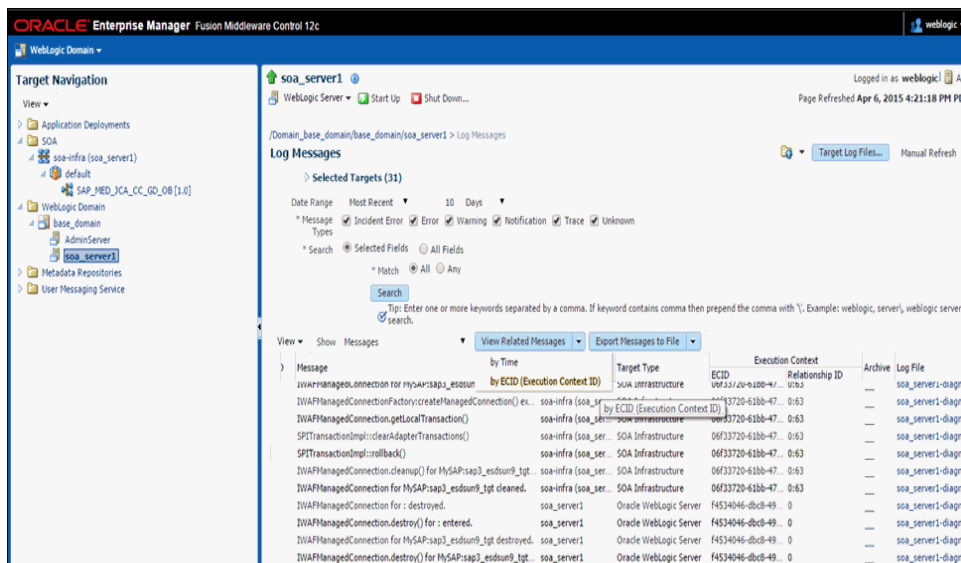


図 9-11 に示すように、詳細が表示されます。

図 9-11 メッセージの詳細

Time	Message Type	Message ID	Message	Target	Target Type	Archive	Log File
Apr 6, 2015 4:08:10 PM PDT	Trace		IWAFManagedConnection.getLocalTransaction()	soa-infra (soa_ser...	SOA Infrastructure	—	soa_ser...
Apr 6, 2015 4:08:10 PM PDT	Trace		SPITransactionImpl::clearAdapterTransactions()	soa-infra (soa_ser...	SOA Infrastructure	—	soa_ser...
Apr 6, 2015 4:08:10 PM PDT	Trace		SPITransactionImpl::rollback()	soa-infra (soa_ser...	SOA Infrastructure	—	soa_ser...
Apr 6, 2015 4:08:11 PM PDT	Trace		IWAFManagedConnection.cleanup() for MySAP:sap3_esdsun9_tgt.	soa-infra (soa_ser...	SOA Infrastructure	—	soa_ser...
Apr 6, 2015 4:08:11 PM PDT	Trace		IWAFManagedConnection for MySAP:sap3_esdsun9_tgt cleaned.	soa-infra (soa_ser...	SOA Infrastructure	—	soa_ser...
Apr 6, 2015 4:08:11 PM PDT	Error		JCABinding=> SAP_MED_JCA_CC_GD_OB:GetDetail [ GetDetailP...	soa-infra (soa_ser...	SOA Infrastructure	—	soa_ser...
Apr 6, 2015 4:08:11 PM PDT	Error		JCABinding=> [default/SAP_MED_JCA_CC_GD_OB]1.0*soa_3158...	soa-infra (soa_ser...	SOA Infrastructure	—	soa_ser...
Apr 6, 2015 4:08:11 PM PDT	Error		Rolling back transaction due to ORAMED-03303:[Unexpected exc...	soa-infra (soa_ser...	SOA Infrastructure	—	soa_ser...
Apr 6, 2015 4:08:11 PM PDT	Error		Error in rolling back transaction due to ORAMED-03504:[Transacti...	soa-infra (soa_ser...	SOA Infrastructure	—	soa_ser...
Apr 6, 2015 4:08:11 PM PDT	Error		Updating fault processing DMS metrics	soa-infra (soa_ser...	SOA Infrastructure	—	soa_ser...
Apr 6, 2015 4:08:11 PM PDT	Error		Got an exception: oracle.fabric.common.FabricInvocationExceptio...	soa-infra (soa_ser...	SOA Infrastructure	—	soa_ser...

Message Level	32	Java EE	soa-infra
SRC_CLASS	com.ibm.afjca.spi.SPITransactionImpl	Application	
WebService Port	execute_pt	Relationship ID	0:63
SCA Entity ID	340004	Component	soa_server1
SOA Retry Count	SAP_MED_JCA_CC_GD_OB:1.0	Module	oracle.soa.adapter.iwaf.outbound
SOA Instance ID	320003	Host	AXTST168

### 9.1.2 Business Services Engine (BSE) のログ・ファイル管理の構成

J2CA と同様に、BSE の場合も、ログ・ファイル管理は次の場所で定義されるログ出力によって制御されます。

```
<ORACLE_HOME>\user_projects\domains\base_
domain\config\fmwconfig\servers\${server-name}\logging.xml
```

次の構文により、「oracle.soa.adapter.ibse」の下にあるすべてのログ出力のロギング・レベルが、Oracle によるデフォルトの設定レベルである「NOTIFICATION:1 (INFO)」に設定されます。

```
<logger name='oracle.soa.adapter.ibse' level='NOTIFICATION:1'
useParentHandlers='true'/>
```

次のステップを実行して、すべてのログ出力のロギング・レベルを EM コンソールから構成することもできます。

- 9.1.1 項「J2CA コネクタ・アプリケーションのログ・ファイル管理の構成」の説明に従って、ステップ 1 から 5 を繰り返します。
- 図 9-12 に示すように、「ログ・レベル」タブの下で、ログ出力名「oracle.soa.adapter.ibse」が表示されるまで Oracle ルート・ログ出力を展開します。

図 9-12 「ログ・レベル」タブ

Logger Name	Oracle Diagnostic Logging Level (Java Level)	Log File	Persistent Log Level State
oracle.soa.adapter.aq	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f ▼]	odi-handler	
oracle.soa.adapter.coherence	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f ▼]	odi-handler	
oracle.soa.adapter.db	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f ▼]	odi-handler	
oracle.soa.adapter.file	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f ▼]	odi-handler	
oracle.soa.adapter.ftp	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f ▼]	odi-handler	
oracle.soa.adapter.ibse	NOTIFICATION:1 (INFO) ▼	odi-handler	NOTIFICATION:1
oracle.soa.adapter.iwaf	TRACE:32 (FINEST) ▼	odi-handler	ERROR:1
oracle.soa.adapter.jdeworld	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f ▼]	odi-handler	
oracle.soa.adapter.jms	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f ▼]	odi-handler	
oracle.soa.adapter.ldap	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f ▼]	odi-handler	
oracle.soa.adapter.mq	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f ▼]	odi-handler	

- 図 9-13 に示すように、「Oracle Diagnostic Logging レベル (Java レベル)」列で、「oracle.soa.adapter.ibse」ドロップダウン・リストから必要なログ・レベルを選択します。

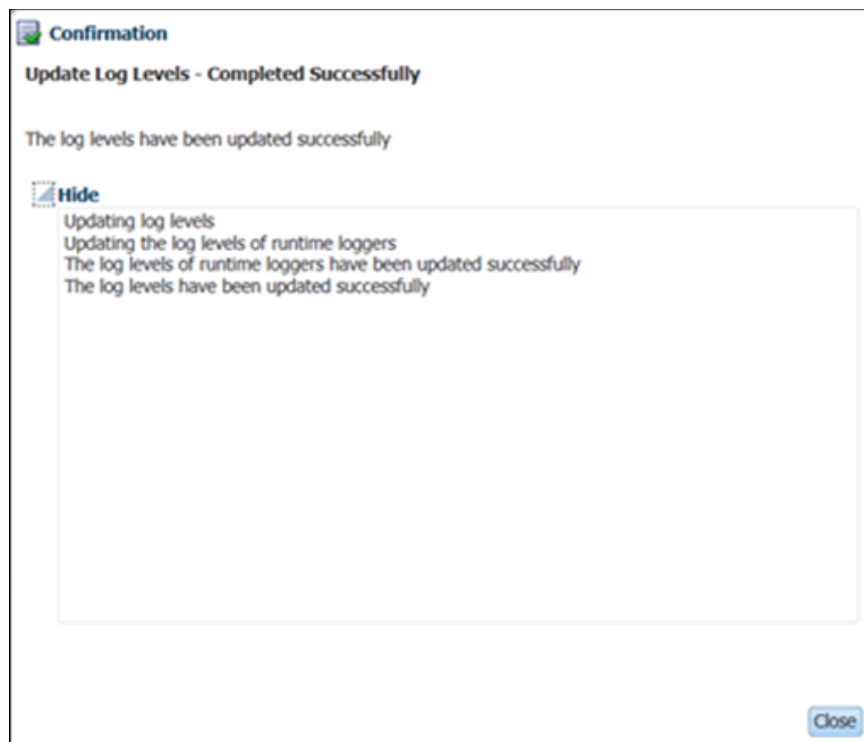
図 9-13 「Oracle Diagnostic Logging レベル (Java レベル)」列

Logger Name	Oracle Diagnostic Logging Level (Java Level)	Log File	Persistent Log Level State
oracle.soa.adapter.aq	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f ▼]	odi-handler	
oracle.soa.adapter.coherence	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f ▼]	odi-handler	
oracle.soa.adapter.db	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f ▼]	odi-handler	
oracle.soa.adapter.file	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f ▼]	odi-handler	
oracle.soa.adapter.ftp	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f ▼]	odi-handler	
oracle.soa.adapter.ibse	NOTIFICATION:1 (INFO) ▼	odi-handler	NOTIFICATION:1
oracle.soa.adapter.iwaf	INCIDENT_ERROR:1 (SEVERE+100)	odi-handler	ERROR:1
oracle.soa.adapter.jdeworld	ERROR:1 (SEVERE) [Inherited f ▼]	odi-handler	
oracle.soa.adapter.jms	WARNING:1 (WARNING)	odi-handler	
oracle.soa.adapter.jms	NOTIFICATION:1 (INFO)	odi-handler	
oracle.soa.adapter.jms	NOTIFICATION:16 (CONFIG)	odi-handler	
oracle.soa.adapter.jms	NOTIFICATION:32	odi-handler	
oracle.soa.adapter.jms	TRACE:1 (FINE)	odi-handler	
oracle.soa.adapter.jms	TRACE:16 (FINER)	odi-handler	
oracle.soa.adapter.jms	TRACE:32 (FINEST)	odi-handler	
oracle.soa.adapter.jms	Inherited from parent	odi-handler	

- 「適用」をクリックします。

図 9-14 に示すように、更新が正常に完了したことを示す確認メッセージが表示されます。

図 9-14 確認メッセージ



5. 「閉じる」をクリックします。

次の表は、「ログ・レベル」プロパティが `{server-name}-diagnostic.log` で EM コンソール内の対応する「ログ・レベル」プロパティ設定に基づいてどのように更新されるかを示しています。

表 9-2 「ログ・レベル」プロパティ設定

EM コンソールで設定された「ログ・レベル」	<code>{server-name}-diagnostic.log</code> で更新された「ログ・レベル」
ERROR:1	ERROR
WARNING:1	WARNING
NOTIFICATION:1	NOTIFICATION
NOTIFICATION:16	NOTIFICATION
NOTIFICATION:32	NOTIFICATION
TRACE:1	NOTIFICATION
TRACE:16	NOTIFICATION
TRACE:32	TRACE:32

ログの検証については、[9.1.1 項「J2CA コネクタ・アプリケーションのログ・ファイル管理の構成」](#)に示す J2CA ロギング機能のステップ 11 から 18 を参照してください。

## 9.2 診断機能の構成

この項では、Oracle Fusion Middleware Application Adapters for Oracle WebLogic Server の診断機能を構成および使用方法について説明します。次のトピックが含まれています。

- 9.2.1 項「サポートされるプロトコル」

診断機能は、アダプタのエンドポイント・ヘルス・ステータスを取得して ( 利用可能な場合 )、対応するアラートを Oracle アダプタ・フレームワークに提供します。これにより、そのアラートを EM コンソールに表示できるようになります。

---

**注意：** 診断機能でサポートされているのはインバウンド・アダプタ・プロセスのみです。

次の項に進む前に、インバウンド・プロセスがデプロイされていることを確認してください。

---

この情報をアダプタについて表示するには、次のステップを実行します。

1. Oracle WebLogic Server を起動し、Web ブラウザで次の URL を入力して、Oracle WebLogic Server Enterprise Manager Console を起動します。

`http://host name:port/em`

ここで、*host name* は Oracle WebLogic Server が稼働しているシステムの名前で、*port* は稼働している Oracle WebLogic Server のポートです。

2. 管理者権限を持つアカウントを使用して、Oracle WebLogic Server 管理コンソールにログインします。
3. 右ペインで、「SOA」、「soa-Infra (server\_name)」、「デフォルト」、デプロイ済インバウンド・プロセスの順に展開します。
4. プロセスをクリックし、[図 9-15](#) に示すように、右ペインの「サービスと参照」セクションに表示されているサービスを選択します。

**図 9-15 「サービスと参照」セクション**

The screenshot shows the Oracle WebLogic Server Enterprise Manager Console interface. The top navigation bar includes 'SOA Composite' and 'Page Refreshed Apr 23, 2015 12:29:57 PM PDT'. Below the navigation bar, there are tabs for 'Dashboard', 'Composite Definition', 'Flow Instances', 'Unit Tests', and 'Policies'. The main content area is divided into two sections: 'Components' and 'Services and References'. The 'Components' section shows a table with one entry: 'Mediator1' of type 'Mediator'. The 'Services and References' section shows a table with three entries: 'Service' (JCA Adapter, Service, 0 messages, 0.000 sec), 'FileReference' (JCA Adapter, Reference, 0 messages, 0.000 sec).

Name	Type	Usage	Total Messages	Average Processing Time (sec)
Service	JCA Adapter	Service	0	0.000
FileReference	JCA Adapter	Reference	0	0.000

5. 「アダプタ・レポート」タブで、「レポートの有効化」チェック・ボックスを選択し、「スナップショット・レポート」を展開して、EIS の停止時間の詳細を表示します。[図 9-16](#) に示すように、「エラー・サマリー」をクリックするとスタック・トレースが表示されます。

図 9-16 スタック・トレース

The screenshot shows the SOA Composite console for a SAMPACC (Custom Adapter). The 'Adapter Reports' section is active, displaying 'EIS Connection Downtime' reports. A table lists connection downtime events, with the 'Error Summary' column for the first entry containing 'Connection reset'.

Server Name	Start EIS Downtime	End EIS Downtime	Error Summary	Total EIS Connection Downtime (Seconds)	Data Location
soa_server1	Apr 10, 2015 4:12:20 AM	Apr 10, 2015 4:14:04 AM	Connection reset	103	

## 9.2.1 サポートされるプロトコル

この項では、Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapter for PeopleSoft でサポートされるプロトコルについて説明します。次のトピックで構成されています。

- 9.2.1.1 項「Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapter for PeopleSoft のエンドポイント・ステータス」

### 9.2.1.1 Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapter for PeopleSoft のエンドポイント・ステータス

Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapter for PeopleSoft (インバウンド) で使用できるプロトコルは次のとおりです。

- HTTP
- TCP
- ファイル (サポートされていません)

HTTP と TCP のリスニング・プロトコル・アダプタは、ソケットでリスニングします。そのため、その性質上、ネットワークの反対側で何かが動作しているかどうかは、リクエストが受信されるまでわかりません。リクエストが受信された場合も、そのリクエストの送信元を確実に特定することはできません。

これらのプロトコルでは、リクエストが受信されると、送信元は EIS と見なされ、EIS が使用されます。EIS は、リクエストの受信時に通信エラーが発生していないかどうかを確認します。ただし、この確認はごく基本的なものにとどまります。

## 9.3 SOA デバッグ機能の構成

この項では、Oracle Application Adapter for PeopleSoft の SOA デバッグ機能を構成および使用方法について説明します。次のトピックが含まれています。

- 9.3.1 項「SOA デバッガの使用のガイドライン」
- 9.3.2 項「前提条件」

- 9.3.3 項「Oracle JDeveloper での BPEL プロセスのデバッグ」
- 9.3.4 項「Oracle JDeveloper での OSB プロセスのデバッグ」

---

**注意：** 現在 SOA デバッグ機能がサポートされているのは J2CA 構成のみです。BSE 構成では使用できません。

SOA については、この機能の説明には BPEL プロセスを使用します。メディアエータ・プロセスと BPM プロセスについても同様です。

---

### 9.3.1 SOA デバッガの使用のガイドライン

この項では、SOA デバッガの使用のガイドラインについて説明します。

1. SOA デバッガに接続できるクライアントは一度に 1 つのみです。
2. アダプタ・エンドポイント・エラーは、Oracle JDeveloper の SOA デバッガには表示されません。これらのエラーはログ・ファイルに記録されます。

---

**注意：** SOA デバッガは現在、BPEL、メディアエータ、BPM、OSB の各プロセスで、開発モードでのみ使用できます。

---

### 9.3.2 前提条件

Oracle JDeveloper で *IntegratedWebLogicServer* ドメインと BPEL プロセスがすでに作成されていることを確認してください。

### 9.3.3 Oracle JDeveloper での BPEL プロセスのデバッグ

この項では、Oracle JDeveloper で BPEL プロセスをデバッグする方法について説明します。次のトピックが含まれています。

- 9.3.3.1 項「Oracle JDeveloper でのアウトバウンド BPEL プロセスのデバッグ」
- 9.3.3.2 項「Oracle JDeveloper でのインバウンド BPEL プロセスのデバッグ」

#### 9.3.3.1 Oracle JDeveloper でのアウトバウンド BPEL プロセスのデバッグ


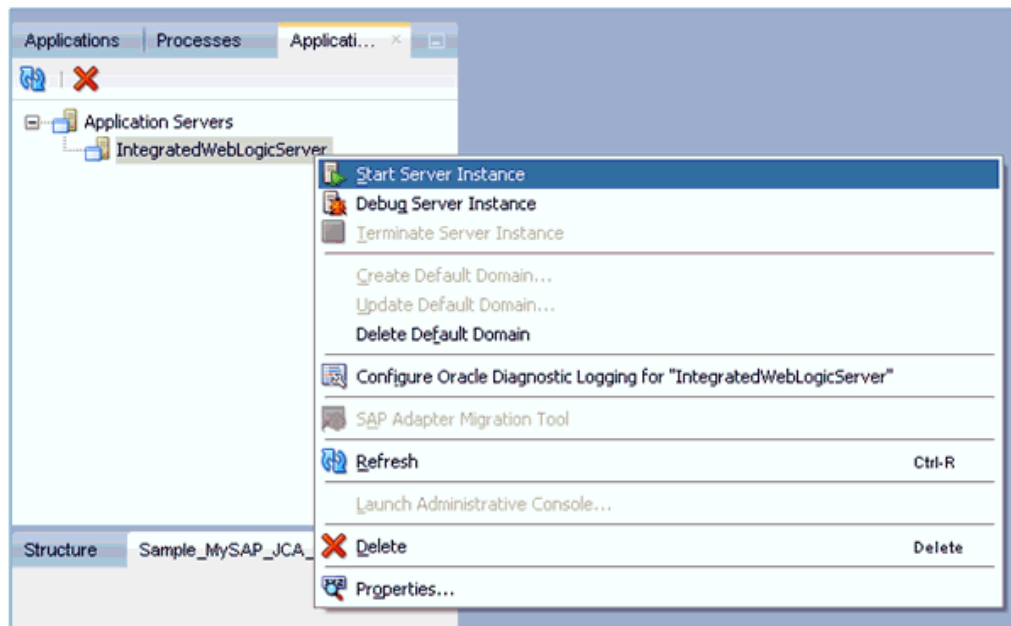
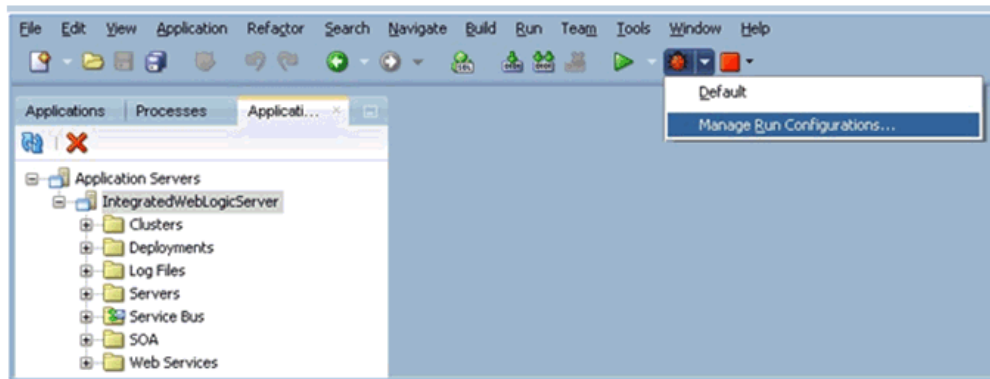
1. Oracle JDeveloper を開きます。
2. *IntegratedWeblogicServer* ドメインを起動します。
  - a. 左ペインの「アプリケーション・サーバー」タブをクリックします。
  - b.  9-17 に示すように、「アプリケーション・サーバー」ノードの下の「**IntegratedWeblogicServer**」を右クリックし、コンテキスト・メニューから「サーバー・インスタンスの起動」を選択します。

図 9-17 サーバー・インスタンスの起動



3. デバッグ環境を設定します。
  - a. 図 9-18 に示すように、「デバッグ」アイコンの横の下矢印をクリックし、コンテキスト・メニューから「実行構成の管理」を選択します。

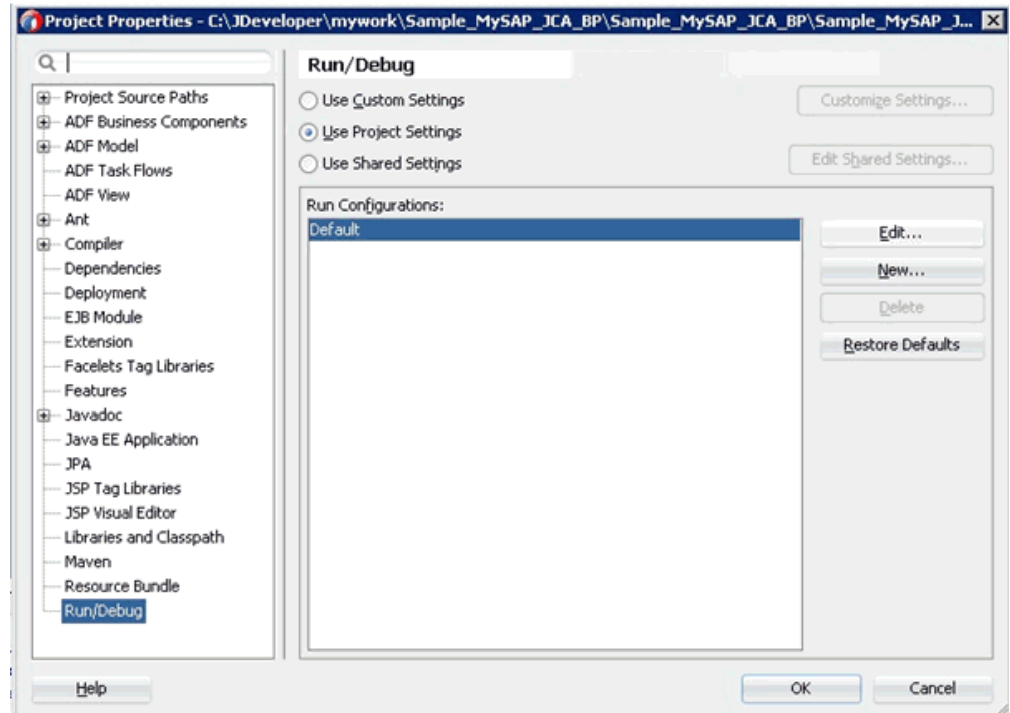
図 9-18 実行構成の管理



- b. または、プロジェクトを右クリックし、「プロジェクト・プロパティ」を選択します。  
図 9-19 に示すように、「プロジェクト・プロパティ」ダイアログが表示されます。



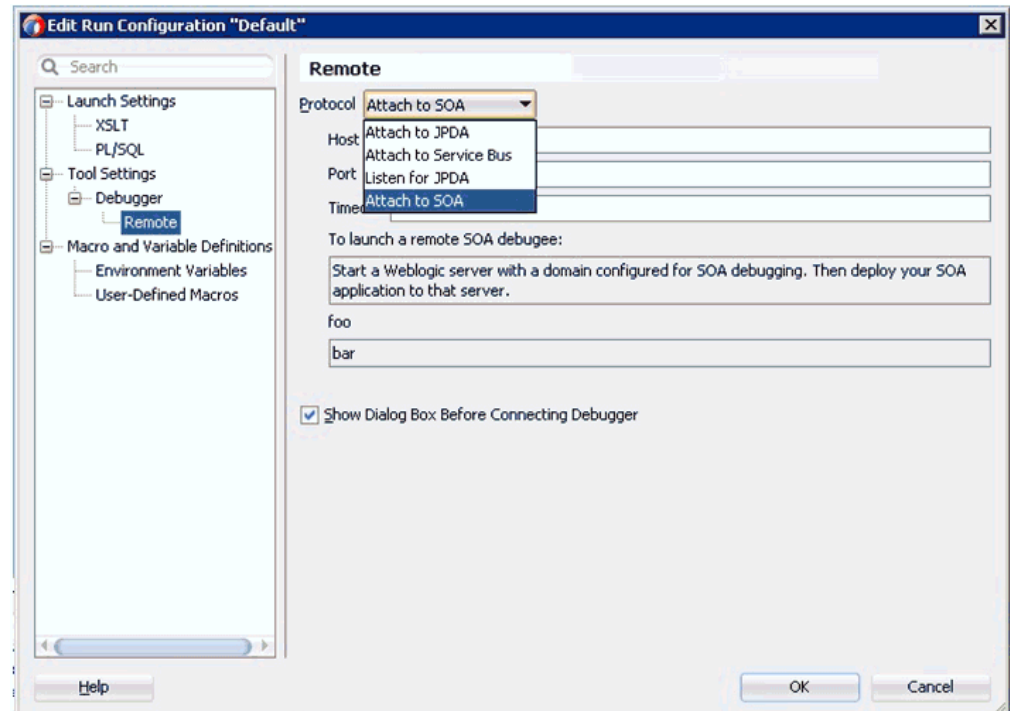
図 9-19 「プロジェクト・プロパティ」ダイアログ



- c. 左ペインで「実行/デバッグ」を選択し、「実行/デバッグ」ペイン（「実行構成」領域）で「編集」をクリックします。

図 9-20 に示すように、「実行構成の編集」ダイアログが表示されます。

図 9-20 「実行構成の編集」ダイアログ



- d. 左ペインで、「ツール設定」、「デバッガ」の順に展開し、「リモート」をクリックします。
  - e. 「プロトコル」リストから、「SOA にアタッチ」を選択します。
  - f. 「ホスト」と「ポート」はデフォルト値のままにしておきます。
  - g. 「OK」をクリックします。
4. プロジェクトをデプロイします。
- a. プロジェクトを右クリックし、「デプロイ」を選択します。  
「デプロイメント・アクション」ダイアログが表示されます。  
デプロイするアプリケーションを選択し、「次へ」をクリックします。  
「構成のデプロイ」ダイアログが表示されます。
  - b. 「次へ」をクリックします。  
「アプリケーション・サーバー」ダイアログが表示されます。
  - c. 「IntegratedWebLogicServer」を選択し、「終了」をクリックしてデプロイを完了します。
  - d. 次のステップに進む前に、プロジェクトのデプロイが完了し、エラーや問題が発生していないことを確認してください。
5. BPEL プロセスを SOA デバッガに接続します。
- a. [図 9-21](#) に示すように、左ペインの「アプリケーション」タブで、既存の BPEL プロセスのコンポジット XML またはコンポジット・プロジェクトを右クリックし、コンテキスト・メニューから「デバッグ」を選択します。

図 9-21 デバッグする BPEL プロセスを選択

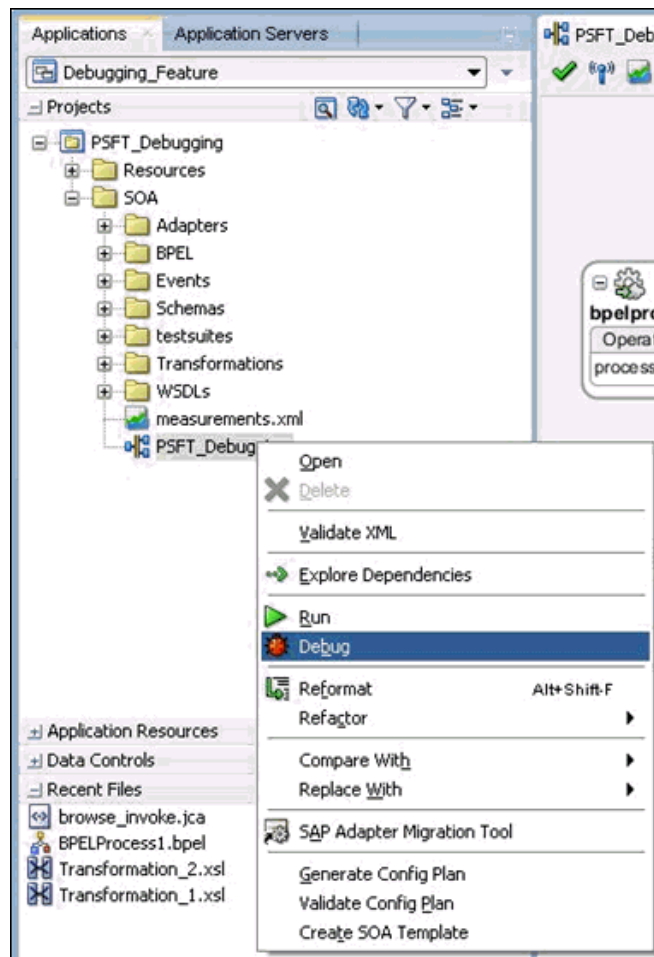
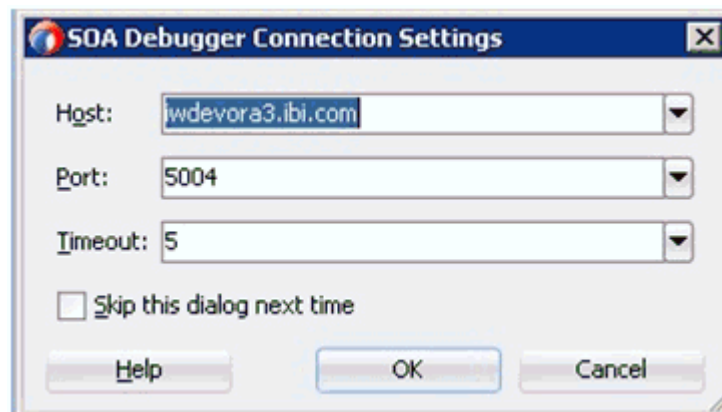


図 9-22 に示すように、「SOA デバッガ接続設定」ダイアログが表示されます。

図 9-22 「SOA デバッガ接続設定」ダイアログ



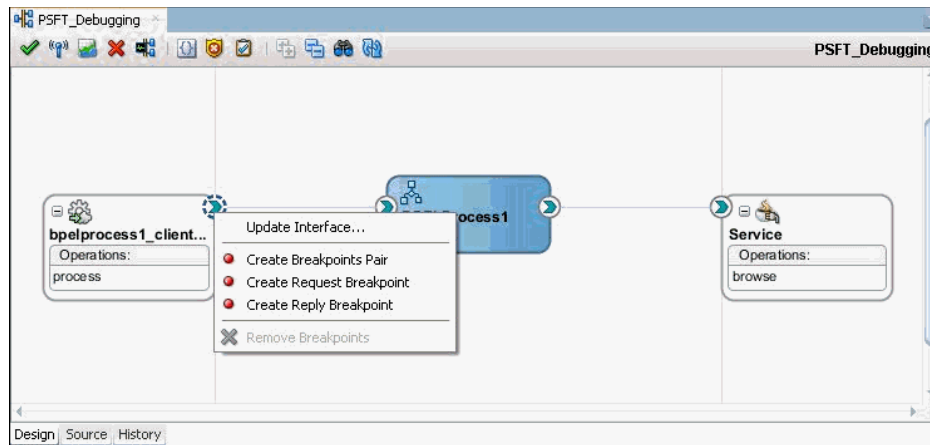
- b. 「OK」をクリックします。

BPEL プロセスが SOA デバッガに接続されると、デバッグ・ログに次のメッセージが表示されます。

デバッガは iwdevora3.ibi.com 5004 でリモート・プロセスに接続しようとしています。  
 デバッガは iwdevora3.ibi.com 5004 でリモート・プロセスに接続しました。  
 デバッガ・プロセスの仮想マシンは SOA デバッガです。

6. ブレークポイントを設定してデバッグを開始します。
  - a. 図 9-23 に示すように、コンポーネントを右クリックし、設定するブレークポイント・タイプを選択します。

図 9-23 ブレークポイントの選択



**ブレークポイント・ペアの作成:** リクエスト/リプライ (アウトバウンド/インバウンド) 相互作用に対してはこのブレークポイント・タイプを設定します。リクエストとリプライの両方が重要となるシナリオに便利です。

**リクエスト・ブレークポイントの作成:** リクエスト (アウトバウンド) 相互作用に対してはこのブレークポイント・タイプを設定します。リクエストのみが重要となるシナリオに便利です。

**リプライ・ブレークポイントの作成:** リプライ (インバウンド) 相互作用に対してはこのブレークポイント・タイプを設定します。リプライのみが重要となるシナリオに便利です。

**WS デバッグの開始:** デバッグ・セッションを開始するにはこのブレークポイント・タイプを設定します。デバッグ・セッションには、たとえば、Web サービスから BPEL プロセスへの開始 SOAP リクエストから、アダプタ参照バインディング・コンポーネントまでが含まれます。

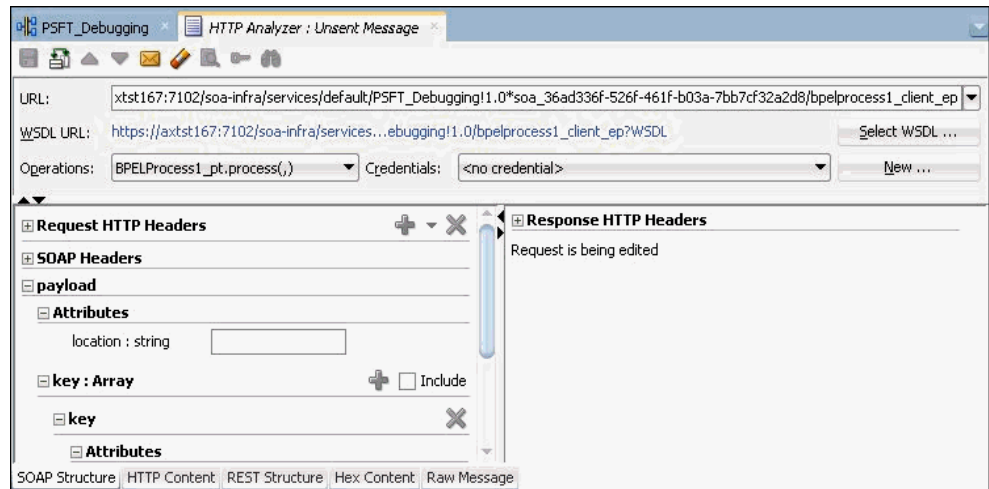
- b. ブレークポイントを設定したら、図 9-24 に示すように、右側のハンドルを右クリックして「WS デバッグの開始」を選択します。

図 9-24 WS デバッグの開始



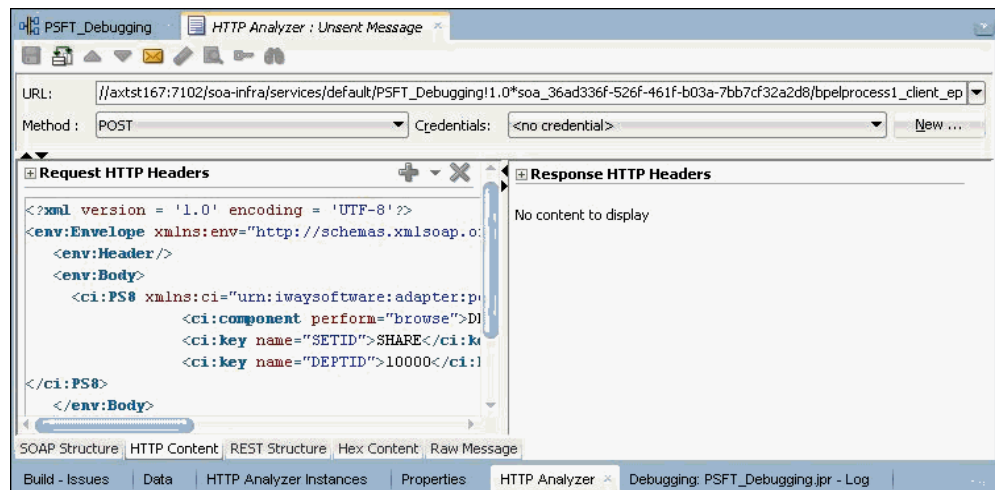
図 9-25 に示すように、「HTTP アナライザ」ダイアログが表示されます。

図 9-25 「HTTP アナライザ」 ダイアログ



- c. 下のタブから「HTTP コンテンツ」を選択します。ここで、図 9-26 に示すように、ペイロードをコピーして本文に貼り付けます。

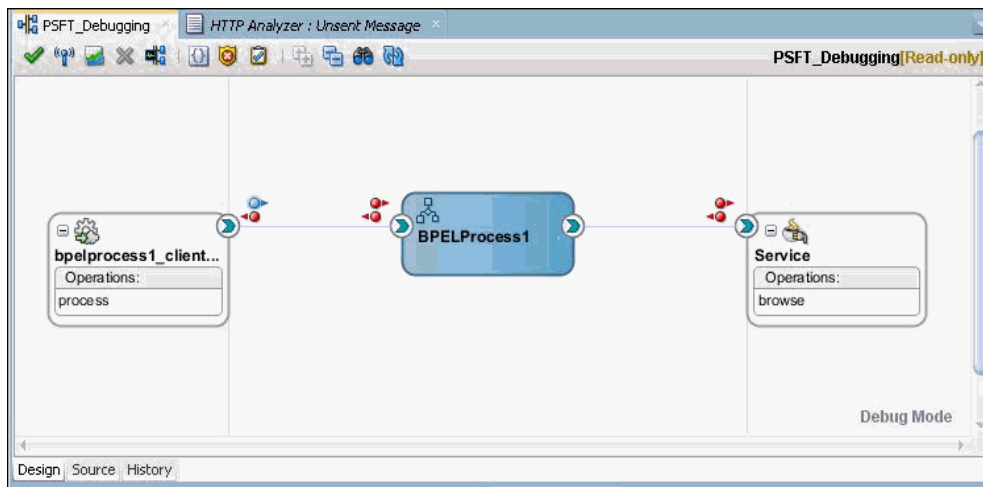
図 9-26 「HTTP コンテンツ」を選択



- d. 「リクエストの送信」をクリックします。

図 9-27 に示すように、指定したブレークポイントで BPEL プロセスが停止し、青く点滅します。






図 9-27 BPEL プロセスがブレークポイントで停止



- e. 図 9-28 に示すように、使用可能な「ステップ」オプションを使用してデバッグ・プロセスをステップ実行します。

図 9-28 「ステップ」オプション



アイコン	説明
	デバッグ・セッションを終了または連結解除します。
	フレームをステップ実行します。 これにより、次のブレークポイント (ブレークポイントが設定された BPEL プロセスの受信アクティビティなど) に移動します。ブレークポイントがない場合は、すべてのフレームをステップ実行して最初のフレームに戻ります。 [F8] を押してフレームをステップ実行することもできます。
	次の有効な位置までトレース実行します。 これは、新しいフレームである場合もあれば、同じフレームの別の位置である場合もあります。 [F7] を押してフレームをトレース実行することもできます。
	フレームをステップ・アウトします。 このオプションは、BPEL の Scope アクティビティまたは Sequence アクティビティを処理するためにのみ使用されます。スコープの処理が完了すると、プロセスの次のスコープまたはアクティビティで一時停止します。[Shift] + [F7] を押すこともできます。
	ステップ操作を再開します。 [F9] を押して再開することもできます。

7. リクエストのペイロードとヘッダー情報を表示します。
  - a. 「ウィンドウ」をクリックし、「デバッグ」、「データ」の順に選択します。  
Oracle Application Adapter for PeopleSoft のリクエスト・ブレイクポイントで停止したときのヘッダー情報のサンプルを図 9-29 に示します。

図 9-29 ヘッダー情報

Name	Value	Type	Declared Type	Hex Value	Address	ID	Count
completionPe...	null						
ecid	1b072b21-...						
masterConve...	null						
MESH_METRICS	null						
nativePayload							
replyToPortT...	null						
transaction	Name=[EJ...						
transport.htt...	192.168.1...						
XID	BEA1-079...						

Oracle Application Adapter for PeopleSoft のレスポンス・ペイロードのサンプルを図 9-30 に示します。

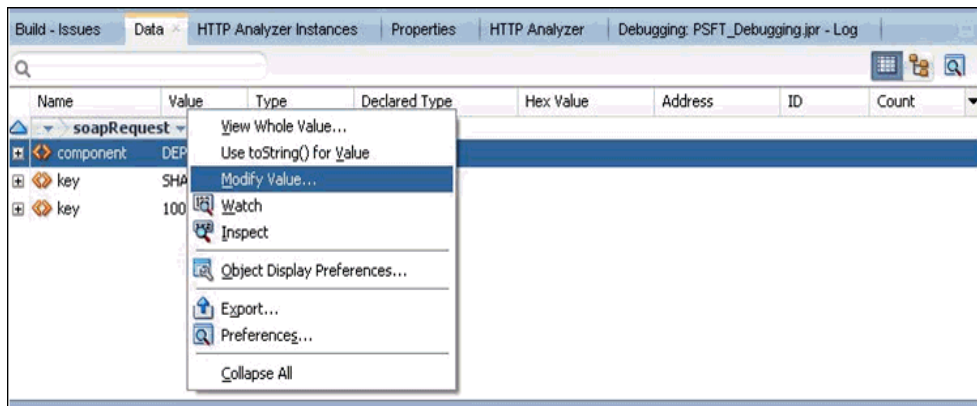
図 9-30 レスポンス・ペイロードのサンプル

Name	Value	Type	Declared Type	Hex Value	Address	ID	Count
jca.iwayOut...	PeopleSoft...						
jca.iwayOut...	PeopleSoft...						
jca.iwayOut...	PeopleSoft...						
jca.iwayOut...	PeopleSoft...						
jca.iwayOut...	{}						
jca.iwayOut...	{HP_STATS...						
jca.iwayOut...	{HP_STATS...						
jca.iwayOut...	{HP_STATS...						
jca.iwayOut...	{ADMIN_R...						

**注意：** 図 9-30 のペイロードの表示は、画面サイズによって制限されています。実際には、BPEL プロセスのブレイクポイントでは完全なペイロードが表示されます。画面をスクロールすると、ペイロードのすべての要素を表示できます。

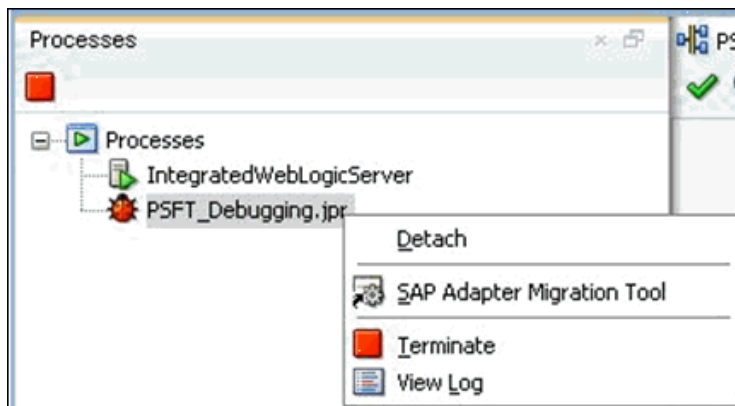
8. リクエスト・ペイロードのコンテンツを変更します。
  - a. 図 9-31 に示すように、SOAP リクエストを展開し、変更するフィールドを右クリックして、コンテキスト・メニューから「値の変更」を選択します。

図 9-31 値の変更



9. デバッグ・セッションを終了または連結解除します。
  - a. 「ウィンドウ」、「プロセス」の順にクリックします。図 9-32 に示すように、「プロセス」タブでプロセスを右クリックし、「連結解除」または「終了」を選択します。

図 9-32 デバッグ・セッションの連結解除



- b. 次のいずれかのオプションを選択します。
  - 連結解除: デバッグ・プロセスを終了せずに SOA デバッガを削除します。
  - 終了: デバッグ・プロセスを終了します。

### 9.3.3.2 Oracle JDeveloper でのインバウンド BPEL プロセスのデバッグ

1. インバウンド BPEL プロセスをデプロイします。
  - a. プロジェクトを右クリックし、「デプロイ」を選択します。  
「デプロイメント・アクション」ダイアログが表示されます。
  - b. 「アプリケーション・サーバーへのデプロイ」を選択し、「次へ」をクリックします。  
「構成のデプロイ」ダイアログが表示されます。
  - c. 「次へ」をクリックします。  
「サーバーの選択」ダイアログが表示されます。
  - d. デプロイするサーバーを選択し、「終了」をクリックします。



- e. 次のステップに進む前に、プロジェクトのデプロイが完了し、エラーや問題が発生していないことを確認してください。
2. BPEL プロセスを SOA デバッガに接続します。
    - a. 図 9-33 に示すように、インバウンド・コンポジットを右クリックし、「デバッグ」を選択します。

図 9-33 デバッグする BPEL プロセスを選択

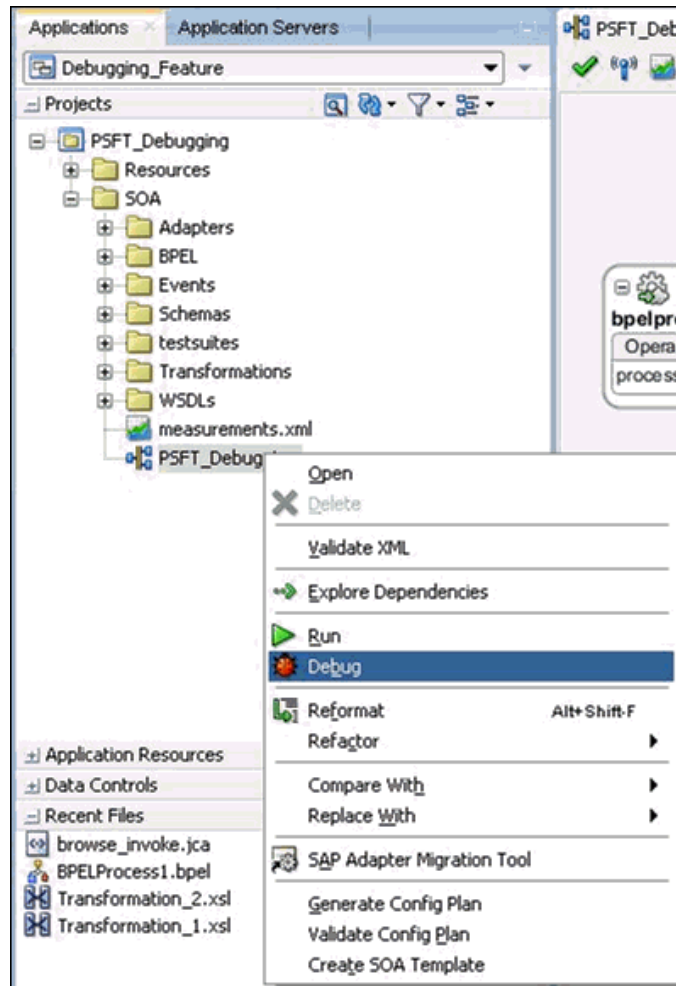
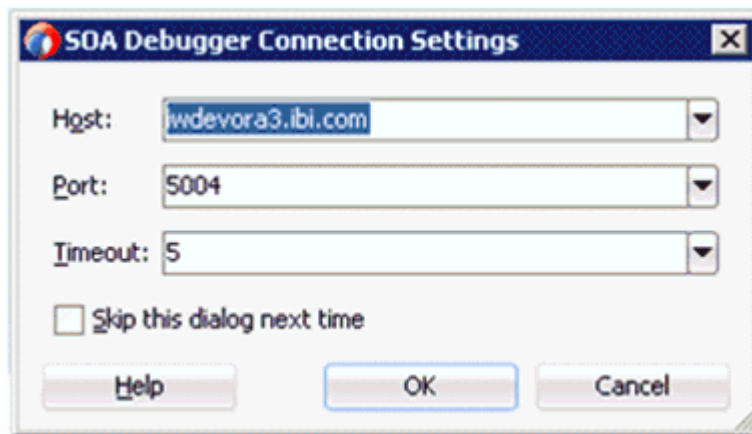


図 9-34 に示すように、「SOA デバッガ接続設定」ダイアログが表示されます。

図 9-34 「SOA デバッガ接続設定」ダイアログ



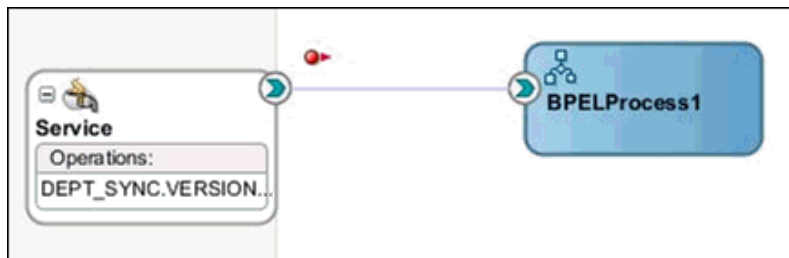
- b. 「OK」をクリックします。

BPEL プロセスが SOA デバッガに接続されると、デバッグ・ログに次のメッセージが表示されます。

デバッガは iwdevora3.ibi.com 5004 でリモート・プロセスに接続しようとしています。  
デバッガは iwdevora3.ibi.com 5004 でリモート・プロセスに接続しました。  
デバッガ・プロセスの仮想マシンは SOA デバッガです。

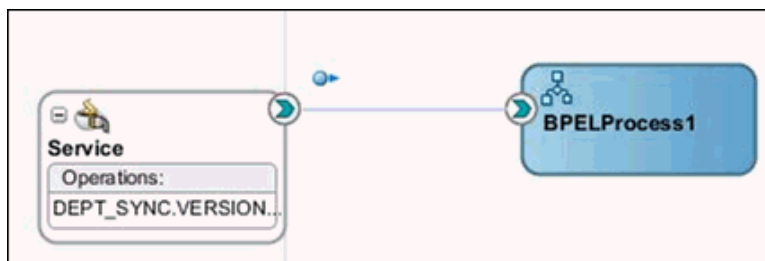
3. 図 9-35 に示すように、ブレークポイントを設定します。

図 9-35 ブレークポイントの設定



4. ブレークポイントが設定されて、インバウンド・プロセスから (PeopleSoft からトリガーされるなどして) メッセージが受信されると、図 9-36 に示すように、指定したブレークポイントでプロセスが停止します。

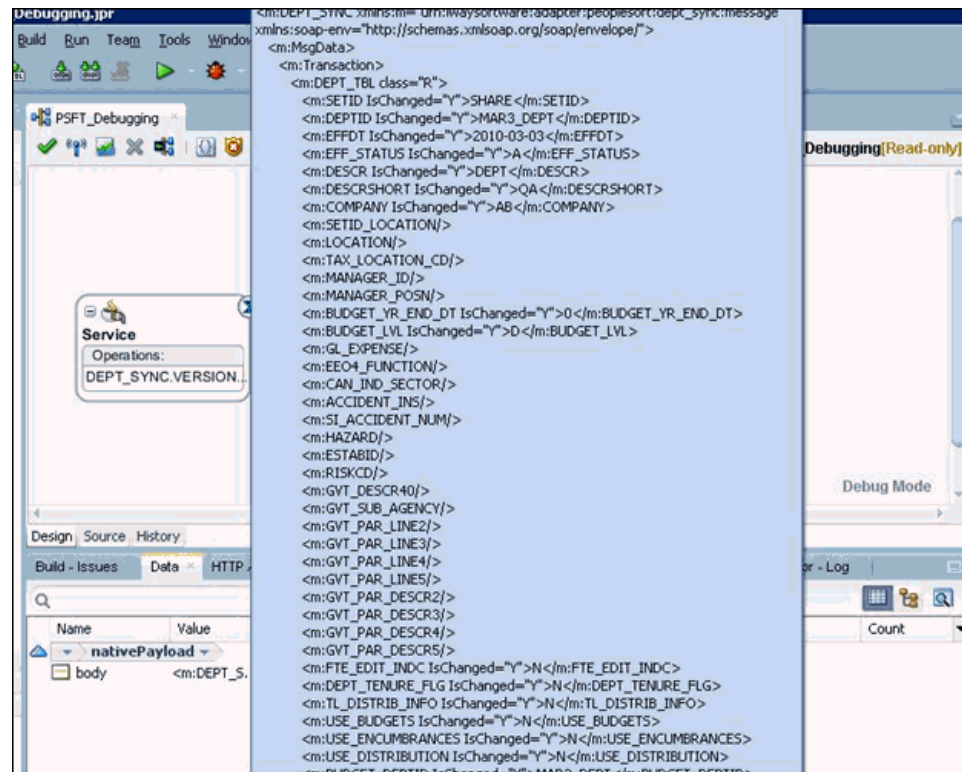
図 9-36 ブレークポイントでプロセスを停止



5. リクエストのペイロードとヘッダー情報を表示します。

- a. 図 9-37 に示すように、「ウィンドウ」をクリックし、「デバッガ」、「データ」の順に選択します。

図 9-37 デバッガのデータ



- b. インバウンド・リクエスト・ブレイクポイント (DEPT\_Sync) に対して表示されるヘッダー情報を図 9-38 に示します。

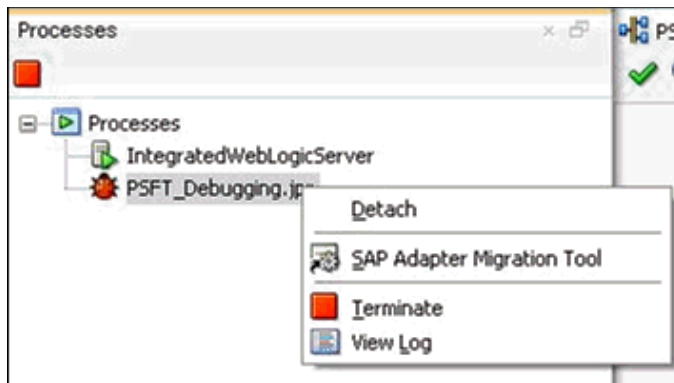
図 9-38 インバウンド・リクエスト・ブレイクポイント (DEPT\_Sync)

Name	Value	Type	Declared Type	Hex Value	Address	ID	Count
(x) jca.iwayInb...	POST						
(x) jca.iwayInb...	False						
(x) jca.iwayInb...	EXTERNAL						
(x) jca.iwayInb...	/psft						
(x) jca.iwayInb...	Java1.5.0_04						
(x) jca.iwayInb...	0						
(x) nativePayload							
(x) subject	weblogic, A...						
(x) XID	<none>						

6. デバッグ・セッションを終了または連結解除します。

- a. 「ウィンドウ」、「プロセス」の順にクリックします。図 9-39 に示すように、「プロセス」タブでプロセスを右クリックし、「連結解除」または「終了」を選択します。

図 9-39 デバッグ・セッションの連結解除



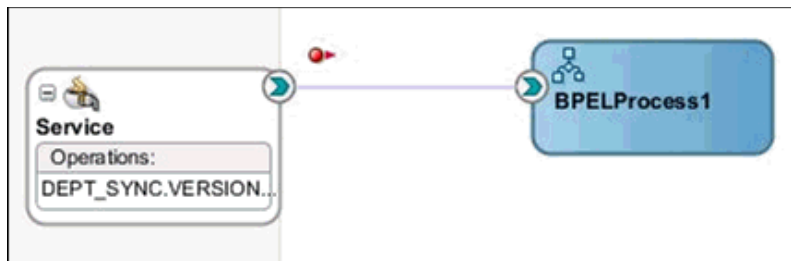
- b. 次のいずれかのオプションを選択します。

**連結解除:** デバッグ・プロセスを終了せずに SOA デバッガを削除します。

**終了:** デバッグ・プロセスを終了します。

図 9-40 に示すように、プロセスが連結解除されて表示されます。

図 9-40 連結解除された BPEL プロセス



### 9.3.4 Oracle JDeveloper での OSB プロセスのデバッグ

この項では、Oracle JDeveloper で OSB プロセスをデバッグする方法について説明します。次のトピックが含まれています。

- 9.3.4.1 項「前提条件」
- 9.3.4.2 項「Oracle JDeveloper でのアウトバウンド OSB プロセスのデバッグ」
- 9.3.4.3 項「Oracle JDeveloper でのインバウンド OSB プロセスのデバッグ」

#### 9.3.4.1 前提条件

Oracle JDeveloper で、*IntegratedWebLogicServer* ドメインと、ファイル出力を含む OSB プロセスがすでに作成されていることを確認してください。

---

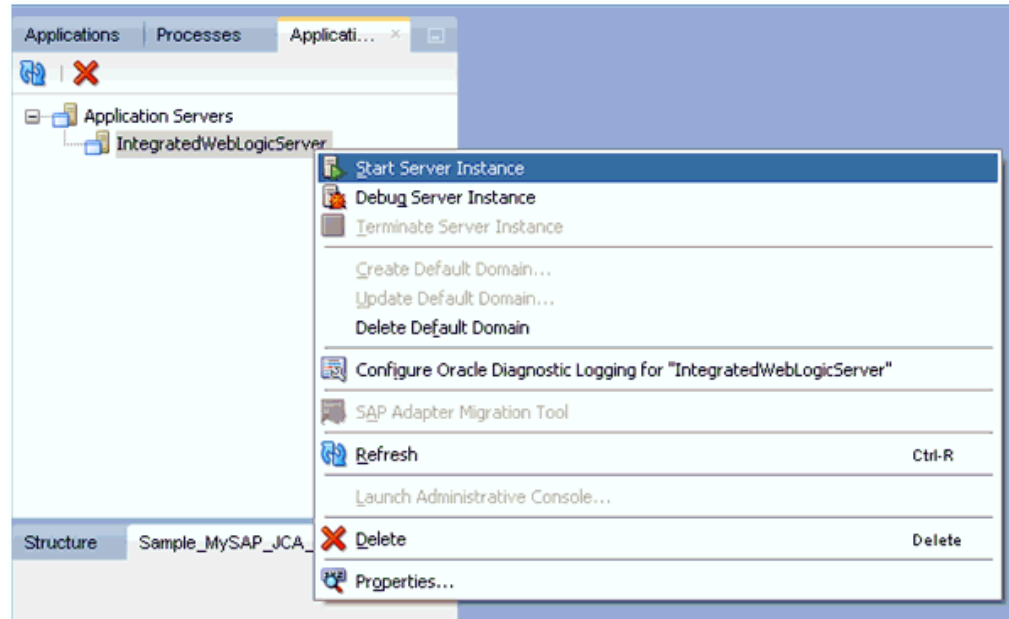
**注意:** アプリケーション名とプロジェクト名が同じであることを確認してください。

---

1. Oracle JDeveloper を開き、*IntegratedWebLogicServer* または *startWebLogic.cmd* を起動します。
  - a. 左ペインの「アプリケーション・サーバー」タブをクリックします。

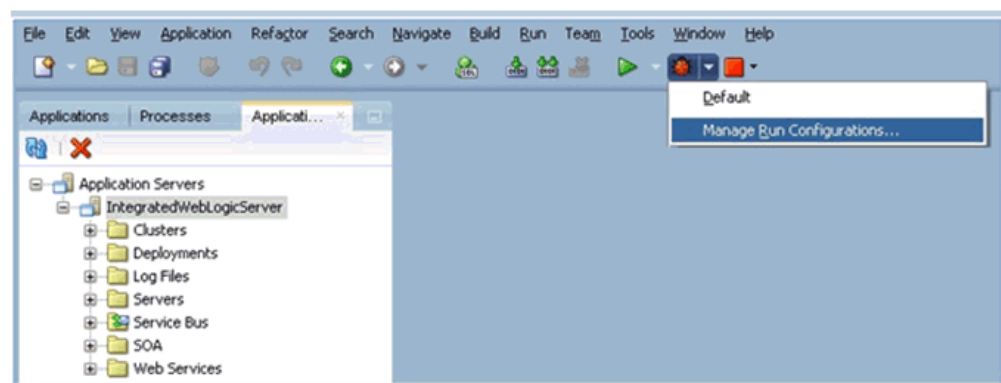
- b. 図 9-41 に示すように、「アプリケーション・サーバー」ノードの下の「IntegratedWebLogicServer」を右クリックし、コンテキスト・メニューから「サーバー・インスタンスの起動」を選択します。

図 9-41 サーバー・インスタンスの起動



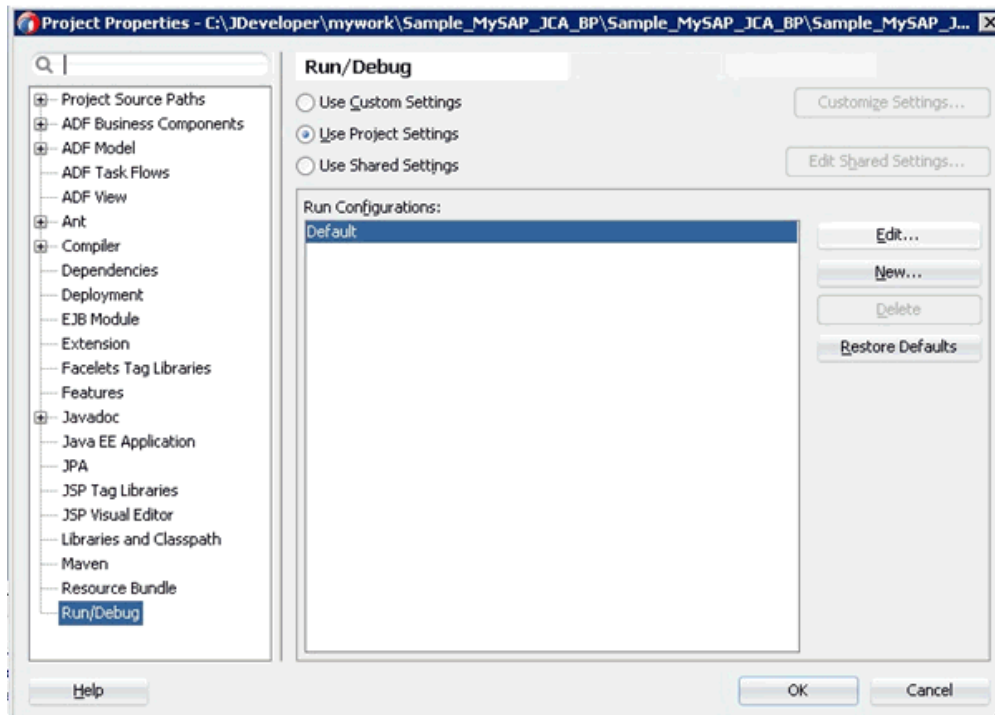
- c. または、`startWebLogic.cmd` を使用して、コマンド・プロンプトから Oracle WebLogic Server を起動します。
2. デバッグ環境を設定します。
- a. 図 9-42 に示すように、「デバッグ」アイコンの横の下矢印をクリックし、コンテキスト・メニューから「実行構成の管理」を選択します。

図 9-42 実行構成の管理



- b. または、プロジェクトを右クリックし、「プロジェクト・プロパティ」を選択します。
- 図 9-43 に示すように、「プロジェクト・プロパティ」ダイアログが表示されます。

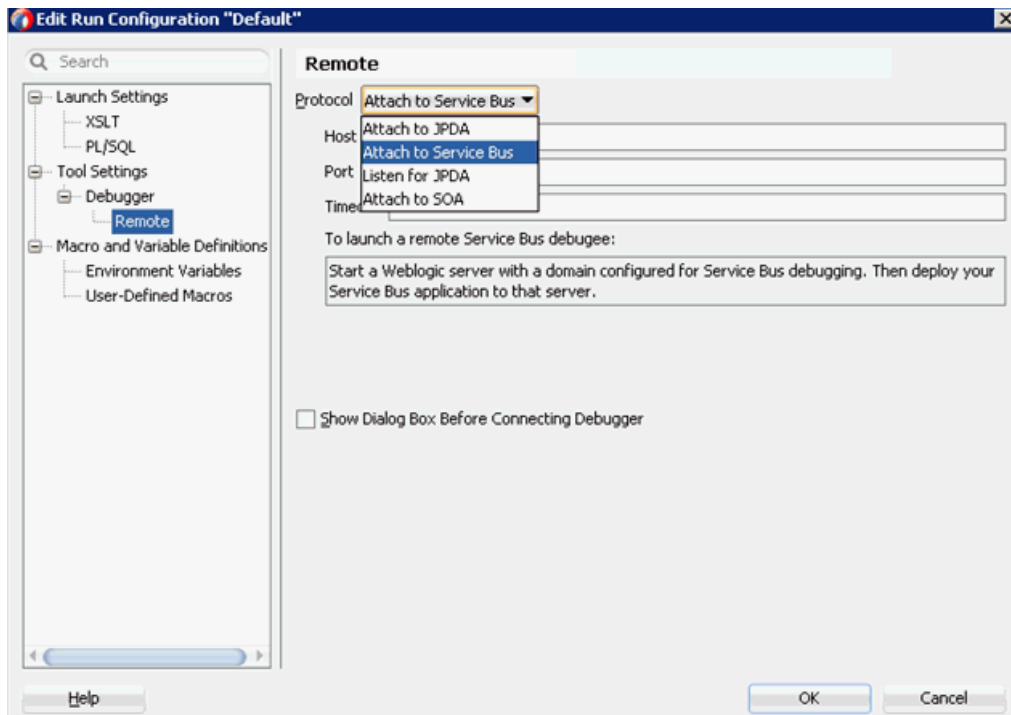
図 9-43 「プロジェクト・プロパティ」 ダイアログ



- c. 左ペインで「実行/デバッグ」を選択し、「実行/デバッグ」ペイン（「実行構成」領域）で「編集」をクリックします。

図 9-44 に示すように、「実行構成の編集」ダイアログが表示されます。

図 9-44 「実行構成の編集」ダイアログ



- d. 左ペインで、「ツール設定」、「デバッガ」の順に展開し、「リモート」をクリックします。
- e. 「プロトコル」リストから、「Service Bus にアタッチ」を選択します。
- f. 「ホスト」と「ポート」はデフォルト値のままにしておきます。
- g. 「OK」をクリックします。

### 9.3.4.2 Oracle JDeveloper でのアウトバウンド OSB プロセスのデバッグ

1. プロジェクトをデプロイします。
  - a. プロジェクトを右クリックし、「デプロイ」を選択します。  
「デプロイメント・アクション」ダイアログが表示されます。
  - b. デプロイするアプリケーションを選択し、「次へ」をクリックします。  
「構成のデプロイ」ダイアログが表示されます。
  - c. 「次へ」をクリックします。  
「アプリケーション・サーバー」ダイアログが表示されます。
  - d. 「IntegratedWebLogicServer」を選択し、「終了」をクリックしてデプロイを完了します。
  - e. 次のステップに進む前に、プロジェクトのデプロイが完了し、エラーや問題が発生していないことを確認してください。
2. OSB プロセスを SOA デバッガに接続します。
  - a. [図 9-45](#) に示すように、左ペインの「アプリケーション」タブで、既存の OSB プロセスのコンポジット XML またはコンポジット・プロジェクトを右クリックし、コンテキスト・メニューから「デバッグ」を選択します。

図 9-45 デバッグする OSB プロセスを選択

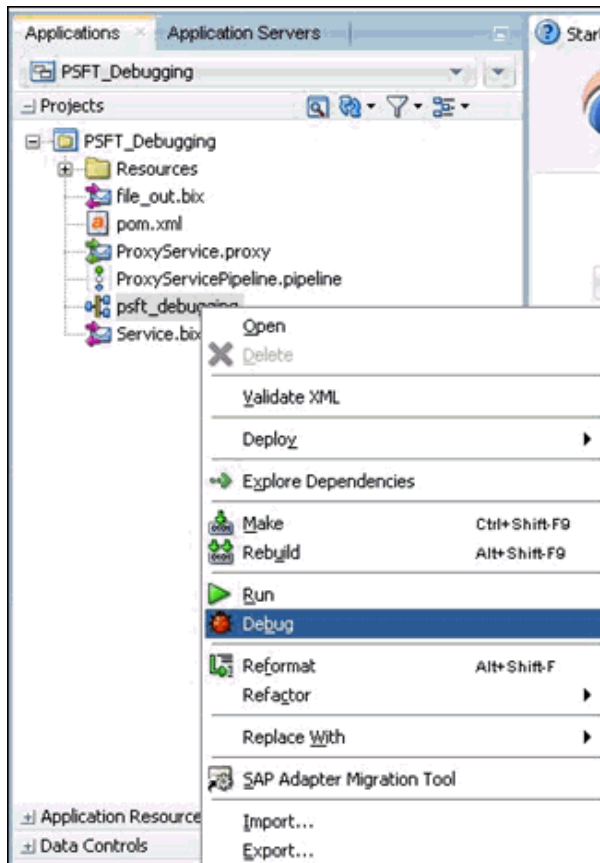
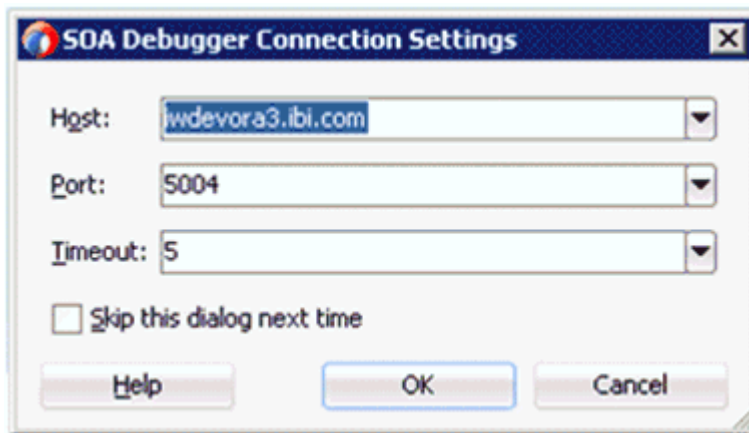


図 9-46 に示すように、「SOA デバッガ接続設定」ダイアログが表示されます。

図 9-46 「SOA デバッガ接続設定」ダイアログ



- b. 「OK」をクリックします。

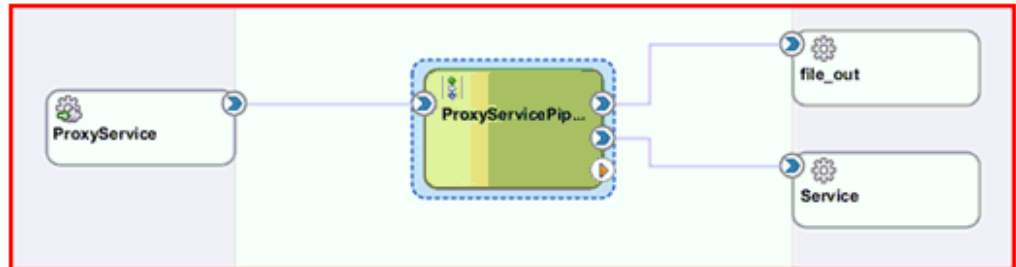
OSB プロセスが SOA デバッガに接続されると、デバッグ・ログに次のメッセージが表示されます。

デバッガは iwdevora3.ibi.com 5004 でリモート・プロセスに接続しようとしています。  
デバッガは iwdevora3.ibi.com 5004 でリモート・プロセスに接続しました。  
デバッガ・プロセスの仮想マシンは SOA デバッガです。



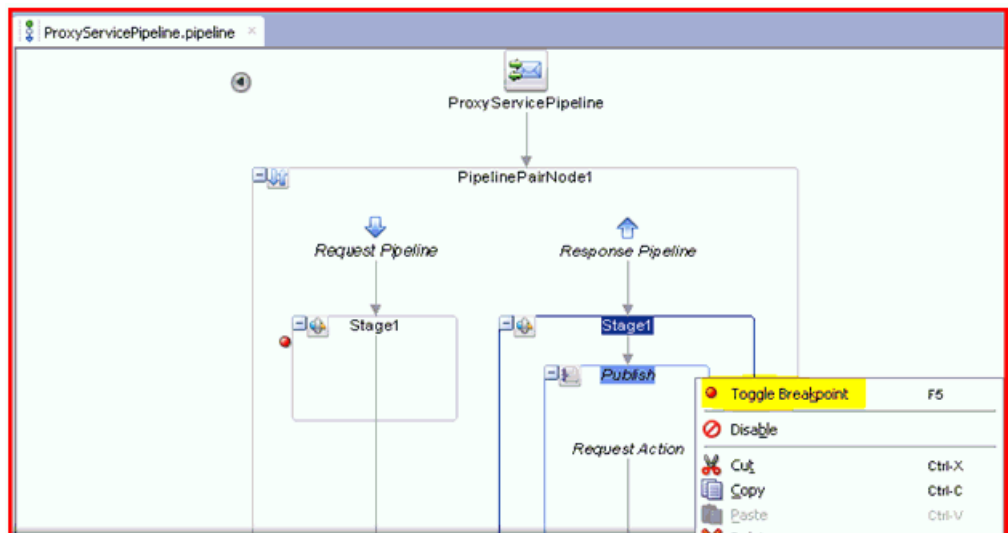
3. ブレークポイントを設定します。
  - a. 図 9-47 に示すように、パイプラインをダブルクリックしてエディタで開きます。

図 9-47 ProxyServicePipeline



- b. ブレークポイントを追加するノードが表示されるまでアクションを展開します。この例では、図 9-48 に示すように、**PipelinePairNode1** を展開し、「ステージ 1」ノード（「リクエスト・パイプライン」の下）を右クリックして、コンテキスト・メニューから「ブレークポイントの切替え」を選択します。

図 9-48 ブレークポイントの切替え



このステップを「パブリッシュ」ノード（「レスポンス・パイプライン」の下）に対して繰り返します。

ノードの横に、ブレークポイントが設定されたことを示す赤いアイコンが表示されます。

---

**注意：** ブレークポイントを無効にするには、ノードを右クリックして「ブレークポイントの無効化」を選択します。

ブレークポイントを削除するには、ノードを右クリックして再度「ブレークポイントの切替え」を選択します。

---

4. デバッグを開始します。

- a. 図 9-49 に示すように、「アプリケーション・ナビゲータ」でパイプラインを右クリックし、「デバッグ」を選択します。

図 9-49 「デバッグ」を選択

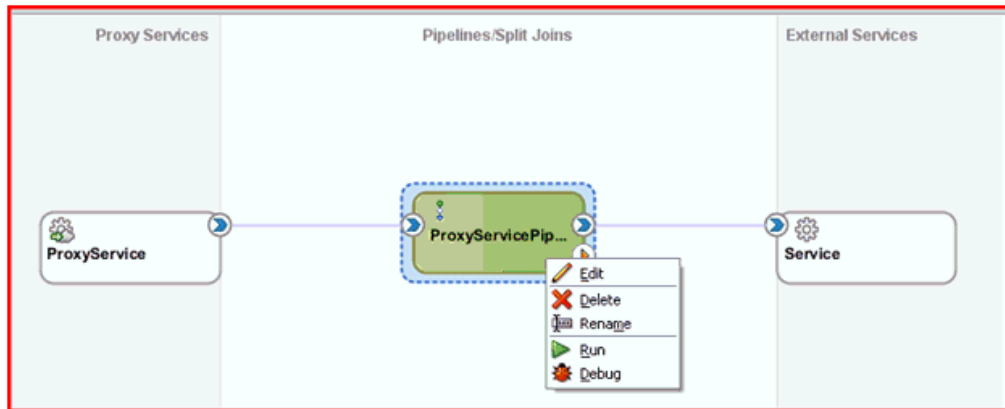
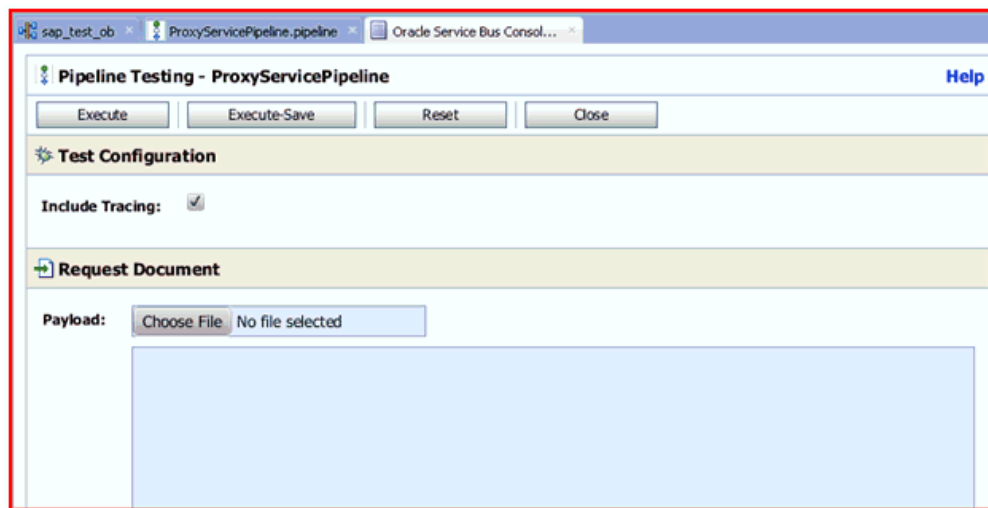


図 9-50 に示すように、プロセスが統合サーバーにデプロイされて、「構成のテスト」ペインが表示されます。

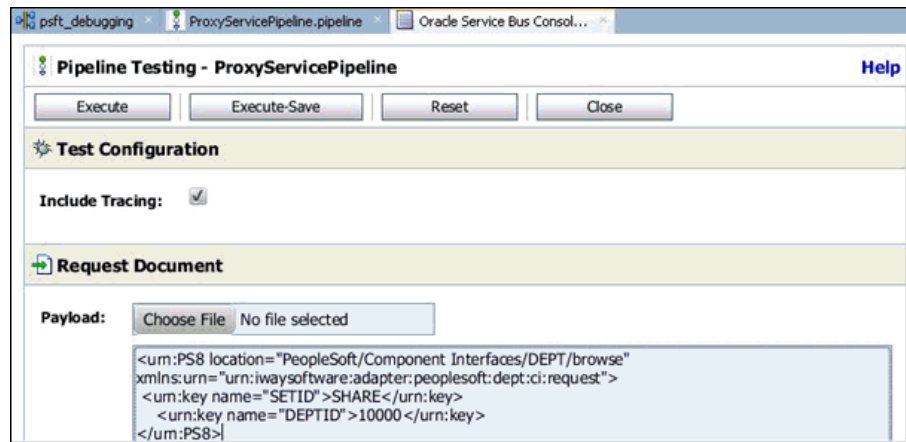
図 9-50 「構成のテスト」ペイン



**注意：** 現在実行されているドメインがない場合は、「デフォルト・ドメインの作成」ダイアログが表示されます。統合サーバーの接続情報を入力し、「OK」をクリックします。このプロセスには数分かかる場合があります。

- b. 図 9-51 に示すように、「構成のテスト」ペインで、「リクエスト・ドキュメント」領域にテスト・データを入力し、必要に応じて追加の入力を構成します。

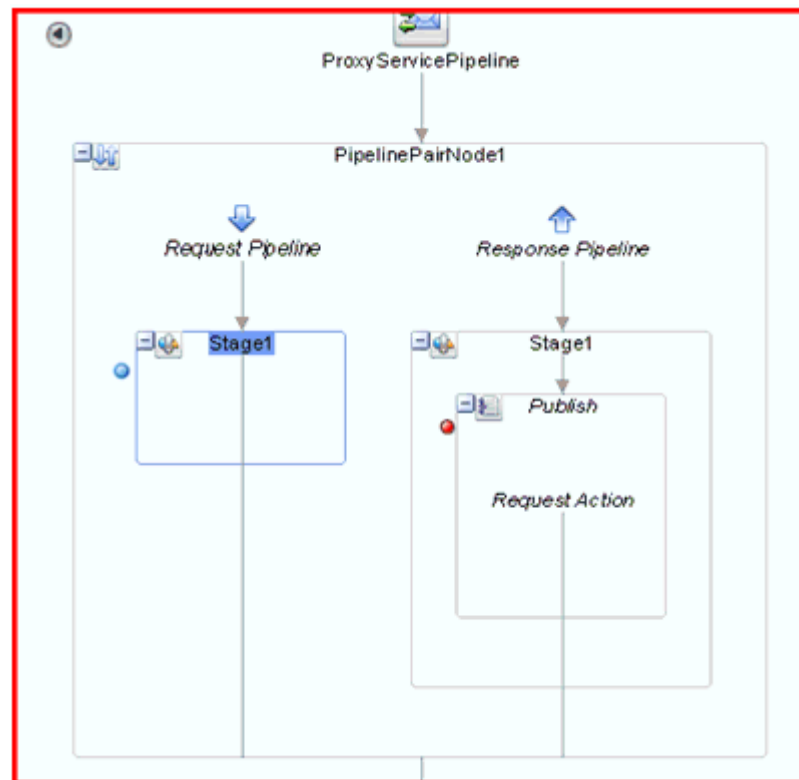
図 9-51 リクエスト・ドキュメントのテスト



- c. 「実行」をクリックします。

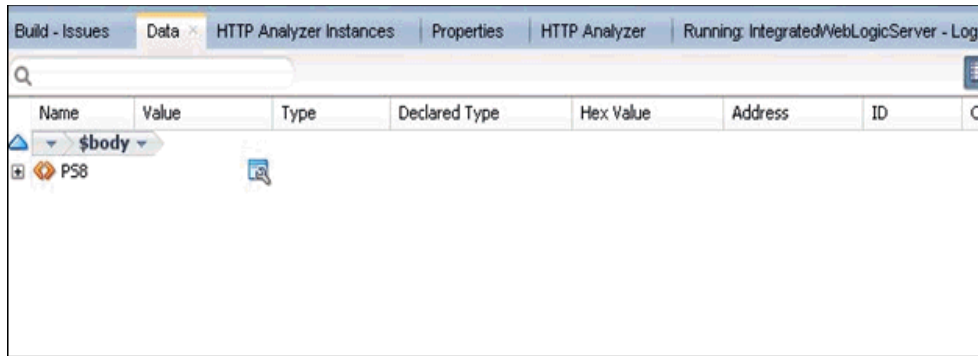
「構成のテスト」ペインでコマンドが実行されますが、図 9-52 に示すように、指定したブレークポイントで OSB プロセスが停止し、青く点滅します。

図 9-52 OSB プロセスがブレークポイントで停止



- d. 図 9-53 に示すように、下部の「データ」タブで、入力されたことを確認します。






図 9-53 「データ」タブ



- e. 図 9-54 に示すように、使用可能な「ステップ」オプションを使用してデバッグ・プロセスをステップ実行します。

図 9-54 「ステップ」オプション

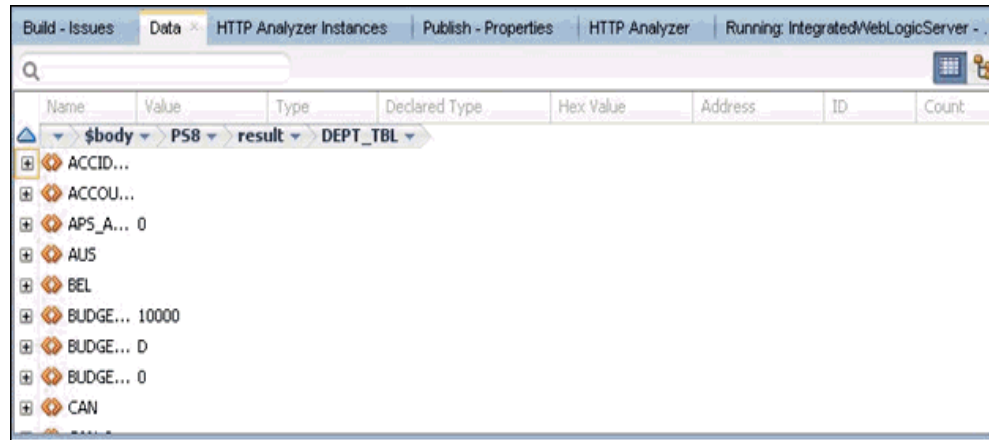


アイコン	説明
	デバッグ・セッションを終了または連結解除します。
	フレームをステップ実行します。 これにより、次のブレークポイント (ブレークポイントが設定された OSB プロセスの受信アクティビティなど) に移動します。ブレークポイントがない場合は、すべてのフレームをステップ実行して最初のフレームに戻ります。 [F8] を押してフレームをステップ実行することもできます。
	次の有効な位置までトレース実行します。 これは、新しいフレームである場合もあれば、同じフレームの別の位置である場合もあります。 [F7] を押してフレームをトレース実行することもできます。
	フレームをステップ・アウトします。 このオプションは、OSB の Scope アクティビティまたは Sequence アクティビティを処理するためにのみ使用されます。スコープの処理が完了すると、プロセスの次のスコープまたはアクティビティで一時停止します。[Shift] + [F7] を押すこともできます。
	ステップ操作を再開します。 [F9] を押して再開することもできます。

- f. 「ステップ実行」を使用して、次のブレークポイント (この例では「レスポンス・パイプライン」) に移動します。

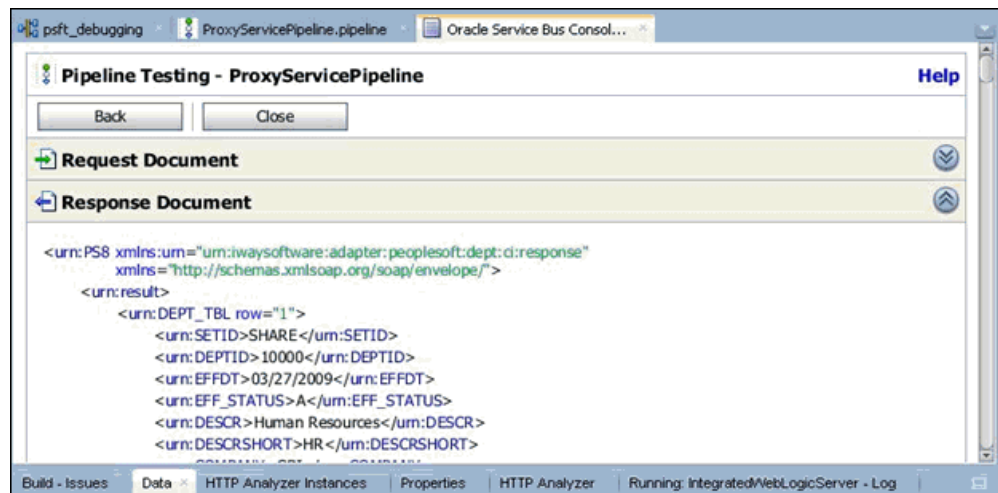
図 9-55 に示すように、「データ」タブで出力を確認できます。

図 9-55 「データ」タブの出力



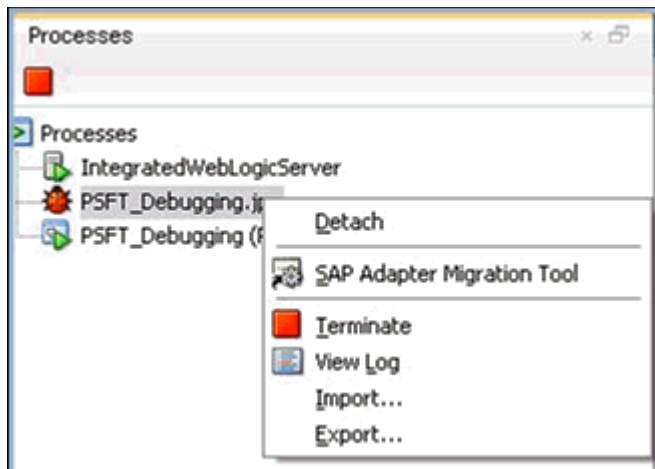
また、図 9-56 に示すように、「Oracle Service Bus コンソール」でレスポンスを確認することもできます。

図 9-56 Oracle Service Bus コンソール



5. デバッグ・セッションを終了または連結解除します。
  - a. 「ウィンドウ」、「プロセス」の順にクリックします。図 9-57 に示すように、「プロセス」タブでプロセスを右クリックし、「連結解除」または「終了」を選択します。

図 9-57 デバッグ・セッションの連結解除



- b. 次のいずれかのオプションを選択します。

**連結解除:** デバッグ・プロセスを終了せずに SOA デバッガを削除します。

**終了:** デバッグ・プロセスを終了します。

### 9.3.4.3 Oracle JDeveloper でのインバウンド OSB プロセスのデバッグ

1. インバウンド OSB プロセスを作成します。

アプリケーション名とプロジェクト名が同じであることを確認してください。

2. プロジェクトをデプロイします。

- a. プロジェクトを右クリックし、「**デプロイ**」を選択します。

「デプロイメント・アクション」ダイアログが表示されます。

- b. デプロイするアプリケーションを選択し、「**次へ**」をクリックします。

「構成のデプロイ」ダイアログが表示されます。

- c. 「**次へ**」をクリックします。

「アプリケーション・サーバー」ダイアログが表示されます。

- d. 「**IntegratedWebLogicServer**」を選択し、「**終了**」をクリックしてデプロイを完了します。

- e. 次のステップに進む前に、プロジェクトのデプロイが完了し、エラーや問題が発生していないことを確認してください。

3. OSB プロセスを SOA デバッガに接続します。

- a. 図 9-58 に示すように、左ペインの「アプリケーション」タブで、既存の OSB プロセスのコンポジット XML またはコンポジット・プロジェクトを右クリックし、コンテキスト・メニューから「**デバッグ**」を選択します。

図 9-58 デバッグする OSB プロセスを選択

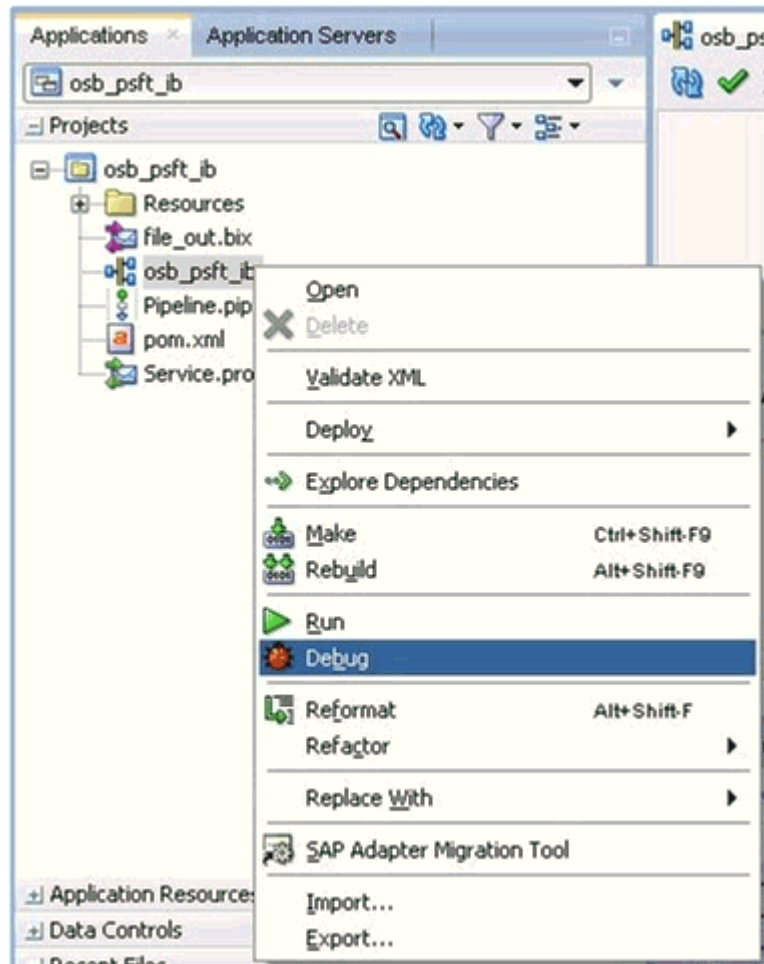
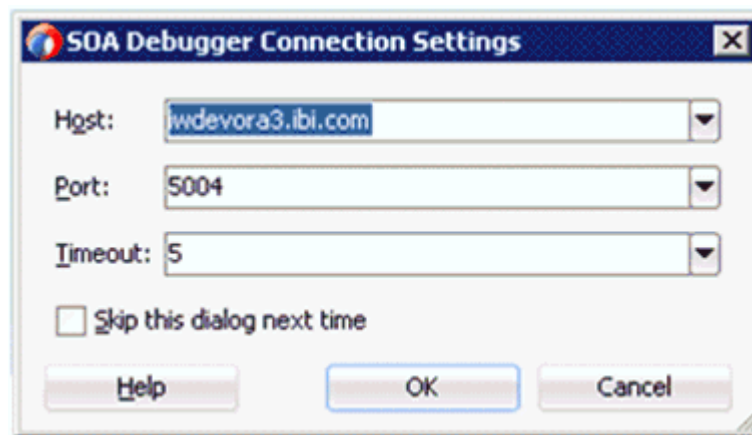


図 9-59 に示すように、「SOA デバッガ接続設定」ダイアログが表示されます。

図 9-59 「SOA デバッガ接続設定」ダイアログ



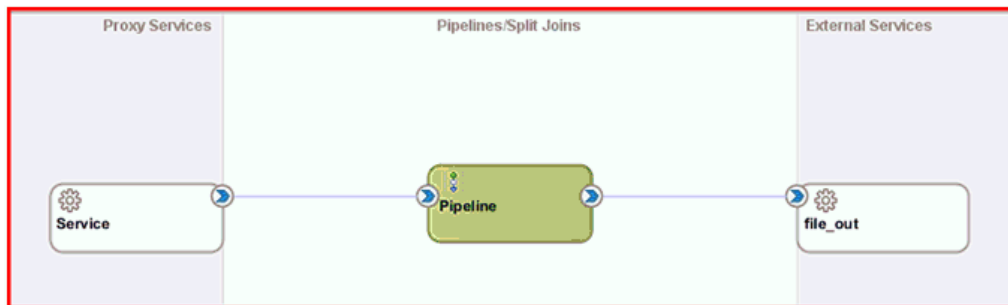
- b. 「OK」をクリックします。

OSB プロセスが SOA デバッガに接続されると、デバッグ・ログに次のメッセージが表示されます。

デバッガは iwdevora3.ibi.com 5004 でリモート・プロセスに接続しようとしています。  
 デバッガは iwdevora3.ibi.com 5004 でリモート・プロセスに接続しました。  
 デバッガ・プロセスの仮想マシンは SOA デバッガです。

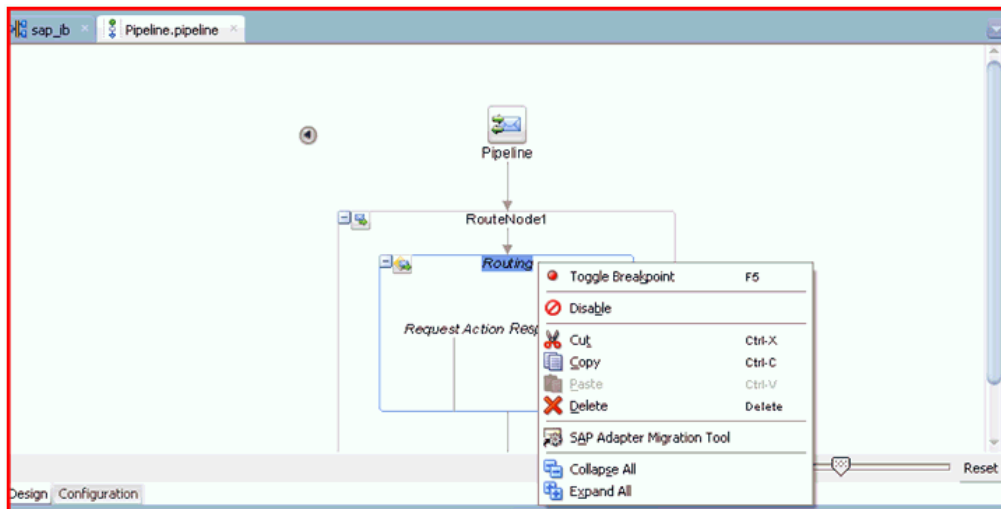
4. ブレークポイントを設定します。
  - a. 図 9-60 に示すように、パイプラインをダブルクリックしてエディタで開きます。

図 9-60 ProxyServicePipeline



- b. ブレークポイントを追加するノードが表示されるまでアクションを展開します。この例では、「ルーティング」が表示されるまで展開します。図 9-61 に示すように、「ルーティング」ノードを右クリックし、コンテキスト・メニューから「ブレークポイントの切替え」を選択します。

図 9-61 ブレークポイントの切替え

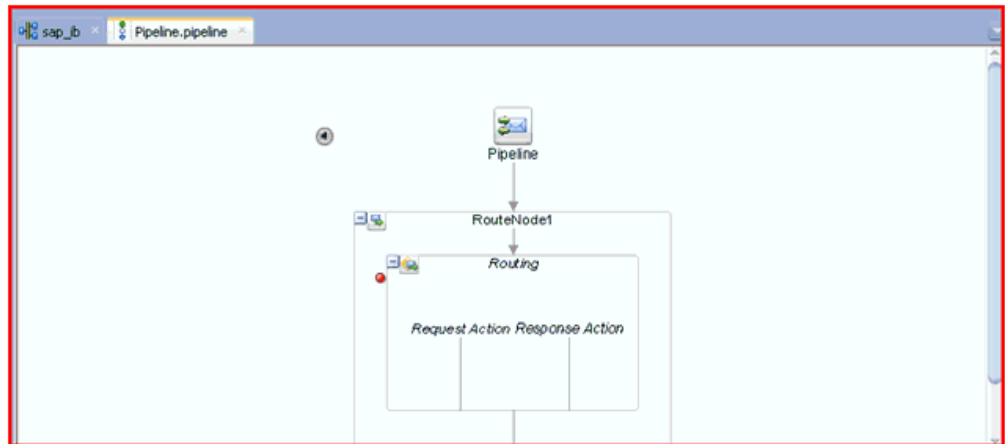


このステップを、ブレークポイントを追加する各ノードに対して繰り返します。この例では、ブレークポイントを設定するのは「ルーティング」ノードのみです。

図 9-62 に示すように、ブレークポイントが設定されたことを示す赤いアイコンがノードの横に表示されます。



図 9-62 設定されたブレイクポイントの赤いアイコン



**注意:** ブレイクポイントを無効にするには、ノードを右クリックして「ブレイクポイントの無効化」を選択します。

ブレイクポイントを削除するには、ノードを右クリックして再度「ブレイクポイントの切替え」を選択します。

5. デバッグを開始します。
  - a. 図 9-63 に示すように、「アプリケーション・ナビゲータ」でパイプラインを右クリックし、「デバッグ」を選択します。

図 9-63 「デバッグ」を選択

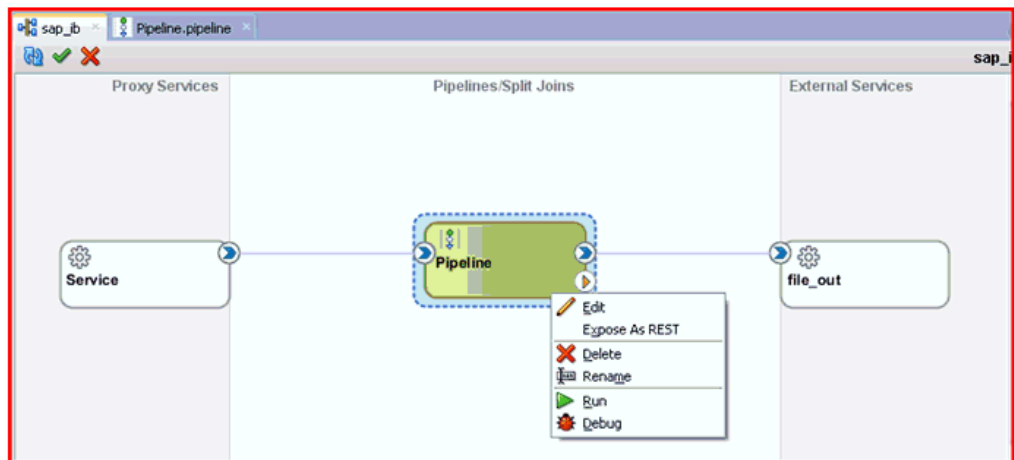
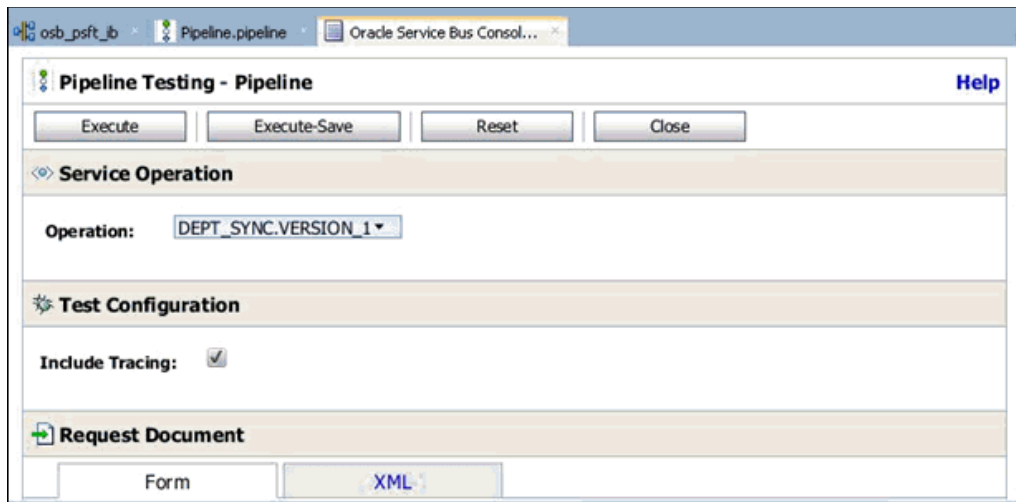


図 9-64 に示すように、プロセスが統合サーバーにデプロイされて、「構成のテスト」ペインが表示されます。

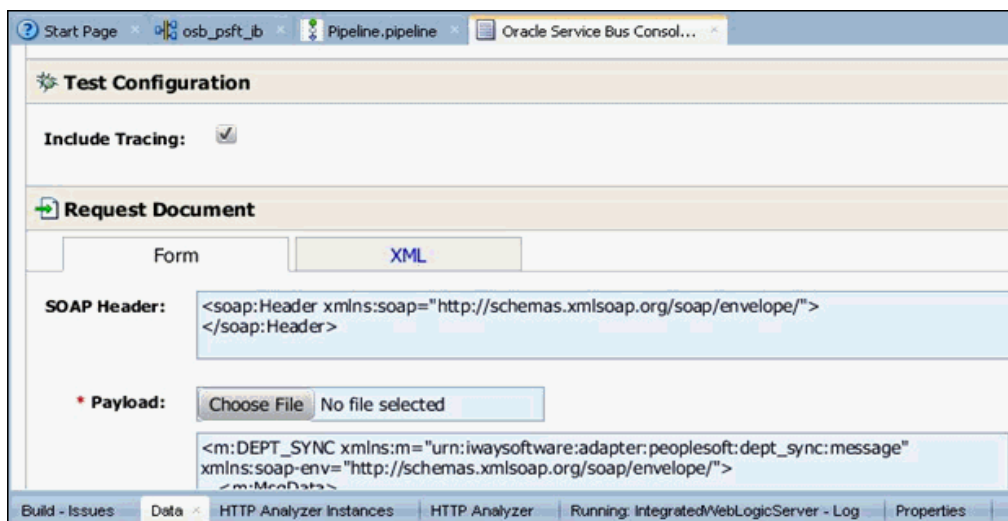
図 9-64 「構成のテスト」 ペイン



**注意：** 現在実行されているドメインがない場合は、「デフォルト・ドメインの作成」ダイアログが表示されます。統合サーバーの接続情報を入力し、「OK」をクリックします。このプロセスには数分かかる場合があります。

- b. 図 9-65 に示すように、「構成のテスト」ペインで、「リクエスト・ドキュメント」領域にテスト・データを入力し、必要に応じて追加の入力を構成します。

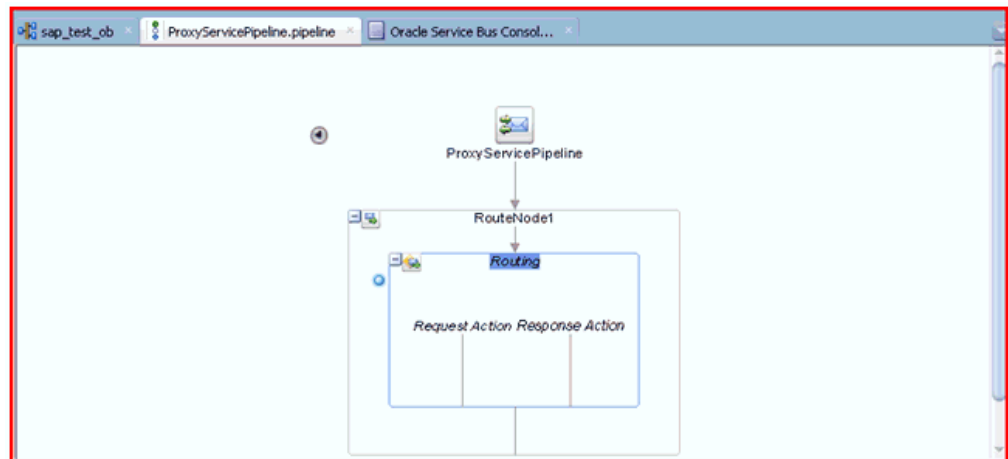
図 9-65 リクエスト・ドキュメントのテスト



- c. 「実行」をクリックします。

「構成のテスト」ペインでコマンドが実行されますが、図 9-66 に示すように、指定したブレークポイントで OSB プロセスが停止し、青く点滅します。






図 9-66 OSB プロセスがブレークポイントで停止



- d. 図 9-67 に示すように、使用可能な「ステップ」オプションを使用してデバッグ・プロセスをステップ実行します。

図 9-67 「ステップ」オプション



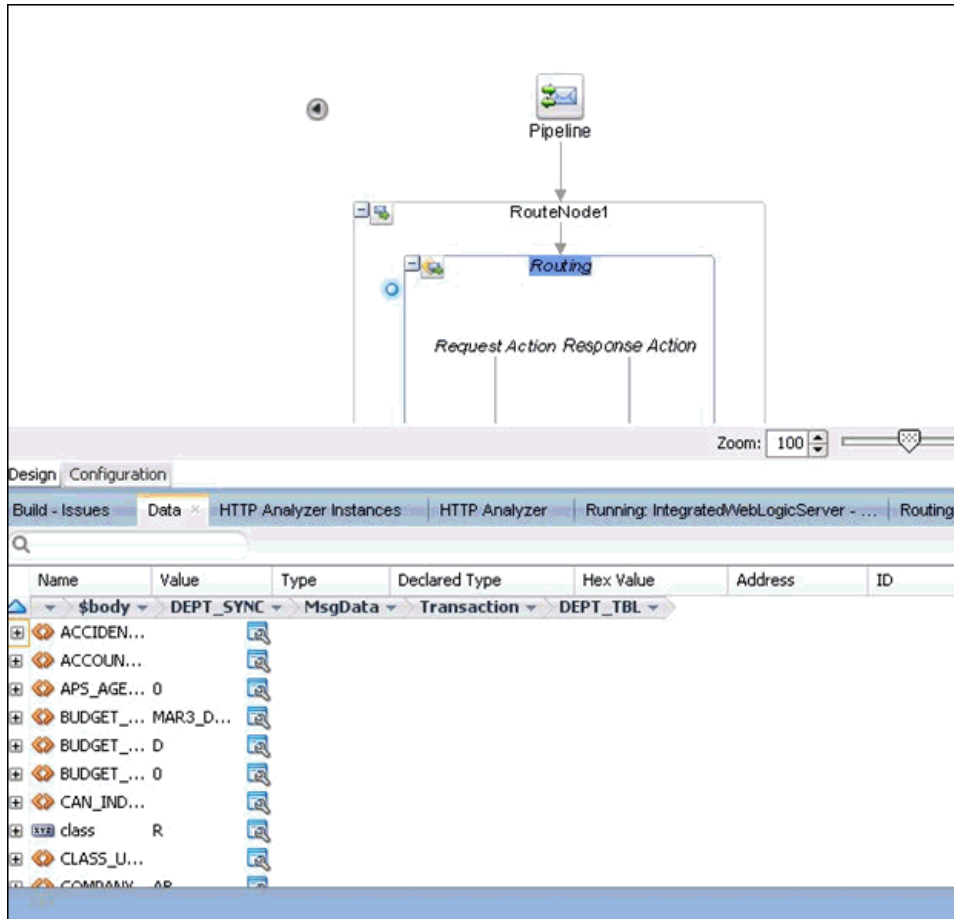
アイコン	説明
	デバッグ・セッションを終了または連結解除します。
	フレームをステップ実行します。 これにより、次のブレークポイント (ブレークポイントが設定された OSB プロセスの受信アクティビティなど) に移動します。ブレークポイントがない場合は、すべてのフレームをステップ実行して最初のフレームに戻ります。 [F8] を押してフレームをステップ実行することもできます。
	次の有効な位置までトレース実行します。 これは、新しいフレームである場合もあれば、同じフレームの別の位置である場合もあります。 [F7] を押してフレームをトレース実行することもできます。
	フレームをステップ・アウトします。 このオプションは、OSB の Scope アクティビティまたは Sequence アクティビティを処理するためにのみ使用されます。スコープの処理が完了すると、プロセスの次のスコープまたはアクティビティで一時停止します。[Shift] + [F7] を押すこともできます。
	ステップ操作を再開します。 [F9] を押して再開することもできます。

- e. 「ステップ実行」を使用して、プロセスの実行を完了します。

**注意：** この例にはブレークポイントが1つしかないため、「ステップ実行」を使用するとプロセスの実行が完了します。

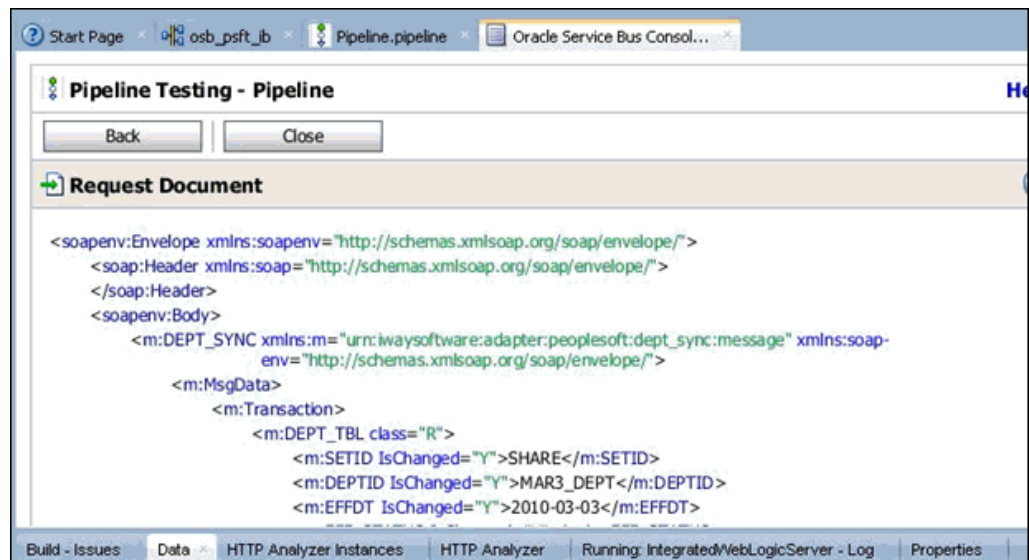
図 9-68 に示すように、「データ」タブでレスポンス・ドキュメントを確認できます。

図 9-68 「データ」タブの出力



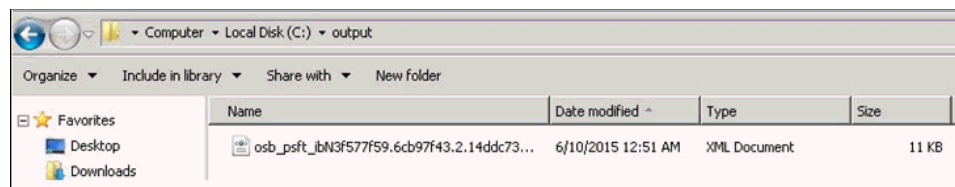
また、図 9-69 に示すように、「Oracle Service Bus コンソール」でレスポンスを確認することもできます。

図 9-69 Oracle Service Bus コンソール



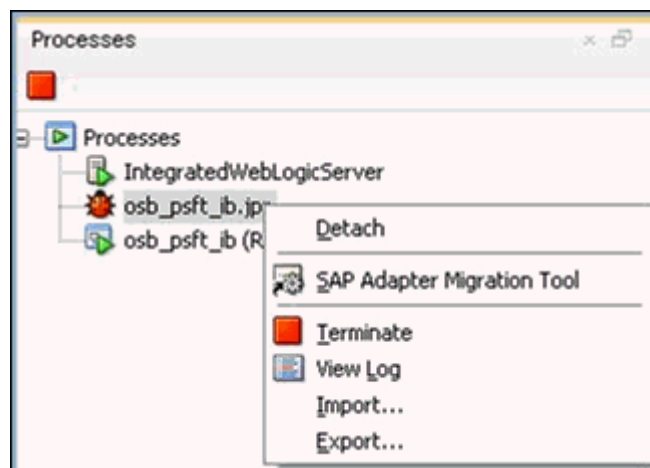
出力は、図 9-70 に示すように、構成済の出力場所にもあります。

図 9-70 構成済の出力場所



6. デバッグ・セッションを終了または連結解除します。
  - a. 「ウィンドウ」、「プロセス」の順にクリックします。図 9-71 に示すように、「プロセス」タブでプロセスを右クリックし、「連結解除」または「終了」を選択します。

図 9-71 デバッグ・セッションの連結解除



- b. 次のいずれかのオプションを選択します。

**連結解除:** デバッグ・プロセスを終了せずに SOA デバッガを削除します。

**終了:** デバッグ・プロセスを終了します。

## 9.4 例外フィルタ

この項では、Oracle Application Adapter for PeopleSoft の例外フィルタ機能を構成する方法について説明し、サンプルのテスト・シナリオを示します。この項では、次のトピックについて説明します。

### ■ 9.4.1 項「例外フィルタの構成」

例外フィルタは、J2CA 構成を使用するアウトバウンド・プロセスについてのみサポートされます。この機能は、BSE 構成、および J2CA 構成を使用するインバウンド・プロセスについてはサポートされていません。

例外フィルタでは、生成された例外をフィルタするために、`com.ibi.afjca.oracle.AdapterExceptionHandler` クラスを使用します。このクラスにより、例外はフィルタされ、次のカテゴリに分類されます。

- `PCRetriableResourceException`
- `PCResourceException`

次の例外は、フォルト・ポリシー・ファイルに表示されます。

- `PCRetriableResourceException` - リモート・フォルト。
- `PCResourceException` - バインディング・フォルト。

### 9.4.1 例外フィルタの構成

例外フィルタの構成は、次のステップで構成されています。

1. WSDL ファイルを生成します。
2. 例外フィルタ機能を備えた BPEL プロセスを作成します。
3. フォルト・ポリシー・ファイルおよびフォルト・バインディング・ファイルを作成します。
4. 例外フィルタ機能を備えた BPEL プロセスをデプロイおよびテストします。

#### 9.4.1.1 WSDL ファイルの生成

WSDL ファイルを生成するには、次のステップを実行します。

1. アプリケーション・エクスプローラを開き、J2CA 構成を作成します。  
詳細は、2-3 ページの「[J2CA 用の構成の作成](#)」を参照してください。
2. PeopleSoft アダプタのターゲットを作成してから、そのターゲットに接続します。  
詳細は、2-5 ページの「[PeopleSoft 用の接続 \(ターゲット\) の確立](#)」を参照してください。
3. 適切なオブジェクトの WSDL を生成します。  
詳細は、2-10 ページの「[WSDL の生成 \(J2CA 構成のみ\)](#)」を参照してください。

#### 9.4.1.2 例外フィルタ機能を備えた BPEL プロセスの作成

例外フィルタ機能を備えた BPEL プロセスを作成するには、次のステップを実行します。

1. JDeveloper を開き、新規の SOA アプリケーションを作成します。

詳細は、4-9 ページの 4.4.2 項「SOA 用の空のコンポジットの作成」を参照してください。

2. 新規の SOA プロジェクト (Exception\_Filter など) を作成します。
3. サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントを作成します。

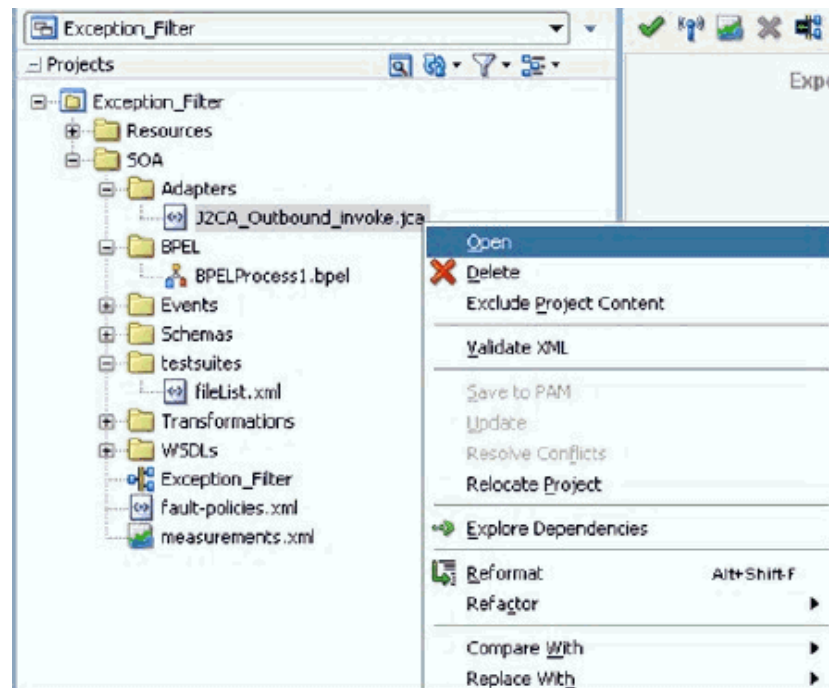
詳細は、4-11 ページの 4.4.3.1 項「サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントの構成」を参照してください。

サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントが作成されると、WSDL ファイル (対応するスキーマおよび JCA ファイルを含む) が JDeveloper プロジェクトにインポートされます。

詳細は、4-11 ページの 4.4.3 項「BPEL アウトバウンド・プロセスの定義」を参照してください。

4. インポートされた JCA ファイルを変更します。
  - a. 図 9-72 に示すように、インポートされた JCA ファイルを右クリックし、メニューの「開く」を選択します。

図 9-72 「アプリケーション・ナビゲータ」タブ



- b. <interaction-spec> 要素に、ExceptionFilter プロパティを追加します。次に例を示します。

```
<interaction-spec className="com.ibi.afjca.cci.IWAFInteractionSpec">
  <property name="FunctionName" value="PROCESS"/><property
  name="ExceptionFilter"
  value="com.ibi.afjca.oracle.AdapterExceptionFilter"/></interaction-spec>
```

- c. 変更された JCA ファイルを保存します。
5. サード・パーティ・アダプタ・サービス・コンポーネントが作成され、JCA ファイルが変更されたら、BPEL プロセス作成の残りの部分を続行します。

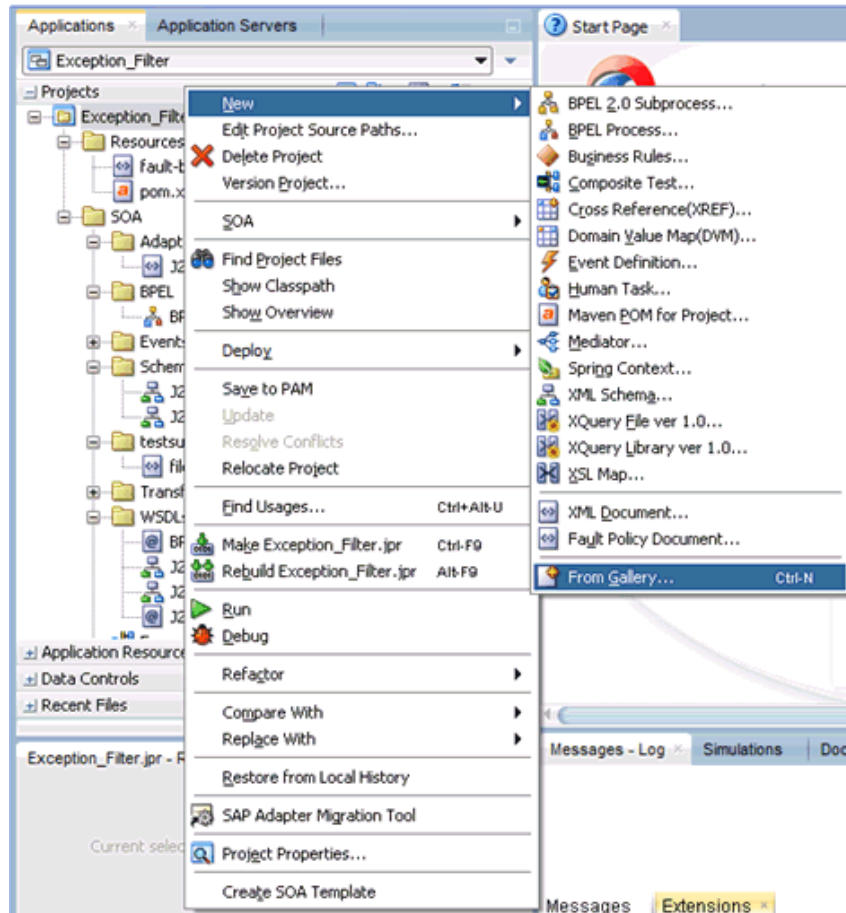
詳細は、4-11 ページの 4.4.3 項「BPEL アウトバウンド・プロセスの定義」を参照してください。

### 9.4.1.3 フォルト・ポリシー・ファイルおよびフォルト・バインディング・ファイルの作成

フォルト・バインディング・ファイルを作成するには、次のステップを実行します。

1. 図 9-73 に示すように、作成された SOA プロジェクト (Exception\_Filter など) を右クリックして、「新規」を選択し、「ギャラリーから」をクリックします。

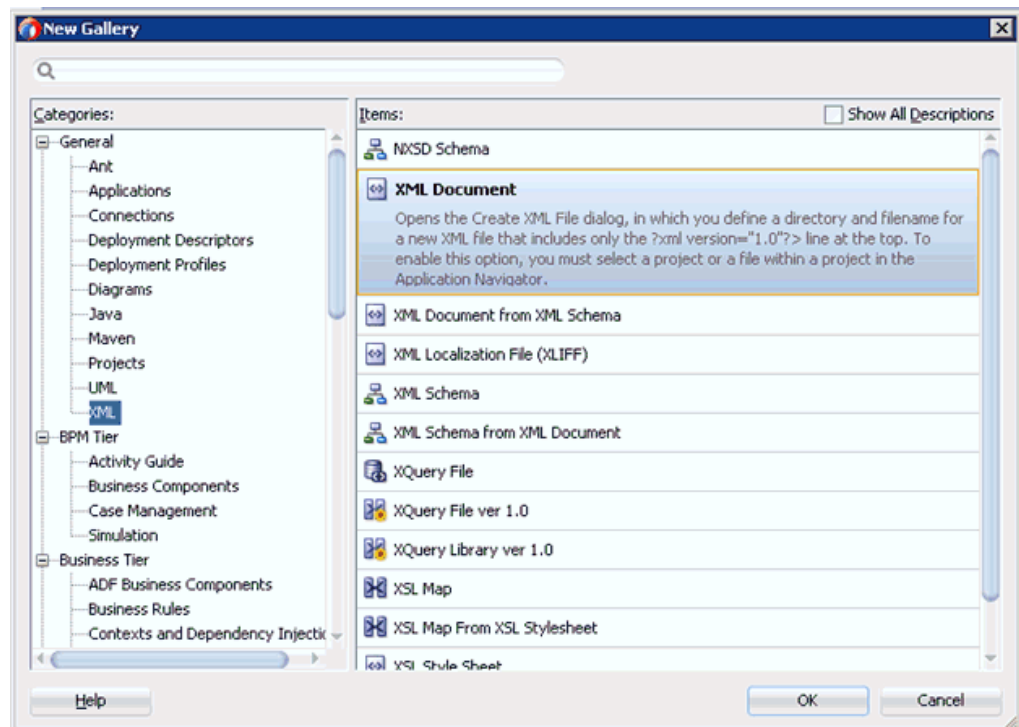
図 9-73 「アプリケーション」タブ



「新規ギャラリー」ダイアログが表示されます。図 9-74 に示すように、「一般」カテゴリの下に「XML」をクリックします。



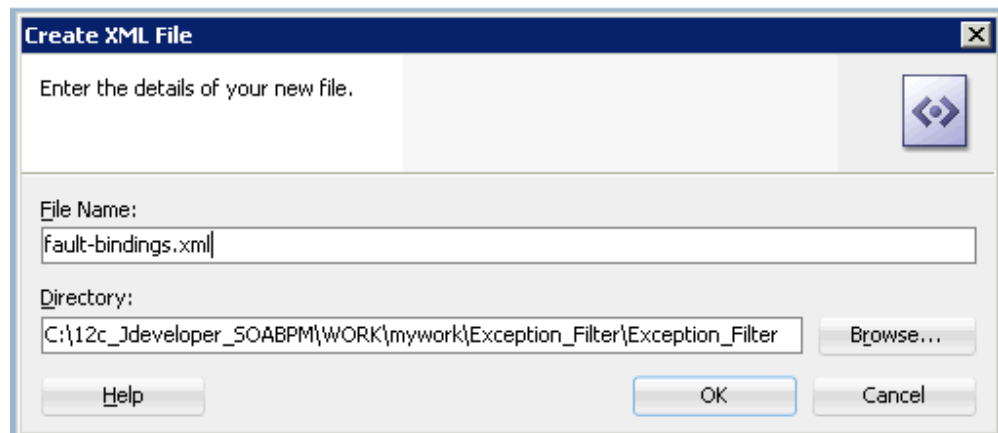
図 9-74 「新規ギャラリー」 ダイアログ



2. 「項目」の下の「XML 文書」を選択し、「OK」をクリックします。

図 9-75 に示すように、「XML ファイルの作成」ダイアログが表示されます。

図 9-75 「XML ファイルの作成」ダイアログ



3. 「ファイル名」フィールドに「**fault-bindings.xml**」と入力し、「OK」をクリックします。
4. **fault-bindings.xml** ファイルに、適切なフォルト・バインディング機能を追加します。

サンプルの **fault-bindings.xml** ファイルを表示するには、9-48 ページの「[サンプルの Fault-Bindings.xml ファイル](#)」を参照してください。

---

**注意：** <name> 要素内のパラメータは、作成された BPEL プロセスの名前です。

---

## 5. fault-bindings.xml ファイルを保存します。

### サンプルの Fault-Bindings.xml ファイル

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<faultPolicyBindings version="2.0.1"
xmlns="http://schemas.oracle.com/bpel/faultpolicy"
xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance">

<component faultPolicy="bpelFaultHandling">
<name>BPELProcess1</name>
</component>

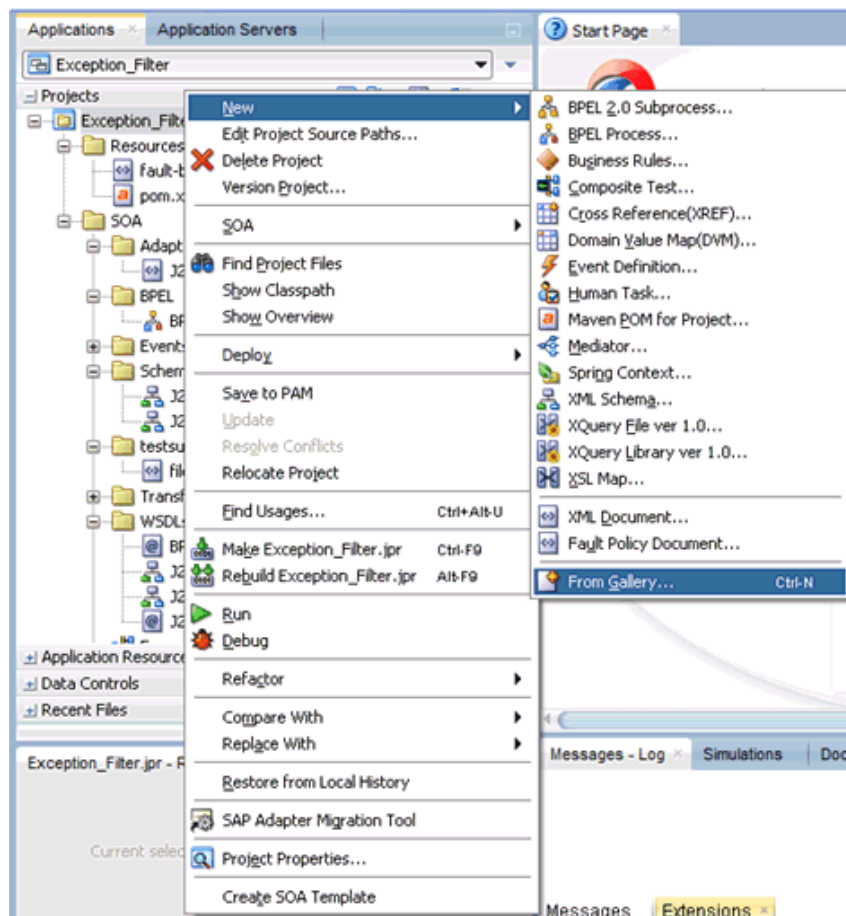
</faultPolicyBindings>
```

### フォルト・ポリシー・ファイルの作成

フォルト・ポリシー・ファイルを作成するには、次のステップを実行します。

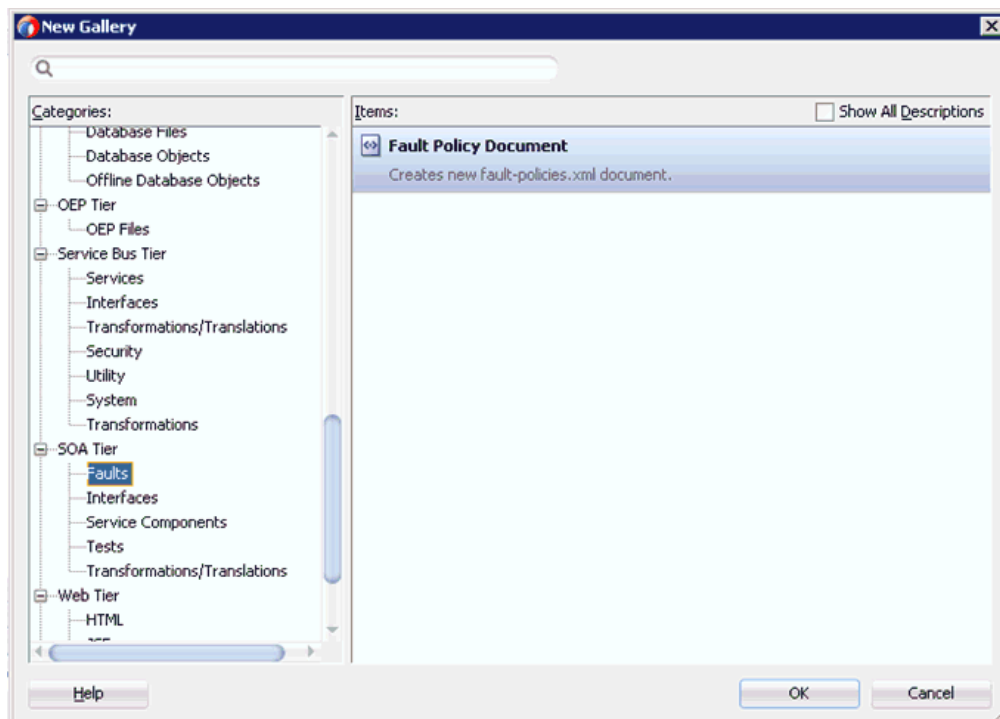
1. 図 9-76 に示すように、作成された SOA プロジェクト (Exception\_Filter など) を右クリックして、「新規」を選択し、「ギャラリーから」をクリックします。

図 9-76 「アプリケーション」タブ



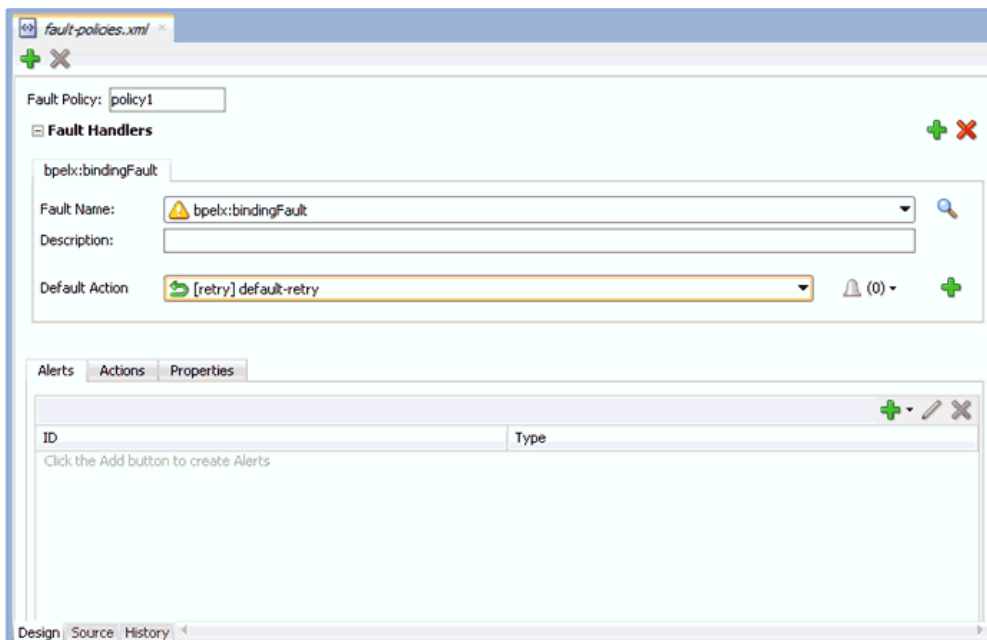
「新規ギャラリー」ダイアログが表示されます。図 9-77 に示すように、「SOA 層」カテゴリの下の「フォルト」を選択します。

図 9-77 「新規ギャラリー」ダイアログ



2. 「項目」の下の「フォルト・ポリシー・ドキュメント」を選択し、「OK」をクリックします。
3. 図 9-78 に示すように、「fault-policies.xml」タブで、「フォルト名」ドロップダウン・リストから「**bpelx:bindingFault**」を選択し、「デフォルト・アクション」ドロップダウン・リストから「**[retry] default-retry**」を選択します。

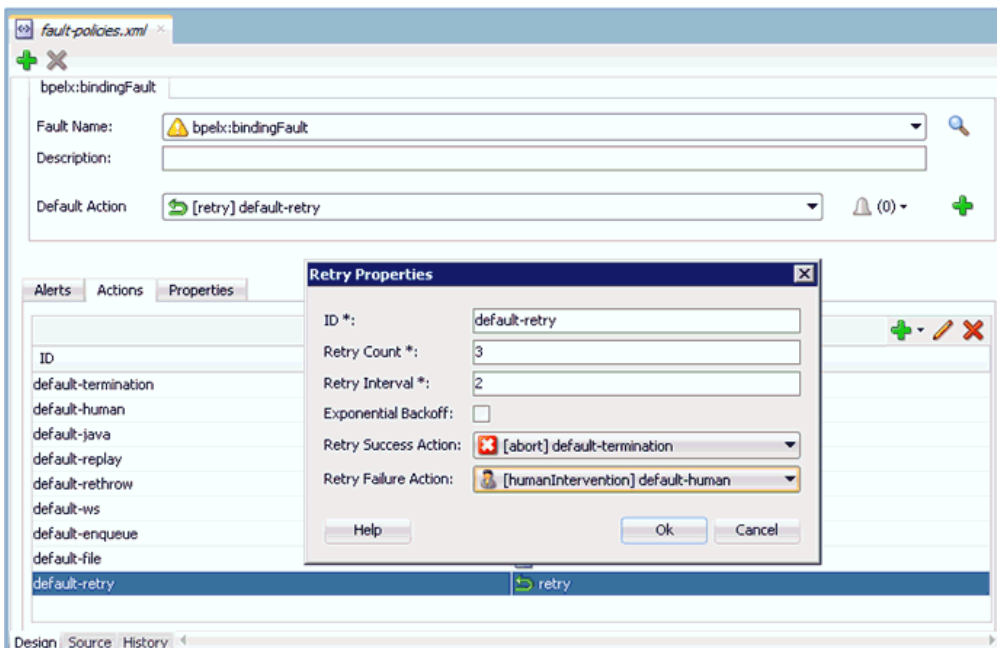
図 9-78 「Fault-policies.xml」 タブ



4. 「アクション」タブをクリックし、「default-retry」をダブルクリックします。

図 9-79 に示すように、「再試行プロパティ」ダイアログ・ボックスが表示されます。

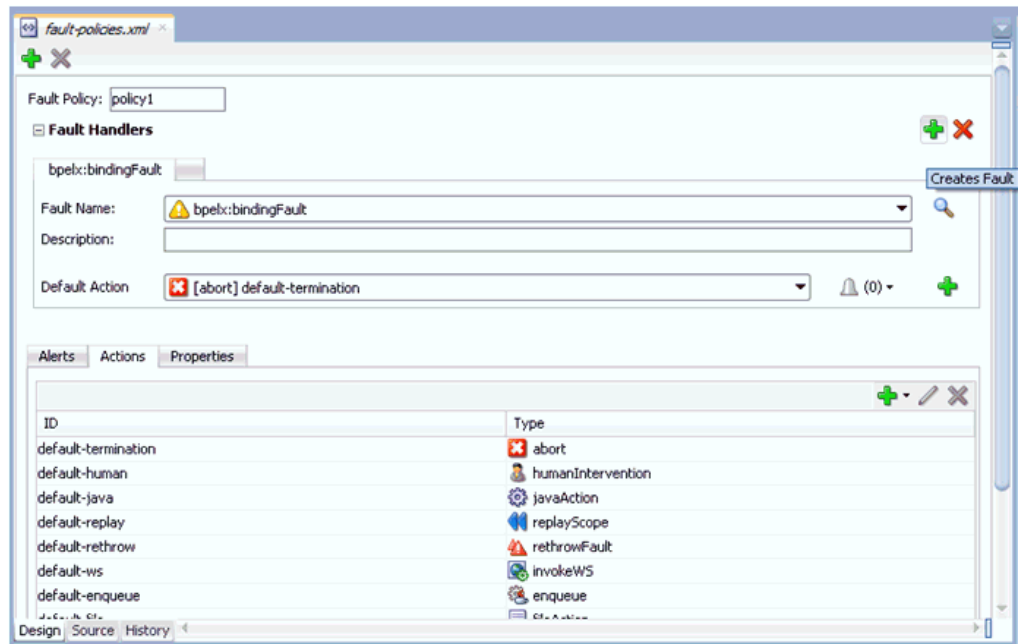
図 9-79 「再試行プロパティ」ダイアログ・ボックス



5. 「再試行成功アクション」ドロップダウン・リストから「[abort] default-termination」を選択し、「再試行失敗アクション」ドロップダウン・リストから「[humanIntervention] default-human」を選択します。
6. 「OK」をクリックします。

7. 図 9-80 に示すように、別のフォルト・ハンドラを作成するには、「追加」をクリックします。

図 9-80 「Fault-policies.xml」タブ



8. 「fault-policies.xml」タブで、「フォルト名」ドロップダウン・リストから「bpelx:remoteFault」を選択し、「デフォルト・アクション」ドロップダウン・リストから「[abort] default-termination」を選択します。
9. 図 9-81 に示すように、「アクション」タブで、「追加」をクリックし、「retry」を選択します。

図 9-81 「アクション」タブ

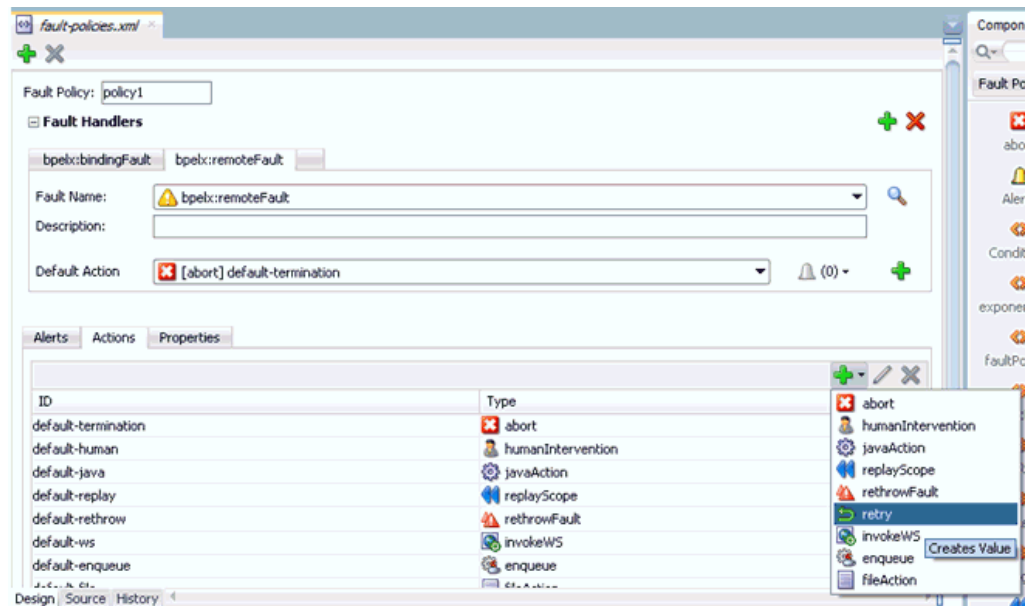
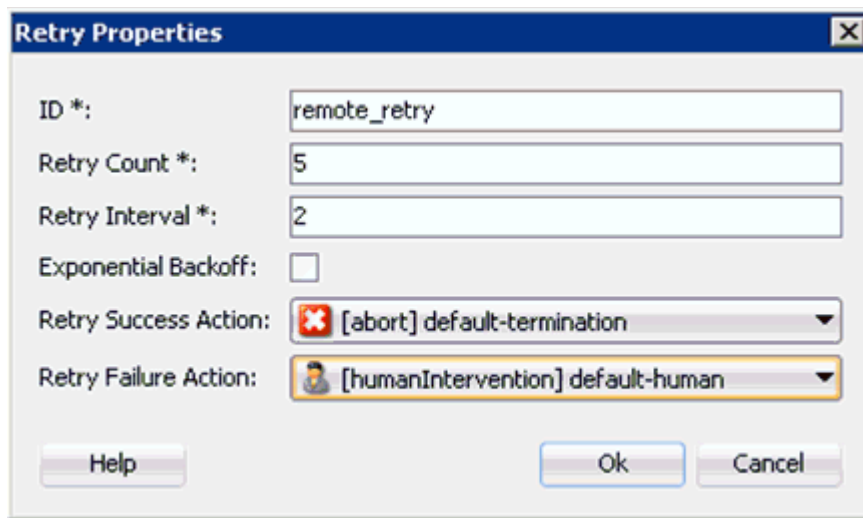


図 9-82 に示すように、「再試行プロパティ」ダイアログが表示されます。

図 9-82 「再試行プロパティ」ダイアログ・ボックス



The screenshot shows a dialog box titled "Retry Properties". It contains the following fields and controls:

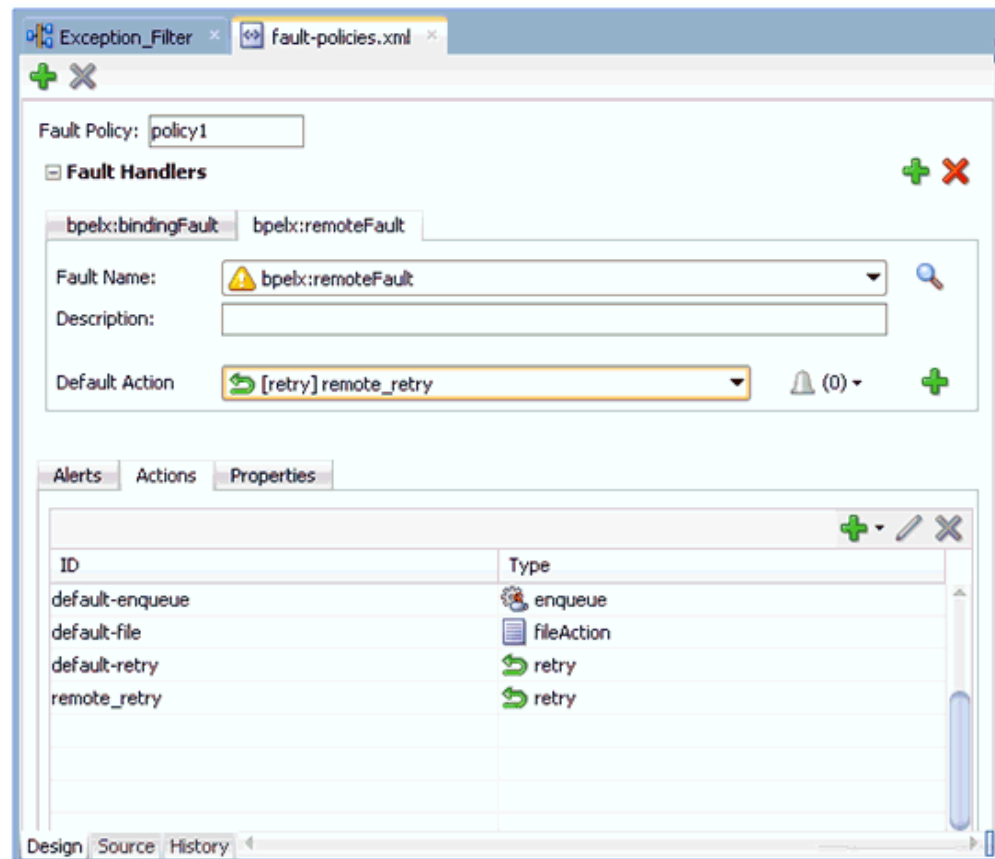
- ID \*: remote\_retry
- Retry Count \*: 5
- Retry Interval \*: 2
- Exponential Backoff:
- Retry Success Action: [abort] default-termination
- Retry Failure Action: [humanIntervention] default-human
- Buttons: Help, Ok, Cancel

10. 「ID」、「再試行数」および「再試行間隔」の各フィールドに値を指定します。
11. 「再試行成功アクション」ドロップダウン・リストから「**[abort] default-termination**」を選択し、「再試行失敗アクション」ドロップダウン・リストから「**[humanIntervention] default-human**」を選択します。
12. 「OK」をクリックします。

作成された再試行 ID が「アクション」タブに表示されます。

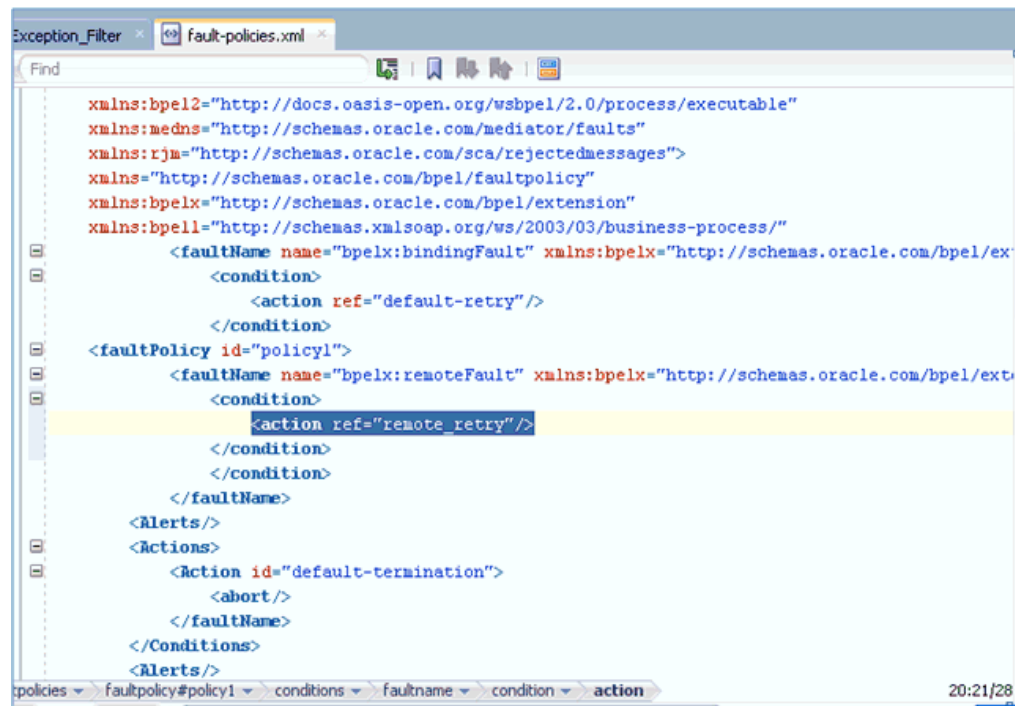
図 9-83 に示すように、「デフォルト・アクション」ドロップダウン・リストから、新規に作成された再試行 ID (remote\_retry など) を選択します。

図 9-83 「Fault-policies.xml」 タブ



13. 「すべて保存」をクリックします。
14. 図 9-84 に示すように、「ソース」タブをクリックして、フォルト・ポリシーが正しく追加されていることを確認します。

図 9-84 「ソース」タブ

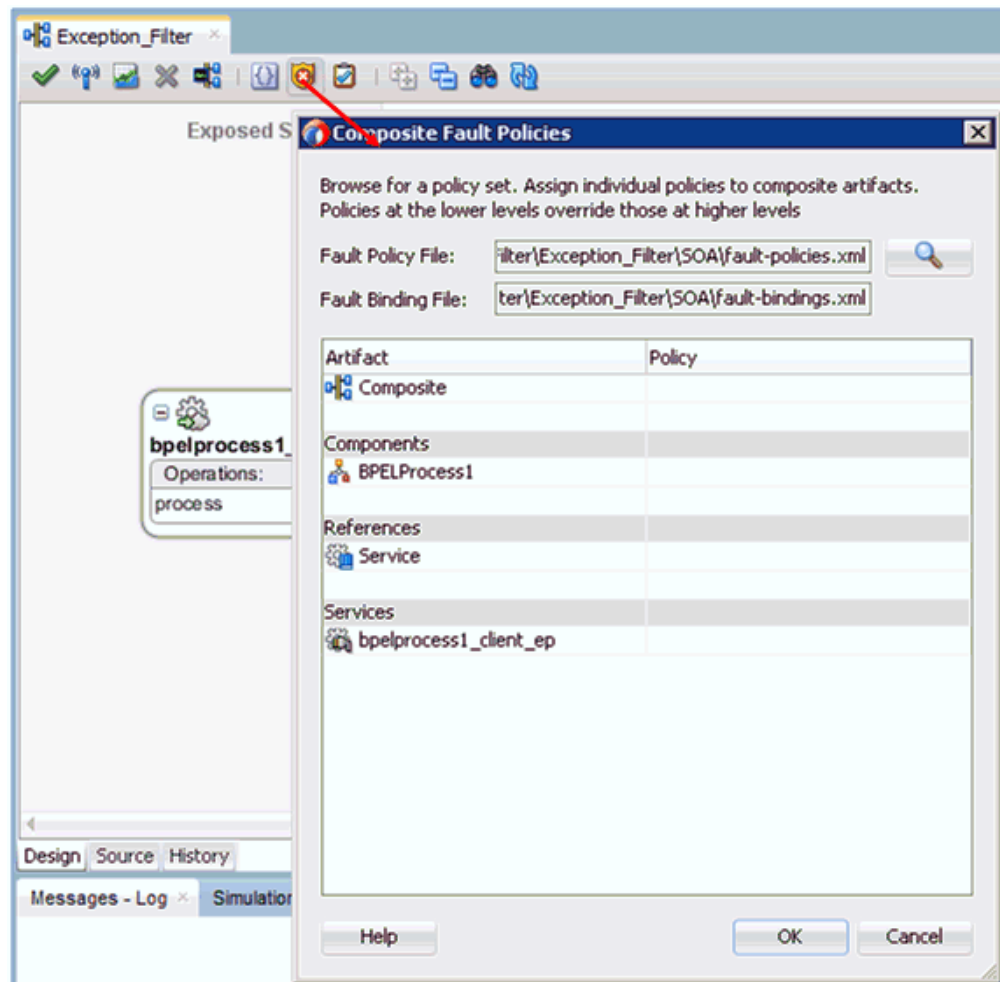


15. 「Exception\_Filter」プロジェクトをダブルクリックし、「コンポジット・フォルト・ポリシーの編集」をクリックします。

「コンポジット・フォルト・ポリシー」ウィンドウが表示されます。図 9-85 に示すように、フォルト・ポリシーおよびフォルト・バインディングが正しく選択されていることを確認します。

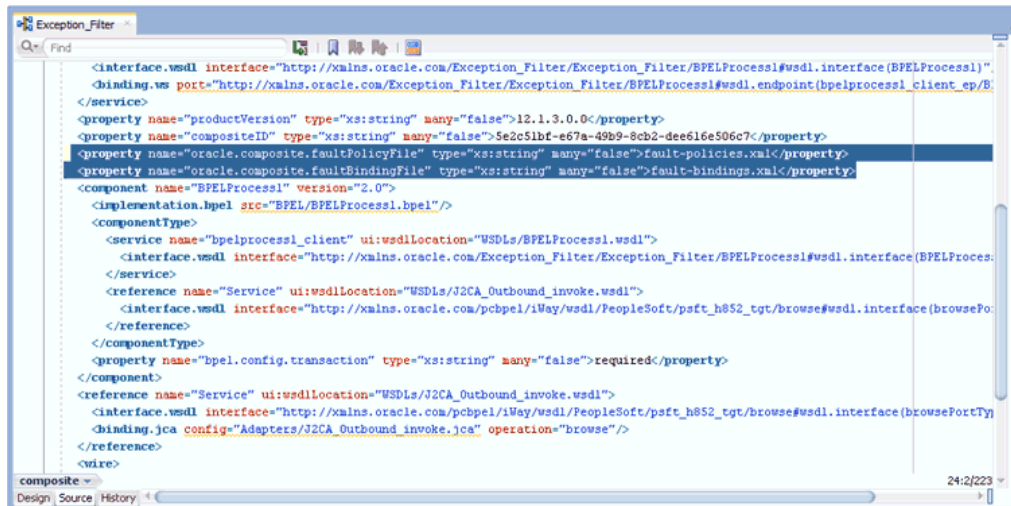


図 9-85 「コンポジット・フォルト・ポリシー」 ウィンドウ



16. 「すべて保存」をクリックします。
17. 図 9-86 に示すように、「ソース」タブをクリックして、*fault-bindings.xml* ファイルおよび *fault-policies.xml* ファイルが正しく追加されていることを確認します。

図 9-86 「ソース」タブ



#### 9.4.1.4 12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応

12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応方法の詳細は、4-26 ページの 4.4.3.3 項「12c でのデプロイメントに関する既知の問題への対応」を参照してください。

#### 9.4.1.5 例外フィルタ機能を備えた BPEL プロセスのデプロイおよびテスト

例外フィルタ機能を備えた BPEL プロセスをデプロイおよびテストするには、次のステップを実行します。

1. 作成された BPEL プロセスをデプロイします。

詳細は、4-28 ページの 4.4.4 項「BPEL アウトバウンド・プロセスのデプロイ」を参照してください。

2. (サーバーが実行中の) システムをネットワークから切断して、通信エラーをシミュレートします。
3. 有効な入力を使用して、デプロイされた BPEL プロセスを起動します。

詳細は、4-32 ページの 4.4.5 項「Oracle Enterprise Manager Console での入力 XML ドキュメントの起動」を参照してください。

4. プロセス ID を選択します。

**fault-policies.xml** ファイルの構成に基づいて、再試行または中断されている BPEL プロセスを監視できます。

## 9.5 Oracle SOA Suite (BPEL、メディエータまたは BPM) の資格証明マッピング

この項では、Oracle SOA Suite (BPEL、メディエータまたは BPM) を使用する構成において、Oracle Application Adapter for PeopleSoft 用に資格証明マッピング機能を構成する方法について説明します。サンプルのテスト・シナリオも含まれます。この項では、次のトピックについて説明します。

- 9.5.1 項「資格証明マッピングの構成」

資格証明マッピングは、J2CA 構成を使用するアウトバウンド・プロセスについてのみサポートされます。この機能は、BSE 構成、および J2CA 構成を使用するインバウンド・プロセスについてはサポートされていません。

---

**注意：** J2CA コネクタは、4つのアプリケーション・アダプタ (SAP R/3、PeopleSoft、Siebel および J.D. Edwards OneWorld) すべてに共通です。資格証明マッピングが必要な場合は、特定のインスタンスでアプリケーション・アダプタが1つのみ使用されていることを確認します。たとえば、あるアダプタ・インスタンスでは、PeopleSoft アプリケーション・アダプタのみを使用できます。資格証明マッピングは、個々のアダプタ・レベルでは構成できません。2つのアダプタに対して資格証明マッピングを使用する必要がある場合は、両方のアダプタが、独立した2つのアダプタ・インスタンスで実行されている必要があります。

---

ユーザー資格証明を J2CA リソース・アダプタに渡すには、Oracle WebLogic Server ユーザー資格証明から EIS ユーザー資格証明 (PeopleSoft アダプタ) への資格証明マップを作成します。これらの資格証明は、EIS ユーザー資格証明にマップされてから J2CA コンテナに渡され、J2CA コンテナによって EIS アダプタ (PeopleSoft) との接続に使用されます。

## 9.5.1 資格証明マッピングの構成

この項では、資格証明マッピングの構成について説明します。次のステップおよびトピックで構成されています。

1. アダプタをデプロイします。  
詳細は、第3章「Oracle WebLogic Server のデプロイメントおよび統合」を参照してください。
2. Oracle WebLogic Server 資格証明を EIS 資格証明に関連付けます。  
詳細は、9-57 ページの 9.5.1.1 項「Oracle WebLogic Server 資格証明の EIS 資格証明との関連付け」を参照してください。
3. WSDL ファイルを生成します。  
詳細は、9-60 ページの 9.5.1.2 項「WSDL ファイルの生成」を参照してください。
4. アウトバウンド・プロセスを作成およびデプロイします。  
詳細は、9-61 ページの 9.5.1.3 項「アウトバウンド・プロセスの作成およびデプロイ」を参照してください。
5. 起動して、EIS 資格証明が渡されたことを確認します。  
詳細は、9-61 ページの 9.5.1.4 項「EIS 資格証明の検証」を参照してください。

### 9.5.1.1 Oracle WebLogic Server 資格証明の EIS 資格証明との関連付け

Oracle WebLogic Server 資格証明を EIS 資格証明に関連付けるには、次のステップを実行します。

1. Oracle WebLogic Server 管理コンソールにログインします。
2. 左ペインの「ドメイン構造」セクションで、「デプロイメント」をクリックします。

図 9-87 に示すように、「デプロイメント」ページが表示されます。

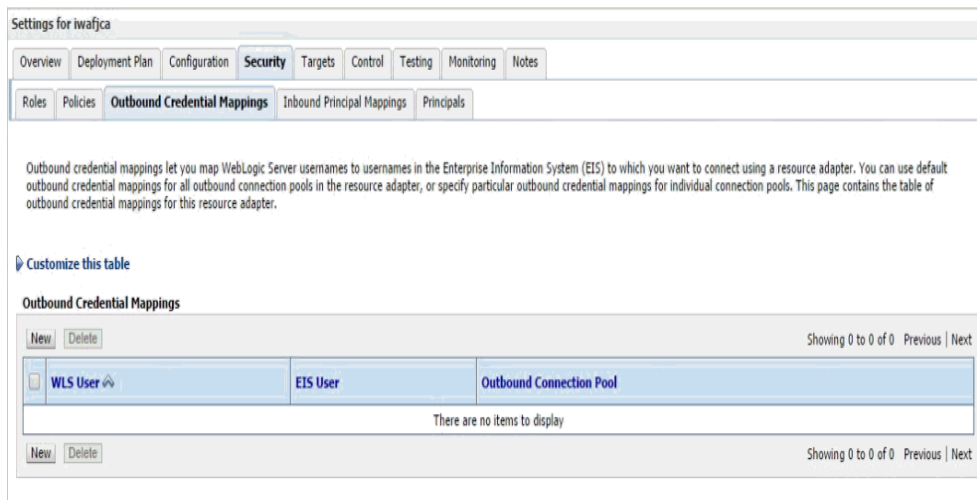
図 9-87 「デプロイメント」 ページ



3. 「iwafjca」 リソース・アダプタをクリックします。

図 9-88 に示すように、「iwafjca の設定」 ページが表示されます。

図 9-88 「iwafjca の設定」 ページ



4. 「セキュリティ」 タブの下の「アウトバウンド資格証明マッピング」 タブをクリックし、「新規」 をクリックします。

図 9-89 に示すように、「新しいセキュリティ資格証明マッピングの作成」 ページが表示されます。

図 9-89 「新しいセキュリティ資格証明マッピングの作成」 ページ

5. アウトバウンド接続プールを選択します。  
次に例を示します。  
eis/OracleJCAAdapter/DefaultConnection
6. 「次」をクリックします。  
図 9-90 に示すように、「WebLogic Server ユーザー」 ページが表示されます。

図 9-90 「WebLogic Server ユーザー」 ページ

7. 「デフォルト・ユーザー」を選択し、有効な Oracle WebLogic Server ユーザー名を入力して、「次」をクリックします。  
図 9-91 に示すように、「EIS ユーザー名およびパスワード」 ページが表示されます。

図 9-91 「EIS ユーザー名およびパスワード」 ページ

8. EIS のユーザー名およびパスワードを入力し、「終了」をクリックします。  
これで、Oracle WebLogic Server ユーザーの資格証明は、EIS ユーザー (PeopleSoft) にマップされました。マッピングは、J2CA サービスの起動前に自動的に起動されます。

### 9.5.1.2 WSDL ファイルの生成

WSDL ファイルを生成するには、次のステップを実行します。

1. アプリケーション・エクスプローラを開き、J2CA 構成を作成します。  
詳細は、2-3 ページの [2.3.2 項「J2CA 用の構成の作成」](#) を参照してください。
2. PeopleSoft アダプタのターゲットを作成してから、そのターゲットに接続します。  
詳細は、2-5 ページの [2.4 項「PeopleSoft 用の接続 \(ターゲット\) の確立」](#) を参照してください。
3. 適切なオブジェクトのアウトバウンド WSDL を生成します。  
詳細は、2-10 ページの [2.7 項「WSDL の生成 \(J2CA 構成のみ\)」](#) を参照してください。

### 9.5.1.3 アウトバウンド・プロセスの作成およびデプロイ

この項では、アウトバウンド・プロセスの構成方法について説明します。デモンストレーションの目的で、BPEL アウトバウンド・プロセスを使用します。ただし、メディアータおよび BPM アウトバウンド・プロセスにも同じステップが適用されます。

メディアータ・アウトバウンド・プロセスの作成の詳細は、[第 5 章「Oracle SOA Suite でのメディアータ・サービス・コンポーネントとの統合」](#) を参照してください。

BPM アウトバウンド・プロセスの作成の詳細は、[第 6 章「Oracle SOA Suite での BPM サービス・コンポーネントの統合」](#) を参照してください。

BPEL アウトバウンド・プロセスを作成およびデプロイするには、次の項を参照してください。

- [4.4.2 項「SOA 用の空のコンポジットの作成」](#)

- 4.4.3 項「BPEL アウトバウンド・プロセスの定義」
- 4.4.4 項「BPEL アウトバウンド・プロセスのデプロイ」

#### 9.5.1.4 EIS 資格証明の検証

入力 XML を起動し、EIS ターゲットの資格証明が、この項の説明に従って WebLogic 管理コンソールでデフォルト・ユーザー用に構成された資格証明でオーバーライドされることを確認してください。

1. 有効な入力を含む、デプロイされた BPEL アウトバウンド・プロセスを起動します。  
詳細は、4-32 ページの 4.4.5 項「Oracle Enterprise Manager Console での入力 XML ドキュメントの起動」を参照してください。
2. J2CA ログ・ファイルを確認し、ユーザー資格証明が Oracle WebLogic Server を介して EIS に渡されたことを示す暗号化パスワードを見つけます。

次に例を示します。

```
FINEST IWAFManagedConnectionFactory com.ibi.afjca.Util
getPasswordCredential(78) InLoop:
User-iwayqa:Password-ENCR(3109311731831131382333215315332323192322731773172)
FINEST IWAFManagedConnectionFactory com.ibi.afjca.Util
getPasswordCredential(90) Use the system PasswordCredential:
User-iwayqa:Password-ENCR(3109311731831131382333215315332323192322731773172)
```

## 9.6 Oracle Service Bus (OSB) の資格証明マッピング

この項では、Oracle Service Bus (OSB) を使用する構成において、Oracle Application Adapter for PeopleSoft 用に資格証明マッピング機能を構成する方法について説明します。サンプルのテスト・シナリオも含まれます。この項では、次のトピックについて説明します。

- 9.6.1 項「資格証明マッピングの構成」

資格証明マッピングは、J2CA 構成を使用するアウトバウンド・プロセスについてのみサポートされます。この機能は、BSE 構成、および J2CA 構成を使用するインバウンド・プロセスについてはサポートされていません。

---

**注意：** J2CA コネクタは、4つのアプリケーション・アダプタ (SAP R/3、PeopleSoft、Siebel および J.D. Edwards OneWorld) すべてに共通です。資格証明マッピングが必要な場合は、特定のインスタンスでアプリケーション・アダプタが1つのみ使用されていることを確認します。たとえば、あるアダプタ・インスタンスでは、PeopleSoft アプリケーション・アダプタのみを使用できます。資格証明マッピングは、個々のアダプタ・レベルでは構成できません。2つのアダプタに対して資格証明マッピングを使用する必要がある場合は、両方のアダプタが、独立した2つのアダプタ・インスタンスで実行されている必要があります。

---

ユーザー資格証明を J2CA リソース・アダプタに渡すには、Oracle WebLogic Server ユーザー資格証明から EIS ユーザー資格証明 (PeopleSoft アダプタ) への資格証明マップを作成します。次に、資格証明ポリシーを Web サービスに関連付けて、Oracle WebLogic Server ユーザー資格証明を使用して Web サービスを起動します。これらの資格証明は、EIS ユーザー資格証明にマップされてから J2CA コンテナに渡され、J2CA コンテナによって EIS アダプタ (PeopleSoft) との接続に使用されます。

## 9.6.1 資格証明マッピングの構成

資格証明マッピングの構成は、次のステップで構成されています。

1. アダプタをデプロイします。  
詳細は、第3章「Oracle WebLogic Server のデプロイメントおよび統合」を参照してください。
2. Oracle WebLogic Server 資格証明を EIS 資格証明に関連付けます。  
詳細は、9-62 ページの「Oracle WebLogic Server 資格証明の EIS 資格証明との関連付け」を参照してください。
3. WSDL ファイルを生成します。  
詳細は、9-65 ページの「WSDL ファイルの生成」を参照してください。
4. Oracle Service Bus (OSB) アウトバウンド・プロセスを作成します。  
詳細は、9-65 ページの 9.6.1.3 項「Oracle Service Bus (OSB) アウトバウンド・プロセスの作成」を参照してください。

### 9.6.1.1 Oracle WebLogic Server 資格証明の EIS 資格証明との関連付け

Oracle WebLogic Server 資格証明を EIS 資格証明に関連付けるには、次のステップを実行します。

1. Oracle WebLogic Server 管理コンソールにログインします。
2. 図 9-92 に示すように、左ペインの「ドメイン構造」セクションで、「デプロイメント」をクリックします。

図 9-92 「ドメイン構造」セクション

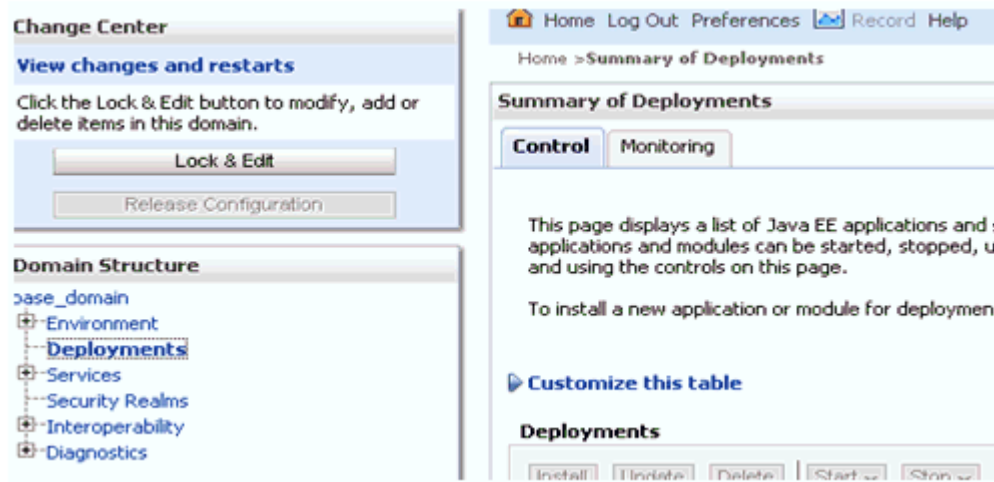
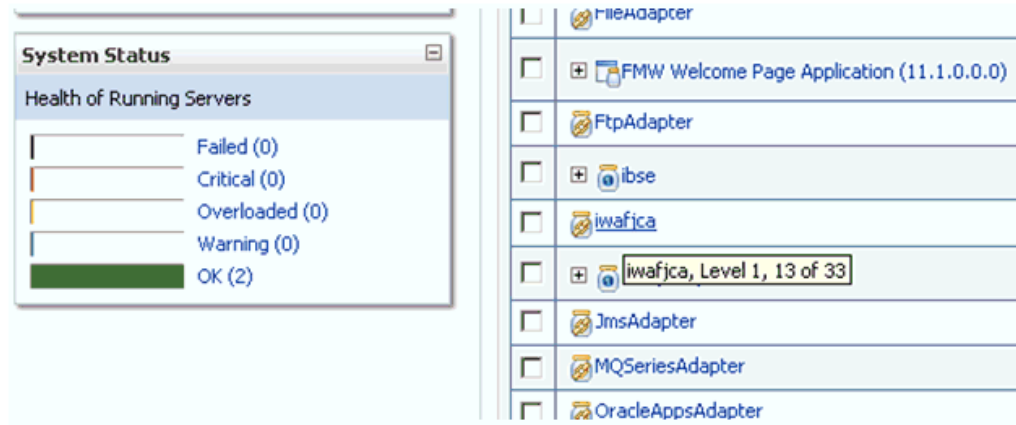


図 9-93 に示すように、「デプロイメント」ページが表示されます。



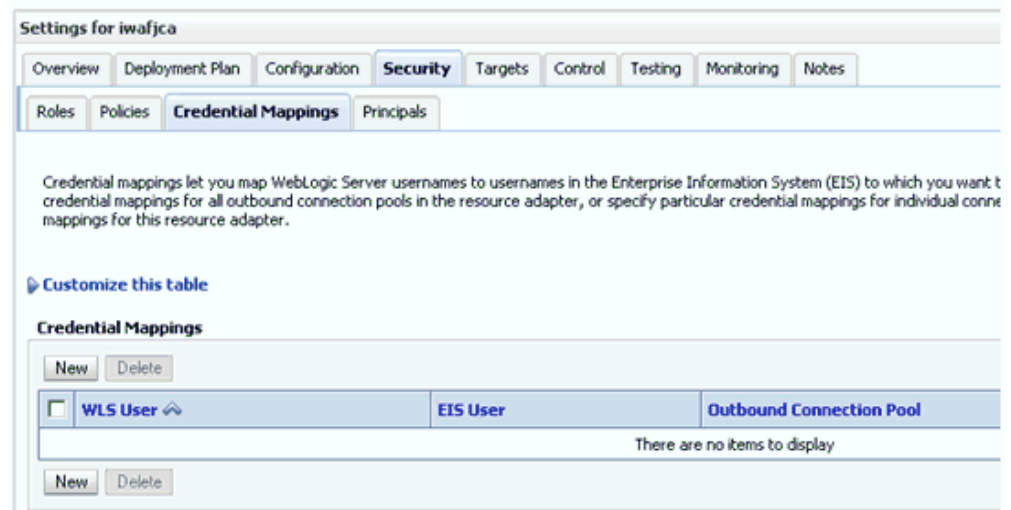
図 9-93 「デプロイメント」 ページ



3. 「iwafjca」リソース・アダプタをクリックします。

図 9-94 に示すように、「iwafjca の設定」ページが表示されます。

図 9-94 「iwafjca の設定」 ページ



4. 「セキュリティ」タブの下の「資格証明マッピング」タブをクリックし、「新規」をクリックします。

図 9-95 に示すように、「新しいセキュリティ資格証明マッピングの作成」ページが表示されます。

図 9-95 「新しいセキュリティ資格証明マッピングの作成」 ページ

**Create a New Security Credential Mapping**

Back Next Finish Cancel

**Outbound Connection Pool**

Which Outbound Connection Pool would you like the credential map to be associated with this resource adapter. Each Outbound Connection Pool can then configure themselves

Customize this table

**Create a New Security Credential Map Entry for:**

<input type="checkbox"/>	Outbound Connection Pool
<input checked="" type="checkbox"/>	eis/OracleJCAAdapter/DefaultConnection
<input type="checkbox"/>	Resource Adapter Default

Back Next Finish Cancel

- アウトバウンド接続プールを選択します。  
次に例を示します。  
eis/OracleJCAAdapter/DefaultConnection
- 「次」をクリックします。  
図 9-96 に示すように、「WebLogic Server ユーザー」ページが表示されます。

図 9-96 「WebLogic Server ユーザー」 ページ

**Create a New Security Credential Mapping**

Back Next Finish Cancel

**WebLogic Server User**

Select the WebLogic Server User that you would like to map an EIS user to. Selecting 'User for creating initial connections' will the resource adapter is first started. Selecting 'Default User' will configure the user that will be used as the default for any a specifically for them. Selecting 'User for unauthenticated user' will configure the user that will be used for an unauthenticated WebLogic Server user that you are configuring. This user must be a configured WebLogic Server user.

User for creating initial connections

Default User

Unauthenticated WLS User

Configured User Name

**WebLogic Server User Name:**

Back Next Finish Cancel

- 「構成済みユーザー名」を選択し、有効な Oracle WebLogic Server ユーザー名を入力して、「次」をクリックします。  
図 9-97 に示すように、「EIS ユーザー名およびパスワード」ページが表示されます。

図 9-97 「EIS ユーザー名およびパスワード」 ページ

8. EIS のユーザー名およびパスワードを入力し、「終了」をクリックします。

これで、Oracle WebLogic Server ユーザーの資格証明は、EIS ユーザー (PeopleSoft) にマップされました。マッピングは、J2CA サービスの起動前に自動的に起動されます。

### 9.6.1.2 WSDL ファイルの生成

WSDL ファイルを生成するには、次のステップを実行します。

1. Oracle Service Bus (OSB) との統合のためのアプリケーション・エクスプローラのクラス・パスを設定します。  
詳細は、7-6 ページの [7.2.2 項「Oracle Service Bus 統合のためのアプリケーション・エクスプローラのクラス・パスの設定」](#) を参照してください。
2. アプリケーション・エクスプローラを開き、J2CA 構成を作成します。  
詳細は、2-3 ページの [「J2CA 用の構成の作成」](#) を参照してください。
3. PeopleSoft アダプタのターゲットを作成してから、そのターゲットに接続します。  
詳細は、2-5 ページの [「PeopleSoft 用の接続 \(ターゲット\) の確立」](#) を参照してください。
4. 適切なオブジェクトの WSDL を生成します。  
詳細は、4-8 ページの [4.4.1 項「リクエスト/レスポンス型のサービス用の WSDL の生成」](#) を参照してください。

### 9.6.1.3 Oracle Service Bus (OSB) アウトバウンド・プロセスの作成

この項では、Oracle JDeveloper を使用して、資格証明マッピング機能を備えた Oracle Service Bus (OSB) アウトバウンド・プロセスを作成する方法について説明します。

Oracle Service Bus (OSB) アウトバウンド・プロセスの作成の詳細は、8-3 ページの [8.1.2 項「OSB アウトバウンド・プロセスの定義」](#) を参照してください。

1. 図 9-98 に示すように、OSB プロジェクトを右クリックし、「新規」を選択し、「サービス・アカウント」をクリックして、サービス・アカウントを構成します。

図 9-98 「サービス・アカウント」オプションの選択

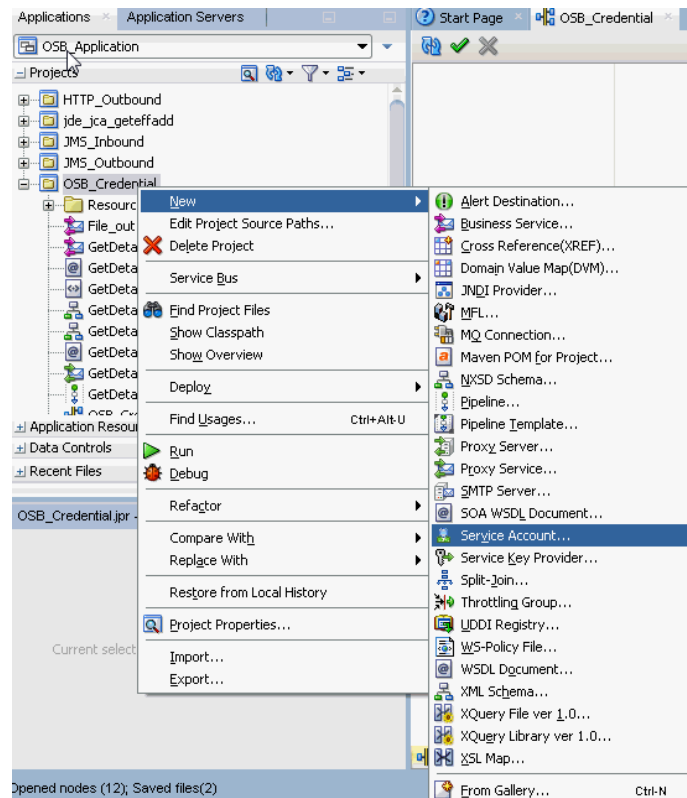


図 9-99 に示すように、「サービス・アカウントの作成」ペインが表示されます。

図 9-99 「サービス・アカウントの作成」 ペイン

**Create Service Account - Step 1 of 1**

**Create Service Account**

**General**

Name: OSB\_static

Location: C:\soabeta\work\mywork\OSB\_Application\OSB\_Credential

Description

Messages:

Help < Back Next > Finish Cancel

2. サービス・アカウントの名前を入力し、「終了」をクリックします。  
サービス・アカウントの構成ページが表示されます。
3. 「リソース・タイプ」セクションで、「静的」を選択します。
4. 図 9-100 に示すように、Oracle WebLogic Server 用の有効なユーザー名およびパスワードを指定します。

図 9-100 サービス・アカウントの構成ページ

**Service Account**  
Create a Service Account Resource

Description:

Resource Type:  Pass Through  Static  Mapping

**Static User Configuration**

User Name: weblogic

Password: \*\*\*\*\*

Confirm Password: \*\*\*\*\*

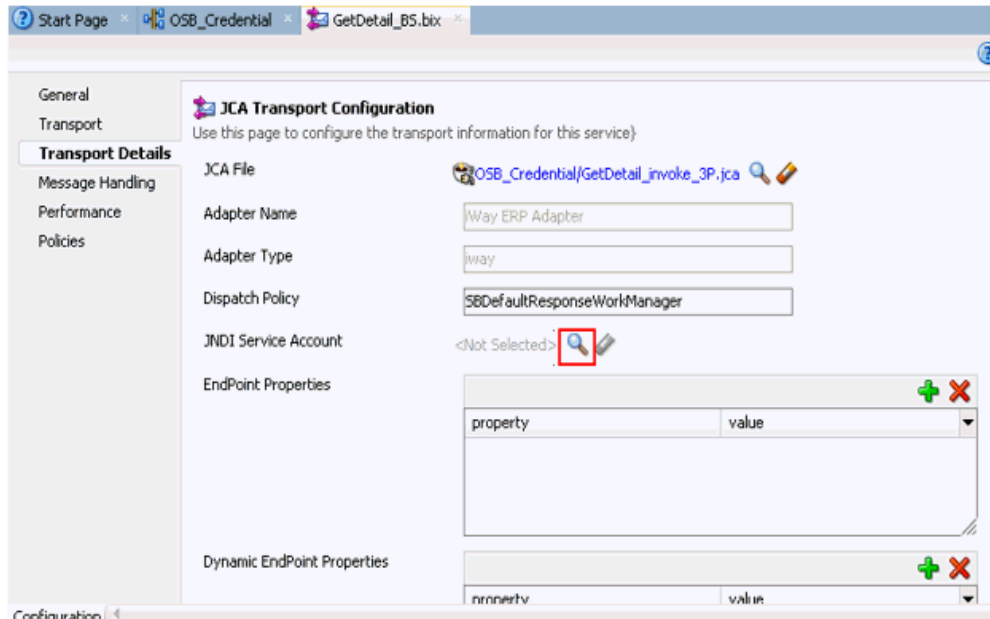
5. 構成ページを保存して閉じます。

6. コンポジット・エディタ・ウィンドウで、ステップ 3 で作成された WSDL ベースのビジネス・サービスをダブルクリックします。

WSDL ベースのビジネス・サービスの構成ページが表示されます。

7. [図 9-101](#) に示すように、「トランスポートの詳細」タブを選択します。

**図 9-101 「トランスポートの詳細」タブ**

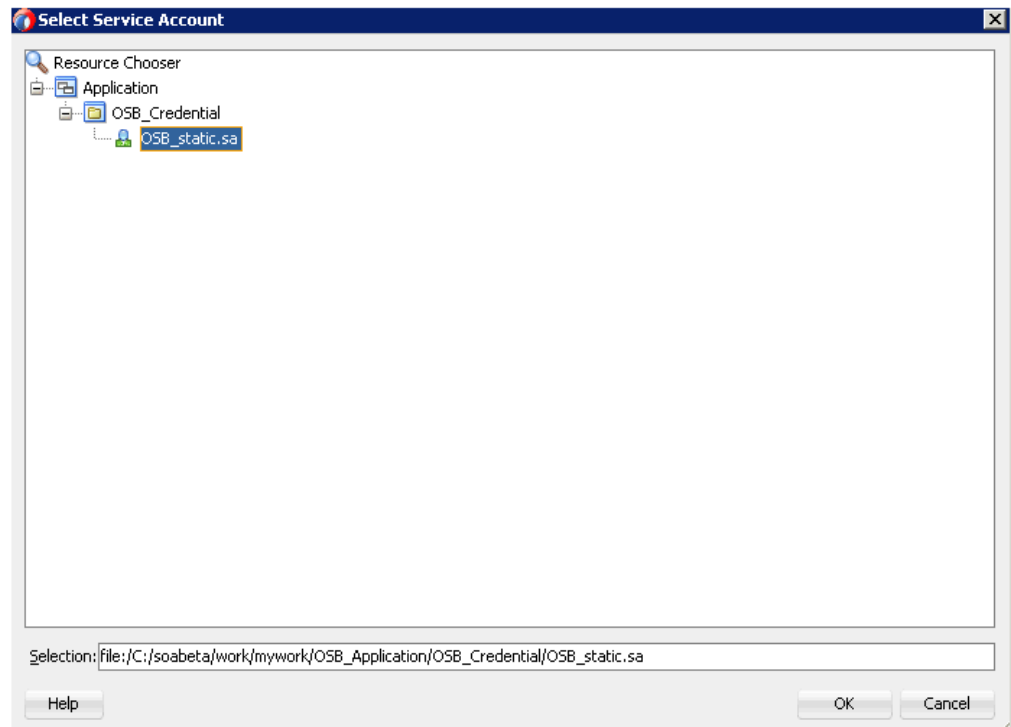


8. 「JNDI サービス・アカウント」セクションで、「参照」アイコンをクリックします。

「サービス・アカウントの選択」ウィンドウが表示されます。

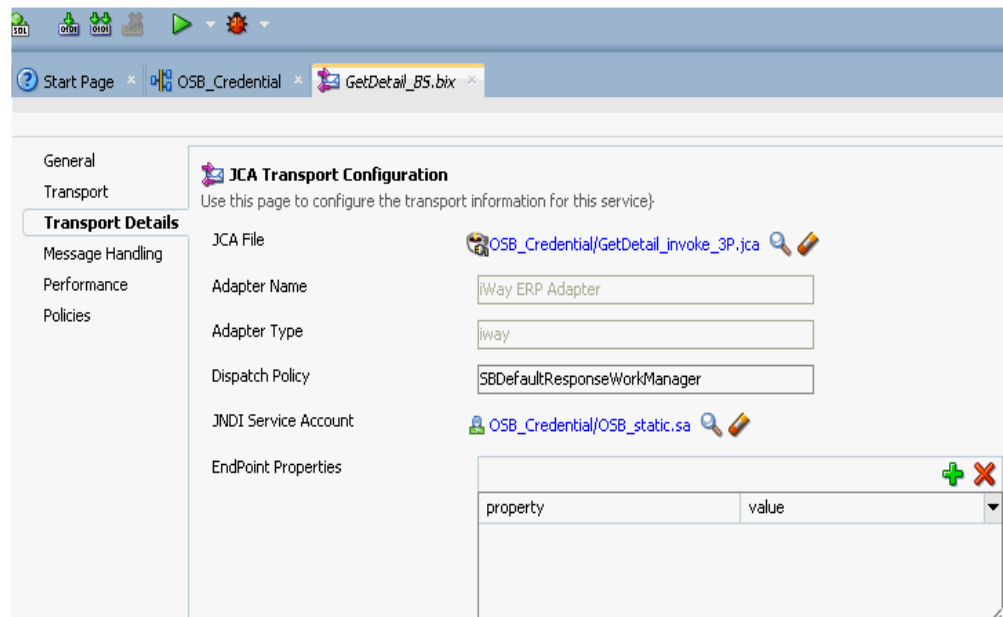
9. [図 9-102](#) に示すように、作成されたサービス・アカウントを選択し、「OK」をクリックします。

図 9-102 サービス・アカウントの選択



10. 図 9-103 に示すように、構成ページを保存して閉じます。

図 9-103 ビジネス・サービスの構成ページ



11. OSB プロセスをデプロイします。

詳細は、8-16 ページの 8.1.3 項「OSB アウトバウンド・プロセスのデプロイ」を参照してください。

12. プロセスが正常にデプロイされた後、有効な入力 XML ファイルをコピーして構成済の入力フォルダに貼り付け、構成済の出力場所で出力が受信されたことを確認します。
13. J2CA ログ・ファイルを確認し、ユーザー資格証明が Oracle WebLogic Server を介して EIS に渡されたことを示す暗号化パスワードを見つけます。

次に例を示します。

```
FINEST IWAManagedConnectionFactory com.ibi.afjca.Util
getPasswordCredential(78) InLoop:
User-iwayqa:Password-ENCR(3189319731831132182333215323332323192322731773252)
FINEST IWAManagedConnectionFactory com.ibi.afjca.Util
getPasswordCredential(90) Use the system PasswordCredential:
User-iwayqa:Password-ENCR(3109313331831131702333215320132323192322731773236)
```



---

---

## トラブルシューティングおよび エラー・メッセージ

この章では、PeopleSoft に接続する場合の制約事項および回避策について説明します。次の項があります。

- 10.1 項「トラブルシューティング」
- 10.2 項「BSE エラー・メッセージ」

この章に記載しているアダプタ特定のエラーは、Oracle Adapter J2CA または Oracle Adapter Business Services Engine (BSE) のいずれかの構成でアダプタを使用した場合に発生する可能性があります。

### 10.1 トラブルシューティング

この項では、PeopleSoft に関するトラブルシューティング情報を提供します。次のトピックが含まれています。

- 10.1.1 項「アプリケーション・エクスペローラ」
- 10.1.2 項「PeopleSoft」
- 10.1.3 項「Oracle Adapter J2CA」

トラブルシューティングに関連する可能性があるログ・ファイル情報は、アダプタのインストール先に基づく次の場所にあります。

- Oracle Adapter J2CA トレース情報は次のディレクトリにあります。  
`<ADAPTER_HOME>\config\configuration_name\log`
- BSE トレース情報は次のディレクトリにあります。  
`<ORACLE_HOME>\user_projects\domains\base_domain\servers\soa_server1\stage\ibse\ibse.war\ibselogs`
- アプリケーション・エクスペローラのログ・ファイルは次のディレクトリにあります。  
`<ADAPTER_HOME>\tools\iwaeb\bin`

#### 10.1.1 アプリケーション・エクスペローラ

このトピックでは、アプリケーション・エクスペローラを使用する場合に発生する可能性がある様々なエラー・タイプについて説明します。

エラー	ソリューション
<p>アプリケーション・エクスペローラから Oracle Application Adapter for PeopleSoft に接続できません。次のエラー・メッセージが表示されます。</p> <p>プログラムでアダプタをアクティブ化中</p>	<p>次の点を確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ PeopleSoft が稼働しています。</li> <li>■ PeopleSoft のユーザー ID およびパスワードが適切です。</li> <li>■ ポート番号が適切です。</li> <li>■ カスタム・コンポーネント・インタフェースが適切にインストールされています。</li> </ul>
<p>次のエラー・メッセージが表示されます。</p> <pre>java.lang.IllegalStateException: java.lang.Exception: PeopleSoft システムへの ログオン・エラー</pre>	<p>PeopleSoft に無効な接続情報が指定されているか、または誤った psjao.jar が lib ディレクトリに存在します。</p> <p>psjao.jar ファイルのバージョンは PeopleTools リリースに特定です。</p>
<p>PeopleSoft がアプリケーション・エクスペローラの「アダプタ」ノード・リストに表示されません。</p>	<p>PeopleSoft JAR ファイルの iwpsci84.jar (または iwpsci81.jar) および psjao.jar が lib ディレクトリに追加されていることを確認します。</p>
<p>実行時にログオン失敗エラーが発生します。</p>	<p>アプリケーション・エクスペローラの「編集」オプションによって PeopleSoft システムに接続する場合、またはターゲットを作成する場合、パスワードが必要です。接続パスワードは repository.xml には保存されません。アプリケーション・エクスペローラの「編集」オプションを使用してパスワードを更新し、アプリケーション・サーバーを再起動します。</p>
<p>次のエラー・メッセージが表示されます。</p> <pre>Jolt セッション・プールで appserver への接続 を提供できません。この原因は使用可能な アプリケーション・サーバー・ドメインがない ことが考えられます。[Fri Aug 27 13:06:27 EDT 2004] bea.jolt.ServiceException: 無効な セッション</pre>	<p>PeopleSoft のホスト名またはポート番号が正しくありません。</p>
<p>コンポーネント・インタフェースのプロパティが表示されません。</p>	<p>誤った iwpsci8x.jar ファイルを使用しています。</p>
<p>スキーマを生成できません。</p>	<p>索引:-1, サイズ:0 のエラー・メッセージが表示される場合、またはアプリケーション・エクスペローラにはログオンできるがコンポーネント・インタフェースあるいはメッセージが表示されない場合は、iwpsci81.jar ファイルと iwpsci84.jar ファイルの両方が lib ディレクトリに存在する可能性があります。サーバーを停止し、不要な jar ファイルを削除し、サーバーを再起動します。</p>
<p>ae.bat(iaexplorer.exe ではない)をアクティブ化してアプリケーション・エクスペローラを起動すると次の例外が発生します。</p>	<p>これは無害な例外です。アダプタの機能には影響しません。次の URL から BouncyCastle ファイルをダウンロードします。</p>
<pre>java.lang.ClassNotFoundException: org.bouncycastle.jce.provider.BouncycastleProvider</pre>	<p>ftp://ftp.bouncycastle.org/pub</p>

エラー	ソリューション
<p>Solaris 環境でアプリケーション・エクスプローラを起動できません。次の例外がコンソールに表示されます。</p> <pre>javax.resource.ResourceException: IWAManagedConnectionFactory: License violation at com.ibi.afjca.spi.IWAManagedConnectionFactory.createConnectionFactory(IWAManagedConnectionFactory.java:98) at com.iwaysoftware.iwae.common.JCATransport.getConnectionFactory(JCATransport.java:133) at com.iwaysoftware.iwae.common.JCATransport.initJCA(JCATransport.java:69) at com.iwaysoftware.iwae.common.JCATransport.&lt;init&gt;(JCATransport.java:62) at com.iwaysoftware.iwae.common.AdapterClient.&lt;init&gt;(AdapterClient.java:85) at com.ibi.bse.ConfigWorker.run(ConfigWorker.java:41) at java.lang.Thread.run(Thread.java:534)</pre> <p>接続ファクトリを作成できませんでした。</p>	<p>JAVACMD がユーザーのシステムで設定されていません。アプリケーション・エクスプローラを起動する前に、次のように JAVACMD をエクスポートします。</p> <p>JAVACMD=/&lt;jdk_home&gt;/bin/java。ここで、&lt;jdk_home&gt; は、システム上で JDK がインストールされているディレクトリです。</p>

## 10.1.2 PeopleSoft

エラー	ソリューション
<p>PeopleSoft コンポーネント・インタフェースのテスト・ツールを 3 層モードで使用すると、サービスが正常に機能しません。</p> <p>次のエラー・メッセージが表示されます。</p> <pre>Joltセッション・プールで appserver への接続を提供できません。この原因は使用可能なアプリケーション・サーバー・ドメインがないと考えられます。[Fri Aug 27 13:06:27 EDT 2004] bea.jolt.ServiceException: 無効なセッション</pre> <p>コンポーネント・インタフェースおよびメッセージがアダプタ・ツリーに表示されません。</p>	<p>コンポーネント・インタフェースのテスト・ツールを使用して適切にテストするには、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. アプリケーション・デザイナを開きます。</li> <li>2. コンポーネント・インタフェースを選択します。</li> <li>3. テスト・ツールを使用します。</li> </ol> <p>サービスがテスト・ツールで機能する場合、XML を開き、XML 内で重複するフィールドがあるかどうか確認します。</p> <p>PeopleSoft のホスト名またはポート番号が正しくありません。</p> <p>プロジェクトが PeopleSoft システムに適切にインストールされていません。</p>

エラー	ソリューション
<p>次の例のように、実行時に PeopleSoft からエラー・コード -1 が受信されます。</p> <pre>&lt;LOCATIONProcessResponse xmlns="http://xmlns.oracle.com/LOCATION"&gt; &lt;error xmlns=""&gt;-1&lt;/error&gt; &lt;/LOCATIONProcessResponse&gt;</pre>	<p>誤ったバージョンの psjoa.jar を使用しているか、または iwpsci81.jar ファイルと iwpsci84.jar ファイルの両方が lib ディレクトリに存在します。2 番目の場合の場合は、不要な JAR ファイルを削除し、サーバーを再起動します。</p> <p>psjoa.jar ファイルのバージョンは PeopleTools リリースに固有です。</p>
<p>Pstools.properties ファイルが初期化されません。</p> <p>次のエラー・メッセージが表示されます。</p> <p>コンポーネント・インタフェース {CI name} が見つかりません</p>	<p>このファイルは PeopleSoft 8.1 に必要です。PeopleSoft 8.1 を使用している場合はこのファイルを追加する必要があります。PeopleSoft 8.1 を使用していなくてもこのメッセージが表示される場合はメッセージを無視してください。</p> <p>次のいずれかの理由が考えられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 選択したコンポーネント・インタフェースの Java API が API JAR ファイル内に見つかりませんでした。このコンポーネント・インタフェース用のクラス・ファイルの Java API を確認してください。見つからない場合は、このコンポーネント・インタフェース用のクラス・ファイルを追加してください。</li> <li>■ リクエスト・ドキュメント内でコンポーネント・インタフェースの名前が誤って記述されています。</li> </ul>
<p>次のエラー・メッセージが表示されます。</p> <p>認可されていません (90,6) PSSession リクエストの実行に失敗しました</p>	<p>コンポーネント・インタフェースには、この操作の実行に必要なアクセスがありません。PeopleSoft &gt; 「セキュリティ」 &gt; 権限リストで、コンポーネント・インタフェースの権限設定を変更します。</p>
<p>次のエラー・メッセージが表示されます。</p> <p>{keyname} キーにも値を指定する必要があります</p>	<p>次のいずれかの理由が考えられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ リクエスト XML ドキュメントに必須キーの要素が存在しません。リクエスト・ドキュメントにキー名および値を含めてください。</li> <li>■ リクエスト・ドキュメント内でキー (Key) フィールド名が誤って記述されています。</li> <li>■ リクエスト XML ドキュメント内で実行 (Perform) 操作が誤って記述されています。</li> </ul>

### 10.1.3 Oracle Adapter J2CA

エラー	ソリューション
<p>Oracle Adapter J2CA 構成への接続を試行すると、アプリケーション・エクスプローラに次のメッセージが表示されます。</p> <p>JCA を初期化できませんでした</p>	<p>次の例に示すように、右ペインの「詳細」タブで、「ホーム」フィールドで正しいディレクトリが指定されていることを確認します。</p> <pre>&lt;ADAPTER_HOME&gt;\tools\iwae\bin\..\..\..\</pre>

## 10.2 BSE エラー・メッセージ

この項では、Oracle WebLogic Server Adapter Business Services Engine (BSE) を使用して Web サービスを処理する場合に発生する可能性がある様々なエラー・タイプについて説明します。

この項では、次のトピックについて説明します。

- 10.2.1 項「BSE での一般的なエラー処理」
- 10.2.2 項「アダプタ特定のエラー処理」

### 10.2.1 BSE での一般的なエラー処理

BSE は、アダプタ・フレームワークへの SOAP ゲートウェイと一部のアダプタのエンジンの両方の役割を果たします。デザインタイムとランタイムの両方で、アダプタを使用する Web サービスが実行されるときに様々な条件により BSE でエラーが発生することがあります。これらの条件とその結果発生するエラーは、特定のアダプタにかかわらず同様に公開されるものと、使用されるアダプタによって異なった形態で公開されるものがあります。このトピックでは、アダプタ特定のもので、いくつかの一般的なエラー条件の場合に発生するエラーについて説明します。

通常、BSE 内の SOAP ゲートウェイ (**エージェント**) は、SOAP リクエスト・メッセージを Web サービスに必要なアダプタに渡します。エラーが発生した場合、公開方法は、アダプタおよび API、またはアダプタで使用されるインタフェースによって異なります。API は PeopleTools から生成され、PeopleTools のリリースに特定されます。いくつかのシナリオで、SOAP ゲートウェイで SOAP フォルトが生成されます。一般に、BSE 内の SOAP エージェントが無効な SOAP リクエストを受信するたびに、SOAP フォルト要素が SOAP レスポンスで生成されます。SOAP フォルト要素にはフォルト・ストリングおよびフォルト・コード要素が含まれます。フォルト・コードには、SOAP エージェント・エラーの記述が含まれます。

次の SOAP レスポンス・ドキュメントは、BSE が無効な SOAP リクエストを受信したときに生成されます。

```
<SOAP-ENV:Envelope xmlns:SOAP-ENV="http://schemas.xmlsoap.org/soap/envelope/">
  <SOAP-ENV:Body>
    <SOAP-ENV:Fault>
      <faultcode>SOAP-ENV:Client</faultcode>
      <faultstring>パラメータ・ノードがありません</faultstring>
    </SOAP-ENV:Fault>
  </SOAP-ENV:Body>
</SOAP-ENV:Envelope>
```

この例では、BSE は、この Web サービスに必須の SOAP リクエスト・メッセージで要素を受信しませんでした。

### 10.2.2 アダプタ特定のエラー処理

アダプタでランタイム中に例外が発生すると、BSE 内の SOAP エージェントは生成された SOAP レスポンス内に SOAP フォルト要素を含めます。SOAP フォルト要素には、フォルト・コード要素およびフォルト・ストリング要素が含まれます。フォルト・ストリングには、アダプタのターゲット・システムからのネイティブ・エラー記述が含まれます。アダプタはターゲット・システムのインタフェースおよび API を使用するの、例外が発生するかどうかはターゲット・システムのインタフェースまたは API によるエラー条件の処理方法によって決定されます。BSE 内の SOAP エージェントによって SOAP リクエスト・メッセージがアダプタに渡されるとき、リクエ

ストがそのサービスの WSDL に基づいて無効な場合、アダプタは SOAP フォルトを起こす例外を発生することがあります。

アダプタで起こる可能性があるすべてのエラー条件を予測することはほぼ不可能ですが、一般的なエラー条件をアダプタがどのように処理し、どのように Web サービスのコンシューマ・アプリケーションに公開されるかについて次に説明します。

この項では、次のトピックについて説明します。

- 10.2.2.1 項「Oracle Application Adapter for PeopleSoft 無効な SOAP リクエスト」
- 10.2.2.2 項「PeopleSoft リクエストからの空の結果」
- 10.2.2.3 項「PeopleSoft への接続の失敗」
- 10.2.2.4 項「無効な SOAP リクエスト」
- 10.2.2.5 項「Oracle WebLogic Server Application Adapter リクエストからの空の結果」

### 10.2.2.1 Oracle Application Adapter for PeopleSoft 無効な SOAP リクエスト

PeopleSoft エージェントで、実行される Web サービスの WSDL に準拠しない SOAP リクエスト・メッセージが受信されると、次の SOAP レスポンスが生成されます。

```
<SOAP-ENV:Envelope xmlns:xsi="http://www.w3.org/1999/XMLSchema-instance"
xmlns:SOAP-ENV="http://schemas.xmlsoap.org/soap/envelope/"
xmlns:xsd="http://www.w3.org/1999/XMLSchema">
  <SOAP-ENV:Body>
    <m:CARRIERResponse xmlns:m="urn:schemas-iwaysoftware-com:iwse"
xmlns="urn:schemas-iwaysoftware-com:iwse"
cid="2A3CB42703EB20203F91951B89F3C5AF">
      <PS8>
        <error> コンポーネント・インタフェース {VARRIER} が見つかりません (91,2) 初期化に
失敗しました (90,7) 認可されていません (90,6) PSSESSION リクエストの実行に失敗しました コン
ポーネント・インタフェース {VARRIER} が見つかりません (91,2)</error>
      </PS8>
    </m:CARRIERResponse>
  </SOAP-ENV:Body>
</SOAP-ENV:Envelope>
```

### 10.2.2.2 PeopleSoft リクエストからの空の結果

Oracle Application Adapter for PeopleSoft で、PeopleSoft 内のレコードと一致しない、SOAP リクエスト内に渡された入力パラメータを使用してコンポーネント・インタフェースが Web サービスとして実行される場合、次の SOAP レスポンスが生成されます。

```
<SOAP-ENV:Envelope xmlns:xsi="http://www.w3.org/1999/XMLSchema-instance"
xmlns:SOAP-ENV="http://schemas.xmlsoap.org/soap/envelope/"
xmlns:xsd="http://www.w3.org/1999/XMLSchema">
  <SOAP-ENV:Body>
    <m:CARRIERResponse xmlns:m="urn:schemas-iwaysoftware-com:iwse"
xmlns="urn:schemas-iwaysoftware-com:iwse" cid="2A3CB42703EB20203F91951B89F3C5AF">
      <PS8>
        <error> 指定したキーに対応する行がありません。 {CARRIER} (91,50) PSBusComp リクエストの
実行に失敗しました </error>
      </PS8>
    </m:CARRIERResponse>
  </SOAP-ENV:Body>
</SOAP-ENV:Envelope>
```

### 10.2.2.3 PeopleSoft への接続の失敗

Oracle Application Adapter for PeopleSoft が PeopleSoft に接続できない場合、次の SOAP レスポンスが生成されます。

```
<?xml version="1.0" enco
ding="ISO-8859-1" ?>
<SOAP-ENV:Envelope xmlns:SOAP-ENV="http://schemas.xmlsoap.org/soap/envelope/">
<SOAP-ENV:Body>
  <SOAP-ENV:Fault>
    <faultcode>SOAP-ENV:Server</faultcode>
    <faultstring>java.lang.Exception: PeopleSoft システムへのログオン・エラー
    <faultstring>
  </SOAP-ENV:Fault>
</SOAP-ENV:Body>
</SOAP-ENV:Envelope>
```

### 10.2.2.4 無効な SOAP リクエスト

Oracle WebLogic Server Application Adapter で、実行される Web サービスの WSDL に準拠しない SOAP リクエスト・メッセージが受信されると、次の SOAP レスポンスが生成されます。

```
<?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"
?>
<SOAP-ENV:Envelope xmlns:SOAP-ENV="http://schemas.xmlsoap.org/soap/envelope/">
<SOAP-ENV:Body>
  <SOAP-ENV:Fault>
    <faultcode>SOAP-ENV:Server</faultcode>
    <faultstring>RPC サーバー接続に失敗しました : 接続が拒否されました : 接続</faultstring>
  </SOAP-ENV:Fault>
</SOAP-ENV:Body>
</SOAP-ENV:Envelope>
```

### 10.2.2.5 Oracle WebLogic Server Application Adapter リクエストからの空の結果

アダプタで、ターゲット・システム内のレコードと一致しない、渡された入力パラメータを使用して SOAP リクエストが実行されると、次の SOAP レスポンスが生成されます。

---

**注意：** このアダプタの条件では、SOAP フォルトは発生しません。

---

```
<SOAP-ENV:Envelope xmlns:xsi="http://www.w3.org/1999/XMLSchema-instance"
xmlns:SOAP-ENV="http://schemas.xmlsoap.org/soap/envelope/"
xmlns:xsd="http://www.w3.org/1999/XMLSchema">
  <SOAP-ENV:Body>
    <m:RunDBQueryResponse xmlns:m="urn:schemas-iwaysoftware-com:iwse"
xmlns="urn:schemas-iwaysoftware-com:iwse"
cid="2A3CB42703EB20203F91951B89F3C5AF">
      <RunDBQueryResult run="1" />
    </m:RunDBQueryResponse>
  </SOAP-ENV:Body>
</SOAP-ENV:Envelope>
```





---

## コンポーネント・インタフェース API の生成

この付録では、Oracle Application Adapter for PeopleSoft で使用するコンポーネント・インタフェース API の生成方法について説明します。この付録の内容は次のとおりです。

- [A.1 項「PeopleSoft API Java プログラムの構築」](#)
- [A.2 項「PeopleSoft API Java プログラムのコンパイル」](#)

### A.1 PeopleSoft API Java プログラムの構築

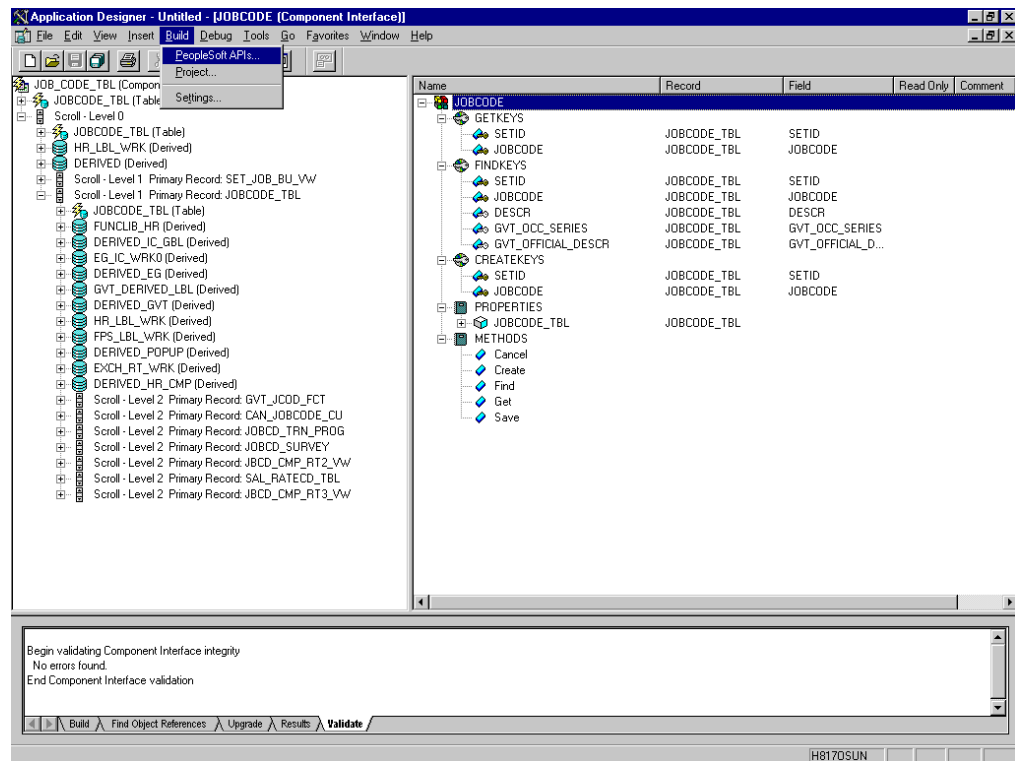
PeopleSoft で提供される Enterprise Integration Point (EIP) またはカスタマイズされたコンポーネント・インタフェースのいずれを使用する場合でも、PeopleSoft アプリケーションとの通信を可能にするには PeopleSoft API を作成する必要があります。この API はクライアント・システム内に存在する Java クラス・ファイルの集合で、クライアント・アプリケーション・レイヤーと PeopleSoft 間の通信を介在します。

コンポーネント・インタフェースを使用する前に、セキュリティを適用し、テストする必要があります。

PeopleSoft API Java プログラムを作成するには、次のステップを実行します。

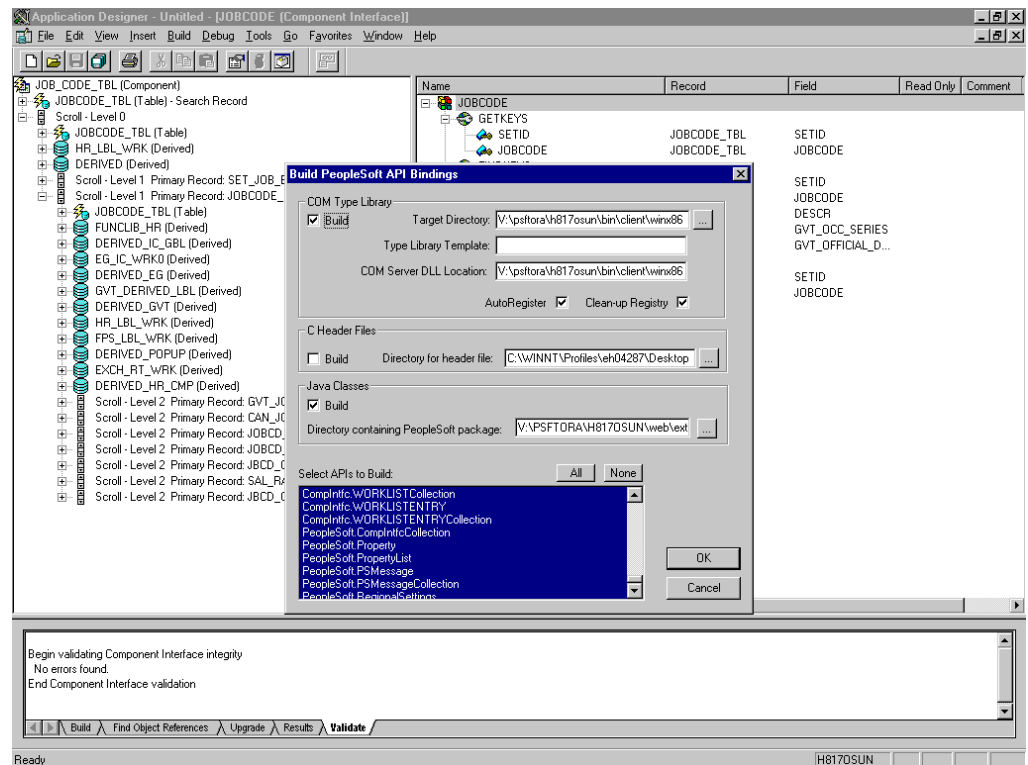
1. [図 A-1](#) に示すように、PeopleSoft アプリケーション・デザイナを開きます。

図 A-1 PeopleSoft アプリケーション・デザイナー・コンポーネント・インタフェース



2. PeopleSoft アプリケーション・デザイナーから、コンポーネント・インタフェースを開きます。
3. 右ペインをクリックし、「作成」メニューから **PeopleSoft API** を選択します。  
☒ A-2 に示すように、PeopleSoft API バインドの作成ダイアログで、作成するバインドのタイプを指定するように要求されます。

図 A-2 PeopleSoft API バインドの作成ダイアログ



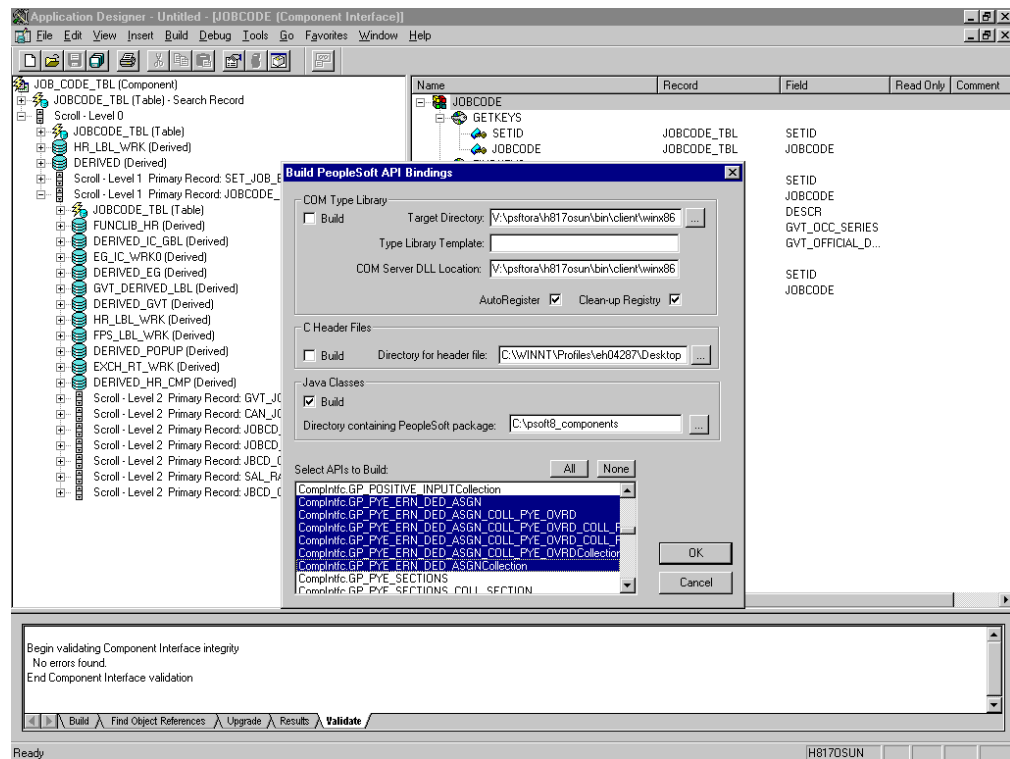
4. Java ファイルを作成するので、**COM タイプ・ライブラリの作成**が選択解除されていることを確認します。
5. **Java クラスの作成**が選択されていることを確認し、`c:\psoft8_components` など、ローカル・システム上の Java ファイルの格納場所となるディレクトリを選択します。
  - すべての API ファイルを作成するには、デフォルトの「すべて」(多数になる可能性あり)を選択し、「OK」をクリックします。

PeopleSoft によりファイルが生成されます。これには数分かかります。処理が完了したら、出力ウィンドウにメッセージが表示されます。

これで、Java ファイルをコンパイルする準備ができました。詳細は、「[PeopleSoft API Java プログラムのコンパイル](#)」(A-5 ページ)を参照してください。

図 A-3 に示すように、次のペインに HR 8.1 アプリケーションからの GP\_PYE\_ERN\_DED\_ASGN コンポーネント・インタフェースが表示されます。

図 A-3 GP\_PYE\_ERN\_DED\_ASGN コンポーネント・インタフェース

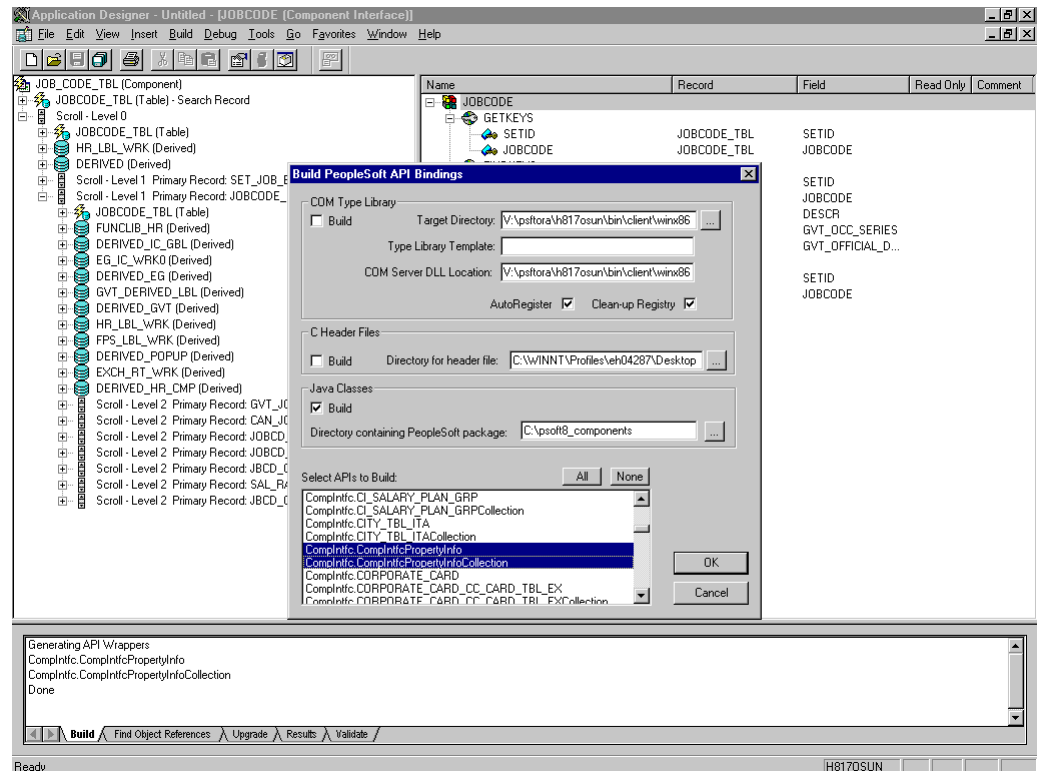


- 特定のコンポーネント・インタフェースの API を作成するには、「なし」をクリックします。

これにより、選択済の API が選択解除され、コンポーネント・インタフェースに適切な API を選択できます。これらの API はコンポーネント・インタフェースの名前から始まります。1つのコンポーネント・インタフェースに対し、API の数が 5 つ未満の場合もあれば、50 を超える場合もあります。

図 A-4 に示すように、次のダイアログに、汎用コンポーネント・インタフェース・プロパティを含む、以下の API が表示されます。

図 A-4 汎用コンポーネント・インタフェース・プロパティ



- a. 選択されたコンポーネント・インタフェースの API の他に、次の汎用コンポーネント・インタフェース・プロパティの API ファイルも生成する必要があります。

CompIntfcPropertyInfo

CompIntfcPropertyInfoCollection

これらのアイテムは、コンポーネント・インタフェースの構築と同じ手順で選択するか、または別に選択することもできます。

- b. 「OK」をクリックします。

PeopleSoft によりファイルが生成されます。これには数分かかります。処理が完了したら、出力ウィンドウにメッセージが表示されます。これで、Java ファイルをコンパイルする準備ができました。詳細は、「[PeopleSoft API Java プログラムのコンパイル](#)」(A-5 ページ)を参照してください。

## A.2 PeopleSoft API Java プログラムのコンパイル

PeopleSoft により、コンパイルする Java プログラムが `psoft8_components\PeopleSoft\Generated\CompIntfc` というディレクトリに置かれます。

ここで、`psoft8_components` は作成プロセス中に指定されるディレクトリです。

すべての API の生成を選択した場合、`psoft8_components\PeopleSoft\Generated\PeopleSoft` という 2 番目のディレクトリがシステムにより作成されます。このディレクトリにアクセスする必要はありません。

PeopleSoft API Java プログラムのコンパイル・プロセスは、アプリケーション・エクスプローラがインストールされているシステムでコンパイルするか、または他のシステムでコンパイルするかによって異なります。

---

**注意：** Java プログラムを作成したときに選択したすべての API ファイルに各 2 つの Java プログラムがあります。詳細は、「[PeopleSoft API Java プログラムの構築](#)」(A-1 ページ)を参照してください。

---

Java プログラムをコンパイルする前に、PeopleSoft Java オブジェクト・アダプタ、psjsoa.jar ファイルが、PeopleSoft アプリケーション・サーバー上の `PS_HOME\Web\psjsoa` ディレクトリの下に存在することを確認しますこれは、インストール中に lib ディレクトリに配置したファイルです。

### アプリケーション・エクスプローラのインストール先と同じシステムでコンパイルする場合

psjsoa.jar ファイルを指定するか、または `c:\psoft8_components` など、Java API ファイルを配置したディレクトリ内にコピーします。

### アプリケーション・エクスプローラのインストール先とは異なるシステムでコンパイルする場合

次のステップを実行します。

1. psjsoa.jar ファイルのコピーを PeopleSoft アプリケーション・サーバーから取得します。プログラムをコンパイルする前に、psjsoa.jar ファイルが Java クラス・パスに存在することを確認します。
2. Java プログラムをコンパイルし、\PeopleSoft\Generated\CompIntfc パスに含めます。

パスは大 / 小文字が区別されます。

次の Windows バッチ・ファイルを psoft8\_components ディレクトリから実行することにより、Java API が適切にコンパイルされます。このコードでは、psjsoa.jar が psoft8\_components 内に置かれていると想定しています。

```
@echo off
set JAVA_HOME=<my-java-home>
set PATH=%JAVA_HOME%\bin;%PATH%
set CLASSPATH=%JAVA_HOME%\lib\tools.jar;psjsoa.jar;%CLASSPATH%
javac -classpath %CLASSPATH% .\PeopleSoft\Generated\CompIntfc\*.java
```

ここで、<my-java-home> は Java ホーム・ディレクトリの完全修飾パス名です。

このコードでは、クラス・ファイルは Java ファイルと同じディレクトリに置かれますが、サイトの要件によって別の場所に置くこともできます。

3. クラス・ファイルを JAR ファイルに圧縮します。

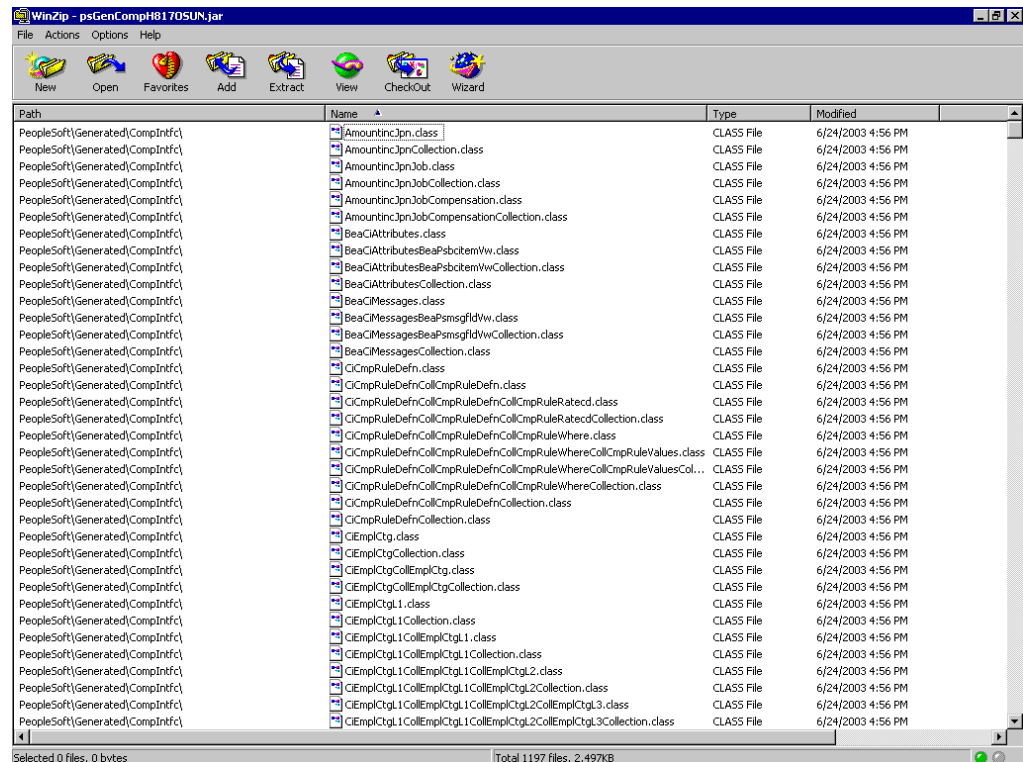
次の Windows バッチ・ファイルを psoft8\_components ディレクトリで実行することにより、適切な JAR ファイルが作成されます。

```
@echo off
set JAVA_HOME= my-java-home
set PATH=%JAVA_HOME%\bin;%PATH%
set CLASSPATH=%JAVA_HOME%\lib\tools.jar;%CLASSPATH%
jar cvf my-jar-file.jar .\PeopleSoft\Generated\CompIntfc\*.class
```

必要に応じて、my-java-home および my-jar-file を変更します。

4. JAR ファイルが正常に作成されたことを確認するには、[図 A-5](#) に示すように、WinZip アプリケーションで開きます。

**図 A-5 PeopleSoft Jar ファイル**



JAR ファイルで、PeopleSoft\Generated\CompIntfrc\ パスが (大/小文字を区別) 使用されていない場合、戻って修正する必要があります。

5. JAR ファイルをアダプタの共通の lib ディレクトリに置きます。これにより、Oracle Application Adapter for PeopleSoft と PeopleSoft コンポーネント・インタフェースとの通信が可能になります。

```
<ADAPTER_HOME>\lib
```

**注意：** UNIX で実行する場合は、コンパイルおよび JAR のステップを Windows 上で行ってからファイルを UNIX システムに移動します。JAR ファイルはバイナリです。FTP ベースのツールを使用して JAR ファイルを Windows から UNIX に移動する場合、ファイル・フォーマットをバイナリに設定する必要があります。





---

---

## PeopleSoft メッセージ・ルーターの構成

この付録では、PeopleSoft 用に TCP/IP または HTTP ターゲット・コネクタおよび TCP/IP ハンドラを構成し、テストする方法について説明します。次のトピックが含まれています。

- B.1 項「PeopleSoft 8.4 用 TCP/IP または HTTP ターゲット・コネクタの構成」
- B.2 項「TCP/IP ターゲット・コネクタの構成」
- B.3 項「TCP/IP 8.4 コネクタ用のノードの構成」
- B.4 項「PeopleSoft 8.1 用 TCP/IP ハンドラの構成」
- B.5 項「PeopleSoft 8.1 用 HTTP ハンドラの構成」
- B.6 項「PeopleSoft 構成のテスト」

この付録の情報は、PeopleSoft インテグレーション・ブローカー (リリース 8.4) またはアプリケーション・メッセージング (リリース 8.1) を理解していることを前提としています。詳細は、付録 D「PeopleSoft インテグレーション・ブローカーの使用」を参照してください。Oracle Application Adapter for PeopleSoft での作業前の詳細は、PeopleSoft ドキュメントを参照してください。

---

---

**注意：** PeopleSoft リリース 8.1 では、メッセージング・アーキテクチャはアプリケーション・メッセージングと呼ばれ、アプリケーション・メッセージング・ゲートウェイが含まれます。リリース 8.4 では、メッセージング・アーキテクチャはインテグレーション・ブローカーと呼ばれ、インテグレーション・ゲートウェイが含まれます。この項では、リリース特定ではない問題を扱う場合、リリース 8.4 の用語を使用します。リリース特定の問題の場合は、各リリース特定の用語を使用します。

---

---

### B.1 PeopleSoft 8.4 用 TCP/IP または HTTP ターゲット・コネクタの構成

このトピックの手順では、インテグレーション・ブローカーが構成済みおよびテスト済みであることを前提としています。詳細は、付録 D「PeopleSoft インテグレーション・ブローカーの使用」を参照してください。

1. TCP/IP ターゲット・コネクタまたは HTTP ターゲット・コネクタ用にゲートウェイを構成します。詳細は、「TCP/IP ターゲット・コネクタの構成」(B-2 ページ)を参照してください。

**注意：** このステップは、HTTP コネクタを構成する場合はオプションです。HTTP ターゲット・コネクタは PeopleSoft アプリケーションに装備されており、特別の構成ステップは必要ありません。必要に応じて、ゲートウェイのデフォルトの接続値を構成できます。ノードを構成する場合はこれらの値をオーバーライドできます。

2. ノードを構成します。詳細は、「TCP/IP 8.4 コネクタ用のノードの構成」(B-3 ページ)を参照してください。

**注意：** リリース 8.4 から、インテグレーション・ブローカーには HTTP アウトバウンド・コネクタが装備されています。詳細は、「HTTP コネクタの構成」(B-8 ページ)を参照してください。

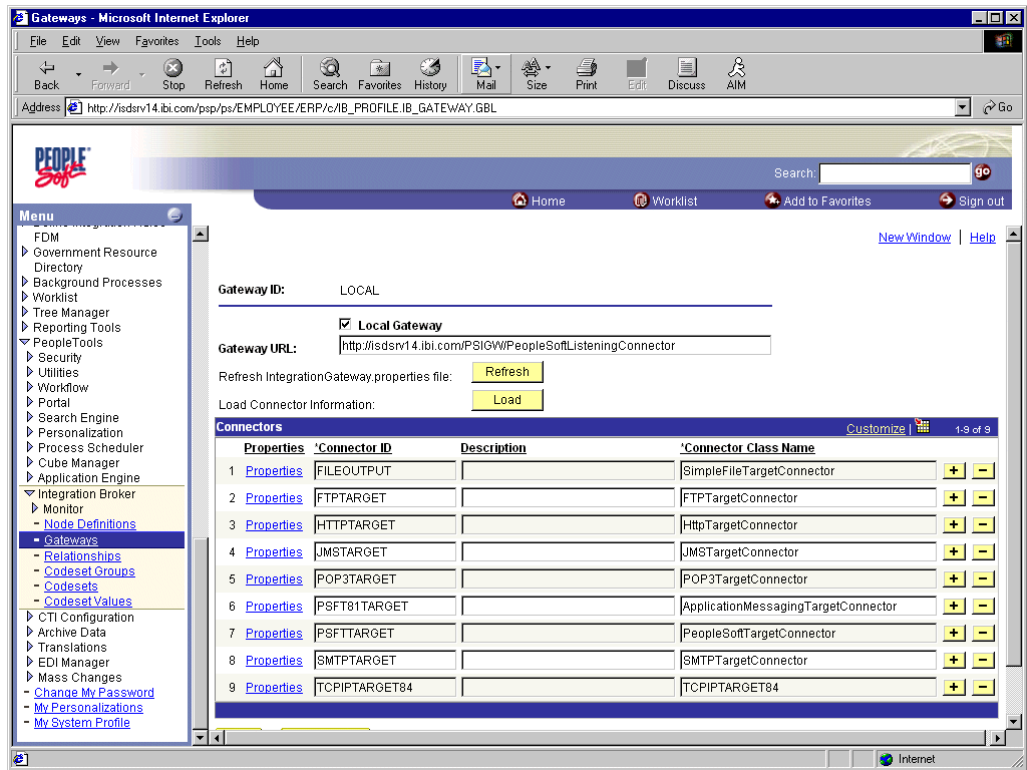
## B.2 TCP/IP ターゲット・コネクタの構成

TCP/IP ターゲット・コネクタ用のゲートウェイを構成するには

1. Web ブラウザで、PeopleSoft リリース 8.4 アプリケーションを開きます。
2. 「メニュー」ペインで、「PeopleTools」を展開し、「インテグレーションブローカー」を展開して、「ゲートウェイ」をクリックします。
3. LOCAL ゲートウェイ ID を開きます。

図 B-1 に示すように、次の「ゲートウェイ ID」ペインと同様のペインが表示されます。

図 B-1 「ゲートウェイ ID」ペイン



4. 「TCPIPTARGET84」コネクタ ID が表示されない場合は、「ロード」をクリックし、リストをスクロールして「TCPIPTARGET84」を見つけます。

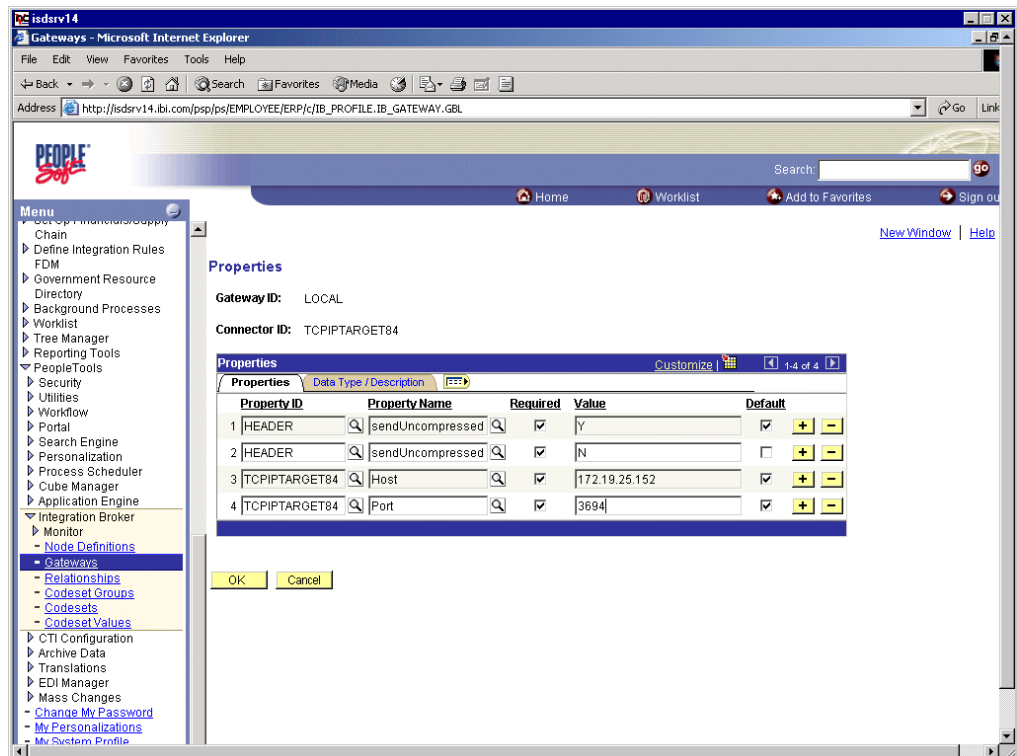
「TCPIPTARGET84」がまだ表示されない場合は、このコネクタ・クラス・ファイルはインテグレーション・ゲートウェイにインストールされていません。

次のステップを実行します。

- a. 「TCPIPTARGET84」の「プロパティ」URL をクリックします。

図 B-2 に示すように、「TCPIPTARGET84」の「プロパティ」ペインが表示され、ホストおよびポートのデフォルト値が表示されます。複雑なビジネス環境の場合は、各ノードのこの設定をオーバーライドできます。

図 B-2 「プロパティ」ペイン



- b. PeopleSoft XML リスナーが受信メッセージをリスニングしているシステムのホストおよびポートの値を入力します。
5. 「OK」をクリックします。  
ゲートウェイ・ウィンドウが表示されます。
  6. ウィンドウの下部へスクロールし、「保存」をクリックします。  
これで TCP/IP ターゲット・コネクタ用のゲートウェイの構成が完了しました。

## B.3 TCP/IP 8.4 コネクタ用のノードの構成

この項では、次のトピックについて説明します。

- B.3.1 項「HTTP ターゲット・コネクタの構成」
- B.3.2 項「HTTP コネクタの構成」

TCP/IP 8.4 コネクタ用のノードを構成するには、次のステップを実行します。

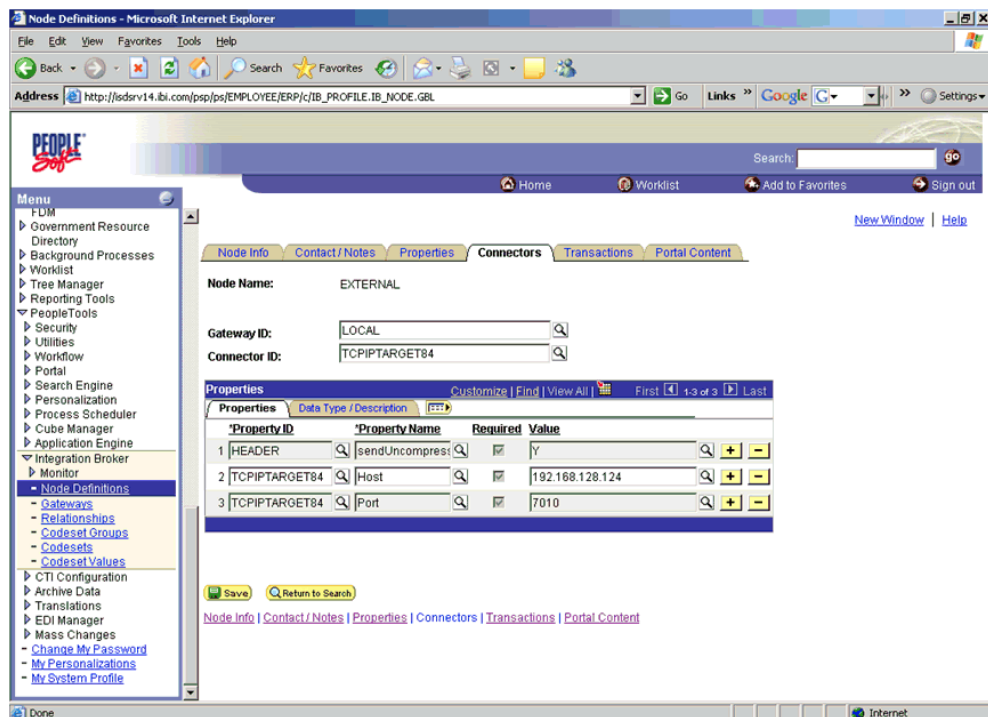
1. 「メニュー」ペインで、「PeopleTools」、「インテグレーションブローカー」の順に選択し、「ノード定義」をクリックします。
2. 構成するノードを選択します。

**注意：** この手順では、「EXTERNAL」と呼ばれるノードを使用しています。ノードの作成および使用の詳細は、付録 D 「PeopleSoft インテグレーション・ブローカーの使用」または PeopleSoft ドキュメントを参照してください。

次のステップを実行します。

- a. 「ノードタイプ」リストから「外部」を選択します。
  - b. 「ルーティングタイプ」リストから「暗黙」を選択します。
3. 図 B-3 に示すように、「コネクタ」タブを選択します。

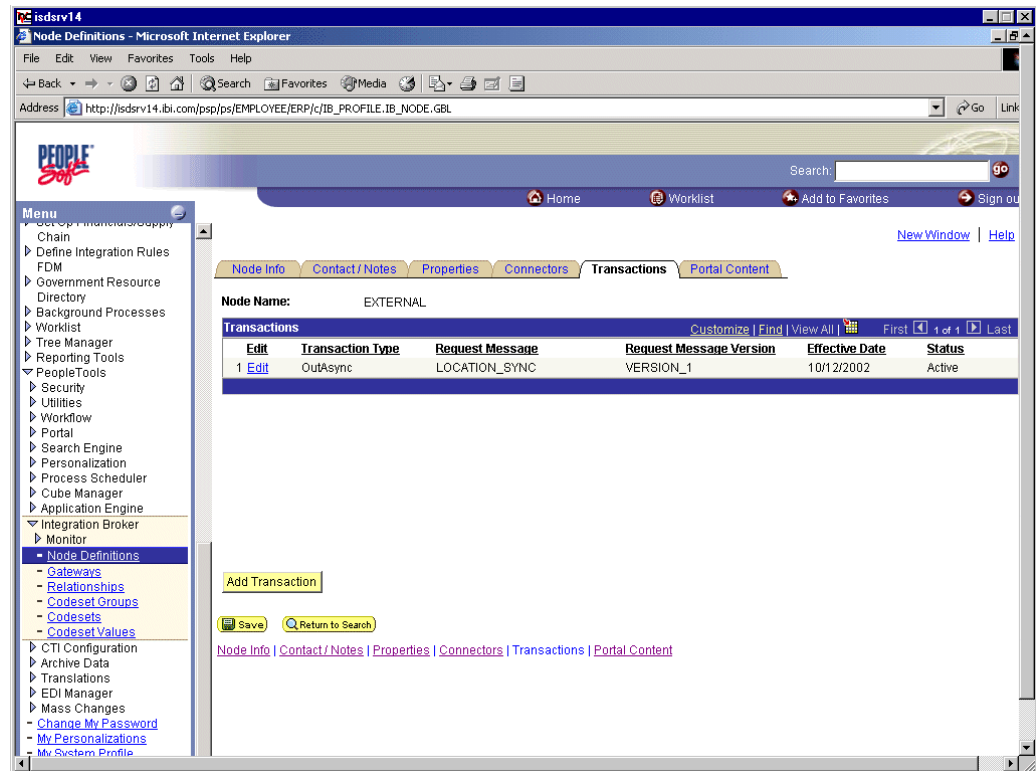
図 B-3 「コネクタ」タブ



次のステップを実行します。

- a. 「コネクタ ID」として「TCPIPTARGET84」を選択します。  
ホストおよびポートのデフォルト値が表示されます。
  - b. Oracle WebLogic Server に XML をルーティングするシステムのホストおよびポートの値を入力します。各ノードのデフォルト値を受け入れるかオーバーライドできます。
  - c. 「保存」をクリックします。
4. コネクタを変更するという警告が表示された場合は、「OK」をクリックします。
  5. 図 B-4 に示すように、「トランザクション」タブを選択します。

図 B-4 「トランザクション」タブ

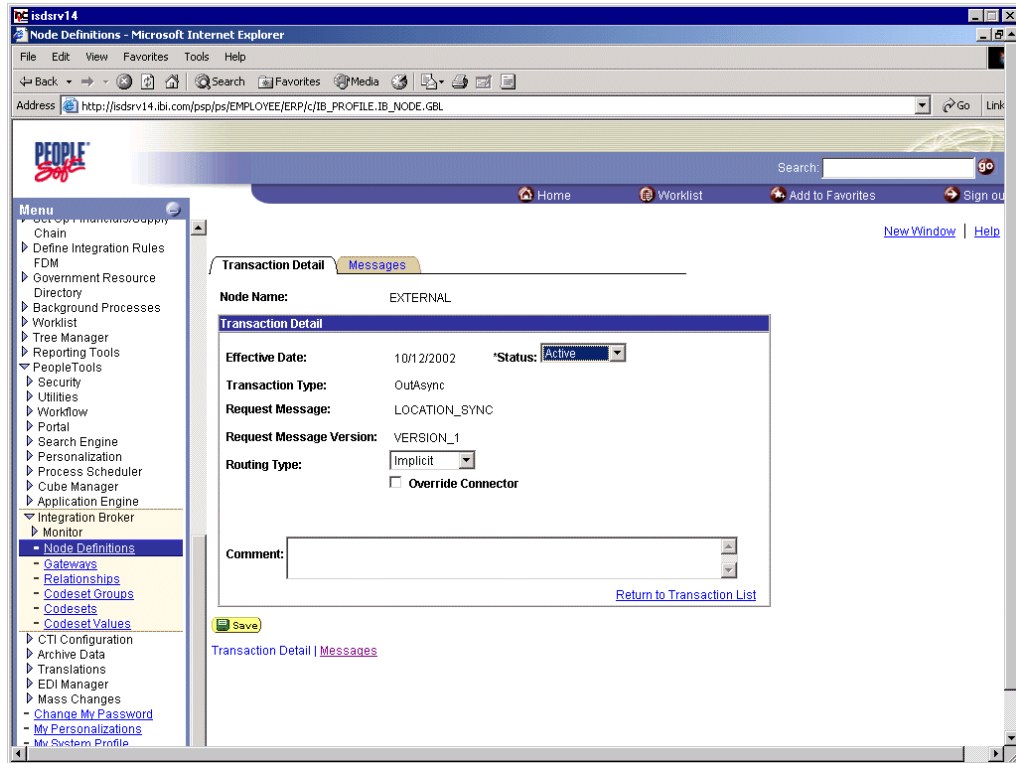


次のステップを実行します。

- トランザクションがない場合は、「トランザクションの追加」をクリックして、作業中のメッセージを追加します。この手順では、ノードはすでに「LOCATION\_SYNC」メッセージで構成されています。
- 「LOCATION\_SYNC」メッセージのトランザクションの詳細を表示するには、「編集」をクリックします。

図 B-5 に示すように、トランザクションの詳細タブが表示されます。

図 B-5 トランザクションの詳細タブ



- c. 作業中のメッセージの追加
  - d. 「ルーティングタイプ」が「暗黙」であることを確認します。
6. 「保存」をクリックします。
  7. 「トランザクション」タブに戻ります。  
次のステップを実行します。
    - a. 「編集」をクリックし、トランザクションの詳細タブにナビゲートして、追加のトランザクションを編集します。
    - b. トランザクションの詳細タブで、「ステータス」リストから「非アクティブ」を選択します。  
「非アクティブ」ステータスは最初のテスト用のみです。構成のテスト後は、ステータスを「アクティブ」に変更し、ビジネス要件を満たすのに必要な数のノードおよびトランザクションを追加できます。
  8. 「保存」をクリックします。

これで、XML メッセージを PeopleSoft XML リスナーに送信できるようになりました。

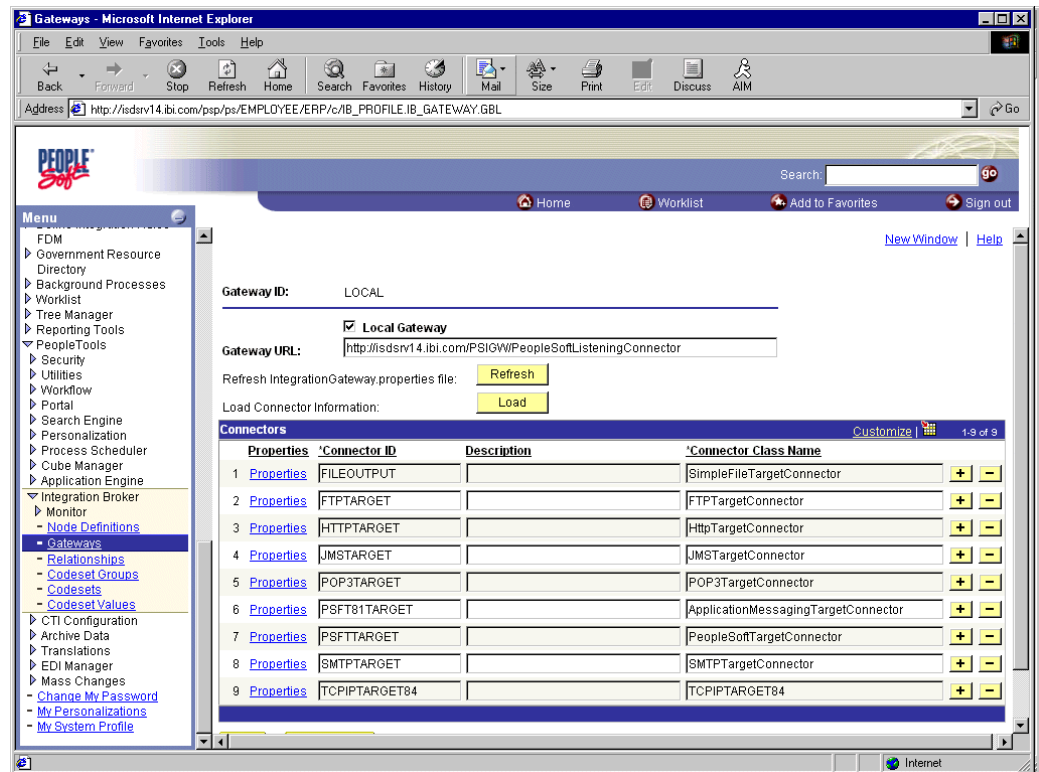
### B.3.1 HTTP ターゲット・コネクタの構成

HTTP ターゲット・コネクタは PeopleSoft アプリケーションに装備されており、特別の構成ステップは必要ありません。必要に応じて、ゲートウェイのデフォルトの接続値を構成できます。ノードを構成する場合はこれらの値をオーバーライドできます。HTTP ターゲット・コネクタ用のゲートウェイを構成するには、次のステップを実行します。

1. Web ブラウザで、PeopleSoft 8.4 アプリケーションを開きます。

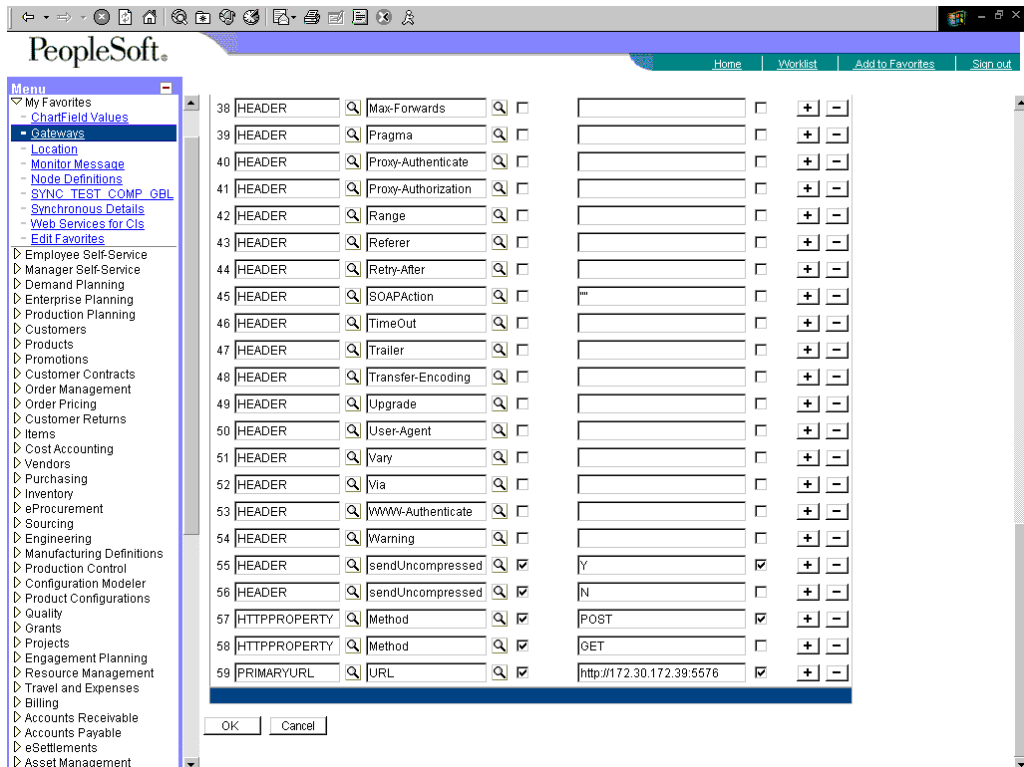
- 「メニュー」ペインで、「PeopleTools」を展開し、「インテグレーションブローカー」を展開して、「ゲートウェイ」をクリックします。
- LOCAL ゲートウェイ ID を開きます。  
 図 B-6 に示すように、次の「ゲートウェイ ID」ペインと同様のペインが表示されます。

図 B-6 HTTP ターゲット・コネクタの「ゲートウェイ ID」ペイン



- 「HTTPPTARGET」コネクタ ID が表示されない場合は、「ロード」をクリックします。  
 それでも表示されない場合は、ゲートウェイが正常にインストールされていません。PeopleSoft システム管理者に確認してください。
- 「HTTPPTARGET」の「プロパティ」URL をクリックします。  
 図 B-7 に示すように、「HTTPPTARGET」の「プロパティ」ペインにデフォルト値が表示されます。

図 B-7 「HTTPTARGET」の「プロパティ」ペイン



6. 下部へスクロールし、「PRIMARYURL」の値を入力します。

これは、PeopleSoft XML リスナーが受信メッセージをリスニングしているデフォルト HTTP アドレス (システムのホストおよびポート) です。

---

**注意：** 複雑なビジネス環境の場合は、各ノードのこの設定をオーバーライドできます。

---

7. 「OK」をクリックします。

ゲートウェイ・ウィンドウが表示されます。

8. ウィンドウの下部へスクロールし、「保存」をクリックします。

これで HTTP ターゲット・コネクタ用のゲートウェイの構成が完了しました。

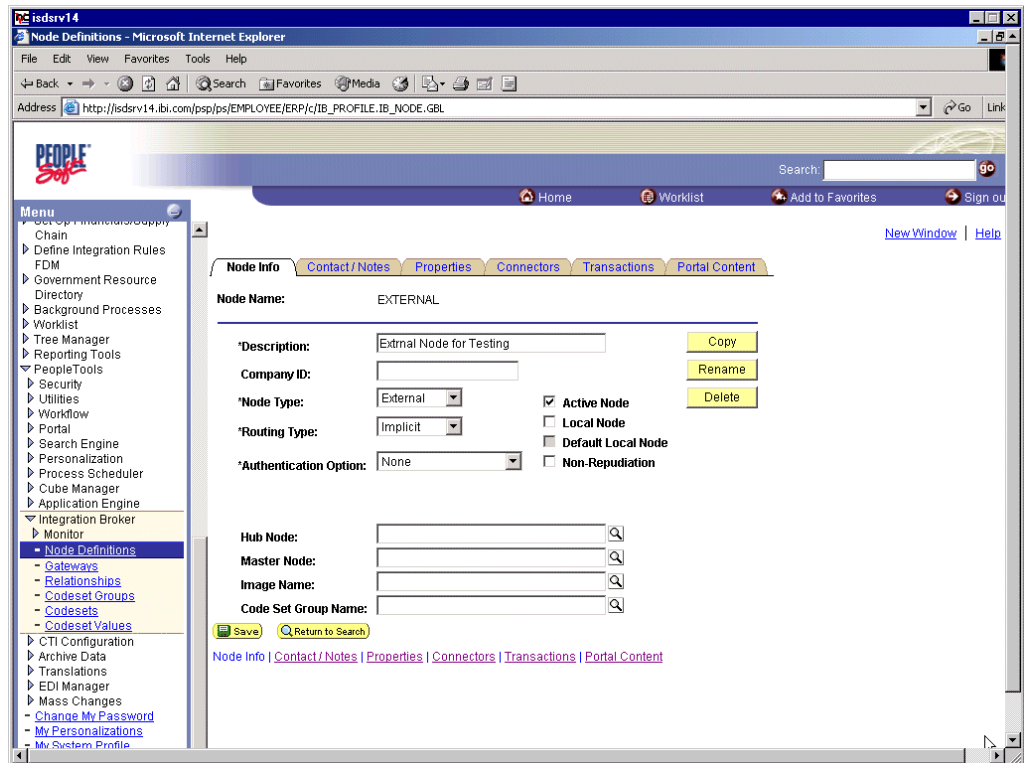
### B.3.2 HTTP コネクタの構成

リリース 8.4 から、インテグレーション・ブローカーには HTTP アウトバウンド・コネクタが装備されています。このコネクタを TCP/IP 8.4 コネクタの代わりに Oracle WebLogic Server へのメッセージの送信用に使用できます。

HTTP コネクタを使用するノードを構成するには、次のステップを実行します。



図 B-8 コネクタ構成ペイン



1. 図 B-8 に示すように、「メニュー」ペインで、「PeopleTools」、「インテグレーション・ブローカー」の順に展開し、「ノード定義」をクリックします。
2. 構成するノードを選択します。

---

**注意：** この手順では、「EXTERNAL」と呼ばれるノードを使用しています。ノードの作成および使用の詳細は、付録 D 「PeopleSoft インテグレーション・ブローカーの使用」または PeopleSoft ドキュメントを参照してください。

---

次のステップを実行します。

- a. 「ノードタイプ」リストから、「外部」を選択します。
- b. 「ルーティングタイプ」リストから、「暗黙」を選択します。

図 B-9 PeopleSoft インテグレーション・ブローカーの「コネクタ」タブ

PeopleSoft. Home Worklist

Menu

- My Favorites
  - Gateways
  - Location
  - Monitor Message
  - Node Definitions
    - Synchronous Details
    - Web Services for Cls
    - Edit Favorites
- Employee Self-Service
- Manager Self-Service
- Demand Planning
- Enterprise Planning
- Production Planning
- Customers
- Products
- Promotions
- Customer Contracts
- Order Management
- Order Pricing
- Customer Returns
- Items
- Cost Accounting
- Vendors
- Purchasing
- Inventory
- eProcurement
- Sourcing
- Engineering
- Manufacturing Definitions
- Production Control
- Configuration Modeler
- Product Configurations

Node Info | Contact / Notes | Properties | **Connectors** | Transactions | Portal Content

Node Name: EXTERNAL

Gateway ID: LOCAL

Connector ID: HTTPTARGET

Properties

Property ID	Property Name	Required	Value
1   HEADER	sendUncompress	<input checked="" type="checkbox"/>	Y
2   HTTPPROPERTY	Method	<input checked="" type="checkbox"/>	POST
3   PRIMARYURL	URL	<input checked="" type="checkbox"/>	http://172.30.172.39:5576

Save Return to Search

Node Info | Contact / Notes | Properties | Connectors | Transactions | Portal Content

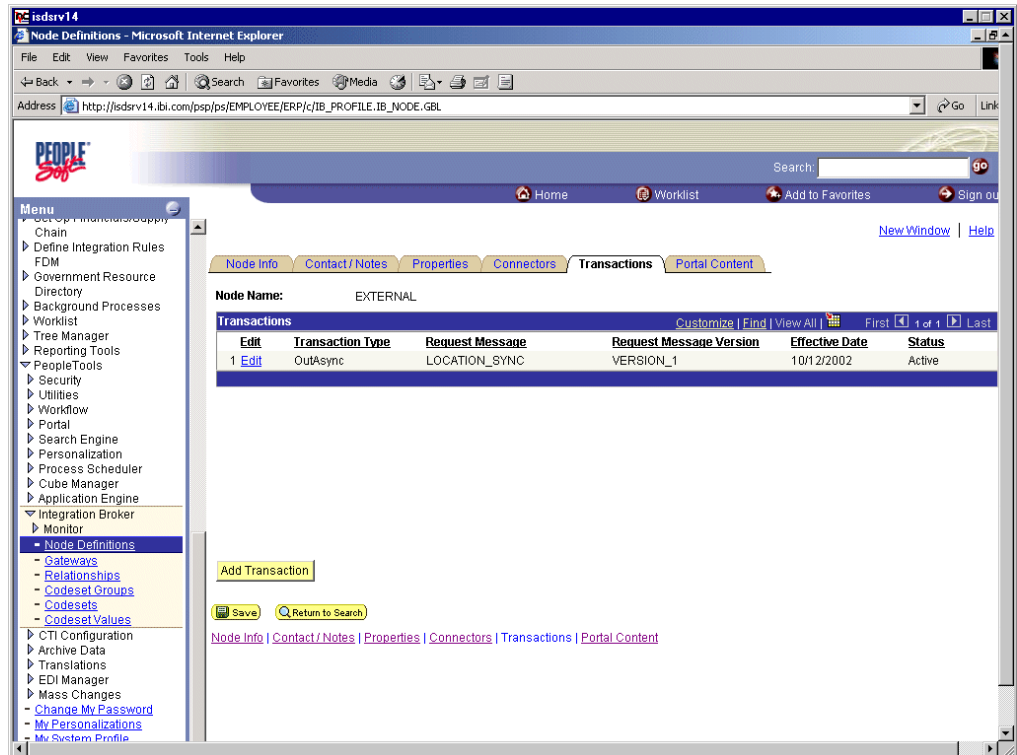
3. 図 B-9 に示すように、「コネクタ」タブを選択します。  
次のステップを実行します。
  - a. 「コネクタ ID」を「HTTPTARGET」に変更します。
  - b. 次の表に基づいて、各プロパティの値を入力します。

プロパティ ID	プロパティ名	値
HEADER	sendUncompressed	Y
HTTPPROPERTY	Method	POST
PRIMARYURL	URL	URL および HTTP リスナーのポート

**注意：** 複雑なビジネス環境の場合は、複数のノードおよび複数のリスナーを構成できます。

4. 「保存」をクリックします。
5. コネクタを変更するという警告が表示された場合は、「OK」をクリックします。
6. 図 B-10 に示すように、「トランザクション」タブを選択します。

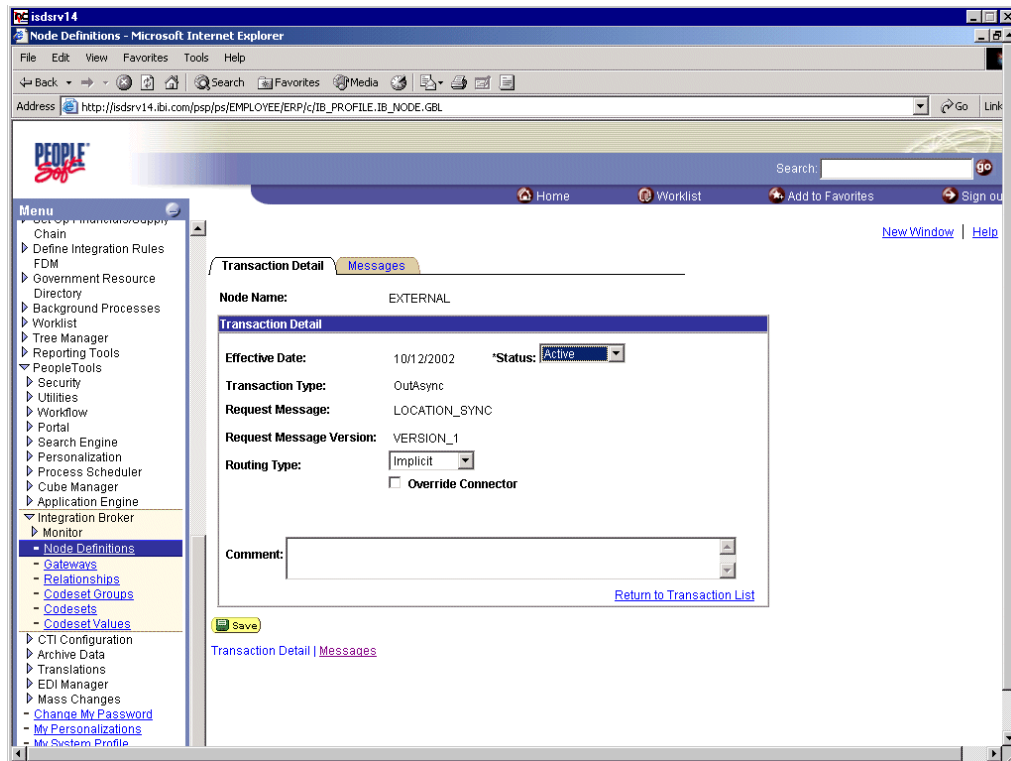
図 B-10 PeopleSoft インテグレーション・ブローカーの「トランザクション」タブ



7. トランザクションがない場合は、「トランザクションの追加」をクリックします。この手順では、ノードはすでに「LOCATION\_SYNC」メッセージで構成されています。

図 B-11 に示すように、トランザクションの詳細タブが表示されます。

図 B-11 トランザクションの詳細タブ



作業中のメッセージを追加できます。

- a. 「ルーティングタイプ」が「暗黙」であることを確認します。
  - b. 「保存」をクリックします。
8. トランザクション・リストに戻ります。次のステップを実行します。
    - a. 他のトランザクションが存在する場合は、編集します。
    - b. ステータスを「非アクティブ」に設定します。

「非アクティブ」ステータスは最初のテスト用のみです。構成のテスト後は、ステータスを「アクティブ」に変更し、ビジネス要件を満たすのに必要な数のノードおよびトランザクションを追加できます。

9. トランザクション・リストで「保存」をクリックします。

これで、XML メッセージを PeopleSoft XML リスナーに送信できるようになりました。

## B.4 PeopleSoft 8.1 用 TCP/IP ハンドラの構成

次の手順では、アプリケーション・メッセージング環境が適切に構成済みおよびテスト済であることを前提としています。詳細は、付録 D 「PeopleSoft インテグレーション・ブローカーの使用」を参照してください。

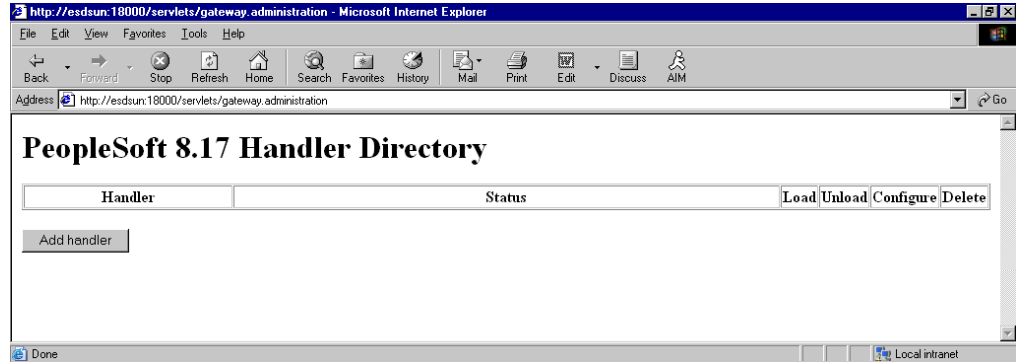
Oracle WebLogic Server へのメッセージの送信のために PeopleSoft 8.1 用 TCP/IP ハンドラを構成するには、次のステップを実行します。

1. Web ブラウザで、PeopleSoft 8.1 構成サーブレット・インタフェースを起動します。

- Simple File ハンドラが現在ロードされている場合は、続行する前にアンロードし、削除します。

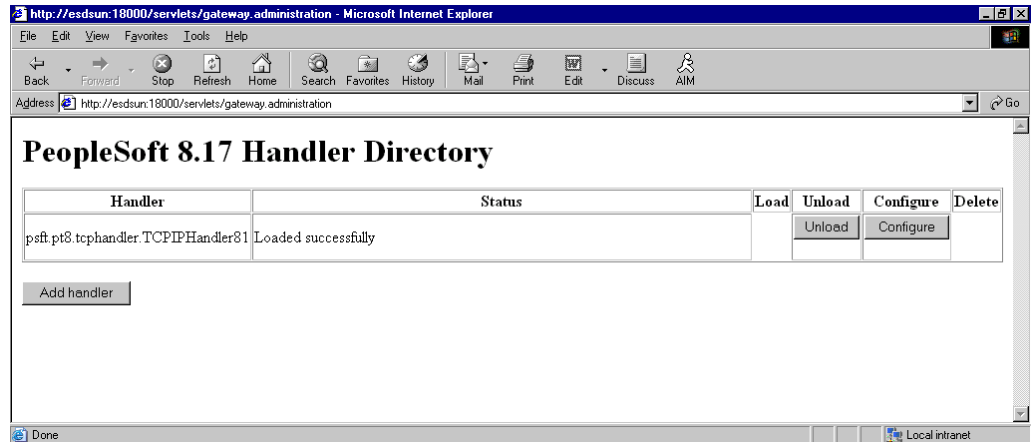
図 B-12 に示すように、空のハンドラ・ディレクトリが表示されます。

図 B-12 空のハンドラ・ディレクトリ



- 図 B-13 に示すように、ハンドラの追加をクリックします。

図 B-13 ロードされたハンドラの追加用ディレクトリ



次のステップを実行します。

- 次に示す PeopleSoft 8.1 用 TCP/IP ハンドラの完全パスを入力します。

psft.pt8.tcphandler.TCPIPHandler81

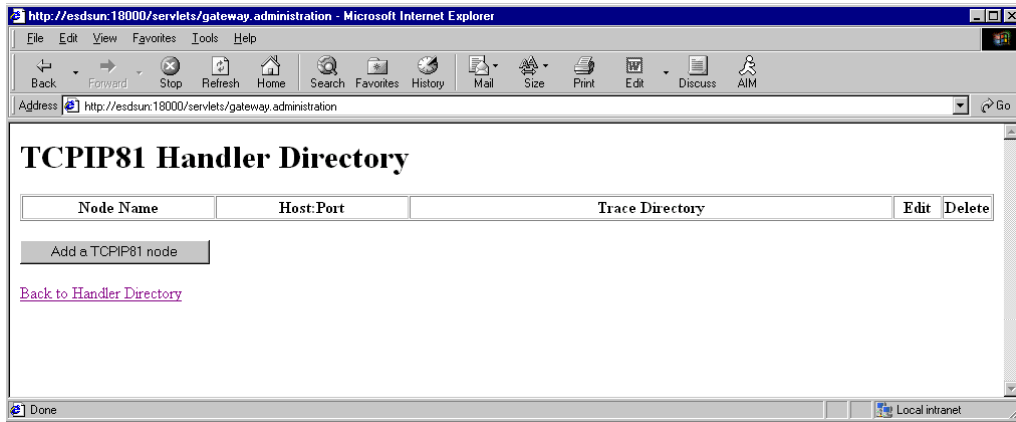
この値は大 / 小文字が区別されます。示されている値とまったく同じ値を入力する必要があります。

- 「保存」をクリックします。
- 「ロード」をクリックします。  
PeopleSoft ハンドラ・ディレクトリ・ウィンドウが表示されます。
  - 「設定」をクリックします。  
TCPIP81 ハンドラ・ディレクトリ・ウィンドウが表示されます。
  - TCPIP81 ノードの追加をクリックします。

**注意：** この手順内の図では、「EXTERNAL」と呼ばれるノードを使用しています。ノードの作成および使用の詳細は、付録 D 「PeopleSoft インテグレーション・ブローカーの使用」または PeopleSoft ドキュメントを参照してください。

図 B-14 に示すように、TCPIP81 ハンドラの追加ウィンドウが表示されます。

図 B-14 TCPIP81 ハンドラの追加ウィンドウ



7. 次の表の情報に基づいて、必要な値を入力します。

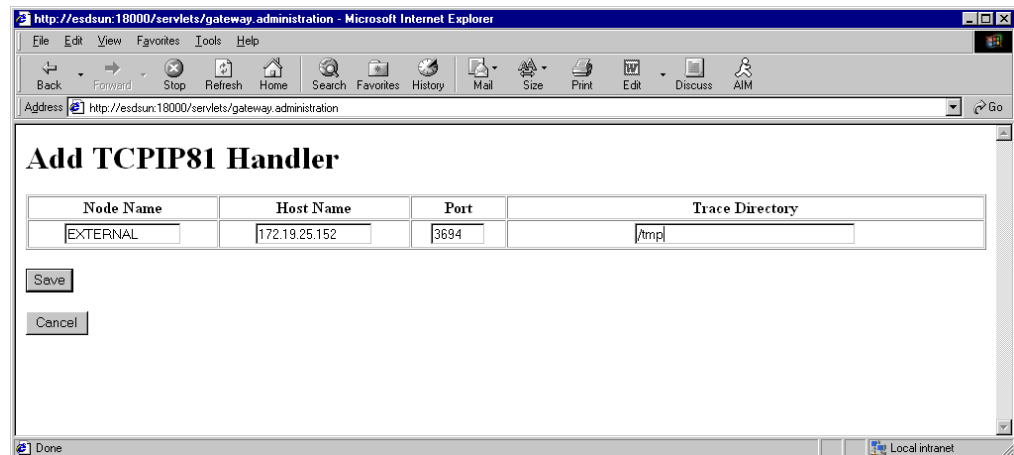
フィールド	値の例	説明
ノード名	EXTERNAL	TCP/IP ノード名。
ホスト名	172.19.25.152	PeopleSoft XML リスナーが受信メッセージをリスニングしているシステム。
ポート	3694	PeopleSoft XML リスナーが受信メッセージをリスニングしているポート。
トレース・ディレクトリ	/tmp	メッセージの送信時にエラーが発生したときにトレース・ファイルがの作成先となるディレクトリ。

システムではエントリーは検証されません。

8. 「保存」をクリックします。

図 B-15 に示すように、TCPIP81 ハンドラ・ディレクトリ・ウィンドウが表示されます。

図 B-15 TCPIP81 ハンドラ・ディレクトリ・ウィンドウ



9. 変更を適用するには、**ハンドラ・ディレクトリに戻る**をクリックし、PeopleSoft 8.1 ハンドラ・ディレクトリ・ウィンドウに戻ります。
10. **Unload and re-Load TCPIPHandler81** のアンロードおよび再ロードをクリックします。

これで、PeopleSoft から Oracle Application Adapter for PeopleSoft にメッセージを送信できるようになりました。

## B.5 PeopleSoft 8.1 用 HTTP ハンドラの構成

TCP/IP ハンドラを構成した後、次のステップを実行して HTTP ハンドラを構成します。

1. Web ブラウザで、**PeopleSoft 8.1 構成サブレット・インタフェース**を起動します。
2. **ハンドラの追加**をクリックします。
3. 次に示す PeopleSoft 8.1 用 HTTP ハンドラの完全パスを入力します。

```
psft.pt8.tcphandler.HTTPHandler81
```

この値は大 / 小文字が区別されます。示されている値とまったく同じ値を入力する必要があります。

4. 「**保存**」をクリックします。
5. ノードを構成する TCP/IP ハンドラをロードします。
6. HTTP チャンネル用に構成したポート番号を入力し、ハンドラを保存します。

詳細は、[B.4 項「PeopleSoft 8.1 用 TCP/IP ハンドラの構成」](#) (B-12 ページ) のステップ 7 を参照してください。

7. TCP/IP ハンドラをアンロードします。
8. HTTP ハンドラを再ロードし、イベントをトリガーします。

## B.6 PeopleSoft 構成のテスト

PeopleSoft 8.1 および 8.4 には、構成のテスト用に ping ノード・メカニズムが装備されています。このメカニズムの機能は両バージョンとも同じです。

構成のテストは次を確認するために行います。

- Oracle WebLogic Server 起動しており実行中です。
- PeopleSoft と Oracle WebLogic Server のサーバー名およびポート番号が一致しています。
- HTTP 用のデフォルトのページが存在します。

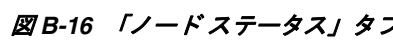
PeopleSoft 構成をテストするには、次のステップを実行します。

1. Web ブラウザで、PeopleSoft アプリケーションを開きます。
2. メッセージの監視に関するメニューにナビゲートします。

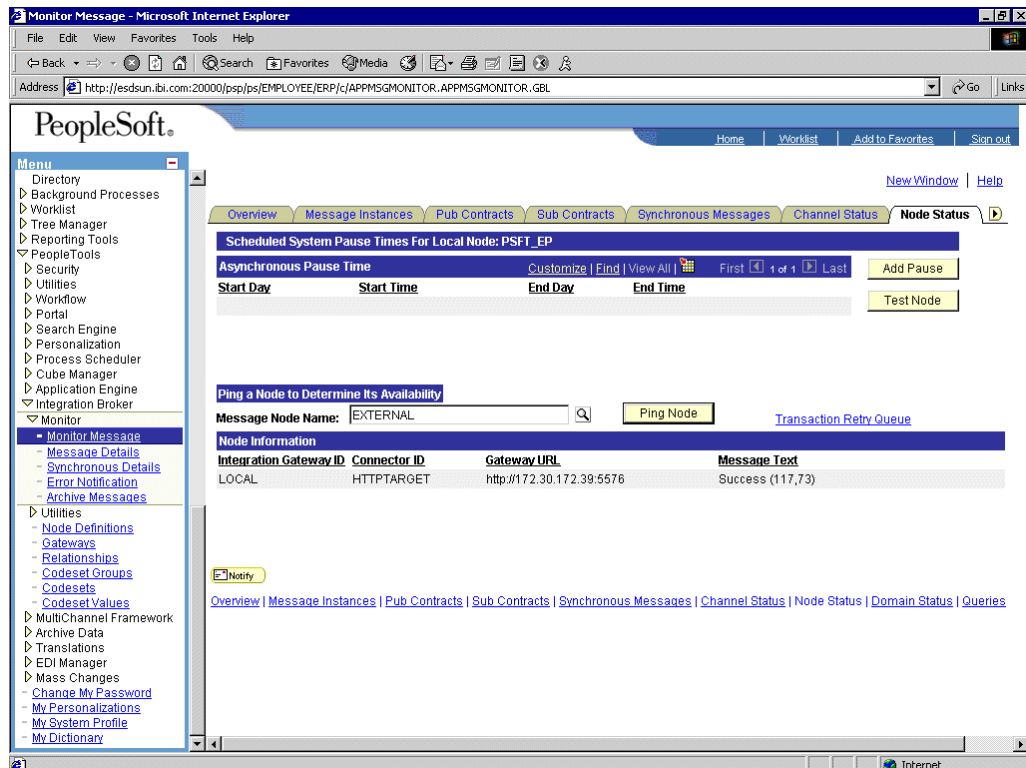
PeopleSoft 8.4 の場合：

- a. 「メニュー」 ペインで、「**PeopleTools**」、「**インテグレーションブローカー**」、「**モニター**」の順に展開します。
- b. 「**メッセージモニター**」を選択します。

PeopleSoft 8.1 の場合：

- a. 「メニュー」 ペインで、「**ホーム**」、「**PeopleTools**」、「**アプリケーションメッセージモニター**」、「**使用**」の順に展開します。
  - b. 「**アプリケーションメッセージモニター**」を選択します。
3.  B-16 に示すように、「**ノードステータス**」タブをクリックします。

**図 B-16 「ノードステータス」タブ**



次のステップを実行します。

- a. メッセージ・ノード名リストからノードを選択します。
- b. 「**PING**」をクリックします。



PeopleSoft と Oracle WebLogic Server の両方が適切に構成されている場合、成功のメッセージが表示されます。

エラーが発生した場合は構成に問題があります。詳細は、インテグレーション・ブローカーのログを参照してください。



---

---

## コンポーネント・インタフェースの使用

この付録では、Oracle Application Adapter for PeopleSoft で使用するためにコンポーネント・インタフェースを新規作成または既存のコンポーネント・インタフェースを変更する方法について説明します。また、これらのコンポーネント・インタフェースにセキュリティを適用し、テストする方法についても説明します。

内容は次のとおりです。

- PeopleSoft で提供されるコンポーネント・インタフェースをアプリケーションにも使用します。
- コンポーネント・インタフェースは Enterprise Integration Points (EIP) とも呼ばれます。
- 既存のコンポーネント・インタフェースを変更します。
- 新規コンポーネント・インタフェースを作成します。

コンポーネント・インタフェースを使用する前に、セキュリティを適用し、テストする必要があります。

コンポーネント・インタフェースのセキュリティ保護およびテスト後は、API を生成する必要があります。詳細は、[付録 A 「コンポーネント・インタフェース API の生成」](#)を参照してください。

---

---

**注意：** この項は、ユーザーに役立つ補足情報を提供することを目的としており、PeopleSoft ドキュメントを代用するものではありません。PeopleSoft コンポーネント・インタフェースに関する完全情報および最新情報は、PeopleSoft システムの PeopleSoft オンライン・ライブラリを参照してください。

---

---

この付録の内容は次のとおりです。

- [C.1 項「プロパティの操作」](#)
- [C.2 項「コンポーネント・インタフェースのセキュリティ保護」](#)
- [C.3 項「コンポーネント・インタフェースのテスト」](#)

### C.1 プロパティの操作

コンポーネント・インタフェースは、PeopleSoft アプリケーション・デザイナを使用して作成します。アプリケーション・デザイナの詳細は、PeopleSoft ドキュメントを参照してください。

プロパティはコンポーネント・ビューのレコードから追加できます。公開しないコンポーネント・インタフェース内のプロパティは削除できます。プロパティの名前変更

は、プロパティをクリックし、再度クリックして新規の名前を入力して行います。プロパティ名を変更した場合、コンポーネント・インタフェースでは基になるコンポーネント名ではなく新規の名前で参照できます。

プロパティには様々なアイコンが付きます。たとえば、EMPLID には、基になるレコードからのキー・レコードであることを示すアイコンが付きます。NAME には、基になるレコードからの代替のキー・フィールドであることを示すアイコンが付きます。プロパティのアイコンの完全なリストは、PeopleBooks のドキュメントを参照してください。

この項では、次のトピックについて説明します。

- [C.1.1 項「新規コンポーネント・インタフェースの作成」](#)
- [C.1.2 項「使用可能なメソッドの表示または変更」](#)

## C.1.1 新規コンポーネント・インタフェースの作成

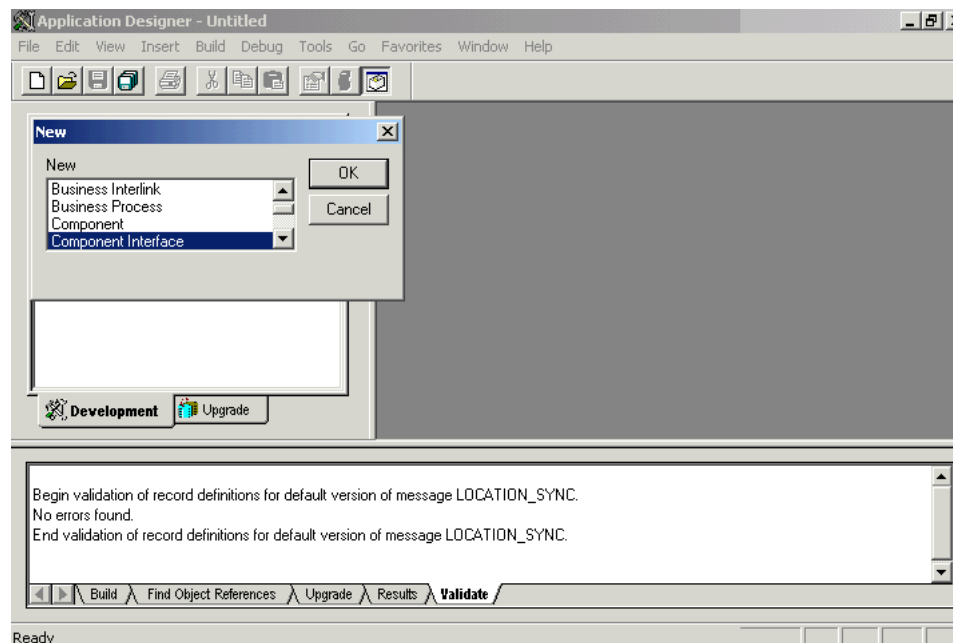
この項では、次のトピックについて説明します。

- [C.1.1.1 項「標準メソッド」](#)

コンポーネント・インタフェースを作成するには、次のステップを実行します。

1. PeopleSoft アプリケーション・デザイナを開きます。
2. 「ファイル」メニューから「新規」を選択します。
  - ☒ [C-1](#) に示すように、「新規」ダイアログが表示されます。

図 C-1 「新規」ダイアログ

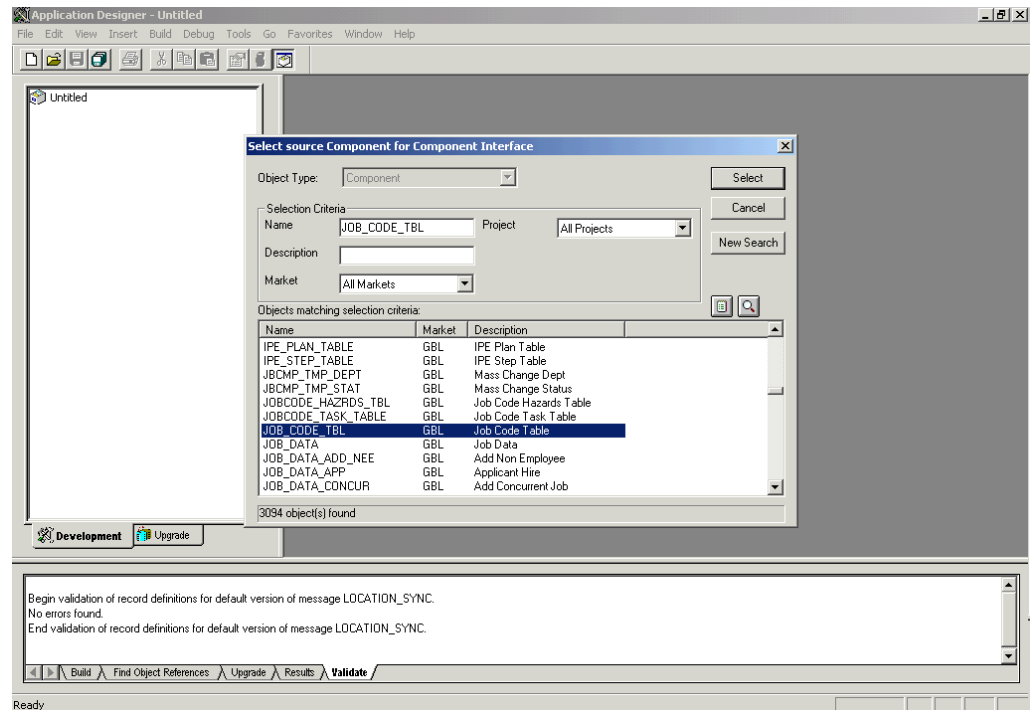


次のステップを実行します。

- a. コンポーネント・インタフェースを選択します。
- b. 「OK」をクリックします。

☒ [C-2](#) に示すように、コンポーネント・インタフェースのソース・コンポーネントの選択ダイアログが表示されます。

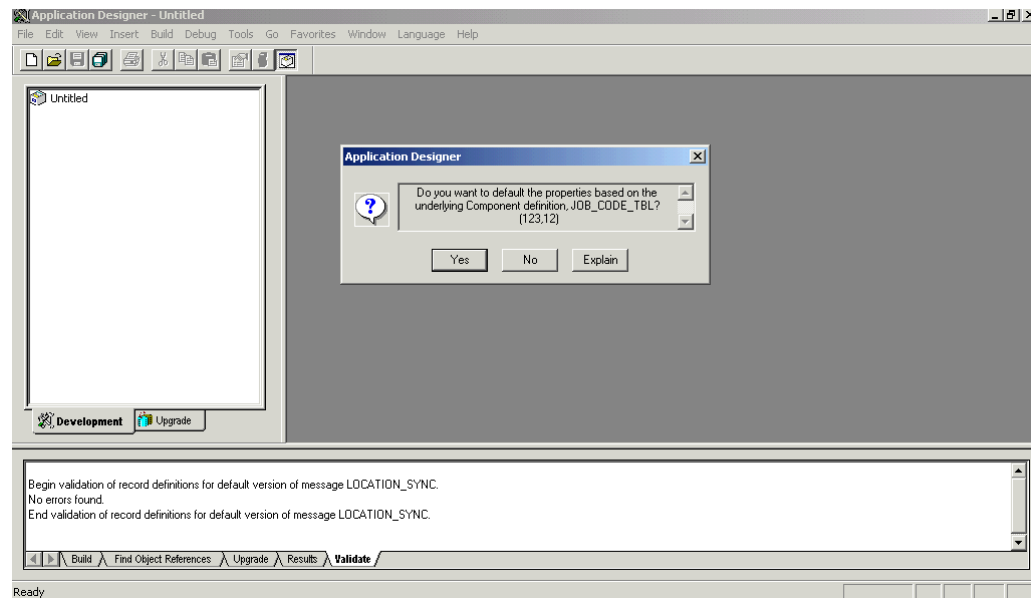
図 C-2 コンポーネント・インタフェースのソース・コンポーネントの選択ダイアログ



- コンポーネント・インタフェースの基礎として使用するコンポーネントを強調表示し、「選択」をクリックします。

図 C-3 に示すように、アプリケーション・デザイナー・ダイアログが表示されます。

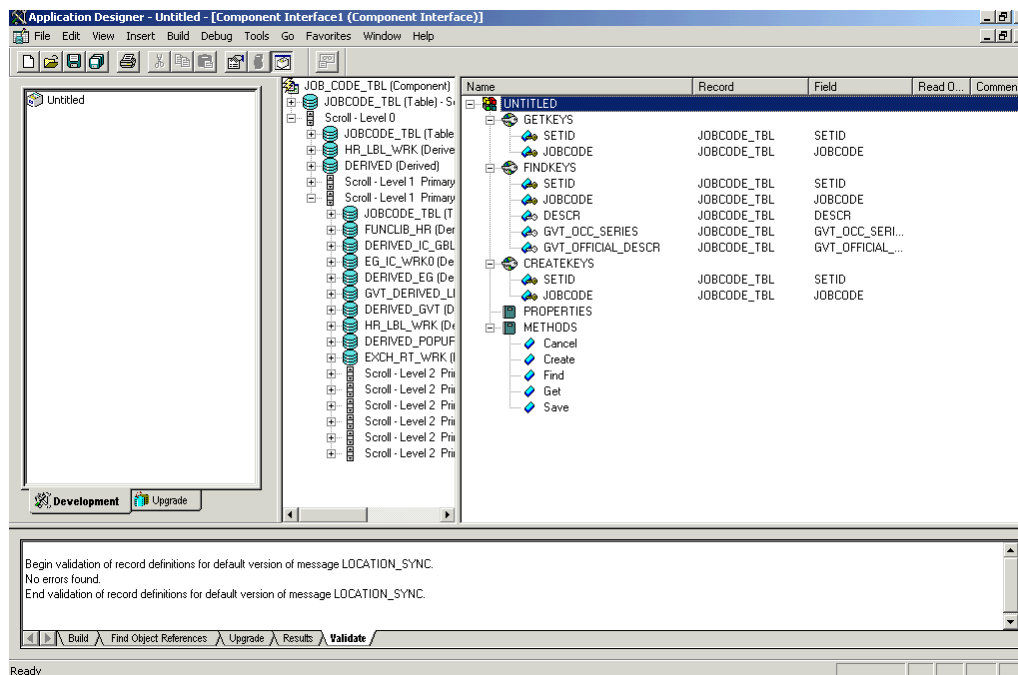
図 C-3 アプリケーション・デザイナー・ダイアログ



**注意：** コンポーネント・インタフェースが大きい場合は、コンポーネント・プロパティを手動で公開します。

4. プロパティを表示しないでコンポーネント・インタフェースを作成し、コンポーネント・プロパティを手動で公開するには、「いいえ」をクリックします。  
次のステップを実行します。
  - a. 左ペインから関連フィールドを右ペインにドラッグします。
  - b. 実行する様々なファンクションを選択するには、[図 C-4](#) に示すように、右または左ペインのうち、いずれかアクティブなペインを右クリックします。  
ファンクションの全リストについては、PeopleBooks のドキュメントを参照してください。
5. コンポーネント・インタフェースを作成し、基になるコンポーネント・インタフェースのプロパティを表示するには、「はい」をクリックします。

**図 C-4 アプリケーション・デザイナー・コンポーネント・インタフェース**



### C.1.1.1 標準メソッド

コンポーネント・インタフェースの標準メソッドは、次のとおりです。

- Create
- Find
- Get
- Save

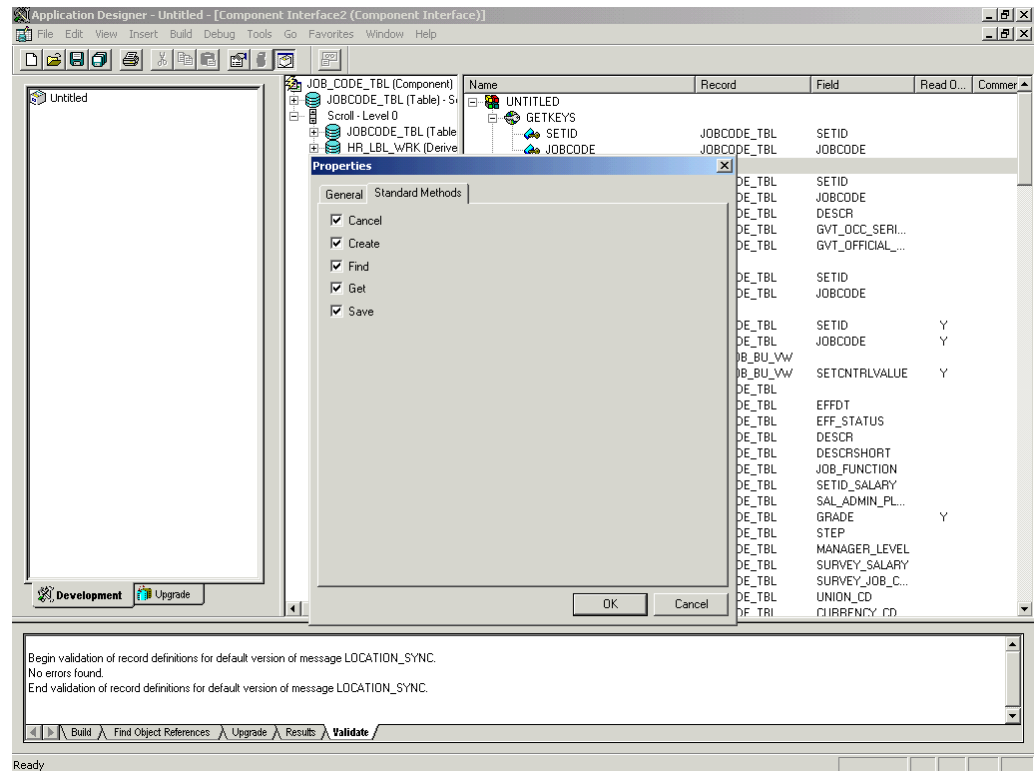
基になるコンポーネント内にあるメソッドのみを使用できます。たとえば、基になるコンポーネントに Add 機能が含まれていない場合、Create は使用できません。

## C.1.2 使用可能なメソッドの表示または変更

使用可能なメソッドを表示または変更するには、次のステップを実行します。

1. [図 C-5](#) に示すように、コンポーネント・インタフェースのプロパティ・ダイアログを表示します。

図 C-5 コンポーネント・インタフェースのプロパティ・ダイアログ



2. 標準メソッド・タブをクリックします。
3. 希望のメソッドを選択します。

## C.2 コンポーネント・インタフェースのセキュリティ保護

コンポーネント・インタフェースのテストを開始する前に、セキュリティを設定する必要があります。

この項では、次のトピックについて説明します。

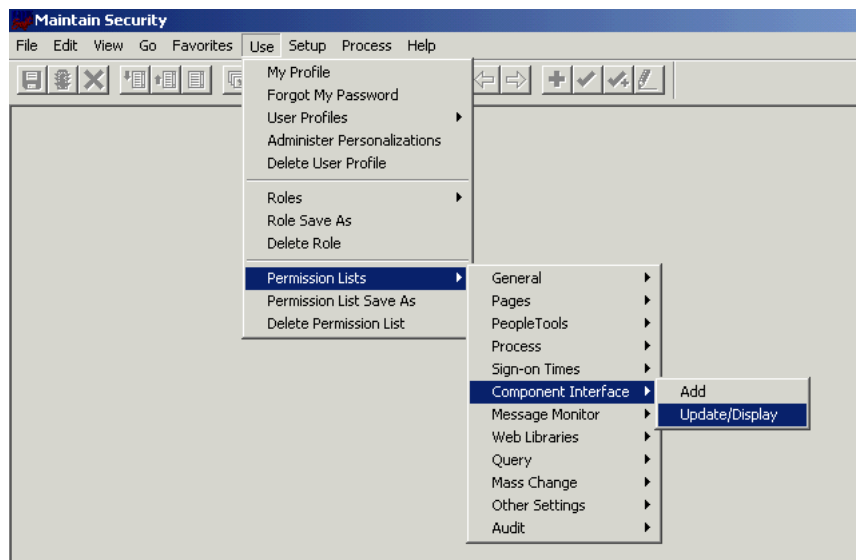
- C.2.1 項「PeopleSoft バージョン 8.1x 用コンポーネント・インタフェースのセキュリティの構成」
- C.2.2 項「PeopleSoft バージョン 8.4 以降用コンポーネント・インタフェースのセキュリティの構成」

### C.2.1 PeopleSoft バージョン 8.1x 用コンポーネント・インタフェースのセキュリティの構成

次の項で、2層および3層モードの PeopleSoft バージョン 8.1 用コンポーネント・インタフェース・セキュリティの構成方法について説明します。

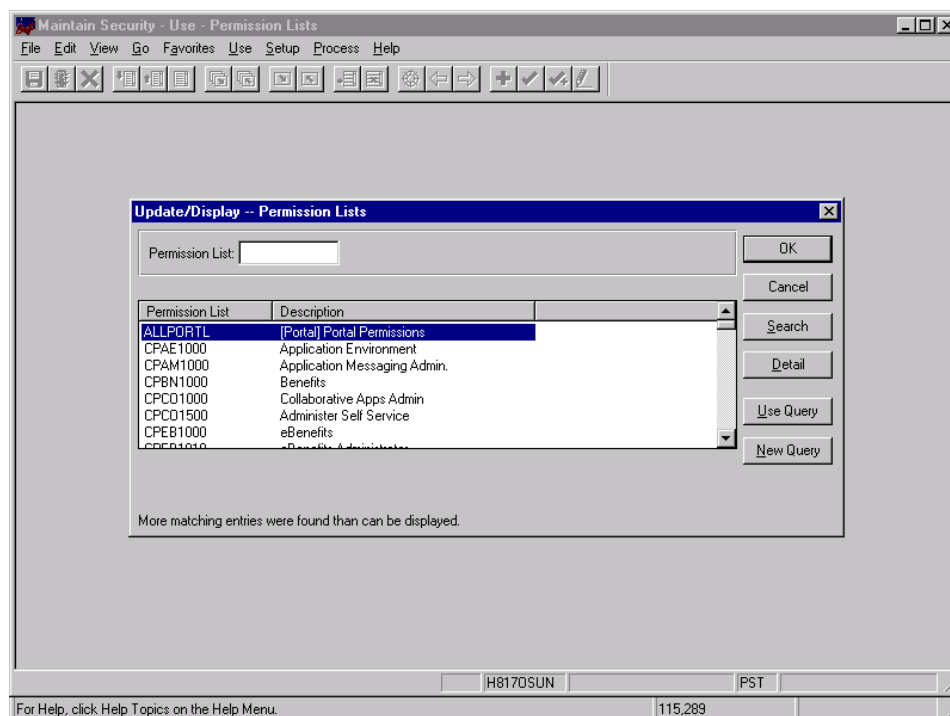
コンポーネント・インタフェース・セキュリティを構成するには、次のステップを実行します。

図 C-6 コンポーネント・インタフェース・セキュリティ・オプション



1. 図 C-6 に示すように、使用メニューから、権限リスト、コンポーネント・インタフェースの順に選択し、更新/表示をクリックします。  
 図 C-7 に示すように、権限リスト・ダイアログが表示されます。

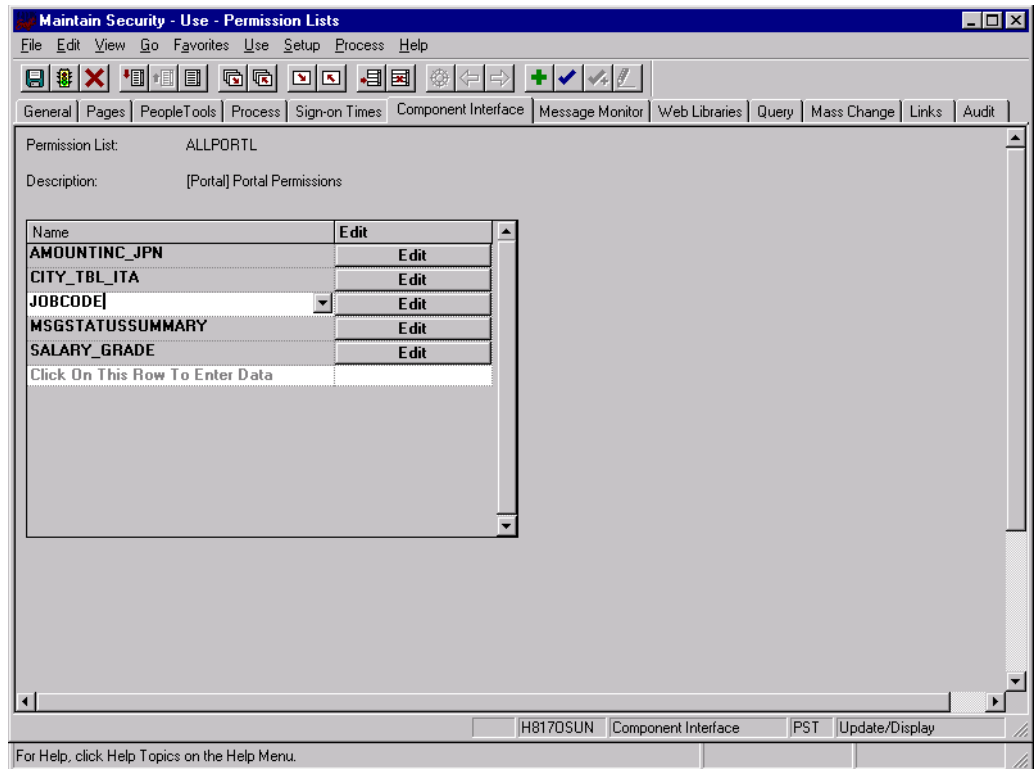
図 C-7 権限リスト・ダイアログ



- セキュリティを設定する前に、権限リストを確認する必要があります。
2. 関連する権限リストを選択し、「OK」をクリックします。  
 権限リストの詳細は、PeopleBooks のドキュメントを参照してください。  
 図 C-8 に示すように、権限リスト・ペインが表示されます。



図 C-8 権限リスト・ペイン

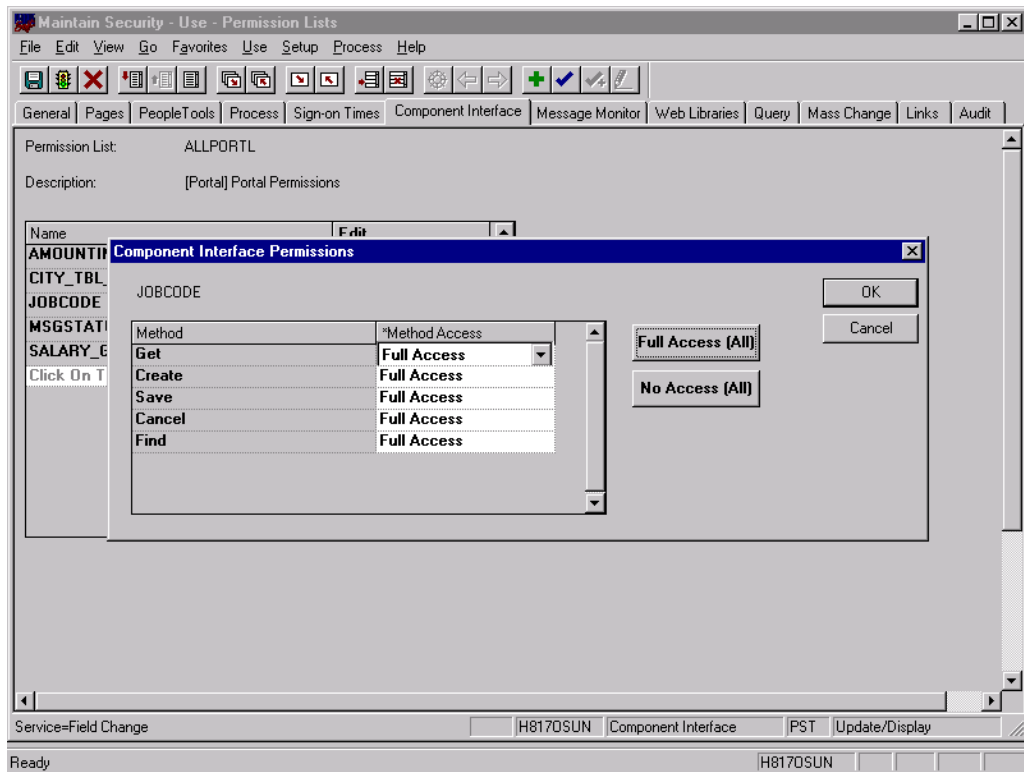


3. 作成した新規コンポーネント・インタフェースを挿入します。
4. 「編集」をクリックします。

コンポーネント・インタフェースを選択すると、ユーザー定義メソッドを含む、すべての使用可能なメソッドが表示されます。この特定の権限リストに完全アクセスまたは部分的なアクセスが含まれるようにする必要があるかを指定できます。

図 C-9 に示すように、「ALLPORTL」権限リストではすべてのメソッドに対して完全アクセスがあります。

図 C-9 「ALLPORTL」 権限リスト



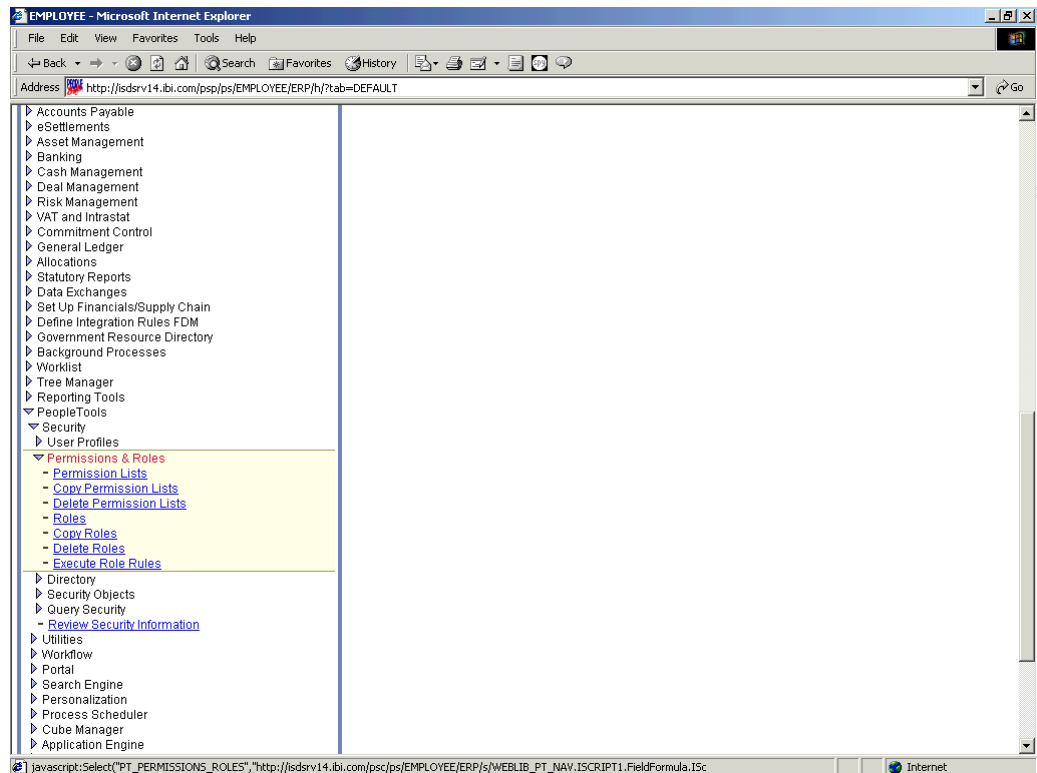
5. 希望のアクセス・レベルを選択します。
6. 「OK」をクリックします。

## C.2.2 PeopleSoft バージョン 8.4 以降用コンポーネント・インタフェースのセキュリティの構成

次の項で、PeopleSoft バージョン 8.4 以降用コンポーネント・インタフェース・セキュリティの構成方法について説明します。

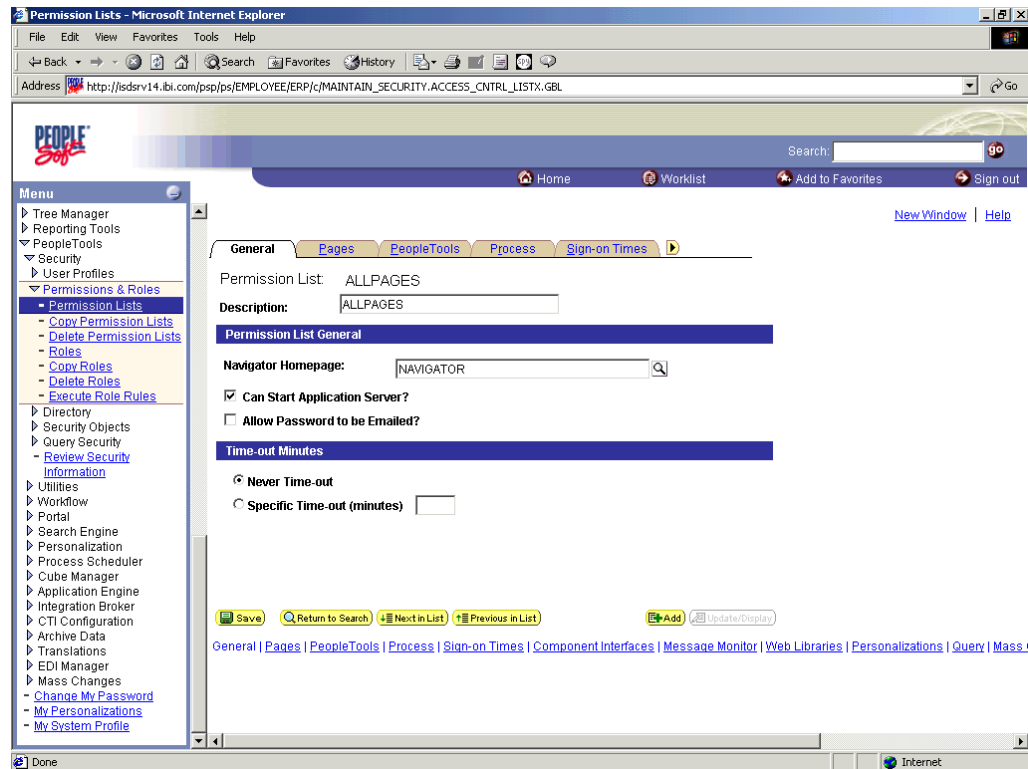
インタフェース・セキュリティを構成するには、次のステップを実行します。

図 C-10 コンポーネント・インタフェース・セキュリティの構成



1. 図 C-10 に示すように、**PeopleTools**、「セキュリティ」、ユーザー・プロファイル、権限とロールの順に展開し、権限リストをクリックします。
2. 「検索」をクリックします。  
権限リストの検索ペインが表示されます。
3. 図 C-11 に示すように、関連する権限リストを選択します。

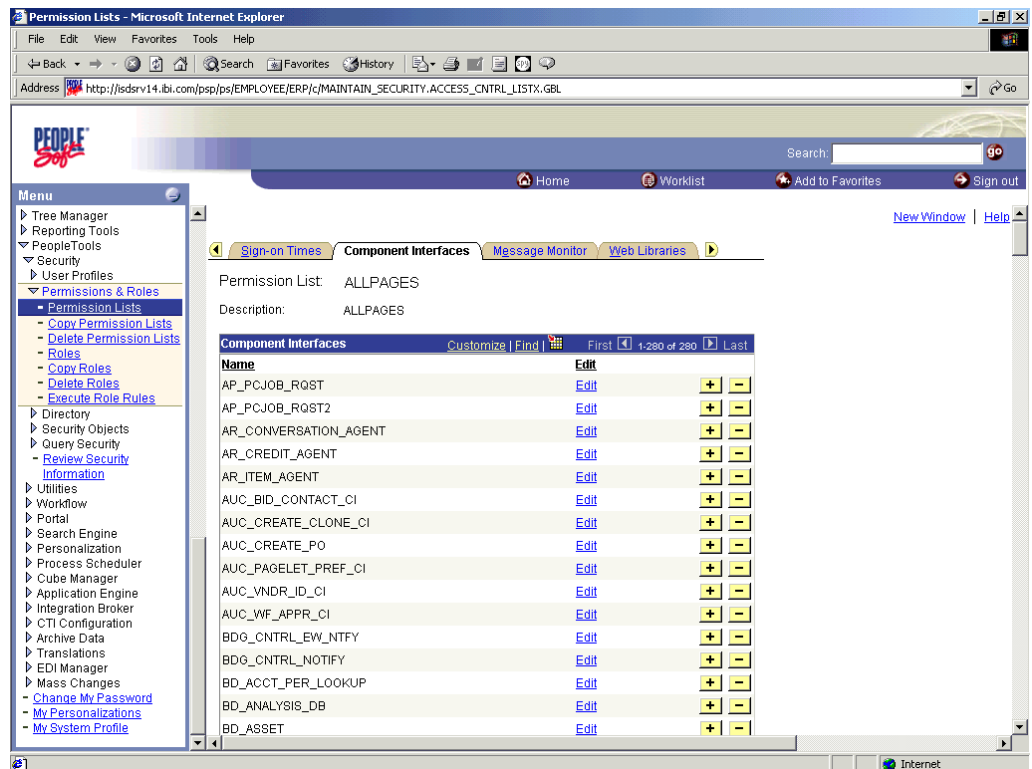
図 C-11 権限リスト・ペイン



4. サインオン回数タブの横にある右矢印をクリックします。

☒ C-12 に示すように、「コンポーネントインタフェース」タブが表示されます。

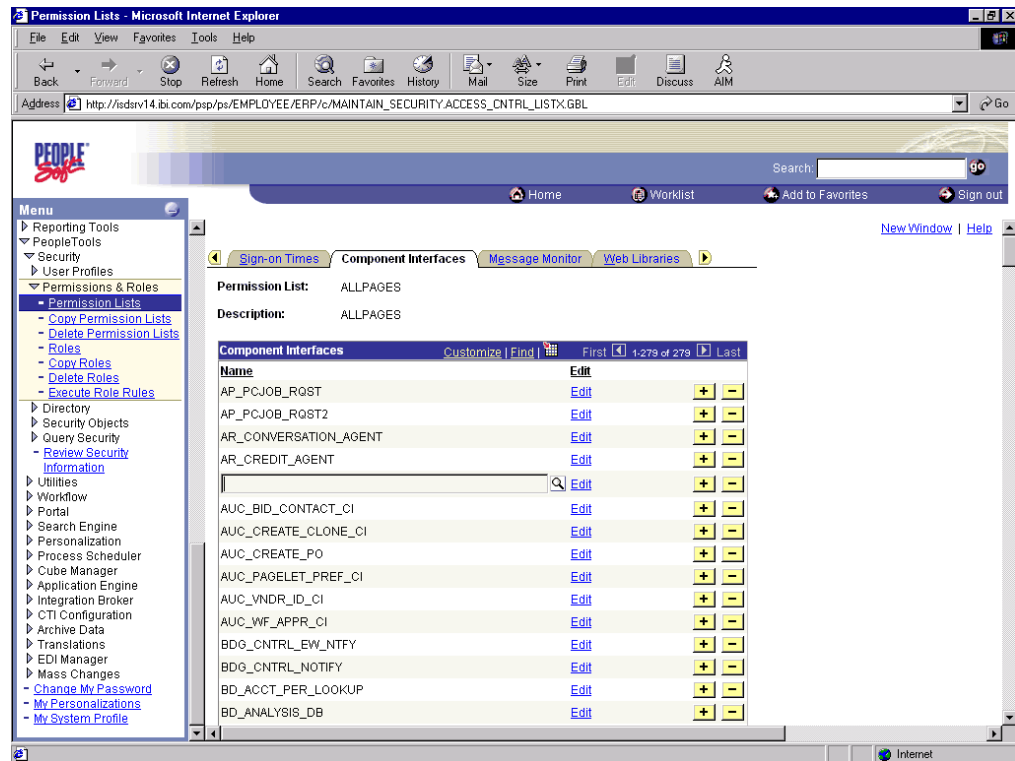
図 C-12 「コンポーネント インターフェイス」 タブ



5. 「コンポーネント インターフェイス」 タブをクリックします。
6. 「コンポーネント インターフェイス」 リストに新規の行を追加するには、「+」をクリックします。

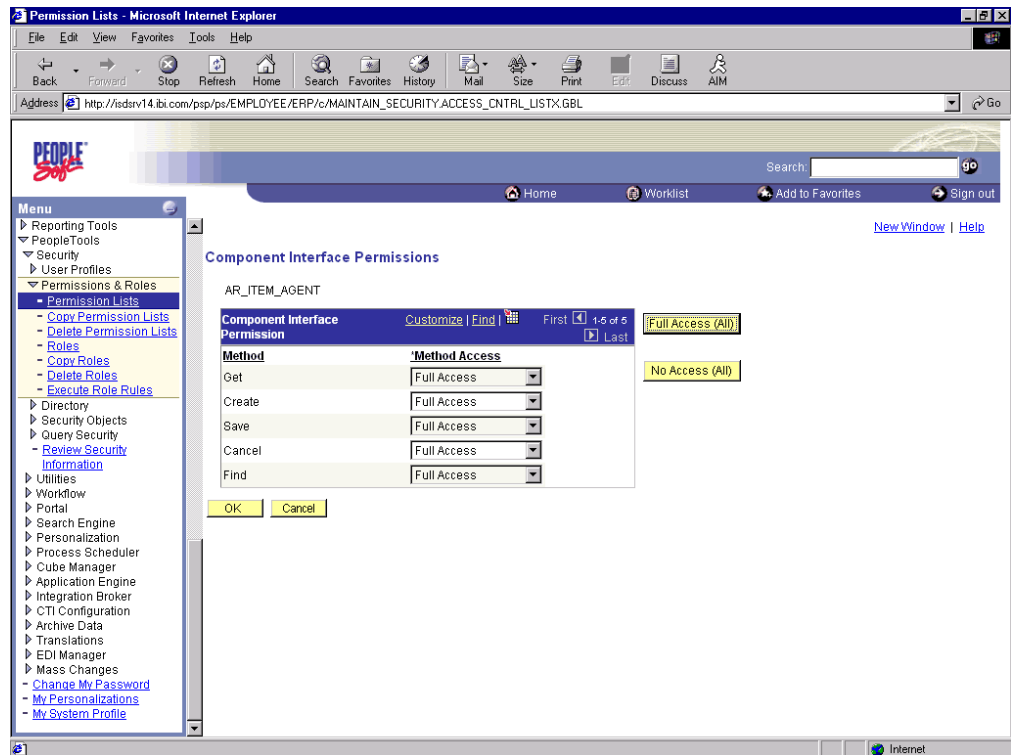
図 C-13 に示すように、表示されるフィールドにコンポーネント・インターフェースの名前を入力します。

図 C-13 コンポーネント・インタフェースの「名前」フィールド



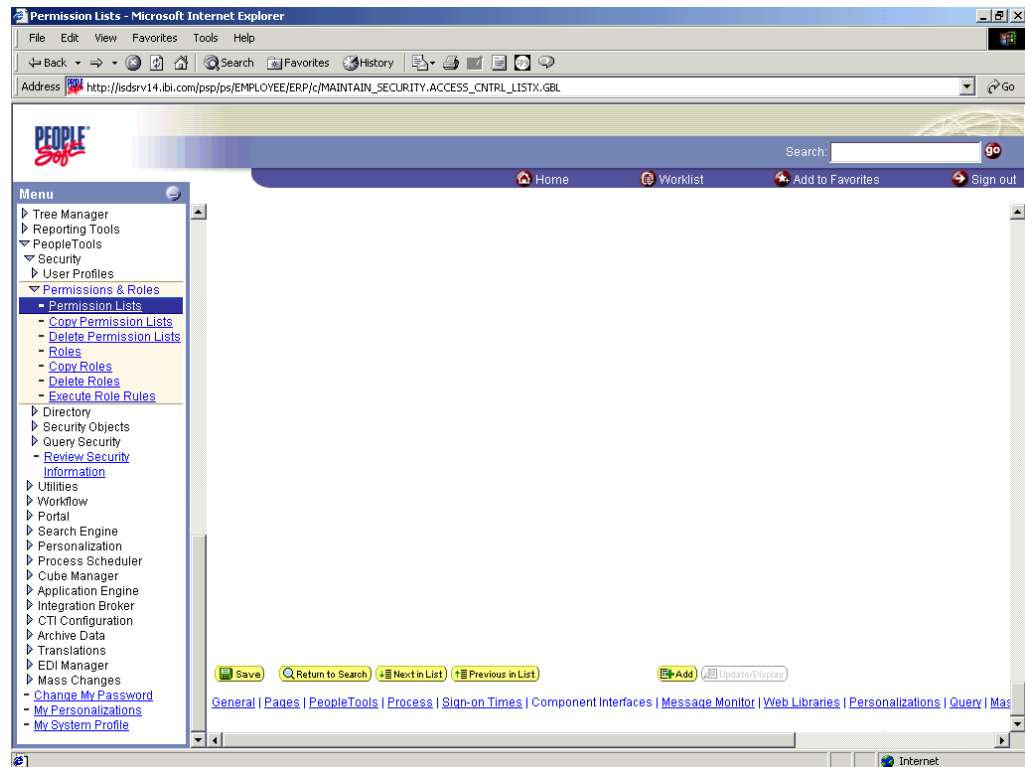
7. コンポーネント・インタフェースの名前を入力し、「編集」をクリックします。  
☒ C-14 に示すように、この例ではコンポーネント・インタフェース「AR\_ITEM\_AGENT」を使用しています。

図 C-14 コンポーネント・インタフェースの権限ウィンドウ



8. リストから、各メソッドの希望のアクセス・レベルを選択します。
9. 「OK」をクリックします。  
☒ C-15 に示すように、権限リスト・ウィンドウが表示されます。

図 C-15 権限リスト・ウィンドウ



10. 右ペインで下へスクロールし、「保存」をクリックします。

### C.3 コンポーネント・インタフェースのテスト

Oracle Application Adapter for PeopleSoft は、PeopleSoft メタデータおよびコンポーネント・インタフェースを使用するため、新規または変更されたコンポーネント・インタフェースに対応できます。アダプタでは、論理的および有効であること以外に、コンポーネント・インタフェースに関する想定は行われません。各コンポーネント・インタフェースは、アダプタのソースとして使用される前にテストされる必要があります。

ユーザーまたは PeopleSoft のアップグレードによって、基になるアプリケーションが変更され、それによりコンポーネント・インタフェースが無効になった場合、アダプタによって使用される前に無効なコンポーネント・インタフェースを修復する必要があります。

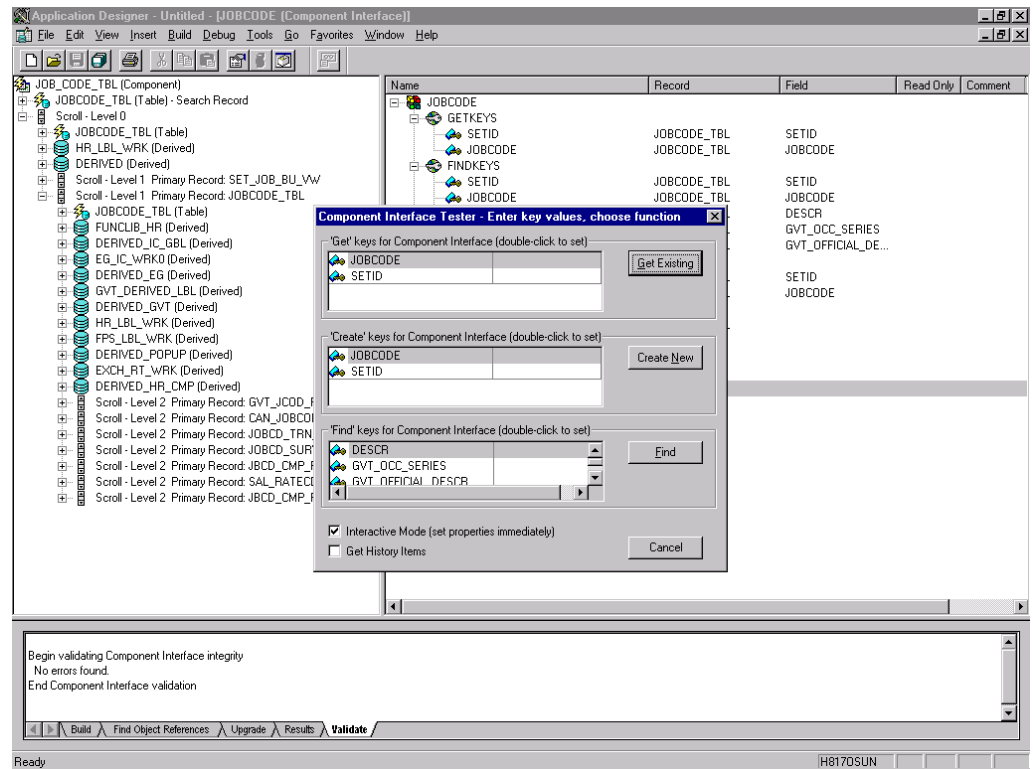
コンポーネント・インタフェースをテストするには、次のステップを実行します。

1. アプリケーション・デザイナーで、「ツール」メニューからコンポーネント・インタフェースのテストを選択します。

図 C-16 に示すように、コンポーネント・インタフェースのテスター・ダイアログが表示されます。



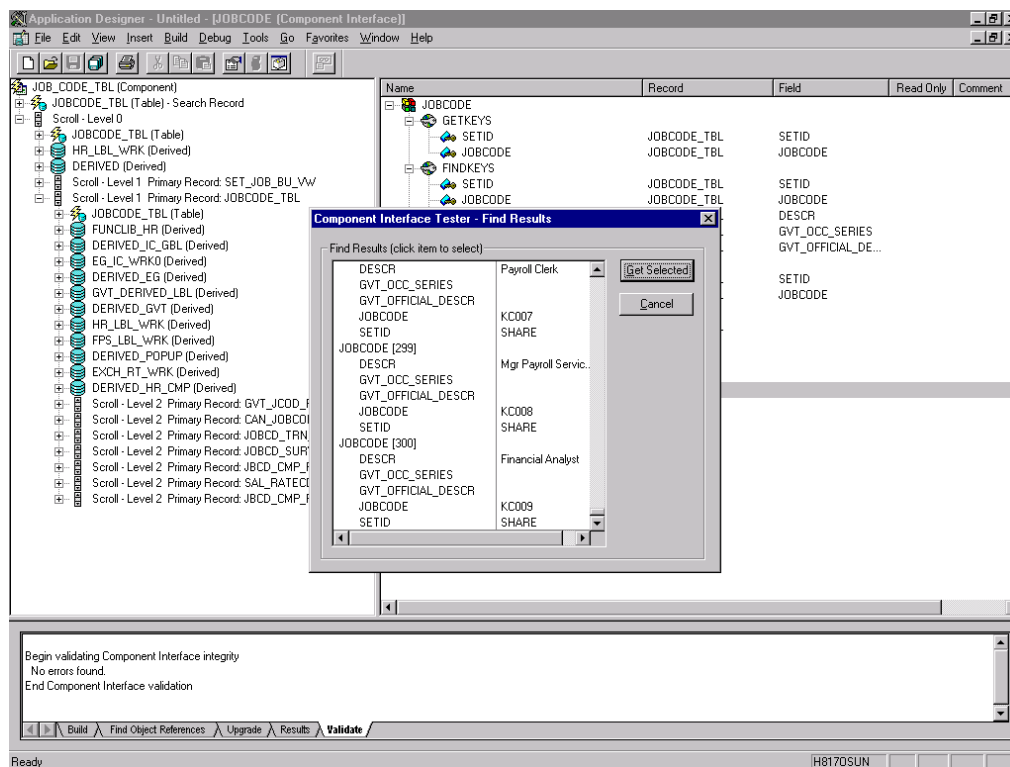
図 C-16 コンポーネント・インタフェースのテスター・ダイアログ



2. 必要に応じて、コンポーネント・インタフェースのテスター・ダイアログをクリックして、前面に出します。
3. 次のいずれかのメソッドを使用して、コンポーネント・インタフェースをテストします。
  - Find メソッドを使用してコンポーネント・インタフェースをテストするには、「検索」をクリックします。

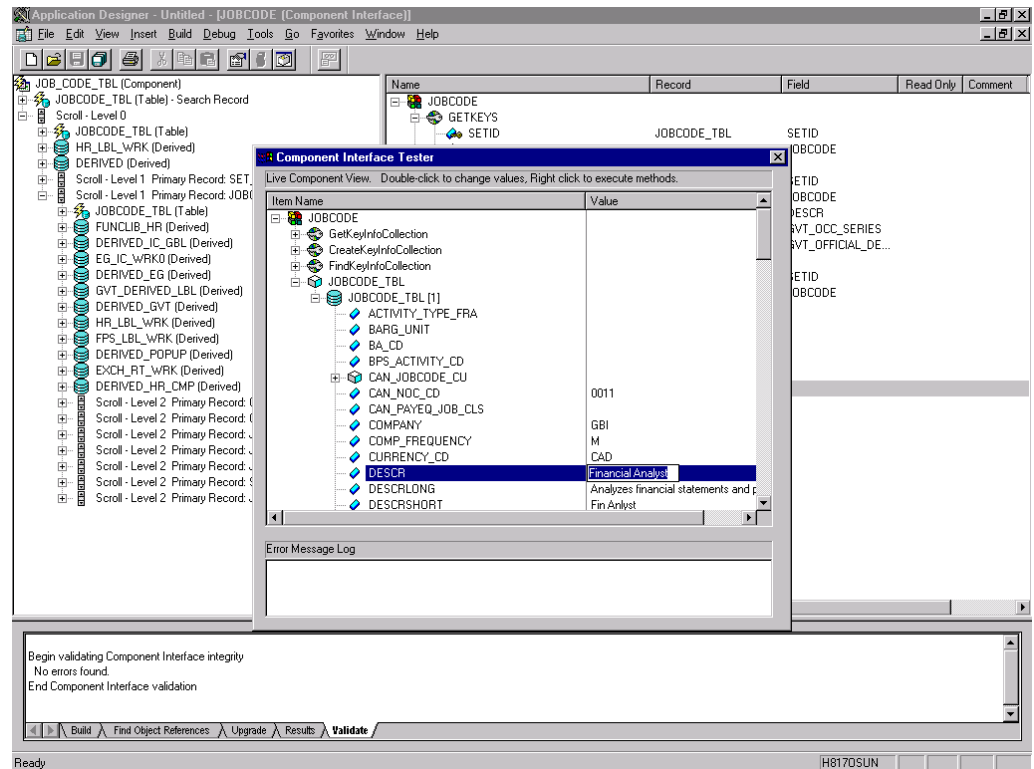
図 C-17 に示すように、基になるコンポーネントに該当するすべてのエントリがコンポーネント・インタフェースのテスター - 検索結果ダイアログに表示されます。エントリ数が 300 を超える場合はメッセージが表示されます。

図 C-17 コンポーネント・インタフェースのテスター - 検索結果ダイアログ



- 検索結果ダイアログの左ペインで、フィールドを1つ選択します。
- この特定のフィールドに関連するデータを表示するには、**選択したアイテムを取得**をクリックします。  
☐ C-18 に示すように、検索結果ダイアログが表示されます。

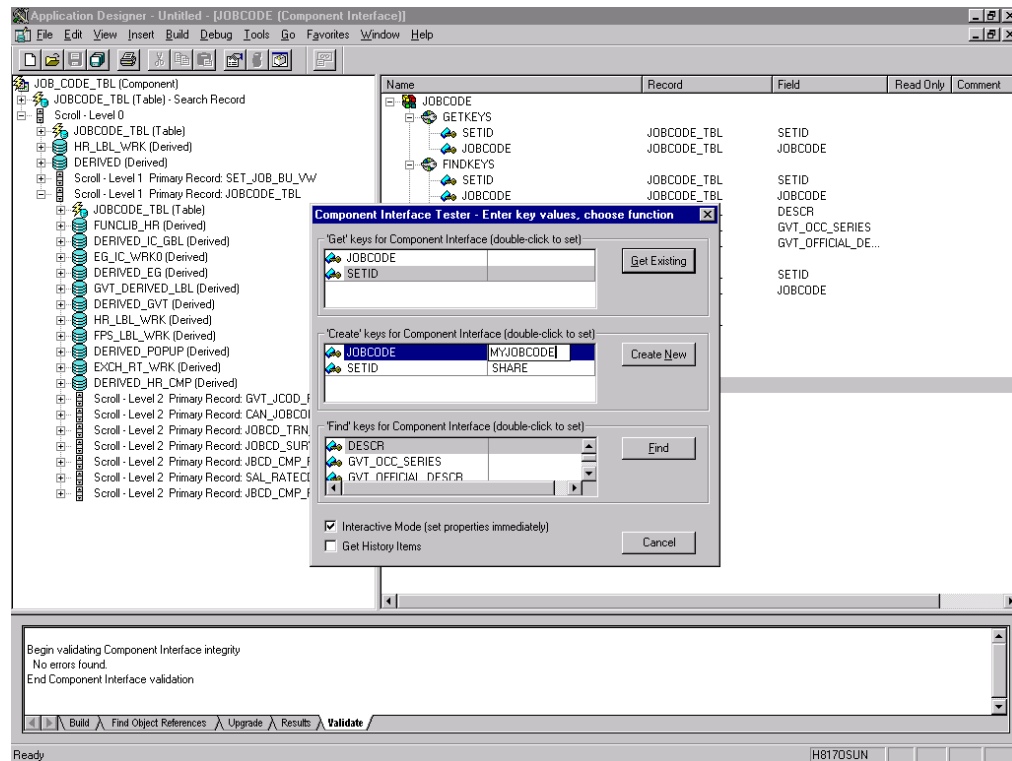
図 C-18 検索結果ダイアログ



- セキュリティ設定で許可されている場合、各フィールドの値を変更できます。
4. Get メソッドを使用してコンポーネント・インタフェースをテストするには、次のステップを実行します。
    - a. 既存のキーを入力します (1 つまたは複数)。
    - b. 既存アイテムの取得をクリックします。
 

入力したキーの公開済プロパティが表示されます。更新アクセスが指定されている場合、値を変更できます。
- または、図 C-19 に示すように、Create メソッドを使用してテストすることもできます。

図 C-19 コンポーネント・インタフェースのテスター・ダイアログ

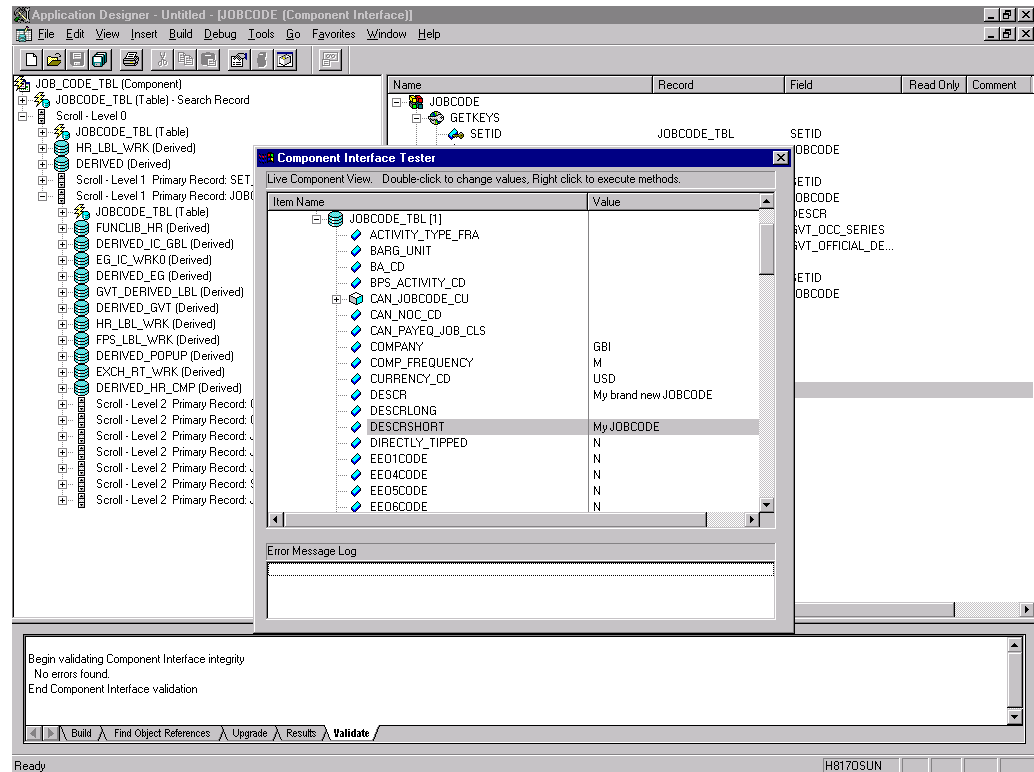


次のステップを実行します。

- a. すべての必要なキー値を入力します。
- b. **新規作成**をクリックします。

Create キーに有効な値を入力すると、[図 C-20](#) に示すように、表の名前およびデフォルト値の展開後、ペインに **JOBCODE** データが表示されます。

図 C-20 JOB CODE データ



この時点でフィールドを変更できます。変更内容はコンポーネントの基になるビジネス・ロジックに対して検証されます。

c. 変更が完了したら、ペインの最上部のアイテムを右クリックします。

5. 変更内容を保存するには、「保存」をクリックします。

レコードの作成に使用されたキーは、Get メソッドとともにデータの表示に使用できます。次の例に示すように、追加されたデータは、PeopleSoft コンポーネントで表示できます。有効日はデフォルト値の1つです。

これで、コンポーネント・インタフェースのテストが完了しました。コンポーネント・インタフェースを使用する前に、API を生成する必要があります。詳細は、付録 A 「コンポーネント・インタフェース API の生成」を参照してください。



---

---

## PeopleSoft インテグレーション・ブローカーの使用

この付録では、PeopleSoft 提供のファイル出力インタフェースを使用して、PeopleSoft インテグレーション・ブローカー (リリース 8.4) および PeopleSoft アプリケーション・メッセージング (リリース 8.1) を構成およびテストする方法について説明します。PeopleSoft リリース 8.1 では、メッセージング・アーキテクチャはアプリケーション・メッセージングと呼ばれ、アプリケーション・メッセージング・ゲートウェイが含まれます。リリース 8.4 では、メッセージング・アーキテクチャはインテグレーション・ブローカーと呼ばれ、インテグレーション・ゲートウェイが含まれます。このセクションでは、リリース特定ではない問題を扱う場合、リリース 8.4 の用語を使用します。リリース特定の問題の場合は、各リリース特定の用語を使用します。

---

---

**注意:** この項は、PeopleSoft ドキュメントを代用するものではありません。PeopleSoft メッセージングおよびインテグレーション・ブローカーに関する完全情報および最新情報は、PeopleSoft システムの *PeopleSoft オンライン・ライブラリ* を参照してください。

---

---

この付録の内容は次のとおりです。

- [D.1 項「PeopleSoft インテグレーション・ブローカー」](#)
- [D.2 項「PeopleSoft リリース 8.1 でのアプリケーション・メッセージングの構成」](#)
- [D.3 項「メッセージ用の PeopleCode の表示」](#)
- [D.4 項「インテグレーション・ブローカーのテスト」](#)
- [D.5 項「アウトバウンド同期メッセージの使用」](#)
- [D.6 項「PeopleTools バージョン 8.48 以降を使用したイベント生成」](#)

### D.1 PeopleSoft インテグレーション・ブローカー

PeopleSoft インテグレーション・ブローカーは、XML ファイルを使用した外界との通信用メカニズムを提供します。通信は、異なる PeopleSoft アプリケーション間または PeopleSoft とサード・パーティ・システムとの間で発生します。

データをサブスクライブするには、サード・パーティ・アプリケーションは、使用可能な PeopleSoft コネクタを使用、またはカスタム構築されたコネクタをインテグレーション・ゲートウェイに追加することにより、PeopleSoft によってポストされる XML メッセージを受け入れ、処理します。このトピックでは主に、提供されているファイル出力コネクタを使用した PeopleSoft システムからサード・パーティ・アプリケーションへのアウトバウンド非同期メッセージの公開について説明します。アウト

バウンド同期メッセージの詳細は、D-26 ページ「アウトバウンド同期メッセージの使用」を参照してください。

メッセージを送信するには、様々な内部構造およびプロセスを適切に構成する必要があります。次の記述は、たいていの場合リリースに特定されません。リリース 8.1 と 8.4 間の差異の詳細は、他のトピックで説明します。

- メッセージ

メッセージは、XML に記述されるデータ用のコンテナです。レコードおよびフィールドなど、基本的な構造情報が含まれます。XML ファイルを送信するには、メッセージがアクティブ・ステータスである必要があります。

- メッセージ・チャンネル

メッセージ・チャンネルは、レコードを論理グループに構造化するためのメカニズムです。各メッセージは、1 つのメッセージ・チャンネルにのみ属します。メッセージが配信されるには、メッセージ・チャンネルがアクティブ (実行) ステータスである必要があります。

リリース 8.1 では、メッセージ・チャンネルで事前ルーティング・インストラクションも提供されるため、メッセージを処理するメッセージ・ノードを指定できます。各メッセージ・チャンネルは複数のメッセージ・ノードにメッセージをルーティングできます。

- メッセージ・ノード

メッセージ・ノードの機能は 8.1 と 8.4 では異なります。

8.1 では、メッセージ・ノードの主な機能はメッセージを受信するゲートウェイを指定することです。

リリース 8.4 では、メッセージ・チャンネルに含まれていた機能の大部分はメッセージ・ノードに移動しました。これにより、リリース 8.1 よりもより柔軟性が提供されます。メッセージ・ノードで処理可能なメッセージを指定できます。また、ゲートウェイ・コネクタは、メッセージ・ノードにバインドされます。各メッセージ・ノードは 1 つのコネクタにのみメッセージをルーティングできます。

- インテグレーション・ゲートウェイ

インテグレーション・ゲートウェイは、PeopleSoft Web サーバー上で実行されるプログラムで、PeopleSoft とサード・パーティ・システム間の物理的なハブです。

- ターゲット・コネクタ / ハンドラ

コネクタは、インテグレーション・ゲートウェイの制御化で実行される Java プログラムで、XML ファイルの最終出力先を制御します。PeopleSoft リリース 8.4 には、HTTP、FTP、SMTP、JMS、POP3、および Web サーバー上のディレクトリ内にファイルを置く Simple File コネクタなど、いくつかのコネクタが装備されています。この項では、Simple File コネクタについて説明します。

- PeopleCode

PeopleCode は、複雑なアプリケーション機能の作成を可能にする、PeopleTools に付属のプログラミング・ツールです。メッセージは、特定の PeopleCode インストラクションを使用してのみ開始されます。通常、このコードは、オンライン・パネルまたはバッチ・ジョブによる新規データベース・エントリの作成などのアプリケーション・イベントによってトリガーされます。

この項の例の大部分では、PeopleSoft Enterprise Integration Point (EIP) であり、多くの PeopleSoft アプリケーションに装備されている LOCATION\_SYNC メッセージを使用しています。LOCATION\_SYNC がパッケージに含まれていない場合は、提供されているいずれかのメッセージを使用できます。



この項では、次のトピックについて説明します。

- [D.1.1 項「PeopleSoft 8.4 でのインテグレーション・ブローカーの構成」](#)

## D.1.1 PeopleSoft 8.4 でのインテグレーション・ブローカーの構成

非同期アウトバウンド・メッセージをファイル出力コネクタに送信するように PeopleSoft 8.4 を構成できます。

この項では、次のトピックについて説明します。

- [D.1.1.1 項「メッセージがアクティブであり、適切にルーティングされていることの確認」](#)
- [D.1.1.2 項「IntegrationGateway.properties ファイルの構成」](#)
- [D.1.1.3 項「インテグレーション・ゲートウェイおよびファイル出力コネクタの構成」](#)
- [D.1.1.4 項「新規のゲートウェイ・ノードの作成および構成」](#)

PeopleSoft 8.4 でアプリケーション・メッセージングを構成するには：

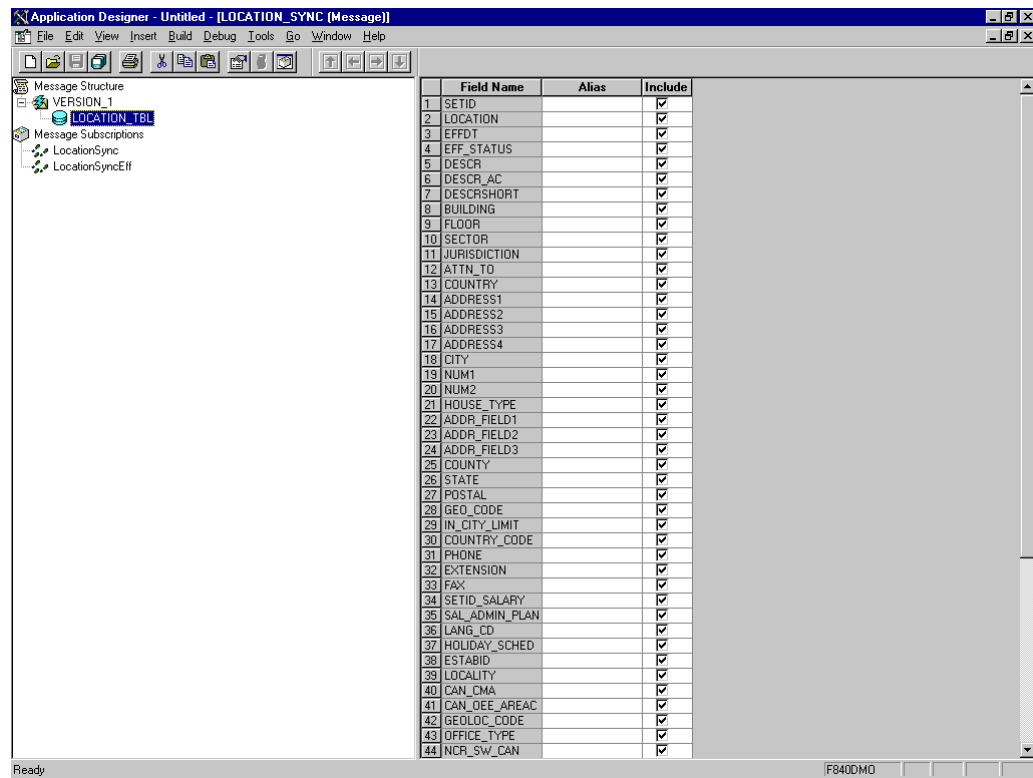
1. メッセージがアクティブで、適切なメッセージ・チャンネルにルーティングされることを確認します。
2. メッセージ・チャンネルを構成します。
3. 使用している PeopleSoft 8.4 と通信するように IntegrationGateway.properties ファイルを構成します。
4. インテグレーション・ゲートウェイおよびファイル出力コネクタを構成します。
5. 新規のゲートウェイ・ノードを作成および構成します。  
これらのタスクの詳細は、次の手順で説明します。

### D.1.1.1 メッセージがアクティブであり、適切にルーティングされていることの確認

メッセージがアクティブで、適切なメッセージ・チャンネルにルーティングされていることを確認するには：

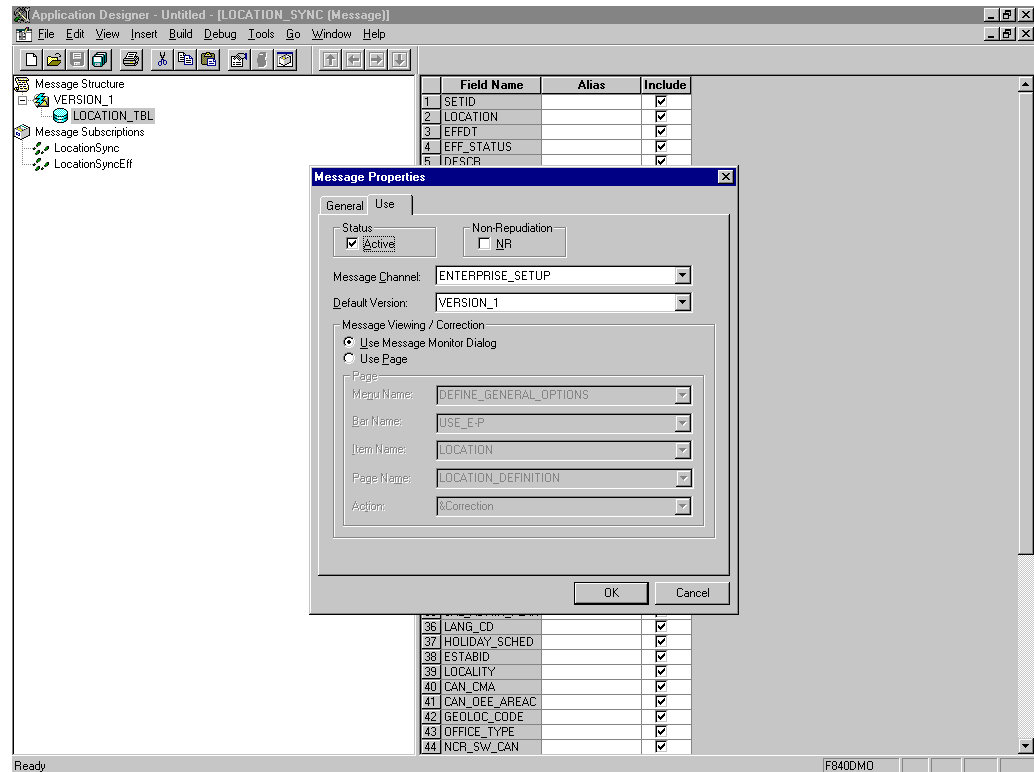
1. アプリケーション・デザイナを開きます。
2. [図 D-1](#) に示すように、「File」メニューで、「Open」を選択し、「Message」をクリックして、「LOCATION\_SYNC」メッセージを開きます。

図 D-1 LOCATION\_SYNC メッセージ



3. メッセージに含まれているフィールドを表示するには、「LOCATION\_TBL」を強調表示します。
4. 「LOCATION\_TBL」を右クリックし、「Properties」を選択します。  
☒ D-2 に示すように、「Message Properties」ダイアログが表示されます。

図 D-2 「Message Properties」 ダイアログ



5. 「Use」タブを選択します。

6. 「Active」チェック・ボックスが選択されていることを確認します。

メッセージがメッセージ・チャネルの ENTERPRISE\_SETUP にルーティングされ、デフォルト・メッセージ・バージョンは「VERSION\_1」となります(メッセージには複数のバージョンが存在する場合があります)。

7. 「OK」をクリックし、メッセージを保存します。

これで、メッセージがアクティブで、適切にルーティングされていることを確認できました。

### D.1.1.2 IntegrationGateway.properties ファイルの構成

IntegrationGateway.properties ファイルを構成するには:

1. 任意のエディタで IntegrationGateway.properties ファイルを開きます。
2. ファイル内で、デフォルトのアプリケーション・サーバー用の JOLT 接続文字列設定を指定するセクションを見つけます。通常、これは 75 行目付近にあり、次のような記述になっています。

```
## JOLT connect string setting for optional Default Application Server.Do NOT
specify a NODENAME.
#
# Example:
#ig.isc.serverURL=//MYSERVER:9000
#ig.isc.userid=MYUSERID
#ig.isc.password=MYPASSWORD
#ig.isc.toolsRel=8.40
```

3. 接続を指定している 4 行を非コメント化 (またはコピーおよび非コメント化) します。
4. 適切な情報を入力します。

次の例では、ツールのリリースは「8.40.09」です。

```
ig.isc.serverURL=/isdsrv14:9000
ig.isc.userid=VP1
ig.isc.password=VP1
ig.isc.toolsRel=8.40.09
```

PeopleSoft ツールのリリースは、最後の小数まで正確である必要があります。

---

**注意：** リリース 8.42 では、パスワードは暗号化されたフォーマットで格納される必要があります。PeopleSoft には、暗号化用に PSCipher.bat (UNIX 上では PSCipher.sh) と呼ばれるスクリプトが装備されています。通常、このスクリプトは IntegrationGateway.properties ファイルのパスに存在します。このスクリプトの実行方法は、PeopleSoft 提供のインストラクションに従ってください。

---

これで、IntegrationGateway.properties ファイルの構成が完了しました。

### D.1.1.3 インテグレーション・ゲートウェイおよびファイル出力コネクタの構成

インテグレーション・ゲートウェイおよびファイル出力コネクタを構成するには：

1. Web ブラウザで、PeopleSoft 8.4 アプリケーションを 4 層モードで開きます。
2. 「メニュー」ペインで、「**PeopleTools**」、「**インテグレーションブローカー**」の順に展開し、「**ゲートウェイ**」をクリックします。
3. LOCAL ゲートウェイ ID を開き、次のゲートウェイの URL を入力します。

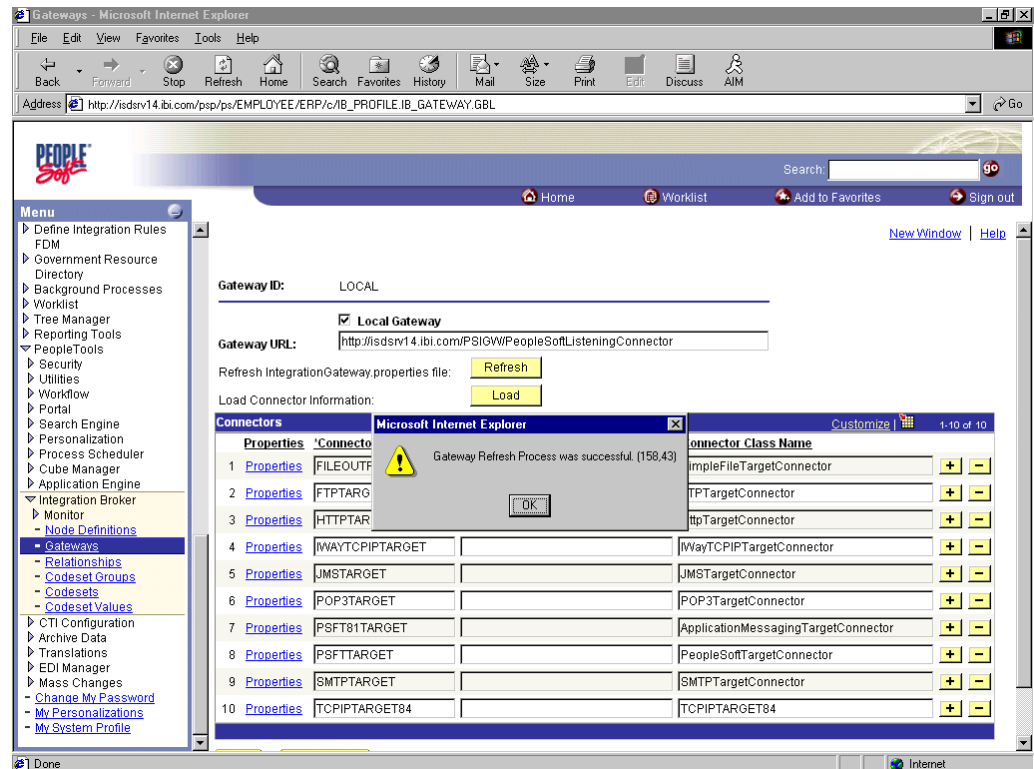
```
host name/PSIGW/PeopleSoftListeningConnector
```

host name は、PeopleSoft Web サーバーの名前です。

4. 「リフレッシュ」をクリックします。

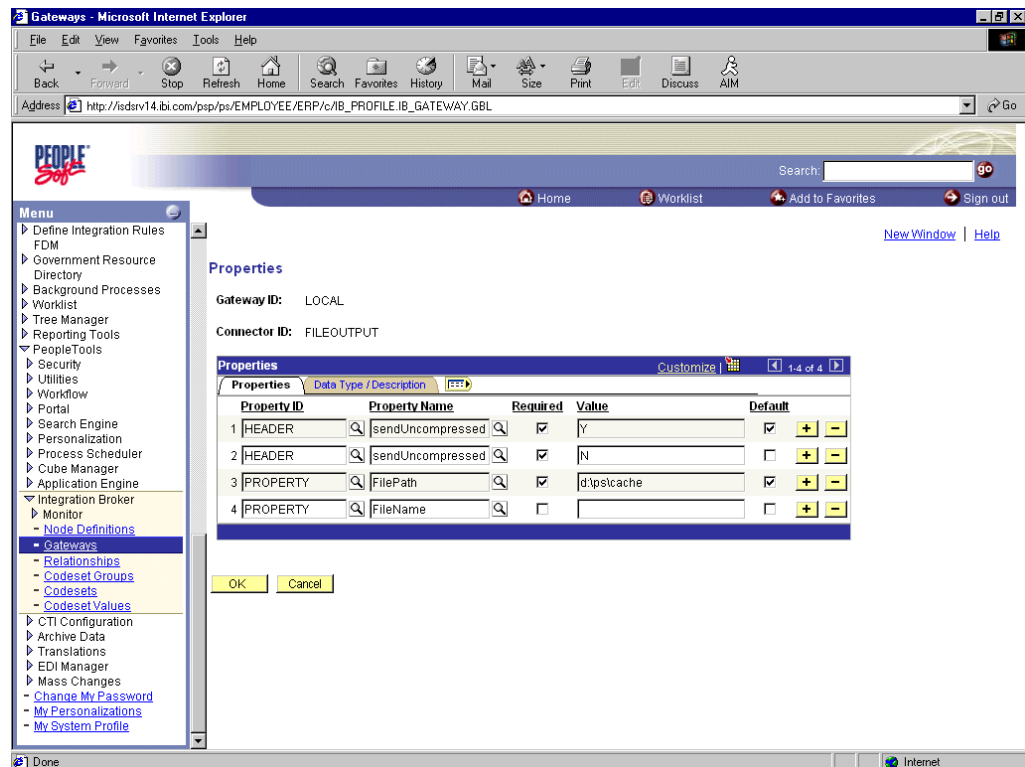
図 D-3 に示すように、リフレッシュ処理の結果を示すメッセージが表示されません。

図 D-3 リフレッシュ処理の結果を示すメッセージ



5. 「OK」をクリックし、下へスクロールし、「保存」をクリックします。  
 続行する前に保存をクリックする必要があります。
6. FILEOUTPUT コネクタ ID の「プロパティ」リンクをクリックします。  
 「FILEOUTPUT」コネクタのプロパティ・ウィンドウが表示されます。
7. デフォルト値を受け入れるか、または上書きします。  
 図 D-4 に示すように、「FilePath PROPERTY」からの c:\temp default が  
 d:\ps\cache に変更されました。

図 D-4 ゲートウェイIDの「プロパティ」ペイン



8. 「ゲートウェイ」ウィンドウに戻るには、「OK」をクリックします。
9. 下へスクロールし、「保存」をクリックします。

これで、インテグレーション・ゲートウェイおよびファイル出力コネクタの構成が完了しました。

#### D.1.1.4 新規のゲートウェイ・ノードの作成および構成

新規のゲートウェイ・ノードを作成および構成するには：

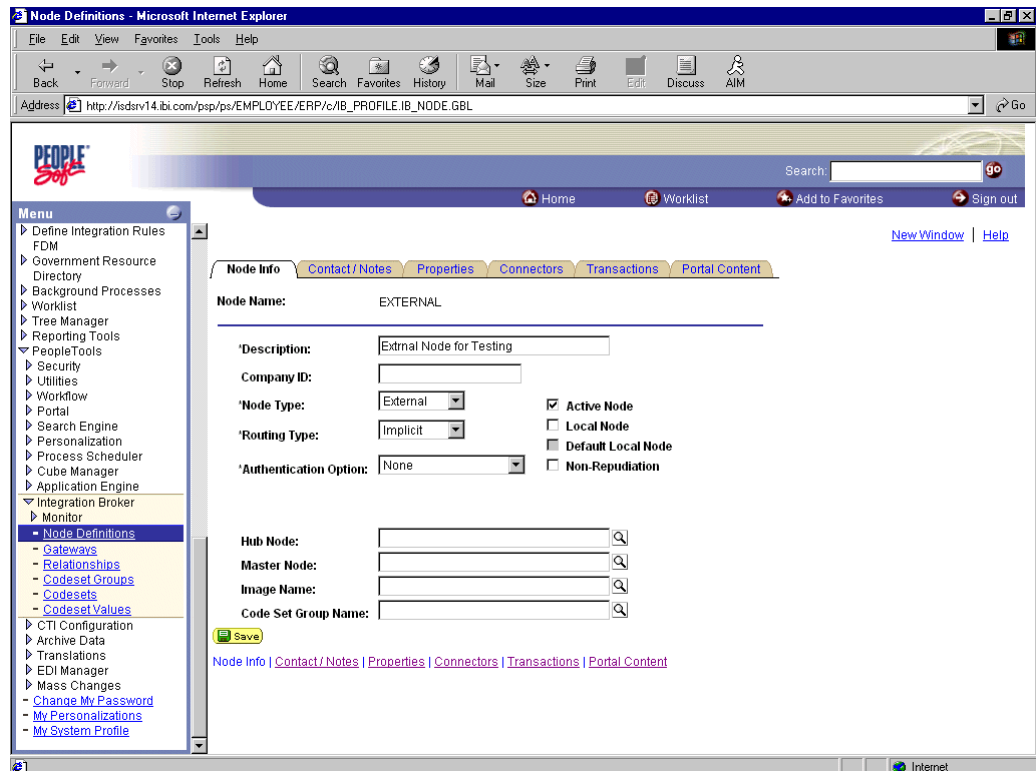
1. 「メニュー」ペインで、「PeopleTools」、「インテグレーションブローカー」の順に展開し、「ノード定義」をクリックします。
2. 「新規値の追加」タブを選択します。
3. 「ノード名」フィールドにノード名を入力します。

最初の（試用用）メッセージ・ノードは、「EXTERNAL」の名前を付けることをお勧めします。このノードを使用して構成およびメッセージの送信に成功したら、アプリケーションに適切な名前を追加のメッセージ・ノードを作成できます。

4. 「追加」をクリックします。

☒ D-5 に示すように、「ノード情報」タブが表示されます。

図 D-5 「ノード情報」タブ

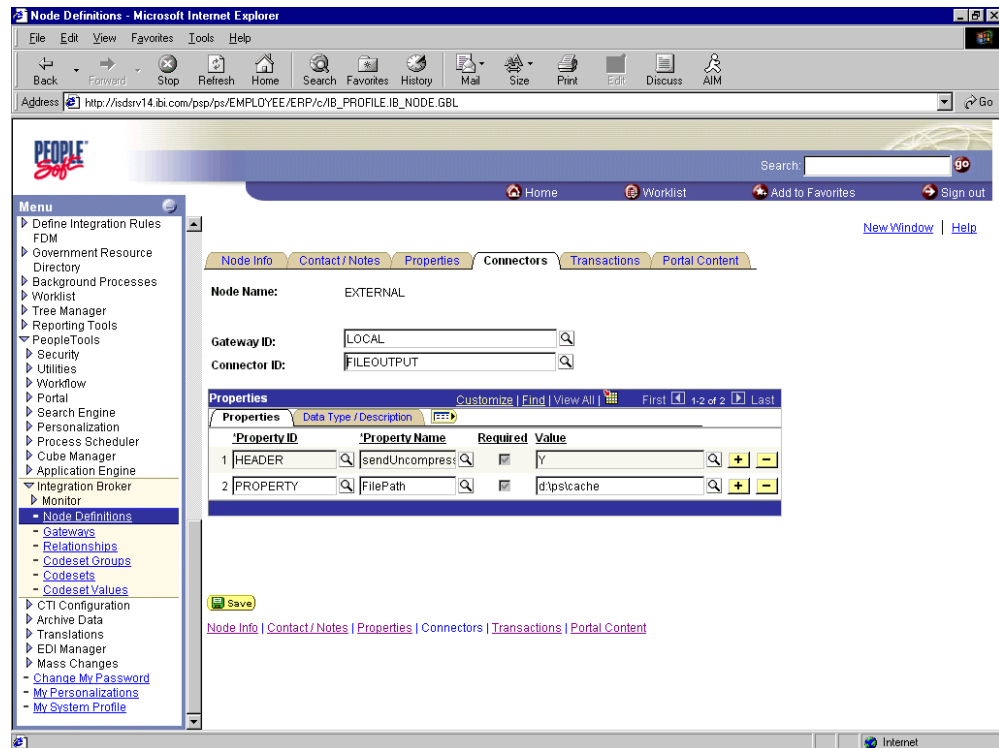


次のステップを実行します。

- a. 「説明」フィールドで、適切な説明を入力します。
  - b. 「ノードタイプ」リストから、「外部」を選択します。
  - c. 「ルーティングタイプ」リストから、「暗黙」を選択します。
5. 「コネクタ」タブを選択します。

☒ D-6 に示すように、「コネクタ」タブが表示されます。

図 D-6 「コネクタ」タブ

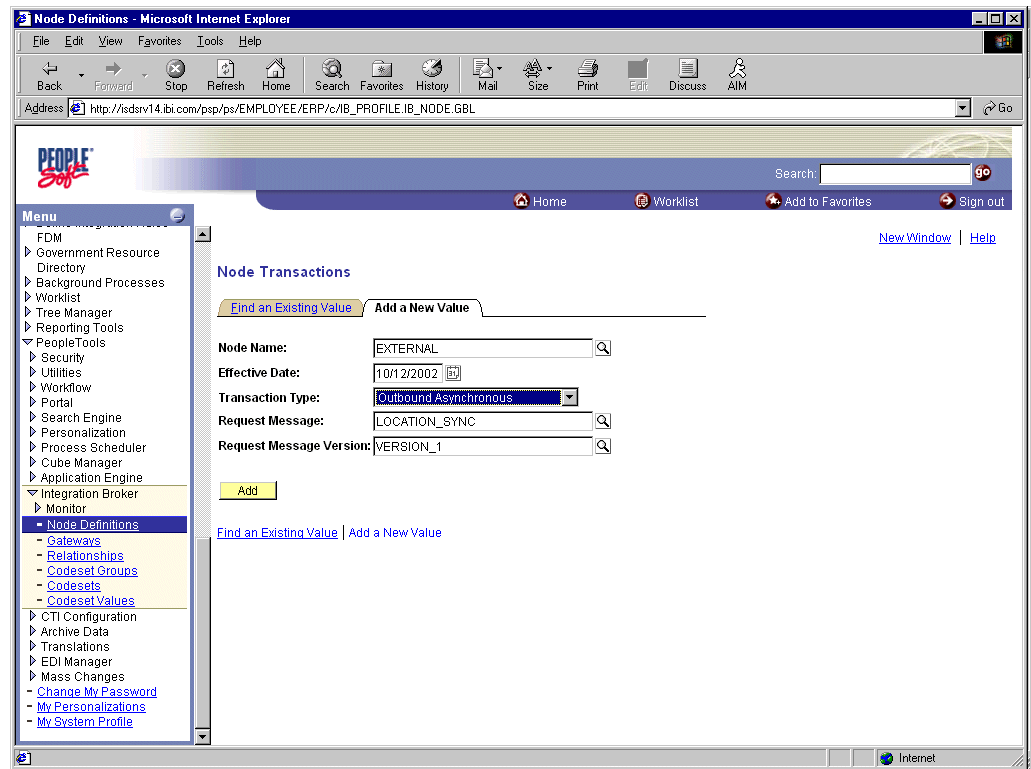


次のステップを実行します。

- a. 「ゲートウェイ ID」に「LOCAL」を指定します。
  - b. 「コネクタ ID」に「FILEOUTPUT」を指定します。
  - c. デフォルトのゲートウェイのプロパティ値を受け入れるか、または上書きします。
6. 「保存」をクリックします。
  7. ノードにメッセージをルーティングするトランザクションを指定するには、「トランザクション」タブを選択し、「トランザクションの追加」をクリックします。  
 図 D-7 に示すように、「ノード トランザクション」ペインが表示されます。



図 D-7 「ノード トランザクション」 ペイン

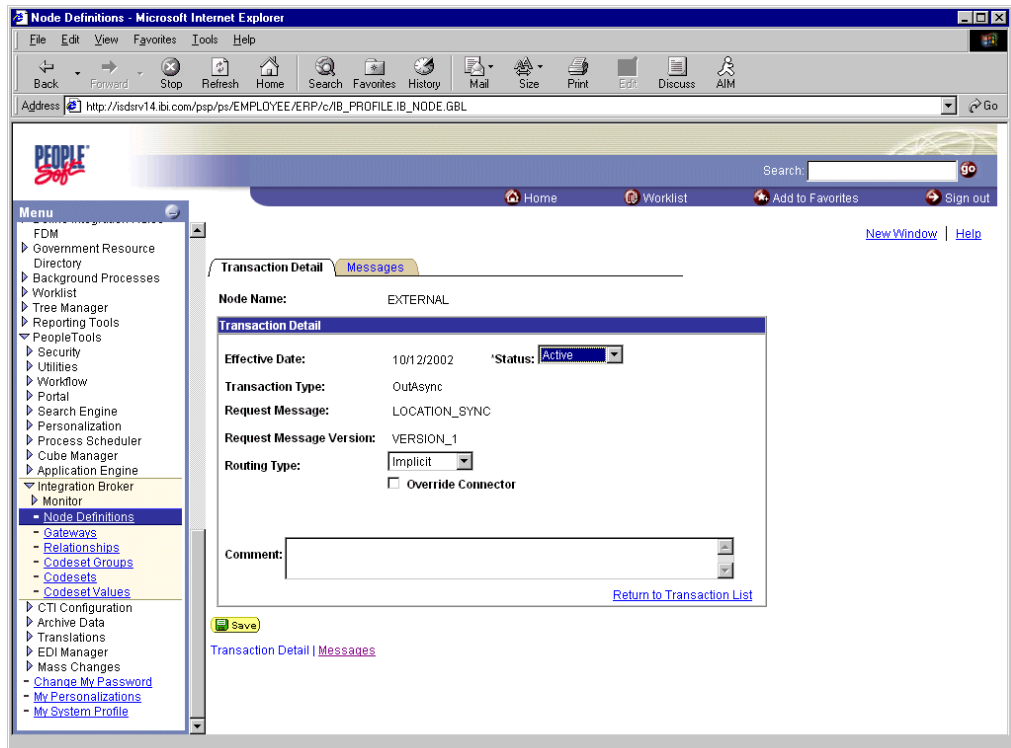


次のステップを実行します。

- a. 「トランザクションタイプ」リストから、「アウトバウンド-非同期」を選択します。
- b. 「リクエストメッセージ」フィールドで「LOCATION\_SYNC」を指定します。
- c. 「リクエストメッセージバージョン」フィールドで「VERSION\_1」を指定します。  
「リクエストメッセージバージョン」フィールドで「VERSION\_1」を指定します。
8. 「追加」をクリックします。

図 D-8 に示すように、「トランザクション詳細」ペインが表示されます。

図 D-8 「トランザクション詳細」 ペイン



次のステップを実行します。

- a. 「ルーティングタイプ」が「暗黙」であることを確認します。
- b. 「保存」をクリックし、「トランザクションリストに戻る」リンクをクリックします。
- c. データ・エントリが消失しないように、再度「保存」をクリックします。

これで、新規のゲートウェイ・ノードの作成および構成が完了しました。

詳細は、D-28 ページ「メッセージ用の PeopleCode の表示」を参照してください。

## D.2 PeopleSoft リリース 8.1 でのアプリケーション・メッセージングの構成

非同期アウトバウンド・メッセージを Simple File ハンドラに送信するように PeopleSoft 8.1 を構成できます。

この項では、次のトピックについて説明します。

- D.2.1 項「新規のメッセージ・ノードの作成および構成」
- D.2.2 項「メッセージがアクティブであり、適切にルーティングされていることの確認」
- D.2.3 項「メッセージ・チャネルの構成」
- D.2.4 項「ゲートウェイでの Simple File ハンドラの構成」

PeopleSoft 8.1 でアプリケーション・メッセージングを構成するには：

1. 新規のメッセージ・ノードを作成および構成します。

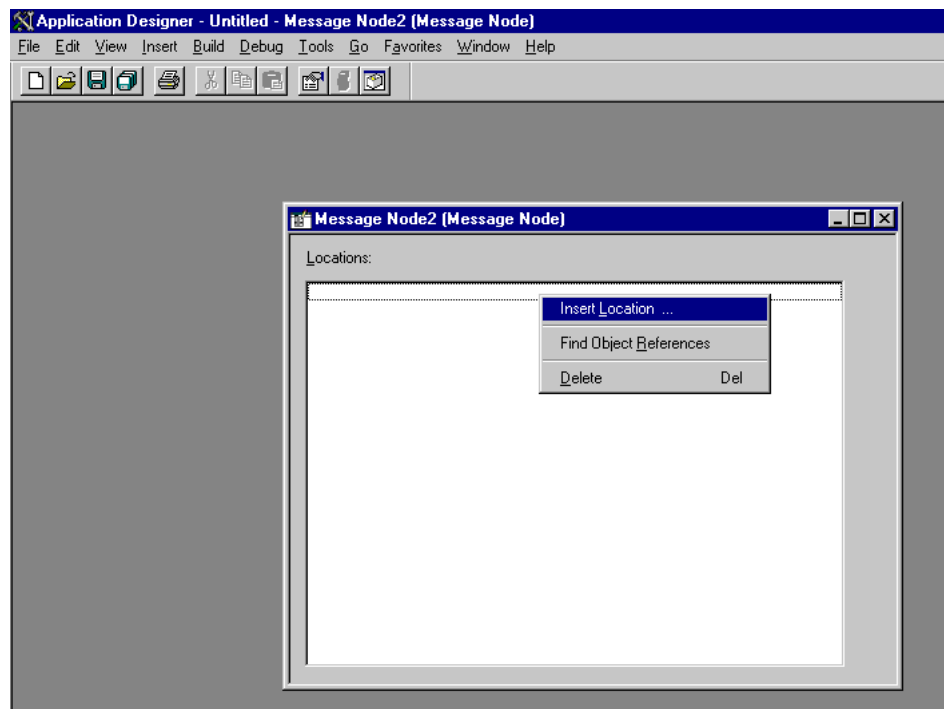
2. メッセージがアクティブで、適切なメッセージ・チャンネルにルーティングされることを確認します。
3. メッセージ・チャンネルを構成します。
4. ゲートウェイで Simple File ハンドラを構成します。  
これらのタスクの詳細は、次の手順で説明します。

## D.2.1 新規のメッセージ・ノードの作成および構成

新規のメッセージ・ノードを作成および構成するには：

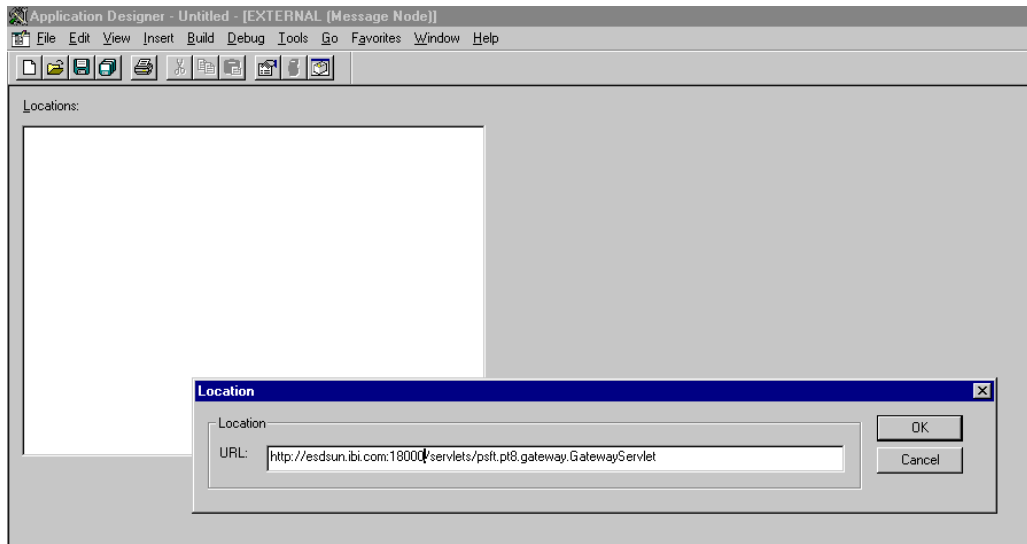
1. 「File」メニューから「New」を選択し、「Message Node」をクリックします。  
図 D-9 に示すように、「Message Node」ウィンドウが表示されます。

図 D-9 「Message Node」ウィンドウ



2. 空白部分内の任意の場所を右クリックし、「Insert Location」を選択します。  
図 D-10 に示すように、「Location」の「URL」ボックスが表示されます。

図 D-10 「Location」の「URL」ボックス



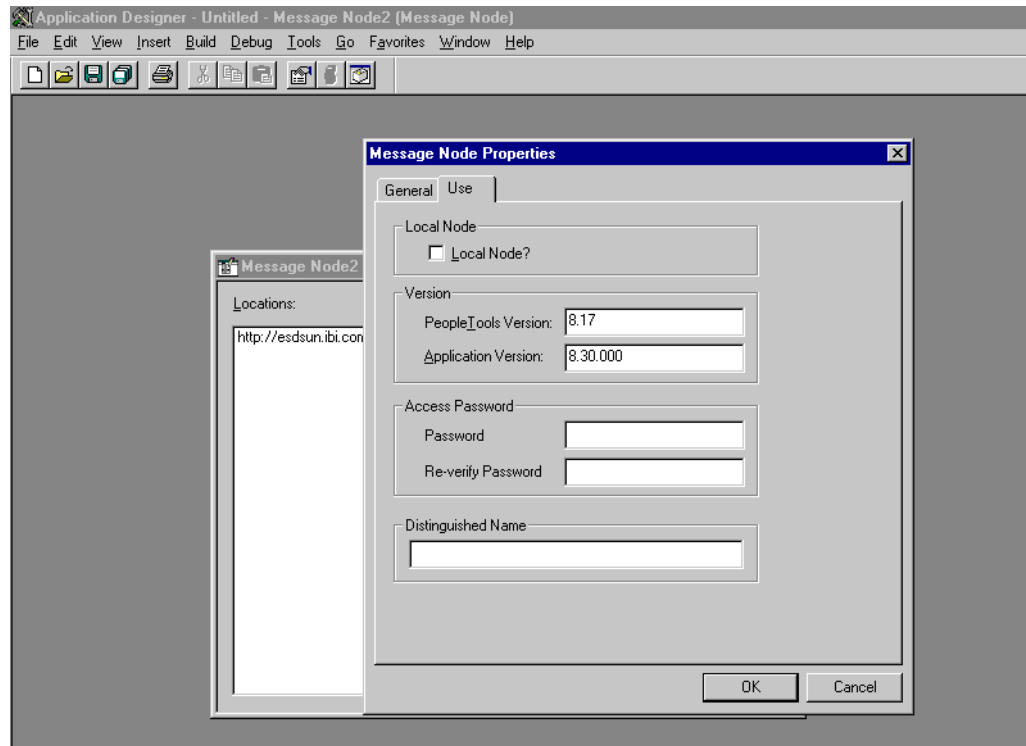
- 次に示す PeopleSoft アプリケーション・ゲートウェイ (ハンドラ・ディレクトリ) の URL を入力します。

*host name:port/servlets/psft.pt8.gateway.GatewayServlet*

ここで、*host name* は PeopleSoft Web サーバーのホスト名で、*port* はサーバーがリスニングするソケットです。*host name* の後に入力する文字は大 / 小文字が区別されます。

- 「OK」をクリックします。
- 図 D-11 に示すように、「Message Node Properties」ダイアログが表示されます。

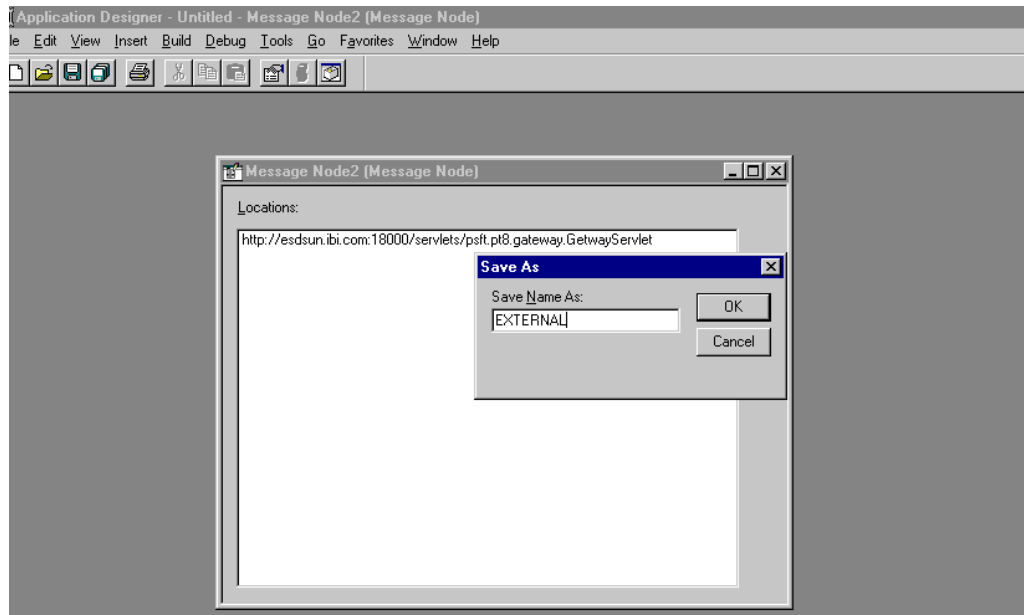
図 D-11 「Message Node Properties」 ダイアログ



次のステップを実行します。

- a. 「Use」タブを選択します。
  - b. テキスト・ボックスで、PeopleTools およびアプリケーションのバージョン番号を入力します。
  - c. 「OK」をクリックします。
6. 図 D-12 に示すように、「Save As」ダイアログが表示されます。

図 D-12 「Save As」ダイアログ



7. メッセージ・ノードを保存するには、「OK」をクリックします。

最初の ( 試用用 ) メッセージ・ノードは、「EXTERNAL」の名前を付けることをお勧めします。このノードを使用して構成およびメッセージの送信に成功したら、アプリケーションに適切な名前を追加のメッセージ・ノードを作成できます。

このメッセージ・ノードを別の PeopleSoft 環境 ( テストから QA への移行など ) に移行する場合は、PeopleSoft プロジェクトを作成し、このメッセージ・ノードをプロジェクトに挿入します。

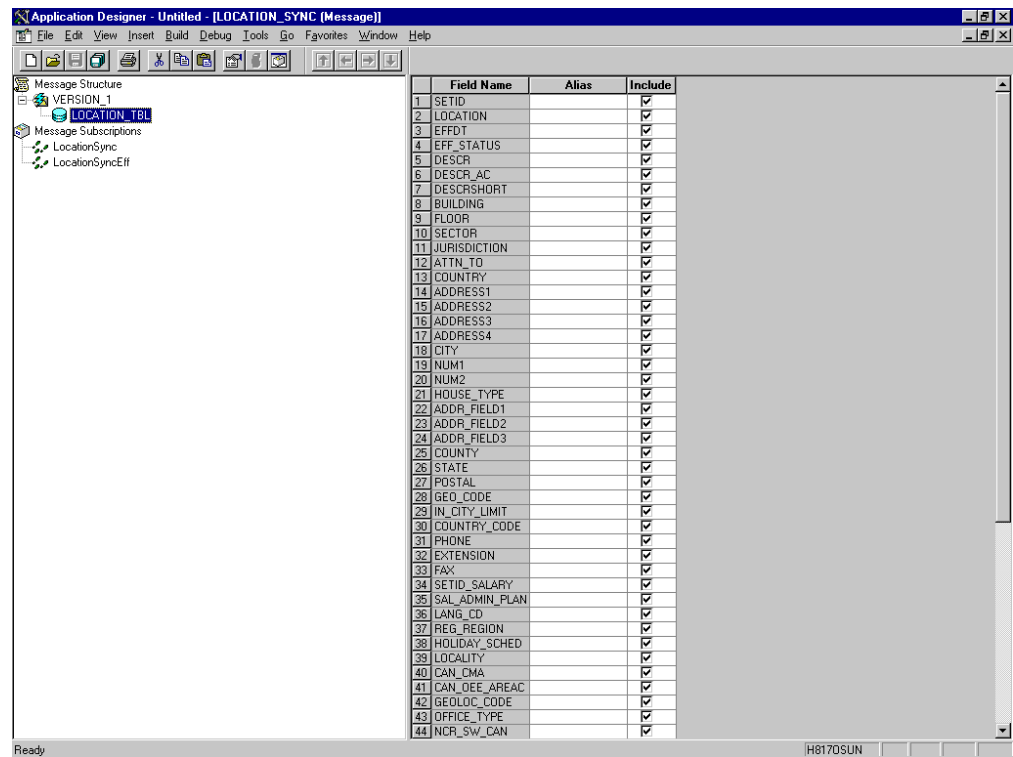
これで、メッセージ・ノードの作成および構成が完了しました。

## D.2.2 メッセージがアクティブであり、適切にルーティングされていることの確認

メッセージがアクティブで、適切なメッセージ・チャンネルにルーティングされていることを確認するには：

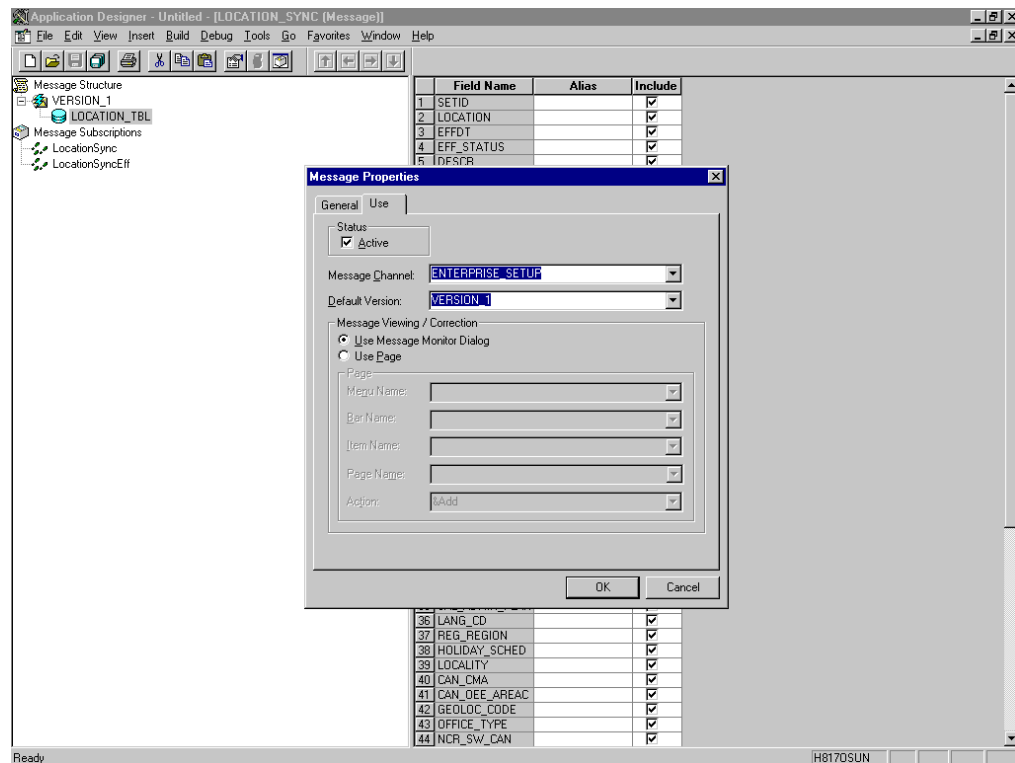
1. アプリケーション・デザイナを開きます。
2. 図 D-13 に示すように、「File」メニューで、「Open」を選択し、「Message」をクリックして、「LOCATION\_SYNC」メッセージを開きます。

図 D-13 LOCATION\_SYNC メッセージ



3. メッセージに含まれているフィールドを表示するには、「LOCATION\_TBL」を強調表示します。
4. 「LOCATION\_TBL」を右クリックし、「Properties」を選択します。  
 図 D-14 に示すように、「Message Properties」ダイアログが表示されます。

図 D-14 「Message Properties」ダイアログ



次のステップを実行します。

- a. 「Use」タブを選択します。
  - b. メッセージがアクティブであることを示す、「Status」チェック・ボックスが選択されていることを確認します。
  - c. 「Message Channel」リストから、「ENTERPRISE\_SETUP」を選択します。
  - d. 「Default Version」リストから、「VERSION\_1」を選択します (メッセージには複数のバージョンが存在する場合があります)。
5. 「OK」をクリックします。
  6. メッセージを保存します。

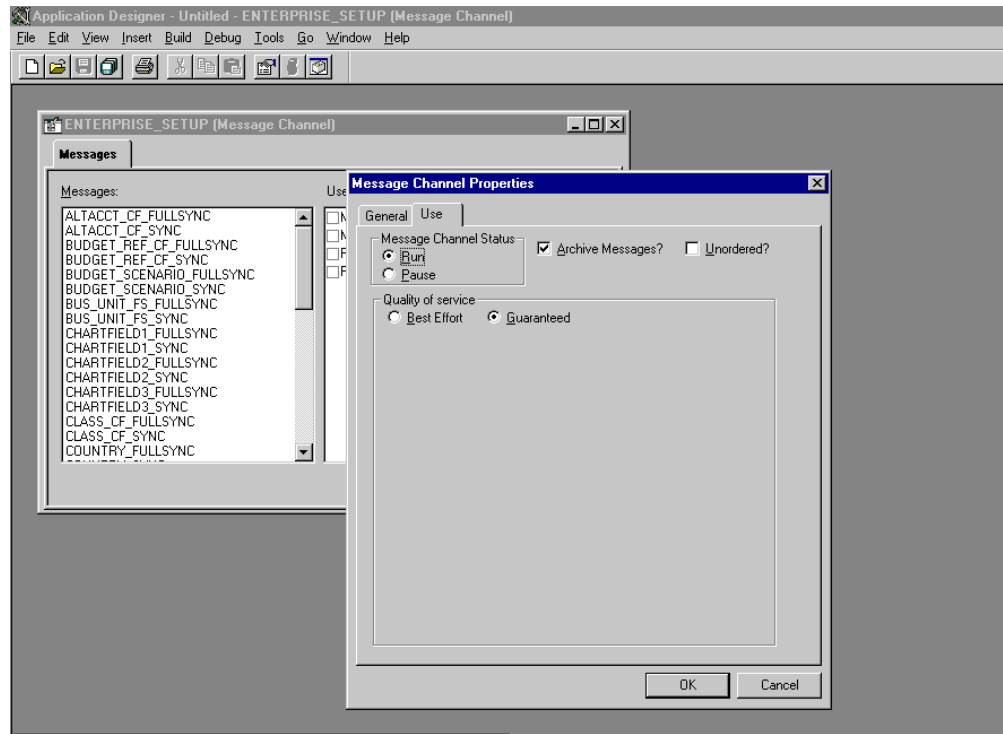
### D.2.3 メッセージ・チャネルの構成

メッセージ・チャネルを構成するには：

1. 「File」メニューから「Open」を選択し、「Message Channel」をクリックします。
2. 「ENTERPRISE\_SETUP」メッセージ・チャネルを開くには、「ENTERPRISE\_SETUP」を選択します。
3. 「ENTERPRISE\_SETUP」を右クリックし、「Properties」を選択します。  
 図 D-15 に示すように、「Message Channel Properties」ダイアログが表示されます。



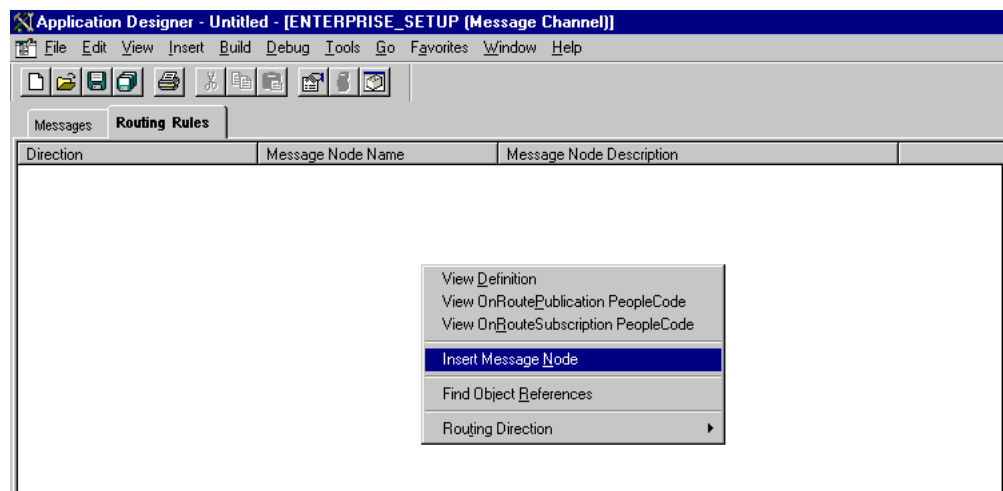
図 D-15 「Message Channel Properties」 ダイアログ



次のステップを実行します。

- a. 「Use」タブを選択します。
  - b. メッセージ・チャンネルのステータスが「Run」になっていることを確認します。
  - c. 「OK」をクリックします。
4. 左ペインで、「Routing Rules」タブを選択します。
- 図 D-16 に示すように、ペインが空白になります。

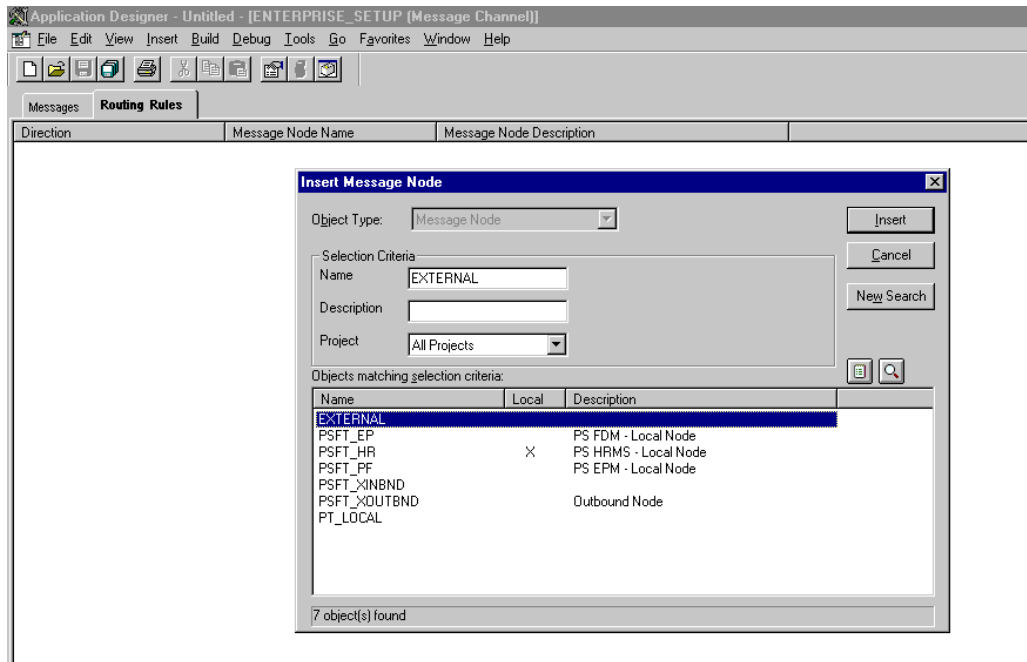
図 D-16 「Routing Rules」ペイン



5. ペインを右クリックし、「Insert Message Node」を選択します。

図 D-17 に示すように、「Insert Message Node」ダイアログが表示されます。

図 D-17 「Insert Message Node」ダイアログ

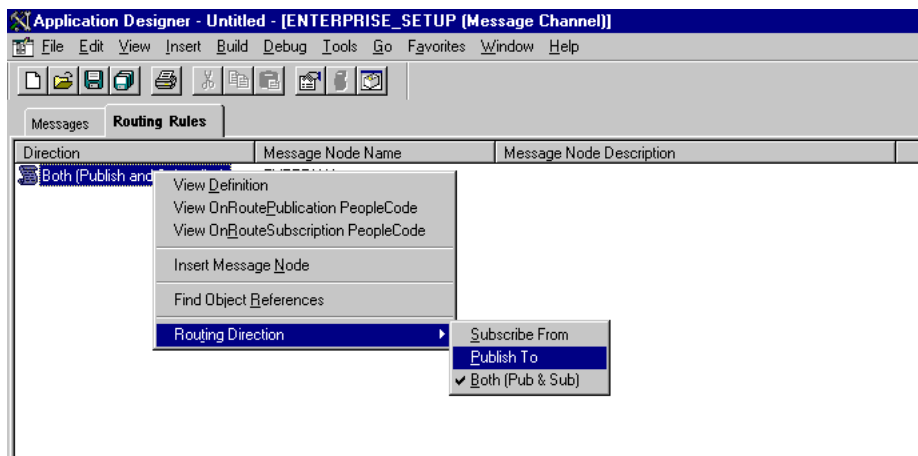


次のステップを実行します。

- a. 「EXTERNAL」など、D-13 ページ「新規のメッセージ・ノードの作成および構成」で作成したメッセージ・ノードを選択します。
  - b. 「Insert」をクリックします。
6. 「Cancel」をクリックします。

図 D-18 に示すように、「Routing Rules」タブに情報が表示されます。

図 D-18 「Routing Rules」タブ



次のステップを実行します。

- a. メッセージ・ノードを右クリックし、「Routing Direction」を選択します。

- b. 「**Routing Direction**」メニューから、「**Publish To**」を選択します。
7. メッセージ・チャンネルを保存し、必要に応じて、プロジェクト内に置きます。  
これで、メッセージ・チャンネルの構成が完了しました。

## D.2.4 ゲートウェイでの Simple File ハンドラの構成

ゲートウェイで Simple File ハンドラを構成するには：

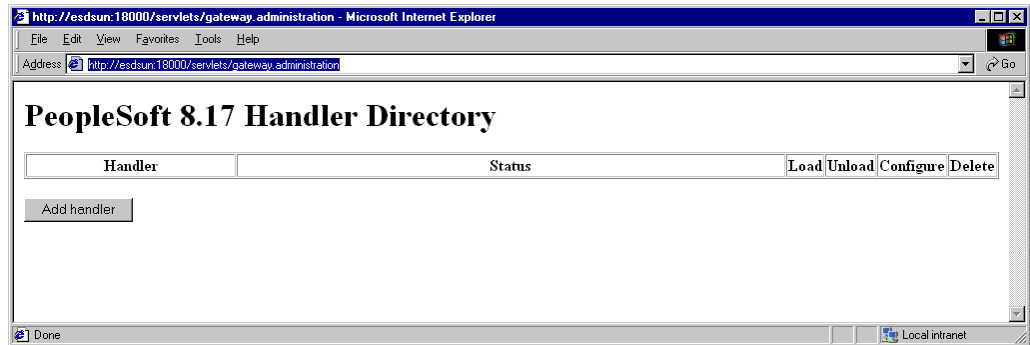
1. Web ブラウザで、次の URL を入力して PeopleSoft 8.1 構成サーブレット・インタフェース (サーバー・ゲートウェイとも呼ばれる) を起動します。

`host name:port/servlets/gateway.administration`

ここで、`host name` は PeopleSoft をホストするアプリケーション・サーバーのホスト名で、`port` はアプリケーション・サーバーがリスニングするポート番号です。

☒ D-19 に示すように、ハンドラ・ディレクトリ・ウィンドウが表示されます。

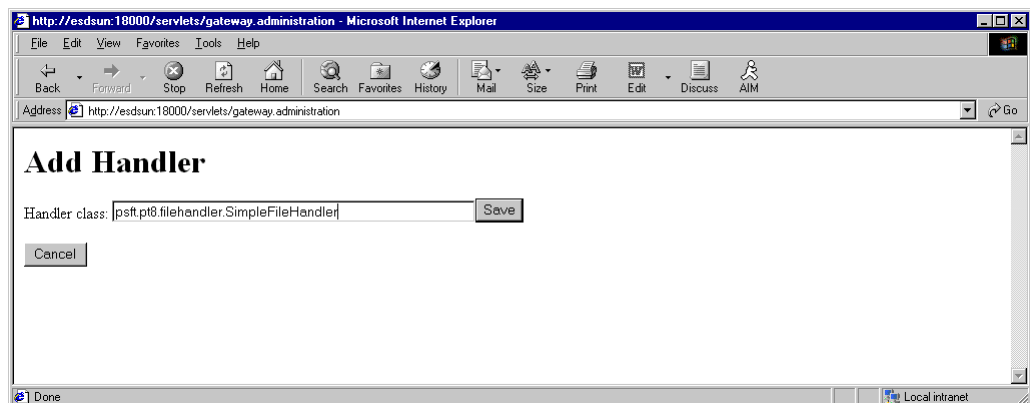
☒ D-19 ハンドラ・ディレクトリ・ウィンドウ



2. 「ハンドラの追加」をクリックします。

☒ D-20 に示すように、「ハンドラの追加」ウィンドウが表示されます。

☒ D-20 「ハンドラの追加」ウィンドウ



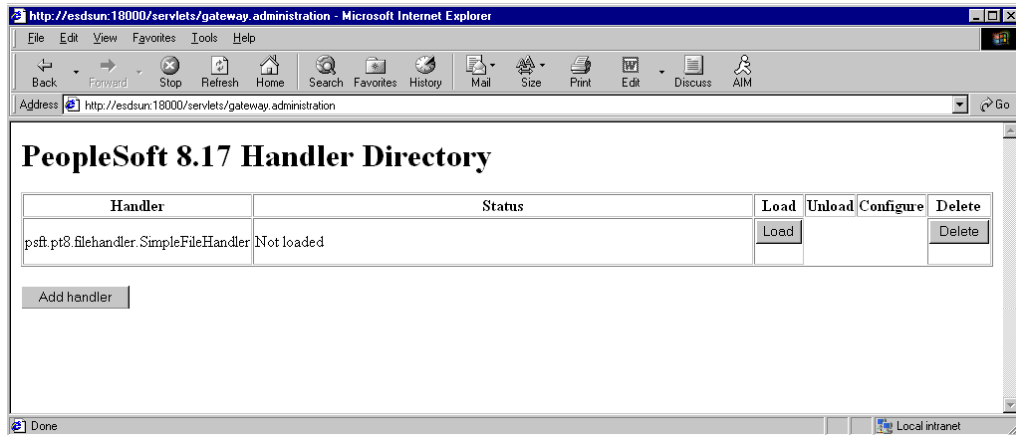
3. Simple File ハンドラ・クラス `psft.pt8.filehandler.SimpleFileHandler` の完全名を入力します。

**注意：** 名前は大 / 小文字が区別されます。

4. 「保存」をクリックします。

☒ D-21 に示すように、ハンドラ・ディレクトリ・ウィンドウが表示されます。

**図 D-21** ハンドラ・ディレクトリ・ウィンドウ



5. ハンドラをロードするには、「ロード」をクリックします。

ハンドラのロード後、「ステータス」列にロードに成功しましたというメッセージが表示されます。

6. 「設定」をクリックします。

☒ D-22 に示すように、Simple File ハンドラ・ディレクトリ・ウィンドウが表示されます。

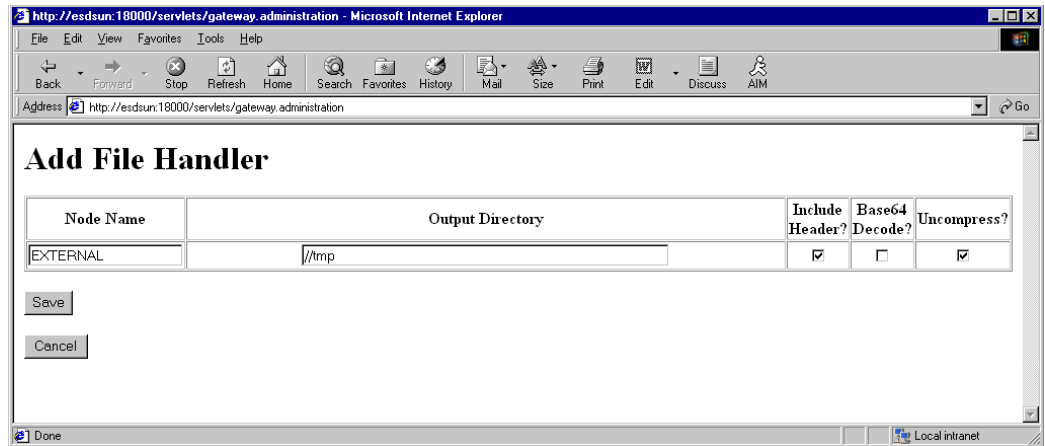
**図 D-22** Simple File ハンドラ・ディレクトリ・ウィンドウ



7. ファイル・ハンドラ・ノードの追加をクリックします。

☒ D-23 に示すように、ファイル・ハンドラの追加ウィンドウが表示されます。

図 D-23 ファイル・ハンドラの追加ウィンドウ



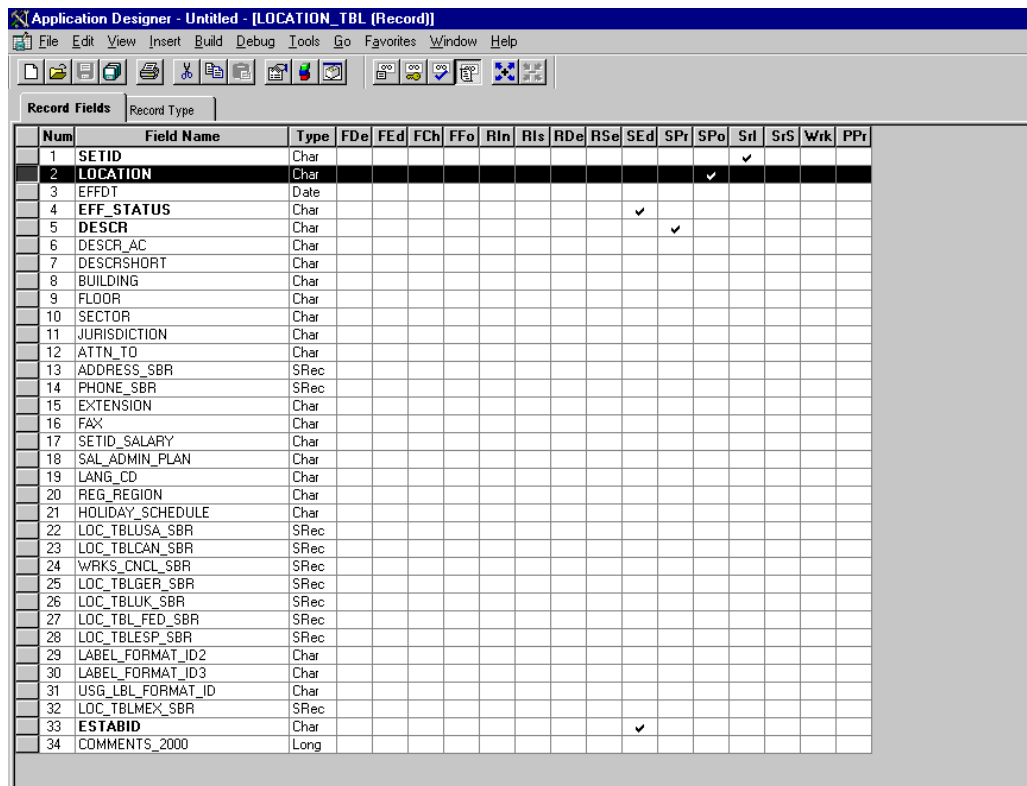
- 「ノード名」フィールドで「EXTERNAL」など、D-13 ページ「新規のメッセージ・ノードの作成および構成」で作成したメッセージ・ノードの名前を入力します。

## D.3 メッセージ用の PeopleCode の表示

メッセージは、レコードに添付されている PeopleCode によって開始されます。通常、このレコードはそのメッセージ自体に関連付けられているレコードの 1 つです。

- 図 D-24 に示すように、アプリケーション・デザイナを開きます。

図 D-24 アプリケーション・デザイナ



2. 「Record Fields」タブを開き、「LOCATION\_TBL」レコードを選択します。
  3. PeopleCode 表示オプションを選択します。
  4. 「LOCATION」フィールドの「Save PostChange (SPo)」ボックスを選択します。
- 図 D-25 に示すように、次のウィンドウに、LOCATION\_SYNC メッセージを開始する PeopleCode が表示されます。

図 D-25 PeopleCode

```

LOCATION [field] SavePostChange
Local Message &MSG;
Local Rowset &RS0, &RS01, &RS11;
Local Row &R1;
PanelGroup string &PubNodeName;
PanelGroup boolean &ActionCodeRowAdd;

If ActiveRowCount() = CurrentRowNumber() Then
    &MSG = CreateMessage(Message.LOCATION_SYNC);

    If &MSG.IsActive Then

        /* If the program is called by a Component Interface, then flush the extra row (Created by Component Create(), CopySetupRowset on
        Component Interface "LOCATION".) from panel buffer.*/
        /**=====*/

        If ((%ComponentName = Component.LOCATION) And
            (&ActionCodeRowAdd = True)) Then

            &RS0 = GetLevel0();
            &RS01 = CreateRowset(&RS0);
            &RS0.CopyTo(&RS01);
            &RS11 = &RS01(1).GetRowset(Scroll.LOCATION_TBL);
            &RS11.Flush();

            &R1 = &RS0(1).GetRowset(Scroll.LOCATION_TBL).GetRow(1);
            &R1.CopyTo(&RS11.GetRow(1));

            &RS01.CopyTo(&RS0);

        End-If;
        /**=====*/

        &MSG.CopyRowsetDelta(GetLevel0()(1).GetRowset(Scroll.LOCATION_TBL));

        /* prevent circular publishes, do not publish back to originating node */
        If All(&PubNodeName) Then
            &MSG.DoNotPubToNodeName = &PubNodeName;
        End-If;

        &MSG.Publish();

    End-If;
End-If;
    
```

PeopleCode の詳細は、PeopleSoft オンライン・ライブラリを参照してください。

メッセージの PeopleCode の確認が完了しました。これで、インテグレーション・ブローカー (PeopleSoft 8.4 の場合) またはアプリケーション・メッセージング (PeopleSoft 8.1) をテストする準備ができました。

## D.4 インテグレーション・ブローカーのテスト

メッセージを生成することにより、インテグレーション・ブローカーをテストするには、ロケーション・トランザクション・ウィンドウにナビゲートし、アプリケーションでロケーション・エントリを追加、更新または削除できます。アプリケーションに基づき、ナビゲート方法は異なります。

図 D-26 は、Financials 8.4 アプリケーションの例で、SetID が SHARE で、ロケーション・コードが TEST001 の新規ロケーションが追加されています。

図 D-26 Financials 8.4 アプリケーション

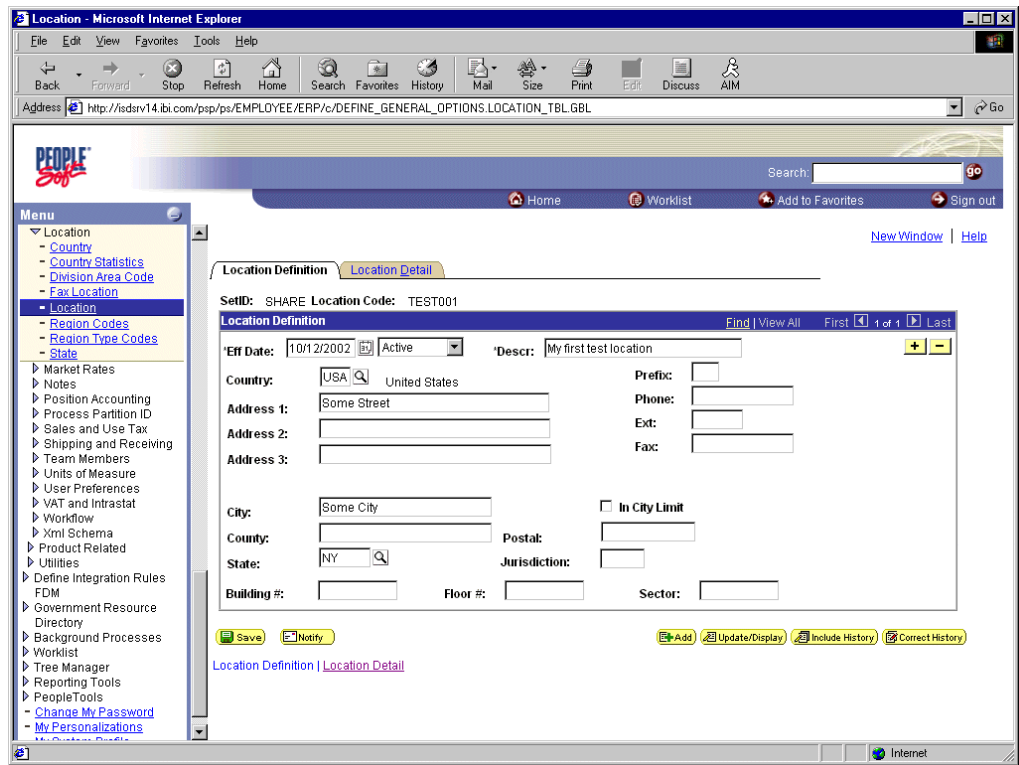
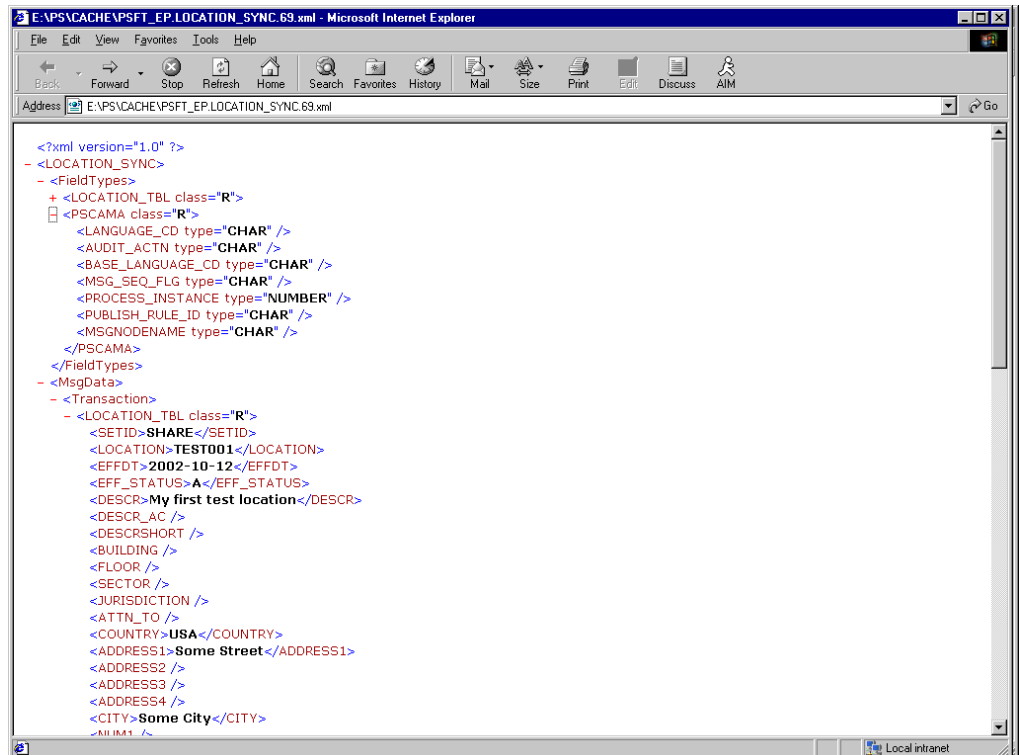


図 D-27 は、XML 出力の一部を示すものです。

図 D-27 XML 出力



---

---

**注意：** このファイルの名前は PSFT\_EP.LOCATION\_SYNC.69.xml で、PSFT\_EP(ローカルの公開ノード)、メッセージの名前および公開 ID を連結したものです。

---

---

メッセージが正常に送信されない場合、PeopleSoft にはメッセージの進捗監視用の一連のツールが装備されています。リリース 8.1 では、アプリケーション・メッセージング・モニターと呼ばれるツールを使用します。リリース 8.4 では、インテグレーション・ブローカーの「モニター」メニューを使用します。

メッセージ環境の問題の孤立および解決方法の詳細は、PeopleSoft オンライン・ライブラリを参照してください。XML ファイルをまだ送信できない場合は、PeopleSoft カスタマ・コネクションが問題解決のお手伝いをします。

## D.5 アウトバウンド同期メッセージの使用

PeopleTools 8.4 から、アウトバウンド同期メッセージを送信できるようになりました。概して、アウトバウンド同期とアウトバウンド非同期の主な差異は、アウトバウンド非同期の場合、メッセージが実際に送信または受信されたかどうかにかかわらず、トランザクションは完了する点です。

この項では、次のトピックについて説明します。

- [D.5.1 項「アウトバウンド同期メッセージの構成」](#)
- [D.5.2 項「同期メッセージ用の PeopleCode の表示」](#)

同期アウトバウンド・メッセージには、次の特徴があります。

- トランザクションは、続行する前に外部システムからのレスポンスを待つ必要があります。
- トランザクションは、レスポンス・メッセージを処理する必要があります。
- 外部システムが、レスポンス・メッセージが正しいフォーマットであることを確認する必要があります。

Oracle Application Adapter for PeopleSoft では、PeopleSoft アウトバウンド同期メッセージを使用できます。アウトバウンド同期メッセージの場合は、PeopleSoft 内と Oracle WebLogic Server の両方で追加の構成手順が必要です。このトピックでは、PeopleSoft 内の構成要件について簡単に説明します。

---

---

**注意：** このトピックのインストラクションは、アウトバウンド非同期メッセージ用のインストラクションに基づきます。アウトバウンド同期を試行する前に、アウトバウンド非同期メッセージングについて理解することを強くお勧めします。アウトバウンド非同期メッセージの詳細は、D-3 ページ「[PeopleSoft 8.4 でのインテグレーション・ブローカーの構成](#)」を参照してください。

アウトバウンド・メッセージとインバウンド・メッセージの両方が作成され、アクティブであることを確認します。PeopleSoft には、IB\_INST\_VER\_SYNC\_MSG および IB\_INST\_VER\_RESP\_MSG と呼ばれるテンプレート例が装備されています。これらのメッセージの確認の詳細は、D-16 ページ「[メッセージがアクティブであり、適切にルーティングされていることの確認](#)」を参照してください。

---

---



## D.5.1 アウトバウンド同期メッセージの構成

既存のノードを使用または新規ノードを作成して、アウトバウンド同期メッセージを構成できます。ノードの作成および構成の詳細は、D-13 ページ「新規のメッセージ・ノードの作成および構成」を参照してください。いずれの場合も、アウトバウンド同期トランザクションを設定する必要があります。

この項では、次のトピックについて説明します。

### ■ D.5.1.1 項「1つのアウトバウンド同期メッセージの構成」

次の例では、PeopleSoft 提供のノードおよびトランザクションを使用しています。ただし、この例は説明目的のみで、実際には追加の手順なしでは説明どおりには機能しません。Financials リリース 8.42 の場合は、テスト目的で使用可能な事前構成済のアウトバウンド同期トランザクションはありません。

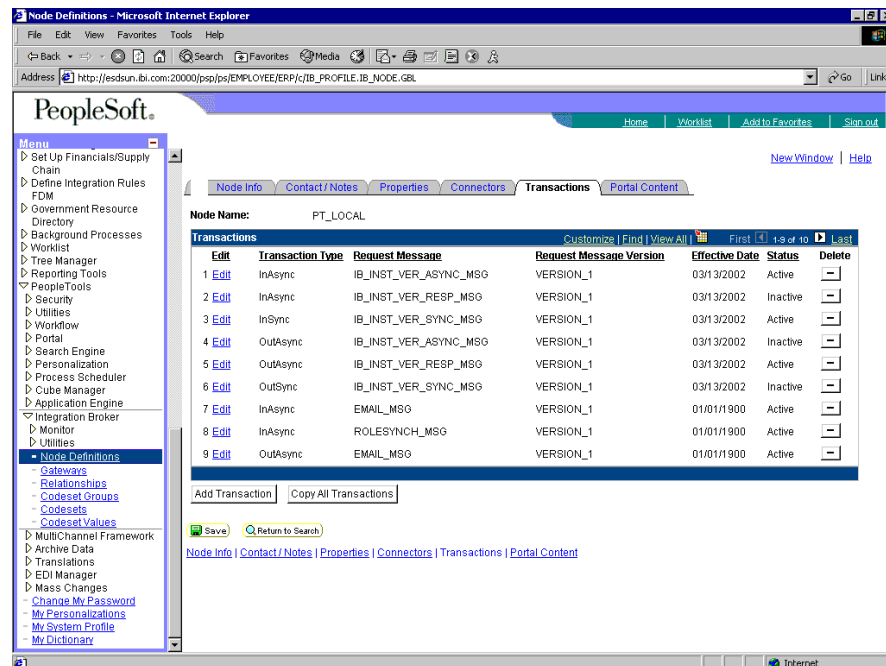
#### D.5.1.1 1つのアウトバウンド同期メッセージの構成

アウトバウンド同期メッセージを構成するには：

1. 「ノード定義」 ページにナビゲートし、「PT\_LOCAL」 ノードを開きます。
2. 「トランザクション」 タブをクリックします。

☒ D-28 に示すように、「トランザクション」 ペインが表示されます。

☒ D-28 「トランザクション」 ペイン

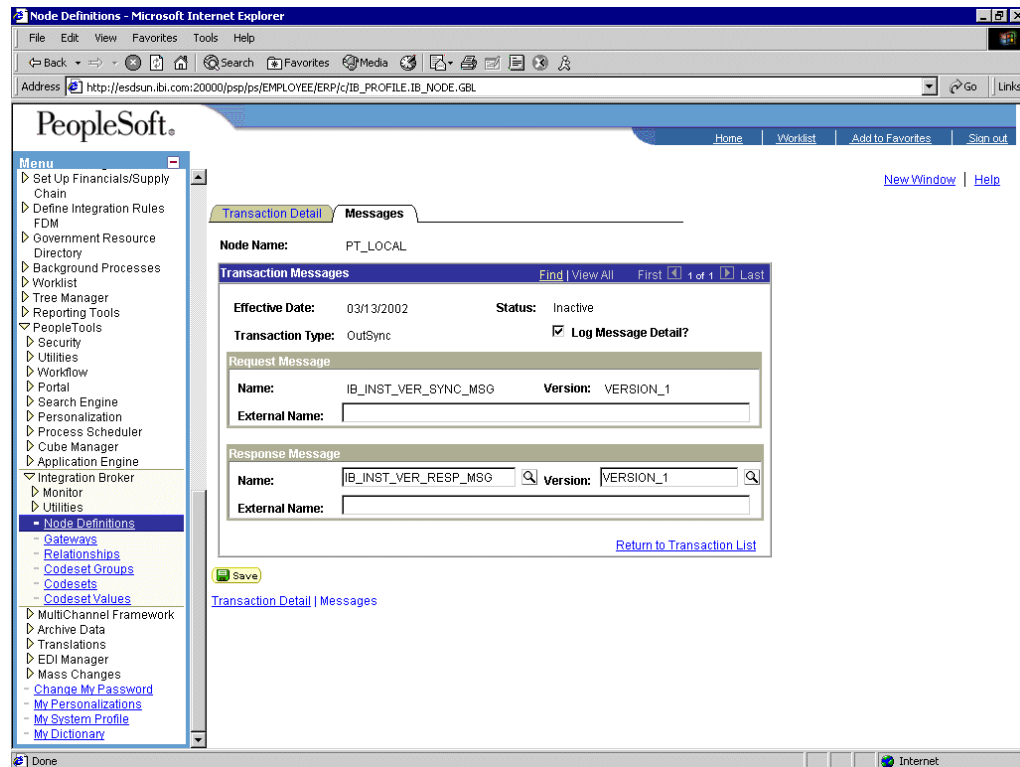


1つのアウトバウンド同期メッセージ、IB\_INST\_VER\_SYNC\_MSGが「トランザクションタイプ」リストに表示されます。

3. IB\_INST\_VER\_SYNC\_MSG 行の「編集」リンクをクリックします。

☒ D-29 に示すように、次のペインが表示されます。

図 D-29 「メッセージ」 タブ



4. 「メッセージ」 タブをクリックします。

リクエストおよびレスポンス・メッセージの両方が表示されます。ターゲット・システムで、レスポンス・メッセージがリクエスト・メッセージのフォーマットに従っていることが確認される必要があります。ターゲット・システムは、Oracle WebLogic Server で、最終送信先に送信し、戻された XML を変換する必要があります。

---

**注意：** 同期アウトバウンド・メッセージを操作する場合、PeopleSoft 提供の HTTP ターゲット・コネクタを使用する必要があります。アウトバウンド同期メッセージに TCPIP84TARGET コネクタは使用できません。

---

## D.5.2 同期メッセージ用の PeopleCode の表示

次の例のサンプル PeopleCode は、同期アウトバウンド・メッセージ用で、レスポンス・メッセージの処理が必要とされる点で非同期アウトバウンドとは異なります。

この項では、次のトピックについて説明します。

- D.5.2.1 項「PeopleCode for a Financials 同期アウトバウンド・メッセージの表示」

### D.5.2.1 PeopleCode for a Financials 同期アウトバウンド・メッセージの表示

次のサンプル・コードは、Financials アプリケーションに装備されており、IB\_INST\_VER\_SYNC\_MSG および IB\_INST\_VER\_RESP\_MSG2 つのメッセージと関連付けられています。

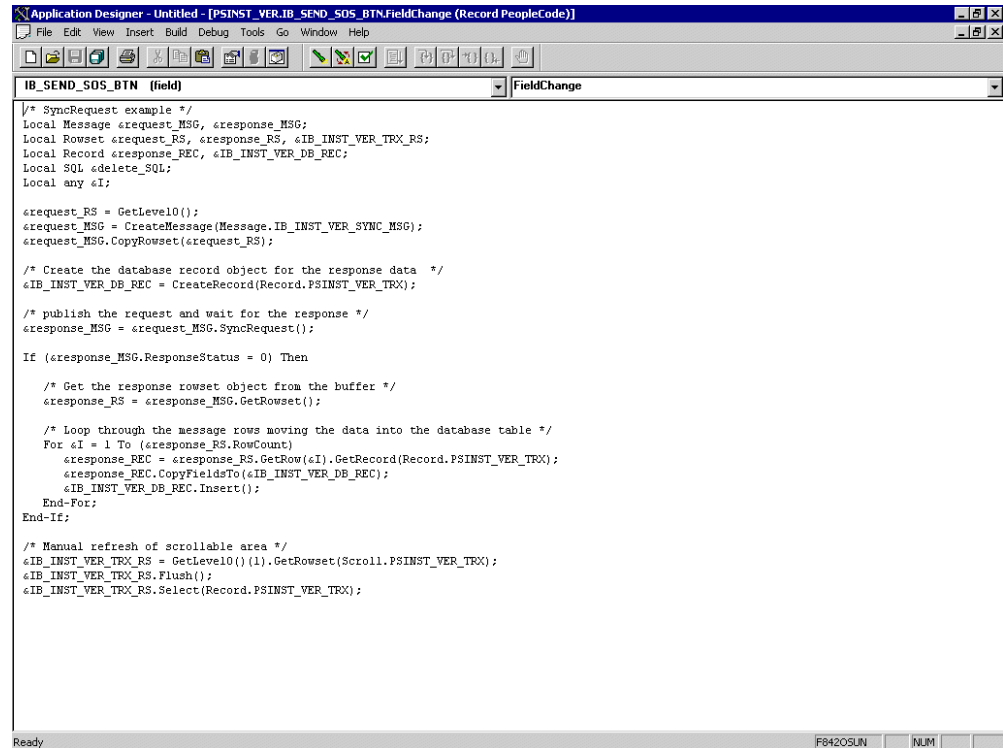
このコードを表示するには、次のステップを実行します。

1. アプリケーション・デザイナーで、「PSINST\_VER」レコードを開きます。

2. 「PeopleCode」表示オプションを選択します。
3. 「IB\_SEND\_SOS\_BTN」フィールドの「Field Change (FCh)」ボックスを選択します。

☒ D-30 に示すように、次のウィンドウが表示されます。

図 D-30 「Field Change」ボックス



## D.6 PeopleTools バージョン 8.48 以降を使用したイベント生成

この項は、PeopleSoft のイベント生成プロセスについて説明するチュートリアルです。サポートされている PeopleTools のバージョンは、8.48、8.49、8.50 および 8.51 です。このチュートリアルでは、PeopleTools バージョン 8.48.02 および 8.90 Financial / SCM アプリケーションを使用しています。このため、異なるプラットフォームを使用している場合はそのオペレーティング・システムに特定の用語およびコマンドと置き換えてください。詳細は、それぞれ特定のコンポーネントに適切なユーザー・ガイドを参照してください。

この項では、次のトピックについて説明します。

- D.6.1 項 「PeopleSoft サービスの構成」
- D.6.2 項 「PeopleSoft でのイベントのトリガー」
- D.6.3 項 「イベント結果の確認」

### D.6.1 PeopleSoft サービスの構成

この項では、PeopleSoft サービスの構成方法について説明します。次のトピックで構成されています。

- D.6.1.1 項 「リモート・ノードの追加」

- D.6.1.2 項「サービスの選択」
- D.6.1.3 項「ゲートウェイのアクティブ化」
- D.6.1.4 項「ドメインのアクティブ化」
- D.6.1.5 項「サービスのアクティブ化」
- D.6.1.6 項「サービス操作(キューおよびメッセージ・ノード)のアクティブ化」

### D.6.1.1 リモート・ノードの追加

リモート・ノードを追加するには：

1. ブラウザベースの GUI (ピュア・インターネット・アーキテクチャ) を使用して PeopleSoft にログオンします。
2. 「PeopleTools」、「インテグレーションブローカー」、「インテグレーション設定」、「ノード」の順に選択します。

☒ D-31 に示すように、「ノード定義」タブが表示されます。

図 D-31 「ノード定義」タブ

The screenshot shows the 'Node Definitions' window with the following details:

- Node Name: EXTERNAL
- Description: Message publish to third party
- Node Type: External
- Authentication Option: None
- Default User ID: PS
- Checkboxes:
  - Default Local Node
  - Local Node
  - Active Node
  - Non-Repudiation
  - Segment Aware
- Action buttons: Copy Node, Rename Node, Delete Node

3. 次のステップを実行します。
  - a. 「ノード名」フィールドで、「EXTERNAL」など、新規のノード定義の名前を入力します。
  - b. 説明フィールドで、新規のノード定義に関する簡単な説明を入力します。
  - c. 「ノードタイプ」ドロップダウン・リストから「外部」を選択します。
  - d. 「認証オプション」ドロップダウン・リストでデフォルトのオプションである「なし」が選択されていることを確認します。
  - e. 「デフォルトユーザーID」フィールドで、「PS」など、PeopleSoft システムで使用されるユーザー ID を入力します。
  - f. 「アクティブノード」チェック・ボックスを選択します。
4. 「コネクタ」タブをクリックします。

☒ D-32 に示すように、「コネクタ」タブが表示されます。

図 D-32 「コネクタ」タブ

Node Definitions | **Connectors** | Portal | WS Security | Routings

Node Name: EXTERNAL Ping Node

**Details**

Gateway ID: LOCAL

Connector ID: HTTPTARGET

**Properties** Customize | Find | First 1-3 of 3 Last

Property ID	Property Name	Required	Value
1	HEADER	<input checked="" type="checkbox"/>	Y
2	HTTPPROPERTY	<input checked="" type="checkbox"/>	Method
3	PRIMARYURL	<input checked="" type="checkbox"/>	URL

► Password Encryption Utility

5. 次のステップを実行します。
  - a. 「ゲートウェイ ID」フィールドに「LOCAL」を入力します。
  - b. 「コネクタ ID」フィールドに「HTTPTARGET」を入力します。
  - c. 「PRIMARYURL」値には、イベントのリスニングに使用される PeopleSoft データ・インスタンスのホストおよびポート番号を入力します。
  - d. 残りのプロパティはデフォルト値のままにします。
6. 変更を保存します。

### D.6.1.2 サービスの選択

サービスを選択するには：

1. 「PeopleTools」、「インテグレーションブローカー」、「インテグレーション設定」、「サービス」の順に選択します。
2. 「DEPT\_SYNC」サービスを検索し、選択します。  
 図 D-33 に示すように、DEPT\_SYNC の「サービス」ペインが表示されます。

図 D-33 DEPT\_SYNC の「サービス」ペイン

**Services**

Service: DEPT\_SYNC  
 'Description: Dept Sync Incr. Message  
 Comments: Incremental (Component Publish) Dept Sync Message  
 Service Alias:   
 Object Owner ID: Human Resources  
 'Namespace: http://xmlns.oracle.com/Enterprise/Tools/services

[View WSDL](#)   [Provide Web Service](#)

**Service Operations**

Service Operation:   
 Operation Type:   
 ADD

**Existing Operations**   [Customize](#) | [Find](#) | [View All](#) | First 1-2 of 2 Last

Operation	Message Links	Operation.Default Version	Description	Active	Operation Type
<a href="#">ADD_DEPT.v1</a>			Add Department	<input checked="" type="checkbox"/>	Asynch
<a href="#">DEPT_SYNC.VERSION_1</a>			Dept Sync Incr. Message	<input checked="" type="checkbox"/>	Asynch

- 左下部の「既存オペレーション」セクションで「DEPT\_SYNC.VERSION\_1」サービス操作をクリックします。

図 D-34 に示すように、サービス オペレーション - 全般ペインが表示されます。

図 D-34 サービス オペレーション - 全般ペイン

**Default Service Operation Version**

'Version: VERSION\_1  
 Version Description: Dept Sync Incr. Message  
 Version Comments:   
 Non-Repudiation  
 Runtime Schema Validation

[Introspection](#)

Default    Active

**Routing Status**

Any-to-Local: Exists  
 Local-to-Local: Exists

**Routing Actions Upon Save**

Regenerate Any-to-Local  
 Regenerate Local-to-Local

- 「アクティブ」チェック・ボックスをクリックします。
- 図 D-35 に示すように、「ルーティング」タブをクリックして、新規のルーティングを追加します。

図 D-35 「ルーティング」タブ

General Handlers Routings

Service Operation: DEPT\_SYNC

Default Version: VERSION\_1

Routing Name: ADD\_DEPT ADD

6. 「ルーティング名」フィールドで、「ADD\_DEPT」など、新規のルーティングの名前を入力します。
7. 「追加」をクリックします。
8. 図 D-36 に示すように、「ルーティング定義」タブをクリックして、新規のルーティング定義を追加します。

図 D-36 「ルーティング定義」タブ

Routing Definitions Parameters Connector Properties

Routing Name: ADD\_DEPT  Active

\*Service Operation: DEPT\_SYNC  System Generated

Version: VERSION\_1

\*Description: ADD\_DEPT

Comments:

\*Sender Node: PSFT\_HR

\*Receiver Node: EXTERNAL

Routing Type: Asynchronous - One Way

Object Owner ID:

Save Return

9. 次のステップを実行します。
  - a. 「送信元ノード」フィールドで、メッセージを公開するデフォルトの PeopleSoft ノードである「PSFT\_HR」を入力します。
  - b. 「受信元ノード」フィールドで、PeopleSoft により公開されるメッセージをサブスクライブするために作成された新規ノードである「EXTERNAL」を入力します。
10. 図 D-37 に示すように、「コネクタ プロパティ」タブをクリックします。

図 D-37 「コネクタ プロパティ」 タブ

Property ID	Property Name	Value
HEADER	sendUncompressed	Y
HTTPPROPERTY	Method	POST
PRIMARYURL	URL	http://bpelclient:1971

11. 次のステップを実行します。
  - a. 「ゲートウェイ ID」フィールドに「LOCAL」を入力します。
  - b. 「コネクタ ID」フィールドに「HTTPTARGET」を入力します。
  - c. 「PRIMARYURL」値には、イベントのリスニングに使用される PeopleSoft アダプタ・インスタンスのホストおよびポート番号を入力します。
12. 「保存」をクリックし、「戻る」をクリックします。  
 「ルーティング定義」ペインに戻ります。図 D-38 に示すように、新規のルーティング定義 (ADD\_DEPT) がリストに追加されたことがわかります。

図 D-38 「ルーティング定義」ペイン

Selected	Name	Version	Routing Type	Sender Node	Receiver Node	Direction	Status
<input type="checkbox"/>	<a href="#">~GEN~JPG~24704</a>	VERSION_1	Asynch	PSFT_HR	PSFT_EP	Inbound	Inactive
<input type="checkbox"/>	<a href="#">ADD_DEPT</a>	VERSION_1	Asynch	PSFT_EP	EXTERNAL	Outbound	Active

13. 「保存」をクリックし、「サービス オペレーション」の詳細を保存します。
14. 「サービスに戻る」リンクをクリックして、「サービス」ペインに戻ります。
15. 「サービス」ペインで「保存」をクリックします。

### D.6.1.3 ゲートウェイのアクティブ化

ゲートウェイをアクティブ化するには:

1. 「PeopleTools」、「インテグレーションブローカー」、「設定」、「ゲートウェイ」の順に選択します。
2. 「Local」など、インテグレーション・ゲートウェイ ID を検索し、選択します。  
 図 D-39 に示すように、「ゲートウェイ」ペインが表示されます。



図 D-39 「ゲートウェイ」 ペイン

3. 「ゲートウェイ PING」 をクリックします。

図 D-40 に示すように、新規のブラウザ・ウィンドウが表示され、ゲートウェイがアクティブであることが示されます。

図 D-40 新規のブラウザ・ウィンドウ

4. 図 D-41 に示すように、新規ブラウザ・ウィンドウを閉じて「ゲートウェイ」 ペインに戻ります。

図 D-41 「ゲートウェイ」 ペイン

*Connector ID	Description	*Connector Class Name	Properties	+	-
1	AS2TARGET	AS2TargetConnector	Properties	+	-
2	FILEOUTPUT	SimpleFileTargetConnector	Properties	+	-
3	FTPTARGET	FTPTargetConnector	Properties	+	-
4	GETMAILTARGET	GetMailTargetConnector	Properties	+	-
5	HTTPTARGET	HttpTargetConnector	Properties	+	-

5. 「コネクタ」 セクションに「HTTPTARGET」 がリストされていることを確認します。リストされていない場合は、「ゲートウェイ コネクタをロード」 をクリックして、使用可能なコネクタをリフレッシュします。

#### D.6.1.4 ドメインのアクティブ化

ドメインをアクティブ化するには:

1. 「PeopleTools」、 「インテグレーションブローカー」、 「設定」、 「クイック設定」 の順に選択します。

図 D-42 に示すように、「クイック設定」 ペインが表示されます。

図 D-42 「クイック設定」 ペイン

**Integration Broker Quick Configuration**

**Local Gateway**

The integration gateway manages message transport through several communication protocols.

Gateway URL:

[Advanced Gateway Setup](#) Use to access additional integration gateway features.

---

**Integration Broker Domains**

To process asynchronous messages, one application server domain must be active. If inactive, use the Domain Status drop-down list to activate the appropriate domain.

Machine Name	Application Server Path	Domain Status
ADNTAS44	E:\PT840RC4\appser\HC840MST_ADNTAS44	Active
ADNTAS44	E:\PT840\appser\HC840MST_ADNTAS44	Active
ADNTAS44	E:\PT841E2\appser\HC840MST_ADNTAS44	Active
ADNTAS44	E:\PT842H2\appser\HC880MST_ADNTAS44	Active

- ドメインがアクティブであることを確認します。

### D.6.1.5 サービスのアクティブ化

サービスをアクティブ化するには：

- 「PeopleTools」、「インテグレーションブローカー」、「インテグレーション設定」、「サービス」の順に選択します。

図 D-43 に示すように、「サービス」 ペインが表示されます。

図 D-43 「サービス」 ペイン

**General** **Handlers** **Routing**

Service Operation: DEPT\_SYNC  
 Service: DEPT\_SYNC  
 Operation Type: Asynchronous - One Way  
 Operation Description:   User Password Required  
 Operation Comments:   
 Object Owner ID:   
 Operation Alias:  [Service Operation Security](#)

**Default Service Operation Version**

Version:   Default  Active  
 Version Description:   
 Version Comments:   
 Non-Repudiation  Runtime Schema Validation

**Routing Status**

Any-to-Local:	Exists
Local-to-Local:	Exists

**Routing Actions Upon Save**

Regenerate Any-to-Local  
 Regenerate Local-to-Local

[Inspection](#)

- サービスがアクティブであることを確認します。

### D.6.1.6 サービス操作 (キューおよびメッセージ・ノード) のアクティブ化

サービス操作をアクティブ化するには:

1. 「PeopleTools」、「インテグレーションブローカー」、「設定」、「インテグレーション設定」、「サービス」の順に選択します。

☒ D-44 に示すように、「サービス」 ペインが表示されます。

図 D-44 「サービス」 ペイン

Operation	Description	Active	Operation Type
<a href="#">ADD_DEPT.v1</a>	Add Department	<input checked="" type="checkbox"/>	Asynch
<a href="#">DEPT_SYNC.VERSION_1</a>	Dept Sync Incr. Message	<input checked="" type="checkbox"/>	Asynch

2. 左下部の「既存オペレーション」セクションで「DEPT\_SYNC.VERSION\_1」サービス操作をクリックします。

☒ D-45 に示すように、サービス オペレーション - 全般ペインが表示されます。

図 D-45 サービス オペレーション - 全般ペイン

3. ☒ D-46 に示すように、ページの下部のメッセージ情報セクションで、サービス操作の「キュー名」フィールドの値を確認します。

図 D-46 メッセージ情報セクション

4. 「キューの表示」リンクをクリックします。

☒ D-47 に示すように、「キュー定義」 ペインが表示されます。

図 D-47 「キュー定義」 ペイン

**Queue Definitions**

Queue Name: ENTERPRISE\_SETUP  
 Description: EC Setup Data  
 Comments: EC Setup Data

Archive  Unordered  
 Queue Status: Run  
 Object Owner ID: Entr Comp

**Operations Assigned to Queue**

Service	Version
ALTACCT_CF_FULLSYNC	VERSION_1
ALTACCT_CF_SYNC	VERSION_1
BUDGET_REF_CF_FULLSYNC	VERSION_1
BUDGET_REF_CF_SYNC	VERSION_1
BUS_UNIT_FS_FULLSYNC	VERSION_1
BUS_UNIT_FS_SYNC	VERSION_1
CHARTFIELD1_FULLSYNC	VERSION_1
CHARTFIELD1_SYNC	VERSION_1
CHARTFIELD2_FULLSYNC	VERSION_1
CHARTFIELD2_SYNC	VERSION_1

**Define Partitioning Fields**

Include	Field	Alias Name
<input type="checkbox"/>	OPERATIONNAME	
<input type="checkbox"/>	PUBLISHER	
<input type="checkbox"/>	PUBPROC	

Buttons: Save, Return, Add Field

- 「キュー ステータス」 ドロップダウン・リストで「実行」が選択されていることを確認します。
- 「戻る」をクリックして、「サービス オペレーション」 ペインに戻ります。
- 図 D-48 に示すように、「ルーティング」 タブをクリックします。

図 D-48 「ルーティング」 タブ

General | **Handlers** | **Routing Definitions**

Service Operation: DEPT\_SYNC  
 Default Version: VERSION\_1  
 Routing Name:  ADD

Selected	Name	Version	Routing Type	Sender Node	Receiver Node	Direction	Status
<input type="checkbox"/>	~GENERATED-94652240	VERSION_1	Asynch	~ANY~	PSFT_HR	Inbound	Active
<input type="checkbox"/>	~GEN~UPG~12357	VERSION_1	Asynch	PSFT_HR	PSFT_CR	Outbound	Inactive
<input checked="" type="checkbox"/>	ADD_DEPT	VERSION_1	Asynch	PSFT_HR	EXTERNAL	Outbound	Active
<input type="checkbox"/>	~GEN~UPG~20085	VERSION_1	Asynch	PSFT_HR	PSFT_EP	Outbound	Inactive
<input type="checkbox"/>	~GEN~UPG~25397	VERSION_1	Asynch	PSFT_HR	PSFT_HR	Local	Inactive
<input type="checkbox"/>	~GEN~UPG~13180	VERSION_1	Asynch	PSFT_HR	PSFT_LM	Outbound	Inactive

- ルーティングがアクティブであることを確認します。
  - ペイン下部の「サービスに戻る」リンクをクリックして、「サービス」 ペインに戻ります。
  - 「検索に戻る」をクリックし、「サービス検索」 ペインに移動します。
- 前述の手順で、いずれかのコンポーネントのいずれかのペインでステータスがアクティブになっている場合、ステータスを適切なペインおよび各コンポーネントで保存します。
- 「PeopleTools」、「インテグレーションブローカー」、「設定」、「インテグレーション設定」、「サービス」、「ノード」の順に選択します。

図 D-49 に示すように、「ノード定義」 ペインが表示されます。

図 D-49 「ノード定義」 ペイン

Node Definitions | Connectors | Portal | WS Security | Routings

Node Name: EXTERNAL Copy Node

Description: Message publish to third party Rename Node

Node Type: External Default Local Node

Authentication Option: None Local Node

Active Node Delete Node

Non-Repudiation

Segment Aware

12. 「EXTERNAL」 ノードのステータスがアクティブであることを確認します。  
これで、PeopleSoft 側の構成が完了しました。

## D.6.2 PeopleSoft でのイベントのトリガー

この項では、PeopleSoft でのイベントのトリガー方法について説明します。次のトピックで構成されています。

### ■ D.6.2.1 項「イベントのトリガー」

#### D.6.2.1 イベントのトリガー

イベントをトリガーするには：

1. ブラウザベースの GUI (ピュア・インターネット・アーキテクチャ) を使用して PeopleSoft にログオンします。
2. 「メインメニュー」、HRMS の設定、ファウンデーション表、「部門」の順にナビゲートします。

図 D-50 に示すように、「部門」 ペインが表示されます。

図 D-50 「部門」 ペイン

Departments

Enter any information you have and click Search. Leave fields blank for a list of all values.

Find an Existing Value | Add a New Value

SetID: = SHARE

Department: begins with

Description: begins with

Company: begins with

Location SetID: begins with

Location Code: begins with

Manager ID: begins with

Budget with Department: begins with

Include History  Correct History  Case Sensitive

Search Clear Basic Search Save Search Criteria

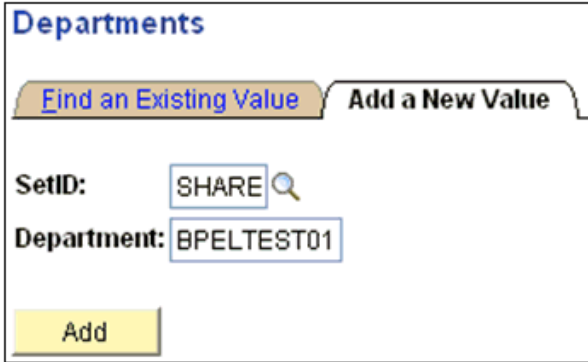
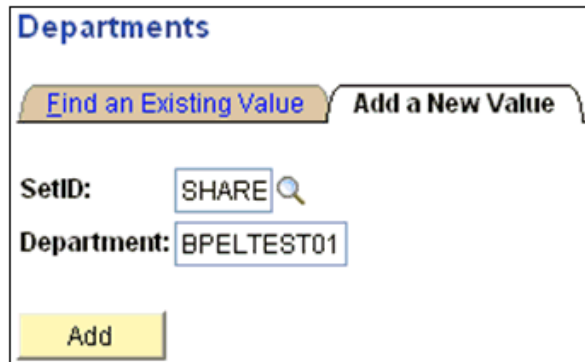
3.  D-51 に示すように、「新規値の追加」タブをクリックします。

図 D-51 「新規値の追加」タブ



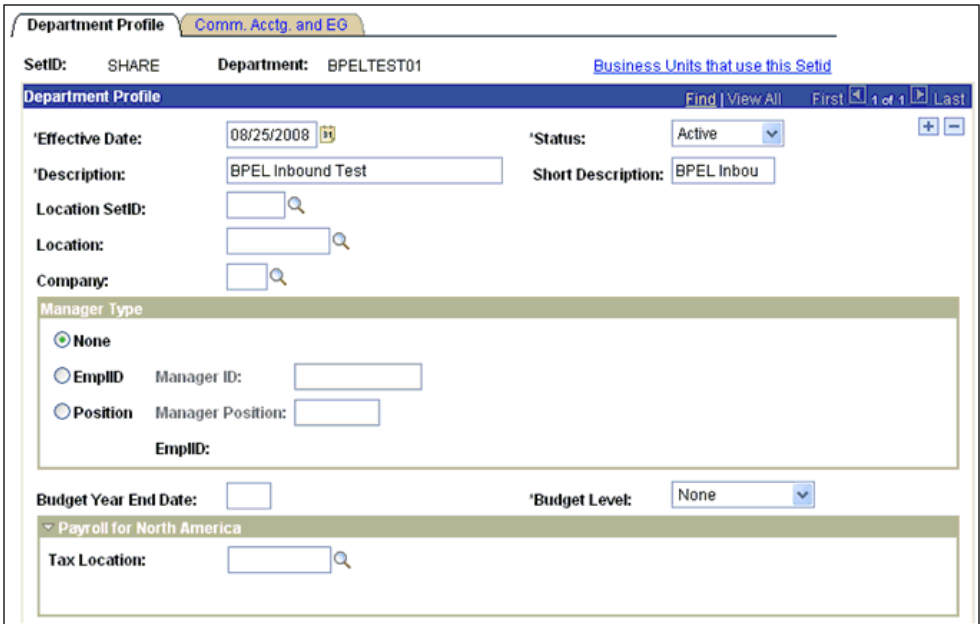
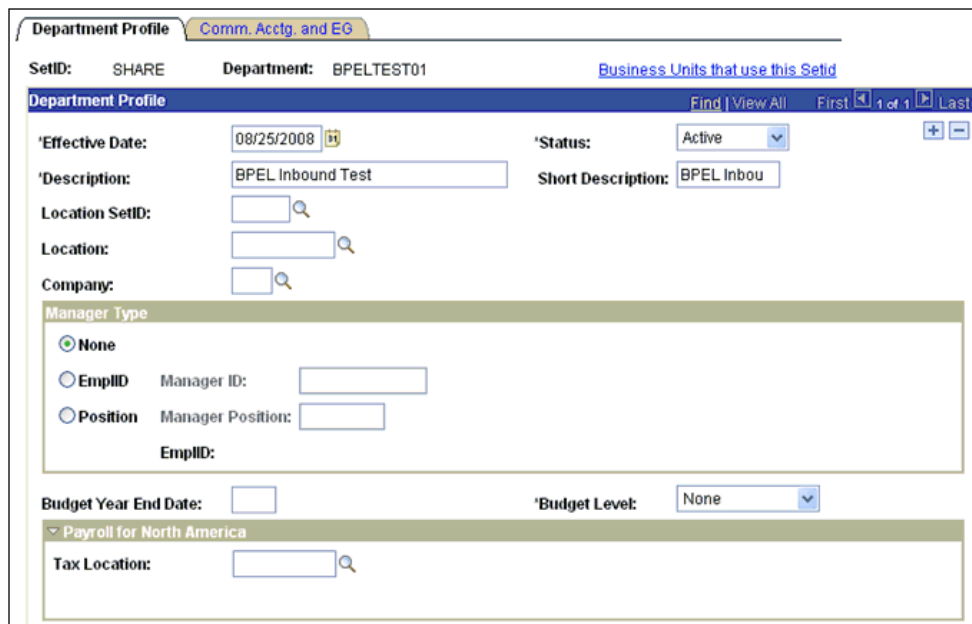
4. SetID および部門フィールドに適切な値を入力します。
5. 「追加」をクリックします。  
 D-52 に示すように、部門プロフィール・タブが表示されます。

図 D-52 部門プロフィール・タブ



6. 新規の部門レコード作成の要件に応じて必要な情報を入力します。
7. 完了したら、ペイン下部の「保存」をクリックします。

### D.6.3 イベント結果の確認

この項では、イベント結果の確認方法について説明します。次のトピックで構成されています。

- D.6.3.1 項「結果の確認」

### D.6.3.1 結果の確認

結果を確認するには:

1. ブラウザベースの GUI (ピュア・インターネット・アーキテクチャ) を使用して PeopleSoft にログオンします。
2. 「メインメニュー」、「PeopleTools」、「インテグレーションブローカー」、「サービスオペレーションモニター」、「非同期サービス」の順に選択します。

図 D-53 に示すように、「モニター概要」タブが表示されます。

図 D-53 「モニター概要」タブ

Queue Name	Error	New	Started	Working	Done	Retry	Timeout	Edited	Canceled	Hold
ENTERPRISE_SETUP	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0
PSRF_REPORTING_FOLDERS	0	0	0	0	1366	0	0	0	0	0
PSXP_MSG_CHNL	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
USER_PROFILE	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0

ここではイベントの結果をキュー・レベルで表示できます。

3. 「結果」セクションで番号リンク (5) キュー (Enterprise\_Setup) をクリックします。

図 D-54 に示すように、「オペレーションインスタンス」タブが表示されます。

図 D-54 「オペレーションインスタンス」タブ

Select	Transaction ID	Queue Name	Publishing Node	Sub Queue	Status	Time Stamp
<input type="checkbox"/>	b727c644-72d0-11dd-9dd0-b53768245214	ENTERPRISE_SETUP	PSFT_HR	Sub Queue Link	Done	08/25/2008 2:07:48PM

イベント (部門) の新規レコードが作成されたことがわかります。

4. 右下の「詳細」リンクをクリックします。

図 D-55 に示すように、新規のブラウザ・ウィンドウ (「非同期詳細」) が表示されます。

図 D-55 「非同期詳細」

**Asynchronous Details**

Transaction ID: b727c644-72d0-11dd-9dd0-b53768245214

External Service Name: DEPT\_SYNC.VERSION\_1

Publishing Node: PSFT\_HR

Queue Name: ENTERPRISE\_SETUP

Queue Sequence ID: 5

Sub Queue:

Original Pub Node: PSFT\_HR

Status: DONE

Uncompressed Data Length: 7526

Data Length View Limit: 100000

'Segment': 1 (dropdown menu) ViewXML (button) Refresh (button)

View IB Info

**Publication Contracts** Customize | Find | First 1 of 1 Last

Actions Information

Subscriber Node	'Segment	Status	View XML	Resubmit	Cancel	Error Messages	View IB Info
EXTERNAL	1	Done	View XML	Resubmit	Cancel	Error Messages	View IB Info

「パブリッシュ ノード」 および 「サブスクライブ ノード」 のトランザクションのステータスが「完了」であることを確認します。



---

---

# 用語集

## アダプタ

1つの電子的インタフェースを別の電子的インタフェースに適応させることにより(機能を損なうことなく)一般的な接続性を提供します。

## エージェント

リスナーおよびドキュメントにおけるサービス・プロトコルをサポートします。

## ビジネス・サービス

Web サービスとしても知られます。Web サービスは、独立型でモジュール化された機能で、オープン標準を使用してネットワーク間で公開およびアクセスが可能です。コンポーネント別のインタフェースの実装で、実行可能なエンティティです。

## チャンネル

バックエンド・システムの特定のインスタンスへの構成済接続を表します。1つのチャンネルは、アダプタで管理される特定のリスナーへの1つ以上のイベント・ポートをバインドします。

## リスナー

クライアント・アプリケーションからのリクエストを受け入れるコンポーネントです。

## ポート

アダプタにより公開される特定のビジネス・オブジェクトを特定の配置と関連付けます。この場合の配置とは、プロトコルおよびイベント・データの場所を定義する URL です。ポートはイベント使用のエンドポイントを定義します。



---

---

# 索引

## A

---

- API Java プログラム
  - コンパイル, A-5 ~ A-7
  - 作成, A-1 ~ A-5
- Application Adapter, 1-1 ~ 1-2
  - BPEL Process Manager との統合, 4-1, 6-1
  - 構成, 3-2
  - デプロイ, 1-1, 1-4, 3-1 ~ 3-2, 4-2
  - トラブルシューティング, 10-1 ~ 10-7

## B

---

- BPEL Process Manager
  - OracleAS Adapter for PeopleSoft および, 4-1
  - アダプタとの統合, 4-1, 6-1
- BPEL デザイナ, 4-1, 6-1
- BSE (OracleAS Adapter Business Services Engine), 2-2
  - 構成, 2-2
  - トラブルシューティング, 10-5
- BSE (OracleWLS Adapter Business Services Engine), 1-1, 1-4
- BSE デプロイメント, 1-4

## C

---

- CCI コール, 3-1

## E

---

- Eclipse 「JDeveloper」を参照
- EIP (Enterprise Integration Points), 1-3
- EJB (Enterprise Java Beans), 3-1
- Enterprise Connector for J2EE Connector Architecture (J2CA), 1-4
- Enterprise Integration Points (EIP), 1-3
- Enterprise Java Beans (EJB), 3-1

## H

---

- HTTP プロトコル, 2-19

## I

---

- 「iBSE URL」フィールド, 2-3
- IntegrationGateway.properties ファイル
  - 構成, D-5 ~ D-6
- IntegrationGateway.properties ファイルの構成, D-5 ~ D-6
- 「IWayConfig」パラメータ, 3-4
- 「IWayHome」パラメータ, 3-4
- 「IWayRepoPassword」パラメータ, 3-4
- 「IWayRepoURL」パラメータ, 3-4
- 「IWayRepoUser」パラメータ, 3-4
- iwpsci84.jar ファイル, 10-2
- iwpsci8x.jar ファイル, 10-2

## J

---

- J2CA (Enterprise Connector for J2EE Connector Architecture), 1-4
  - OracleAS Adapter および, 3-1
- J2CA 構成
  - アプリケーション・エクスプローラおよび, 3-2
- J2CA サービス, 4-35
- J2CA リソース・アダプタ, 1-1, 3-1
- JAR ファイル, 10-2
  - エラーおよび, 10-2
- Java プログラム・クライアント, 3-1
- JDeveloper, 4-1, 6-1

## L

---

- 「LogLevel」パラメータ, 3-4

## M

---

- ManagedConnectionFactory パラメータ, 3-4
- MySAP Easy Access ウィンドウ, 4-47
- MySAP ERP でのイベントのトリガー, 4-47
- MySAP Workbench, 4-47

## O

---

- OC4J-ra.xml ファイル, 3-2 ~ 3-4
- Oracle Application Server
  - コネクタのデプロイ, 3-1
- Oracle JDeveloper, 4-1, 6-1
- Oracle JDeveloper BPEL デザイナ 「BPEL デザイナ」、

「JDeveloper」または「Oracle JDeveloper」を参照

Oracle Unified Method (OUM), xi  
OracleAS Adapter  
J2CA および, 3-1  
インストール・ディレクトリおよび, 3-4  
OracleAS Adapter Business Services Engine (BSE), 2-2  
構成, 2-2  
トラブルシューティング, 10-5  
OracleAS Adapter for PeopleSoft  
BPEL Process Manager および, 4-1  
デプロイ, 4-2  
トラブルシューティング, 10-1 ~ 10-7  
OracleAS Adapter J2CA, 2-2 ~ 2-3  
アプリケーション・エクスペローラおよび, 10-4  
接続, 10-4  
OracleAS Adapter J2CA への接続, 10-4  
OracleWLS Adapter Application Explorer, アプリケーション・エクスペローラも参照  
OracleWLS Adapter Business Services Engine (BSE), 1-1, 1-4  
OracleWLS Application Adapter for PeopleSoft  
構成, 2-1 ~ 2-23  
デプロイ, 1-1  
Oracle データベース, 3-4

## P

PeopleSoft  
接続, 2-5 ~ 2-7, 10-2, 10-7  
PeopleSoft API Java プログラム  
コンパイル, A-5 ~ A-7  
作成, A-1 ~ A-5  
PeopleSoft Java API, 1-2  
PeopleSoft XML, 1-2  
PeopleSoft ターゲットからの接続の切断, 2-8  
「PeopleSoft」ノード, 2-6, 4-37  
PeopleSoft ビジネス・オブジェクト, 2-5  
PeopleSoft への接続, 2-5 ~ 2-7, 10-2, 10-7, 4-37  
Process Manager 「BPEL Process Manager」を参照  
psjoa.jar ファイル, 10-2

## S

SOAP エージェント, 10-5  
SOAP フォルト, 10-5  
SOAP リクエスト, 10-5 ~ 10-7  
エラーおよび, 10-5 ~ 10-7  
SOAP レスポンス, 10-5 ~ 10-7  
SOA ( サービス指向アーキテクチャ ), 4-1

## T

TCP/IP 8.4 コネクタ・ノード, B-3 ~ B-6  
TCP プロトコル, 2-19  
TCP リスナー・ダイアログ, 2-19

## W

Web Service Definition Language (WSDL), 2-10 ~ 2-12  
Web サービス, 1-1 ~ 1-3, 2-2  
作成, 2-12 ~ 2-13  
テスト, 2-14  
デプロイ, 10-6  
統合, 4-1  
トラブルシューティング, 10-5 ~ 10-7  
リポジトリ・プロジェクトおよび, 2-2  
Web サービスの作成, 2-12 ~ 2-13  
Web サービスのテスト, 2-14  
Web サービス名, 2-13  
WSDL (Web Service Definition Language), 2-10 ~ 2-12  
WSDL ドキュメント, 4-1  
「WSDL のエクスポート」ダイアログ・ボックス, 4-37  
WSDL ファイル, 4-1, 6-1  
アプリケーション・エクスペローラおよび, 4-35  
作成, 4-35

## X

XML スキーマ, 1-2, 2-1, 2-10  
作成, 2-10  
「XML」パラメータ, 2-19  
XML メッセージ, 1-1

## あ

アウトバウンド JCA サービスの作成 ( リクエスト / レスポンス ), 4-8  
アクセス方法, 1-2  
アダプタ, 1-1 ~ 1-2  
BPEL Process Manager との統合, 4-1, 6-1  
構成, 2-1 ~ 2-23, 3-2  
デプロイ, 1-1, 1-4, 3-1 ~ 3-2, 4-2  
トラブルシューティング, 10-1 ~ 10-7  
アダプタ構成  
更新, 3-2  
アダプタ構成の更新, 3-2  
アダプタ・タイプ  
リソース, 1-1, 3-1 ~ 3-2  
「アダプタ」ノード, 4-37  
アダプタの構成, 3-2  
アダプタのデプロイ, 3-1 ~ 3-2, 4-2  
アダプタの例外, 10-2 ~ 10-3  
アプリケーション・アダプタ  
構成, 2-1 ~ 2-23  
アプリケーション・エクスペローラ, 1-2 ~ 1-4, 2-5, 2-9, 4-7, 4-34  
J2CA 構成および, 3-2  
OracleAS Adapter J2CA および, 10-4  
WSDL ファイルおよび, 4-35  
アプリケーション・システムおよび, 2-5  
テストおよび, 10-1 ~ 10-2  
デバッグおよび, 10-1 ~ 10-2  
トラブルシューティング, 10-1 ~ 10-2

「アプリケーション・サーバー」ダイアログ・ボックス, 2-6  
「アプリケーション・サーバー」パラメータ, 2-6  
アプリケーション・システム  
アプリケーション・エクスプローラおよび, 2-5  
サポート, 2-5  
アプリケーション・システム・オブジェクト, 2-9  
アプリケーション・メッセージング, 1-2  
アプリケーション・メッセージング・マネージャ, 1-4

## い

イベント, 1-2, 1-3  
作成, 4-37 ~ 4-39  
トリガー, 4-47  
イベント統合  
確認, 4-47  
イベントの作成, 4-37 ~ 4-39  
イベント・メッセージ, 4-35  
イベント・ポート  
作成, 4-37 ~ 4-39  
インストール・ディレクトリ, 3-4  
インテグレーション・ゲートウェイ  
構成, D-6 ~ D-8  
インテグレーション・ゲートウェイの構成, D-6 ~ D-8  
インテグレーション・ブローカー, 1-2 ~ 1-4, D-1 ~ D-29  
構成, D-3  
インテグレーション・ブローカーの構成, D-3  
インバウンド J2CA サービス, 4-35

## え

「エラー・ディレクトリ」パラメータ, 2-22  
エラー・メッセージ, 10-2 ~ 10-7  
ターゲット・システムおよび, 10-5

## か

管理対象コネクタ・ファクトリ, 3-2  
管理対象コネクタ・ファクトリ・オブジェクト, 3-2  
複数, 3-4

## き

キープ・アライブパラメータ, 2-19  
「既存のサービス名」リスト, 2-13

## け

ゲートウェイ・ノード, D-8 ~ D-12

## こ

構成  
上書き, 3-4  
接続, 2-4  
定義, 2-2 ~ 2-4  
テスト, B-15 ~ B-17

「構成」ノード, 2-3  
構成のテスト, B-15 ~ B-17  
構成パラメータ, 3-4  
IWayConfig, 3-4  
IWayHome, 3-4  
IWayRepoPassword, 3-4  
IWayRepoURL, 3-4  
IWayRepoUser, 3-4  
LogLevel, 3-4

コネクタ

Oracle Application Server へのデプロイ, 3-1  
構成, B-1 ~ B-15  
コネクタ・ファクトリ, 3-2  
コネクタ・ファクトリ・オブジェクト, 3-2  
複数, 3-4  
コンポーネント・インタフェース, 1-2 ~ 1-3, 2-9  
作成, C-1 ~ C-4  
セキュリティおよび, C-5 ~ C-14  
テスト, C-14 ~ C-19  
コンポーネント・インタフェース API, 1-3  
コンポーネント・インタフェースのテスト, C-14 ~ C-19  
コンポーネント・インタフェースのテスト・ツール  
3層モードおよび, 10-3  
コンポーネント・インタフェース・プロパティ, 10-2  
コンポーネント・メソッド, 1-3

## さ

サーバー・ポート・パラメータ, 2-17, 4-36  
サービス, 1-2, 1-3  
作成, 2-12 ~ 2-13  
テスト, 2-14  
「サービス・アダプタ」ノード, 2-6  
サービス指向アーキテクチャ (SOA), 4-1  
「サービス・プロバイダ」リスト, 2-3 ~ 2-4  
サービス名, 2-13  
サブレット, 3-1

## し

システム・オブジェクト, 2-9  
「詳細」タブ, 2-22  
「処理モード」パラメータ, 2-22  
「新規構成」ダイアログ・ボックス, 2-3 ~ 2-4

## す

スキーマ, 2-10  
作成, 1-3, 2-10, 10-2  
スキーマの作成, 2-10, 10-2  
スキーマの生成, 2-10, 10-2  
「スレッド制限」パラメータ, 2-22

## せ

セキュリティ  
コンポーネント・インタフェースおよび, C-5 ~ C-14  
接続  
確立, 2-5 ~ 2-7, 4-37

- 削除, 2-9
- 閉じる, 2-8
- 「接続」ダイアログ・ボックス, 4-37
- 接続の削除, 2-9
- 接続パラメータ, 2-6 ~ 2-7, 4-36 ~ 4-37, 10-2
  - アプリケーション・サーバー, 2-6
  - パスワード, 2-6
  - ポート, 2-6, 2-17, 4-36, 10-2 ~ 10-3
  - ホスト名, 2-3, 10-2 ~ 10-3
  - ユーザー, 2-6
- 接続を閉じる, 2-8
- 接頭辞の長さパラメータ, 2-19
- 「説明」フィールド, 2-13

## た

---

- ターゲット
  - 削除, 2-9
  - 接続, 2-5 ~ 2-7, 4-37, 10-7
  - 接続の切断, 2-8
  - 定義, 2-5 ~ 2-7
  - 編集, 2-8
- ターゲット・コネクタ
  - 構成, B-1 ~ B-15
- ターゲット・コネクタの構成, B-1 ~ B-15
- ターゲット・システム
  - エラーおよび, 10-5
- ターゲットの編集, 2-8

## ち

---

- チャンネル, 2-15 ~ ??
  - 開始, 2-20, 4-36
  - 削除, 2-22
  - 作成, 2-15 ~ 2-22, 4-35 ~ 4-36
  - 停止, 2-20, 4-36
  - テストおよびデバッグ, 4-36
  - 編集, 2-22
  - ポートおよび, 2-19
- チャンネル, 「リスナー」も参照
- チャンネル構成パラメータ, 2-19
  - XML, 2-19
  - エラー・ディレクトリ, 2-22
  - キープ・アライブ, 2-19
  - サーバー・ポート, 2-17, 4-36
  - 処理モード, 2-22
  - スレッド制限, 2-22
  - 接頭辞の長さ, 2-19
  - 同期タイプ, 2-19 ~ 2-21
  - ファイル・マスク, 2-21
  - ポート, 2-17, 4-36
  - ポート番号, 2-20
  - ポーリング間隔, 2-22
  - ポーリング場所, 2-21
  - ホスト, 2-20
  - レスポンス/Ack ディレクトリ, 2-21
- チャンネル・タイプ
  - ファイル, 2-20 ~ 2-22
- チャンネルの開始, 2-20
- チャンネルの削除, 2-22

- チャンネルの作成, 2-15 ~ 2-22, 4-35 ~ 4-36
- 「チャンネルの追加」ダイアログ・ボックス, 2-18
- チャンネルの停止, 2-20
- チャンネルの編集, 2-22

## て

---

- データベース
  - Oracle, 3-4
  - 接続, 3-4
- データベース接続
  - 開く, 3-4
- デザインタイム, 4-35
  - 構成, 4-7, 4-34
- デプロイメント
  - BSE, 1-4

## と

---

- 同期サポート, 1-2
- 「同期タイプ」パラメータ, 2-19 ~ 2-21
- トラブルシューティング, 10-1 ~ 10-7
  - BSE, 10-5
  - Web サービス, 10-5 ~ 10-7
  - アプリケーション・エクスプローラ, 10-1 ~ 10-2
- トランザクション処理, 1-2
- トレース情報, 10-1

## の

---

- ノード
  - PeopleSoft, 2-6, 4-37
  - TCP/IP 8.4 コネクタ, B-3 ~ B-6
    - アダプタ, 4-37
    - ゲートウェイ, D-8 ~ D-12
    - 構成, 2-3
    - サービス・アダプタ, 2-6
    - 接続, 4-37
- ノードの構成
  - TCP/IP 8.4 コネクタ, B-3 ~ B-6
  - ゲートウェイ, D-8 ~ D-12
- ノードのリスト, 10-2
- ノード・リスト, 10-2

## は

---

- パスワード, 3-4
- 「パスワード」パラメータ, 2-6
- バッチ・スクリプト, 10-1
- パラメータ・タイプ
  - 構成, 3-4
  - 接続, 2-6, 4-36 ~ 4-37, 10-2
  - チャンネル構成, 2-19

## ひ

---

- ビジネス・オブジェクト, 2-5
  - 参照, 2-9
- ビジネス・サービス
  - 作成, 2-12 ~ 2-13
  - テスト, 2-14

「ビジネス・サービスの作成」ダイアログ・ボックス、  
2-13

ビジネス・イベント、1-2  
ビジネス・ファンクション、2-13  
ビジネス・プロセス、1-3  
非同期サポート、1-2

## ふ

---

ファイル出力コネクタ  
構成、D-6 ~ D-8  
ファイル出力コネクタの構成、D-6 ~ D-8  
ファイル・チャンネル、2-20 ~ 2-22  
「ファイル・マスク」パラメータ、2-21  
フォルト・コード要素、10-5  
フォルト・ストリング要素、10-5  
「プロトコル」リスト、2-19  
プロパティ、3-4

## ほ

---

ポート  
作成、4-37 ~ 4-39  
チャンネルおよび、2-19  
「ポート」パラメータ、2-6, 2-17, 4-36, 10-2 ~ 10-3  
「ポート番号」パラメータ、2-3, 2-20  
「ポーリング位置」パラメータ、2-21  
「ポーリング間隔」パラメータ、2-22  
「ホスト」パラメータ、2-20  
ホスト名パラメータ、2-3, 10-2 ~ 10-3

## め

---

メソッド  
表示、C-4  
変更、C-4  
メソッドの表示、C-4  
「メソッド名」フィールド、2-13  
メタデータ、2-9  
参照、2-9  
メタデータの参照、2-9  
メッセージ、1-1, 1-3 ~ 1-4  
メッセージ・タイプ  
イベント、4-35  
メッセージ・チャンネル  
構成、D-18 ~ D-21  
メッセージ・チャンネルの構成、D-18 ~ D-21  
メッセージ・ルーター  
構成、B-1 ~ B-15  
メッセージ・ルーターの構成、B-1 ~ B-15  
メディエータ・アウトバウンド・プロセス、5-2  
メディエータ・インバウンド・プロセス、5-11

## ゆ

---

「ユーザー ID」パラメータ、2-6

## ら

---

ライセンス、2-13  
ライセンスおよびメソッドに関するダイアログ・ボックス、2-13  
「ライセンス」フィールド、2-13

## り

---

「リクエスト・スキーマ」タブ、2-10  
「リクエスト」タブ、2-21  
リクエスト・ドキュメント、2-10  
リスナー、1-5, B-10  
リソース・アダプタ、1-1, 3-1 ~ 3-2  
リポジトリ・プロジェクト  
Web サービスおよび、2-2  
作成、2-2 ~ 2-4  
リポジトリ・プロジェクトの作成、2-2 ~ 2-4

## れ

---

レスポンス/Ack ディレクトリパラメータ、2-21  
「レスポンス・スキーマ」タブ、2-10  
「レスポンス」タブ、2-21  
レスポンス・ドキュメント、2-10

## ろ

---

ログ・ファイル、10-1  
ログ・レベル  
上書き、3-4

